

大阪大学大学院文学研究科

年報 2004

研究・教育 (2002-2003 年度)

大阪大学大学院文学研究科

評価・広報室

表紙解説

中井竹山筆「懷徳堂定書」

大阪大学懷徳堂文庫蔵

三〇・七×六六・四センチ

享保九年（一七二四）、大坂の有力町人によって創設された学問所懷徳堂は、江戸時代の後半、約百四十年間にわたって、日本近世の学術史と商道德の形成に大きな影響を与えた。大阪大学は、この懷徳堂を精神的源流と位置づけ、現在、文学研究科が（財）懷徳堂記念会と協力して、資料調査や公開講座の開催など、各種の社会教育活動を推進している。

本資料は、その懷徳堂の貴重資料の一つである。懷徳堂内に寄宿していた書生の生活態度について、第四代学主の中井竹山が安永七年（一七七八）に定めた規定である。毎月、五と十の付く休日に、寄宿生を講堂に集め、読み聴かせるのがきまりであったという。「箕踞偃臥」「無益の雑談」「昼寝宵寝」などを禁ずる一方、「手跡・算術・詩作・訳文」「和訳の軍書」「近代の記録物」など広範な学芸領域に関心を持つよう勸奨している。

同じく中井竹山が宝暦八年（一七五八）に掲げた「書生の交わりは貴賤・貧富を論ぜず同輩たるべき事」という開明的な懷徳堂の基本精神を受け継ぎ、総じて、学生相互の自律・自助を勧める内容となっている。

〔釈文〕

定

- 一 書生の面々互に申合せ行儀正敷相守り仮初にも箕踞偃臥等致す間布き事
 - 一 学談雅談の外、無益の雑談相い慎み、場所柄不相応の俗談、堅く停止と為すべき事
 - 一 当病持病等の子細も之が分無く昼寝宵寝は堅く無用と為すべき事
 - 一 本業出精の暇には、手跡・算術・詩作・訳文等、銘々の分相応に心懸け候て、間断之れ有る間布き事
 - 一 休日其の外閑暇の節に、和訳の軍書并に近代の記録物等心懸け読み申すべき事
 - 一 碁象棋謡等は世の交り并に学業退屈の氣を転じ候為に兼ねて差免じ之有り候へども休日の外は昼迄の内右様の雑芸に懸り候儀、無用と為すべき事
 - 一 銘々行届き申さざる事は、同輩の内より互に心を添へ切磋有るべきの事
 - 一 人の切磋を受け、却って立腹など致し候はば、傍人より早々その段、申し出るべき事
- 以上
- 安永七年戊ノ六月

年報2004

はじめに

大阪大学大学院文学研究科は、研究と教育の現状を認識し、今後の運営と改革の参考とするために、1994年以來、4回の自己評価書を刊行してきました。いずれも大講座化(1996年刊)、文学部創設50周年(1999年刊)、大学院重点化(2003年刊)など、学部、研究科として一つの節目を迎えた時期に自己を再点検するという姿勢で編集されています。2003年刊の評価書では2001年度までの5年間を対象に全専門分野について外部研究者によるピア・レビューも実施いたしました。

今回の年報は2002年度から2003年度の文学研究科としての活動を基軸に、第1部には教育活動、国際交流、広報活動、教育評価、外部資金の導入、21世紀COEおよび本研究科と密接な関係を持つ懐徳堂にその淵源をもつ懐徳堂センターの活動、また本研究科に併設されている埋蔵文化財調査室の活動などを記載し、第2部には各専門分野における個別の活動をまとめ、2004年4月現在の本研究科の詳細な研究・教育状況を内外に示して、今後の発展につなげようとするものです。

思えば2004年4月からのいわゆる国立大学の法人化は、その準備段階から、事務制度や研究体制、財政運営の諸項目にわたって、これまでにない議論が重ねられ、そのために費やされたエネルギーと時間は教員・事務職ともに膨大なものとなりました。その法人化を踏まえ、今後は隔年にこの種の年報を発行して文学研究科の活動を示したいと考えています。私たちは昨年度末よりこうした新しい状況に備えて教授会の機構を新たに編制しなおし、各種の委員会をあらたに改変・統合して、研究推進室、教育支援室、評価・広報室、国際連携室の4室とし、その他性差別問題委員会、懐徳堂センターを付置するという体制です。本年度の年報はこのうち評価・広報室の年報担当の教員が中心となって作成されました。新体制による組織の構成、役割はまたその項目にゆずりますが、こうして法人化以後、あらたな責任意識で研究・教育に携わっていく心構えが出来たように思います。

また昨年度より実質的な活動に入った21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」は、2004年6月中旬ヒアリング、11月末の中間審査の評価を糧に、ますます人文学の新しい地平を切り開くべく、成果を積み重ねながら各研究推進者を中心に若手研究者をまじえて邁進しています。

この『年報2004』をできるだけ多くの方にごらんいただき、大阪大学大学院文学研究科の研究・教育活動、さらに社会貢献について、素直なご意見、ご助言をお寄せいただくようお願い申し上げます。

平成17(2005)年3月

大阪大学大学院文学研究科長
文学部長
柏木 隆雄

大阪大学大学院文学研究科 『年報2004』発刊の趣旨

大阪大学大学院文学研究科 評価・広報室

大阪大学大学院文学研究科および文学部では、過去約10年間に研究教育活動をふりかえるとともに、その改革をめざして下記のような冊子を刊行してきた。

大阪大学文学部自己評価委員会『大阪大学文学部』1994年1月, 122頁.

大阪大学文学部自己評価委員会『現状と課題』1996年1月, 140頁.

大阪大学文学部自己評価委員会『現状と課題 1998』1999年3月, 137頁.

大阪大学大学院文学研究科企画評価委員会『年報 2002』2003年3月, 472頁.

これらのいずれにおいても研究教育活動の概要についてふれているが、とくに『年報 2002』では、全学組織である大阪大学データ管理分析室による研究教育データの収集活動が開始されたころに編集をおこなったこともあり、研究教育に関するデータの提示を主体とするようになった。大学評価・学位授与機構による各種評価が開始され、それに際して根拠資料を示すことが要請されることがあきらかになり、これにそなえるという目的もあったが、同時に日頃の研究教育活動について基礎的なデータをまとめ、自己評価をおこなうとともに、外部からも評価していただく必要性が強く感じられていたのである。

そのため、『年報 2002』では、1997(平成9)年度から2001(平成13)年度まで、5年分の関連データを詳細に示すだけでなく、23の専門分野ごとに自己評価をおこなうとともに、全23名の第一線で活動されている学外研究者に評価していただき、この結果を掲載することになった。これは個別分野ごとの、いわゆるピア・レビューをめざすものである。また特定の分野だけでなく、全分野について外部評価をおこなったことも大きな特色である。文学研究科はさまざまな個別分野から構成されており、この学術活動の評価の基本はピア・レビューであるという共通理解をその基礎としている。

ところで、これらの外部評価者のうち2名は海外より招聘した外国人研究者で、この評価の機会を利用して、アメリカとイギリスの大学評価の概要をお話いただき、これを座談会記録としてまとめて関係者の参考に供した。この座談会記録は、欧米の大学評価だけでなく、新規に開始された日本の大学評価の意図や性格を理解するのに役立つことになった。

また『年報 2002』では、大阪大学データ管理分析室が収集していないデータも掲載している。文学研究科教員の活動は狭義の学術活動以外に大きくひろがっており、それは文学研究科の社会貢献としても重要な意義をもつと考えられたからである。

こうして完成した『年報 2002』は、各方面に配布されるとともに、現在では文学研究科のホームページで公開され、どこからでもアクセスできるものとなっている。文学研究科の活動に関する基礎的資料を公開することによって、大学の透明性をすこしでも向上させることができるという考えがその背景にあることはあらためていうまでもない。上記の外部評価者に提供した資料は、同時に社会にも公表し、ひろくその評価をあおぐことを理想としている。

なお『年報 2002』は、2002(平成14)年度に着手された大学評価・学位授与機構による文学研究科・文学部の教育評価の根拠資料としても活用されることになった。

『年報 2004』は、こうした『年報 2002』の基本方針をうけつぎ、さらに発展させることを意図して編集された。その基本的な考え方は、『年報 2002』と変わっていないとご理解いただきたい。各種データの提示においても、継続性を意識している。また2005年2月に、文学研究科では今後も同様の年報を隔年で発刊することを決定している。

さて『年報 2004』は大きく二つの部分に分かれており、第1部「大阪大学文学研究科および文学部における2002年

度～2003 年度の研究教育活動の概要」では、文学研究科・文学部全体の研究教育活動全体についてふれている。また 2004(平成 16)年 4 月の大阪大学の国立大学法人化を機会におおきく改組をおこなった、部内の新機構の概要も紹介することにした。くわえて、文学研究科が中心になって申請し採択された、21 世紀 COE「インターフェイスの人文科学」に関する活動も紹介している。

第 2 部「各専門分野における研究教育活動の概要」では、専門分野別に各種データを提示するほか、2002 年度および 2003 年度の活動に関する自己評価を掲載している。『年報 2002』の外部評価で指摘された課題を意識しつつ、それが達成されたかどうかなどにつき反省点を示している。

『年報 2002』との大きな違いは、まず今回は外部評価をおこなっていないという点である。ただし、法人化にともなって作製した文学研究科の中期計画では、外部評価を 2005 年度におこなうこととしており、この『年報 2004』はそのための基礎資料として利用することが予定されていることをことわっておきたい。

また各研究分野の記載についても、新しく工夫をこらした。『年報 2002』の編集の経験から、この種の出版物の刊行には、文学研究科構成員の多大な負担を要求することが判明していた。この負担をできるだけ少なくするため、教員各自の業績等については、上記の大阪大学データ管理分析室に集積されたデータを転用し編集した。ただしこのデータは、著書・論文・学会発表・講演等にかぎられるため、翻訳・書評・解説・辞典項目などについては、各教員に入力してもらうとうかたちをとった。そのため、この部分については、個人別にデータを提示するようにしている。

くわえて講義・演習の担当といった、シラバスなど他の印刷物にすでに記載されているデータについては、これを省略した。『年報 2004』では、他の印刷物にあらわれない重要事項に記載を限定するようこころがけたといってもよい。

各種記載のなかで、『年報 2002』、『年報 2004』に共通する重要な特色は、とくに大学院生の業績についてくわしく記載していることである。一般に文学研究科では大学院生と教員が連名で論文を発表することは少なく、院生が教員よりかなりの指導を受けた場合でも、単著として公刊するのがふつうである。この点は、実験や調査研究自体が単独では成り立たない自然科学系とは対照的である。したがって、文学研究科の研究成果ということになると、教員の名前が著者として記載された論文や学会発表リストをつくるだけでは不十分で、大学院生の論文や発表も考慮にいれざるをえないわけである。大学院生の業績リストについてはまた、各専門分野の研究成果としてだけでなく、研究指導、さらには教育活動の成果としてもご覧いただくようお願いしたい。

なお、『年報 2004』も『年報 2002』同様、文学研究科のホームページを通じて公開する予定であることはあらためていうまでもない。これを通じて文学研究科の活動を知っていただき、忌憚のないご意見をお寄せいただくよう期待したい。

はじめに	柏木隆雄	i
大阪大学大学院文学研究科『年報 2004』発刊の趣旨	評価・広報室	ii
目次		iv

第1部 大阪大学大学院文学研究科および文学部における 2002 年度～2003 年度の研究・教育活動の概要

1-1	学部・大学院の教育活動	3
1-2	国際交流活動	6
1-3	広報活動	7
1-4	教育評価	8
1-5	外部資金の導入	10
1-6	21 世紀 COE について	11
1-7	懐徳堂センターの活動	15
1-8	埋蔵文化財調査室の活動	20
1-9	法人化にともなう文学研究科の機構改革	23

第2部 各専門分野における研究・教育活動の概要

2-1	哲学哲学史	31
2-2	現代思想文化学	40
2-3	臨床哲学	47
2-4	中国哲学	61
2-5	インド学・仏教学	69
2-6	日本学	77
2-7	日本史学	94
2-8	東洋史学	109
2-9	西洋史学	125
2-10	考古学	136
2-11	人文地理学	146
2-12	日本文学	156
2-13	比較文学	172
2-14	中国文学	178
2-15	国語学	185
2-16	英米文学	196
2-17	ドイツ文学	210
2-18	フランス文学	218

2-19	英語学	226
2-20	日本語学	237
2-21	美学・文芸学	257
2-22	音楽学・演劇学	275
2-23	美術史学	298
2-24	文化基礎学(広域文化形態論講座)	311
2-25	地域社会論(広域文化形態論講座)	313
2-26	言語文芸学(広域文化表現論講座)	314
2-27	留学生専門教育	316

付録

留年者・休学者に対するアンケートの結果について	318
編集後記	330

第 1 部

**大阪大学大学院文学研究科および文学部
における 2002 年度～2003 年度の研究・
教育活動の概要**

第 1 部

大阪大学大学院文学研究科および文学部における 2002年度～2003年度の研究・教育活動の概要

1-1

学部・大学院の教育活動

大学院における教育活動の基礎的データ

大阪大学文学研究科では、1998年4月に文化形態論専攻、1999年4月に文化表現論専攻が発足し、大学院重点化が完了した。その結果博士前期課程、博士後期課程とも大きく学生数等が変化した。ただし、その後はとくに大きな変動がなく推移している。

まず前期課程の入学数から見ると(表 1-1-1)、一般選抜および外国人留学生特別選抜による入学数がやや増加、社会人特別選抜による入学数がやや減少しているが、総計ではいずれの年度でも募集人員(82名)をうわまわっている。

表 1-1-1 大学院(前期課程)入学数

年度	一般	社会人	外国人	計
2001	66	13	9	88
2002	68	10	13	91
2003	73	8	13	94

学生数等についても同様で、留年者数にやや大きな変動があるが、ほぼ同じ水準で変化している(表 1-1-2)。なお、休学者数には相当数の海外留学者がふくまれていることに留意していただきたい。また留年者は学生数に対して 20%前後となっているが、博士前期課程の修学年限が短いことも関与していると考えられる。

表 1-1-2 大学院(前期課程)の学生数、休学者数、留年者数、修了者数

年度	学生数	休学者数	留年者数	修了者数
2001	228	31	44	84
2002	227	31	50	91
2003	220	28	38	83

博士後期課程にうつると、入学では前期課程と同様に社会人特別選抜によるものが減少している点が注目される程度で、ほぼ同水準で推移している(表 1-1-3)。また募集人員(41名)を大きくうわまわる入学数を確保しているのも注目される。

表 1-1-3 大学院(後期課程)の入学者数

年度	一般	社会人	外国人	計
2001	54	12	10	76
2002	53	8	8	69
2003	60	6	7	73

ただし、学生数等につると、あきらかな変化がみとめられる。学生数が増大傾向にあるだけでなく、休学者数も大きく増加している(表 1-1-4)。一方で学位論文提出者数が増大しているものの、この変化は学位の取得がおくれて、留年者さらには休学者が増大しつつあることを示しているといえよう。

表 1-1-4 大学院(後期課程)の学生数、休学者数、学位論文提出者数、退学者数

年度	学生数	休学者数	学位論文提出者数	退学者数
2001	292	52	28	51
2002	294	63	29	34
2003	318	81	38	42

(注)退学者には単位修得退学者をふくむ。

大学院に関連して、さらに研究生についても見ておきたい。これについてはほとんど変動がなく推移している(表 1-1-5)。

表 1-1-5 大学院研究生数

年度	日本人	留学生	計
2001	13	3	16
2002	12	4	16
2003	12	4	16

学部における教育活動の基礎的データ

学部につると、一般入試による入学は、定員(前期日程 125 名、後期日程 40 名、計 165 名)を 10 名程度うまわる数で推移しており、大きな変化はない(表 1-2-1)。

表 1-2-1 学部入学者数

年度	一般	外国人	計
2001	176	4	180
2002	172	2	174
2003	178	2	180

また学生数・卒業生数には大きな変化はないが、休学者数が増加傾向にあり、留年者数も 10%前後と比較的高いレベルにあることが懸念される(表 1-2-2)。

表 1-2-2 学部の学生数、休学者数、留年者数、卒業生数

年度	学生数	休学者数	留年者数	卒業生数
2001	791	33	72	171
2002	783	36	79	182
2003	777	41	70	171

学部の研究生数は日本人、留学生とも増減がはげしいが、総数ではさほど大きな変動を示していない(表 1-2-3)。

表 1-2-3 学部研究生数

年度	日本人	留学生	計
2001	19	20	39
2002	15	15	31
2003	32	10	42

留年・休学のアンケート結果から

上記の基礎的データから大学院や学部における休学の増大が懸念されたが、文学研究科では留年も含めて、この把握にむけ 2004 年の夏～秋に郵送によるアンケート調査を実施した。その結果の詳細については、末尾の附録に掲載しているのでご覧いただきたいが、ここではそのおもな傾向を指摘しておきたい。

留年や休学を考えたようになった第 1 位の理由は、留年のみの場合は「卒業論文や修士論文、博士論文の制作をより充実して行いたい」、休学のみの場合は「留学や研修のため」で、留年や休学をかならずしも否定的にとらえる必要がないことがわかるが、留年かつ休学者の場合は、同数の第 1 位がふたつあり、その一方は「卒業論文や修士論文、博士論文の制作が思うように進まない」、他方は「経済的な事情」でいずれも大学院博士後期課程に多い。また後者に関連すると思われる「家庭や私生活上の事情」という理由が多いのも注目される。

博士後期課程では、修業年限(3 年)と要求される学位論文の水準との整合性が懸念されているが、奨学金をえている場合、修業年限がすぎれば支給が停止され、同時に年齢が 20 歳代の後半から 30 歳代となり、親の高齢化もあって経済的な事情も重要な問題になると考えられる。留年者に対する「留年期間の学費はどのように用意していますか?」に対する回答として、「一部はアルバイト等で自己負担している」、「大半・全額をアルバイト等で自己負担している」の比率が、博士前期、博士後期と年齢が高くなるにしたがって増大するのも、そうした事情の関与を示すものであろう。

あわせて、現在では研究者としての就職を望む場合は、博士の学位が必須条件になっている点も無視できない。くわえて、退学して学籍がなくなった場合には、免除職につかないかぎり奨学金の返済が要求されるようになるというきびしい現実も関与している可能性がある。

表 1-1-4 にみられるような博士後期課程における休学者の増大は、このような要因が複合的に関与したものと考えられるが、その背景には、附録に指摘されているように、大学院重点化にともなう、博士後期課程定員の増大、さらには定員を大きくこえた進学希望者の選抜といった事情も考慮すべきである。この点で博士後期課程における留年や休学は大学院重点化にともなう過渡的な問題とも考えられるが、今後どのように変化するか注目しつつ、改善できる点は改善していきたいと考える。

客員研究員の受け入れと本研究科教員の海外における研究活動

2002年の客員研究員は総勢17名、中国、韓国からの研究員が多く、あとは欧米各国からそれぞれ1名ずつ受け入れている。分野的には日本文学、日本語研究が圧倒的に多いが、他に東洋史分野の研究員なども数名受け入れている。2003年は16名。やはり中国、韓国が大半を占め、分野的にも前年度とほぼ同様の傾向である。一方、本研究科教員の海外での研究活動については、2002年の外国出張は延べ30件、地域別内訳は欧米18件、アジア10件、その他が2件となっており、ほとんどがフィールドワーク・学会参加および発表・講演の目的で科研、海外政府、大学の招聘による出張である。海外研修は34件、うち欧米16件、アジア18件となっている。2003年の外国出張は56件と大幅に伸び、内訳は欧米39件、アジア14件、オセアニアを含むその他3件となっている。海外研修は38件、うち欧米17件、アジア21件である。教員数で単純計算すると、2003年度は、ほぼ教員全員がなんらかの形で海外でのフィールドワーク・学会参加・研究発表・講演等の活動に従事したことになり、これに在外研究等、長期の海外滞在者を加えると、本研究科の研究成果の一端を海外において積極的に公開し、還元を行ったと結論づけることができるだろう。

留学生の受け入れと送り出し状況

送り出しのほうは未だ数量的には目覚ましい成果をあげているとは言いがたい。2002年に送り出した学生は北米1名(学部4年)、オセアニア1名(博士後期課程2年)、ヨーロッパ2名(学部3年〔2名〕)の計4名であり、2003年はアジア1名(博士後期課程2年)、北米4名(博士後期課程3年、博士後期課程2年、博士前期課程2年、学部4年)、ヨーロッパ3名(学部4年、学部3年〔2名〕)の計8名である。少しずつ数が増えているものの、今後、海外の大学事情、留学情報の周知、TOEFL等の語学能力テスト受験のアシストなど国際連携室として支援の方策を検討しなければならない。

他方、受け入れに関しては2002年では、合計94名(男30名、女64名)の留学生を受け入れている。地域別では韓国・中国・台湾が圧倒的に多く、ついでタイ・アメリカ・シンガポール・ブラジル等が続いている。大学院レベルが大半だが、研究生が12名を数え、また特別聴講生が数名いる。指導分野別では日本語学、日本文学、比較文学、日本学、音楽学・演劇学、東洋史学、美術史学、国語学、美学・文芸学、日本史学などとなっている。2003年は、総計が104名(男36、女68名)で学年別、指導分野別も前年同様である。なお、2003年度には大阪大学短期留学制度にもとづく留学生も5名含まれているが、いずれにせよ、総計100名を超え、この傾向は今後も続くものと思われ、文学研究科の研究と教育がアジア各国を主として注目されていることを如実に物語っている。

留学生の博士学位取得

2002年度は、日本文学、日本学、東洋史学、日本語学、美学・文芸学、音楽学・演劇学の分野で各1名、計6名が博士(文学)の学位を与えられている。2003年度は、東洋史学2名、日本文学2名、比較文学1名、日本語学1名、美学・文芸学1名の計7名が学位を授与された。留学生の総数と比較しても高い取得率となっており、今後の研究科の教育の一つの柱であることは間違いないだろう。

最後に国際共同研究について一言述べておくと、各分野で個別に積極的展開がなされているようだが、研究科全体として公的に実施されたものとしては、2003年3月に行われた二つの21世紀COEプログラムによる研究集会在が挙げられる。一つは3月11日に行われた「越境する日本語——ブラジル日系社会の言語をめぐる」と題されたシンポジウムで、カンピーナス大学のエルド＝ザイ教授などブラジルからの参加者と日本の各大学からの参加者、および本研究科留学生数名が参加して熱心な討論が行われた。もう一つは「日本文学国際研究集会——基調報告と研究集会」である。これは3月16日にグランキューブ(大阪国際会議場)で開かれ、欧米・アジア・日本のさまざまな大学・研究機関からの参加者による大規模な研究集会となった。今後ホームページが拡充され、また、帰国後のネットワーク作りなどにより、さらに国際的な研究活動が推進されるものと期待される。

(森岡裕一)

文学研究科・文学部内の委員会である広報委員会は大学における広報の役割の重要性を認識し、文学研究科・文学部から発信する情報を常に刷新し、また広く高校生や社会人に研究と教育の現況を提供し続けている。ここでは、大きく、冊子媒体、電子媒体(HP)、催事に分け、三つのジャンルの活動について、2002年度から2003年度を概観し、その問題点と今後の展望を述べておきたい。

1. 冊子媒体

文学部で広報活動の一環として重要なものが、『文学部紹介』である。この冊子は、毎年刊行されているもので、各高校、各種大学説明会などで配布される。毎年、6000部を刊行し、主として高校生、予備校生などを対象に、文学部の研究と教育の方向性や現状が分かりやすく紹介されている。いわゆる他大学の「大学紹介」と比較しても、簡明にして十分な紹介になっており、遜色はない。構成は、文学部のアドミッション・ポリシー、文学部長挨拶、入学後の学習課程、各専修紹介、文学部沿革、卒業後の進路、その他懐徳堂記念会の紹介や、埋蔵文化財調査室などの紹介まで、文学部に関わる基本的な事項が網羅され、コンパクトに収められた簡便な紹介冊子となっている。

中でも専修紹介には力を入れており、毎年のように掲載写真を刷新し、紹介原稿に修正を加えることで常に斬新な情報を提供している。またここでは各教員すべての、専門領域と研究テーマ、そして高校生へのメッセージを、顔写真入りで掲載している。ややもすれば分かりにくい文学部内の専修の教育と研究のあり方を、各教員の生の声と写真とで、きわめて人間的で、近づきやすく、そして視覚的にも豊かに提示している。

しかし2003年度には、編集方針が固定的になりつつあるとの反省から、従来の編集方針をさらに分かりやすく、読者の視点を導入する編集に変更した。従来、高所から文学部の研究と教育を提示するという印象がないではなかったこの文学部紹介であったが、高校生目の視線を意識し、在学生のメッセージの欄を強調し、専修紹介では各研究を分かりやすくキャッチ・コピーで提示している。また卒業論文一覧を各専修紹介の中に収め、同時に開講科目の題目名を掲載することで、専修のイメージを膨らませやすくしている。また卒業後の進路のページにも力をいれ、文学部を出た後の姿をイメージしやすくした。

2. 電子媒体

同時に近年重要性が日増しに高まっているのは、文学部公式サイト(以下HPと略記)である。毎年4月に行なう新入生アンケートを見ても、ほとんどの新入生はHPを見て、詳しい情報を得ている。このHPも原則的には文学部紹介冊子と同様の構成を持ち、しばしば同じ内容を掲載している。

2002年までは更新が会計掛との関係でそれほど頻繁に行なえないことがしばしば指摘され、問題視されていた。しかし2002年度以降は、会計掛の協力もあり、よりタイムリーな更新を行なうことができるようになった。

近年では、大学院入試問題の掲載を行なうことで、入学希望者への便宜を図っている一方で、各教員の出版、受賞、研究会などの様々な活動をタイムリーに掲載することに努力し、冊子媒体にはない迅速な情報提供に資している。また国際化が叫ばれる中、文学部も世界中の関心を集めるようになり、長らく英語版の充実が考えられていたが、2003年度に英語版HPを完成し、掲載することができた。

またここには、各研究室で独自に管理運営している研究室サイトがリンクされており、より詳細な情報はそれぞれの研究室サイトで提供している。

3. 催事

広報活動としては、7月に行なう文学部模擬授業、8月に行なう大学説明会が大きなものである。

7月の模擬授業は広島県城北高校の希望に応じる形で始められたものだが、現在では近隣の大阪府第1学区の高校にも呼びかけて、平均して毎年40名前後の高校生の参加がある。毎年2名の教員がそれぞれの専門を高校生向けにわかりや

すく授業し、文学部の研究と教育への関心の向上を図っている。同時に、各研究室を開放し、自由に高校生に研究室の雰囲気味わってもらふ貴重な機会を提供している。

また8月下旬に行なわれる文学部説明会は年々大規模化している。2003年度は400名を越す参加者があり、関心の高さが窺われた。学部長の挨拶の後、教員の講演、在校生のスピーチ、各ブロックから一人ずつ教員が出て各ブロックの教育と研究を分かりやすく説明する。その後、参加者との質疑応答があり、参加者への理解を高める努力をしている。

この他、各種大学説明会が学外で開催されているが、それらの説明会にも上記冊子媒体や入学要項、その他の冊子を提供するなどして広報に努めている。

4. 展望

2002年度から2003年度の広報関係で新しい動きはおおむね以上のものであるが、痛感するのは、年間を通じての広報のグランドデザインが欠如していることであろう。私学では、大学の冬の時代を前にして危機感を募らせ、ほとんど20年ほど前から、企業CIならぬUI(ユニバーシティ・アイデンティティ)の確立の急務が叫ばれ、努力に努力を重ねてきた。そこで広報が果たす役割はきわめて重要であり、単に大学を学外に知らしめるだけではなく、学内において一体感を持てるような取り組みを盛んにするものである。むろん、年間を通じて、何時、どこで、どのように広報するのかという大きな流れの中で広報活動を考えることも不可欠である。それに反して、現在の文学部の広報のあり方は、従来の広報の仕事を定点的に行なうだけのものであることは否定しがたい。今後、一層激化する大学間競争において、広報活動の全体的かつ抜本的な見直しは避けられない任務になるように思われる。

(永田 靖)

1 - 4

教育評価

大学評価・学位授与機構による教育評価

文学研究科と文学部は2002年から2004年にかけて、大学評価・学位授与機構(以下「機構」と略す)による過去5年間(1998年度から2002年度)を対象にした教育面での評価を受けた。これは1998年の大学審議会の答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」に基づき、2000年度から「試行」として始まった教育面や研究面での大学評価の一環であり、「平成14(2002)年度着手分」の分野別評価のうちの「人文学系」についての評価として行われたものである。

2002年11月に機構から評価を受諾するよう要請があり、12月には評価内容・方法について連絡(「目的及び目標に関する事前調査回答」の提出期限4月15日、「自己評価書」提出期限7月31日)があり、本研究科・本学部では直ちに天野評議員(当時)をチーフとした16名からなる「教育評価のためのプロジェクトチーム」を組織した。2003年1月東京都内での説明会をうけて、6つの評価項目(①教育の実施体制、②教育内容面での取組、③教育方法及び成績評価面での取組、④教育の達成状況、⑤学習に対する支援、⑥教育の質の向上及び改善のためのシステム)ごとに2~3名の担当チームを組み、関連データの収集とその検証・評価の作業に入った。3月中旬には、機構より提出を求められていた自己点検・自己評価の評価基準を設定する意味での「文学部ならびに文学研究科の現況及び特徴」と「文学部ならびに文学研究科の教育目的及び目標」を作成し、副学長ならびに本部事務局と協議のうえ一部手直しをしたものを、期日までに機構に提出した。

その後プロジェクトチームは、全学的に、また機構にも了承された「現況及び特徴」ならびに「教育目的及び目標」に沿うかたちで自己評価のための作業に精力的に取り組み、7月の初旬には、本研究科と本学部の教育活動についてそれぞれにA4判130ページに及ぶ自己評価書の原案作成を終え本部事務局に提出し、副学長及び事務局との協議を経て修正の上、7月末の期日までに機構に提出した。

そして、10月16日付で機構より「書面調査段階での評価案概要」の送付があり、機構の自己評価書による評価概要ならびに確認必要事項が提示され、その「評価案概要」ならびに機構から求められた確認事項に関わる追加資料に基づいて

10月21日(火)、22日(水)の両日には、機構の評価委員10名(および機構職員4名)による訪問面接調査が実施された。研究科・学部関係者(責任者)との面談、授業参観、施設見学のほかに教員・支援スタッフ、在学生、卒業生からの聞き取り調査が行われた。

それらをもとに2004年1月には機構から評価結果の内示があり、「評価結果に対する意見申立書」の提出を求められたが、「意見申立て」は事実誤認に関わるものに限られていたので、特に申立ては行わなかった。その結果、3月に確定した評価結果の通知があり、ここに足かけ3年に及んだ本研究科と本学部の教育の現状把握を目的とする一連の作業が終了したのである。

大学評価・学位授与機構による教育評価結果

	評価結果(自己評価)					
	教育の実施体制	教育内容面の取組	教育方法及び成績評価での取組	教育の達成状況	学習に対する支援	教育の質の向上及び改善のためのシステム
文学部	4(5)	4(4)	3(4)	3(5)	4(4)	3(4)
文学研究科	3(5)	4(4)	3(4)	4(5)	4(4)	3(4)

5:十分に貢献している

4:おおむね貢献している

3:相応に貢献している

2:ある程度貢献している

1:ほとんど貢献していない

(注) ()内の数値は自己評価

機構による評価は全体として、本研究科、本学部の教育がその「目的と目標」に沿って適切に行われ優れた達成度を示していることを高く評価したものであった。とは言え、数値による水準評価(学部、研究科とも6項目の平均3.5)は、われわれの自己評価(学部・研究科とも6項目の平均4.33)をかなり下回った。本研究科・本学部の教育組織の複雑さ、外部に向かってのわかりにくさ、留年者数の多さ、講義受講者に占める単位不取得者の率の高さ、成績評価方法及び評価基準の(シラバスなどにおける)公表の不徹底、学生支援組織の未整備などの指摘は、今後の改革のための貴重な提言として受け止めなければならないことは言うまでもない。しかし、人文学の広汎な、かつ細分化された分野における教育課題の困難さと、その中で日々格闘している教員の教育活動の実態を自己点検する作業に携わったものとしては、機構の評価は不満の残るものであった。(機構の評価はわれわれ自身が策定した「文学部ならびに文学研究科の教育目的及び目標」の達成度を検証・評価するものであって、決して他大学との比較による相対評価を意図したものではないことは付言しておきたい。)

このたびの教育評価については、初めての経験でもあり、本研究科の教職員が総力を結集してデータの収集に始まり、その整理・検証、自己評価書の作成、訪問面接調査の準備に当たったが、そのために費やされた時間と労力は多大なものであった。しかし、この自己評価の作業を通して収集された膨大なデータ、またそこから浮かび上がってきた本研究科・本学部の教育上のさまざまな問題点と課題は、今後の改革のための貴重な導きの糸としなければならないであろう。それらの教訓は、すでに2004年度から着手された運営組織の大幅な改革の中に着実に生かされつつある。

(林 正則)

外部資金の導入

近年の文学研究科では、研究活動だけでなく教育活動においても、外部資金の役割はますます大きくなっている。外部資金はさまざまなかたちで導入されており、その全容の把握は容易ではない。代表者となっている場合だけでなく、分担者となっている場合でもかなりの件数と金額が導入されていると考えられる。また代表者となっている場合でも、金額のすべてが文学研究科で支出されているわけではない。ここでは件数や金額が把握しやすい、文学研究科の構成員が代表者となって取得している外部資金について概要を紹介しておきたい。なお、文学研究科の教員だけでなく、大学院生が獲得している外部資金も考慮に入れることとする。

1. 科学研究費

科学研究費の取得について件数、金額の増減をまずみておくことにしたい。なおここでは日本学術振興会の特別研究員奨励費もふくんでいることをことわっておきたい。

表 2-5-1 取得された科学研究費の件数と金額変化およびその科研費予算総額との比較

年度	2001 年度	2002 年度	2003 年度
件数	58	58	62
増減	—	1.00	1.07
金額(千円)	102,861	106,340	103,210
増減	—	1.03	0.97
科研費予算総額(億円)	1,580	1,703	1,765
増減	—	1.08	1.04

1997 年度～2001 年度については、件数・金額とも順調に伸び、金額の伸びは科研費予算総額の増加率を上回っていたが、2002 年度、2003 年度とも、頭打ち状態になり、科研費予算総額の増加率を下まわっている点が懸念される。他の大型外部資金の導入が影響している可能性もあるが、教員一人当たり申請件数は 2002 年度が 0.71、2003 年度は 0.90 と上昇した。

表 2-5-2 取得された科研費の内訳

年度	2001 年度	2002 年度	2003 年度
特定領域研究件数	4	0	0
同金額(千円)	9,300	0	0
基盤研究(A)	1	3	1
同金額(千円)	5,300	23,800	11,310
基盤研究(B)	12	10	12
同金額(千円)	46,400	30,200	40,100
基盤研究(C)	16	14	25
同金額(千円)	18,861	16,900	30,200

また、その内訳をみると、基盤研究(B)や基盤研究(C)が多く、より大きな規模の科研費の取得が要請される。なお、2003 年度に基盤研究(C)の件数・金額が大幅に増加したのは、科研費申請率を高める努力を反映したものであろう。

2. その他の外部資金

科学研究費以外の外部資金も近年ますます重要になっている。「1-6. 21世紀 COE について」に示した大型の資金から、各種財団などからの奨学寄付金もみられる。このなかには大学院生が取得しているものもあり、以下に簡単な表にして示しておきたい。これらの資金については、継続したデータがないが、今後それを蓄積して変化を追跡するとともに、増額に努力したい。

種類	件数と金額	2002 年度	2003 年度
21 世紀 COE	件数	1	1
	金額(千円)	106,000	164,000
科学技術振興調整費	件数	1	1
	金額(千円)	23,061	16,520
各種財団からの研究助成金	件数	5	5
	金額(千円)	3,800	6,800
大学院生の獲得している研究助成金	件数	6	10
	金額	3,147 千円 3,000USドル 12,200 ユーロ	1,800 千円 6,500USドル 6,600 ポンド 30,760 ユーロ 7,900 オーストラリアドル
受託研究	件数	1	0
	金額(千円)	7,000	0

1-6

21 世紀 COE について

概要

本研究科は人間科学研究科、言語文化研究科と共同で 2002 年度からの 21 世紀 COE プログラムに応募し、採用された。概要は下記の通りである。

- プログラム名 「インターフェイスの人文学」(英語名: Interface Humanities)
- 担当部局 文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科
- 拠点リーダー 鷺田清一(文学研究科教授。現在は大阪大学副学長)
- 期間(予定) 2002 年 10 月～2007 年 3 月
- 交付金額 2002 年度 106,000 千円
2003 年度 164,000 千円
- 連絡先 〒560-8532 豊中市待兼山町 1-5 大阪大学大学院文学研究科内
21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」事務局
電話: 06-6850-6716 FAX: 06-6850-6718
E-mail: coe_office@let.osaka-u.ac.jp
- ホームページ <http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/>

事業推進担当者(2002年度～2003年度)

鷺田清一(文学研究科)、森安孝夫(文学研究科)、平雅行(文学研究科)、川北稔(文学研究科)、栗本英世(人間科学研究科)、伊井春樹(文学研究科)、伊藤公雄(人間科学研究科)、真田信治(文学研究科)、工藤真由美(文学研究科)、富山一郎(文学研究科)、小泉潤二(人間科学研究科)、柏木隆雄(文学研究科)、園府寺司(文学研究科)、山口修(文学研究科)、前迫孝憲(人間科学研究科)、藤田治彦(文学研究科)、渥美公秀(人間科学研究科)、津田葵(言語文化研究科)、三島憲一(人間科学研究科)、中岡成文(文学研究科)

プログラムの目標・活動方針(2002年度～2003年度)

国家・地域・言語等を超えた複層的な人文学アプローチ

環境危機、生命操作、教育、介護といった現代社会が抱える問題の多くはもはや政治・経済レベルだけでは解決できない。また特定の国家、地域、言語等の枠のなかでは対応できないグローバルな広がりを持っている。こうした世界規模で複雑多層に入り組んだ現代社会の問題を探究するには、例えば英国史、アジア史など地域で分断された歴史学、あるいは仏文学、国文学など言語圏で分けられている人文学など旧来の縦割り型の人文・社会科学研究アプローチでは成果を上げることは難しくなっている。

「インターフェイスの人文学」プログラムは、複数文化のグローバルな錯綜のなかでの文化の生成を、それらが接触する界面、つまりは“インターフェイス”の視点から動的に捉え、21世紀型の新しい人文学の構築を目指す取り組みである。

このインターフェイスは二重の構造を持っている。一つは異なる複数の文化の間の接触、摩擦、交差を国家、地域を超えた視点で見る「横断的な知」、もう一つは研究者と現場、専門家と一般市民などの非専門家をつなぐ「臨床的な知」である。

「臨床的な知」ではとりわけ、原子力発電、ゴミ処理、遺伝子操作といった科学技術の問題をめぐる、官と民、専門家と市民、マジョリティとマイノリティなど異なるコミュニケーション文化を持った集団の間でさまざまな文化摩擦や軋轢が顕在化していることから、これらを架橋するインターフェイスの構造を解明することとしている。

4つの研究テーマで6つのモデル研究

研究テーマとして(1)交錯する世界、(2)縫合される日本、(3)越境する芸術・文化、(4)臨床と対話の4つが計画されており、(1)～(3)は「横断的な知」、(4)は「臨床的な知」にそれぞれ関わる探究に重点が置かれている。

これらの4つのテーマに沿って6つの具体的なモデル研究を設定、それぞれ研究グループが編成されている。例えば(1)については、世界史でもっとも大規模なインターフェイスの現象といえる「シルクロード」の歴史、そして現代の環太平洋地域の広域的ネットワークの複雑な文化生成過程の分析が研究課題となっている。また(2)のテーマでは、国内外の日本語の動的变化、アニメ、ゲームなどポピュラーカルチャーなどを対象にして、東アジアの若手研究者との共同研究も進める方針である。(3)では「映像人文学」という新しい文化研究の領域を拓く。

(4)「臨床と対話」の研究グループでは、臨床哲学の技法とフィールドワークを取り入れて、専門家と非専門家とをつなぐ新しいコミュニケーションの可能性をさぐる。一般市民やボランティアが参加して専門家と科学技術上の問題を討議する対話シンポジウムや、事件被害者の精神的苦痛の救済など裁判だけでは真の解決につながらない問題を処理する裁判外紛争調停といった場も設けていくことにしている。

また研究者の人材育成という観点から、「臨床と対話」研究グループでは留学生や大学院生などの参加を積極的に募っていく方針で、その一環として、博士号取得予定の全学大学院生を対象に、「科学と社会」を総合テーマにした特別講座シリーズを今年4月からスタートさせた。「科学技術と倫理」、「〈公共〉への参加と対話：誰のための科学?」、「生命(いのち)と生活(くらし)」の3つのテーマで、大阪大学の研究者だけでなく、学外からも講師を招き、科学技術と現代社会のインターフェイスを考える機会とする。

(阪大ニューズレターNo.20, pp. 9-10 より抜粋)



主要な成果(2002年度～2003年度)

報告書

『「インターフェイスの人文科学」研究報告書 2002・2003』として、次の8冊が刊行された。発行はすべて〈大阪大学 21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」〉である。

1. 『岐路に立つ人文科学』責任編集：鷲田清一，編集：桑原英之・北山夏季・Pham Thi Thu Giang・蓮田隆志，2003/12
2. 『トランスナショナルリティ研究』責任編集：小泉潤二・栗本英世，編集：木村自，2003/12
3. 『シルクロードと世界史』責任編集：森安孝夫，編集：坂尻彰宏，2003/12
4. 『イメージとしての〈日本〉』責任編集：伊井春樹，編集：海野圭介・藤井由紀子，2003/12
5. 『言語の接触と混交』責任編集：工藤真由美・津田葵，編集：山東功(大阪女子大学)・横田睦子，2003/12
6. 『映像人文学』責任編集：山口修・藤田治彦，編集：岡村睦・古後奈緒子，2004/2
7. 『臨床と対話』責任編集：中岡成文，編集：高橋綾・屋良朝彦・安部幸志・坂口幸広・加藤謙介・諏訪晃一，2003/12
8. 『映像・音響記録 DVD』責任編集：園府寺司，編集：西田優子・清水良介，2004/1

他に、次のような報告書が発行された。

● **トランスナショナリティ研究**

『境界の生産性』責任編集：小泉潤二・栗本英世，発行：大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの
人文学」2004/3

● **イメージとしての〈日本〉**

『国際化の中の日本語研究〔国際日本文学研究報告集 1〕』責任編集：伊井春樹，発行：風間書房，2004/3

『海外における日本のポピュラーカルチャー受容をめぐる研究』責任編集：伊藤公雄，発行：大阪大学 21 世紀 COE
プログラム「インターフェイスの人文学」「イメージとしての〈日本〉」研究プロジェクト，2004/3

● **言語の接触と混交**

『ブラジル日系社会言語調査報告』大阪大学大学院文学研究科紀要，44 巻(二)，責任編集：工藤真由美，発行：大阪
大学大学院文学研究科，2004/3

● **映像人文学**

『映像人文学 2003 年度報告書 ヨーゼフ・ラスカ《父の愛》』編集責任者：根岸一美，編集：岡村睦，発行：大阪大
学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」2004/3/24

『国際フォーラム「映像の力——日越两国文化の比較と交流のために——記録拾遺——』編集：山口修・桃木至朗・
北山夏季，発行：大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」2004/2/27

また、多くの国際シンポジウム、フォーラム、講演会、ワークショップ、研究会等のイベントが開催された。以下に、
ごく一部を紹介しておく。

● **岐路に立つ人文学**

ワークショップ「現場という領域，情報という領域」千里阪急ホテル，2003/9/22-23

「第 4 回日英歴史家会議」京都市国際交流会館，2003/9/9-13

講演会「ヴィクトル・ユゴー，パリの王様の真実——生誕 200 年にあたって」講演者：柏木隆雄，津アスト・ホール，
2003/1/25

● **シルクロードと世界史**

「全国高等学校世界史教員研修会」大阪大学図書館本館 A6 階 図書館ホール，2003/8/5-7

● **トランスナショナリティ研究**

シンポジウム「トランスナショナリティ研究の地平」大阪大学大学院人間科学研究科 東館 2 階 ユメヌ・ホール，
2003/11/29-30

ワークショップ「トランスナショナリティ研究の地平」千里阪急ホテル アイヴィーホール，2003/7/15-16

● **イメージとしての〈日本〉**

日本文学国際研究集会「海外における源氏物語の世界 翻訳と研究」大阪大学コンベンションセンター大会議室，
2003/12/6

「イメージとしての〈日本〉」ワークショップ，大阪大学文法経講義棟，2003/9/27-28

「日本文学国際研究会」基調報告とシンポジウム，グランキューブ(大阪国際会議場)1202 会議室，2003/3/16

● **言語の接触と混交**

「越境する日本語——ブラジル日系社会の言語をめぐる」大阪大学大学院文学研究科中庭会議室，2003/3/11

● **映像人文学**

「ヨーゼフ・ラスカ バレエ・パントマイム《父の愛》世界初演」ピッコロシアター（兵庫県立尼崎青少年創造劇場）
大ホール，2004/1/24

「メディア・デザイン・インターカルチャー論 パリ・シンポジウム」パリ・ラ・ヴィレット建築大学，2003/12/2-3
平成 15 年度 懐徳堂秋季講座 第 106 回「欧羅巴——近代日本からの眼差し——」大阪府立文化情報センターさい
かくホール，2003/11/5-7

(第 3 回) アーツ・アンド・クラフツ・セツルメント国際会議 横浜・大阪 2003 「近代日本の芸術と社会」関東学院

大学, 2003/7/25-26, 大阪市立社会福祉センター, 2003/7/28, 大阪市社会福祉研修・情報センター, 2003/7/29
平成 15 年度 懐徳堂春季講座 第 105 回「中欧三都市物語——都市の景観と文化——」大阪府立文化情報センター
さいかくホール, 2003/5/28-30

「音とかたち(その 2)」2002 年度 RVMV ベトナム少数民族文化遺産の調査報告, 大阪芸術大学芸術情報センターAV
ホール, 2003/5/13

「第 3 回国際デザイン史フォーラム「画像と文字」」大阪市立住まい情報センター3F ホール, 2003/3/8, 大阪歴史博
物館 3 階講堂, 2003/3/9

● 臨床と対話

「第 1 回対話シンポジウム——対話を促進する方策と、場の構築のための連携——」大阪大学共通教育本館,
2003/2/23

● その他

「越鏡」による日本——アフガニスタン小学校間遠隔授業プロジェクト, 大阪府和泉市立信太小学校/アフガニスタ
ン Abul Qasim Ferdouri School, 2003/11/13

COE 科目

COE 科目として、2003 年度に、下記のような科目数の授業が提供された。

	博士前期課程	博士後期課程
文学研究科	12	17
人間科学研究科	9	7
言語文化研究科	4	2

ニューズレター

2002 年度～2003 年度に 3 冊のニューズレターが発行された。

1. 『Interface Humanities』 01 号 2003 年 3 月 10 日発行
創刊特集 1「座談会 人文学の知は越境する」 創刊特集 2「研究グループプロフィール」
2. 『Interface Humanities』 02 号 2003 年 8 月 10 日発行
《特集》出来事は語られる
3. 『Interface Humanities』 03 号 2004 年 3 月 10 日発行
《特集》役割を選び取る・役割から抜け出す

(金水 敏)

1-7

懐徳堂センターの活動

懐徳堂センターの活動概況

2002 年 3 月、懐徳堂センターは実質的な活動を開始した。現在、文学研究科本館 4 階、(財)懐徳堂記念会事務局に隣接する 30 m²の展示室において、懐徳堂や文学研究科関係資料の「展示室」「情報資産管理センター」として重要な役割を果たしている。

以下では、懐徳堂センターの開設から現在に至るまでの経緯、2002 年度・2003 年度におけるセンターの主な機能と活動、問題点などについて概況を説明したい。

1. 懐徳堂センターの開設から現在に至るまでの経緯

- (1) 1999年4月、文学研究科内に懐徳堂センターが開設された。活動の目的は、広く文学研究科の情報資産を公開し、社会貢献の重要な窓口とすることにあった。
- (2) しかし、狭隘な文学研究科内に、新たにセンター室を確保することができず、本館2階の(財)懐徳堂記念会事務局前にとりあえず看板だけが掲げられ、また、職員も配置されなかった。また、これを運営するための組織としては、当面、センター長1名、および運営委員(当時の各ブロック庶務委員が兼務)を置くこととしたが、具体的な活動は行われなかった。
- (3) 2001年4月、法経大学院研究棟が新築されたのに伴い、文学研究科本館4階に30㎡の展示室を確保することができ、これを懐徳堂センターとして、主な内装、展示ケースの設置などが進められた。また、同年6月、実際の活動を推進する専門委員が各ブロックから1名ずつ選出された。しかし、30㎡の展示室で文学研究科の各研究室に関わる総合的な展示を行うことは設備の上からも困難であったため、具体的な活動は行われないうままであった。
- (4) こうした中、2001年度に、筆者(湯浅)が申請していた大学院重点化特別経費「懐徳堂デジタルアーカイブの構築に関する研究」が認められ、この経費を活用して、懐徳堂デジタルコンテンツを展示するための大型液晶モニタ、懐徳堂CGを動作させるための高性能パソコン、懐徳堂貴重資料のパネル、タペストリーなどをセンター内に設置することができた。
- (5) また、2001年12月、当時の文学研究科長の諮問に答申する形で、筆者が、このセンター室を実質的に機能させるためのプランを作成し、庶務委員会(兼懐徳堂センター運営委員会)、懐徳堂センター専門委員会の承認を得て、非常勤職員1名を文学研究科予算で配置し、2002年4月より、筆者が実務担当教官として職務に当たることとなった。以後、この体制により現在に至っている。

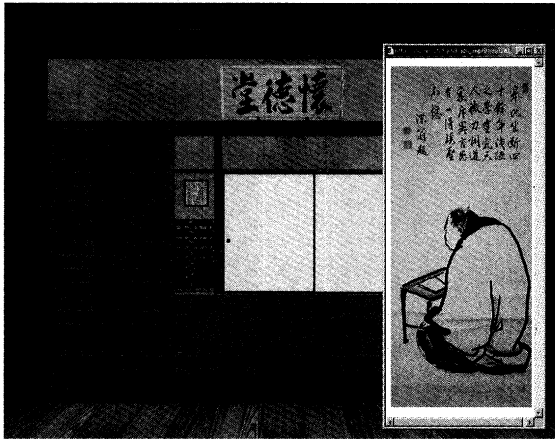
2. 懐徳堂センターの機能と活動(2002年度・2003年度の概況)

2-1. 項目

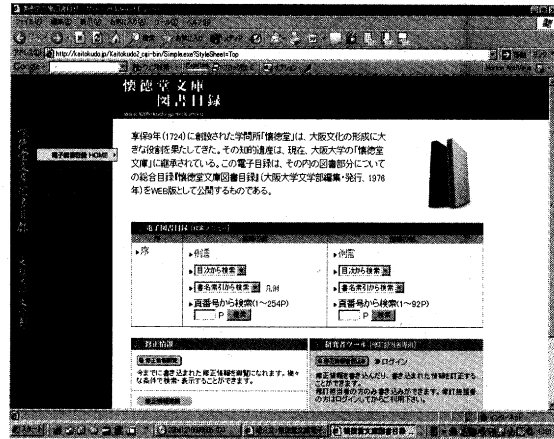
- (1) 懐徳堂デジタルコンテンツ、特に懐徳堂研究の総合サイトである「WEB 懐徳堂」の運営、センターHP、関係CD-ROMなどを含む電子情報の制作・発信。
- (2) 懐徳堂関係資料、レプリカ・パネル、デジタルコンテンツの展示解説(常設展)。
- (3) いちよう祭、総合学術博物館企画展など学内外での展示解説(特別展)。
- (4) 学内所蔵の懐徳堂関係資料の調査・研究(学内調査)。
- (5) 学外からの寄託資料、調査依頼資料についての調査・研究(学外調査)。
- (6) 懐徳堂関係資料の学内外からの問い合わせに対する調査・回答。
- (7) 附属図書館所蔵の「懐徳堂文庫」の複写・転載願、問い合わせなどへの対応。
- (8) (財)懐徳堂記念会事業に関する資料調査・研究。
- (9) 『懐徳堂センター報』、懐徳堂センターパンフレットなど、広報媒体の編集・刊行。
- (10) 学内教職員・学生に対する広報や教育活動。

2-2. 解説

デジタルコンテンツを初めとする常設展示



(バーチャル懐徳堂玄関部)



(懐徳堂文庫電子図書目録)

主な活動の第一は、懐徳堂デジタルコンテンツの展示解説、および懐徳堂関係資料を中心とする常設展示である。

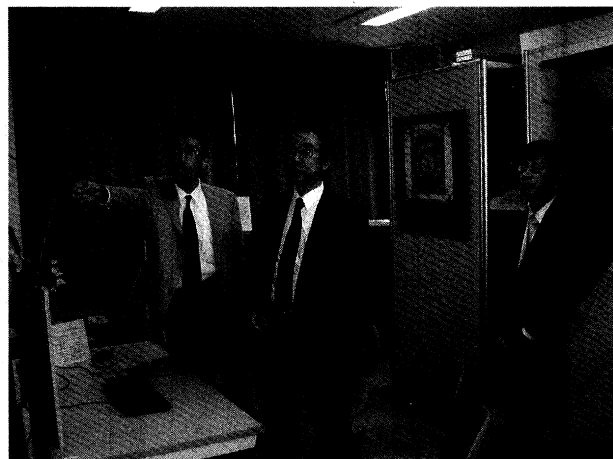
5万点に及ぶ懐徳堂文庫資料は、現在、大阪大学附属図書館新館の貴重図書室に収蔵されているが、本センターでは、これら貴重資料のパネル、タペストリー、レプリカを展示するほか、「バーチャル懐徳堂」「懐徳堂文庫電子図書目録」「電子懐徳堂考」などの電子展示を行っている。この内、現在保有している貴重資料パネル(縦×横各70cm)は、「懐徳堂幅」「入徳門聯」「中井竹山肖像画」「懐徳堂瓦当拓本」など24枚である。

タペストリーとは、CGで作成した「バーチャル懐徳堂」の中から、静止画像2枚を選び、大型タペストリーに仕立てたもので、現在は、「バーチャル懐徳堂玄関部分」「バーチャル懐徳堂講堂部分」の2点が掲示されている。

また、懐徳堂センターでは、懐徳堂文庫所蔵資料の内から特に貴重な器物資料を選び、そのレプリカの制作を進めている。現在、センターが保有し、学内外の展示などに活用しているレプリカは、「入徳門聯」「天図(木製)」「天図(紙製)」「潮図」「方図」「紙製深衣」である。



(懐徳堂瓦当拓本のパネル)



(センターでの資料解説の様子)

その他、懐徳堂関係の一次資料は、基本的に「懐徳堂文庫」として附属図書館に収蔵されているが、本センターでは、重建懐徳堂および(財)懐徳堂記念会に関わる一次資料若干点を保有、展示している。主なものは次の通りである。

- ①「重建懐徳堂瓦当」 ②「高木家所蔵文書」 ③「三木家所蔵資料」

①は、1916年に再建された懐徳堂(重建懐徳堂)で実際に使用されていた瓦当(軒丸瓦)である。1945年の戦災で焼け残ったものであり、懐徳堂の基本精神として「學」字が打ち出されている。②は、香川県丸亀市在住の高木亮子氏から寄贈

された中井終子関係資料である。2004年度の受贈品であり、現在もその整理・調査が続いているので、その詳細については、別の機会に報告したい。③は、兵庫県三木家所蔵の懐徳堂関係資料を含む資料で、2004年から2年間の寄託を受けたものであるが、②と同様に、現在整理・調査中であり、その詳細については、別の機会に報告したい。

さらに、2003年度末には、懐徳堂研究の総合サイト「WEB 懐徳堂」(<http://kaitokudo.jp/>)が公開され、懐徳堂センターがその運営にあたることとなった。このコンテンツは、2001年5月の大阪大学創立70周年記念事業の一環として制作された「バーチャル懐徳堂」「懐徳堂データベース」を基にして、その後、科学研究費基盤研究A（「デジタルコンテンツとしての懐徳堂研究」、研究代表者は下條真司サイバーメディアセンター教授）による共同研究などを経て、コンテンツの拡充を続けていたものである。電子情報の一応の整理を経て、2003年度末にインターネット上に公開し、現在、このウェブ上で、主として懐徳堂研究会(事務局は文学研究科中国哲学研究室、学内外の研究者によって構成)による修訂作業が続けられている。

本センターには、専任スタッフが配置されていないため、現在は、非常勤職員が在駐する平日のみに開放しているが、これまで、学内の教職員・学生はもとより、オープンキャンパス・文学部見学会の際に訪れた高校生、国内の研究者、図書館・資料館関係者、海外(中国・台湾・韓国)の研究者、教育評価・学位授与機構委員などの見学や視察があった。むしろ、こうした展示が可能となるのは、学内所蔵の懐徳堂関係資料の調査・研究、および、学外からの寄託資料、調査依頼資料についての調査・研究が精力的に続けられているからに他ならない。

2-3. 学内外での展示解説

さらに、本センターの活動の特色としては、学内外へのイベントへの参加や出張展示・解説が挙げられよう。2002年3月には、特別展「須田国太郎 能・狂言デッサン展」が行われた(この詳細については、『懐徳堂センター報 2004』参照)。同年3月以降での、そうした活動としては、SEMBA 博(船場博)(2002年3月)、大阪大学いちょう祭(2002年4月、2003年4月)、大阪大学総合学術博物館設立記念展(2002年10月)、扇町総合高等学校での授業(同11月)、懐徳堂秋季講座(同11月)、大阪大学文学部・文学研究科同窓会(2003年5月)、大阪大学総合学術博物館第2回企画展(2003年10月)などへの出展がある。

2-4. 学内外からの問い合わせへの対応

次に、センターの重要な機能として、他機関との共同事業をあげることができる。まず、附属図書館所蔵の「懐徳堂文庫」について、学外からの問い合わせ、複写・転載願などが寄せられるが、附属図書館には貴重資料に精通した職員が配置されていないため、これらへの対応がセンターに求められることとなる。具体的には、資料に関する問い合わせへの回答、複写・転載願に対する審査業務などである。

また、懐徳堂センターは(財)懐徳堂記念会とも密接な関係を持っている。たまたま懐徳堂記念会事務局が隣接していることもあり、懐徳堂記念会に関する資料の調査・研究が委託されるケースが増えている。

2-5. 懐徳堂センターの刊行物とHP



(懐徳堂パンフレット)

懐徳堂センターの具体的な成果物として、2003年度には、懐徳堂センターを紹介する「懐徳堂センターパンフレット」を制作し、また2004年1月には、『懐徳堂センター報』を刊行した。パンフレットは、上記の常設展、特別展をはじめ、さまざまな機会に最も基礎的な広報媒体として活用している。また、『懐徳堂センター報』は、2002年度から2003年度に行われた活動(常設展・特別展)の報告を行うとともに、学内外の関係者による資料調査・研究の成果を収録し、懐徳堂センターの存在を学内外にアピールした。

また懐徳堂センターHPでは、以上の概要を解説するほか、懐徳堂関係の一般向け図書、専門的論著のデータベースを整備し、順次公開している。

3. 懐徳堂センターの現状と問題点(2002年度・2003年度の概況)

3-1. 文学研究科内における位置の問題

上記 1 の①に記した通り、懐徳堂センターは、当初、文学研究科全体の広報活動の拠点として設立された。しかし、2000年度までは、資料展示のスペースがまったく得られず、また、2001年度にセンター室が確保された後も、そうした目的を達成するためのスペースとしては狭隘であり、防音や遮光の問題、温度・湿度管理の問題なども残った。そのため、常設展示としては、懐徳堂関係資料を中心とし、かつデジタルコンテンツやパネル、レプリカなどを展示するに止まっている。

さらに、2004年度、大阪大学の法人化にともない、文学研究科内の業務組織が改編され、新たに、評価広報室および研究推進室などが開設された。これにより、当初、懐徳堂センターに求められていた機能を、この内の評価広報室が担うこととなり、懐徳堂センターはむしろ、研究推進室の活動と連動して、懐徳堂の資料調査、電子情報化などを推進する拠点というのが、その実態となりつつある。ただ、こうした位置づけが曖昧なまま、2004年度の諸活動も進められている。

今後は、下記の職員・予算の問題とも関わるが、文学研究科内における明確な位置づけがまず必要となろう。

3-2. 職員・予算に関する問題点

懐徳堂センターは、上記のような膨大な諸業務を抱えながら、それを専門に担当するスタッフは 1 名も配置されていない。現在は、関係教員として筆者が通常の公務と並行して全面的に対応している。また、文学研究科予算の中から週 30 時間を上限とする非常勤職員 1 名が配置されているのみであり、担っている機能に比してスタッフが著しく少なく、このことは、下記のように、2003年度の文学研究科外部評価によっても指摘されている。

【参考】文学研究科外部評価 2003年3月(抜粋)

懐徳堂に関わる研究活動を安定的に持続させるために、懐徳堂センターに専任スタッフを配置するといった取り組みも必要であろう。(東北大学・浅野裕一教授)

また、懐徳堂センターの経費については、文学研究科内で年間 200～300 万円を計上しているが、この内の 25～40%は(財)懐徳堂記念会との共催事業関係費であり、純粋にセンターの活動費として執行できる予算はそれほど多くはない。

3-3. (財)懐徳堂記念会との関係

(財)懐徳堂記念会と文学研究科とが密接な関係にあることは言うまでもない。ただ、本来、懐徳堂記念会が担うべき記念会関係資料の調査・研究業務が、現在は、すべて懐徳堂センターに委託されている。これは、懐徳堂記念会が法人賛助会員の減少により、研究員を配置する余裕がないことにもよるが、懐徳堂センターの側にも、専任スタッフは配置されておらず、両者がもたれ合う関係になっている。

3-4. 附属図書館との関係

懐徳堂文庫資料は、現在、大阪大学附属図書館に収蔵されており、その調査・研究に文学研究科は多大な貢献をしている。ただ本来、附属図書館が担うべき懐徳堂文庫の資料整理、複写・転載願いに対する審査業務などが、すべて懐徳堂センターに委託されている。これは、附属図書館に、貴重資料を管理運営する組織やスタッフが存在しないことによるが、膨大な資料を抱えながら、学内に専任スタッフがいなかったことは、資料サービスという対外的観点からも大きな問題であると言える。

(湯浅邦弘)

活動の概要とその特色

2003年度の専任スタッフは寺前直人助手、1名である。文学研究科の都出比呂志教授、福永伸哉助教授、高橋照彦助教授が兼任スタッフとして所属している。

石橋団地(通称：豊中キャンパス)はその全域が待兼山遺跡として遺跡台帳に登録されている。また、医学部や附属病院がかつて所在し、現在は大阪大学中之島センターがある大阪市北区中之島は、江戸時代の蔵屋敷が建ち並んだ場所として知られている。こうした遺跡や、遺跡から出土した遺物は、1950年に施行された文化財保護法の規定にしたがって国民共有の財産・文化財として保護・活用をはかる対象とされている。そこで、大阪大学では、キャンパス内の遺跡の保全と建物計画などの調整を行うために、全学委員会として埋蔵文化財調査委員会を設置しており、その委員会の指導の下、埋蔵文化財調査室が校地内遺跡の調査にあっている。

出土した文化財については、整理作業を実施し、その成果を調査研究報告書や年報として刊行している。また、出土した文化財については、いちよう祭や大阪大学総合学術博物館常設展示での公開、大阪府下の小・中学校へ出張授業などを通して、一般に広く公開し、活用をはかっている。

現在の組織

教授 0(1) 助教授 0(2) 助手 1 (括弧内は兼任教員数)

教授：都出 比呂志(兼任)

助教授：福永 伸哉(兼任)、高橋 照彦(兼任)

助手：寺前 直人

組織の活動**1. 発掘調査**

2002・2003年度は、以下の埋蔵文化財発掘調査を実施した。

【2002年度】

9月11日	石橋団地・危険物薬品新営機械設備立会調査
9月19日	石橋団地・生物材料調整所立会調査
9月22日	石橋団地・明道館増設コンセント工事立会調査
9月25日	石橋団地・危険物薬品庫立会調査
10月22日	石橋団地・基礎工学部生物材料調整所配管工事立会調査
11月9日	石橋団地・理学部本館南側道路外部ガス配管工事立会調査
11月14日	石橋団地・危険物薬品庫新営機械設備工事立会調査
11月15日	石橋団地・生物材料調整所設備工事立会調査
11月18日	石橋団地・先端科学技術センター・インキュベーション施設立会調査
11月21日	石橋団地・総合研究棟建設立会調査
11月22日	石橋団地・理学部本館南側道路における配管工事立会調査
11月21日	石橋団地・危険物薬品庫新営機械設備配管工事立会調査
12月4日	石橋団地・明道館暖房設備改修工事立会調査
12月10日	石橋団地・特高変電所新営設備工事立会調査
1月14日	吹田・先端技術センター立会調査
2月13日～20日	石橋団地・軟式テニスコート工事に伴う調査

3月11日～17日	石橋団地・特高埋設管工事立会調査
【2003年度】	
4月18日	石橋団地・特高変電所新設に伴う埋蔵文化財立会調査
4月22日	石橋団地・特高変電所新設に伴う埋蔵文化財立会調査
5月17日	石橋団地・理学部本館校舎改修その他機械設備工事立会調査
5月20日	吹田団地・学術研究実験棟創造工学センター新営その他工事立会調査
6月9日	吹田団地・超高压電頭センター研究棟工事立会調査
6月20日	石橋団地・基礎工学部本館校舎改修その他電気設備工事(1)立会調査
7月18日	石橋団地・基礎工学部本館校舎改修その他電気設備工事立会調査
7月19日	石橋団地・基礎工学部本館校舎改修その他電気設備工事(2)立会調査
7月22日	石橋団地・基礎工学部本館校舎改修工事(1)立会調査
7月24日	石橋団地・基礎工学部本館校舎改修工事(1)立会調査
7月25日	石橋団地・理学部本館校舎改修その他機械設備工事立会調査
8月15日	石橋団地・理学部本館校舎改修その他機械設備工事立会調査
9月3日	石橋団地・基礎工学部本館校舎改修その他電気設備工事(3)立会調査
9月8日	吹田団地・情報系総合研究棟新営工事その他工事立会調査
10月20日～11月20日	石橋団地・旧医療技術短期大学跡地情報・通信敷設建築調査



石橋団地・旧医療技術短期大学跡地 調査現場

11月18日	石橋団地・基礎工学部本館校舎改修工事(2)立会調査
1月19日	石橋団地・旧医療短期技術大学跡地外灯敷設工事試掘調査
1月20日	石橋団地・旧医療短期技術大学跡地外灯敷設工事試掘調査
2月4日	石橋団地・旧医療短期技術大学跡地本館改修その他機械設備工事立会調査
2月16日～2月20日	石橋団地・待兼池周辺景観整備工事試掘調査
2月23日	石橋団地・旧医療短期技術大学跡地外灯敷設工事試掘調査
3月2日	石橋団地・旧医療短期技術大学跡地外灯敷設工事試掘調査
3月6日	石橋団地・外灯整備工事(1)立会調査
3月8日	石橋団地・外灯整備工事(2)立会調査
3月9日	石橋団地・外灯整備工事(3)立会調査
3月17日	石橋団地・旧医療短期技術大学跡地本館改修その他機械設備工事立会調査

2. 広報・埋蔵文化財の公開

【2002年度】

- 4月 いちよう祭 展示準備および展示
1月 大阪大学総合学術博物館展示施設計画作成

【2003年度】

- 4月 いちよう祭 総合学術博物館イ号館展示室出品
10月7日 大阪大学総合学術博物館第2回企画展
(大阪歴史博物館・NHK大阪放送会館アトリウム)ブース展示準備
10月8日～10月13日 同上展示解説



大阪大学総合学術博物館第2回企画展の様相

- 11月10日 埋蔵文化財調査委員会所蔵資料(中之島4丁目遺跡出土陶磁器)資料調査対応
11月11日 埋蔵文化財調査委員会所蔵資料(中之島4丁目遺跡出土陶磁器)資料調査対応

3. 印刷物の刊行

【2002年度】

- 3月 久留米藩蔵屋敷跡 大阪大学中之島センター建設に伴う調査報告書 刊行

【2003年度】

- 3月 埋蔵文化財調査室年報 刊行

4. 研究活動

【2003年度】

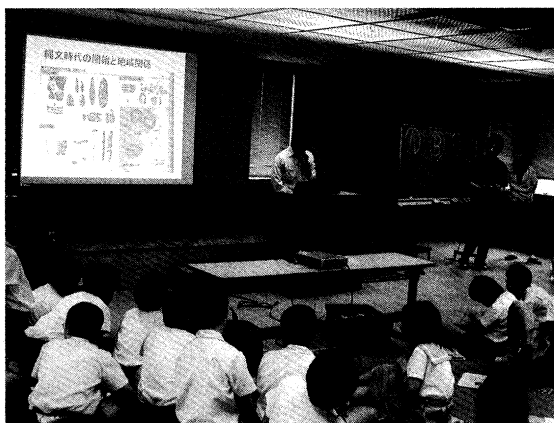
- 1月26日 サントリー文化財団人文科学、社会科学に関する研究助成(「遺跡出土動物遺存体に基づく近世食文化の研究」代表：都出比呂志教授)中間報告

今後の課題

石橋団地(通称：豊中キャンパス)の所在する待兼山は、弥生時代から歴史時代までの遺構や遺物が確認されており、これまでも多数の埋蔵文化財が出土している。それらの分析や研究を通して、地元の歴史を考古学的に明らかにすることをめざす。

また、以上のような成果を、総合学術博物館常設展示やいちよう祭などの大学の研究成果を公開する場において、さらには小・中学校への出張授業を通して、地域に広く公開していくことをめざす。

(寺前直人)



帝塚山小学校への出張授業

1-9

法人化にともなう文学研究科の機構改革

大阪大学文学研究科では、大学の法人化にあわせて、2003年度に部内の各種委員会の整理統合を計画し、2004年4月よりこれを実施した。とくに大きな変化は、庶務、教務、共通教育、計画、学位・入試、広報(情報通信整備管理小委員会をふくむ)、国際交流、性差別問題、厚生、企画・評価、懐徳堂センター運営、懐徳堂センター専門、と多数にわかれていた委員会を、総務委員会にくわえ、「研究推進」、「教育支援」、「評価・広報」、「国際連携」の4室および性差別問題委員会に再編成した点である。またそれぞれの室に、独立の事務室等のほか、教員以外のスタッフが配置されるようになったのも大きな変化といえる。以下では、この各室についてその業務内容等を紹介する。

研究推進室

従来の機構

従来は、文学研究科の組織として設置されていた「合同研究室」において、文学研究科全体にかかわる基礎的な研究推進業務と資料(図書)管理・資料閲覧の補助、紀要の発行等の業務がおこなわれていた。

法人化にともなう要請

法人化に対応して、機構の有機的な運営をめざし、従来の「合同研究室」と文学研究科の紀要委員会等において個別におこなわれてきた業務を統合し、「懐徳堂センター」と結び、かつ大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」とも連携する業務をおこなう組織として「研究推進室」を立ち上げることになった。この改革によって、研究の質のさらなる向上を図るとともに、文学研究科内のさまざまなレベルの研究活動の現状をトータルに把握し、かつ支援する機能をそなえた組織が新たに立ち上がったのである。なお、「研究推進室」の室長および副室長は、総務委員会の議を経て、研究科長が委嘱することになっている。

新機構の役割

「研究推進室」の内規(と具体的な業務内容)を、以下に掲げる。

1. 研究推進室は、「科研・共同研究部門」「図書管理部門」「紀要・論叢部門」の3部門で構成する。
2. 各部門にチーフを置く。チーフは室長が委嘱する。
3. 部門の業務は次のとおりとする。

科研・共同研究部門

- (1) 学生自習室の管理運営および設備機器の充実に関すること
- (2) 文学研究科共同研究の募集・選定、運営に関すること
- (3) 科研費その他の研究助成に関する情報収集、文学研究科メンバーの申請・計画実施の補助に関すること
- (4) 全学研究推進室その他の関係組織との連絡・調整に関すること
- (5) その他

図書管理部門

- (1) 文学研究科共同利用にかかる図書・資料に関する企画・運用に関すること
- (2) 文学研究科の図書利用について附属図書館との連絡・調整に関すること
- (3) その他

紀要・論叢部門

- (1) 『大阪大学大学院文学研究科紀要』と『待兼山論叢』の発行、および、これらに付随する諸問題の処理に関すること
- (2) その他

(真田信治)

教育支援室

組織・体制

2004年度に発足した教育支援室は、文学部学生・文学研究科大学院生に対する教育支援のための組織で、下記のような体制のもとに運営されている。

教育支援室長(1名)・副室長(2名)

- (1) 教務・学位部門
- (2) 入試部門
- (3) 学習支援部門
- (4) 生活支援部門
- (5) 就職支援部門

(1)教務・学位部門と(2)入試部門は、従来の委員会を再編成した部門であるが、(3)学習支援部門、(4)生活支援部門、(5)就職支援部門は、2004年度より新たに発足した教育支援部門である。教育支援室全体会議、部門チーフ会議、各部門会議によって運営が進められている。

各専修にコースオーガナイザーを設け、教育支援室との連携のもと、開講科目の調整、卒業・修了時までの達成目標の策定、オフィスアワーの導入等、学生・院生に対する細やかな教育支援ができる体制を整えている。

本室の業務内容

室長、各部門の主な業務は次のとおりである。

教育支援室長

総務委員会に出席して、文学部・文学研究科全体における調整を図るとともに、全学の教育課程委員会委員として、文学部・文学研究科と全学との連携を行っている。副室長は室長とともに教育支援室を統括し、5部門間の調整、教育支援室ホームページの管理・運営、表彰制度の検討等、教育支援室全体に関わる業務を行っている。

教務・学位部門

共通教育委員会および博物館実習委員会とも連携しつつ、教務・学位に関する業務を行う。神戸大学、大阪外国語大学との相互履修制度に基づく教育交流も担っている。また、シラバス作成委員会を設置し、学習支援部門やコースオーガナイザーとの連携を図っている。

入試部門

学部・大学院入試の実施、入試反省会、入学後の成績追跡調査、研究生の入学等の業務を行う。2004年度には、秋・春2回の大学院入試を実施した。

学習支援部門

TA研修、インターンシップの実施、コースオーガナイザーとの連携、学習室の運営等の学習支援に関わる業務を行っている。2004年度実施のインターンシップ報告は、教育支援室ホームページで公開した。

生活支援部門

各種奨学金の情報収集と周知等生活支援に関わる業務を行っている。2004年度より学習相談室を設置し、メールによる学習相談に応じる体制が整った。必要に応じて、性差別問題委員会との連携も図っている。

就職支援部門

就職説明会、求人情報の集約・閲覧、求人先とのコンタクトの強化、就職・進学状況調査と基礎データの管理、資格取得の推進等、就職支援に関する業務を行っている。

学部学生・大学院生に対する教育支援体制

学生・院生に対する教育支援を充実させるために、下記の体制も整えている。

1. 玄関横に教育支援室を設置した。非常勤職員1名とアルバイト職員1名が在室し、常時学生の相談に対応している。また情報機器や就職関連図書、求人情報などの各種案内を設置・掲示している。
2. 教育支援室ホームページを開設し、インタラクティブに学生への対応ができるようになっている。どちらも、今後、学生・院生の意見を取り入れつつ、より利用しやすいものにしていく予定である。また、2006年度シラバスをホームページに掲載する準備を進めている。

(工藤真由美)

評価・広報室

従来の機構

従来、部内に企画・評価委員会が設置され、設置形態・理念・将来計画等を検討し、さらに研究・教育等に関わる部内基礎データを収集するとともに、大学院学生の研究環境の実態アンケートや自己評価の実施、およびピアレビューによる外部評価の企画など、広範な業務を担当してきた。また企画・評価委員会とは別に、大学評価・学位授与機構による教育評価を受けるに当たり、2002年度・2003年度に教育評価プロジェクトが設けられて、関連データを整備し、学部・大学院生を対象とする授業アンケート等を実施・分析してきた。他方、文学部および文学研究科の紹介誌の編集・発行、ホームページの編集・管理、高大連携に関する業務を担うものとして広報委員会があり、さらに部内サーバの維持・管理やメール・アカウントの発行等の業務を担うものとして情報ネットワーク委員会が設置されていた。

法人化にともなう要請

部内における教育・研究体制の現状を総合的に把握し、また法人化後に実施される種々の評価に即応できる組織として、2004年4月に、従来の企画・評価委員会が担当していた業務のうち、設置形態・理念・将来計画等を除く大部分と、教

育評価プロジェクト、広報委員会、情報ネットワーク委員会が担当していた業務のほとんどを継承するものとして、「評価・広報室」が創設された。その目的・趣旨は、①文学部・文学研究科における教育・研究・社会貢献・国際交流等に関する基礎データを集約的に管理し、また教育・研究に関する種々の調査・企画(アンケート、FD、ピアレビューを含む外部評価)を実施し、以上にもとづく自己点検・自己評価を行って教育・研究体制の改善に向けた提起を行っていくこと、②如上の内容を含む文学部・文学研究科の現状や活動内容を、総合的かつ迅速に冊子体やホームページ上で公開し、高校生を含めて社会に開示していくこと、にある。なお、評価・広報室の室長と副室長は、総務委員会の議を経て、研究科長が委嘱することになっている。

本室の業務内容

本室の構成と当面の業務内容は以下のとおりである。

1. 本室が担当する恒常的業務を検討・処理する部門として、「研究評価部門」「教育評価部門」「広報部門」「ネットワーク部門」の4部門を設ける。また時限的業務については、必要に応じて室員から成るチームを組織して対応・処理する。
2. 各部門にチーフを置く。チーフは室長が委嘱する。
3. 各部門の当面の主な業務内容は次のとおりである。

研究評価部門

- (1) 文学部・文学研究科の構成員や部内の各種機構・プロジェクトにおける教育研究業績、社会貢献などに関する基礎データの集約・整理
- (2) 集約・整理された基礎データに、自己点検・自己評価を加えた冊子『大阪大学文学研究科年報』の編集・発行、およびそのホームページ上での公表

教育評価部門

- (1) 教育関連の各種アンケートやFD(教員研修)・ピアレビューを含む外部評価の企画・運営とその集計・分析
- (2) 如上の集計・分析にもとづく教育体制の改善・整備に向けた問題提起

広報部門

- (1) 『大阪大学文学部紹介』・『大阪大学大学院文学研究科紹介』の編集・発行、および文学部・文学研究科のホームページの編集・管理
- (2) 高校生を主対象とする大阪大学文学部見学会の企画・運営、および大阪大学説明会のうち文学部関係の企画・運営
- (3) 高大連携を含め、学内・学外からの各種の照会・依頼への対応やデータ提供

ネットワーク部門

- (1) 部内構成員に対するメール・アカウントの発行
- (2) 文学部・文学研究科のサーバおよびネットワークの維持管理と整備充実

以上の4部門のほか、2004年4月から2005年夏までの時限的チームとして、室員4名から成る「文学部紹介ビデオ制作チーム」が編成されている。

(片山 剛)

概要

2004年度文学研究科内の行政組織改編を受け、従来の国際交流委員会を発展的に衣替えする形で国際連携室が誕生した。他の室に比べ、業務の連続性が強く、見た感じはそう大きな変化がないように思われるが、実質的には異なった点も多い。そこで、以下に、新しく備わった特徴にスポットを当てながら、国際連携室の紹介をしたい。

まず、人的構成は、研究科長指名による室長のもと、総務委員会で選出された室員の中から1名の副室長が任命されている。それに留学生担当教員、国際交流担当の職員各1名が加わり、国際交流担当教務事務員とともに室を構成している。

従来は専門各ブロック単位で委員を出し、全員ですべての事項を合議していたが、室へ変わってから、業務分野に応じて室員を配置し、業務の専門化を図っている。まず、教育交流部門は、学生交流協定の締結の促進、日本人学生の海外の大学等への送り出し、TOEICなど、留学促進環境の改善を主たる業務としている。次に研究交流部門は、大学等海外の学術機関とのあいだの研究交流協定の締結促進、国際共同研究、国際学術会議の促進業務を行う。留学生支援部門は、文学研究科/文学部で研究している留学生および研究者のさまざまな面にわたる支援を行うことが任務である。なお、従来から置かれている研究科内国際交流センター(留学生相談室)は留学生支援部門と連携しながら所期の目的遂行に向けて業務を行っている。

次に予算面は、従来は留学生積算校費やチューター経費等、本部から自動的に割り当てられていたが、2004年度からは、研究科内での用途が自由化されたため、国際連携室は業務内容の見直しをふまえて予算計上し、これまで年度毎に不安定な予算措置しかできなかった親睦パーティ予算や論文添削チューター費用などを固定化し、くわえて、語学講座など新規事業にかかる予算を計上し、運営の安定を達成している。

本室の業務内容

本室の活動のうち、まずルーティーンで毎年行っている主なものについて箇条書きで概観しておこう。

1. 室報 BULLETIN の年2回発行。——教員の海外出張、研修の記録、招聘研究員の動向、留学生博士論文の題目紹介、留学生数、留学生の声、国際交流センターの活動日誌、など、半年毎の研究科の国際交流事情に関するデータが収められている。
2. 留学生交歓バス旅行——新学期が始まった早い段階で、近隣の名所旧跡を求めてバス旅行を行い、留学生相互の親睦を図っている。
3. 古典芸能鑑賞会——学期がかなり進んだ段階で、能、狂言など古典芸能を鑑賞し、日本文化への理解を深めてもらうと同時に留学生相互のさらなる親睦を図っている。
4. 年末親睦パーティ——留学生が主となり、日本人学生、教員、事務員が一体となって親睦を深める研究科の国際交流版忘年会である。留学生手作りの各国料理が出され、数々の隠し芸が披露されるなど楽しい催しとなっている。

次に、2004年度からとくに重点的に行われている事業に関しても、箇条書きで列挙しておきたい。

1. 研究科長と留学生との懇談会——これまでも催されたことはあるが不定期だったので、2004年度からは年中行事として制度化した。2004年度の懇談会で出た意見をもとに、奨学金受給のための署名期間の延長など、その後、すぐに実行された事項も少なくない。
2. 「ことばの教室」開講——数年前に設けられた「国際交流コモンルーム」の有効活用とさらなる交流を意図して、ボランティア講師による半年の語学教養講座を開講した。2004年度は中国語を対象に、語学学習を通して、留学生と日本人学生、教職員間の交流を図っている。
3. 内規の見直し——とくに、大学院受験資格(研究生期間1年)が従来問題となっており、例外措置が常習化していたため、より合理的な措置が求められていたが、それらについて検討し、改善措置を講じた。

今後の展望

大学全体、あるいは日本全体の問題とも関係するが、ビザ取得の便宜、学生証の一元化など、留学生受け入れのインフラ整備を進めなくてはならない。また、研究科独自の努力としては、留学後帰国した元留学生に関する情報収集とネットワーク化を通じて、今後の国際交流のあり方を模索することも必要だろう。また、従来からも散発的に行われている留学生のお世話をしてくださる日本人ボランティアのネットワーク化を図り、双方にとってより便利で有効な交流の場を確保できるよう努力したく考えている。

(森岡裕一)

第 2 部

各専門分野における

研究・教育活動の概要

【凡 例】

- I. 現在の組織については、2004年4月1日を基準とし、この時点での教員および在学生の現員を示す。また修了生・卒業生については、2002年度(2003年3月修了・卒業)および2003年度(2004年3月修了・卒業)について記す。

- II. 大学院生の研究業績、受賞等は、2002年度～2003年度に在籍した者が、2002年度～2003年度中に発表あるいは授与されたものについて記す。また2002年度～2003年度におこなわれた学位授与について、課程博士と論文博士にわけて記載する。

- III. 教員の研究活動については、原則として2004年4月1日現在各専門分野に属している現員のものを示す。研究業績については2002年度～2003年度に発表されたものを記載する。2002年度～2003年度中に、本研究科大学院生であったものが本研究科教員になった場合には、その大学院生時代に発表した研究業績をあわせて記入する(この場合には大学院生の研究業績の欄にも同じ業績が示される)。なお受賞については2002年度～2003年度にかぎらず記載する。

- IV. 教員による競争的外部資金の獲得については、原則として2004年4月1日現在各専門分野に属している現員が代表者になっているもので、2002年度～2003年度の間に配分を受けたものを記す。

- V. 教員による学会役員等の引きうけ状況については、2004年4月1日現在各専門分野に属している現員が、2002年度～2003年度の間に引きうけ、あるいは遂行した任務に関して記す。

*広域文化形態論講座および広域文化表現論講座については、上記の限りではない。

2-1 哲学 哲学史

はじめに、教育・研究活動の概要とその特色

哲学哲学史は、文学部発足当初からの長い伝統を有し、哲学と哲学史は不可分であるとの観点から、(1)アカデミズムの確立 (2)哲学の普遍性の標榜 (3)現代的課題の探求を掲げて、研究・教育を続けてきた。研究は、第一に、綿密な文献解読に基づく近代現代哲学の歴史的研究を大きな柱としている。その上で第二に、現代哲学の諸問題にも積極的に取り組んでいる。

第一の柱については、デカルトからラカン、デリダまでのフランス系の哲学、ドイツ観念論やフランクフルト学派などのドイツ系の哲学を研究の中心にしている。近年はさらに西田哲学などの日本の哲学、さらには英米系の言語哲学や問答論理学の研究にも手を広げている。

第二の柱については、伝統的な認識論や存在論のほかに、精神科学方法論、言語行為論、コミュニケーション論、哲学的意味論などにも目を向けている。

研究室員はみな、隣接の現代思想文化学と連携して、自由闊達に切磋琢磨している。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 2 助教授 1 講師 0 助手 1

教授：入江 幸男、上野 修

助教授：舟場 保之

助手：吉永 和加

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
22	5	8	1	0	0	1	1	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 2 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業者	大学院		博士号学位授与数	出身の研究者
		博士前期(M)修了者	博士後期(D)修了者		
'02	10	0	2	3	0
'03	6	1	1	3	0
小計	16	1	3	6	0

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	0	3	3
'03	1	2	3
計	1	5	6

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

戸島貴代志 「創造と想起——可能的ベルクソニズム——」 2003/10

主査：山形頼洋 副査：溝口宏平、入江幸男

【論文博士】

入江幸男 「ドイツ観念論の実践哲学研究」 2002/12

主査：里見軍之 副査：溝口宏平、中岡成文

舟場保之 「未完のプロジェクトとコミュニケーション——カント、ハーバーマス、バトラーを手がかりに——」 2003/10

主査：里見軍之 副査：入江幸男、中岡成文

山口和子 「シェリング神話論の研究」 2002/5

主査：里見軍之 副査：溝口宏平、入江幸男

山本博史 「カント哲学の思惟構造——理性批判と批判理性——」 2003/2

主査：里見軍之 副査：溝口宏平、入江幸男

吉永和加 「感情から他者へ——生の現象学による共同体論——」 2003/7

主査：山形頼洋 副査：里見軍之、望月太郎

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	0	1	5	0	0	6
'03	0	0	3	0	2	5
計	0	1	8	0	2	11

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	0	1	0	0	0	1
'03	0	3	0	0	0	3
計	0	4	0	0	0	4

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

重田謙「原因と理由——行為の因果説と反因果説の対立の三つのレベル——」『メタフュシカ』33(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), pp. 81-96, 2002/12

津崎良典「デカルトの“智慧”と“徳”——述懐されない“備えのための道徳”第四格率をめぐる——」『待兼山論叢(哲学編)』36, (大阪大学文学会), pp. 1-16, 2002/12

富岡基子「力の实在——メヌドピラン的自我にとって異他的な、外的物体とアフェクションについて——」『メタフュシカ』33(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), pp. 55-68, 2002/12

中村修一「『純粋理性批判』への数学の導入——判断形成における量のカテゴリーの位置付け——」『メタフュシカ』33(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), pp. 97-108, 2002/12

西田充穂「『全体性と無限』における女性性について——『時間と他者』『実存から実存者へ』から——」『メタフュシカ』33(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), pp. 69-80, 2002/12

前田直哉「フッサールの相互主観性理論について」『メタフュシカ』33(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), pp. 109-124, 2002/12

【2003年度】

重田謙「非法則性一元論擁護のための試論——コネクショニズムの観点から——」『科学と社会』(大阪大学大学院文学研究科広域文化形態論講座文化基礎学専門分野), pp. 129-148, 2004/2

Tsuzaki, Yoshinori, “La tolérance ou la présence d'un certain cartésianisme chez Pierre Bayle” 『メタフュシカ』34(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), pp. 1-21, 2003/12

森田邦久「ドイツにおける現在の脳死と臓器移植に関する論議」『医療・生命と倫理・社会』3(大阪大学大学院医学系研究科・医の倫理学教室), pp. 112-117, 2004/3

森田邦久「科学理論の意味論的概念について」『科学と社会』(大阪大学大学院文学研究科広域文化形態論講座文化基礎学専門分野), pp. 161-165, 2004/2

森田邦久「物理学の発展と科学的实在論」『メタフュシカ』34(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), pp. 87-96, 2003/12

(2)口頭発表

【2002年度】

川瀬雅也「“私はできる”から生きる行為へ——ミシェルアンリ『我は真理なり』における身体論——」日本哲学会大会,九州大学, 2002/5/18

【2003年度】

中村修一「『純粹理性批判』における「質的な単一性」について」日本フィヒテ協会大会, 姫路獨協大学, 2003/11

森田邦久「物理学研究とモデル」日本科学哲学会大会, 千葉工業大学, 2003/11

森田邦久「科学的事実論についての考察」科学哲学コロキウム例会, 京大会館, 2003/5

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2003年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部: 0名 大学院: 2名 (計2名)

2003年度 学部: 0名 大学院: 3名 (計3名)

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度～2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002年度～2003年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3 名

2002年度: 1名 2003年度: 2名

<内訳> 小説家 1名 システムエンジニア 1名 教員 1名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

2002年度 『メタフュシカ』

2003年度 『メタフュシカ』

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

2002年9月29日、Theo Verbeek ユトレヒト大学教授・オランダ王立科学アカデミー会員を招き、デカルト哲学に関する研究討議を開催。

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

学部教育(哲学・思想文化学専修)については、哲学史についての基礎的な知識を身につけるために「近代哲学史」「現代哲学概説」を開講し、また外国語の哲学文献をはじめて読む学生のための基礎的な演習として「英米哲学基本文献読解」「フランス哲学基本文献読解」「ドイツ哲学基本文献読解」を提供した。また、現代哲学を研究する上で不可欠の知識となっている論理学についても「論理学初歩Ⅰ」と「論理学初歩Ⅱ」を開講した。論理学の演習には、他専修、他学部の学生も多数参加し、広範な学生からの要望がみられた。また、留学生をチューターにして、英語で議論する訓練のための自主ゼミを2003年度から開始した。参加者はまだ少数であるが、在学中に英会話の訓練の機会をもうけて、海外大学との交流協定など様々な派遣制度を利用して留学することを学生に進めてきた。研究指導については、全スタッフが、オフィスアワーを週1、2回もうけて、個別の相談に応じた。また、年に2回の研究発表の機会をもうけて、文章作成、口頭発表、討論の訓練を行なった。

大学院教育については、各スタッフの専門的な講義と演習の他に、論文作成指導の授業をもうけて、文章作成、口頭発表、討論の訓練をすることによって、個別の論文指導をきめ細かく行なった。院生を中心として「様相論理学」の自主ゼミを行なったが、これには他専攻や他学部の学生の参加もあった。また、学部生に対してと同様に、留学生をチューターにして英語で議論する訓練を実施し、留学の指導も積極的に行なった。後期課程の学生に対しては、学会や研究会での発表をすすめ、学内の雑誌への論文執筆を指導するとともに、学外の雑誌への論文の応募も指導した。ただし、後期課程3年間で博士論文を提出できる学生が少なく、4、5年かかる学生が多いことが今後の指導の課題である。

13-2 研究活動

研究活動は、学問の性格上個人研究が中心であり、各自が積極的に論文執筆、学会や研究会での発表を行なった。また、海外の学会への参加や講演会なども行ない、これまで以上に、外国の研究者との交流や発信に努めてきた。しかし、この点はまだ不十分であるので、今後もますます海外へ研究成果を発信するべく計画である。また、哲学哲学史と現代思想文化学と臨床哲学の共同で科学研究費の交付を受けて「哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション」(研究代表者・溝口宏平・現代思想文化学)という共同研究も行なった。この成果は、2004年度に公刊の予定である。当研究室の研究成果の一部は、哲学哲学史と現代思想文化学と臨床哲学の共同で発行している年刊雑誌『メタフュシカ』で公刊された。学会活動についても、これまでと同様に、ほとんどのスタッフが、各種の委員として学会の運営に貢献しており、学会の司会も数多くこなした。

2003年10月に山形頼洋教授が他大学に転出され、また2004年3月には里見軍之教授が定年退官されたので、この数年はあらたな計画への取り組みなどに消極的にならざるを得ないところがあったが、新しいスタッフによって、哲学と哲学史の研究の国際的な拠点となるために、これまで以上に積極的な中長期的計画の見直しと実行が、今後の重要な課題になると考えている。

Ⅲ. 教員の研究活動(2002年度～2003年度の過去2年間)

1. 上野 修 教授

1951年生。1982年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。文学修士(大阪大学)。大阪大学助手、山口大学助教授、同教授を経て、2004年4月から現職。専攻：哲学哲学史。

1-1. 論文

上野修「私の存在は偶然か」『異文化交流研究施設ニューズレター』5, pp. 5-6, 2004/3

上野修「スピノザと真理の規範」『フランス哲学・思想研究』8, pp. 81-93, 2003/9

上野修「意志と意図、あるいは責務の時間」『山口大学文学会志』53, pp. 89-97, 2003/2

上野修「近代西洋哲学と死」『異文化交流研究施設ニューズレター』3, pp. 2-5, 2002/4

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

上野修, 岩崎稔「ホッブズを超えて——力と恐怖の論理」『現代思想』31-15, pp. 24-41, 2003/12

上野修, 佐藤拓司著「随天使の倫理——スピノザとサド」東信堂『フランス哲学・思想研究』8, pp. 178-182, 2003/9

上野修「明確に科学認識論的な『知性改善論』理解」『スピノザーナ』4, pp. 39-41, 2003/3

1-4. 口頭発表

上野修「必然、永遠、そして現実性」2004年度スピノザ協会総会, 2004/3

上野修「教育の心理学化と『未来学力』『未来学力』の構想および新しい入学試験問題のあり方に関する学際的研究(基盤研究(C)(2))ワークショップ, 2003/11

上野修「スピノザによる魂の作り方」「計算の哲学」プロジェクト主催ワークショップ「計算・生命・時間」2003/3

上野修「スピノザの真理」日仏哲学会 2002年秋季研究大会, 2002/9

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2002年度～2003年度、基盤研究(C)(2)、代表者：上野 修

課題番号：14580221

研究題目：「未来学力」の構想および新しい入学試験問題のあり方に関する学際的研究

研究経費：2002年度 1,800千円

2003年度 1,600千円

研究の目的：

ゆとりある教育をめざして2002年度から(高等学校では2003年度新入生から)新しい学習指導要領が施行されていること、また中央教育審議会が大学入試制度の抜本的改革案のひとつとして「総合科目」を答申したことで、いま大学教育は「学力」とは何かという問題をあらためて考える必要に迫られている。ここでは、今後、さまざまなかたちで改革が迫られるようになると考えられる大学入試のあり方、および新しい入試制度によって選抜されてくる学生たちに対して大学がどのような教育を施すかという問題を中心に、従来の教科・科目を横断するかたちで共同研究を進めることを狙いとす。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

西日本哲学会・『西日本哲学年報』編集委員

2003年12月～2004年12月

同上・運営委員

2002年12月～2003年12月

スピノザ協会・運営委員

2002年5月～2004年3月

2. 入江 幸男 教授

1953年生。1983年、大阪大学大学院文学研究科後期課程単位取得退学。文学博士(大阪大学)。大阪大学助手、大阪樟蔭女子大学講師、同助教授、大阪大学助教授を経て、2003年10月から現職。専攻：哲学哲学史。

2-1. 論文

入江幸男「信念文における話し手による指示と信念者による指示」『待兼山論叢』哲学篇, 37, pp. 35-52, 2003/12

入江幸男「NGOと公共性の問題の一事例——ネパールのブータン難民キャンプを訪問して——」『臨床と対話 マネジできないもののマネジメント』(大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイスの人文科学、文学研究科・人間科学研究・言語文化研究科 2002・2003年度報告書), pp. 52-59, 2003/12

入江幸男「発話伝達の不可避性と問答」『大阪大学文学部紀要』43, pp. 1-48, 2003/3

Irie, Yukio, 'Models and Illocutionary Acts', "IA'02 Proceedings of International Symposium for Young Researchers on Modeling and their Applications"(edited by E.Tachibana, T.Furukawa, Y. Mukai and H.Ma, Osaka University), pp. 1-3, 2002/10

入江幸男「ボランティア活動についての哲学研究」『ボランティア活動研究』(大阪ボランティア協会発行), 11, pp. 5-12, 2002/9

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

入江幸男訳, ラタン・ガズメル著「ブータン難民の過去・現在・未来」『臨床と対話 マネジできないもののマネジメント』(大阪大学21世紀COEプログラム、インターフェイスの人文科学、文学研究科・人間科学研究・言語文化研究科、2002・2003年度報告書), pp. 60-66, 2003/12

入江幸男「社会問題と物語」『Interface Humanities』(大阪大学COEプログラム「インターフェイスの人文科学」ニューズレター), 21, pp. 10-15, 2003/8

入江幸男, 藤井敦史, 長沼豊, 岡本仁宏, 小野晶子, (司会)森定玲子「理論はボランティア活動の何を語ってこなかったのか」(座談会)『ボランティア活動研究』(大阪ボランティア協会), 11, pp. 78-89, 2002/9

2-4. 口頭発表

Irie, Yukio, 'Models and Illocutionary Acts', IA 02 International Symposium in Osaka University, 2002/10

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

入江幸男 第一回フィヒテ協会研究奨励賞, 日本フィヒテ協会, 1995/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日本フィヒテ協会・会長(任期3年)	2004年3月～現在
同上・賞選考委員	1998年11月～2004年11月
同上・編集委員	1993年11月～2004年11月
同上・常任委員	2000年11月～2004年3月
同上・賞選考委員長	1999年11月～2001年11月
日本哲学会・委員	2003年7月～現在
同上・編集委員	2001年7月～現在
国際ボランティア学会・理事	2002年11月～現在
同上・編集委員	1999年11月～現在
ヘーゲル研究会 論文審査委員	2000年10月～2001年10月

3. 舟場 保之 助教授

1962年生。1992年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学)。立命館大学嘱託講師を経て、2004年4月から現職。専攻：哲学哲学史。

3-1. 論文

舟場保之「アイデンティティ・ポリティクスと普遍的正義」『哲学論集』(上智大学哲学会), 32, pp. 19-29, 2003/10

3-2. 著書

舟場保之ほか, 日暮雅夫, 永井彰編『批判的社会理論の現在』「ハーバーマスとロールズ その論争は不発だったのか」
晃洋書房, pp. 111-132, 2003/6

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

舟場保之, ヤン・P・ベックマン編, 飛田就一監修『医の倫理課題』2002/12

3-4. 口頭発表

舟場保之「応答可能性としての責任とカント」日本カント協会第28回学会シンポジウム, 2003/11

舟場保之「アイデンティティ・ポリティクスと普遍的正義」第57回上智大学哲学会大会シンポジウム, 2002/10

舟場保之「トラブルと理性の公的使用」日本倫理学会第57回大会ワークショップ, 2002/10

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

4. 吉永 和加 助手

1968年生。1997年、大阪大学大学院文学研究科博士課程後期課程中退。文学博士(大阪大学)。1997年4月から現職。
専攻：哲学哲学史。

4-1. 論文

吉永和加「アンリの他者論の展開——身体と力をめぐって——」『メタフュシカ』34(大阪大学文学研究科哲学講座), pp. 19-40, 2003/12

吉永和加「他者の要請——ルソーにおける自我と共同体論の狭間から——」『メタフュシカ』33(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), pp. 1-18, 2002/12

4-2. 著書

吉永和加『感情から他者へ——生の現象学による共同体論——』萌書房, 2004/3

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

吉永和加「身体と力——アンリの共同体論の展開——」同志社哲学会, 2003/9

吉永和加「反啓蒙のための啓蒙——ジャン=ジャック・ルソー——」日仏哲学会春季シンポジウム, 2003/3

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-2 現代思想文化学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

現代思想文化学は、1998年度より従来の専攻・哲学哲学史から分かれて設立された新しい専門分野である。西洋近世および現代の哲学研究を基盤としながら、今日対応が焦眉の課題となっている社会的・文化的諸問題に哲学的視座から積極的にアプローチすることを目指している。

研究室では、まずデカルトをはじめとする17世紀哲学、フランス啓蒙思想、ドイツ観念論、生の哲学、実存主義、現象学ならびに解釈学等を幅広く研究の対象としているが、加えてこれらの研究を基礎に生命、環境、科学技術、さらには宗教などの抱える現代的諸問題の哲学的考究にも努めている。教育・研究活動は、専門分野・文化基礎学および哲学哲学史との密接な連携のもとに行なわれている。

なお、2004年4月現在、助手以外には専任教員は不在であり、兼任教員(大学教育実践センター所属)のみにより教育・研究が行なわれているが、10月には新たに専任教員1名が着任した。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 1(兼任) 助教授 1(兼任) 講師 0 助手 1

教授：溝口 宏平(大学教育実践センター所属・兼任)

助教授：望月 太郎(大学教育実践センター所属・兼任)

助手：中橋 誠

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
22 (哲学・思想 文化学)	5	4	1	0	0	0	1	0

※うち留学生 2名、社会人学生 2名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業者	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'02	10 (哲学・思想文化学)	3	3	1	0
'03	6 (哲学・思想文化学)	1	0	0	0
小計	16 (哲学・思想文化学)	4	3	1	0

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	1	0	1
'03	0	0	0
計	1	0	1

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

Hans - Joachim Pepping 「テキスト解釈の始まり」 2003/3

主査：溝口宏平 副査：里見軍之、中岡成文、三谷研爾、中川純男

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	0	1	1	0	0	2
'03	0	0	2	0	1	3
計	0	1	3	0	1	5

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	0	0	0	0	0	0
'03	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1) 論文

【2002年度】

西松豊起「中期ハイデガーにおける存在史の変遷」『待兼山論叢』哲学編, 36, 大阪大学文学会, 2002/12

百崎清美「十八世紀的生理学から近代生命科学への移行についての一考察」『メタフュシカ』33, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座編, 2002/12

【2003年度】

麻生晴子「『義の不易な(秩序)』について——マルブランシュ道徳論における神——」『メタフュシカ』34, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座編, 2003/12

中野彰則「自然観の変容——延長と無際限をめぐって、デカルトからスピノザへ——」『科学と社会』大阪大学大学院文学研究科広域文化形態論講座文化基礎学専門分野・溝口宏平編, 2004/2

中野彰則「スピノザにおける『自己原因』について」『メタフュシカ』34, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座編, 2003/12

(2) 口頭発表

なし

(3) その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2003年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2003年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度～2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002年度～2003年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 12 名

2002年度：学部 5 人(哲学・思想文化学)、大学院博士前期 3 人(いずれも「その他」に該当)

2003年度：学部 4 人(哲学・思想文化学)(いずれも「その他」に該当)

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

2002年度 『メタフュシカ』 33

2003年度 『メタフュシカ』 34、『科学と社会』

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

学部教育(哲学・思想文化学専修)については、哲学史についての基礎的な知識を身につけるために「近代哲学史」「現代哲学概説」を開講し、また外国語の哲学文献をはじめて読む学生のための基礎的な演習として「英米哲学基本文献読解」「フランス哲学基本文献読解」「ドイツ哲学基本文献読解」を提供した。また、現代哲学を研究する上で不可欠の知識となっている論理学についても「論理学初歩Ⅰ」「論理学初歩Ⅱ」を開講した。論理学の演習には、他専修、他学部の学生も多数参加し、広範な学生からの要望がみられた。また、留学生をチューターにして、英語で議論するための訓練のための自主ゼミを2003年度から開始した。参加者はまだ少数であるが、在学中に英会話の訓練の機会をもうけて、海外大学との交流協定などさまざまな派遣制度を利用して留学することを学生に勧めてきた。研究指導については、全スタッフが、オフィスアワーを週1、2回もうけて、個別の相談に応じた。また、年に2回の研究発表の機会をもうけて、文章作成、口頭発表、討論の訓練を行なった。

大学院教育においては、専門分野・哲学哲学史と緊密な連携のもとに、フランス哲学およびドイツ哲学に関する専門的知識の教授に努める一方で、科学史や思想史の研究方法を取り入れつつ、学生の多様な関心に対応している。修士論文および博士論文の作成指導については、発表とディスカッションを中心とした演習を毎週2コマ連続で開講し、各自の論文の完成を助けると同時に、学会等での口頭発表に向け表現力を養う訓練を行い、さらに徹底したディスカッションを通じて批判的思考力を高める努力を続けている。

13-2 研究活動

広域文化形態論講座・文化基礎学専門分野主催の共同研究「科学と社会」(2001年度～2003年度)が最終年度を迎え、同名の報告書を刊行した(溝口宏平編)。多彩な執筆陣による内容豊かなものとなったと自負している。また科研費による

共同研究「哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション」(2002年度～2004年度・研究代表者：溝口宏平)を実施中である。そのための研究、意見交換を行なうと同時に、その研究成果をまとめつつある。なお、本研究の特徴としては、現代思想文化の学際性を生かしたフィールドワークと情報収集に存するということができよう。

また、機関誌『メタフシカ』を年に一度発行し、他大学研究室・図書館に発送することで、日頃の研究成果の一端を対外的に発信している。

Ⅲ. 教員の研究活動(2002年度～2003年度の過去2年間)

1. 溝口 宏平 教授

1946年生。1975年、京都大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学修士(京都大学)、文学博士(大阪大学)。大阪教育大学講師、同助教授、大阪大学教養部助教授、大阪大学大学院文学研究科教授を経て、2004年4月より大阪大学大学教育実践センター教授。専攻：哲学／倫理学。

1-1. 論文

溝口宏平「為了自然と人類新的關係」(分担執筆)、閻孟偉・森英樹編『新世紀価値観——中日学者論文集——』(論文集)、南開大学出版社(中華人民共和国)、pp. 280-287, 2002/7

1-2. 著書

溝口宏平編『科学と社会』大阪大学大学院文学研究科・広域形態論講座・文化基礎学専門分野, 167p., 2004/2

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

溝口宏平「教養教育の復権とその意義」(エッセイ)『共通教育だより』大阪大学全学共通教育機構, 22, 2003/4

溝口宏平「『教養』とは何か」(エッセイ)『ムネーモシユネー』大阪音楽大学, 2002/4

溝口宏平「解釈学」(項目執筆)、永井均・他編『事典・哲学の木』講談社, 2002/3

1-4. 口頭発表

溝口宏平「大阪大学における独立行政法人化と入試の動向について」(招待講演)、大阪府高等学校進路指導研究会, 2003/8

溝口宏平「大学の取り組みについて」(招待講演)、大阪府高等学校長協議会進学指導委員会, 2002/11

溝口宏平「体験的課題追求型授業の導入」(招待講演)、2002年度国立大学教養教育実施組織会議第3分科会, 2002/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2002年度～2004年度、基盤B2、代表者：溝口宏平

課題番号：14310004

研究題目：哲学的概念としてのグローバリゼーションとローカリゼーション

研究経費：2002年度 4,400千円

2003年度 4,300千円

研究の目的：

現代社会における高度情報化と市場経済のグローバル化と現代哲学・思想文化の領域におけるさまざまな動向(生命倫理、環境倫理、情報倫理、あるいはジェンダー論、多文化主義等に関する研究の多面的展開)の関連を明らかにする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2. 望月 太郎 助教授

1962年生。1985年、国際基督教大学教養学部人文科学科卒業(教養学士)。1988年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程(修士課程)哲学哲学史専攻修了(文学修士)。1991年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程哲学哲学史専攻中退。文学博士(大阪大学、1997年)。1991年4月、徳島大学教養部講師。1993年4月、徳島大学総合科学部講師。1994年4月、東海大学文明研究所講師。1997年4月、東海大学文明研究所助教授。1998年4月、大阪大学大学院文学研究科助教授。2004年4月、大阪大学大学教育実践センター助教授。専攻：西洋近世哲学史/フランス哲学。

2-1. 論文

望月太郎「獣の魂をめぐる——デカルト派の動物機械説とその論敵：1670年代(1)——」『大阪大学大学院文学研究科紀要』(大阪大学大学院文学研究科), 44, pp. 1-37, 2004/3

望月太郎「科学と社会の接点としての大学への指針——「21世紀に向けての高等教育世界宣言」(ユネスコ)を中心に——」溝口宏平編『科学と社会』(大阪大学大学院文学研究科・広域文化形態論講座), pp. 71-91, 2004/2

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

望月太郎 [米虫正巳と共同執筆]『imidas 2004』分野「哲学」——分担項目「哲学の過去・現在・未来」(リード), 「哲学と大学」(コラム), 「哲学者とは誰のことか」「知識と社会」「獣の魂」「時間/永遠」「情報/情報学」「音楽と哲学」「絵画と哲学」(以上項目), 集英社, pp. 1252-1256, 2003/12

望月太郎 [中岡成文と共同執筆]『imidas 2003』分野「哲学」——分担項目「生命」「意識」「身体」「哲学史」「科学史」「イデオロギー」「啓蒙/反啓蒙」「風土/風土性」, 集英社, pp. 940-944, 2002/12

望月太郎 書評・庭田茂吉著『見えないものの現象学——ミシェル・アンリの生の哲学のために——』『フランス哲学・思想研究』(日仏哲学会), 7, pp. 193-198, 2002/9

望月太郎『情報学辞典』北川高嗣, 須藤修, 西垣通, 浜田純一, 吉見俊哉, 米本昌平編, 分担項目「コンディヤック」弘文堂, p. 332, 2002/6

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日仏哲学会・理事・編集委員

2001年8月～現在

3. 中橋 誠 助手

1968年生。神戸大学法学部法律学科政治コース 1993年卒業。大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士前期課程 1996年修了。大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史専攻博士後期課程 2000年単位取得退学。2004年現職。専攻：現代思想文化学。

3-1. 論文

中橋誠「現存在とは何か」『哲學』（日本哲学会），53，pp. 188-196，2002/4

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

中橋誠「ギリシア的思惟から把握される現象学」日本倫理学会，第54回大会研究発表，2003/11(研究発表要旨：『日本倫理学会第54大会報告集 2003』日本倫理学会，p. 80，2003/9)

中橋誠「形而上学としての日常性」日本現象学会，2003/11

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-3 臨床哲学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

当分野は、現代社会において大小さまざまな問題(例えば、科学技術、医療、看護、介護、教育、環境、芸能、ジェンダー/セクシュアリティなど)について考えるために、(1)近代西洋/日本の倫理思想・道徳理論や現代の社会哲学・文化理論を学びながら、問題の定式化・分析を行うための方法論を探求する。それと同時に、(2)当事者・関係者とともに、それぞれのおかれた具体的な文脈に即して問題を掘り起こし、考察するための哲学的対話法やコミュニケーション方法の調査・開発を行っている。また、学内外のさまざまな研究者・活動家と連携しつつ、社会で現実に機能し得る研究活動プラン作りと遂行に取り組むなど、共同研究プロジェクトを推進している。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 2 助教授 0 講師 2 助手 0

教授：中岡 成文、鷲田 清一

講師：本間 直樹、紀平 知樹

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
23	11	4	0	0	0	1	0	1

※うち留学生 3 名、社会人学生 5 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業生	大学院		博士号学位授与数	出身の研究者
		博士前期(M)修了者	博士後期(D)修了者		
'02	7	3	2	3	1
'03	8	2	5	3	2
小計	15	5	7	6	3

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	2	1	3
'03	4	0	4
計	6	1	7

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

河村厚 「スピノザの社会哲学——コナトゥスから救済へ、あるいはコナトゥスの彼方へ——」 2003/3

主査：中岡成文 副査：鷺田清一、山形頼洋

紀平知樹 「現象とロゴス——フッサール現象学における基礎づけの理念と意識の志向性——」 2003/3

主査：鷺田清一 副査：中岡成文、本間直樹

寺田俊郎 「自由の体系——カントの道德の形而上学」 2004/3

主査：鷺田清一 副査：中岡成文、里見軍之

西村高宏 「メルロ＝ポンティの史的唯物論——〈人間主義〉からの転換というプラン」 2004/3

主査：鷺田清一 副査：中岡成文、望月太郎

堀江剛 「スピノザにおける《内在》の論理」 2004/3

主査：中岡成文 副査：鷺田清一、本間直樹

馬嶋裕 「性格と自律——J.S.ミルの自由主義の倫理的焦点——」 2004/3

主査：中岡成文 副査：鷺田清一、入江幸男

【論文博士】

柘植尚則 「良心の興亡——近代イギリス道德哲学研究——」 2003/3

主査：塚崎智 副査：鷺田清一、中岡成文

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	2	1	11	0	2	16
'03	1	0	6	0	1	8
計	3	1	17	0	3	24

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	5	4	2	0	0	11
'03	0	3	2	0	0	5
計	5	7	4	0	0	16

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

- 会沢久仁子「ヒューム哲学の、医療哲学・倫理学における注目点(2)——医療・保健制度の正義をめぐる——」『医療・生命と倫理・社会』2, 大阪大学大学院医学系研究科医の倫理学教室, pp. 136-146, 2003/3
- 会沢久仁子「ヒューム哲学の、医療哲学・倫理学における注目点(3)——近代医療形成と共感倫理学——」『医療・生命と倫理・社会』2, 大阪大学大学院医学系研究科医の倫理学教室, pp. 147-156, 2003/3
- 会沢久仁子「慣れ親しみとケア——ヒュームを手がかりに」『臨床哲学』4, 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 62-69, 2002/6
- 菊井和子「嚥下困難を来たした終末期高齢者の食事援助に関連する倫理的課題」『川崎医療福祉学会誌』12-1, 川崎医療福祉学会, pp. 83-90, 2002/6
- 菊井和子, 渡邊美千代「食援助に関するケア倫理の模索——食事摂取が困難になった高齢者の援助事例を通して」『臨床哲学』4, 大阪大学大学院文学部研究科臨床哲学研究室, pp. 5-17, 2002/6
- 近藤潤子, 瀬川睦子他「看護学教育の国際交流」『日本私立看護系大学協議会年報』日本私立看護系大学協議会, pp. 50-57, 2002/6
- 瀬川睦子「成人看護学・慢性期看護実習指導の教育工学的立案」『岡山県実習指導者研究会誌』岡山県保健福祉部指導課, pp. 183-211, 2002/10
- 玉地雅浩「脳卒中後遺症者への体幹・上肢帯に対するアプローチの重要性」『理学療法京都』京都理学療法士会, pp. 64-70, 2002/11
- 玉地雅浩「食べる事と姿勢の関係について」『臨床哲学』4, 大阪大学文学研究科臨床哲学研究室, pp. 28-45, 2002/6
- 西村高宏「障害と身体社会学——障害学における〈身体〉の復権をめざして——」『医療・生命と倫理・社会』2, 大阪大学大学院医学系研究科・医の倫理学教室, pp. 111-135, 2003/3
- 西村高宏「メルロ＝ポンティ現象学における身体論」『人文学部紀要』23, 神戸学院大学人文学部, pp. 10-17, 2003/3
- 堀江剛「ケアの多様で異質なコミュニケーション——痴呆老人への食事援助を手がかりに」『臨床哲学』4, 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 84-95, 2002/6
- 堀江剛「対話を促進するもの——日本におけるソクラティック・ダイアログの活動から」『臨床コミュニケーションのモデル開発と実践』文部科学省科学技術振興調整費科学技術政策提言 2002年度報告書, pp. 112-122, 2002/6
- 三浦隆宏「価値観の多様性を尊重すること——「ヘルスケア倫理」という構想にいて」『看護の臨床哲学的研究』2001年度～2002年度科学研究費補助金基盤研究(C)(1)研究成果報告書, pp. 154-160, 2003/3
- 三浦隆宏「他者の存在を必要とすること——H.アレントの「複数性」の概念をめぐる——」『メタフィシカ』33, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 155-168, 2002/12
- 渡邊美千代, 菊井和子「「食べる人／食べない人」のケアを考える」『臨床哲学』4, 大阪大学大学院文学部研究科臨床哲学研究室, pp. 18-27, 2002/6

【2003年度】

- 会沢久仁子「共に生きるとは？——介護について考えるソクラティック・ダイアログ——」『公共的対話を深めるための哲学的方法論——ソクラティック・ダイアログを中心として』(2002年度～2003年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2))

- 研究成果報告書)(研究代表者)中岡成文, pp. 35-67, 2004/3
- 菊井和子「『生』の苦について」『臨床哲学』5, 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 75-87, 2003/12
- 澤水幸子, 瀬川睦子「リハビリテーション看護における受け持ち患者への関わり」『看護学実習指導者研修会』久留米大学看護学実習連絡協議会, pp. 112-116, 2004/3
- 玉地雅浩「馴染む身体馴染まない身体——脳卒中後遺症者に対する感覚統合訓練とポジショニングの新たな意味とは——」『臨床哲学』5, 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 2-18, 2003/12
- 玉地雅浩「まなざす身体——脳卒中後遺症者の人の視野と運動の感覚について——」『メタフシカ』34, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 133-147, 2003/12
- 牧山布美, 瀬川睦子「心筋梗塞・心不全で急性治療を受けた患者の QOL」『川崎医療福祉学会誌』川崎医療福祉大・岡田喜篤, pp. 333-339, 2003/12
- 三浦隆宏「席をもうけるということ——アレント政治理論と哲学カフェ」『臨床哲学』5, 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 33-48, 2003/12
- 渡邊美千代, 菊井和子, 大橋奈美「意志決定を支える看護師の役割葛藤に関する看護倫理的考察」『医療・生命と倫理・社会』3, 大阪大学大学院医学系研究科医の倫理学教室, pp. 62-77, 2004/3

(2)口頭発表

【2002年度】

- Kuniko Aizawa, "Volunteers as Two-Way Mediators between Hospice and Community: The Role of the Volunteers at the Hospice of Higashi-Kobe Hospital" 5th Asia Pacific Hospice Conference, Osaka International Convention Center 6. Mar. 2003
- 会沢久仁子「ヒューム『人間本性論』における、感情の対象としての自己観念の生成」関西倫理学会第53回大会, 愛媛大学, 2002/11/16
- 会沢久仁子「ヒューム哲学の、医療哲学・倫理学における注目点——動物の道徳的地位と、自殺(安楽死)をめぐる——」日本公益(功利)主義学会第5回大会, 大阪歯科大学, 2002/7/6
- Kazuko Kikui, "Role Conflict of Japanese Nurses to Support Decision Making of Terminal Cancer Patient/Family", Japanese Society of Cancer Nursing, 大阪, 2003/2, 共同研究
- Kazuko Kikui, "Terminal Care for Cancer Patients and Families by Japanese Buddhist Priests", Asia Pacific Hospice Conference, 大阪, 2003/2
- 瀬川睦子「成人看護領域の研究と評価」岡山県看護研究学会, 岡山看護教育会館, 2003/3/15
- 瀬川睦子「臨床実習における学生の主体性をはぐくむ指導」岡山看護協会研究会, 岡山県看護協会, 2002/8/9
- 三浦隆宏「全体主義以後の自由論——H.アレントの「政治的な自由の概念」をめぐる——」関西倫理学会, 愛媛大学, 2002/11/17
- Michiyo Watanabe, "Terminal Care for Cancer Patient/Families Japanese Buddha Priest", 大阪国際会議場, 2003/3
- Michiyo Watanabe, "Role Conflict of Japanese Nurse to Support Decision Making of Terminal Cancer Patient/Family", Japan Society of Cancer Nursing First International Conference 大阪国際会議場, 2003/2
- 渡邊美千代「父親の流産体験」第33回日本看護学会, 母性看護学, 仙台国際センター, 2002/8 共同研究

【2003年度】

- 江頭里紗, 瀬川睦子「終末期における家族の悲嘆過程と看護師の関わり」看護研究学会九州地方会学術集会, 鹿児島大学, 2004/3/20, 共同研究
- 永田恵梨, 瀬川睦子「携帯電話の普及が看護学生のコミュニケーション技術習得にもたらす影響」看護研究学会九州地方会学術集会, 鹿児島大学, 2004/3/20, 共同研究
- 三浦隆宏「「人権」という理念のパラドクス——「諸権利をもつ権利」というアレントの考えについて」, 日本倫理学会, 静岡大学, 2003/10/11
- 渡邊美千代「人工呼吸器装着の写真を用いたオリエンテーションによって意志決定した家族への影響」なら 100 年館,

2004/1, 共同研究

渡邊美千代「病院から在宅医療への連携の必要性」和歌山県勤労福祉会館, 2003/11, 共同研究

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2003年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:0名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

2003年度 学部:1名 大学院:0名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度～2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

玉地雅浩 博士後期課程2年在学中, 藍野大学, 講師, 2004/4/1

森芳周 博士後期課程単位取得退学, 大谷大学文学部, 任期制助手, 2003/4/1

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002年度～2003年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2002年度:0名 2003年度:1名

<内訳> 新聞記者 1名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

2002年度 『臨床哲学』4、『臨床哲学のメチエ』10

2003年度 『臨床哲学』5、『臨床哲学のメチエ』11, 12

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

哲学カフェ:中之島センター、神戸親和女子大等さまざまな場所で月に一回程度開催

2003年度

ワークショップ「社会的な問題へのSD(ソクラティック・ダイアログ)の適用」 (於待兼山会館)	2004年2月28-29日
講演：ジャック・ランシエール氏「民主主義・不都合・コミュニケーション」 (於待兼山会館)	2004年1月24日
第2回対話シンポジウム(於吹田キャンパスコンベンションセンター)	2004年1月11日
国際シンポジウム「先端医療技術における政策形成」(於阪大文学部第一会議室)	2003年12月13日
クリスティアン・ビック講演会「幹細胞研究：生命の新たな歩兵」 (於阪大文学部第一会議室)	2003年11月9日
講演会「子どものための哲学教育」(於待兼山会館)	2003年10月19日
公開シンポジウム「先端医療技術をめぐる倫理・社会」(於阪大共通教育棟)	2003年7月26日
科学技術政策提言「対話・教育・哲学」研究会(於待兼山会館)	2003年7月12-13日
ブルクハルト氏講演会(於阪大文学部第一会議室)	2003年6月21日
社会と臨床研究会 発足：一ヶ月に一回のペースで研究会を開催	2003年5月
ソクラティック・ダイアログ、神戸市立農業公園 《近畿ホスピス在宅ケア研究会との共催》	2003年3月21-23日
第1回対話シンポジウム	2003年2月23日
ソクラティック・ダイアログ、長船日本語学院(岡山市)	2002年9月30日
哲学カフェ、第10回日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会(福岡工業大学)	2002年9月8日
ソクラティック・ダイアログ、メルヴェーユ有馬(神戸市) 《近畿ホスピス在宅ケア研究会との共催》	2002年4月27-29日

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

引き続き臨床哲学という新しい理念を学生に理解させ、参与させるべく、種々の授業を開設しており、所定の成果を上げている。ある授業では分科会形式をとり、学生に部分的にイニシアティブを任せるなど、学生の自主性を促進することに成功している。これらの点については関係学会から注目され、「大学教育」についてのシンポジウムに招かれている。ただ、せっかく学生に海外での学会に参加し、研究発表する機会を与えているにもかかわらず、外国語(主として英語)の発信能力を組織的に養成する授業が欠けており、これは今後の課題である。

13-2 研究活動

文献研究を中心として哲学・倫理学の研究を推進する傍ら、大学の内外で様々な職業や立場の市民と協力しつつ、哲学的対話の実践に向けた多彩な研究活動を行っており、企業・自治体・NPO などからも注目を集めつつある。これらの研究・実践活動には学生も積極的に参加して経験を積んでいる。それに伴い、従来見られた学生の研究方向に関する迷いもかなり解消していると見られる。

設備の面では、読書会・研究会の活発な開催を可能にするスペース(ゼミ室)が依然として不足しており、学生の研究遂行を圧迫している。

III. 教員の研究活動(2002年度～2003年度の過去2年間)

1. 鷲田 清一 教授

1949年生。1977年、京都大学大学院文学研究科博士課程修了。1978年、関西大学文学部専任講師。1992年、大阪大学文学部助教授。1996年、大阪大学文学部教授。医学研究科の「医の倫理学」教授を併任。専攻：哲学／倫理学。

1-1. 論文

鷺田清一「〈民族〉と〈モード〉」『民族藝術』20, 民族藝術学会, pp. 36-40, 2004/3

鷺田清一「法の声、声の法」『法社会学』60, 日本法社会学会, pp. 14-23, 2004/3

鷺田清一「ヘーゲルとフランス実存主義」今村仁司・座小田豊編『知の教科書・ヘーゲル』講談社選書メチエ, pp. 154-165, 2004/3

鷺田清一「《インターフェイスの人文学》というプロジェクト」『大阪大学 21 世紀 COE プログラム《インターフェイスの人文学》報告書 01』pp. 7-13, 2003/12

鷺田清一「科学の専門性と現場性」『大阪大学 21 世紀 COE プログラム《インターフェイスの人文学》報告書 01』pp. 102-116, 2003/12

鷺田清一「意識の皮膚」成美弘至・京都造形芸術大学編『身体モード論』角川書店, pp. 36-61, 2003/4

鷺田清一「強い「自立」よりも弱い『相互依存』を」『中央公論』2003 年 4 月号, 中央公論新社, pp. 218-223, 2003/4

鷺田清一「いつでも未熟になれる社会」白幡洋三郎監修『大人にならずに成熟する法』中央公論新社, pp. 181-200, 2003/4

鷺田清一「〈内〉の現象学——構えについてのささやかな試論」『媒体性の現象学』青土社, pp. 325-346, 2002/7

鷺田清一「食のほころび——あるいは、食べることと食べさせてもらうこと」『臨床哲学』4, 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 107-119, 2002/6

1-2. 著書

鷺田清一『着飾る自分、質素な自分』KTC 中央出版, 2004/1

鷺田清一『この〈私〉はどこにいるのか』真言宗智派宗務庁(智山文庫), 2003/8

鷺田清一『メルロ＝ポンティ——可逆性 現代思想の冒険者たち』講談社, 2003/7

鷺田清一, 今村仁司, 三島憲一, 野家啓一(共編著)『現代思想の源流——マルクス・ニーチェ・フロイト・フッサール 現代思想の冒険者たち』講談社, 2003/6

鷺田清一『老いの空白』弘文堂, 2003/6

鷺田清一(編)『〈食〉は病んでいるか——揺らぐ生存の条件』ウェッジ選書 14・JR 東海, 2003/5

鷺田清一, 河合隼雄(共著)『臨床と言葉——心理学と哲学のあわいに探る新しい臨床の知』TBS ブリタニカ, 2003/2

鷺田清一『仏教〈No.42〉』法蔵館, 2002/10

鷺田清一, 坂部恵, 藤田正勝(共編著)『九鬼周造の世界』ミネルヴァ書房, 2002/10

鷺田清一, 山本耀司(共著)『Talking to Myself(テキスト「過去、女、空しさ」)』Yohji Yamamoto Inc 国際ブック, 2002/7

鷺田清一『時代のきしみ——“わたし”と国家のあいだ』TBS ブリタニカ, 2002/05

鷺田清一『死なないでいる理由』小学館, 2002/5

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

鷺田清一「作品と詩と訳文と 幸せな触れあい」チャールズ・シミック『コーネルの箱』「朝日新聞」朝刊, 2004/2/15

鷺田清一「絵と思想の関係、あらわに浮かび上がり」酒井健『絵画と現代思想』「朝日新聞」朝刊, 2004/1/11

鷺田清一「摩耗という「出来事」優しく洞察」四方田犬彦『摩滅の賦』「朝日新聞」朝刊, 2003/11/30

鷺田清一「ウンベルト・エーコ『カントとカモノハシ』」「朝日新聞」朝刊, 2003/11/2

鷺田清一「自分を超越する「穴」と交通する巡礼の旅」梅原賢一郎『カミの現象学—身体から見た日本文化論』「朝日新聞」朝刊, 2003/10/26

鷺田清一「「裏口」にむけた健やかならざる執着」ジャン・ゴルダン/オリヴィエ・マルティ『お尻とその穴の文化史』「朝日新聞」朝刊, 2003/10/19

鷺田清一「この人・この 3 冊——コリングウッド」『思索への旅——自伝』『歴史の観念』『藝術の原理』「毎日新聞」朝刊, 2003/9/28

鷺田清一「「失われたもの」の回復めざす「裁き」」ハワード・ゼア『修復的司法とは何か』「朝日新聞」朝刊, 2003/9/7

鷺田清一「伊藤徹『柳宗悦 手としての人間』」「朝日新聞」朝刊, 2003/8/31

- 鷺田清一「〈対称性〉の思考」中沢新一・河合隼雄『仏教が好き!』『一冊の本』朝日新聞社, 2003/8
- 鷺田清一「病をへて「人間」を問う往復書簡集」多田富雄・鶴見和子『邂逅』朝日新聞朝刊, 2003/8/10
- 鷺田清一「「カッコいい」の変遷クールに分析」D・バウンテン/D・ロビンズ『クール・ルールズ』朝日新聞朝刊, 2003/6/29
- 鷺田清一「複雑な現実とらえる「思考の試み」」P・グロード/J=F・ルエット『エッセイとは何か』朝日新聞朝刊, 2003/6/1
- 鷺田清一「「個人の確証」追求する欲望の正体」渡辺公三『司法的同一性の誕生——市民社会における個体識別と登録』朝日新聞朝刊, 2003/5/4
- 鷺田清一「世界に聞き耳を立てる詩人の思考」佐々木幹郎『やわらかく、壊れる——都市の滅び方について』みすず書房, 朝日新聞朝刊, 2003/4/13
- 鷺田清一「〈知る〉ことに賭けた男、『学問の自由』を斬る」米本昌平『独学の時代』東京新聞朝刊, 2002/11
- 鷺田清一「食の背後の「理性」を透視」レオン・R・カス『飢えたる魂』日本経済新聞朝刊, 2002/11
- 鷺田清一「「中年」を生きてきた2人が確かな語調で」芹沢俊介・米沢慧『老いの手前に立って』公明新聞, 2002/5/27

1-4. 口頭発表

- 鷺田清一「わたしにはあなたの言っていることが分からない——現代日本社会におけるディスコミュニケーションの諸位相」第13回社会言語科学学会大会, 2004/3
- 鷺田清一「科学とコモンセンス」平成15年度高等学校教育実践研究集会, 2004/2
- 鷺田清一「『人間』という概念」東京大学文学部応用倫理プログラム, 2003/12/10
- 鷺田清一「働くことの意味?」関西倫理学会2003年度大会, 2003/11
- 鷺田清一「都市のモード、モードの都市」第12回都市環境デザインフォーラム・関西(都市環境デザイン会議), 2003/10/25
- 鷺田清一「聴くことの意味」日本精神病理学会第26回大会, 2003/10/3
- 鷺田清一「「聴く」ことの本質」国際フォーラム「映像の本質——日越両国文化の比較と交流のために」, 2003/8/31
- 鷺田清一(ビデオ講演)「インターフェイスの人文学」2003年度人権教育サマーセミナー(奈良県/奈良県教育委員会), 大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」(後援・在ハノイ日本大使館・ベトナム文化情報省ほか), 2003/8/22
- 鷺田清一, 松村昌家, 青山義孝, 入子文子, 井野瀬久美恵「人を分けるということ——シンポジウム表彰としての人種」甲南英文学会20周年記念大会(甲南英文学会), 2003/7/5
- 鷺田清一「専門と非専門をつなぐ知」日本ボランティア学会2003年度大会, 2003/6/28
- 鷺田清一「新しい死のかたち・変わらない死のかたち——シンポジウム《死生学と応用倫理》第2部「いのちの終わりと死生観」」東京大学人文社会系研究科・文学部, 2003/6
- 鷺田清一「『われわれ』として語りうる場所」神戸大学国際文化学部創立10周年記念シンポジウム, 2003/6/7
- 鷺田清一「法の声、声の法」2003年度日本法社会学会学術大会, 2003/5
- 鷺田清一「La moda, fatto culturale: un aspetto del Giappone contemporaneo」現代日本文化講演会(国際交流基金), 2003/1/29
- 鷺田清一「寂しい時代——現代日本文化の一側面」現代日本文化講演会(国際交流基金), 2003/1/27
- 鷺田清一「文化としてのファッション」現代日本文化講演会(国際交流基金), 2003/1/27

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 鷺田清一 紫綬褒章, 内閣府, 2004
- 鷺田清一 桑原武夫学芸賞, 潮出版社, 2000
- 鷺田清一 サントリー学芸賞(思想・歴史部門), サントリー文化財団, 1989

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2003年度、基盤研究(B)(2)、代表者：鷺田清一

課題番号：15320003

研究題目：疑似法的倫理からプロセスの倫理へ——「生命倫理学」の臨床哲学的変換の試み

研究経費：2003年度 3,700千円

研究の目的：

ヒトの発生過程に踏み込む先端医療技術を先端的生命倫理という視点から議論するとき、たとえばES細胞をめぐる、「樹立」「廃棄予定」「余剰胚」「使用」などの法律用語が用いられるのが常であるが、そのような疑似法的議論の精緻化によって、倫理は「法的手続き」と化し、本来の倫理的な問いはかえって免除される傾向にある。そこで、生命過程への操作的介入についてその是非を判断する時に参照すべき確かな倫理、それを「プロセス倫理」と本研究では呼ぶことにし、それを実現するための糸口をつかむことを目的とする。

1-6-2. 2002年度、基盤研究(C)(1)、代表者：鷺田清一

課題番号：13610040

研究題目：看護の臨床哲学的研究

研究経費：2002年度 1,700千円

研究の目的：

現代社会が直面するさまざまな困難は、老人介護、性差別、臓器移植、遺伝子レベルでの生命操作、環境汚染、民族紛争、少年犯罪、労働環境の整備、公共性の再構築、都市計画のあり方等のどれをとっても、老いの意味、〈わたし〉とはだれか、家族とは、生命とは、都市とは、民族とは、国家とは、自然とはなにかといった哲学・倫理的な難問に正面から向きあわずには、解決の道筋がとうてい見えないようなそういう困難を含み込んでいる。これらは政治や経済の技術的な問題ではなく、まさにフィロソフィーの問題である。その意味で、現代ほど哲学と社会とのかかわりが強く求められている時代はない。

実際、看護、老人介護、ホスピスケア、ソーシャルワーキングの現場、あるいは学校教育の現場では、そのただなかで活動している人びとが、最終的に「死とは何か」「他者とは何か」「理解とは何か」「生きること／死ぬことの意味」「ケアの意味」といった問題に直面し、そういう問題を哲学・倫理的にもっと突っ込んで考えたいというニーズを強くもっているにもかかわらず、従来の倫理学研究がそれにまだ十分に答えているとはとても言えない。そうした現場と哲学研究とをつなぐ回路がまだうまく設定されていないというのが実情である。

ここでわれわれが倫理学の臨床的転回ということで念頭に置いているのは、社会のさまざまな臨床的な場面に哲学的思考をつないでいき、その場所で困難に向き合っている人びとと、その場所の言葉で、ともに問題を捉え、定式化し、その解決に方向性を見いだそうという努力を意味する。そういう努力をわれわれは「臨床哲学」と名づけている。

本研究では、その対象となる現場をとくに看護の現場に限定し、〈ケア〉という視点から「臨床哲学」の実践に取り組む。看護理論の領域では、医学に基礎を置くのではなく、総合科学として社会学や心理学を応用的に導入するのでもなく、看護理論としての独自の方法論を探究しようという動きが強くある。それらのかなりの部分は、看護理論の基礎を哲学における「現象学」の発想と方法に求めている。いわゆる現象学的看護論である。本研究は、哲学における現象学の研究者ならびにケア論・コミュニケーション論の研究者と、看護の現場ならびに看護学研究的領域で現象学的看護論の構築に取り組んでいる研究者との緊密な研究交流をつうじて、現象学的看護論の試みを臨床哲学・倫理的に検討するとともに、併せて倫理的思考の臨床的展開の可能性を具体的な現場に則して探ろうとするものである。中心となるテーマはとくに、ケアといういとなみにおける co-presence [ともにいること] の力とケアという関係におけるケアする／されるの反転関係である。看護におけるこの本質的な問題に臨床哲学・倫理的な見地からアプローチしたい。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2002年度、2003年度 科学技術振興調整費科学技術政策提言 代表者：鷺田清一

研究題目：臨床コミュニケーションのモデル開発と実践

研究経費：2002年度 23,061千円

2003 年度 16,520 千円

研究の目的：

本調査研究では、医療福祉・教育・科学技術評価などの分野における新しいコミュニケーションモデルの開発と実践を目的とする。そのために、従来の先端的科学技術の概念そのものを拡張し、生活者の実感とリンクする、新たなケア文化の創出へ向けての施策を提言する。

この背景として、専門家と一般国民との間に適切なインターフェイスが欠如していた従来の状況がある。すなわち、専門家が人間を所与のものとして固定的に捉えており、政策立案や、社会経済的意思決定もその限界を出ないという弊害があった。他方で生活者も自分たちの実感を各臨床現場や政策立案過程に反映させる適切なチャンネルを持たなかった。

内容：

第一に臨床コミュニケーションのネットワーク形成についてヒアリングならびに文献調査を行い、我が国の問題点や諸外国とくに EU(デンマークやオーストリア)の科学技術評価の手法を調査するとともに、領域横断的なコミュニケーションモデルの構築および政策プランニング過程への対話的技法の導入を試みる。

第二に対人援助の各分野におけるクライアントの側に立ったコミュニケーション実践を調査研究し、その卓越性をまとめて、具体的な案件について専門職と受益者とのインターフェイスを促進するコミュニケーションモデルを提案する。そのために、ライフサイエンスを「生活」科学として捉える。

第三に、上記 2 つの作業と連携しつつ、臨床諸科学の統合プログラムを作成し、ハイテク文明の中でバランスのとれた人間観を確立する基本理念の策定を提言する。

俯瞰的・融合的視点：

第 1 に、臨床コミュニケーションの現場(医療・介護・調停)に関連して、医学や法学などの枠を超えた人文科学との協同、第 2 に横断的コミュニケーション構造の実践理論(科学技術評価など)に関連して、人文・社会科学と自然科学・工学との協同、第 3 に臨床諸科学の統合と人間観の構築に関連して、哲学・倫理学と他の人文科学・社会科学・自然科学との協同をめざす。

一般からの意見の反映方法：

ホスピス・看護大学・介護施設などの職員や患者・入所者、NPO(日本ホスピス・在宅ケア研究会)の関係者などからヒアリングを行うほか、ワークショップ(参加型学習)を行う。科学技術評価に関しては、一般国民参加型テクノロジーアセスメント(コンセンサス会議、シナリオ・ワークショップなど)を実施して、一般各層からの意見を反映する。

1-7-2. 2002 年度、2003 年度 21 世紀 COE プログラム 代表者：鷲田清一

研究題目：「インターフェイスの人文学」

課題番号：機関番号 14401、整理番号 D-1

研究経費：2002 年度 106,000 千円

2003 年度 164,000 千円

研究の目的：

環境危機、生命操作、医療と介護、教育、性のあり方、家族とコミュニティ、マイノリティ等をめぐって現代社会が抱え込むさまざまな困難な問題は、もはやかつてのような政治・経済レベルで対応できる問題ではなく、また特定の地域や国家に限定して処理しうる問題でもない。

文明の転換期にあつて、これら文化の根幹に関わる諸問題は、文化への根源的な問いかけなくしては解決できない状況にある。その意味で、現代の社会問題は、人文学の視点をこそ強く必要としている。

人文学は、思想や芸術、さらには科学研究をもふくめて文化と歴史の総体を問題とするものでありながら、その研究はこれまで、国家や地域、さらには言語圏によって分割され、その縦割りの制度のなかで文献研究を中心的な方法として追求されてきた。しかし、「ひとつの文化」といわれるものも実際には、複数の文化の接触と越境、交錯と遮断のなかで生成し、流動する。とりわけ、複数文化の接触は近年、一方ではグローバル化の進行によって国家や地域の間でますます加速され、そのことでさまざまな摩擦を引き起こしつつあるとともに、他方でそれぞれの国家や地域の内部でも、民族間、あるいはマジョリティとマイノリティ、「官」と「民」、専門家と一般市民等のあいだでさまざまな文化的軋轢を顕在化さ

せつつある。いずれの局面でもコミュニケーションとディスコミュニケーションの様相はますます複雑になっている。そういう問題の複雑さに現在の人文学がアクチュアルに対応できていないとすれば、その原因は、国家や地域をある閉じた固定的な枠組みとするこれまでの人文学の考え方にある。

本プログラムは、文化の生成をつねに複数文化のインターフェイスの相で動的に見てゆく〈インターフェイスの人文学〉への、人文学の創造的変換を目的とする。具体的には、複数文化の激しい接触の中で変動する21世紀の社会を的確に捉えるために、人文学を、二つの新しい知、つまり、異なる複数文化の接触・交差・軋轢を、国家・地域横断的に捉える〈横断的な知〉と、文化の諸次元、とりわけ研究者と問題発生の現場、専門家と一般市民とを架橋する〈臨床的な知〉を核とするものへと構造変換するためのプログラムを設計する。このことで、複数文化の交錯のなかで発生するさまざまな社会問題にアクチュアルに対応できる新しい21世紀型の人文学がデザインされる。

1-8. 学会役員等の引き受け状況

京都府文化力創造懇話会委員・部長	2003年10月1日～現在
京都創生百人委員	2003年10月1日～現在
(財)懐徳堂記念会	2003年8月1日～現在
京都市高齢者介護等調査研究事業研究主任	2003年7月1日～現在
京都帳寿すこやかセンター運営委員会委員	2003年7月1日～現在
京都賞選考委員会・専門委員	2003年4月1日～現在
2003国際クラフト展(伊丹市クラフト協会・工芸審査委員長)	2003年4月1日～現在
朝日新聞社書評委員書評委員	2003年4月1日～現在
痴呆ケア研究会代表	2003年4月1日～現在
関西倫理学会・編集委員	2002年11月1日～現在
(財)国際高等研究所・特別委員	2002年4月1日～現在
日本哲学会・委員	2001年6月1日～現在
同上・『哲学』編集委員	1999年6月1日～2003年5月31日
内閣府総合科学技術会議専門委員(生命倫理)	2001年4月1日～現在
日本現象学会・事務局長	2001年4月1日～2003年3月31日
日本顔学会・評議員	1997年1月1日～2003年3月31日
日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員	2000年8月1日～2002年7月31日

2. 中岡 成文 教授

1950年生。1973年、京都大学文学部哲学科卒。1978年、京都大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程単位修得退学。文学修士(京都大学)。1980年、福岡女子大学専任講師。1987年、大阪大学助教授。1996年9月、大阪大学教授。専攻：倫理学／臨床哲学。

2-1. 論文

中岡成文「表現と制作——西田幾多郎と三木清のディルタイ批判」『ディルタイ研究』14, pp. 5-18, 2003/11

中岡成文「〈精神の力〉としての権利——ヘーゲルの Recht 論に寄せて」『倫理学研究』33, pp. 31-44, 2003/3

中岡成文「看護倫理教育プログラムを考える——ミネソタ大学カリキュラムの検討」『医療・生命と倫理・社会』2, pp. 165-173, 2003/3

2-2. 著書

藤田正勝, 中岡成文他『東アジアと哲学, 第7章人為と自然——1920-30年代におけるジョン・デューイと三木清』ナカニシヤ出版, 2003/2

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中岡成文「書評：小松美彦『対論 人は死んではならない』」『週刊読書人』第2472号, p. 6, 2003/1

2-4. 口頭発表

中岡成文, 堀江剛「(在宅における医療行為)をめぐる対話の試み」学術振興会, 人文・社会科学振興のためのプロジェクト研究事業, プロジェクト研究〈医療システムと倫理〉主催(プロジェクト・リーダー 清水哲郎), 研究集会《医療の向上を目指して》, 2004/1

中岡成文「第一会場総括コメント」日本倫理学会第54回大会共通課題「ニヒリズム」2003/10

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2002年度～2003年度, 科学研究費補助金基盤研究(B)(2), 代表者: 中岡成文

課題番号: 14310017

研究題目: 公共的対話を深めるための哲学的的方法論——ソクラテック・ダイアログを中心として

研究経費: 2002年度 1,900千円

2003年度 2,100千円

研究の目的:

研究代表者・分担者を中核とするチームによってすでに開発されつつある「対話コンポーネンツ」という公共的対話のモデルを多数回実践し、社会的争点について当事者たちが一定の相互理解や合意を達成するうえでそれがどの程度有効であるかを明らかにする。また、その知見をもとに、さらにモデルを改善し、試行する。

対話コンポーネンツという、3段階の公共的対話の方法論はこれまでいかなる国でも知られておらず、独創的であるといえる。これはたんなるディスカッション、意見交換ではない。第1段階では社会的な「争点」(たとえば先端科学技術の危険と可能性)について当事者たちがどんな具体的な「懸念と期待」をもっているかを幅広く探り出し、それを列挙する。第2段階では、当事者たちによる10人程度の小規模対話を何回か組織し、「懸念と期待」の底にある「原点」、すなわち基本的な問題点(たとえばそもそも「リスク」とは何か)をパーセプション(感じ方)のレベルにまで降りて対話参加者が内省し、そこから「原点」についての合意を模索する。このモデル(または改善されたモデル)を利用することにより、市民参加に新しい局面が開かれると予想される。すなわち、たんに既存の利害得失をもとにした最大公約数的な合意ではなく、参加者各人としても発見があり、社会としても新たな方向性をもつ合意が可能となる。

1. ドイツ語圏やオランダ、イギリスなどでは、「ソクラテック・ダイアログ」(ソクラテスの対話、以下SD)という少人数の哲学的対話方法論がすでに数十年来研究され、企業や教育、医療・看護・介護などの分野で市民を相手に実践されている。それを踏まえて、オーストリアのB・リティヒは「異種移植」の倫理的問題のアセスメントにSDを導入する研究(欧州委員会により採択)を2002年度より2年の予定で実施中で、2004年3月までにはその報告が出る。我が国では唯一大阪大学で市民の参加するSDが1999年から30回近く実践され、その成果も評価・公表されている。本研究はこの実績に基づき、前述したドイツ語圏SDの実践家たちとの交流および意見交換に支えられ、リティヒとの国際共同研究の側面をもちつつ遂行されるものである。

2. 遺伝子作物や原子力発電所などの争点をめぐる「コンセンサス会議」については、EU圏の先行例を参考に我が国でも、小林傅司教授(南山大)や平川秀幸助教授(京都女子大)などのSTS(社会・科学技術論)関係者、倫理学者が加わって幾度か試行されているが、それについての詳細な評価はこれまでに出不されている。本研究代表者はこの人々とも共同して、平成14,15年度に文部科学省の科学技術振興調整費(科学技術政策提言)で「臨床コミュニケーションのモデル開発と実践」の調査研究を行い、本研究で利用する「対話コンポーネンツ」のモデルを開発した。本研究は当該調査研究の成果を受けて発展させるものである。

3. 法曹の領域や環境問題、消費者問題における紛争解決の新たなシステムとして、アメリカに続き我が国でもADR(裁

判外紛争処理、「調停」とそれを担うミディエーター(調停人)の制度が注目を集めつつある。本研究は、我が国におけるADR 研究および実践者の第一人者である稲葉一人氏(科学技術文明研究所)を分担者に加え、稲葉氏の調停人養成プログラム策定の経験をより幅広い領域で生かしてもらうことをねらっている。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 21世紀COEプログラム分担

2-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

3. 本間 直樹 講師

1970年生。1998年、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士(大阪大学)。1998年、大阪大学大学院文学研究科哲学講座助手。2000年4月より現職。専攻：哲学／倫理学／臨床哲学。

3-1. 論文

本間直樹, 堀江剛「対話コンポーネツ——臨床コミュニケーションのモデル開発に向けて」文部科学省科学技術振興調整費科学技術政策提言(研究代表者 鷺田清一)『臨床コミュニケーションのモデル開発と実践』2002年度報告書, pp. 144-165, 2003/3

本間直樹「強度のシステム——『差異と反復』におけるフロイト解釈に寄せて」『待兼山論叢』哲学篇, 36, pp. 1-15, 2002/12

本間直樹「肉と鏡——メルロ=ポンティの「肉の哲学」と精神分析」『メタフュシカ』33, pp. 1-17, 2002/12

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

日本現象学会・委員

2001年4月～2003年3月

4. 紀平 知樹 講師

1969年生。1992年、立命館大学文学部哲学科卒。2000年、大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史(倫理学)専攻単位修得退学、大谷大学特別研修員。2002年、大阪大学大学院文学研究科助手。2003年、文学博士(大阪大学)。2004年、大阪大学大学院文学研究科講師。専攻：哲学／倫理学／臨床哲学。

4-1. 論文

紀平知樹 「『持続可能な開発』の倫理」『メタフュシカ』34, pp. 97-107, 2003/12

紀平知樹 「聞く力を育むには」『教育と医学』51-9, pp. 30-37, 2003/9

紀平知樹 「フッサールとヒルベルト——学問の基盤としての現実性」『メタフュシカ』33, pp. 125-139, 2002/12

紀平知樹 「『脳』と『身体』——神経生物学的観点から——」『臨床哲学』4, pp. 120-131, 2002/6

紀平知樹 「認識論的問題としての環境問題」『臨床哲学』4, pp. 132-141, 2002/6

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-4 中国哲学

はじめに、教育・研究活動の概要とその特色

中国哲学は、中国古典の精読を通じて、広く東アジア世界の文化的特質を解明しようとする実証的学問である。本研究室は、全国の主要大学の中でも、この学問を主対象として、体系的・組織的・継続的に教育・研究を行っている数少ない拠点の一つである。

その中でも突出した特色としては、①既存の伝世文献に加え、新たに発見された竹簡・帛書などの出土資料を積極的に取り上げて考究する点、②担当教官数は少ないながらも、中国古代から近世、さらには日本漢文に至る幅広い時代・思想を対象とする点、③大阪大学が誇る漢籍コレクション「懷徳堂文庫」の整理・調査、およびその電子情報化を推進する点、などが挙げられる。具体的な成果物としては、学術誌『中国研究集刊』の編集・刊行(年2~3回)、『懷徳堂文庫図書目録』電子版の作成・公開、研究室HPを通じた研究情報の公開などがある。

また本研究室は、旧来の小講座制の良き伝統を継承しながらも、とかく閉鎖的になりがちな小講座の体質を脱却し、学内外の組織と密接な協力関係を築いている。具体的には、『中国研究集刊』の刊行母体である「大阪大学中国学会」の事務局、新出土資料を研究する「戦国楚簡研究会」の事務局、懷徳堂文庫の調査・研究に当たる「懷徳堂研究会」の事務局を兼ね、学外研究者と協力しながら斯学の発展に努めている。また、名古屋大学の中国哲学・中国文学研究室と定期的な研究交流を行い、出土資料の国際シンポジウムを開催するなど、開かれた教育・研究組織として積極的な活動を展開している。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 1 助教授 0 講師 1 助手 0

教授：湯浅 邦弘

講師：辛 賢

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
4	1	4	0	0	0	2	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業生	大学院		博士号学位授与数	出身の研究者
		博士前期(M)修了者	博士後期(D)修了者		
'02	1	1	0	0	1
'03	1	1	1	1	1
小計	2	2	1	1	2

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	0	1	1
'03	1	0	1
計	1	1	2

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

前川正名「「諫諍」の成立と展開」2004/3

主査：湯浅邦弘 副査：榎本文雄、高橋文治

【論文博士】

福田哲之「説文以前小学書の研究」2002/11

主査：湯浅邦弘 副査：高橋文治、荒川正晴

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	1	1	1	2	0	5
'03	0	1	0	1	0	2
計	1	2	1	3	0	7

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	0	0	1	0	0	1
'03	0	0	1	0	0	1
計	0	0	2	0	0	2

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

池田光子「中井履軒『孟子逢原』の王道観『待兼山論叢(哲学篇)』(大阪大学文学会), 36, pp. 35-50, 2002/12

上野洋子「二つの「十無詩」——儒者・中井竹山の詩作と感性——」『懐徳』(懐徳堂記念会), 71, pp. 45-58, 2003/1

前川正名「橋本左内研究の現状と今後の課題」『福井県関係漢詩集、橋本左内、橘曙覧』文献資料の研究』(福井大学), pp. 34-39, 2003/3

前川正名「適塾時代の橋本左内」『適塾』(適塾記念会), 35, pp. 185-202, 2002/12

前川正名「『韓非子』の「諫諍」について」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 30, pp. 29-42, 2002/6

【2003年度】

黒田秀教「章学誠における経書の位置」『待兼山論叢(哲学篇)』(大阪大学文学会), 37, pp. 31-44, 2003/12

前川正名「蘭学者時代の橋本左内——嘉永五年作の漢詩を手がかりとして・橋本左内漢詩研究(二)——」『適塾』(適塾記念会), 36, pp. 158-171, 2003/12

(2)口頭発表

【2002年度】

黒田秀教「章学誠の経書観」大阪大学・名古屋大学中国哲学研究室交流会, 大阪大学中国哲学研究室・名古屋大学中国哲学研究室, 大阪大学/大阪府豊中市, 2002/11/23

【2003年度】

上野洋子「『夢占逸旨』研究——陳士元の「夢」の思想——」第4回名阪中国学研究交流会, 名古屋大学中国哲学研究室・大阪大学中国哲学研究室, 名古屋大学/愛知県名古屋市, 2003/11/22

(3)その他(書評・翻訳など)

【2002年度】

上野洋子「懐徳堂関係研究文献提要20」『懐徳』(懐徳堂記念会), 71, pp. 68-71, 2003/1

前川正名「橋本左内略年譜」『福井県関係漢詩集、橋本左内、橘曙覧』文献資料の研究』(福井大学), pp. 40-43, 2003/3

前川正名「橋本左内関係文献目録」『福井県関係漢詩集、橋本左内、橘曙覧』文献資料の研究』(福井大学), pp. 44-51, 2003/3

【2003年度】

池田光子「第一次新田文庫暫定目録」『懐徳堂センター報』2004(大阪大学文学研究科・文学部懐徳堂センター), pp. 3-60, 2004/2

上野洋子「懐徳堂関係研究文献提要21」『懐徳』(懐徳堂記念会), 72, pp. 75-78, 2004/1

黒田秀教「懐徳堂関係研究文献提要21」『懐徳』(懐徳堂記念会), 72, pp. 72-78, 2004/1

黒田秀教「新出土資料関係文献提要(三)」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 34, pp. 96-100, 2003/12

佐野大介, 前川正名, 上野洋子「新出土資料関係文献提要(一)」『新出土資料と中国思想史』(大阪大学中国学会)『中国研究集刊』別冊, 33, pp. 91-104, 2003/6

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2003年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部: 1名 大学院: 0名 (計1名) (留学先) 北京師範大学

2003年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度～2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002年度～2003年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2002年度: 1名 2003年度: 0名

<内訳> 高校教員 1名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

2002年度 『中国研究集刊』・半年刊(年2回)

2003年度 『中国研究集刊』・半年刊(年2回) および別冊特集号1冊

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

国際シンポジウム「戦国楚簡と中国思想史研究」主催(大阪大学)	2004年3月26日・27日
懐徳堂研究会 2003年度(通算第6回)研究会(大阪大学文学部 A41 講義室)	2003年4月19日
懐徳堂研究会 2002年度(通算第5回)研究会 (大阪大学文学部懐徳堂センターおよび中国哲学資料室)	2002年7月6日
懐徳堂研究会(研究会)事務局引受	2000年4月～現在
大阪大学・名古屋大学中国学研究会(研究会)事務局引受	2000年4月～現在
郭店楚簡研究会(研究会)事務局引受	1998年10月～現在
大阪大学中国学会(国内学会)事務局引受	1984年4月～現在

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

国際シンポジウム「戦国楚簡と中国思想史研究」
大阪大学・名古屋大学中国学研究会
大阪大学・名古屋大学中国哲学研究会

2004年3月26日・27日
2003年11月22日
2002年11月23日

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

①博士学位(課程博士)の取得.....研究室は、教員数・学生数も少ないながら、教育・研究の両面にわたって豊富な活動を展開している。その教育面における表れの一つが、学位の取得であろう。2003年度は、博士後期課程修了者(前川正名)が研究室としては初となる課程博士の学位を取得した。また、在学中の成績も極めて良好で、前期課程修了者(上野洋子)とともに、2004年3月に举行された学位授与式において、両名は、それぞれ文学研究科の後期課程・前期課程の学位受領代表者(総代)を務めた。研究室の教育成果、特に学位取得の態勢が整ってきたことを実証するものであり、2004年度以降も、取得者が続く見込みである。

②研究室HPの拡充と研究室端末の整備.....全国の中国哲学研究室の中で、我が研究室は、最も早く研究室HPを開設し、また現在も、充実したコンテンツを提供している。その後、九州大学や名古屋大学の中国哲学研究室からは、阪大中哲HPをモデルとして研究室HPを開設したとの連絡が入っており、人文学における電子情報化推進の先端的事例として注目を集めている。これは、2002年6月に盛岡大学で開催された全国漢文教育学会第18回(通算48回)大会において、湯浅教授が「古典資料の電子情報化——懷徳堂文庫の場合——」として電子化の実例を講演したことも影響していると思われるが、平素、研究室の学生諸君によって研究室HPが逐次更新され、教育活動の一環として研究室の求心力となっていることが最大の要因であろう。特に、中国古典の電子テキストや関係目録の作成・公開は、単に教育面での成果と言うにとどまらず、学界全体の研究活動に資するところが極めて大きい。また、これを支えるためのハード面も徐々に整備され、2003年度末現在で、研究室のパソコン端末は、学生の教育活動にほぼ支障のないような数量となってきている。

③教員や大学院生の社会教育活動.....2002年11月、大阪市立扇町総合高等学校の要請により、同校において、湯浅教授が懷徳堂データベース、懷徳堂関係HPを活用した授業「大阪学・懷徳堂」を開講した。総合科目「大阪文化系列」の一環として開講されたもので、2年生38名が受講、大学教員の出前授業の実例として注目された。また、研究室の大学院生は、懷徳堂関係事業に際して、常に実働部隊として活躍し、積極的な社会教育活動を展開している。具体的には、大阪大学いちょう祭(2002年4月、2003年4月)、大阪大学総合学術博物館設立記念展(2002年10月)、懷徳堂秋季講座(2002年11月)、大阪大学総合学術博物館第2回企画展(2003年10月)、懷徳堂アーカイブ講座(2003年11月)などにおいて、出展した貴重資料・デジタルコンテンツの解説を務めた。学生の社会教育活動の重要な成果である。

④他大学との学術交流.....開かれた研究室を目指し、本研究室では、2000年から名古屋大学大学院文学研究科中国哲学研究室と学術交流会を行っている。毎年秋、両研究室の全教官・院生が一堂に会して研究発表会を開催し、2003年度は両大学の中国文学研究室も参加した。研究室の学生がお互いの教育面での情報交換を行う良い機会ともなっている。

13-2 研究活動

①中国思想史研究を中心とする着実な教育・研究.....本研究室は、初代教授木村英一の学風に見られる通り、実証的な経学(中国儒教經典に対する注釈学)を中心としながらも、古代から近世に至る諸思想(法家、老荘、仏教など)についても、重厚な教育・研究を展開する点に特色を有する。現在の教授である湯浅邦弘も、既存の枠に囚われることなく、思想的には、儒家に加えて、法家・兵家・道家にも十分な目配りを行い、また資料的にも、伝世文献のみならず、1970年代以降に発見された新出土資料を積極的に取り上げ研究業績を積み上げている。こうした学風の中で薫陶を受けた大学院生も、様々な時代・思想を対象として研究を進めている。

②『中国研究集刊』の刊行.....本研究室は、1984年(昭和59年)に組織された大阪大学中国学会の事務局として、『中国研究集刊』を年2回編集・刊行している。最新号は、2004年12月刊行予定の第36号であり、中国学に関する学術誌として定評を得ている。2003年には、通常号2冊に加えて、別冊特集号『新出土資料と中国思想史』を刊行した。こう

した精力的な研究活動が認められ、研究室は、2003年12月、(財)橋本循記念会の第13回「蘆北賞」を受賞した。

③人文学における電子情報化の開拓と推進……本研究室の近年の最大の成果は、懐徳堂文庫資料を中心とする電子情報化の推進である。大阪大学が誇る漢籍コレクション「懐徳堂文庫」については、これまで、『懐徳堂文庫図書目録』(1976年)があるのみであったが、湯浅教授を中心として組織された懐徳堂研究会により、2000年度から貴重資料の総合調査が行われ、それらは精細な画像と解題をともなったデータベースとして結実した。その成果の一部は、すでに2001年5月の大阪大学創立70周年記念事業「バーチャル懐徳堂」として公開されたほか、『懐徳堂事典』(湯浅編著)として再編され刊行された。その後も、『懐徳堂文庫図書目録』の電子版を作成して2002年6月にWebで公開したほか、貴重資料データベースを含む総合研究サイト「WEB 懐徳堂 <http://kaitokudo.jp/>」を2003年度末に公開し、人文学における電子情報化の先端的業績をあげている。

④(財)懐徳堂記念会事業への支援……大阪大学文学部と密接な協力関係にある懐徳堂記念会については、本研究室の歴代教授がその運営幹事を務めるなど、特に積極的な支援を行っている。大学院生も、懐徳堂記念会機関誌『懐徳』に毎月、関係文献提要や関係論考・目録などを提供している。また、上記の懐徳堂電子情報化事業とも相俟って、懐徳堂記念会の諸事業に研究室を挙げて取り組んでいる。社会貢献の顕著な成果であろう。

⑤出土資料の研究と国際シンポジウムの開催……2004年3月26日～27日、大阪大学待兼山会館を会場に、国際シンポジウム「戦国楚簡と中国思想史研究」を開催した。研究室が主催する初の国際学会である。これは、近年新たに発見され、次々と公開が進められている戦国時代の竹簡資料について、海外研究者20名をまじえ、2日間にわたって集中的に検討したもので、シンポジウムの概要を、新たに開設した「戦国楚簡研究会」HP (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/sokankenkyukai/>) に速報として掲載し、またシンポジウムの全容および関係論考を、『中国研究集刊』第36号(2004年12月刊)の特集として掲載を予定している。また、これが機縁となり、台湾大学との大学院生レベルの研究交流が開始されることとなった。2005年2月に台湾大学で開催予定の国際学会に研究室の大学院生4名が招待されている。

⑥課題と要望……本研究室は、本業の中国哲学の教育・研究に加えて、上記のような懐徳堂関係事業を長年担ってきている。それは、懐徳堂文庫の主要部分が漢籍資料(中国の儒教関係を初めとする古典)であったことによるもので、このことは、教育・研究の大きな推進力になっているとも言える。しかし一方では、わずかな人員で構成されている中国哲学研究室の大きな負担になっているのも事実である。2004年度からは、人員削減により助手ポストがなくなったことも、それに拍車をかけている。中国哲学研究室は、長年、優に二つの研究室分の活動を推進してきている。大阪大学が、懐徳堂を大学の源流の一つとして標榜し、社会貢献の窓口として重視するのであれば、懐徳堂関係事業については、恒常的な全学的支援体制(人員と予算)を確立すべきであろう。

Ⅲ. 教員の研究活動(2002年度～2003年度の過去2年間)

1. 湯浅 邦弘 教授

1957年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学)(大阪大学、1997年)。北海道教育大学講師、島根大学助教授、大阪大学助教授を経て、2000年4月現職。専攻：中国哲学／中国古代思想史／懐徳堂研究。

1-1. 論文

湯浅邦弘「懐徳堂文庫貴重資料解題」2001年度～2003年度科学研究費補助金基盤研究(A)(2)研究成果報告書「デジタルコンテンツとしての懐徳堂研究」(研究代表者下條真司)、課題番号13309011, pp. 10-87, 2004/3

湯浅邦弘「郭店楚簡『魯穆公問子思』積文」2000年度～2003年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書「戦国楚系文字資料の研究」(研究代表者竹田健二)、課題番号12410004, pp. 243-349, 2004/3

湯浅邦弘「懐徳堂に見るアーカイブの展開」『Network』29, 全国歴史資料保存利用機関協議会近畿部会会報, pp. 6-7, 2004/2

湯浅邦弘「展示室を飛び出した『懐徳堂』——大阪大学懐徳堂センターの活動——」『懐徳堂センター報』2004, pp. 33-48, 2004/2

湯浅邦弘「大阪大学総合学術博物館設立記念展レポート」『大阪大学総合学術博物館年報2002』pp. 81-84, 2003/12

戦国楚簡研究会(湯浅邦弘)「戦国楚簡研究の現在」『新出土資料と中国思想史』(『中国研究集刊』別冊特集号), pp. 1-81, 2003/6

湯浅邦弘「懐徳堂文庫デジタルコンテンツの展開——古典籍資料の電子情報化について——」『新しい漢字漢文教育』35, pp. 67-76, 2002/12

湯浅邦弘「二人の孫子——中国兵法の誕生——」『中国人物列伝』恒星出版, pp. 71-92, 2002/10

1-2. 著書

湯浅邦弘『よみがえる中国の兵法』大修館書店, 2003/6

湯浅邦弘『異文化接触からみた中国軍事思想史の研究』2000年度～2002年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書, 課題番号 12610015, 2003/3

湯浅邦弘『懐徳堂文庫の研究』(大阪大学大学院文学研究科共同研究報告書), 大阪大学大学院文学研究科, 2003/2

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

湯浅邦弘「『WEB 懐徳堂』主要コンテンツ紹介」2001年度～2003年度科学研究費補助金基盤研究(A)(2)研究成果報告書「デジタルコンテンツとしての懐徳堂研究」(研究代表者下條真司), 課題番号 13309011, pp. 7-9, 2004/3

湯浅邦弘「電子懐徳堂考の制作」『懐徳』72, pp. 88-90, 2004/1

湯浅邦弘「インターネットで学ぶ懐徳堂」『懐徳』71, pp. 94-96, 2003/1

湯浅邦弘「『孝』が道德の根源とされるのはなぜか」『しにか』2002年5月号, 大修館書店, pp. 24-28, 2002/5

1-4. 口頭発表

湯浅邦弘「江戸時代の天体模型——懐徳堂の知の宇宙——」大阪大学総合学術博物館第2回企画展, NHK 大阪アトリウム, 2003/10

湯浅邦弘「古典資料の電子情報化——懐徳堂文庫の場合——」全国漢文教育学会第18回(通算48回)大会, 盛岡大学, 2002/6

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

湯浅邦弘 大阪大学共通教育賞(2003年度前期), 大阪大学, 2003/12

大阪大学中国哲学研究室(湯浅邦弘) 蘆北賞(2003年度), (財)橋本循記念会, 2003/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本道教学会・理事	2004年度～現在
同上・評議員	2000年度～2003年度
懐徳堂記念会・運営委員幹事	2001年度～現在
懐徳堂研究会・代表	2000年度～現在
中国出土資料学会・理事	1999年度～現在

2. 辛 賢 講 師

1967年、ソウル生。2002年、筑波大学大学院哲学・思想研究科博士課程修了。博士(文学)。日本学術振興会外国人特別研究員(筑波大学)を経て、2004年4月現職。専攻：中国哲学、漢代易学。

2-1. 論文

辛賢「後漢易学の終章——鄭玄易学を中心に——」『東方学』107, pp. 20-34, 2004/1

辛賢「邵雍と宋代易学——『易経』の分経問題を中心に——」『富士ゼロックス小林節太郎記念基金2001年度研究助成論文』pp. 1-16, 2002/9

2-2. 著書

辛賢『漢易術数論研究——馬王堆から「太玄」まで——』汲古書院, 2002/12

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

辛賢「後漢易学の行方——鄭玄易学を中心に——」後漢経学研究会(第2回研究報告会, 於早稲田大学), 2002/12

辛賢「漢易における卦序構成と展開——馬王堆から太玄に至るまで——」道教文化研究会(2002年度6月例会, 於早稲田大学), 2002/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

辛賢 日本中国学会賞(哲学・思想部門), 日本中国学会, 2001/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-5 インド学・仏教学

はじめに、教育・研究活動の概要とその特色

教育活動としては、インド学仏教学研究の基礎となる原典を正しく理解する能力を養うために、サンスクリット語やパーリ語など古典インド諸語の文献を精密に読解する演習授業が中心となる。また、各学生が言葉と文献とを処理する能力を習得・応用する過程で、論理的思考力や批判的精神を養うことも目指している。

研究活動としては、インド学仏教学の文献学的研究に専心しており、その中でも初期の仏教文献やヴェーダ、ジャイナ教文献の研究が中心となっている。特色として、本専門分野ではインド学の一環として仏教学を位置づけ、仏教研究を広く当時のインド思想全体の視点から研究し、仏教以外のインド学を研究するものも仏教文献を積極的に活用していることが挙げられる。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 1 助教授 0 講師 1 助手 1

教授：榎本 文雄

講師：堂山 英次郎

助手：河崎 豊

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
7	5	4	0	0	0	1	0	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業生	大学院		博士号学位授与数	出身の研究者
		博士前期(M)修了者	博士後期(D)修了者		
'02	0	1	0	0	0
'03	0	0	0	1	0
小計	0	1	0	1	0

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	0	0	0
'03	1	0	1
計	1	0	1

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

河崎豊「白衣派ジャイナ教聖典に現れる在家信者に関する記述についての基礎的研究」2004/3

主査：榎本文雄 副査：肥塚隆、矢島道彦

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	2	0	0	0	0	2
'03	4	0	0	0	0	4
計	6	0	0	0	0	6

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	0	3	0	0	0	3
'03	0	3	0	0	0	3
計	0	6	0	0	0	6

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

河崎豊「Piṇḍolaga と古代インドの托鉢観」『印度学仏教学研究』51-1(通巻第101号), pp. 432-429, 2002/12

畑昌利「初期仏典における断滅論の諸相」『待兼山論叢(哲学篇)』(大阪大学文学会), 36, pp. 33-49, 2002/12

【2003年度】

生野昌範「布薩の意義について」『印度学仏教学研究』52-1(通巻第103号), pp. 312-310, 2003/12

大島智靖「Taittirīya-Saṃhitā 第7章とサーマヴェーダ所属ブラーフマナ」『待兼山論叢(哲学篇)』(大阪大学文学会), 37, pp. 1-18, 2003/12

大西啓一「化生の本義について——仏教における自然概念の一側面——」『日本仏教学会年報』68, pp. 35-51, 2003/05
畑昌利「六十二見に対する仏教の評価と Pāli 「梵網経」の主題」『印度学仏教学研究』52-1(通巻第 103 号), pp. 318-316,
2003/12

(2) 口頭発表

【2002 年度】

大西啓一「化生の本義について——仏教における自然概念の一側面——」2002 年度日本仏教学会学術大会, 日本仏教学会, 京都女子大学/京都府京都市, 2002/9/29

河崎豊「ジャイナ教と飲酒 白衣派聖典を中心に」ジャイナ教研究会第 17 回研究会, ジャイナ教研究会, 大谷大学/京都府京都市, 2002/10/5

河崎豊「Sūyagaḍa における Piṇḍolaga について」日本印度学仏教学会第 53 回学術大会, 日本印度学仏教学会, 東国大学校

／大韓民国ソウル市, 2002/7/6

【2003 年度】

生野昌範「布薩における種々なる罪の取り扱い方法——パーリ律を中心として——」佛教史学会例会, 佛教史学会, 龍谷大学/京都府京都市, 2004/1/17

生野昌範「ウパーサタに関する一考察」日本印度学仏教学会第 54 回学術大会, 日本印度学仏教学会, 大谷大学/京都府京都市, 2003/9/7

畑昌利「六十二見に対する仏教の評価について」日本印度学仏教学会第 54 回学術大会, 日本印度学仏教学会, 大谷大学/京都府京都市, 2003/9/7

(3) その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002 年度 PD: 0 名 DC2: 0 名 DC1: 0 名 (計 0 名)

2003 年度 PD: 0 名 DC2: 0 名 DC1: 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002 年度 学部: 0 名 大学院: 0 名 (計 0 名)

2003 年度 学部: 0 名 大学院: 0 名 (計 0 名)

6. 専門分野出身の研究者

(2002 年度～2003 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

河崎豊 博士後期課程単位修得退学, 大阪大学大学院文学研究科, 助手, 2003

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002 年度～2003 年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

なし

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1 名

10. 刊行物

なし

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

1998 年度より 4 ヶ月に 1 回「中央アジア学フォーラム」(阪大東洋史講座と共同で主催)

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去 2 年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

2002 年度～2003 年度の教育活動に関して、まず特筆すべきこととして、2002 年度に博士後期課程の大学院生が、課程博士取得のための予備論文を本専門分野で初めて提出し、審査の結果、合格の評価を受け、翌 2003 年度には COE 研究員として、これも本専門分野で初めて課程博士論文を提出し、学外の審査委員も含めた審査の結果、博士(文学)の学位を取得した。このことは、さらに、博士後期課程の大学院生の中に課程博士取得への意欲を高揚させている。現在所属している大学院生はみな研究に対する熱意と博士論文執筆に必要な能力とを秘めており、遠からず良い結果に結びつくものと期待できるが、組織としても、今後も後に続く大学院生が高レベルを維持した博士論文をコンスタントに提出できることを目指し、より効率的な教育上のシステム作りを絶えず模索する必要がある。

次に注目すべき点として、学生数の増加が挙げられる。数年前には研究室所属の全学生数を合計しても一桁の時代もあったが、2002 年度には全学生数が 11 名、翌 2003 年度には 14 名と毎年増加している。ただ、学生数の増加に比例して、留年や休学する学生も残念ながら現れており、これらの学生たちをどのようにサポートしていくかが、組織としての新たな課題となっている。

授業内容では、インド思想史概説の講義、普通演習としてパーリ語やサンスクリット語文献の輪読、論文作成演習でヴェーダ・初期仏教経典・戒律・アビダルマ・ジャイナ教・インド古典医学など巾広い分野の研究指導が行われた。さらに、助手によるヴェーダ文献やジャイナ教文献の学生との輪読もなされた。非常勤講師からは、各自が専門とするヴェーダ・ヒンドゥー教・ヴァイシェシカ哲学・中国仏教文献・古典チベット語など広範な分野の教育を受けた。いずれの場合においても、原典に基づいた厳密な文献学的手法が基礎とされており、学生に対して、かかる研究手法に習熟した上で自らの研究活動においても確実に行使するよう、教育の徹底化を図っている。一方で、原典読解のために必要な現代諸外国語(独・英・仏)運用能力や、論文読解力の訓練については、助手や高年次の大学院生を主体とした、外国語論文講読といった参加自由の勉強会により言わば自主的に賄われてきている。このことに現時点で特に問題があるわけではないが、今後より学生数が増加する可能性が強いことを考えると、学生の語学レベルや読解能力にかなりのばらつきが生じる可能性も懸念される。諸外国語文献講読を正規の授業として取り入れるなどして、学生の語学力を(強制的に)一定レベルに保つ工夫が今後は必要かと考えられる。

学外での社会教育活動として、2003 年度より当専門分野の教員が懐徳堂記念会の古典講座に年 10 回出講し、地域に密着した社会人向けの講義を行っている。

さらに、大学院生の中にも、請われて他大学へ非常勤講師として出講する者がいる。このような大学院生による教育活

動によって、彼ら自身の研究者・教育者としての能力向上につながる効果が期待されるのは勿論だが、それよりも、ともすれば研究室に籠り放して現実社会との接触が疎かになりがちな大学院生の、心身を含めた全人的な成長が、学外で教育活動に関わることにより促されるという点で、いっそう重要であると考えられる。

学外に開かれたという意味で付け加えるとすれば、2002年5月以来大学院生が中心となって運営している講座ホームページの存在がある。ホームページでは講座や研究内容の紹介といった、新入生へのイントロダクション的内容のみならず、各自が参加した学会の詳細なレポートなども含み、学術的に見ても高レベルの内容を保持している。掲示板では活発な情報交換がなされ、学術交流のためのサロンとして、一定の機能を果たしていると自負している。また大学の専門的な一講座が運営するホームページの理想的なあり方について、そのモデルケースの一つとなるべく努力している。

13-2 研究活動

研究活動の面でも2002年度～2003年度には新たな動きが幾つかあった。

まず、教員の各々が、科学研究費の取得に努めた結果、2002年度には若手研究(B)を、2003年度には基盤研究(C)を取得した。

次いで、2003年度に台湾から外国人客員研究員を受け入れ、研究室の教員・学生との学術交流を行うとともに、研究員による小規模な講演会を開催した。ただ、当初の予定では6月に来日するはずが、台湾でのSARS流行の影響で8月という夏休み中での受け入れとなったことは残念であったが、それを差し引いても、研究活動上極めて有意義な交流であったと信じる。他の研究領域にもれず、当該講座が扱う学問も極めてグローバルに学術動向が推移しており、積極的な海外との学術交流は必須と言って過言ではない。またそのような交流は教員のみならず学生に対しても重要な意味を持つことは言うまでもない。これまでも教員と個人的に交友のある海外研究者が研究室を訪れることがあったが、今後は海外の一線級の研究者を定期的に受け入れるようなシステムを構築し、制度として保障していくことが必要ではないかと思われる。

大学院生の研究発表としては、従来からの日本印度学仏教学会の大会における研究発表のみならず、日本仏教学会の大会やジャイナ教研究会、更には仏教史学会の例会での研究発表も行われたことが注目される。一方、教員の研究成果が2002年度～2003年度には減少した点で、一層の努力が必要である。

なお、2002年度には、韓国のソウルで開催された国際学会に当専門分野の教員と大学院生が参加し、大学院生は研究発表も行った。

Ⅲ. 教員の研究活動(2002年度～2003年度の過去2年間)

1. 櫻本文雄 教授

1954年生。京都大学文学部卒、京都大学大学院文学研究科博士課程指導認定退学。文学修士(京都大学)、博士(文学、京都大学)。京都大学助手、華頂短期大学専任講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て、1999年8月現職。専攻：インド仏教学。

1-1. 論文

櫻本文雄「『根本説一切有部』の登場」『神子上恵生教授頌寿記念論集：インド哲学佛教思想論集』永田文昌堂, pp. 651-677, 2004/3

Enomoto, Fumio, "The Extinction of *Karman* and *Prāyaścitta*", *Buddhist and Indian Studies in Honour of Professor Sodo Mori*, pp. 235-246, 2002/11

櫻本文雄「ヘルンレ写本中の『雑阿含』断片をめぐる」『櫻部建博士喜寿記念論集：初期仏教からアビダルマへ』平楽寺書店, pp. 139-153, 2002/5

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

榎本文雄「現存最古の仏教写本」『佛教大学総合仏教研究所報』22, pp. 26-29, 2002/6

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(C)、代表者：榎本文雄

課題番号：15520050

研究題目：初期仏教関係諸典籍の対応関係の研究

研究経費：2003年度直接経費 1,300千円

研究の目的：

ゴータマ・ブッダを中心とした初期仏教研究は、東南アジアに伝播した南方上座部の伝えたパーリ語経典が主な資料となるが、漢訳の阿含経典が量的にこの次に位置する。パーリ語仏典に示されたブッダの教説の内容には南方上座部独自の発展が含まれていると考えられるので、ブッダの直説に迫ろうとする時には他の部派の初期仏典との比較が不可欠である。諸部派の初期仏教文献を比較する対照表としては、赤沼智善『漢巴四部四阿含互照録』が70年以上も前に出版されている。しかし、この『漢巴四部四阿含互照録』はその名前からして漢訳阿含経典とパーリ語経典の対応が主体となっているため、特にチベット語資料などに遺漏が目立つ上に、当然のことながら以後に公表された諸インド語テキスト（主にサンスクリット断片）が収録されていない。また、経単位でなく、もっと小さな範囲、例えば韻文経典の場合は、各詩節ごとの対応関係も提示する必要がある。したがって、『漢巴四部四阿含互照録』は大幅な増広、むしろ根本的に作成し直す必要がある。そこで、本研究では、科学研究費の交付を希望する期限内で、この大部な『漢巴四部四阿含互照録』のできるだけ多くの部分を根本的に作成し直すことを目的とする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

東方学会・第29期評議員	2003年9月～2005年9月
仏教史学会・評議員	2003年11月～現在
インド思想史学会・理事	2003年4月～現在
パーリ学仏教文化学会・理事	1999年4月～現在
日本仏教学会・理事	1996年4月～現在
日本印度学仏教学会・理事	1996年4月～現在

2. 堂山 英次郎 講師

1972年生。大阪外国語大学外国語学部卒、東北大学大学院文学研究科博士後期3年の課程単位取得退学。文学修士(東北大学)、博士(文学、東北大学)。京都大学人文科学研究所助手を経て、2004年4月現職。

2-1. 論文

堂山英次郎「R̥gveda V 60, 6 —yaj の意味と格支配, Imperativ II -tāt の機能を中心に—」『印度学仏教学研究』52-2, pp. 61-65, pp. 894-890, 2004/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

堂山英次郎「R̥gveda V 60, 6」日本印度学仏教学会第 54 回学術大会, 2003/9

堂山英次郎「古代イランにおける社会組織の編成」京都大学人文科学研究所共同研究班「国家形成の比較研究」2003/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

3. 河崎 豊 助手

1975 年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程 2003 年単位修得退学。博士(文学)(大阪大学)。大阪大学助手、大阪大学文学部 COE 研究員を経て現職。専攻: インド学、初期ジャイナ教研究。

3-1. 論文

河崎豊「白衣派聖典における飲酒の諸相」『ジャイナ教研究』9, pp. 1-25, 2004/3

河崎豊「Piṇḍolaga と古代インドの托鉢観」『印度学仏教学研究』51-1, pp. 432-429, 2002/12

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

河崎豊「ジャイナ教と飲酒 白衣派聖典を中心に」ジャイナ教研究会第 17 回研究会, 2002/10

河崎豊「Sūyagada における piṇḍolaga について」日本印度学仏教学会第 53 回学術大会, 2002/9

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-6 日 本 学

はじめに、教育・研究活動の概要とその特色

日本学研究室の源流は、1974年の日本学専攻の開設にさかのぼるが、その後の組織改変を経て、近年は、ふたつの学問的特色を備えてきた。ひとつは、日本という地域の歴史や、文化、思想を孤立した特殊なもの、あるいは自明なものとしてみるのではなく、一国史・単一文化の枠を突破しようとする点である。

いまひとつは、既存のディシプリンをふまえて学際的な研究方法を意識的に追求する点である。この点については、教官・院生が所属し研究報告をおこなう学会の多様性に示されている。例をあげてみよう。日本民俗学会、日本民族学会、日本宗教学会、日本女性学研究会、日本思想史学会、日本社会学会、解放社会学会、女性史総合研究会、日本史研究会、日本移民学会、社会思想史学会、「女性・戦争・人権」学会、「宗教と社会」学会、口承文芸学会、近代女性史研究会、芸能史研究会、朝鮮史研究会、在日朝鮮人研究会、等々。

日本学研究室は、このような特色を生かすために、多彩なアプローチの掘り下げを促すとともに、それらの意識的な交錯を保障するような教育研究体制を組んでいる。とりわけ全教官が出席し、院生がタコソボ型の研究に陥らず、多分野の研究状況から刺激を得て論文を練り直す場としての「日本学研究方法論演習」は、日本学研究室の教育・研究活動を象徴的に表現するものである。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 3 助教授 2 講師 0 助手 1

教授：中村 生雄、川村 邦光、杉原 達

助教授：荻野 美穂、富山 一郎

助手：真鍋 昌賢

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
68	15	35	0	0	0	4	4	2

※うち留学生 13 名、社会人学生 7 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業生	大学院		博士号学位授与数	出身の研究者
		博士前期(M)修了者	博士後期(D)修了者		
'02	22	4	2	3	0
'03	19	9	2	2	0
小計	41	13	4	5	0

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	2	1	3
'03	2	0	2
計	4	1	5

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

- 才津祐美子 「世界遺産「白川郷」の近代——〈民なるもの〉の「文化遺産」化をめぐる言説と実践の諸相——」2004/3
主査：川村邦光 副査：中村生雄、杉原達、小松和彦(国際日本文化研究センター)
- 平野敬和 「帝国の政治思想」2003/3
主査：杉原達 副査：中村生雄、富山一郎
- ボクホベン・ヨルン 「日本における葬送儀礼と仏壇の意義」2003/3
主査：中村生雄 副査：川村邦光、荻野美穂
- 森宣雄 「戦後沖縄—奄美—日本の解放運動／思想——潜在—遍在する沖縄戦後史の時代経験——」2003/9
主査：富山一郎 副査：杉原達、川村邦光、崎山正毅(立命館大学)

【論文博士】

- 中村春作 「日本における「国民国家」の発現と「儒学知」の変容」2002/12
主査：中村生雄 副査：杉原達、川村邦光、辻本雅史(京都大学)

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	5	9	4	1	8	27
'03	9	8	1	1	5	24
計	14	17	5	2	13	51

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	0	14	17	0	2	33
'03	1	5	11	0	4	21
計	1	19	28	0	6	54

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)単行本・論文

【2002年度】

浅川晃広「明治前期の帰化許可者——「特別の詮議」による帰化をめぐる——」『移民研究年報』（日本移民学会），9，pp. 135-154, 2003/3

浅川晃広「近代日本の帰化許可者」『日本学報』（大阪大学大学院文学研究科日本学研究室），22，pp. 55-68, 2003/3

伊賀みどり「母乳育児の文化再考——忘れられた「乳揉みさん」」『日本民俗学』（日本民俗学会），232，pp. 51-69, 2002/11

石附馨「ヤマトウンチュ嫁試論——現代沖縄の“生活者たち”を考えるために——」『日本民俗学』（日本民俗学会），231，pp. 67-96, 2002/8

伊藤遊「考現学で民俗学するという——今和次郎・路上観察研究会・野外活動研究会の「〈日常生活〉研究」作法——」『語りと実践の文化、そして批評』（大阪大学大学院文学研究科日本学川村研究室），pp. 139-178, 2003/3

岩屋さおり「近代の石見銀山——大森鉱山時代の経営・労働・生活——」『石見銀山 研究論文篇』（思文閣出版），pp. 165-183, 2002/12

植野真澄「白衣募金者一掃運動に見る傷痍軍人の戦後」『日本学報』（大阪大学大学院文学研究科日本学講座），22，pp. 95-116, 2003/3

植野真澄「戦後日本の傷痍軍人」『戦死者をめぐる宗教・文化に関する研究』（大阪大学大学院文学研究科日本学講座），pp. 213-326, 2003/3

喜多村理子「元兵士と戦後世代の溝」『岡山の記憶』（岡山・十五年戦争センター），5，2003/3

金容菊「柳宗悦と朝鮮芸術論」『日本学報』（大阪大学大学院文学研究科日本学講座），22，pp. 21-43, 2003/3

金容菊「朝鮮民画と柳宗悦」『inori』（生活美学研究会），2，pp. 1-26, 2002/12

金城正樹「倒錯する民衆への眼差しと現代性——清田政信における民衆記述の行為遂行性とその諸問題——」『大転換期——「60年代」の光芒 文学史を読みかえる⑥』（インパクト出版会），pp. 322-347, 2003/1

崔博憲「マイノリティが開発と遭遇ということ——「もう、開発は腹いっぱい」を考えるための序論として——」『待兼山論叢 日本学篇』（大阪大学大学院文学研究科），36，pp. 1-25, 2002/12

芝原三裕「昭和初期の〈放火事件〉に関する一考察——民俗的思考を通して——」『語りと実践の文化、そして批評』（大阪大学大学院文学研究科日本学川村研究室），pp. 83-113, 2003/3

全成坤「一九三〇年代植民地支配と崔南善——崔南善の「不成文化論」から「満蒙文化」にみられる「檀君」再編理論——」『語りと実践の文化、そして批評』（大阪大学大学院文学研究科日本学川村研究室），pp. 203-274, 2003/3

全成坤「朝鮮ナショナリズムをたどる——親日と反日の狭間」『女性・戦争・人権』（行路社），5，pp. 90-125, 2002/12

全成坤「崔南善における檀君神話の発見と親日派の再解釈」『日本学報』（大阪大学文学研究科日本学研究室），21，pp. 33-56, 2002/4

高原幸子「女性の自己決定とエンタイトルメント概念」『国立女性教育会館研究紀要』（国立女性教育会館），6，pp. 59-68, 2002/10

中村平「台湾高地・植民地侵略戦争をめぐる歴史の解釈-1910年のタイヤル族「ガオガン蕃討伐」は「仲良くする」(sblag)か」『日本学報』（大阪大学文学研究科日本学研究室），22，pp. 45-67, 2003/3

花森重行「歴史に抗する“歴史”へ-堀田善衛の上海体験と「第三世界」」『日本学報』（大阪大学文学研究科日本学研究室），

22, pp. 69-94, 2003/3

花森重行「軍談・講釈師が知らない歴史——久米邦武における近代歴史学の構築とメディアの関係——」『新しい歴史学のために』(京都民科歴史部会), 248, pp. 1-15, 2003/2

花森重行「歴史地理学という場の崩壊——柳田国男・高木敏雄の久米邦武批判から見えるもの」『日本思想史研究会会報』(日本思想史研究会), 20, pp. 352-361, 2003/1

兵頭晶子「久米事件という分水嶺——明治期における神道非宗教論の交錯とその行方——」『日本思想史研究会会報』(日本思想史研究会), 20, pp. 362-371, 2003/1

藤本純子「<男性同士>という快楽——「ボーイズラブ」の性的表現をめぐる一考察」『語りと実践の文化、そして批評』(大阪大学大学院文学研究科日本学川村研究室), pp. 179-202, 2003/3

本多彩「シアトルのボンオドリ——日系アメリカ人と仏教会——」『アジア遊学』(勉誠出版会), 39, pp. 88-97, 2002/5

丸山泰明「八甲田山雪中行軍遭難事件と靖国神社合祀のフォークロア」『戦死者をめぐる宗教・文化に関する研究』(大阪大学大学院文学研究科日本学講座), pp. 149-168, 2003/3

水野守「「越境」とナショナリズム——一八八九年条約改正問題における政教社の思想——」『日本学報』(大阪大学文学研究科日本学研究室), 22, pp. 39-54, 2003/3

【2003年度】

浅川晃広「オーストラリアにおける憲法改正問題 その政治的理念をめぐる」『オーストラリア研究』(オーストラリア学会), 16, pp. 54-70, 2004/3

浅川晃広『在日外国人と帰化制度』(単行本), 新幹社, p. 202, 2003/9

浅川晃広「オーストラリアの移民政策と不法入国者問題『パンフィック・ソリューション』を中心に」『外務省調査月報』2003-1, pp. 1-32, 2003/8

伊賀みどり「婦人雑誌にみる出産方法および出産観の変容——『主婦之友』創刊号から1960年代までを題材に——」『日本学報』(大阪大学大学院文学研究科日本学研究室), 23, pp. 89-113, 2004/3

石川浩士「「生命操作」技術と自らを「分析」する身体——医学＝人類学者・清野謙次を事例として——」『日本学報』(大阪大学大学院文学研究科日本学研究室), 23, pp. 23-40, 2004/3

伊藤遊「大学ポップ化計画」[表智との共同執筆]『マンガ研究』(日本マンガ学会), pp. 140-148, 2003/11

魏仙芳「現代日本における喫茶をめぐる一考察——茶飲料を中心として——」『日本学報』(大阪大学大学院文学研究科日本学研究室), 23, pp. 41-63, 2004/3

金容菊「柳宗悦と朝鮮と民芸論——悲愛美論から朝鮮芸術観への新たな可能性——」『日本学報』(大阪大学大学院文学研究科日本学研究室), 23, pp. 1-22, 2004/3

小山有子「中原淳一の女性像——あなたがもっと美しくなるために——」『女性学年報』(日本女性学研究会), 24, pp. 41-60, 2003/11

中村平「マラホーから頭目へ」『日本台湾学会報』(日本台湾学会), 5, pp. 65-86, 2003/5

中本剛二「患者はいかにして遺体となるのか——病院における死をめぐる論争を中心に——」『比較日本文化研究』(比較日本文化研究会), 7, pp. 119-141, 2003/5

畑中小百合「学校教育とパフォーマンス——明治・大正期の学校劇をめぐる論争を中心に」『比較日本文化研究』(比較日本文化研究会), 7, pp. 84-118, 2003/5

花森重行「古代を語ることは可能か」『日本学報』(大阪大学大学院文学研究科日本学研究室), 23, pp. 57-65, 2004/3

花森重行「藤田省三における歴史の発見——「天皇制国家の支配原理」から『維新の精神』へ——」『現代思想』(青土社), 32-2, pp. 158-173, 2004/1

林葉子「日清戦争前後の『家庭雑誌』——英雄伝を物語る母／膨張する国家」『民友社とその時代——思想・文学・ジャーナリズム集団の軌跡』(ミネルヴァ書房), pp. 369-385, 2003/12

兵頭晶子「「精神」をめぐる相剋——大正期の『変態心理』と大本教を中心に——」『日本近代学』(韓国日本近代学会), 7, pp. 313-332, 2003/12

兵頭晶子「戦死者という表象——戦後日本という時空間における——」『戦死者のゆくえ——語りと表象から』(青弓社), pp.

64-81, 2003/11

兵頭晶子「喜田貞吉における「憑物」問題をめぐる再検討——「患者筋」の発見と「憑物筋」への眼差し——」『日本思想史研究会会報』(日本思想史研究会), 21, pp. 33-47, 2003/11

兵頭晶子「〈もの憑き〉を語る儒医——近世日本における医家の自己規定とその諸相」『日本思想史学』(日本思想史学会), 35, pp. 151-168, 2003/9

廣岡浄進「部落民にとって〈わたし〉を語る言葉とは——『INTERVIEW「部落出身」——12人の今、そしてここから——』に寄せて——」『日本学報』(文学研究科日本学研究室), 23, pp. 75-88, 2004/3

廣岡浄進「在満朝鮮人の『皇国臣民』言説——総力戦下の満洲国協和会を中心に——」『朝鮮史研究会論文集』(朝鮮史研究会), 41, pp. 119-143, 2003/10

藤本純子「「ボーイズラブ」小説の変化と現在——角川ルビー文庫<1992~1995・2000~2003>作品の比較分析から——」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 37, pp. 19-52, 2003/12

丸山泰明「八甲田山雪中行軍遭難事件と「勇士」の表象——ある兵士の写真と銃をめぐって——」『日本学報』(大阪大学文学研究科日本学研究室), 23, pp. 67-88, 2004/3

丸山泰明「八甲田山雪中行軍遭難事件と靖国神社合祀のフォークロア」『戦死者のゆくえ』(青弓社), pp. 139-172, 2003/11

(2)口頭発表

【2002年度】

浅川晃広「近代日本の帰化許可者」2002年度第1回日本学方法論の会「越境の中の近現代日本」大阪大学大学院文学研究科日本学講座, 大阪大学/大阪府豊中市, 2002/6/14

伊賀みどり「ある開業助産婦の語りにもみる出産観」日本女性学研究会近代女性史分科会, 日本女性学研究会, ウィングス京都, 2003/2/7

伊賀みどり「母乳育児と「乳揉み」——『主婦之友』(創刊号から1960年まで)を題材に——」日本女性学研究会近代女性史分科会, 日本女性学研究会, ウィングス京都/京都府京都市, 2002/10/19

伊賀みどり「母乳育児の文化再考——忘れられた「乳揉みさん」——(その2)」日本民俗学会第54回年会, 日本民俗学会, つくば国際会議場/茨城県つくば市, 2002/10/6

伊賀みどり「出産・母乳哺育の変容——開業助産婦からの聞き書きを中心に——」日本民族学会第36回研究大会, 日本民族学会, 金沢大学/石川県金沢市, 2002/6/2

伊藤遊「考現学で民俗学するという事——「野外活動研究会」の活動から——」日本民俗学会第54回年会, 日本民俗学会, つくば国際会議場/茨城県つくば市, 2002/10/6

伊藤遊「上野俊哉・毛利嘉孝『カルチュラル・スタディーズ』書評——ジャパニーズヒップホップから——」2002年度第2回日本学方法論の会, 大阪大学文学研究科日本学講座, 大阪大学待兼山会館/大阪府豊中市, 2002/7/19

岩屋さおり「炭鉱と鉱夫の結びつきについて——炭鉱事故の事例から——」日本女性学研究会近代女性史分科会, 日本女性学研究会, ウィングス京都/京都府京都市, 2003/1/18

岩屋さおり「性暴力のない組織づくりを考える体験学習プログラム」日本体験学習研究会全国大会, 日本体験学習研究会, 南山大学/愛知県名古屋市, 2002/11/24

植野真澄「戦後日本の傷痍軍人——対傷痍軍人施策の変遷と戦後意識の諸相——」日本史研究会サマーセミナー, 日本史研究会, 近江八幡国民休暇村/滋賀県近江八幡市, 2002/8/26

植野真澄「戦後日本の傷痍軍人——白衣募金者としての傷痍軍人——」宗教と社会学会プロジェクト「戦死者のゆくえ」研究会, 大阪大学大学院文学研究科日本学講座及び宗教と社会学会, 大阪大学待兼山会館/大阪府豊中市, 2002/4/8

金容菊「韓国人による柳宗悦の朝鮮芸術論の概観」21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」日本文学国際研究集会「日本文学の魅力」大阪大学文学研究科, 大阪国際会議場, 2003/3/16

芝原三裕「上野俊哉・毛利嘉孝『カルチュラル・スタディーズ』書評——料理を素材としたアイデアの提示——」2002年度第2回日本学方法論の会, 大阪大学文学研究科本学講座, 大阪大学待兼山会館/大阪府豊中市, 2002/7/19

高原幸子「女性の自己決定とエンタイトルメント概念」国立女性教育会館紀要入選論文報告会, 国立女性教育会館, 国立

- 女性教育会館／埼玉県比企郡嵐山町, 2002/8/24
- 中村平「マラホーから頭目へ——台湾タイヤル族エヘン社の日本植民地経験——」京都人類学研究会例会, 京都人類学研究会, 京都大学／京都府京都市, 2003/1/16
- 中村平「マラホーから頭目へ——台湾タイヤル族エヘン社の日本植民地経験——」日本台湾学会第4回学術大会, 日本台湾学会, 名古屋国際会議場／愛知県名古屋市, 2002/6/8
- 花森重行「上原専祿における歴史と主体の変容」日本思想史研究会例会, 日本思想史研究会, 立命館大学／京都府京都市, 2002/12/12
- 花森重行「「談・講釈師」が知らない歴史——久米邦武における近代歴史学の構築とメディアとの関係——」京都民科歴史部会例会, 京都民科歴史部会, 京都薬科大学／京都府京都市, 2002/10/19
- 花森重行「歴史の消費される場——柳田国男・高木敏雄の久米邦武批判をめぐって——」日本思想史研究会前期例会, 日本思想史研究会, 立命館大学／京都府京都市, 2002/6/20
- 林葉子「「国民史」とジェンダ——久布白落実の作品をめぐって——」日本女性学研究会近代女性史分科会, 日本女性学研究会, ウイングス京都／京都府京都市, 2002/9/7
- 林葉子「「国民史」とジェンダ——久布白落実の作品をめぐって——」キリスト教社会問題研究会, 同志社大学人文科学研究共同研究班, 同志社大学／京都府京都市, 2002/6/21
- 兵頭晶子「精神病の日本近代——「監護」の成立と「憑物」問題——」日本民族学会近畿地区研究懇談会, 平成14年度修士論文発表会, 日本民族学会, 京都大学京大会館／京都府京都市, 2003/3/15
- 兵頭晶子「「憑物」問題の成立をめぐる再検討——明治・大正期における家と家筋についての一試論——」日本思想史研究会修論検討会, 日本思想史研究会, 立命館大学／京都府京都市, 2002/11/3
- 兵頭晶子「「もの憑き」の日本近代——明治・大正期における治病行為をめぐる相克——」日本思想史研究会夏合宿, 日本思想史研究会, しあわせの村／兵庫県神戸市, 2002/9/9
- 兵頭晶子「久米事件という分水嶺——「神道」と「神道家」をめぐる位相——」日本思想史研究会前期例会, 日本思想史研究会, 立命館大学／京都府京都市, 2002/6/20
- 兵頭晶子「「もの憑き」の日本近代——明治期精神医学をめぐる再検討——」日本経済思想史研究会第13回全国大会, 日本経済思想史研究会, 慶應義塾大学三田キャンパス／東京都港区, 2002/6/8
- 廣岡浄進「満州国治外法権撤廃(1936・1937年)と朝鮮人民会——在満朝鮮人と日本帝国——」「領事館警察の研究」研究会, 京都大学人文科学研究所「領事館警察の研究」共同研究班, 京都大学人文科学研究所／京都府京都市, 2002/6/19
- 藤本純子「そして、女が「男×男」を愛する時」京都人類学研究会12月例会, 京都人類学研究会, 京都大学／京都府京都市, 2002/12/14
- 本多彩「アメリカのエスニック・ブディズム——仏教会をめぐる視点——」2002年度第3回関西移民研究会, 関西移民研究会, 同志社大学今出川キャンパス, 2003/3/22
- 本多彩「エスニックチャーチの現在——アメリカ仏教会の課題——」日本移民学会第12回年次大会, 日本移民学会, 京都女子大学／京都府京都市, 2002/12/8
- 丸山泰明「雪中行軍遭難事件の靖国神社社祀論を読む」宗教と社会学会プロジェクト「戦死者のゆくえ」研究会, 大阪大学大学院文学研究科, 日本学講座及び宗教と社会学会, 大阪大学待兼山会館／大阪府豊中市, 2003/2/22
- 丸山泰明「雪中行軍遭難事件と死者の記憶」宗教と社会学会プロジェクト「戦死者のゆくえ」研究会, 大阪大学大学院文学研究科, 日本学講座及び宗教と社会学会, 大阪大学待兼山会館／大阪府豊中市, 2002/12/14
- 水野守「越境と明治ナショナリズム——内地雑居と移民への視線——」2002年度第1回日本学方法論の会「越境の中の近現代日本」, 大阪大学大学院文学研究科日本学講座, 大阪大学／大阪府豊中市, 2002/6/14
- 【2003年度】**
- 伊賀みどり「ある開業助産婦のライフヒストリーにみる出産観と受胎調節観——変わりゆく医療技術と人口政策の中で——」第37回研究大会, 日本民族学会, 京都文教大学, 2003/5/24
- 伊藤遊「日常生活研究の「経験」と「表現」——考現学と民俗学をめぐって——」2003年度第4回日本学方法論の会, 大阪大学文学研究科日本学講座, 大阪大学, 2004/3/19

- 伊藤遊「柳田国男と今和次郎の考現学」柳田国男の会第9回年会, 柳田国男の会, 京都外語大, 2003/6/21
- 植野真澄「援護法案審議の中の傷痍軍人」同時代史学会, 立教大学, 2004/3/6
- 植野真澄「占領下日本の傷痍軍人問題」日本史研究会, 京都・機関紙会館, 2003/10/30
- 植野真澄「占領下日本の平和運動と傷痍軍人」現代日本思想史研究会, 東京, 2003/9/6
- 川越道子「戦争の記憶」と歴史の痕跡に関する一考察, 大阪大学 COE シンポジウム, ハノイ, 2003/9/1
- 魏仙芳「茶飲料の増大——宣伝の分析から」京のお茶研究会, キャンパスプラザ京都, 2004/2/8
- 魏仙芳「現代日本における喫茶をめぐる一考察——茶飲料を中心として——」COE ワークショップ: イメージとしての
〈日本〉, 大阪大学, 2003/9/28
- 金容菊「近代日本のなかの民芸思想」2003年度第4回日本学方法論の会, 大阪大学文学研究科日本学講座, 大阪大学,
2004/3/19
- 小山有子「明治後期の衣服改良運動に関する一考察——婦人雑誌言説を中心に——」日本家政学会関西支部大会, 日本家
政学会, 大阪市立大学, 2003/11/1
- 畑中小百合「『農民文学』と『農民演劇』」2003年度第4回日本学方法論の会, 大阪大学文学研究科日本学講座, 大阪大
学, 2004/3/19
- 花森重行「大東亜の夢の続き——竹内好の中国像をめぐる——」日本思想史研究会例会, 日本思想史研究会, 立命館大
学, 2003/10/16
- 花森重行「戦後のアジア認識と植民地・外地体験の変容——梅棹忠夫と堀田善衛をめぐる——」COE ワークショップ:
イメージとしての日本, 大阪大学, 2003/9/29
- 花森重行「記号としての沖縄——霜多正次『沖縄島』への江藤淳の批判をめぐる——」日本思想史研究会例会, 日本思
想史研究会, 立命館大学, 2003/7/17
- 花森重行「戦後の国民文化言説と中国認識——竹内好と堀田善衛をめぐる——」日本史研究会, 日本史研究会機関誌会
館, 2003/5/18
- 兵頭晶子「『精神』をめぐる相剋——大正期日本における『変態心理』と大本教を中心に——」宗教社会学の会定例会, 宗
教社会学の会, 大阪大学, 2004/1/24
- 兵頭晶子「喜田貞吉における『憑物』問題をめぐる再検討——『患者筋』の発見と『憑物筋』への眼差し——」2003年
度日本思想史学会大会, 日本思想史学会, 筑波大学, 2003/10/19
- 兵頭晶子「『精神』をめぐる相剋——大正期の大本教と鎮魂帰神法を中心に——」2003年度日韓人文学連合国際学術大会,
韓国・東西大学校, 2003/5/24
- 兵頭晶子「〈憑く〉身体はどこへ行くのか——憑依と漂泊的宗教者の日本近代——」日本思想史研究会新入生歓迎講演会,
立命館大学, 2003/4/10
- 廣岡浄進「間島の領事館警察と『親日団体』朝鮮人民会——1920年代を中心に——」共同研究「領事館警察の研究」, 京
都大学人文科学研究所, 2003/11/5

(3)その他(書評・翻訳など)

【2002年度】

- 伊賀みどり「生活・生業」(解説)『日本女性史研究文献目録Ⅳ』(東京大学出版会), pp. 349-350, 2003/3/1
- 伊賀みどり「通過儀礼」(解説)『日本女性史研究文献目録Ⅳ』(東京大学出版会), pp. 353-356, 2003/3/1
- 伊賀みどり「母乳育児の文化と『乳揉み』——『主婦之友』創刊号から1960年までを題材に——」(研究ノート)『日本
学報』(大阪大学大学院文学研究科日本学講座), 22, pp. 117-141, 2003/3/1
- 石附馨「二つの6.23——沖縄戦十三年忌と三十三年忌の新聞に見る沖縄戦の記憶への一考察——」(研究ノート)『戦死
者をめぐる宗教・文化に関する研究』(大阪大学大学院文学研究科日本学講座), pp. 337-353, 2003/3/1
- イトウユウ(伊藤遊)「孤独の『現場』者——ナンシー関方法論研究序説——」(評論)『KAWADE 夢ムック 文藝別冊[トリ
ビュート特集]ナンシー関』(河出書房新社), pp. 150-152, 2003/2/1
- 岩屋さおり(共著)『石見銀山 年表・編年資料綱目篇』(資料図書), 思文閣出版, p. 320, 2002/12/1

- 岩屋さおり「世界に輝け石見銀山第3部」(新聞記事)『読売新聞』(読売新聞社島根版), 島根2面, 2002/9/11
- 岩屋さおり(共著)『石見銀山 石見銀山関係編年資料綱目篇』(資料図書), 島根県教育委員会, p. 164, 2002/3/1
- 岩屋さおり(共著)『石見銀山 (改訂版)石見銀山関係歴史年表——1334年～1710年——』(資料図書), 島根県教育委員会, p. 147, 2002/3/1
- 全成坤「崔南善資料」(編訳・解説)『語りと実践の文化、そして批評』(大阪大学大学院文学研究科日本学川村研究室), pp. 275-346, 2003/3/1
- 高原幸子「支援の思想に向けて——アジア子ども基金の活動から——」(研究ノート)『日本学報』(大阪大学文学研究科日本学研究室), 22, pp. 69-86, 2003/3/1
- 兵頭晶子「戦死者という表象」(書評)『戦死者をめぐる宗教・文化に関する研究』(大阪大学大学院文学研究科日本学講座), pp. 75-85, 2003/3/1
- 兵頭晶子「「もの憑き」をめぐる近世——民俗的への眼差しとその位相——」(報告要旨)『日本史研究』(日本史研究会), 477, pp. 90-91, 2002/5/1
- 廣岡浄進「書評『部落の歴史 前近代』」『ヒューマン・ライツ』(部落解放・人権研究所), 177, pp. 74-75, 2002/12/1
- 廣岡浄進「満州国と朝鮮人『親日派』——『民族協和』、『内鮮一体』、『治安肅正』——」(報告要旨)『朝鮮史研究会会報』(朝鮮史研究会), 148, pp. 10-12, 2002/6/30
- 森宣雄「帝国史の趨勢とその地下にある夢と覚醒——富山一郎著『暴力の予感』と伊波普猷における「妖術者のワンド」の予感——」(書評)『日本学報』(大阪大学文学研究科日本学研究室), 22, pp. 87-106, 2003/3/1

【2003年度】

- 花森重行「林喜望『笹森儀助の軌跡 境界からの告発』」(新刊紹介)『日本史研究』(日本史研究会), 496, pp. 77-78, 2003/12
- 兵頭晶子「磯前順一著『近代日本の宗教言説とその系譜——宗教・国家・神道——』」(書評)『日本思想史研究会会報』(日本思想史研究会), 21, pp. 92-97, 2003/11

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD: 2名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計3名)

2003年度 PD: 1名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計2名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部: 0名 大学院: 2名 (計2名)

2003年度 学部: 1名 大学院: 1名 (計2名)

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度～2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002年度～2003年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 5 名

2002年度: 2名 2003年度: 3名

<内訳> ジャーナリスト 2名 高等学校教員 1名 その他 2名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

1人

9. 外国人研究者の受け入れ状況

1人

10. 刊行物

2002年度 『日本学報』22号

2003年度 『日本学報』23号、『語りと実践の文化、そして批評』

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

2003年3月まで(2000年5月から)

「戦死者のゆくえ研究会」(「宗教と社会」学会のプロジェクトとして)

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

- 2003年度第4回日本学方法論の会(担当:真鍋昌賢) 於:大阪大学 2004年3月19日
「民俗芸術」再考——「生活」と「芸術」の相克:1920~30年代——
発表者:真鍋昌賢、伊藤遊、金容菊、畑中小百合
コメンテータ:姜竣 川村清志
- 2003年度第3回日本学方法論の会(担当:川村邦光) 於:大阪大学 2003年12月20日
「「引揚げ」をめぐる言説と力学」
発表者:成田龍一
コメンテータ:伊藤遊、植野真澄
- 2003年度第2回日本学方法論の会(担当:中村生雄) 於:大阪大学 2003年9月20日
「<古代>の表象」
発表者:品田悦一、三浦佑之、大山誠一、
コメンテータ:中村生雄、花森重行
- 2003年度第1回日本学方法論の会(担当:富山一郎・真鍋昌賢) 於:大阪国際会議場 2003年5月26日
「それぞれのマンガ体験、それぞれの語りの位置——マンガの語り方・国際比較研究——」
パネラー:ロジャー・サビン、イェンス・バルツァー、マルク・ベルナベ、吉村和真、伊藤遊
コーディネータ:ジャクリーヌ・ベルント
総合司会:伊藤公雄
- 2002年度第3回日本学方法論の会(担当:川村邦光) 2002年12月13日
「第11回戦死者のゆくえ研究会」
発表者:川村邦光、丸山泰明
- 2002年度第2回日本学方法論の会(担当:富山一郎・真鍋昌賢) 2002年7月19日
「拠点としての日常、日常批判の身ぶり——カルチュラル・スタディーズの理論・実践をめぐると対話——」
発表者:真鍋昌賢、伊藤遊、芝原三裕
コメンテータ:毛利嘉孝、上野俊哉
- 2002年度第1回日本学方法論の会(担当:杉原達) 2002年6月14日
「越境の中の近現代日本」
発表者:貴堂嘉之、松田京子、川上郁雄、浅川晃広、水野守

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

日本学研究室の特徴である学際的な研究方法の実践の場としての「日本学研究方法論演習」は、関連分野の研究状況に機敏に反応しつつ問題発見的な研究スタイルを習得するという当初の目標に向け、確実に成果をあげている。とくに2002年度から、報告者は事前にホームページ上に提出原稿をアップしておき、参加者は当日までにそれを熟読しておいたうえで授業にのぞむことを義務化している。この方式により、授業時間の大部分をコメンテーターのコメントを含めた全体的討論に当てることができ、問題意識の共有と論点の明確化に大きく寄与している。当然そのことは、学会での研究発表や学会誌への研究論文の投稿という院生にとって重要な目的に直結するものとなっている。

また、外部からの講師を招いて定期的に行なう「日本学方法論の会」も、院生の研究の幅をひろげる貴重な機会として定着してきた。とくにそこで取りあげられた研究テーマを『日本学報』の特集ページと連動させることによって、院生参加者の研究成果を発表する場が確保されている。

そのほか、各種の奨学金、助成金を得て欧米やアジア各地に研究・調査に向かう院生も少なくないし、さまざまなバックグラウンドをもった海外からの留学生も途切れることがなく、院生との多様で有益な交流が行なわれている。

また、21世紀COEプログラム関連のシンポジウム、ワークショップ、研究会にたいしても、多くの院生の参加が見られる。

13-2 研究活動

研究室所属教員の研究活動は、学会活動ばかりでなく種々の研究プロジェクトへの参加においても盛んであり、発表する著書・論文の点数も多い。また科学研究費の獲得状況においても、基盤研究(B)(C)でそれぞれ複数の採用があり、定例的な研究会の開催、それにもとづく研究論集の刊行、国際学会への参加や海外調査もふくめ、種々の成果をあげている。

院生の研究活動としては、学術振興会特別研究員の複数の採用があるほか、国内は言うまでもなく国外の学会・研究会への参加と研究発表も少なくない。

Ⅲ. 教員の研究活動(2002年度～2003年度の過去2年間)

1. 中村 生雄 教授

1946年生。1969年京都大学文学部卒業、1979年法政大学大学院人文科学研究科修士課程修了。文学修士。1989年静岡県立大学国際関係学部助教授、1994年同教授、1996年大阪大学文学部教授。専攻：日本思想史／比較宗教学。

1-1. 論文

中村生雄「〈古代〉の表象——喜田貞吉の古代史研究と東北——」『日本学報』23, pp. 1-15, 2004/3

中村生雄「戦死者の慰霊/追悼はどうあるべきか?」『戦死者のゆくえ』青弓社, pp. 259-269, 2003/11

中村生雄「喜田貞吉の民族史論と『日鮮同祖論』」『東北学』9, pp. 120-131, 2003/10

中村生雄「喜田貞吉の見た日本仏教」『日本仏教総合研究』1, pp. 27-43, 2003/5

中村生雄「現代人は人肉食(カニバリズム)から何を讀みとればいいのか?」『東北学』8, pp. 294-309, 2003/4

中村生雄「『殺す文化/食べる文化』再考」『京都宗教哲学研究』20, pp. 84-92, 2003/3

1-2. 著書

赤坂憲雄, 中村生雄, 原田信男, 三浦佑之『いくつもの日本』7, 岩波書店, 2003/3

赤坂憲雄, 中村生雄, 原田信男, 三浦佑之『いくつもの日本』1, 岩波書店, 2002/10

中村生雄, 江川温『死の文化誌』昭和堂, 2002/10

中村生雄『王権と儀礼』岩波書店, 2002/7

中村生雄『王権と神祇』思文閣出版, 2002/6

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中村生雄「東国教団における『悪人』たち」『禅と念仏』16, pp. 70-73, 2004/2

中村生雄「日本の仏教にとって肉食妻帯とは何だったのか(4)」『寺門興隆』61, pp. 98-105, 2003/12

中村生雄「日本の仏教にとって肉食妻帯とは何だったのか(3)」『寺門興隆』60, pp. 98-104, 2003/11

中村生雄「日本の仏教にとって肉食妻帯とは何だったのか(2)」『寺門興隆』59, pp. 99-105, 2003/10

中村生雄「『速』と『即』——日本宗教における簡略化/速成化の志向——」『環』15, pp. 192-197, 2003/10

中村生雄「日本の仏教にとって肉食妻帯とは何だったのか(1)」『寺門興隆』58, pp. 80-87, 2003/9

中村生雄「たぶの杜と父子墓のこと」『火の群れ』86, pp. 12-13, 2003/7

中村生雄「肉食妻帯」『日本仏教 34 の鍵』春秋社, pp. 258-265, 2003/5

中村生雄「靖国問題とお盆」『東北学』7, pp. 383-389, 2002/10

中村生雄「『女性天皇』論が問うもの」『東北学』6, pp. 353-359, 2002/4

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴 (年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況 (研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本思想史学会・評議員	2002年10月～現在
日本仏教総合研究学会・評議員	2002年2月～現在
アジア民族文化学会・運営委員	2001年5月～現在
日本宗教学会・理事	1998年9月～現在

2. 川村 邦光 教授

1950年生。東北大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学 1984年、文学修士(東北大学)1978年。天理大学文学部助教授、同教授を経て、1997年10月現職。専攻：民俗学/宗教学。

2-1. 論文

川村邦光「家族の<性生活>の創出——『性生活の知恵』をめぐって」『恋愛と性愛』2002/11

2-2. 著書

川村邦光『オトメの行方』紀伊國屋書店, 2003/12

川村邦光編『戦死者のゆくえ』青弓社, 2003/11

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

川村邦光「国家的祝祭と宗教」日本宗教学会, 2003/9

川村邦光「宗教と祭祀をめぐって」科研「宗教とモダニティ」2002/9

川村邦光「靖国の女をめぐって」日本宗教学会, 2002/9

川村邦光「戦争と民俗学」国際日本文化研究センター・北米シンポジウム「日本人の価値・規範意識とヒストリオグラフィ」2002/6

2-5. 受賞歴 (年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況 (研究代表者となったもの)

2-6-1. 2003年度、基盤研究(B)(2)、代表者：川村邦光

課題番号：15320013

研究題目：近代日本における宗教と国家・ナショナリズムをめぐる総合的研究

研究経費：2003年度 3,700千円

研究の目的：

本研究では、近代日本における、宗教と国家との関係を研究することを目的とする。国家の宗教政策が国民の信仰生活に対してどのような影響を及ぼしたのか、宗教がナショナリズムの形成においてどのように関与したのかが、2つの大きなテーマである。

今年度の研究課題は「国家神道体制」概念を検討し、それが国民の宗教生活をどのように組織化していったのかを、戦前・戦中における政府の神社政策、地域の神社や靖国神社・護国神社の動向を調査していくなかから明らかにしていくことである。

特に今年度は、昭和15年(1940)に举行された紀元2600年式典との関わりで、各地で行なわれた紀元2600年を記念する宗教的事業を文献研究を踏まえて現地調査し、宗教がナショナリズムの形成においてどのような役割を果たしたのかを明らかにすることを目的としたい。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日本宗教学会 評議員

1999年9月～現在

3. 杉原 達 教授

1953年生。1975年京都大学経済学部卒業、1977年大阪市立大学大学院経済学研究科前期博士課程修了。博士(経済学)。1977年関西大学経済学部助手、1981年同専任講師、1984年同助教授、1991年同教授、1992年大阪大学文学部助教授、1997年同教授、1998年大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：日本学/文化交流史。

3-1. 論文

杉原達「記憶のゆくえ」川村邦光編『戦死者のゆくえ——語りと表象から』pp. 252-258, 2003/11

杉原達「帝国との向き合いかた——中国人強制連行研究を通じて」『歴史学研究』776, pp. 54-64, 2003/6

杉原達「越境考——『越境の中の近現代日本』特集にあたって」『日本学報』22, pp. 1-6, 2003/3

3-2. 著書

杉原達『中国人強制連行』岩波書店, 2002/5

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

杉原達, 谷富夫編『民族関係における結合と分離——社会的メカニズムを解明する——』『部落解放研究』154, pp. 84-87, 2003/10

3-4. 口頭発表

杉原達「日本与亜州的交会——従文化交流史来論述——」国立政治大学(台湾)外国語学院学術演講会, 2004/3

杉原達「コメント」東京外国語大学海外事情研究所主催・国際シンポジウム「東アジアの「戦後」を問う 第二部 植民地主義の継続とジェンダー」2004/1

杉原達「帝国の痕跡をめぐって」思想史・文化理論研究会第122回例会, 2004/1

杉原達「暴力の中の越境／生活の中の越境——大阪の場から考える——」国立民族学博物館地域研究企画交流センター第9回国際シンポジウム「北東アジアの新世紀」(報告要旨, pp. 7-8, pp. 35-37, pp. 65-67, 2003/11), 2003/11

杉原達「帝国との向き合いかた——中国人強制連行研究を通じて——」第77回現代思想研究会, 2003/1

杉原達「越境の中の夢、暴力としての越境——〈帝国意識〉を考える——」愛知教育大学歴史学会大会, 2002/11

3-5. 受賞歴 (年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況 (研究代表者となったもの)

3-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(C)(2)、代表者：杉原達

課題番号：15520401

研究題目：戦時期日本の中国人強制連行に関する歴史的研究

研究経費：2003年度 700千円

研究の目的：

本研究の目的は、第二次世界大戦期に行われた中国人強制連行に関して、その主要な産業である土木建築業については秋田県花岡と広島県安野、港湾荷役業については大阪港・新潟港・神戸港・七尾港・伏木港、そして炭鉱業については長崎県高島・端島・崎戸を、それぞれ主要な調査地として設定し、その全体像を歴史的に検討するところにある。

近年、中国人強制連行については、日本やアメリカで訴訟が提起される中、社会的注目を集めてきた。しかし、(1)連行時の中国での実態、(2)連行後の労働・居住実態、(3)帰国後の生活実態、(4)日本で死亡したり、帰国できなかった中国人の遺骨や行方の実態、(5)中国人強制連行の政策立案・展開過程、のそれぞれの具体的側面については、まだまだ学問的に明らかになっていないといえない。

申請者は、これまでの研究成果について杉原(2002)で一応のまとめを行なったが、それは一般書の制約を免れていない。そこでその成果をふまえた上で、上記5課題について、新たな聞き取り調査と更なる文献資料調査に基づいて総合的な学術研究を試みようとするものである。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

4. 荻野 美穂 助教授

1945年生。神戸女学院大学文学部卒業。奈良女子大学大学院博士課程中退。人文科学博士(お茶の水女子大学)。奈良女子大学文学部、京都文教大学人間学部助教授を経て2000年より現職。専攻：女性史／ジェンダー論。

4-1. 論文

荻野美穂「反転した国策：家族計画運動の展開と帰結」『思想』955, pp. 175-195, 2003/11

荻野美穂「先端生殖技術とフェミニズムのディレンマ」『死生学』（東京大学大学院人文社会系研究科），秋号, pp. 172-182, 2003/11

荻野美穂「歴史の言説と身体論の現在」竹村和子編『ポスト・フェミニズム』作品社, pp. 49-53, 2003/8

荻野美穂「墮胎・間引きから水子供養まで：日本の中絶文化をめぐって」赤坂憲雄・中村生雄他編『いくつもの日本IV 女の領域・男の領域』岩波書店, pp. 225-251, 2003/2

荻野美穂「戦後家族計画史のためのノート」『待兼山論叢』（大阪大学文学会）, 36, pp. 19-29, 2003/2

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

荻野美穂「性別という役割」『Interface Humanities』（大阪大学 21 世紀 COE）, 3, pp. 18-19, 2004/3

荻野美穂「ジョン・W・スコット」竹村和子編『ポスト・フェミニズム』作品社, p. 178, 2003/8

荻野美穂「産児調節ゆかりの地、京都：山本宣治と太田典礼」西川祐子他編『フィールドワークの方法京都論』昭和堂, p. 165, 2003/3

荻野美穂「ジェンダー」「セクシャル・ハラスメント」「フェミニズム」尾形勇他編『歴史学事典』10, 弘文堂, pp. 272-274, pp. 361-362, pp. 517-518, 2003/2

荻野美穂「コラム・からだ」森永康子編『はじめてのジェンダー・スタディーズ』北大路書房, pp. 160-161, 2003/2

荻野美穂訳, ジョン・W・スコット著「反響するフェミニズム：危機の時代におけるフェミニスト・ポリティクス」『思想』942, pp. 22-45, 2002/10

荻野美穂「ジョン・W・スコット『ジェンダーと歴史学』」江原由美子, 金井淑子編『フェミニズムの名著 50』平凡社, pp. 367-375, 2002/8

荻野美穂「月経」「マーガレット・サンガー」「ジェンダー史」「助産士問題」「初潮」「身体」井上輝子他編『女性学事典』岩波書店, p. 108, p. 158, p. 167, p. 205, p. 252, pp. 260-261, 2002/6

4-4. 口頭発表

荻野美穂「「家族計画」の時代」生命の比較社会史研究会, 2004/3

荻野美穂「戦後家族計画運動は何をもたらしたか」近代女性史研究会, 2004/3

荻野美穂「戦後日本の家族計画の軌跡」国立社会保障・人口問題研究所, 2004/2

荻野美穂「コメント」お茶の水女子大学 COE シンポジウム「ジェンダー研究の理論と表象分析のいま」2003/11

荻野美穂「先端生殖技術とフェミニズムのディレンマ」東京大学 21 世紀 COE プログラム・シンポジウム「生命のはじまりと死生学」2003/6

荻野美穂「家族計画の政治学」国立民族学博物館「世界における「白人」の構造化」研究会, 2003/6

荻野美穂「家族計画の政治学」トータルヒストリー研究会, 2003/3

4-5. 受賞歴（年度を限定しない）

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況（研究代表者となったもの）

4-6-1. 2002 年度～2004 年度、基盤研究(C)(2)、代表者：荻野美穂

課題番号：14594006

研究題目：戦後世界における家族計画とジェンダーの史的研究

研究経費：2002年度 1,000千円

2003年度 600千円

研究の目的：

本研究の目的は次の3点にある。

- 1) 第二次世界大戦後の日本および国際的環境における家族計画推進の歴史的過程を明らかにする。
- 2) 日本における家族計画の成功が、どのように他の国々、とりわけ開発途上国における家族計画の導入と実施に関連していたかを追究する。
- 3) 日本および途上国における家族計画の導入と普及が、出産および否認や中絶などの生殖コントロールの一番の当事者である女性に対してどのような意味を持ち、いかなる変化をもたらしたかを、ジェンダーと権力関係の視点から分析する。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

5. 冨山 一郎 助教授

1957年生。1989年京都大学大学院農学研究科博士課程修了。農学博士。1989年～1997年まで神戸市外国語大学助教授、その後現職。専攻：歴史学／文化理論。

5-1. 論文

冨山一郎「自由と救済から何を感知するのか」『法社会学』日本法社会学会編, 60, pp. 90-100, 2004/3

冨山一郎「世界市場に夢想される帝国」豊見山和行編『日本の時代史 18 琉球・沖縄史の世界』吉川弘文館, pp. 267-288, 2003/11

Tomiyama, Ichiro, 'The "Japanese" of Micronesia', Ronald Y. Nakasone (ed.), *Okinawan Diaspora*, University of Hawaii Press, pp.57-70, 2002

冨山一郎「対抗と廻行」(中国語)『中外文学』(台湾大学), 31-7, pp. 33-62, 2002/12

冨山一郎「国境」小森陽一他編『近代日本の文化史』4, 岩波書店, pp. 207-231, 2002/2

冨山一郎「ファノン『黒い皮膚、白い仮面』」大澤真幸編『ナショナリズムの名著 50』平凡社, pp. 121-132, 2002/1

5-2. 著書

冨山一郎『戦場の記憶』(ハングル), 移山出版, p. 303, 2002

冨山一郎『暴力の予感——伊波普猷における危機の問題』岩波書店, p. 366, 2002/6

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

冨山一郎「米軍基地と沖縄」『ひゅーまん らいと』(部落解放・人権政策確立要求京都府実行委員会ニュース), 214, 2003/12/1

冨山一郎「戦争に抗する力」(第6回「21世紀の平和を考えるセミナー」講演録), 大阪国際平和センター, 2003/11

冨山一郎「伊波普猷を読むということ」『InterCommunication』NTT出版, 46, pp. 58-59, 2003/10

冨山一郎「大学受験資格——連絡組織の立ち上げが急務——」『朝鮮新報』2003/6/13

冨山一郎「沖縄」『グローバル化を読み解く 88のキーワード』平凡社, 2003/4

冨山一郎「対談『戦場の記憶』について」(金哲氏と)(ハングル)『當代批評』(ソウル), 21, pp. 408-423, 2003/4

冨山一郎「イラク攻撃を沖縄から考える」『毎日新聞』2003/4/4

富山一郎「帝国の人種主義」竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う』（京都大学人文科学研究所国際シンポジウム・国際人類学民族学会議 2002 年京都シンポジウム報告書），pp. 187-195, 2003/3

富山一郎「鼎談『暴力と非暴力の間』（酒井隆史、太田昌国と）『インパクション』インパクト出版会，132, pp. 6-30, 2002/9

富山一郎「東アジアの中で『ノン』と言う根拠に向けて」『インパクション』インパクト出版会，132, pp. 100-110, 2002/9

5-4. 口頭発表

富山一郎「米軍基地と沖縄」京都人権文化講座，2003/9

富山一郎「沖縄戦の記憶」日本平和学会大会，那覇，2003/6

富山一郎「戦争に抗する力」21 世紀の平和を考えるセミナー，大阪国際平和センター，大阪，2003/6

富山一郎「自由と救済から何を感知するか」日本法社会学会大会，東京，2003/5

富山一郎「書評『複数の沖縄』」複数文化研究会，京都，2003/4

富山一郎「帝国の人種主義」京都大学人文科学研究所国際シンポジウム・国際人類学民族学会議 2002 年京都シンポジウム、「人種概念の普遍性を問う」京都，2002/9

富山一郎「帝国日本の人種および人種主義」国際人類学会，東京，2002/9

富山一郎「東アジアにおける暴力と記憶」（コーディネイター），国際文化研究シンポジウム、カルチュラルスタディーズの新しい地平，東京，2002/6

5-5. 受賞歴（年度を限定しない）

富山一郎 地域農林経済学会賞(奨励賞)，於愛媛大学，1991/11/2

富山一郎 農業史研究会賞，於東京大学，1988/3/31

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況（研究代表者となったもの）

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

5-7-1. トヨタ財団 2003 年度研究助成「トランスナショナル・トランスディシiplinaryな『アジアの知』の自立的形成と蓄積を促進し支援する、出版 NPO の立ち上げのためのネットワーク構築」代表小島潔、研究分担者として参加。

5-7-2. 21 世紀 COE プログラム分担

5-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

6. 真鍋 昌賢 助手

1969 年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。文学博士。国際日本文化研究センター中核的研究機関研究員を経て 2002 年現職。専攻：民俗学／メディア文化論。

6-1. 論文

真鍋昌賢「経験としての『民俗芸術』——認識を構造化する仕掛けとしての『雑誌』」『日本思想史研究会会報』21, pp. 5-17, 2003/11

真鍋昌賢「商家の暮らし」『新修 豊中市史(民俗)』7, 豊中市, pp. 367-403, 2003/3

小池淳一, 真鍋昌賢「口承文芸」小松和彦, 関一敏編『新しい民俗学へ』せりか書房, pp. 252-265, 2002/11

真鍋昌賢「人生儀礼」『新しい民俗学へ』せりか書房, pp. 63-74, 2002/11

真鍋昌賢「語りの力をめぐる批評の分析にむけて——民科芸術部会における浪曲批判を中心として——」時田アリソン・

薦田治子編『日文研叢書第26集 日本の語り物——口頭性・構造・意義——』国際日本文化研究センター, pp. 299-311, 2002/10

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

真鍋昌賢「第三巻解説」(『天下無敵 剣舞術』, 『学校家庭 新しい縄跳び遊戯』, 『国民学校体練科 相撲教材の指導』)

上笙一郎編『叢書 日本の児童遊戯』第三巻クレス出版, pp. 1-6(解説), 2004/2

真鍋昌賢「うなる身体／うけとめる身体——浪花節の聴衆を求めて」『Interface Humanities』01, 「インターフェイスの人文学」研究開発委員会, pp. 30-31, 2003/3

6-4. 口頭発表

真鍋昌賢「『民俗芸術』再考にむけて——認識を構造化する仕掛けとしての雑誌——」日本思想史研究会秋季発表会, 2003/9

真鍋昌賢「継ぐこと・伝えること 21 浪曲」京都芸術センター伝統芸術創造プログラム, 2003/4

小松和彦, 山田奨治, 中山和久, 真鍋昌賢「民俗学とデータベース——怪異・妖怪伝承データベースを中心として——」日本民俗学会第54回年会, 2002/10

真鍋昌賢「動員体制下における『教育』手段としての紙芝居」子ども社会学会第9回学会大会, 2002/6

6-5. 受賞歴 (年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況 (研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-7 日本史学

はじめに。教育・研究活動の概要とその特色

日本史学専門分野では、学部生・大学院生に対する教育および研究活動の基本を、(イ)日本史学を研究するにあたっての基礎的な能力の習得、(ロ)精緻な実証をふまえた独創的な研究能力の育成、(ハ)時代・分野の枠にとらわれない、柔軟かつ幅広い歴史的思考力の獲得、(ニ)フィールドワークや古文書調査等、実地調査能力の習得、(ホ)プレゼンテーション能力の育成、に置いている。

(イ)では、特に各時代(古代・中世・近世・近代)で開講されている史料講読演習によって、史料解釈能力や古文書解読能力の育成に努めている。(ロ)では、卒論演習や大学院ゼミ、また修士論文作成演習・博士論文作成演習などの場におけるきめ細かな指導により、論文作成能力の向上を図っている。(ハ)に関しては、年1回、学界の第一人者といわれる研究者に研究発表をしていただく場を日本史研究室として設けているほか、特に大学院生に対しては、学会運営に積極的に携わる中で、柔軟かつ幅広い歴史的思考力を身につけるよう指導している。(ニ)については、毎年恒例の新入生歓迎小旅行や研究室旅行で、現地見学・現地調査を実施しているほか、近世古文書演習において古文書調査合宿を行っている。(ホ)については、毎年7月に院生報告会、10月に卒論・修論報告会を開催し、4年生・院生が日本史研究室構成員全員の前で研究発表を行う機会を設けている。

以上のほか、日本史学専門分野では、学会において、教員と院生がともに委員として学会運営や研究活動を行う機会が多く、本専門分野の特色のひとつをなしている。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 4 助教授 0 講師 0 助手 1

教授：猪飼 隆明、梅村 喬、平 雅行、村田 路人

助手：北泊 謙太郎

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
49	12	24	1	0	3	5	3	1

※うち留学生 6 名、社会人学生 3 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業生	大学院		博士号学位授与数	出身の研究者
		博士前期(M)修了者	博士後期(D)修了者		
'02	17	9	2	3	0
'03	15	6	2	3	0
小計	32	15	4	6	0

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	1	2	3
'03	2	1	3
計	3	3	6

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

顛原善徳 「日清・日露戦争の世界史的位置——日本の国家形成と世界秩序の変容——」 2003/12

主査：猪飼隆明 副査：村田路人、原田敬一(佛教大学)

野村玄 「日本近世国家の確立と天皇」 2004/3

主査：村田路人 副査：猪飼隆明、平雅行

真木隆行 「中世の真言宗僧団と王権」 2003/1

主査：平雅行 副査：梅村喬、村田路人

【論文博士】

川岡 勉 「室町幕府と守護権力」 2004/2

主査：平雅行 副査：村田路人、馬田綾子(梅花女子大学)

桑原恵 「幕末・維新时期における国学思想の研究」 2003/1

主査：猪飼隆明 副査：村田路人、平雅行

中川すがね 「近世大坂の金融機能」 2003/1

主査：村田路人 副査：猪飼隆明、平雅行

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	4	0	0	1	1	6
'03	6	1	1	0	1	9
計	10	1	1	1	2	15

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	0	25	7	2	1	35
'03	0	22	13	0	5	40
計	0	47	20	2	6	75

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

大田壮一郎「起源論という視座」『日本思想史研究会会報』20, 日本思想史研究会, pp. 106-113, 2003/1

加藤宏文「大阪の中世・近世をどのように展示するか——大阪歴史博物館の展示から——」『ヒストリア』182, 大阪歴史学会, pp. 22-27, 2002/11

高島正憲『伴林氏神社史料』フォーラム・A, 2002/5(※遠藤慶太・福島幸宏と共編)

野村玄「寛永期における後水尾天皇の政治的位置」『日本史研究』484, 日本史研究会, pp. 29-53, 2002/12

野村玄「寛文期の『叡慮』と江戸幕府」『ヒストリア』182, 大阪歴史学会, pp. 85-112, 2002/11

馬部隆弘「城郭支配政策からみた戦国期毛利氏の権力構造」村田修三編『新視点 中世城郭研究論集』新人物往来社, pp. 87-128, 2002/8

【2003年度】

大田壮一郎「室町殿の宗教構想と武家祈禱」『ヒストリア』188, 大阪歴史学会, pp. 60-90, 2004/1

串山まゆら「初期議會期における品川弥二郎と本願寺派役僧」『日本宗教文化史研究』7-1(通巻第13号), 日本宗教文化史学会, pp. 51-69, 2003/5

佐伯徳哉『石見銀山街道 輛ヶ浦道・温泉津沖泊道調査報告書』島根県教育庁文化財課世界遺産登録推進室, pp. 47-65, pp. 189-192, 2004/3(※藤岡大拙等と共編)

佐伯徳哉「「出雲大社并神郷図」は何を語るか」『日本歴史』662, 日本歴史学会, pp. 42-56, 2003/7

杉本弘幸「日本近代都市社会事業行政の成立——京都市社会課を中心として——」『待兼山論叢(史学編)』37, 大阪大学文学部, pp. 25-50, 2003/12

野村玄「近世前期の公家高官任官過程とその特質」『史学雑誌』112-8, 史学会, pp. 34-54, 2003/8

野村玄「近世天皇葬送儀礼確立の政治史的意義——後光明天皇葬送儀礼の検討を中心に——」大石学編『近世国家の権力構造——政治・支配・行政——』岩田書院, pp. 51-83, 2003/5

馬部隆弘「戦国期毛利領国における『塀隔子』の構造と役割」『中世城郭研究』17, 中世城郭研究会, pp. 158-173, 2003/7

吉田洋子「江戸時代における朝廷の存在形態と役割——「禁中并公家中諸法度」の規定から——」『日本史研究』495, 日本史研究会, pp. 1-28, 2003/11

(2)口頭発表

【2002年度】

- 飯沼雅行「朝鮮通信使・琉球使節の綱引役について——綱引組合を中心に——」交通史研究会大会, 交通史研究会, 国士館大学/東京都世田谷区, 2002/5/12
- 伊藤健一「初期府県制研究の問題点について」桃山学院大学国際文化学会, 桃山学院大学国際文化学会, 桃山学院大学/大阪府和泉市, 2002/6/26
- 大井喜代「古代刑罰裁定について——8・9世紀を中心に——」続日本紀研究会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪/大阪府大阪市, 2003/2/21
- 大田壮一郎「室町殿の宗教構想と武家祈禱体制」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習センター/大阪府大阪市, 2003/3/1
- 大田壮一郎「初期本願寺と青蓮院門跡」仏教史学会例会, 仏教史学会, 花園大学/京都府京都市, 2002/9/28
- 太田光俊「論評:水林彪「近世天皇制研究についての一考察」、高埜利彦「江戸幕府の朝廷支配」「水林・高埜論文のコメント」」大阪歴史科学協議会前近代史部会, 大阪歴史科学協議会, 梅田東市民学習センター/大阪府大阪市, 2002/4/19
- 加藤宏文「萩藩領における目明しと地域支配の展開」大阪歴史学会近世史部会, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム/大阪府大阪市, 2003/1/31
- 串山まゆら「国民協会と西本願寺の交流について」日本宗教文化史学会大会, 日本宗教文化史学会, 2002/11/30
- 串山まゆら(※島田克彦, 森下徹との共同報告)「論評:末廣昭「アジア開発独裁論」、小此木政夫「分断国家の二つの国家戦略」、平川均「NIESの経済発展と国家」、萩原宜之「アジアの民主化と経済発展」」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 大阪歴史科学協議会, 桃山学院大学本町オフィス/大阪府大阪市, 2002/5/7
- 小杉真之「藤田覚報告へのコメント」大阪歴史科学協議会1月例会, 大阪歴史科学協議会, 東淀川勤労者センター/大阪府大阪市, 2003/1/25
- 小杉真之「書評:藤田覚『幕末の天皇』」大阪歴史科学協議会前近代史部会・帝国主義研究部会合同部会, 大阪歴史科学協議会, 大阪市立城北市民学習センター/大阪府大阪市, 2002/12/12
- 杉本弘幸「1940年代の都市社会政策と〈社会的マイノリティ〉——京都市社会行政と部落解放運動・在日朝鮮人運動——」朝鮮史研究会関西部会例会, 朝鮮史研究会, 河合塾セレスト/大阪府大阪市, 2002/12/21
- 杉本弘幸「書評:富山一郎著『暴力の予感』に関するコメント」日本史研究会近現代史部会・歴史学研究会近代史部会合同部会, 日本史研究会・歴史学研究会, 機関紙会館5階大会議室/京都府京都市, 2002/11/25
- 杉本弘幸「大会共同研究報告・報告者(見城悌治氏)業績検討会」日本史研究会近現代史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2002/7/21
- 杉本弘幸「『近代日本と水平社』とそのゆくえ」(財)世界人権問題研究センター第2部近現代研究班例会, (財)世界人権問題研究センター第2部近現代研究班例会, (財)世界人権問題研究センター/京都府京都市, 2002/5/27
- 高島正憲「戦時下労働力問題に関する一考察——農業労働力問題を中心として——」日本史研究会近代史部会・大阪歴史学会近代史部会・大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会共催合同修論報告会, 日本史研究会・大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2002/4/27
- 田村正孝「中世後期の一宮と地域——信濃国一宮諏訪社を中心に——」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 大阪市立中央青年センター/大阪府大阪市, 2002/10/18
- 徳久彰「輪読:『日本後紀』大同3年7月丙申~同3年8月乙丑条」続日本紀研究会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪/大阪府大阪市, 2002/10/4
- 徳久彰「輪読:『日本後紀』大同3年7月丙申~同3年8月乙丑条」続日本紀研究会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪/大阪府大阪市, 2002/9/20
- 徳久彰「輪読:『日本後紀』大同3年7月丙申~同3年8月乙丑条」続日本紀研究会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪/大阪府大阪市, 2002/7/5
- 徳久彰「八世紀におけるイネの穀化と収納」日本史研究会古代史部会・続日本紀研究会合同卒業論文報告会, 日本史研究会・続日本紀研究会, 呉竹文化センター/京都府京都市, 2002/5/26

- 額田政男「9～10世紀における国郡支配と官人秩序」日本史研究会古代史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2003/3/17
- 額田政男「8～10世紀における国郡支配と官人秩序」続日本紀研究会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪/大阪府大阪市, 2002/11/15
- 野村玄, 吉田洋子, 武田和也の共同研究報告『後桜町天皇宸記』宝暦13年9月15日条～同年同月20日条 翻刻および参考資料」後桜町女帝宸記研究会, 後桜町女帝宸記研究会, 京都産業大学第3研究室棟3階会議室/京都府京都市, 2003/3/18
- 野村玄, 吉田洋子, 武田和也の共同研究報告『後桜町天皇宸記』宝暦13年9月1日条 翻刻および参考資料」後桜町女帝宸記研究会, 後桜町女帝宸記研究会, 京都産業大学第3研究室棟3階会議室/京都府京都市, 2002/10/15
- 野村玄「近世朝幕関係史研究と織豊政権論——三鬼清一郎氏の関連業績を手がかりに——」大阪歴史科学協議会前近代史部会, 大阪歴史科学協議会, 東淀川勤労者センター/大阪府大阪市, 2002/4/9
- 橋本孝成「近世の中西家とその活動」守口市文化財講座, 守口市教育委員会・守口市文化財研究会共催, 守口文化センター/大阪府守口市, 2003/3/11
- 橋本孝成「大塩平八郎の学問と思想」守口市文化財講座, 守口市教育委員会・守口市文化財研究会共催, 守口文化センター/大阪府守口市, 2002/9/24
- 松永和浩「南北朝期朝廷の年中行事と幕府」日本史研究会中世史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2003/3/11
- 松永和浩『勘仲記』紙背文書804「年号勘文」の翻刻『勘仲記』裏文書の会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/2/8
- 松永和浩「海津一朗「中世の国家権力と悪党」内容紹介」第18回歴史学入門講座実行委員会, クレオ大阪西/大阪府大阪市, 2002/4/23
- 松永和浩「三鬼清一郎「戦国・近世初期の天皇・朝廷をめぐる」へのコメント」大阪歴史科学協議会前近代史部会, 大阪歴史科学協議会, 東淀川勤労者センター/大阪府大阪市, 2002/4/9
- 馬部隆弘「戦国期毛利領国における『塀隔子』の構造と役割」城郭談話会, 城郭談話会, アピオ大阪/大阪府大阪市, 2002/11/2
- 馬部隆弘「戦国期毛利氏の領国支配における『検使』の役割」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 大阪市立中央青年センター/大阪府大阪市, 2002/10/18
- 吉田洋子「慶長期における徳川家康の国家構想と朝廷」日本史研究会近世史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2002/4/22
- 【2003年度】**
- 飯沼雅行「淀川右岸中流域の綱引役と綱引組合——幕府広域役実現をめぐる地域・個別領主・幕府——」大阪歴史学会近世史部会, 大阪歴史学会, 東淀川勤労者センター/大阪府大阪市, 2003/9/19
- 上田長生「幕末維新期の陵墓管理の基礎的考察」奈良陵墓研究会, 奈良陵墓研究会, 橿原考古学研究所附属博物館/奈良県橿原市, 2004/1/10
- 上田長生「維新論・近代移行期論」第42回近世史サマーセミナー分科会「維新論・近代移行期論」班, 第42回近世史サマーセミナー, 琵琶湖コンファレンスセンター/滋賀県彦根市, 2003/7/19
- 江副陽子「近世中後期畿内村落における紛争処理の特質——吟味筋に関わる諸事例の検討から——」日本近代法制史研究会例会, 日本近代法制史研究会, 大阪大学法学研究科/大阪府豊中市, 2004/1/9
- 大井喜代「古代における明法官人の役割——8・9世紀を中心に——」第31回古代史サマーセミナー, 古代史サマーセミナー実行委員会, ホテルニューわかさ/奈良県奈良市, 2003/8/26
- 大井喜代「古代における法家の活動」続日本紀研究会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪/大阪府大阪市, 2003/7/18
- 大井喜代「9～11世紀の刑罰裁定について」日本史研究会古代史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2003/4/21
- 大田壮一郎「本願寺と青蓮院門跡」大阪真宗史研究会, 大阪真宗史研究会, 難波会館/大阪府大阪市, 2004/2/4
- 大田壮一郎「室町殿の宗教構想と武家祈祷体制」大阪歴史学会2003年度大会報告, 大阪歴史学会, 大阪大学/大阪府豊

- 中市, 2003/6/29
- 太田壯一郎「室町殿の宗教構想と武家祈禱体制」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2003/5/30
- 太田光俊, 天野忠幸, 寺口千尋の共同報告「小谷利明著『畿内戦国期守護と地域社会』をめぐって」大阪歴史学会中世史部会・近世史サマーフォーラム共催, 大阪歴史学会・近世史サマーフォーラム, 大阪市立総合生涯学習センター／大阪府大阪市, 2003/9/20
- 太田光俊「天満寺内町期の本願寺構成員」寺内町研究会例会, 寺内町研究会, 願泉寺会館／大阪府貝塚市, 2003/9/14
- 太田光俊「大坂退城後の本願寺勢力」織豊期研究会第34回報告会, 織豊期研究会, 愛知県中小企業センター／愛知県名古屋市, 2003/6/17
- 大根田康介「顕密体制論と禅宗史研究——原田正俊氏の業績によせて——」大阪歴史科学協議会3月例会, 大阪歴史科学協議会, 東淀川勤労者センター／大阪府大阪市, 2004/3/13
- 大根田康介「顕密体制論をめぐる諸研究」大阪歴史科学協議会前近代史部会, 大阪歴史科学協議会, 東淀川勤労者センター／大阪府大阪市, 2004/2/6
- 小杉真之「幕末期の天皇の政治的地位の変動について」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 大阪歴史科学協議会, 大阪市立弁天町市民学習センター／大阪府大阪市, 2003/6/20
- 杉本弘幸「大会共同研究報告 委員反省」日本史研究会近現代史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2003/12/13
- 杉本弘幸「日本近代都市社会行政機構の成立過程——京都市社会行政を事例に——」(財)世界人権問題研究センター 第2部近現代研究班例会, (財)世界人権問題研究センター／京都府京都市, 2003/6/21
- 徳久彰「クラの管理からみた古代地方支配の実相」続日本紀研究会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪／大阪府大阪市, 2004/3/5
- 西岡山奈仁子「政党内閣期の『輔弼』構造——田中義一内閣と浜口雄幸内閣の比較から——」日本史研究会近現代史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2003/9/23
- 西川真樹子「論評: 羽賀祥二「祖先への回帰と顕彰の論理」、羽賀祥二著『史蹟論』(名古屋大学出版会、1998年)所収」第20回歴史学入門講座実行委員会, 第20回歴史学入門講座実行委員会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2004/3/15
- 西川真樹子「論評: ブルース・バートン「世界システム論から見た前近代日本」、ブルース・バートン著『日本の「境界」』(青木書店、2000年)所収」第19回歴史学入門講座実行委員会, 第19回歴史学入門講座実行委員会, 大阪市立北市民教養ルーム／大阪府大阪市, 2003/4/11
- 西嶋加耶子「室町時代における北野社の変容」日本史研究会・大阪歴史学会中世史部会合同卒業論文報告会, 日本史研究会・大阪歴史学会, 機関紙会館5階大会議室／京都府京都市, 2003/5/18
- 額田政男「日本古代の家族法に関する一試論——大宝・養老律令間における異同を中心として——」続日本紀研究会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪／大阪府大阪市, 2004/2/6
- 額田政男「大会共同研究報告・報告者(北康宏・佐藤全敏氏)業績検討」日本史研究会古代史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2003/6/1
- 野村玄, 吉田洋子, 武田和也の共同研究報告『「後桜町天皇宸記」宝暦13年10月17日条～同年同月23日条 翻刻および参考資料』後桜町女帝宸記研究会, 後桜町女帝宸記研究会, 京都産業大学第3研究室棟3階会議室／京都府京都市, 2004/2/17
- 野村玄, 吉田洋子, 武田和也の共同研究報告『「後桜町天皇宸記」宝暦13年10月4日条～同年同月5日条 翻刻および参考資料』後桜町女帝宸記研究会, 後桜町女帝宸記研究会, 京都産業大学第3研究室棟3階会議室／京都府京都市, 2003/10/21
- 野村玄「近世天皇論への二、三の提言」京都民科歴史部会2003年度大会, 京都民科歴史部会, 京都薬科大学／京都府京都市, 2003/7/26
- 橋本孝成「畿内旗本知行所における『仕送方』庄屋と『大庄屋役』」大阪歴史学会近世史部会, 大阪歴史学会, 梅田東生

- 涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2004/2/27
- 平岡瑛二「摂津国平野郷町における住民結合——含翠堂同志中の活動を中心に——」大阪歴史学会近世史部会, 大阪歴史学会, 東淀川勤労者センター／大阪府大阪市, 2004/3/14
- 廣川和花「書評: 木谷勤著『帝国主義と世界の一体化』」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 大阪歴史科学協議会, 大阪市立弁天町市民学習センター／大阪府大阪市, 2003/8/27
- 廣川和花「ハンセン病患者の療養形態に関する考察——群馬県吾妻郡草津町湯之沢部落の事例から——」日本史研究会近現代史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2003/4/20
- 牧野雅司「明治維新期の対朝鮮外交」倭寇の会研究会合宿報告, 倭寇の会, 堺市博物館／大阪府堺市, 2004/3/27
- 牧野雅司「明治維新时期日朝外交における図書取扱」海域アジア史研究会 9 月例会, 海域アジア史研究会, 大阪大学文学部史学共同研究室／大阪府豊中市, 2003/9/27
- 松永浩「追加法」79 - 83、延文 2 年半済令」文殊の会, 文殊の会, 京都大学／京都府京都市, 2004/3/23
- 松永浩「輪読: 『勘仲記』裏文書史料」『勘仲記』裏文書の会, 『勘仲記』裏文書の会, 大阪大学／大阪府豊中市, 2003/9/13
- 松永浩「伝奏研究の現状と課題」文殊の会, 文殊の会, 京都大学／京都府京都市, 2003/6/22
- 松永浩「佐藤進一「室町幕府論」の研究史上の位置」大阪樟蔭女子大学学芸学部日本文化史学科白川哲郎ゼミ T・A, 同, 大阪樟蔭女子大学／大阪府東大阪市, 2003/6/20
- 馬部隆弘「戦国期『津田城主津田氏』の虚像と実態——北河内における城郭由緒の形成と山論——」大阪歴史学会中世史・近世史合同部会, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2003/10/30
- 馬部隆弘「戦国期『津田城主津田氏』の虚像と実態——北河内における城郭由緒の形成と山論——」城郭談話会, 城郭談話会, アピオ大阪／大阪府大阪市, 2003/10/11

(3)その他(書評・翻訳など)

【2002 年度】

- 井上真樹子「第 17 回歴史学入門講座 今谷明氏『歴史学を学ぶとはどういうことか』講演要旨」『歴史科学』169, 大阪歴史科学協議会, pp. 25-26, 2002/6
- 上田長生「共著: 立命館大学町触研究会「賀茂増沢家文書目録」」『立命館文学』578, 立命館大学人文学会, pp. 26-64, 2003/2
- 太田光俊「第 18 回歴史学入門講座実行委員コメント: 地域との関わりについて」『歴史科学』172, 大阪歴史科学協議会, pp. 41-42, 2003/3
- 太田光俊「2001 年 10 月例会フィールドワーク参加記——これまでの体験やその後考えたことをふくみつつ——」『歴史科学』170, 大阪歴史科学協議会, pp. 25-28, 2002/9
- 加藤宏文「第 40 回部落問題研究者全国集会報告 第 1 分科会歴史 I」『人権と部落問題』698, 部落問題研究所, pp. 63-64, 2003/1
- 川邊貴弘「2002 年 10 月例会彙報」『歴史科学』172, 大阪歴史科学協議会, pp. 48-49, 2003/3
- 串山まゆら「全国歴科協大会報告準備会彙報」『歴史科学』171 付録, 大阪歴史科学協議会, 2002/12
- 串山まゆら「2001 年 10 月フィールドワーク参加記」『歴史科学』170, 大阪歴史科学協議会, pp. 23-25, 2002/9
- 小杉真之「第 18 回歴史学入門講座実行委員コメント: 歴史教科書問題について」『歴史科学』172, 大阪歴史科学協議会, pp. 43-44, 2003/3
- 杉本弘幸「自治体史編纂室と研究室のはざま」『史友会会報』17, 待兼山史友会, pp. 15-16, 2002/12
- 杉本弘幸「書評: 小林丈広著『近代日本と公衆衛生——都市社会史の試み——』」『日本史研究』478, 日本史研究会, pp. 72-79, 2002/6
- 中野賢治「歴史学入門講座参加記」『歴史科学』169, 大阪歴史科学協議会, pp. 31-32, 2002/6
- 野村玄, 吉田洋子, 武田和也の共同執筆「後桜町天皇后宸記研究会「後桜町天皇宸記——宝暦十三年八月条——」」『京都産業大学日本文化研究所紀要』7・8, 京都産業大学日本文化研究所, pp. 117-146, 2003/3
- 平岡瑛二「歴史学入門講座参加記」『歴史科学』172, 大阪歴史科学協議会, pp. 36-38, 2003/3

廣川和花「第18回歴史学入門講座実行委員コメント：社会史の方法について」『歴史科学』172, 大阪歴史科学協議会, pp. 45-46, 2003/3

松永和浩「2002年5月例会彙報」『歴史科学』172, 大阪歴史科学協議会, pp. 29-30, 2003/3

松永和浩「第18回歴史学入門講座趣旨説明」『歴史科学』172, 大阪歴史科学協議会, pp. 26-27, 2003/3

松永和浩「2002年度大阪歴史学会大会森由紀恵報告討論要旨」『ヒストリア』183, 大阪歴史学会, pp. 154-155, 2003/1

松永和浩「2002年度「第18回歴史学入門講座の記録」」『ヒストリア』183, 大阪歴史学会, pp. 274-276, 2003/1

【2003年度】

飯沼雅行「旧真田山陸軍墓地の歴史を考える——戦前の軍隊と日本の近代史——」パネルディスカッション要旨『旧真田山陸軍墓地を考える』4, 旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会, pp. 57-58, 2003/5

上田純「兵庫県立歴史博物館企画展『播磨の生業と武士』を見学して」『史敏』2004年春号, 史敏刊行会, pp. 38-41, 2004/3

上田長生「史料紹介 吉祥院村庄屋文書」『世界人権問題研究センター研究紀要』9, 世界人権問題研究センター, pp.

137-188, 2004/3

太田光俊「歴史学と教育に関する雑感」『史敏』2004年春号, 史敏刊行会, pp. 20-28, 2004/3

加藤宏文「討論要旨(岩城卓二報告)」『ヒストリア』188, 大阪歴史学会, pp. 156-157, 2004/1

川邊貴弘「2003年1月例会彙報」『歴史科学』174, 大阪歴史科学協議会, pp. 24-25, 2003/11

杉本弘幸「書評：秋定嘉和・朝治武編『近代日本と水平社』」『部落解放研究』151, (社)部落解放・人権研究所, pp. 97-101,

2003/4

高島正憲「旧真田山陸軍墓地保存シンポジウム参加記」『歴史科学』173, 大阪歴史科学協議会, p. 34, 2003/6

中野賢治「博物館行政への提言」『史敏』2004年春号, 史敏刊行会, pp. 33-37, 2004/3

野村玄「書評：高木昭著作『将軍権力と天皇——秀吉・家康の神国観——』」『人民の歴史学』159, 東京歴史科学研究会,

pp. 16-20, 2004/3

野村玄, 佐藤宏之, 篠田孝一の共同執筆「第二章新選組事件史第三節京都時代1幕府畿内支配機構と新選組」大石学編『新選組情報館』教育出版, pp. 69-73, 2004/3

野村玄, 佐藤宏之, 篠田孝一の共同執筆「第五章新選組の史跡(二)京都・大阪地域」大石学編『新選組情報館』教育出版, pp.

242-250, 2004/3

長谷川裕峰「偽文書学入門——卒業論文で出会った「偽文書」を考える——」『史敏』2004年春号, 史敏刊行会, pp. 10-18,

2004/3

平岡瑛二「住民による地域づくり活動と歴史学——大阪市平野区「平野の町づくりを考える会」の活動から——」『史敏』

2004年春号, 史敏刊行会, pp. 42-49, 2004/3

平岡瑛二「文化財・歴史的景観の保存・活用をめぐる様相」『まちかね考古』13, 大阪大学考古学研究会, pp. 17-30, 2003/4

松永和浩「今日の大学院生に告ぐ」『史敏』2004年春号, 史敏刊行会, pp. 29-32, 2004/3

馬部隆弘「史料紹介 津田村役人日記『見聞録』補遺——文化元年～文化六年——」『枚方市史年報』7, pp. 31-44, 2004/3

馬部隆弘「戦国期の諜報活動と山伏——毛利領国の事例から——」『史敏』2004年春号, 史敏刊行会, pp. 6-9, 2004/3

馬部隆弘「史料紹介『旗本永井家知行所御用記録』——市域の旗本知行所支配解明にむけて——」『枚方市史年報』6,

pp. 17-29, 2003/6

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD3名(内1名、法学研究科枠で採択) DC2:1名 DC1:1名 (計5名)

2003年度 PD3名(内1名、法学研究科枠で採択) DC2:1名 DC1:1名 (計5名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部：0名 大学院：0名（計0名）

2003年度 学部：0名 大学院：0名（計0名） ※2003年4月～9月 交換留学生1名受け入れ

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度～2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002年度～2003年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 6 名

2002年度：5名 2003年度：1名

<内訳>2002年度：中学校教諭 1名 高等学校教諭 3名 奈良県立中央図書館嘱託 1名

2003年度：大阪市立中央図書館司書 1名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

1名(2001年9月～2002年10月)

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

なし

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

大阪歴史学会事務局(学会) ※大阪歴史学会大会(2003年6月)	2002年度～2003年度
大阪歴史科学協議会編集事務局(学会)	2002年度～2003年度
大阪歴史科学協議会事務局(学会)	2002年度
中世寺院法研究会事務局(研究会)	2002年度～2003年度
日根野を考える会事務局(研究会)	2002年度～2003年度

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

脇田 修氏「利休について」	2004年1月21日
於. 文学研究科本館第一会議室	
佐藤宗諄氏「転換期における一官人の軌跡——小野岑守を中心に——」	2003年1月21日
於. 文学研究科本館第一会議室	

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

(1) 教員スタッフ

日本史学専門分野では、1997年度以降、古代史1、中世史2、近世史1、近代史1の計5名の教授・助教授および1名の助手(近代史)によって、教育・研究活動を行ってきた。2002年度より中世史専攻教官が1名となったものの、古代

から近代までの日本史の全時代をカバーしており、学生・院生に対しては、行き届いた教育が行えたものと判断している。

(2) 学生・院生数と教育・研究環境

日本史学専修に進む学部2年生は、この7年間、毎年十数名を数え、本専修の人気の高さを示している。2003年度には、希望者が定員の20名を超え、専修決定試験を行なうほどであった。

大学院生は、博士前期課程入学者は、98年度以降毎年7～9名が入学・進学していたが、ここ2年間はやや減少し、2002年度5名、2003年度4名であった。博士後期課程への入学者は毎年2～4名で、あまり変化はない。ともに、他大学からの入学者が増えていることが、近年の特徴であり、内部からの進学者が大半を占めていた時期に比べ、院生間に活力が出てきた。

いっぽう、学生・院生の増加により、2004年度は学部生49名、院生36名となった。このほか研究生・科目等履修生などを加えると、研究室の学生・院生等は98名を数える。活気はあるが、現在の研究室は人数に比べ手狭であり、教育・研究環境は必ずしも良好とはいえない。

(3) 学生・院生教育と就職状況

教員スタッフは全時代をカバーしているため、学部・大学院ともに、各時代にわたる講義・演習が用意されており、この点では充実した教育体制といえる。非常勤講師の割り当ては2セメスター分で、前期・後期それぞれ1セメスターずつ2人の講師に講義を担当していただいているが、4時代のうち2時代に限定されるので、学生・院生間に不満の声が上がっている。非常勤講師枠の拡大が望まれる。

教育内容については、各時代とも、徹底した史料読解を訓練する史料講読演習を通して、日本史学を研究するにあたっての基礎的な能力の育成に努めており、一定の成果を上げている。また、近世古文書解読演習では、いちよう祭展示への参加や史料目録作りによって、実戦的な古文書教育を行っている。このほか、自治体史編纂事業の一環としての古文書現地調査への参加を積極的に進め、教育効果をさらに高めている。

就職については、学部卒業生に関しては、おおむね良好である。一般企業および官公庁が大半を占めるが、新聞社や図書館へ就職した者もいる。院生に関しても、前期課程修了者はおおむね良好といってよい。高校・中学校教員、図書館、自治体史編纂室など、専門性の高い分野への就職が多いが、一般企業への就職も急増している。大学院博士前期課程が、高度教養人養成機関としての性格をあわせもってきたことの反映として、評価できるのではないと思われる。後期課程修了者については、大学等への就職は相変わらず難しいが、特に就職率が低下したわけではない。

(4) 研究室全体としての教育

「はじめに、教育・研究活動の概要とその特色」で記したように、毎年、学外の研究者を招いての例会、新入生歓迎小旅行や研究室旅行による現地見学・現地調査、卒論・修論中間発表会や院生報告会を行い、教室での講義・演習では修得できない能力の育成を図っている。これらは、教育上多大の効果を上げており、今後も継続して行いたい。

(5) 課程博士号学位取得

この2年間では3名で、院生の数を考えれば少ない。今後、学位取得者増加のため、指導の強化を図りたい。

13-2 研究活動

日本史学専門分野の構成員は、それぞれの分野で各自の研究を進めるかわら、『日本史講座』（東京大学出版会）・『日本の時代史』（吉川弘文館）をはじめとする講座・通史の編集・執筆に関わるなど、学界の共有財産の蓄積や基礎的研究の充実のための諸活動に、積極的に参画している。

また、日本史研究会・歴史科学協議会・大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会などの学会・研究会の代表や事務局長、あるいは委員を構成員が担うなど、学会運営に積極的に関わり、日本史学界の研究の推進に大きく寄与している。上記のうち、大阪歴史学会については事務局を、大阪歴史科学協議会については編集事務局を本専門分野で引き受け、学会運営を行った。

共同研究・学際研究の面では、中世宗教学研究を専門とする平雅行教授が、フランス極東学院と「正当化・正当性」(2000年度～2003年度)のテーマで国際共同研究を行ったほか、各教員が科学研究費を獲得し、それぞれ共同研究を進めている。他方、日本史学専門分野の構成員の多くは、地域社会との連携や社会への研究成果の還元に努めている。すなわち、『愛知県史』『三重県史』『瀬戸市史』『荒尾市史』『新修熊本市史』『大阪狭山市史』『新修豊中市史』『枚方市史』『三田市史』

『夜久野町史』などの自治体史編纂事業を通して地域社会に新しい歴史像を提示しつつある。

このほか、本専門分野が保管している旧摂津国住吉郡平野郷町の含翠堂(土橋家)文書の整理・研究も無視できない。日本史学専門分野では、古文書演習や講義と有機的に関連させつつ、目録作成や内容分析を進め、毎年その成果の一端をいちよう祭において披露している。

Ⅲ. 教員の研究活動(2002年度～2003年度の過去2年間)

1. 猪飼 隆明 教授

1944年生。1974年、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士(京都大学、1971年)。熊本大学専任講師、同助教授、同教授を経て、1998年より現職。専攻：日本近現代史。

1-1. 論文

猪飼隆明「西郷隆盛」『環』13, 藤原書店, pp. 306-307, 2003/5

1-2. 著書

猪飼隆明『細川藩の終焉と明治の熊本』熊日出版, 2003/12

猪飼隆明『荒尾の文化遺産』荒尾市, 2003/5

猪飼隆明『新熊本市史 通史編(近代Ⅲ)』7, 熊本市, 2003/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2. 梅村 喬 教授

1945年生。1974年、名古屋大学大学院文学研究科博士課程史学地理学専攻単位取得退学。文学博士(名古屋大学、1990年)。名古屋大学助手、愛知県立大学文学部助教授、同教授を経て、1999年4月、大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：日本史学/古代史。

2-1. 論文

梅村喬「在地再論——古代と中世のあいだ——」『歴史の理論と教育』111, 名古屋歴史科学研究会, pp. 1-10, 2002/3/20

2-2. 著書

梅村喬『三重県史・資料編 古代(上)』(共編著、三重県), 2002/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

梅村喬(事典項目執筆), 黒田日出男ほか編『日本史文献事典』(弘文堂, 2003/12), 文献項目: 梅村喬著『日本古代財政組織の研究』吉川弘文館, 1989年/村井康彦著『古代国家解体過程の研究』岩波書店, 1965年/村井康彦著『平安貴族の世界』徳間書店, 1968年

2-4. 口頭発表

梅村喬「兵庫県袴狭遺跡出土禁制木簡について」名古屋古代史研究会, 2003/12

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2002年度～2004年度、基盤研究B、代表者: 梅村喬

課題番号: 14310156

研究題目: 平安時代における訴訟文書および関係史料の研究

研究経費: 2002年度 1,500千円

2003年度 1,600千円

研究の目的:

平安時代中後期における訴訟と紛争処理の実態を分析するため、法曹官人の答申(明法勘文)を中心に史料収集を行い、太政官体制下の実務組織の解明に努める。併せて10世紀前期以降、約1世紀にわたって百姓愁訴として拡大した民衆行動が政務に及ぼした影響を考察する。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

歴史科学協議会・常任委員

2003年9月～現在

大阪歴史科学協議会・委員長

2003年6月～現在

3. 平 雅 行 教 授

1951年生。1981年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。文学博士(大阪大学)。京都橘女子大学、関西大学、大阪大学助教授を経て1996年1月より現職。専攻: 日本中世史/古代中世仏教史。

3-1. 論文

平雅行「鎌倉仏教と顕密体制」国立歴史民俗博物館編『中世寺院の姿とくらし』山川出版社, pp. 185-204, 2004/2

平雅行「鎌倉幕府と延暦寺」中尾堯編『中世の寺院体制と社会』吉川弘文館, pp. 2-29, 2002/12

平雅行「鎌倉における顕密仏教の展開」伊藤唯真編『日本仏教の形成と展開』法蔵館, pp. 175-203, 2002/10

3-2. 著書

大山喬平, 脇田修, 村田路人, 平雅行, 福永伸哉ほか『日本史B』実教出版株式会社, 2004/1

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

平雅行, 今井雅晴, 玉光順正「現代に生きる親鸞を求めて」『真宗』1198, pp. 24-43, 2004/1

平雅行「変容する中世史像のなかで浮かび上がる親鸞思想の独自性」『真宗』1196, pp. 30-47, 2003/11

平雅行「新仏教と顕密体制論」『日本仏教 34 の鍵』春秋社, pp. 102-109, 2003/5

平雅行「学界状況と一般常識とのはざままで」『歴博』116, p. 30, 2003/1

平雅行「一向」「本願寺」「妻帯」「造悪無碍」など9項目『岩波仏教辞典 第二版』岩波書店, 2002/10

平雅行「中世民衆と親鸞」『信道講座』72, pp. 1-12, 2002/4

3-4. 口頭発表

平雅行「鎌倉幕府の寺社政策について」史学研究会公開講演, 2003/11(同講演要旨『史林』87-1, pp. 134-135, 2004/1)

平雅行「中世寺院の暴力とその正当化」九州史学会公開講演, 2003/10

平雅行「青蓮院の門跡相論と鎌倉幕府」大阪歴史学会中世史部会, 2003/7

平雅行「神・仏・神国思想」日本史研究会中世史部会, 2002/12

平雅行「鎌倉幕府の宗教政策と延暦寺」第11回宗教史懇話会, 2002/8

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平雅行 大阪大学共通教育賞, 大阪大学, 2003/12

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2002年度～2004年度、基盤研究(C)(2)、代表者：平雅行

課題番号：14510359

研究題目：中世寺院の暴力とその正当化

研究経費：2002年度 1,200千円

2003年度 900千円

研究の目的：

本研究は、暴力を素材に、日本の中世寺院や中世仏教の特質を探ることを目的とする。この目的を達するため、本研究は第一に、中世寺院が駆使した暴力の特質を明らかにしたい。特に軍事的武力において武士との差異を確認できるか、検討したい。

第二に、殺人や暴力を正当化する論理を解明する。寺院は個別利害の追求の過程で暴力を行使したが、しかし他方では仏教は慈悲や救済の普遍性をタテマエとしている以上、暴力を行使するには、救済の普遍性との亀裂を糊塗・隠蔽する言説が必要となってくる。

第三に、寺院の暴力に対する俗権力の対応とその歴史的変遷を明らかにしたい。中世の世俗権力が寺社の暴力を禁止した段階から、それを容認・肯定してゆく歴史的過程とその原因を明らかにする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 21世紀COEプログラム分担

3-8. 学会役員等の引き受け状況

日根野を考える会・代表	2001年11月～現在
日本歴史学協会・委員	2000年7月～現在
大阪歴史学会・特別委員	2000年6月～現在
史学会・評議員	1999年11月～現在
仏教史学会・評議員	1999年10月～現在
日本宗教史懇話会・呼びかけ人代表	1999年8月～現在

4. 村田 路人 教授

1955年生。1977年、大阪大学文学部史学科卒業。1979年、大阪大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程修了。1981年、大阪大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程中途退学。文学博士(大阪大学、1994年)。大阪大学文学部助手、京都橘女子大学文学部専任講師、同助教授を経て、1996年4月、大阪大学文学部助教授。1999年4月、大阪大学大学院文学研究科助教授。2002年4月、大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：日本近世史。

4-1. 論文

村田路人「幕府上方支配機構の再編」大石学編『日本の時代史 16 享保改革と社会変容』吉川弘文館, pp. 120-146, 2003/11

村田路人「元禄期における伏見・堺両奉行の一時廃止と幕府の遠国奉行政策」『大阪大学大学院文学研究科紀要』43, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-25, 2003/3

4-2. 著書

産経新聞大阪本社, 村田路人『浪華の書家五十人展 併催 緒方洪庵と適塾生の書』産経新聞大阪本社, 2004/1

大山喬平, 脇田修, 村田路人, 平雅行, 福永伸哉ほか『日本史 B』実教出版株式会社, 2004/1

村田路人『適塾アーカイブ 貴重史料 52 選』大阪大学出版会, 2002/11

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

村田路人「古文書の読み方」『適塾』36, 適塾記念会, pp. 66-72, 2003/12

村田路人「第10号批判『特集 伝統都市と身分的周縁』を読んで」『年報都市史研究』11, 都市史研究会, pp. 152-153, 2003/10

村田路人「適塾の教育」『学際』8, 構造計画研究所, pp. 74-77, 2003/4

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(C)(2)、代表者：村田路人

課題番号：15520402

研究題目：幕府上方支配における享保改革の研究

研究経費：2003年度直接経費 1,300千円、間接経費 0円

研究の目的：

享保期、上方における幕府支配機構のありかたに変化が見られることは、これまでもある程度知られていたが、「幕府上方支配における享保改革」という観点から、享保改革の一環としての機構改革を明確に意識しつつ、その変化をとらえた研究はない。また、従来享保期の変化として明らかになっているものも、京都町奉行および大坂町奉行の裁判管轄地域の変更など、ごく一部にすぎない。本研究は、享保期における幕府上方支配機構の諸変化を総合的に把握するとともに、それを享保改革の一環として位置づけようとするものである。なお、上方における享保改革を考察するには、元禄期における幕府上方支配機構の再編を視野に入れる必要があり、その点にも留意したい。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

大阪歴史学会・事務局長

2002年6月～2004年6月

大阪歴史科学協議会・編集委員長

2000年6月～2002年6月

5. 北泊 謙太郎 助手

1971年生。1995年、大阪大学文学部史学科国史学専攻卒業、1997年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程(史学専攻、専門分野：日本史学)修了、2001年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(文化形態論専攻、専門分野：日本史学)単位修得退学。修士(文学)(大阪大学)。大阪大学大学院文学研究科ティーチング・アシスタント(1997年6月～1998年2月)。2001年より現職。専門分野：日本史学／日本近現代史。

5-1. 論文

北泊謙太郎「近現代の地域社会を展示するとはどういうことか——大阪歴史博物館の展示に即して——」『ヒストリア』182, 大阪歴史学会, pp. 28-38, 2002/11

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

北泊謙太郎「古川隆久報告討論要旨」『ヒストリア』188, 大阪歴史学会, pp. 190-193, 2004/1

北泊謙太郎「テーマ『近代日本における道徳と宗教』趣旨説明」『日本史研究』487, 日本史研究会, pp. 164-166, 2003/3

5-4. 口頭発表

北泊謙太郎「日本史研究会近現代史部会大会報告批判」日本史研究会近現代史部会, 2003/12

北泊謙太郎「書評：古川隆久著『戦時下の日本映画——人々は国策映画を観たか——』」大阪歴史学会近代史部会, 2003/3

北泊謙太郎「2002年度大会共同研究報告『研究委員反省』」日本史研究会近現代史部会, 2002/12

北泊謙太郎「近現代史部会大会共同研究報告趣旨説明『近代日本社会における道徳と宗教』」日本史研究会 2002年度大会(第四分科会), 2002/11

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

大阪歴史科学協議会・編集委員長

2003年6月～現在

日本史研究会・研究委員

2000年11月～2002年11月

2-8 東洋史学

はじめに、教育・研究活動の概要とその特色

阪大東洋史が世界の学界の中で重きをなす研究領域は、唐宋以後の中国史、イスラム化以前の中央アジア史、そして東南アジア史である。いずれの領域の教員も漢文文献を根本史料にしながら、現地語史料とフィールドワークの成果を合わせた研究を行ない、院生達にもそれを指導している。学部生に対しては、全員に漢文演習を課すと共に、3つの領域のいずれかの英語論文講読演習に出席させ、世界の学界の動きを学ばせている。

本専門分野の教育の中で最も特徴あるのは、「合同演習」と通称され、教員から学部生まで全員が出席を義務づけられている演習である。そこでは日本語の論文紹介、卒論・修論の中間報告など、学年に応じた研究発表・報告が求められ、とりわけ大学院後期課程学生は、東洋史学史・工具書等について入門講義を行ない、学部生に裨益すると同時に、自らが教職に就いた時のための訓練を行なう。全員がこの合同演習に出席するという事は、広大な領域にまたがり、時代も古代から近現代に亘る東洋史全般の発表を聞き討論するという事で、狭い専門に閉じこもるのを打破する効果がある。大学院に進学する者は、この「合同演習」に学部時代から積極的に出席し続けることによって、幅広い知識と関心を持った研究者・高度職業人に育っていくし、学部だけで卒業していく者にとっても、学問の厳しさと奥深さを肌で感じながら、ここを卒業したという誇りと自信をもって社会に出ていくことになり、教育効果も絶大である。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 4 助教授 1 講師 0 助手 1

教授：森安 孝夫、片山 剛、荒川 正晴、桃木 至朗

助教授：青木 敦

助手：杉山 清彦

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
19	15	10	0	0	0	0	0	3

※うち留学生 1 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業生	大学院		博士号学位授与数	出身の研究者
		博士前期(M)修了者	博士後期(D)修了者		
'02	9	3	3	3	1
'03	11	4	7	6	3
小計	20	7	10	9	4

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	3	0	3
'03	5	1	6
計	8	1	9

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

石川亮太「近代朝鮮をめぐる国際流通の形成過程——アジア域内市場の中の朝鮮植民地化——」2003/3

主査：片山剛 副査：桃木至朗、青木敦

上谷浩一「後漢王朝崩壊過程の研究」2004/3

主査：青木敦 副査：片山剛、荒川正晴、東晋次(三重大学)

坂尻彰宏「河西帰義軍節度使政権の文書処理システム」2003/3

主査：森安孝夫 副査：荒川正晴、青木敦

佐藤貴保「西夏貿易史の研究」2004/3

主査：森安孝夫 副査：荒川正晴、青木敦

朱海濱「明清浙東地域の民間信仰」2003/9

主査：片山剛 副査：桃木至朗、青木敦、濱島敦俊(本学名誉教授・台湾国立暨南国際大学)

張銘心「トゥルファン出土高昌墓磚の源流とその成立」2003/9

主査：荒川正晴 副査：森安孝夫、桃木至朗

橋本浩一「福建人民革命政府の研究——第三勢力による抗日民主政権の試みと国内外諸勢力——」2004/3

主査：片山剛 副査：桃木至朗、青木敦

林淑美「清代台湾移住民社会史研究序説——科举受験問題から見た閩・粵関係——」2003/3

主査：片山剛 副査：桃木至朗、青木敦

【論文博士】

萩原守「清代モンゴルにおける裁判制度の研究」2004/3

主査：森安孝夫 副査：荒川正晴、青木敦

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	5	0	0	0	0	5
'03	3	1	3	0	3	10
計	8	1	3	0	3	15

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	0	8	10	1	0	19
'03	0	5	9	0	0	14
計	0	13	19	1	0	33

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

石川亮太「1910年代満洲における朝鮮銀行券の流通と地域経済」『社会経済史学』(社会経済史学会), 68-2, pp. 3-20, 2002/7

林淑美「清代台湾移住民社会と童試受験問題」『史学雑誌』(史学会), 111-7, pp. 60-84, 2002/7

坂尻彰宏「帰義軍時代のチベット文牧畜関係文書」『史学雑誌』(史学会), 111-11, pp. 57-84, 2002/11

K.Sakamoto/M.Kimura, "Data of Banners and Banner Fragments. (Analysis of Textiles from Central Asia.)" In:

Chhaya Bhattacharya-Haesner (ed.), *Central Asian Temple Banners in the Turfan Collection of the Museum für Indische Kunst, Berlin*. Appendix IV, Berlin : Dietrich Reimer Verlag, pp. 491-496, 2003/1(共著)

向正樹「モンゴル時代泉州の清浄寺修築について」『関西アラブ・イスラム研究』2, pp. 89-105, 2002/12

【2003年度】

赤木崇敏「曹氏帰義軍節度使時代の外交関係文書」森安孝夫編『シルクロードと世界史』(大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」2002年度～2003年度報告書), pp. 132-157, 2003/12

坂尻彰宏「敦煌判憑文書考序論」森安孝夫編『シルクロードと世界史』(大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」2002年度～2003年度報告書), pp. 159-195, 2003/12

坂尻彰宏「敦煌税羊文書考」『待兼山論叢 史学篇』37, pp. 1-25, 2003/12

坂本和子「トルファン出土の三織物断片——西方より将来の証拠として——」森安孝夫編『中央アジア出土文物論叢』京都, 朋友書店, pp. 143-161, pls. VII-XV, 2004/3

杉山清彦「ヌルハチ時代のヒヤ制——清初侍衛考序説——」『東洋史研究』(東洋史研究会), 62-1, pp. 97-136, 2003/6

鈴木宏節「トニクク碑文研究史概論」森安孝夫編『シルクロードと世界史』(大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」2002・2003年度報告書), pp. 113-130, 2003/12

蓮田隆志(ベトナム語)「文理侯陳靖: 17世紀ベトナム対外交易史上の一人物」ハノイ国家大学人文社会科学部東方学科編『越日関係: 過去と現在』ハノイ: ハノイ国家大学出版, pp. 176-185, 2003/11

蓮田隆志「大越史記本紀続編」研究ノート『アジア・アフリカ言語文化研究』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所), 66, pp. 299-317, 2003/9

蓮田隆志「東南アジアの近世をめぐって」『東南アジア 歴史と文化』(東南アジア史学会), 32, pp. 88-104, 2003/5

林淑美「福建省龍海市歩文鎮蓮池社・石倉社・玄壇宮社調査報告(下)」『神戸商科大学人文論集』39・1・2(合併号), pp. 37-58, 2003/12(太田出と共著)

(2)口頭発表(学会発表のみを掲載)

【2002年度】

- 坂尻彰宏「帰義軍時代のチベット文訴訟文書——多言語社会の文書処理システム——」2002年度内陸アジア史学会大会, 於大阪国際大学(要旨:『内陸アジア研究』(内陸アジア史学会), 18, 2003/3), 2002/11
- 佐藤貴保「西夏の官僚制度に関する一考察」第3回遼金西夏史研究会, 於龍谷大学, 2003/3
- 佐藤貴保「『金史』交聘表に見る西夏の朝貢使節について」第39回日本アルタイ学会, 於長野県信濃町(要旨:『東洋学報』(財団法人東洋文庫), 85-1, 2003/6), 2002/7
- 杉山清彦「清初侍衛考——親衛隊にみる大清帝国の中核構造——」第39回日本アルタイ学会, 於長野県信濃町(要旨:『東洋学報』(財団法人東洋文庫), 85-1, 2003/6), 2002/7
- 杉山清彦「コメント 谷井俊仁「清朝専制体制論」報告」第16回明清史夏合宿の会, 於高野山大学, 2002/7
- 蓮田隆志「A4本『大越史記續編』小考——近世ベトナム史の新史料——」第67回東南アジア史学会研究大会, 於神戸外国語大学(要旨:『東南アジア史学会会報』(東南アジア史学会), 77, 2002/10), 2002/6
- 林淑美「清代台湾社会における漢・番の境界と番割」第16回明清史夏合宿の会, 於高野山大学, 2002/7
- 向正樹「元代の福建統治機構と西域系官僚——福建の地方志にみえる元代官員リストについての考察——」第9回関西アラブ研究会, 於大阪外国語大学, 2002/12

【2003年度】

- 大坪慶之「清末、清朝中央の重要政策決定過程」史学会第101回大会, 於東京大学(要旨:『史学雑誌』112-12, 2003/12), 2003/11
- 梶原真「十九世紀前半湖南省西部における屯田制とその社会的影響」史学会第101回大会, 於東京大学(要旨:『史学雑誌』112-12, 2003/12), 2003/11
- 鈴木宏節「羈縻支配期から第二可汗国勃興期の突厥について——阿史那思摩の系譜問題を中心にして——」第40回日本アルタイ学会, 於長野県信濃町(要旨:『東洋学報』(財団法人東洋文庫), 86-1, 2004/6), 2003/7
- 田村健「9~10世紀のハザルの王権——カガンと「王」——」第13回関西アラブ研究会, 於大阪外国語大学, 2004/3
- 横山政子「公共食堂運営からみた人民公社化過程における生産組織と家族——大躍進期黒竜江省を中心に——」アジア政経学会50周年記念全国大会, 於一橋記念講堂学術総合センター, 2003/11

(3)その他(書評・翻訳など)

【2002年度】

- 石川亮太「書評:古田和子著『上海ネットワークと近代東アジア』(東京大学出版会, 2000年)」『朝鮮史研究会会報』148, pp. 8-10, 2002/6
- 佐藤貴保「西夏関連研究文献目録2002年版」『瀚海蒼茫——ユーラシア歴史学の構築を目指して——』総合地球環境学研究所, pp. 1-79, 2003/3(荒川慎太郎と共同執筆)
- 佐藤貴保, 向正樹, 山本明志「『烏臺筆補』譯註稿」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 律(30)号, pp. 63-92, 2002/6 (浅見洋二, 沖田道成, 加藤聰, 高橋文治, 中村健太郎と共譯註)
- 杉山清彦「書評 松村潤著『清太祖実録の研究』(東北アジア文献研究叢刊2)」『満族史研究』(満族史研究会), 1, pp. 134-143, 2002/5
- 杉山清彦「(新刊紹介)張徳澤著『清代国家機関考略(修訂版)』」『満族史研究』(満族史研究会), 1, pp. 156-157, 2002/5
- 杉山清彦「(新刊紹介)趙令志著『清前期八旗土地制度研究』」『満族史研究』(満族史研究会), 1, pp. 157-158, 2002/5
- 杉山清彦「(新刊紹介)王明琦著『遼海文物考辨』」『満族史研究』(満族史研究会), 1, pp. 158-159, 2002/5
- 杉山清彦「(新刊紹介)刁書仁著『明清中朝日関係史研究』」『満族史研究』(満族史研究会), 1, pp. 159-160, 2002/5
- 杉山清彦「(新刊紹介)趙迅著『納蘭成德家族墓誌通考』」『満族史研究』(満族史研究会), 1, p. 160, 2002/5

林淑美「2001年の歴史学界——回顧と展望——東アジア(中国—近代 台湾)」『史学雑誌』(史学会), 111-5, pp. 243-246, 2002/5

【2003年度】

佐藤貴保「西夏法典貿易関連条文訳註」森安孝夫編『シルクロードと世界史』(大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」2002年度～2003年度報告書), pp. 197-255, 2003/12

佐藤貴保・向正樹・山本明志『烏臺筆補』訳註稿『内陸アジア言語の研究』(中央ユーラシア学研究会), 18, pp. 97-142, 2003/8(沖田道成, 加藤聰, 高橋文治と共譯註)

杉山清彦(項目執筆)閻崇年(編)『20世紀世界満学著作提要』北京:民族出版社, 2003/12(35項目執筆)

杉山清彦「書評 藤紹箴・藤瑶著『満族游牧経済』」『満族史研究』(満族史研究会), 2, pp. 188-193, 2003/5

杉山清彦「(新刊紹介)閻崇年主編『満学研究』第5・6輯」(満族史研究会), 2, p. 204, 2003/5

杉山清彦「(新刊紹介)清代官史研究会編『清代官史論叢』」(満族史研究会), 2, pp. 204-205, 2003/5

杉山清彦「(新刊紹介)張徳玉著『満族発現地歴史研究』」(満族史研究会), 2, pp. 205-206, 2003/5

杉山清彦「(新刊紹介)鄭克晟著『明清史探実』」(満族史研究会), 2, p. 206, 2003/5

杉山清彦「(新刊紹介)傅波・遲安臻・辺佐卿主編『満族経済与文化』」(満族史研究会), 2, pp. 206-207, 2003/5

杉山清彦「(新刊紹介)李鴻彬著『満族崛起与清帝国建立』」『満族史研究』2, p. 207, 2003/5

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

石川亮太 第2回アジア太平洋研究賞佳作, アジア太平洋フォーラム淡路会議主催, 2003/10(受賞論文2003年3月単位認定博士論文「近代朝鮮をめぐる国際流通の形成過程——アジア域内市場の中の朝鮮植民地化」)

杉山清彦 第1回内陸アジア史学会賞, 内陸アジア史学会, 2002/11(受賞論文「清初八旗における最有力軍団——太祖ヌルハチから摂政王ドルゴンへ——」『内陸アジア史研究』16, pp. 13-37, 2001/3)

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD: 1名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計2名)

2003年度 PD: 2名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計3名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部: 0名 大学院: 2名 (計2名)

2003年度 学部: 0名 大学院: 5名 (計5名)

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度～2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

杉山清彦 12年3月D修了・課程博士(2001～2004年学振PD研究員)大阪大学大学院文学研究科, 助手, 2004/4

林淑美 15年3月D修了・課程博士, 名古屋商科大学, 専任講師, 2004/4

石川亮太 15年3月D修了・課程博士, 佐賀大学経済学部, 専任講師, 2003/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002年度～2003年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2002年度: 1名 2003年度: 0名

<内訳> 教職 1名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

1名

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

2002年度 『内陸アジア言語の研究』(中央ユーラシア学研究会)17号

2003年度 『内陸アジア言語の研究』(中央ユーラシア学研究会)18号

森安孝夫(編)『シルクロードと世界史』(大阪大学 21世紀 COE プログラム 「インターフェイスの人文学」 2002年度～2003年度報告書), 大阪大学大学院文学研究科, 2003/12

森安孝夫(編)『中央アジア出土文物論叢』京都: 朋友書店, 2004/3

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

中央ユーラシア学研究会事務局(常置)

中央アジア学フォーラム(神戸市外大と共同主宰)

海城アジア史研究会(主宰)

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

名称: 中央ユーラシア学研究会

活動状況: 本会は学術雑誌『内陸アジア言語の研究』の発行を目的とする研究協力団体である。『内陸アジア言語の研究』(毎年1冊刊行)は、中央ユーラシア(内陸アジア、中国を含む)の言語資料に関わる学術論文・資料紹介などを掲載しており、国際的にも高い評価を得ている。本会では、原稿のコンピューター入力、編集、販売促進などの活動も行なっている。

名称: 中央ユーラシア学フォーラム

活動状況: 本会は、仏教時代(イスラム化以前)の中央ユーラシア研究の諸分野について論文・著書の要旨を説明したり、書評を兼ねた発表をして討論しあう懇話会である。例会は毎年3～4回の頻度で開催され、関西在住の研究者・学生のみならず、関東などからも参加者を集め、情報交換の場として機能している。

名称: 海城アジア史研究会

活動状況: 中国史、東南アジア史、日本史などの国家や研究領域の枠組みを超えた議論や交流のための研究会で、阪大を会場に毎月1回例会を開催しており、2003年10月に設立10周年を迎えた。「海からの視点」をキーワードに研究発表、史料講読などを行っており、関西各大学の研究者・大学院生のほか、名古屋・東京からしばしば参加者がある。

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

2002～2003年度の博士後期課程在籍者は20名(うち留学生3名)、博士前期課程入学者は9名(うち留学生1名)であった。そのうち課程博士号取得者は8名、それ以後に続く博士予備論文合格者は3名である。本専門分野の特徴である「合同演習」によって成長し、この2年間に研究職を得た者は3名、日本学術振興会特別研究員PD2名、同DC1名であった。公費による長期留学生は4名であるが、後期課程のほぼ全員が公費ないし私費による短期の留学・海外資料調査・フィールドワークを経験し、成果を挙げている。ただし、後期課程の院生でも公費の獲得が難しく、前期課程の院生にいたってはその可能性はきわめて限られているため、いずれも自弁せざるを得ない状況であり、世界のトップにある東洋学のレベルを維持するためには、今後の財政的支援が強く望まれる。

本専門分野では史料言語としてはなによりもまず古典漢文があげられ、その読解力の向上には学部から大学院まで一貫して力を注いでいる。しかしそれにとどまらず、古代ウイグル語・トルコ語・満洲語・モンゴル語・チベット語・ベトナム語など各自の必要に応じて修得の機会を提供してきた。さらに、論文用言語として英語はもちろん(学部段階では英語ゼミが全員必修)、ドイツ語・フランス語・ロシア語・中国語の修得・向上を指導し、これらの言語の論文を読むゼミも行なっている。

この2年間では森安・荒川・桃木の3名が中心となり、21世紀COEの一環として「シルクロードと世界史」班を運営した。その際には中央アジア学フォーラムや海域アジア史研究会という学内外の研究会活動とも連動させて、COE事業を院生の教育に資することができた。しかしなんといっても「シルクロードと世界史」班の活動のハイライトは、大学側が主宰者となる高校世界史教員研修会の開催であり、それは全国初の試みとして大きな反響を呼んだ。もちろん、ここにも多数の院生を参加させることにより大きな教育効果が上がった。

青木は2003年度前期の「英語ゼミ」を、最初の数回ではあるが、すべて英語によって行なった。各学生に、現在の研究内容およびその動機付けを英語で発表させ、質疑応答も英語で行なった。この数回は、履修・授業予定の指示を含め時間中はすべて英語を用い、一切の日本語の使用を禁止した。

いまや東洋学の分野でもパソコンを使っての検索システムが脚光を浴びるようになり、かつては碩学にしか集められなかった史料群が学生レベルで簡単に収集できるようになってきている。本専門分野では『四部叢刊』などのCD-ROMを設置し、さらには『大蔵経』などもネット検索ができるようになり、博士論文・修士論文・卒業論文作成に絶大な威力を発揮しつつある。

また、青木は2001年6月より現在に至るまで、ウェブサイト「東洋史研究リンク集」を運営している。このサイトは、東アジア史を中心として、ネット上で用いることのできる文献・史料原文検索・その他有用な学術資源・東洋学関連の有用な個人・団体ページへのリンクを網羅的に収集するとともに、研究会の案内を随時載せ、阪大東洋史学生のみならず世界の東洋史学徒のインターネット利用の導き手となっている。日本・台湾を中心として、時にはスペインやモンゴル・カンボジアなどを含め、一日140~200アクセスを記録しており、台湾の中央研究院、日本の東京大学東洋文化研究所などの公式サイト、各大学東洋史学研究室の公式サイトや東洋学関係の多くのサイトからリンクされている。Googleなどの検索サイトで「東洋史」と入力すれば一番目にランクされている。

13-2 研究活動

大阪大学の東洋史関係スタッフは6名(うち助手1名)であり、旧国立総合大学の中ではもっとも数が少ないため、その研究対象範囲をパミール以東でインドを含まないアジアに明確に設定している。これは一見するとマイナス要素のようであるが、2002年度の外部評価でも述べられたように、スタッフ全員がアジア史さらには世界史全体への関心と視野を持ちつつ研究・教育を行っており、阪大東洋史の地位は今や国内のみならず海外からも評価され、揺るぎなきものとなっている。中央アジア史、中国史、東南アジアないしアジア海域史の3分野が相互の連関と世界史への位置づけを強く意識していることは、本専門分野の教育・研究の最大の特徴である「合同演習」や、全国初の画期的な全国高校世界史教員研修会という形に収斂しているといえよう。

2002年度の外部評価で杉山正明・京都大学教授が指摘されたように、森安と荒川が担当するイスラム化以前の中央アジア史・北アジア史は、西域学・東西交渉史学における東京大学百年の伝統が消滅する中で唯一それを継承し、内部進学者のみならず他大学からも当該領域に関心をもつ院生を集め、さらにインターカレッジの中央アジア学フォーラムを主宰するなど、国内は言うに及ばず世界の中でも屈指の拠点を形成しつつある。2003年5月に森安がパリのコレージュド＝フランスに招聘され、4回の連続講演を行なったこと、敦煌・トゥルファン文書の発見によるシルクロード学成立の百周年を記念して2002年9月にベルリンで開催された国際トゥルファン学会において森安・荒川が共に英語で発表したことなどは、その一端である。さらに大阪大学に本拠を置く中央ユーラシア学研究会が年1回発行する『内陸アジア言語の研究』は、第15巻(2000年度)が世界的な東洋学雑誌である *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* の書評欄で取り上げられたのに引き続き、第17巻(2002年度)も取り上げられ、今や世界中の図書館でこの雑誌を所蔵していないところは早急に定期購読を検討すべきであるとまで評された。なお、この2年間も森安・荒川ともに科研費の代表者となっていること、別項の通りである。森安が代表、荒川が分担者となった2001年度~2003年度科学研究費補助

金基盤研究 (B)(1)「中央アジア出土文物によるシルクロード貿易と文化交流の諸相」の報告書は、森安孝夫編『中央アジア出土文物論叢』(京都、朋友書店、2003年3月刊)として市販もされている。

中国史・東アジア史では、伝統となりつつある海外資料収集および研究対象地域への実地踏査を博士後期課程院生が積極的に展開した。研究テーマが時代的にも地域的にも多様であることを反映して、資料収集地としては、黒龍江省の地方档案馆、台湾の中央研究院や故宫博物院、韓国のソウル大学など、地域踏査としては湖南省などと広範囲にわたった。

海外資料収集や実地踏査も加えて進められた研究発表は、演習の授業や関西地区の研究会のみならず、2002年度には明清史夏合宿(実質的に日本の明清史学会に相当)1名、2003年度には史学会大会2名、アジア政経学会大会1名など、全国学会においても盛んに行なわれた。また口頭発表を基礎にした査読つき学術誌への掲載も多数に上った。課程博士修了生は、2002年度2名(1名は留学生)、2003年度3名(2名は社会人、1名は留学生)であり、そのうち1名はその博士論文によって第2回アジア・太平洋研究奨励賞の佳作を受賞した。

片山は、秦漢から明清に至る長期的展望および華北・華中との比較を視野に入れつつ、広東珠江デルタ農村社会における歴史的構図を検討し、当該地域社会に「漢族」が初めて登場する明代に社会的転換が起きたことを解明し、この斬新な華南地域社会像を(財)東洋文庫での講演や中国・台湾での学術シンポジウム報告として発表したうえで、2004年3月の論文に結実させた。そして現在、自身の研究の総括を進行させている。

青木は2002年度の若手研究(B)科研費を獲得したほか、(財)東洋文庫にて月2回のペースで続けられている『朝野類要の研究会』に、2ヶ月に1度ほどの頻度で参加して読み・発表を行なっている。2003年9月には、上海師範大学に招聘され、「中国史研究与地域社会論」と題する講演会を行ない、またシンポジウムに参加して「宋代江西之法文化与健訟」と題する研究を中国語で発表した。さらに2001年以来、宋代史研究会の研究報告集の編集委員(編集委員は3人おり、青木が実質的な中心)を担っており、社会経済史分野の論文を集め、現在第8集を編集集中である。

圧倒的に現代研究に偏った日本の東南アジア研究において、現地留学・フィールドワークを当然としつつ、漢籍を中心とした高度の文献研究を推進する歴史研究の数少ない中心として、桃木の主導する大阪大学・東南アジア研究グループは異彩を放ちつつある。全国のベトナム研究者が協力して1994年度から続けている、ベトナム・ナムディン省の旧バッコック村総合調査(世界のアジア研究の情報媒体であるオランダのIIASのニューズレターでも紹介された)に、桃木と各大学院生が連年参加しているほか、大阪市立大学と共同の、18世紀東南アジア史に関する資料の収集・調査プロジェクト(「不可視の時代の東南アジア」)、「東南アジア史学会関西例会」の運営など、関西地区の拠点校としての活動を続けてきた。2001~2003年に刊行された『岩波講座東南アジア史』(全9巻+別巻)、とくに『別巻 東南アジア研究案内』には、これらの成果が濃厚に反映されている。

また、1993年に創設した海域アジア史研究会(2003年10月に記念シンポ「海域アジア史のポテンシャル」を開催)は、近年のアジア・日本海域史のブームの大半が、「日本史」「中華世界史」などの伝統的枠組みの中で自足しているのに対し、東南アジアという新しい世界に軸足を置き、しかもときには、内陸世界まで含めた広い世界の関係史や比較史の視野に入れることで、「大文明の周辺としての日本と東南アジアの比較研究」など、東南アジア海域史自身をも刷新する新しい視座を提供し続けている。この活動は、全国で注目され、関西以外の若手研究者が次々報告を希望している。さらに、東アジア諸語による研究成果が英語圏などで知られていないため、世界の海域史のなかで東アジアが空白になっているという問題を克服するため、海外への発信にも近年は努力しつつあり、2003年7月には、アジア海域史研究の新しい中心たらんとしている国立シンガポール大学アジア研究所(アンソニー・リード所長)が開催したワークショップ「15世紀の東南アジアと明朝のファクター」で桃木など2名が報告を行なった。なお桃木は同年10~12月にも客員研究員として同研究所に滞在した。

Ⅲ. 教員の研究活動(2002年度~2003年度の過去2年間)

1. 森安 孝夫 教授

1948年生。1972年、東京大学文学部東洋史学科卒。1975年、東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専攻修士課程修了。1981年、東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専攻博士課程単位修得退学。1982年、金沢大学文学部助教授。1984年、大阪大学文学部助教授。1994年、大阪大学文学部教授。1998年、大阪大学大学院文学研究科教授。博士(文学)、(大

阪大学)。(財)東洋文庫兼任研究員。専攻：東洋史学／中央ユーラシア史／敦煌学／トゥルファン学。

1-1. 論文

森安孝夫「シルクロード東部における通貨——絹・西方銀銭・官布から銀錠へ——」森安孝夫編『中央アジア出土文物論叢』京都：朋友書店，pp. 1-40, 2004/3

森安孝夫「序文——シルクロード史観論争の回顧と展望——」森安孝夫編『中央アジア出土文物論叢』京都：朋友書店，pp. i-vii, 2004/3

Takao MORIYASU Four Lectures at the College de France in May 2003. History of Manichaeism among the Uighurs from the 8th to the 11th Centuries in Central Asia. = 「コレージュ＝ド＝フランス講演録 ウイグル＝マニ教史特別講義」森安孝夫編『シルクロードと世界史』(大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」報告書 3), 大阪大学大学院文学研究科, pp. 23-111, 2003/12

Takao MORIYASU Uighur Inscriptions on the Banners from Turfan Housed in the Museum für Indische Kunst, Berlin. Chhaya Bhattacharya-Haesner (ed.), *Central Asian Temple Banners in the Turfan Collection of the Museum für Indische Kunst, Berlin*. Berlin : Dietrich Reimer Verlag, pp. 461-474, 2003/1

森安孝夫「ウイグルから見た安史の乱」『内陸アジア言語の研究』(中央ユーラシア学研究会), 17, pp. 117-170, 2002/9

Takao MORIYASU On the Uighur Buddhist Society at Chiqtim in Turfan during the Mongol Period. *Splitter aus der Gegend von Turfan, Festschrift für Peter Zieme anlässlich seines 60. Geburtstags*, (Türk Dilleri Arashtirmalari Dizisi 35), Istanbul / Berlin : Shafak Matbaacilik, pp. 153-177, 2002/4

1-2. 著書

森安孝夫編『中央アジア出土文物論叢』京都：朋友書店，2004/3

森安孝夫編『シルクロードと世界史』大阪大学大学院文学研究科，2003/12

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

森安孝夫「コラム歴史の風 シルクロードからの風」『史学雑誌』113-3, pp. 34-36, 2004/3

森安孝夫, 山内晋次「全国高等学校世界史教員研修会」森安孝夫編『シルクロードと世界史』(大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」報告書第 3 巻), 大阪大学文学研究科, pp. 257-324, 2003/12

森安孝夫「ハミルトン博士の計」『内陸アジア言語の研究』18, pp. i-vi, 2003/8

森安孝夫「シルクロードと世界史——陸と海から世界史的ダイナミズムを実証する——」大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」ニューズレター 1, pp. 14-15, 2003/3

森安孝夫「大谷探検隊とその将来品——ベゼクリクの二重窟——」『本願寺新報』2002/11/10

1-4. 口頭発表

森安孝夫「シルクロードと世界史——とくにウイグルの動向を中心に——」第 35 回大阪大学開放講座，大阪大学基礎工学部シグマホール，2003/10

森安孝夫「世界史上における中央ユーラシアの意義——早すぎた征服王朝としての安史の乱——」全国高等学校世界史教員研修会，大阪大学附属図書館，2003/8

森安孝夫「ウイグル文書に見える亀茲金花王について」中央アジア学フォーラム，大阪大学文学部，2003/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

森安孝夫 大阪大学共通教育賞(第 2 回)，大阪大学，2003/5

森安孝夫 コレージュ＝ド＝フランス招待教授記念メダル，コレージュ＝ド＝フランス，2003/5

森安孝夫 東方学会賞(第 7 回)，(財)東方学会，1988/11

森安孝夫 流沙海西奨学会賞(第 8 回)，江上波夫記念流沙海西奨学会，1975/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2001年度～2003年度、基盤研究(B)(1)、代表者：森安孝夫

課題番号：13410108

研究題目：中央アジア出土文物によるシルクロード貿易と文化交流の諸相

研究経費：2002年度直接経費 5,300千円

2003年度直接経費 2,600千円

研究の目的：

前近代の世界史において大きな役割を果たした中央アジア経由のシルクロード貿易について、従来、おおまかに見れば中国の絹織物が大量に西方にもたらされ、逆に西方の金銀器・玉・ガラス・香薬・絨毯などの奢侈品が中国に輸入されたこと、さらにそれらの貿易に従事した人々によって言語・宗教・思想などの東西文化交流が促進されたことが判明している。しかし、その具体相になると、実はほとんど何も分かっていない。例えば、織物といっても多種多様なものが存在し、東西の文献や現地出土文書に見える名称と、現物とがどのように一致するのか、それらの生産地・等級・価格などはどうであったのか、また、これらの商品の主たる運搬手段であるキャラヴァンの組織や構成、宿泊施設や倉庫、「国境」を通過する際の通行許可証取得の手続き、関税率や決済手段、資本の運営方法などである。本研究では、これらの諸問題を中心に、中央アジア出土文物資料の実物調査と解読研究によって、シルクロード貿易と文化交流の諸相を解明することを目的とする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 21世紀COEプログラム分担

1-8. 学会役員等の引き受け状況

東方学会『東方学』編集委員	2003年9月～現在
同上・理事	2003年9月～現在
同上・評議員	2000年6月～2003年9月
東洋史研究会・評議員	2001年11月～現在
内陸アジア史学会・常任理事	1994年11月～現在
中央ユーラシア学研究会『内陸アジア言語の研究』編集長	1994年10月～現在
日仏東洋学会・評議員	1991年3月～現在
日本モンゴル学会・理事	1987年5月～現在

2. 片山 剛 教授

1952年生。1981年東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。文学修士(東京大学)。1981年高知大学講師、1984年同助教授、1989年大阪大学助教授を経て、1996年4月より現職。専攻：中国近世／近代史。

2-1. 論文

片山剛「“広東人”誕生・成立史の謎をめぐって：言説と史実のはざまから」『大阪大学大学院文学研究科紀要』44, pp. 1-32, 2004/3

片山剛「清代珠江デルタの里甲経営と地域社会：順徳県龍江堡」『待兼山論叢 史学篇』(大阪大学文学会), 36, pp. 1-26, 2002/12

片山剛「死者祭祀空間の地域的構造：華南珠江デルタの過去と現在」江川温・中村生雄編『死の文化誌：心性・習俗・社会』昭和堂, pp. 108-142, 2002/10

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

濱島敦俊, 片山剛, 横山政子「華中・南デルタ農村実地調査報告書「第二部珠江デルタ」索引」『大阪大学大学院文学研究科紀要』43, pp. 49-71, 2003/3

2-4. 口頭発表

片山剛「20世紀初、「優勝劣敗」の歴史観と広東の郷土志」京都大学人文科学研究所「20世紀中国の社会システム」班, 2003/12

片山剛「珠江デルタから考える中国の地域史」2003年度春期東洋学講座(財団法人東洋文庫)第474回, 2003/5, 要旨は『東洋学報』85-2, pp. 137-138, 2003/9

片山剛「珠江三角洲農村牌位祭祀の結構及其区域社会形成的歴史特征」《地方文献学術研討会》(於台北, 国家図書館), 2002/10

片山剛「珠江三角洲農村牌位祭祀の結構及其区域社会形成的歴史特征」《中国農村社会変遷与現代化》国際学術研討会(於上海, 華東師範大学), 2002/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

史学会・評議員

2001年10月～現在

中国史学会・評議員

2001年4月～現在

3. 荒川 正晴 教授

1955年生。1986年、早稲田大学大学院文学研究科博士課程中退。文学修士(早稲田大学)。早稲田大学非常勤講師、大阪大学文学部助教授を経て、2001年4月より現職。専攻：中央アジア古代史。

3-1. 論文

Arakawa M., Passports to the Other World : Transformations of Religious Beliefs among the Chinese in Turfan (Fourth to Eighth Centuries). D. Durkin-Meisterernst et al. (eds.), *Turfan Revisited - the First Century of Research into the Arts and Cultures of the Silk Road*, Berlin, pp. 19-21, 2004

荒川正晴「トゥルフアン漢人の冥界観と仏教信仰」森安孝夫編『中央アジア出土文物論叢』京都：朋友書店, pp. 111-126, 2004/3

3-2. 著書

荒川正晴『オアシス国家とキャラヴァン交易』山川出版社, 2003/12

荒川正晴編『トゥルフアン出土文書および関連伴出資料の調査』(2000年度～2002年度科学研究費補助金<基盤研究B-1>研究成果報告書、研究代表、荒川正晴), 2003/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

荒川正晴「オルトク(幹脱)商人」ほか7項目,世界史小辞典編集委員会編『世界史小辞典』山川出版社,2004/1

3-4. 口頭発表

荒川正晴「中央アジア、トゥルファン漢人の仏教信仰と冥界観」超域研究機構プロジェクト研究例会,新潟大学,2003/11

荒川正晴「唐代における人の移動と貨幣(絹・銭)の流通」,唐代史研究会夏期シンポジウム,新潟,2003/8/26

Arakawa M., Passports to the Other World — Transformations of Religious Beliefs among Chinese in Turfan (4c. ~8c.), Turfan Revisited—The First Century of Research into the Arts and Culture of the Silk Road, Berlin, 2002/9

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

荒川正晴 流沙海西奨学会賞,流沙海西奨学会,1986/12

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2003年度~2005年度、基盤研究(B)(1)、代表者:荒川正晴

課題番号:15401021

研究題目:東トルキスタン出土「胡漢文書」の総合調査

研究経費:2003年度直接経費 2,200千円

研究の目的:

東トルキスタン出土の「胡漢文書」が、これまで東洋史学や言語学・文献学などの研究に貴重な資料を提供してきたことは言うまでもない。それは、たとえ断片的な文書であっても、一次資料として既存の見解を大きく覆す可能性を秘めているからである。したがって、散発的に出土した断片的な文字資料であっても、それら資料に関する情報は、できる限り詳細に把握しておく必要がある。とりわけ、新中国成立以降において出土した文字資料の情報に関しては、トゥルファン以外の地域のものほとんど明らかになっていないのが現状であり、今後、集中的に調査をしてゆく必要がある。以上に述べた状況から、本研究は、新中国成立以降においてトゥルファン以外の東トルキスタン各地から出土した、古文書をはじめとする文字資料や文物、またそれらが出土した遺跡に関する情報を収集し公表することを大きな目的としている。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

内陸アジア史学会、監事

1994年4月~現在

4. 桃木 至朗 教授

1955年生。1984年、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。京都大学東南アジア研究センター助手、大阪外国語大学外国語学部専任講師、同助教授、大阪大学教養部助教授、同文学部助教授を経て2001年4月より現職。専攻:東南アジア史/アジア海域史。

4-1. 論文

Momoki, Shiro, Nha Tran nhu la su nghiep dong ho: Kha nang so sanh Viet-Nhat ve lich su Trung dai, Truong Dai hoc Khoa hoc Xa hoi va Nhan van-Khoa Dong phuong hoc (ed.), *Quan he Viet Nam-Nhat Ban, nhung van de lich su va hien dai*, Nha Xuat ban Dai hoc Quoc gia Ha Noi, pp. 156-175, 2003/11

桃木至朗「アジアの大航海時代と日本・東南アジア貿易」茶道資料館(編)『平成14年秋季特別展 わび茶が伝えた名器 東南アジアの茶道具』茶道資料館, pp. 138-149, 2002/10

4-2. 著書

青木康, 桃木至朗ほか 241 人(共著)『世界史小辞典』山川出版社, 2004/1

川北稔, 大内宏一, 杉山正明, 桃木至朗, 加藤祐三, 鈴木董, 田中明彦, 安田喜憲, 重松伸司, 江川温, 南川高志『新編高等世界史 B』帝国書院, 2003/4

川北稔, 桃木至朗(共編)『最新世界史図説 タペストリー』帝国書院, 2003/2

早瀬晋三, 桃木至朗(共編)『岩波講座東南アジア史別巻 東南アジア史研究案内』岩波書店, 2003/1

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

桃木至朗「東南アジア史の読み方についての覚え書き」2000 年度～2002 年度科学研究費基盤研究(A)(2)研究成果報告書『グローバル化の歴史的前提に関する学際的研究』(代表者: 荒野泰典), pp. 204-211, 2003/8

桃木至朗「日本のベトナム研究と歴史学」『学術月報』55-4, pp. 28-31, 2002/4

4-4. 口頭発表

Momoki, Shiro, Nation and Geo-Body in Early Modern Vietnam: A Preliminary Study through Sources of Geomancy, Workshop: Southeast Asia in the 15th Century and the Ming Factor (Asia Research Institute, National University of Singapore), 2003/7

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

4-7-1. 2003 年度、日本学術振興会「国際研究集会助成」、代表者: 桃木至朗

研究集会名: 国際シンポジウム「ベトナムの東アジア史——中国化と脱中国化」

助成金額: 111 万 3605 円

開催日時: 2003 年 5 月 16 日

開催場所: 日本教育会館(東京)

4-8. 学会役員等の引き受け状況

史学研究会 評議員

2000 年 6 月～現在

東南アジア史学会 編集委員

2002 年 1 月～2003 年 12 月

5. 青木 敦 助教授

1964 年生。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。東京大学東洋文化研究所助手、岡山大学文学部助教授等を経て 2001 年 4 月より現職。専攻: 10-14 世紀江南社会経済史。

5-1. 論文

青木敦「地域與國法——南宋「女子分法」與江南民間慣習關係再考——」『中国歴史文化中的「私」与「情」——公義篇』2003/9

青木敦「南宋女子分法再考」『中国——社会と文化』18, pp. 152-172, 2003/6

Aoki, Atsushi, Sung Legal Culture: An Analysis of the Application of Laws by Judges in the Ch'ing-Ming Chi, *Acta Asiatica* 84, pp. 61-79, 2003/2

青木敦「宋代地方官考課制度の基調」『アジア文化研究 都市と平和 魚住昌良・斯波義信両教授記念号』別冊 11, pp. 153-168, 2002/9

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

青木敦「高橋芳郎著『宋代中国の法制と社会』」『社会経済史学』69-3, pp. 113-114, 2003/1

Aoki, Atsushi, "Update on Sung History Studies in Japan: Economic History" *Journal of Song Yuan Studies* 32, pp. 127-136, 2002

青木敦「中島楽章著『明代の訴訟制度と老人制——越訴問題と懲罰権をめぐって』」『法制史研究』51, pp. 127-136, 2002/11

5-4. 口頭発表

青木敦「報告 1 に向けて：「地狭人稠」の表象——長江中下流域の土地稀少化と勸農文」第 3 回比較近世経済史研究会, 2004/3

青木敦「人口土地比率のイメージと南宋の勸農文」第 2 回比較近世経済史研究会, 2003/12

青木敦「土地稀少化と税役制度変革のマクロトレンド」第 1 回比較近世経済史研究会, 2003/9

青木敦「中国史研究と地域社会論」上海師範大学, 2003/9

青木敦「宋代江西之法文化与健康」上海師範大学シンポジウム, 2003/9

青木敦「宋代江西撫州における修譜と限田法——宗族形成の敗者と税役——」宗族シンポジウム, 2003/8

Aoki, Atsushi, Jiangxi and China in the 13th Century, ICAS 3, 2003/8

青木敦「女性は財産を相続し得たか？」霞山会, 2002/9

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2001 年度～2002 年度、若手研究、代表者：青木敦

課題番号：13710212

研究題目：宋～明代の裁判における法治主義的傾向の時期的・地域的差異に関する研究

研究経費：2002 年度 約 1,000 千円

研究の目的：

中国(漢族)社会の秩序維持形式に関する申請者の研究は、法による民事的方面での秩序維持の重視が、なぜ 10～13 世紀の江西・湖南に見られるのかを解明しなくてはならない段階に至っている。そこで今回は、宋～明法制史の最も重要な論点の一つとなっている女子分法および命継分産法がなぜ 13 世紀の江西において存在し得たのかを解明するのが研究目的である。具体的には、宋～明の江西の地域社会に、財産権に関する如何なる原理が存在したのかを発見する。このことにより、民間に滋賀秀三的家族原理とは異なった財産分割の慣習が存在し、それに対応した法制が存在したことが証明できる予定である。これにより、仁井田隆氏、柳田節子氏以後劣勢にあった慣習存在説を再度復興させることが可能となる。また、人口土地比率に関係する、寛郷・狭郷言説についても、資料を収集する。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

宋代史研究会・研究報告研究委員

2001年9月～2005年3月

6. 杉山 清彦 助手

1972年生。1995年大阪大学文学部卒業、1997年大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了、2000年同博士後期課程修了、博士(文学)。1997年～2000年、2001年～2004年日本学術振興会特別研究員(DC、PD)を経て、2004年4月より現職。専攻：大清帝国史／東北アジア史。

6-1. 論文

杉山清彦「漢軍旗人 李成梁一族」岩井茂樹編『中国近世社会の秩序形成』京都、京都大学人文科学研究所, pp.191-236, 2004/3

杉山清彦「ヌルハチ時代のヒヤ制——清初侍衛考序説——」『東洋史研究』62-1, pp. 97-136, 2003/6

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

杉山清彦「満学五十年」ほか35項目、閻崇年編『20世紀世界満学著作提要』北京：民族出版社, 2003/12

杉山清彦「藤紹箴・藤瑤著『満族遊牧経済』」『満族史研究』2, pp. 188-193, 2003/5

杉山清彦「新刊紹介 閻崇年主編『満学研究』第5・6輯」ほか6項目『満族史研究』2, 2003/5

杉山清彦「松村潤著『清太祖実録の研究』(東北アジア文献叢刊2)」『満族史研究』1, pp. 134-143, 2002/5

杉山清彦「新刊紹介 張徳澤著『清代国家機関考略(修訂版)』」ほか5項目『満族史研究』1, 2002/5

杉山清彦「彙報 満族史研究会第16回大会」『満族史研究』1, pp. 163-164, 2002/5

6-4. 口頭発表

杉山清彦「清帝国と海域アジア・内陸アジア——世界史上の16～18世紀——」全国高等学校世界史教員研修会, 大阪大学附属図書館, 2003/8/6

杉山清彦「コメント 谷井俊仁「清朝専制体制論」報告」第16回明清史夏合宿の会, 高野山大学, 2002/7/28

杉山清彦「清初侍衛考——親衛隊よりみた大清帝国の支配構造——」第39回日本アルタイ学会, 2002/7/23

杉山清彦「アジア海域と戦国日本」平成14年度公民館講座「海のアジア史と日本列島——共存の21世紀をめざして——」第3回, 芦屋市立公民館, 2002/7/15

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

杉山清彦 内陸アジア史学会賞 第1回受賞, 授賞団体：内陸アジア史学会, 2002/11

受賞論文：「清初八旗における最有力軍団——太祖ヌルハチから摂政王ドルゴンへ——」『内陸アジア史研究』16, pp. 13-37, 2001/3

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-9 西洋史学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

一般に西洋史学の教育・研究活動においては、ある種の慣行として、古代オリエント、古代地中海世界、中世のヨーロッパ世界、近世以降のヨーロッパ、ロシア、南北アメリカ、オセアニアといった対象領域が想定されている。しかし私たちの専門分野では、こうした地理的枠を限定的なものとしてはとらえていない。歴史研究の枠組みとして真に成り立ちうるのは世界史であって、西洋史学は世界史を西洋文明のインパクトとレスポンスという相互作用から考察することに他ならないと考えるからである。

もちろん西洋史学研究は個別具体的問題の考察から始まるのであり、そこにおける中心的主張は史料分析に基礎を置くものでなければならない。時代や地域によっては史料講読だけですでに多様な語学力が必要とされる。さらにその解釈に当たっては、通史的知識はもとより、人文・社会諸科学の成果を使いこなすだけの知的容量が要求される。しかし、こうして得られた個別の知見は、さらに関係史的、比較史的な考察を通じ世界史の中で意味づけされねばならない。このことは学生にも教員にも等しく要請される課題である。

学生には、一方で個人における強い自覚と自己研鑽を伴った個別テーマへの取り組みが、他方で演習や研究会において他のテーマを研究する教員・学生と活発に議論することが求められる。指導教員による個別指導はこうした自主的努力を補うものと位置づけられている。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 4 助教授 0 講師 0 助手 1

教授：江川 温、竹中 亨、秋田 茂、藤川 隆男

助手：水野 祥子

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
49	13	17	1	0	0	1	1	2

※うち留学生 4 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業者	大学院		博士号学位授与数	出身の研究者
		博士前期(M)修了者	博士後期(D)修了者		
'02	15	7	1	1	0
'03	11	3	3	2	2
小計	26	10	4	3	2

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	1	1	2
'03	0	2	2
計	1	3	4

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

浅野敬一「現代アメリカ国家体制における中小企業政策」2003/3

主査：竹中亨 副査：江川温、藤川隆男

【論文博士】

秋田茂 「イギリス帝国とアジア国際秩序——ヘゲモニー——国家から帝國的な構造的権力へ」2003/10

主査：川北稔 副査：竹中亨、藤川隆男

大黒俊二「嘘と食欲——西欧中世の商業・商人観——」2004/3

主査：江川温 副査：川北稔、竹中亨、藤川隆男

山本正 「『王国』と『植民地』——近世イギリス帝国のなかのアイランド——」2002/7

主査：川北稔 副査：竹中亨、藤川隆男

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	1	0	0	0	0	1
'03	7	0	1	0	0	8
計	8	0	1	0	0	9

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	0	3	8	0	0	11
'03	1	6	9	0	0	16
計	1	9	17	0	0	27

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

松田祐子「フランス第三共和政前半ブルジョワ社会における『主婦』の誕生」『西洋史学』(日本西洋史学会), 207, pp. 64-78, 2002/12

【2003年度】

上山益己「中世盛期フランスの両方における歴史叙述——共属観念創出の試み——」『西洋史学』(日本西洋史学会), 210, pp. 45-66, 2003/9

左近幸村「ゼムストヴォ医師としてのアントン・チェーホフ」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 1, pp. 113-129, 2004/2

津田博司「正戦と反戦のはざまに——大戦間期イギリスにおける戦没者追悼をめぐって——」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 1, pp. 74-92, 2004/2

中尾恭三「前3世紀, サラピス神崇拜のデロス島への伝播」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 1, pp. 93-112, 2004/2

中村武司「ナポレオン戦争の記憶とセント・ポール大聖堂」, 『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 1, pp. 57-73, 2004/2

堀内真由美「イギリス大戦間期のフェミニズムと女子教育」『西洋史学』(日本西洋史学会), 211, pp. 22-43, 2003/12

松田祐子「良妻賢母主義」『女性空間』20周年特別号(日仏女性資料センター), pp. 188-190, 2003/6

水田大紀「19世紀イギリス公開競争試験における受験生とクラミング——官僚の「ジェントルマンらしさ」と自助による「競争精神」の浸透——」『歴史学論集: 千葉大学西洋史研究室大学院生論文集成』(千葉大学西洋史研究室), 4, pp. 37-109, 2004/2

(2)口頭発表(研究会発表については一部のみを掲載)

【2002年度】

紫垣聡「中世後期上バイエルンにおける国家形成と領邦都市ミュンヘン」関西中世史研究会(発表学会名・主催学会名とも同じ), 関西中世史研究会(発表学会名・主催学会名とも同じ), 白雲荘/京都市, 2002/10/26

田中晶子「1950年代西ドイツにおける消費文化論」第4回自動車文化論研究会, 自動車文化論研究会(社団法人システム科学研究所(ISSR)主催), 長楽館/京都, 2003/3/14

中村武司「王立海軍と近世イギリス社会——王政復古期海軍将校団の社会的編成について」第7回ワークショップ西洋史・大阪, 大阪大学西洋史学会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2002/10/5

松田祐子「良妻賢母主義の日仏比較 1870-1845」第7回ワークショップ西洋史・大阪(大阪大学西洋史学会), 2002/10/5

宮崎章「ネイション・ビルディングの試み——アトリー政権の福祉国家・コモンウェルス政策——」日本西洋史学会第52回大会, 日本西洋史学会, 東京外国語大学/東京都府中市, 2002/5/19

【2003年度】

上山益己「中世盛期フランスの両方における歴史叙述——領邦における共属意識をめぐって——」日本西洋史学会 第53回大会, 愛知県立大学/愛知県愛知郡, 2003/5

紫垣聡「中世後期ミュンヘンの都市自治と領邦君主権」第8回ワークショップ西洋史・大阪, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/6

Hiroshi Tsuda, 'How can you sell Australian history in Japan? In a country where Australian means "debt"', International Australian Studies Association conference (Teaching across Cultures: Australian Studies in an International Context), International Australian Studies Association (InASA), St Lucia campus, The University of Queensland, Brisbane, Australia, 23 August 2003 (co-presented with Takao Fujikawa)

中尾恭三「ヘレニズム時代 ギリシア世界へのサラピス崇拜の拡がり」第8回ワークショップ西洋史・大阪, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/6

中尾恭三「前3世紀デロス島へのサラピス神崇拜の伝播」古代史研究会, 京都大学/京都府京都市, 2003/4

中村武司「ナポレオン戦争の記憶とセント・ポール大聖堂——イギリスの「戦争と記憶」に関する試論——」2003年度広島史学研究会大会・西洋史部会, 広島大学/広島県東広島市, 2003/10

松田祐子「第三共和政前半のパリの『乳母制度』」日本西洋史学会 第53回大会, 愛知県立大学/愛知県愛知郡, 2003/5

鷺田睦朗「ローマ期におけるイタリア産ワインの産地銘柄」日本西洋史学会 第53回大会, 日本西洋史学会, 愛知県立大学/愛知県愛知郡, 2003/5

(3) その他(書評・翻訳など)

【2003年度】

Hiroshi Tsuda, 'How can you sell Australian history in Japan? In a country where Australian means "debt"', *Crossings: the Bulletin of the International Australian Studies Association*, vol.8-2, 2003 (co-authored with Takao Fujikawa)

中村武司, 林剛志(翻訳) アンドリュー・ポーター著「イギリス帝国史研究の現在」『パブリック・ヒストリー』1, pp. 30-48, 2004/2

水田大紀「〈研究動向〉日本におけるジェントルマン研究の展開と課題」南塚信吾編『社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 近代ヨーロッパ政治文化の研究Ⅱ』(千葉大学社会文化科学研究科), 95, pp. 35-42, 2004/2

宮崎章「〈書評〉平野千果子著『フランス植民地主義の歴史——奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで——』『史林』(史学研究会), 86-4, pp. 119-126, 2003/7

森本慶太「美根慶樹著『スイス 歴史が生んだ異色の憲法』『西洋史学』(日本西洋史学会), 211, p. 84, 2003/12

鷺田睦朗「〈書評〉南川高志著『海のかなたのローマ帝国——古代ローマとブリテン島——』『パブリック・ヒストリー』1, pp. 134-137, 2004/2

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

津田博司 The 2002-2003 Australia-Japan Foundation Sir Neil Currie Memorial Australian Studies Award(豪日交流基金サー・ニール・カリー記念オーストラリア研究助成プログラム), 2003年度

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD: 1名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計1名)

2003年度 PD: 0名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部: 0名 大学院: 3名 (計3名)

2003年度 学部: 0名 大学院: 4名 (計4名)

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度～2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

浅野敬一 博士後期課程, 東京工業高等専門学校, 助教授, 2003/4

水野祥子 博士後期課程, 大阪大学大学院文学研究科, 助手, 2003/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002年度～2003年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4 名

2002年度：2名 2003年度：2名

<内訳> システムエンジニア 2名 教師 2名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

2002年度 『西洋史学』205～208号 学術雑誌(学会誌)

2003年度 『西洋史学』209～212号 学術雑誌(学会誌)

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

グローバル・ヒストリー・セミナー(経済学研究科と共催)	2003年度～現在
日本西洋史学会『西洋史学』編集部	2002年度～現在
大阪イギリス史研究会	2002年度～現在
イギリス都市生活史研究会	2002年度～現在
イギリス帝国史研究会	2002年度～現在
大阪大学西洋史学会	2002年度～現在

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

大学院生に対しては、学内での教育・研究を支援するだけでなく、海外留学を奨励し、毎年3～5人が常時留学している状況にある。これらの学生に対する財政的な支援は今後の課題の一つであろう。西洋史専門分野は、社会人学生や他大学の学生の受け入れにも熱心であるが、スタッフの不足は深刻である。さらに、IT教育の充実と研究への利用を重要な目標とし、データベースの作成とウェブ上での公開を研究・教育活動の一部としている。現在、100万字を越えるデータを西洋史ホームページ上で検索可能にしておき、IT利用への取り組みは進んでいる。

13-2 研究活動

西洋史研究室は、雑誌『西洋史学』や『パブリック・ヒストリー』の編集やワークショップ西洋史・大阪、大阪イギリ

ス史研究会を恒常的に主催するだけでなく、イギリス都市生活史研究会、イギリス帝国史研究会、近世イギリス史研究会、「近代世界システムと地域文化」研究会(阪大)、世界における「白人」の構造化研究会(民博)、「グローバルヒストリー・セミナー」(阪大、サントリー文化財団の後援)などの事務局や代表者を提供することで、西洋史学や他分野との共同研究の結節点としての役割を果たしてきた。公的な財政支援をほとんど受けずに、共同研究機関のごとき役割を果たせるのは、スタッフの高い能力と、外部の研究者の高い評価を示唆している。また、日本西洋史学会の代表者や編集委員、日本歴史学協会や史学研究会、日仏歴史学会の役員を提供し、西洋史学界を支えてきた。

西洋史研究室のスタッフは、個人としての各個の研究にのみ注力するのではなく、岩波講座世界歴史の編集や辞典類の編集、フランス史・ドイツ史・イギリス史・オーストラリア史・中世史などの概説の執筆など、学界の共有財産の形成や基礎的研究の充実にも強い要請があり、積極的に参加している。それぞれ個人を見ると、川北は生活史と世界システム論を組み合わせ、壮大な歴史理論を構築している。その偉業は海外でも認められており、ロイヤル・ヒストリカル・ソサエティのフェロウとなった。江川は中世の領主層や王権とその儀礼に関する研究で学界をリードし、竹中は日独関係の研究で国際評価を受ける一方、西洋史学会で西洋史研究のあり方に問題提起をしたのは記憶に新しい。藤川は人種・ジェンダーなど新たな研究領域の開拓に取り組み、秋田はアジア国際秩序を中心に、新たな関係史的な視点からグローバルヒストリーの構築をめざしている。外国人研究者を招いた国際セミナー(ワークショップ)を実施するとともに、Association of Asian Studies (AAS) や Global Economic History Network (GEHN)の研究ワークショップ等で研究成果を発表している。中川は在英外国人という視点からイギリス近世史の読み替えに、独創性を発揮している。水野は環境史という multi-disciplinary な分野に関心をもち、関西で環境史研究会を立ち上げるなどしている。これらの研究活動は、各種の科学研究費だけではなく、松下国際財団・村田財団・サントリー文化財団・旭硝子財団・豪日交流基金などの支援などのかたちで社会的評価を受けている。

Ⅲ. 教員の研究活動(2002年度～2003年度の過去2年間)

1. 江川 温 教授

1950年生。1979年、京都大学大学院文学研究科博士課程(西洋史学専攻)中退。文学修士(京都大学、1977年)。大阪大学助手、同講師、同助教授を経て1996年、教授。2004年4月より、放送大学客員教授。専攻：西欧中世史。

1-1. 論文

江川温「貴族とはなにか——西ヨーロッパ中世の場合——」笠谷和比古編『国際シンポジウム 公家と武家 その比較文明史的研究 March 10-15, 2003』pp. 209-215, 2004/1

江川温「西欧の民族史観とヨーロッパ・アイデンティティ」谷川稔編『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』, 山川出版社, pp. 117-134, 2003/11

1-2. 著書

川北稔, 大内宏一, 杉山正明, 桃木至朗, 加藤祐三, 鈴木ただす, 田中明彦, 安田喜憲, 重松伸司, 江川温, 南川高志『新編 高等世界史 B』帝国書院, 2003/4

江川温, 中村生雄編『死の文化誌』昭和堂, 2002/10

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

江川温(事典項目執筆)「位階制(ヨーロッパ, 教会の)」「教育制度(中世ヨーロッパの)」「教会(組織)」「教会会議」「教皇」「聖職者」「聖職売買」尾形勇, 樺山紘一, 川北稔, 加藤友康, 岸本美緒, 黒田日出男, 佐藤次高, 南塚信吾, 山本博文編『歴史学事典(宗教と学問)』11, 弘文堂, 2004/2

江川温(翻訳), イヴ・サシエ「9～12世紀フランスにおける王権, 権門, 助言による統治」笠谷和比古編『国際シンポジウム 公家と武家 その比較文明史的研究 March 10-15, 2003』pp. 231-241, 2004/1

江川温(コメント), シンポジウム記録「ピエール・ノラ編『記憶の場』をどう読むか——日本語版の投げかけるもの——」

『Quadrante 地域・文化・位置のための総合雑誌』東京外国語大学海外事情研究所, pp. 45-48, 2003/3
江川温(事典項目執筆)「コンフレリー」『神の国』「職分論」尾形勇, 樺山紘一, 川北稔, 加藤友康, 岸本美緒, 黒田日出男, 佐藤次高, 南塚信吾, 山本博文編『歴史学事典(身分と共同体)』10, 2003/2
江川温(翻訳), アンドレ・ヴォーシェ「カテドラル」, ピエール・ノラ編, 谷川稔, 杉本淑彦, 長井伸仁監訳『記憶の場』3, 岩波書店, pp. 305-344, 2002/12
江川温(書評), ジャック・ル・ゴフ著, 岡崎敦, 森本英夫, 堀田郷弘訳『聖王ルイ』(新評論, 2001/11)『西洋史学論集』pp. 108-113, 2002/12
江川温(対談録)「旅する巨人ヘロドトスと仲間たち——樺山紘一・周藤芳幸との座談——」『歴史諸君』(『諸君』5月臨時増刊号), pp. 140-153, 2002/5

1-4. 口頭発表

江川温「貴族とはなにか——西ヨーロッパ中世の場合——」国際シンポジウム 公家と武家 その比較文明的的研究 2003年3月; 笠谷和比古編『国際シンポジウム 公家と武家 その比較文明的的研究 March 10-15, 2003』pp. 209-215, 2004/1

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日仏歴史学会・理事	2003年4月～現在
日本西洋史学会・編集委員	1979年4月～現在

2. 竹中 亨 教授

1955年生。1983年、京都大学大学院文学研究科博士課程退学。文学博士(京都大学、1994年)。東海大学講師、同助教授、大阪大学教養部助教授を経て、1995年より現職。専攻：近代ドイツ史。

2-1. 論文

竹中亨「歴史研究とシステム論的権力・帝国」『パブリック・ヒストリー』1, pp. 19-29, 2004/2
竹中亨『是に依って快樂を得むことを期する勿れ』——明治における洋楽受容の社会文化的要因』『待兼山論叢(史学篇)』37, pp. 1-25, 2004/1
竹中亨「文明批判としての「郷土」——ドイツ近代における環境保護の思想的背景」『歴史科学』175, pp. 1-10, 2003/12

2-2. 著書

竹中亨『帰依する世紀末——ドイツ近代の原理主義者群像』ミネルヴァ書房, 2004/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

竹中亨「グローバル化の現状と展望」『国際理解教育部会誌』2003年度, 4, pp. 2-24, 2004/3

竹中亨「書評『日英兵器産業とジーマンス事件——武器移転の国際経済史』奈倉文二他著『社会経済史学』69-6, pp. 77-78, 2004/3

2-4. 口頭発表

竹中亨「グローバル化の現状と展望」広島県高等学校教育研究会国際理解教育部会研究会, 2003/11

竹中亨「『舞姫』と憲法のはざま——独逸を見る」第106回懐徳堂秋期講座, 2003/11

竹中亨「エコロジーは左か?——ドイツ近代における環境保護の思想的背景」総合地球環境学研究所第11回地球研セミナー, 2003/9

竹中亨「ドイツ現代史研究の立場から」ドイツ現代史研究会シンポジウム「ネグリ/ハート『<帝国>』を読む——ドイツ現代史研究への挑戦?」2003/7

竹中亨「ヨーロッパ史におけるポピュリズム」アメリカ学会第37回年次大会, 2003/6

竹中亨「ドイツ近代における環境保護の思想的背景」大阪歴史科学協議会3月例会, 2003/3

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2002年度、村田学術振興財団研究助成、代表者：竹中亨、研究分担者：なし

研究題目：「市場化・グローバル化と新宗教——19世紀末ドイツにおける反近代」

助成金額：2002年度 600千円

2-8. 学会役員等の引き受け状況

『西洋史学』編集委員

1993年4月～現在

3. 秋田 茂 教授

1958年生。1985年、広島大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学)(大阪大学)2003年。大阪外国語大学外国語学部助手、同講師、同助教授を経て、2003年10月より現職。専攻：イギリス帝国史、アジア国際関係史、グローバルヒストリー。

3-1. 論文

秋田茂「グローバルヒストリーとアジア世界」『えくす・おりえんて』(大阪外国語大学言語社会学会), 10, pp. 75-99, 2004/2

秋田茂「帝国的な構造的権力——イギリス帝国と国際秩序」山本有三編著『帝国の研究——原理・類型・関係』7, 名古屋大学出版会, pp. 257-290, 2003/11

秋田茂「南アジアと世界システム論」長崎暢子編『現代南アジア 1 地域研究への招待』5, 東京大学出版会, pp. 129-149, 2002/9

秋田茂「国際経済秩序としてのパックス・ブリタニカ」社会経済史学会編『社会経済史学会創立70周年記念・社会経済史学の課題と展望』14, 有斐閣, pp. 170-181, 2002/5

3-2. 著書

秋田茂『イギリス帝国とアジア国際秩序——ヘゲモニー国家から帝国的な構造的権力へ——』名古屋大学出版会, 2003/2

秋田茂, 水島司共編著『現代南アジア(世界システムとネットワーク)』6, 東京大学出版会, 2003/2

Shigeru Akita (ed.), *Gentlemanly Capitalism, Imperialism and Global History*, Palgrave-Macmillan, 2002/11

松田武, 秋田茂編『ヘゲモニー国家と世界システム: 20世紀をふりかえって』山川出版社, 2002/4

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

Shigeru Akita, "British Economic Interests and International Order of Asia in the 1930s", 2004 Annual Meeting of Association for Asian Studies, at San Diego, California, 4-7, 2004/3

Shigeru Akita, "The British Empire and the International Order of Asia: From the Hegemonic State to the Imperial Structural Power", The 2nd GEHN (Global Economic History Network) Workshop on Imperialism and Economic Change, at Irvine, California, 15-17, 2004/1

<http://www.lse.ac.uk/collections/economicHistory/GEHN/GEHN.htm>

Shigeru Akita, "From Imperial History to Global History", イギリス帝国史研究会 2003 年度大会「イギリス帝国とグローバリゼーション」京大会館, 2003/12/6-7

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

秋田茂 第 20 回大平正芳記念賞, 大平正芳記念財団, 2004/6

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2002 年度～2003 年度、基盤研究(C)(2)、代表者: 秋田茂

課題番号: 14510408

研究題目: グローバルヒストリーにおける 1930～50 年代のアジア国際秩序とイギリス帝国

研究経費: 2002 年度直接経費 2,200 千円

2003 年度直接経費 1,300 千円

研究の目的:

(1)近年のグローバリゼーション(国際化)の急速な進展にともない、人文社会科学の領域でも研究の国際化と研究テーマの見直しが行われている。歴史学の分野では、従来の一国史的枠組みを取り払って、広範な地域間の相互交流を通じた世界の一体化の過程を明らかにしようとする、グローバルヒストリー研究が注目を集めている。

申請者は、1997 年より断続的に 5 年間にわたって、日本の西洋史学界および社会経済史学界において、グローバルヒストリー研究の重要性を指摘し、その最新の研究動向を紹介してきた。また、グローバルヒストリーの観点にもとづく具体的な研究事例として、1930 年代のアジアにおける国際秩序の形成過程を明らかにしてきた。

その結果、現代のグローバル化の歴史的起源とその特徴を理解するには、それに先行する二十世紀前半から中葉にかけて見られた、グローバル化の萌芽と発展を歴史的に解明すること、具体的には、1930 年代から 1950 年代にかけて、イギリス帝国・コモンウェルスがアジアにおいて果たした役割を再考する必要があることが明らかになった。

従って、本研究では、1930～50 年代におけるアジア地域の国際政治経済秩序形成の過程で、イギリス帝国・コモンウェルスがいかなる積極的役割を果たしたのか、アジア独自の地域ネットワークといかなる関係を保ち、それが現代東アジアの経済発展に対していかなる影響を及ぼしたのかを考察したい。

(2)この研究では、アジア諸地域の経済発展と世界システムとの関連を、内外の最新の研究成果を総合して明らかにすることに重点を置いている。従来の研究が、一国史的な国民国家・国民経済の枠組みを前提にして議論してきたのに対して、本研究は、アジア諸地域における対外関係に規定された外的要因が、経済発展と国際秩序の形成にいかなる役割を果たしたのか、「外からの要因」を重視している。

世界システム論に依拠しながらも、従来のシステム論が西洋中心主義史観に影響されてきたことを是正するために、

アジア地域の世界システム内部における「相対的独自性」を重視する。その「相対的独自性」を保証したメカニズムを、イギリス帝国・コモンウェルスと地域ネットワークに求め、その関連性を考察する。

この研究によって、世界システム論、イギリス帝国史研究、そしてアジア経済史研究の成果をひとつにまとめあげて、日本独自のグローバルヒストリー研究の在り方を提示できると考える。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 2003年度、サントリー文化財団「社会と文化に関する特別研究助成」、代表者：秋田茂、研究分担者(8)

研究題目：アジアから見たグローバルヒストリーの構築

助成金額：1,550千円

3-8. 学会役員等の引き受け状況

日本西洋史学会・『西洋史学』編集委員

2000年10月～現在

西洋史研究会(東北大学)・評議員

1998年10月～現在

4. 藤川 隆男 教授

1959年生。大阪大学大学院文学研究科前期課程修了。文学修士(大阪大学)、MA(ANU)。帝塚山大学教養学部講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：西洋史、とくにオーストラリアの歴史。

4-1. 論文

Takao Fujikawa How can you sell Australian history in Japan? In a country where Australian means 'debt',

Crossings: the Bulletin of the International Australian Studies Association 8-2, 2003/12

Takao Fujikawa "Christian Missions in Australia since c.1800", *State and Empire in British History*,

Proceedings of The Fourth Anglo-Japanese Conference of Historians 2003, 2003/1

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

藤川隆男「歴史家ケン・イングリシとオーストラリアの第1次世界大戦の記憶」2004/2

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2003年度、2004年度、基盤研究(C)(2)、代表者：藤川隆男

課題番号：15510200

研究題目：19世紀オーストラリア連邦運動の研究

研究経費：2003年度 900千円

研究の目的：

主な目的は、オーストラリアにおける史料の調査と、既存の史料のデータ・ベース化である。オーストラリア連邦運動の集会に関するデータの基本項目を整理して、これをデータ・ベース化することが第1の目的である。これによって、

連邦運動に関する基礎的な事実の確定が、従来に比べてはるかに容易になり、今後の研究の展開の基礎にできる。第 2 に、連邦憲法制定会議の議事録のデータ・ベース化の手法を検討する。これは、記述史料を数量化して、より体系的な分析を行うための第 1 段階である。デジタル化されたデータをいかに有効活用できるかは、データ・ベースの設計に依存しているため、今後の活用の見通しを立てながら、設計の基本構想は立てる。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

日本西洋史学会・『西洋史学』編集委員

1996 年 4 月～現在

5. 水野 祥子 助手

1970 年生。大阪大学文学研究科 2001 年単位取得退学。博士(文学)(大阪大学)。2003 年より現職。専攻：イギリス史・環境史。

5-1. 論文

水野祥子「植民地支配と環境保護主義——英領インドにおける「乾燥化理論」の展開——」『文学・芸術・文化』近畿大学文学部論集, 15-1, 2003/12

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

水野祥子「ナショナル・トラスト——世紀転換期イギリスの景勝地保護と国民統合」立教大学東アジア地域環境問題研究所シンポジウム, 2003/6

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

日本西洋史学会・『西洋史学』編集委員

2003 年 4 月～現在

2-10 考古学

はじめに、教育・研究活動の概要とその特色

2003年度の専任スタッフは都出比呂志教授、福永伸哉助教授、高橋照彦助教授の3名である。教員の専門分野は都出教授が弥生・古墳時代および比較考古学、福永助教授が弥生・古墳時代、高橋助教授が奈良・平安時代を中心とする歴史考古学である。また、キャンパス内の文化財調査業務を行う埋蔵文化財調査室に所属する寺前直人助手が、本務の合間を縫って兼任として活動をサポートしている。

本学考古学分野の大きな特色としては次の3点があげられる。

第一は、考古学研究に必要な発掘調査、出土資料分析などの方法論や技術面に関する確実な基礎力の習得を重視していることである。そのために1988年の講座開設以来、毎年欠かさずフィールド調査を行い、成果を学術報告書にまとめる取り組みを継続している。

第二は、世界の考古学の研究動向に目を配りながら比較研究を積極的に進め、広い視野で日本考古学の研究に取り組んでいることである。とくに教員や大学院生は海外の発掘調査や学会にも参加して、自らの研究の意味をつねに問うことを心がけている。

第三は、教育・研究活動を通じた社会との積極的なかかわりを重視していることである。地域社会に入って行うフィールド調査、現地説明会、成果報告会などを通じて、地域の学校・生涯教育活動などにもかかわり、学問と社会とのあるべき関係を追求している。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 1 助教授 2 講師 0 助手 1

教授：都出 比呂志

助教授：福永 伸哉、高橋 照彦

助手：寺前 直人(兼任)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
24	9	4	0	1	0	2	0	0

※うち留学生 2 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'02	8	3	0	0	1
'03	6	2	1	1	1
小計	14	5	1	1	2

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	1	0	1
'03	0	0	0
計	1	0	1

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

菊池芳朗「東北古墳時代社会の考古学的研究」2003/3

主査：福永伸哉 副査：都出比呂志、梅村喬、高橋照彦

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	3	0	0	0	0	3
'03	4	0	0	0	0	4
計	7	0	0	0	0	7

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	0	0	4	0	0	4
'03	0	6	1	0	0	7
計	0	6	5	0	0	11

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

西谷彰「弥生時代における定型高坏の成立過程」『人類史研究』(人類史研究会), 13, pp. 93-109, 2002/10

西谷彰「弥生時代後半期における土器編年の併行関係」『古文化談叢』(九州古文化研究会), 48, pp. 85-107, 2002/5

林正憲「古墳時代前期倭鏡における2つの鏡群」『考古学研究』(考古学研究会), 49-2, pp. 88-107, 2002/9

【2003年度】

高松雅文「考古学からみた渡来人」『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 175, pp. 29-30, 2004/1

中原計「木製品における弥生時代前期の画期」『待兼山論叢(史学篇)』37, pp. 27-50, 2003/12

中村大介「祭祀遺物にみる縄文時代から弥生時代への変化とその意義」(上)(下)『古代学研究』162, pp. 22-37, 2003/9,
163, pp. 21-33, 2003/12

中村大介「弥生文化早期における壺形土器の受容と展開」『立命館大学考古学論集』III, pp. 415-432, 2003/5

(2)口頭発表

【2002年度】

中原計「弥生時代における鋳製作技法の変遷」京都弥生談話会, 京都学生会館/京都, 2002/5/19

中村大介「西日本における木棺墓の成立と地域性」京都弥生談話会, 京都学生会館/京都, 2002/7/13

中村大介「夜臼式期の小壺の成立」京都縄文文化研究会, 立命館大学/京都, 2002/7/6

三好玄「山陰系大型土器棺の成立」京都弥生談話会, 京都学生会館/京都, 2002/7/13

【2003年度】

高松雅文「古墳時代後期における地域支配構造」大阪歴史学会考古部会/大阪, 2003/5/30

高松雅文「考古学からみた渡来人」大阪歴史科学協議会/大阪, 2003/4/12

中村大介「石剣と遼寧式銅剣の関係にみる並行関係」東アジア古代史・考古学研究会交流会/東京, 2003/12/7

中村大介「支石墓の系統と展開」東アジア古代史・考古学研究会交流会/東京, 2003/12/6

中村大介「支石墓の展開と地域性」朝鮮古代研究会/京都, 2003/10/31

中村大介「近畿地方における縄文時代後・晩期の土偶の系譜とその意義」古代学研究会/大阪, 2003/5/17

渡辺今日子「石器消滅過程の地域的様相」京都弥生談話会/京都, 2003/5/8

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2003年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2003年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(2002 年度～2003 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専等の常勤職員として就職した者について)

中原計 博士後期課程(在学中)、徳島大学埋蔵文化財調査室、助手、2004/2

林正憲 博士後期課程、奈良文化財研究所、研究員、2002/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002 年度～2003 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2002 年度：0 名 2003 年度：1 名

<内訳> 大阪府埋蔵文化財センター 1 名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

2003 年度『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』(課題番号：13410115) 2001 年度～2003 年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書：研究代表者：福永伸哉

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

考古学研究会関西例会事務局

2002 年度～2003 年度

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去 2 年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

考古学分野における教育の特色は、自らの学問的関心に基づく研究テーマと、学外組織(自治体の教育委員会など)と協力して行う共同プロジェクトにかかわる研究テーマの二者を学生に課すことにより、幅広い研究能力を向上させるとともに学問の社会的意味を考えさせることにある。この方針を実現するために具体的に取り組んでいる次の 3 つの方向性に照らして 2002 年度、2003 年度の活動を述べることにする。

第一は、考古学研究に必要な発掘調査、出土資料分析などの方法論や技術面に関する確実な基礎力の習得を重視することである。夏期休暇や春期休暇の期間を利用して、2002 年度は川西市勝福寺古墳、2003 年度は勝福寺古墳および亀岡市篠窠跡群を対象とした現地調査、出土資料整理作業を行い、それぞれ学術的にも貴重な成果を得た。また、調査テーマにかかわる学生の自主的な勉強会も大学院生をリーダーとして頻繁に開催されており、専任教員スタッフが少ない現状を補って教育効果をあげている。

第二は、世界の考古学の研究動向に目を配りながら比較研究を積極的に進め、広い視野で日本考古学の研究に取り組むことである。博士後期課程から学部 2 回生までのすべての学年の演習において英書講読を取り入れているほか、2002 年度にはヨーロッパ旧石器時代の研究者、2003 年度には東北アジア新石器時代の研究者による集中講義を開講して、そうした教育方針の徹底につとめた。

第三は、教育・研究活動を通じた社会との積極的なかわりを重視することである。この点では、川西市において地元教育委員会と共同で行ったフィールド調査・現地説明会・成果報告会などを通じて地域の学校・生涯教育活動などにもかわり、学問と社会とのあるべき関係を追求した。また、これに関連して行った、インターネットで調査情報を即時発信する活動が、「研究活動面における社会との連携及び協力」評価報告書(大阪大学)(大学評価・学位授与機構、2003年3月)において、本学の特に優れた点として評価を受けた。

以上のように、この間の考古学分野における教育活動はおおむね所期の効果を発揮したと考えられる。このことは大学院修了生の専門職への就職状況にもあらわれているが、そのいっぽうで大学院生の研究論文発表数がやや伸び悩んでいることは今後の改善点として認識しておく必要がある。とくに大学院生層にとって発表の場が限られているという学界事情もあり、研究室紀要的な刊行物を創刊するなどの方策を検討中である。

13-2 研究活動

組織全体による調査・研究活動としては、従来から「国家形成期における古墳時代の評価」を課題に掲げて、古墳の発掘調査を継続してきた。2002年度～2003年度には、科学研究費補助金を受け、兵庫県川西市教育委員会と共同で、川西市所在の勝福寺古墳の発掘を行っている。その発掘調査の成果公開については、新聞報道や現地説明会のほか、インターネットによる情報発信や市民報告会などの方法を講じ、従来以上に積極的に社会的な要請に応えている。

また、学術的には、上記の科学研究費補助金に伴う研究成果報告書の形で、本文 350 頁の『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』を刊行している。その報告書では、勝福寺古墳の発掘成果だけではなく、考古学の現教員に加え、本専門分野の修了生を含めたメンバーによる共同研究による研究論文をもおさめている。その内容は、「国家形成期における古墳時代」の終末を論じた最新の研究成果として、学界においても注目を集めている。さらに現在も、勝福寺古墳の発掘成果をより深めた考察を加える形で、発掘調査の総括報告書を作成すべく、鋭意作業を進行中である。

さらに、組織的な研究活動の新たな領域として、古墳時代に継続する奈良・平安時代を取り上げ、その実践的な取り組みとして京都府亀岡市の篠塚跡群の調査も開始している。「国家形成期における古墳時代」を評価する上でも、国家成立後の時期との対比検討を必要とするのは言うまでもない。また、教育上も、学生が古墳以外の多様な遺跡の調査を経験することは、プラス作用を果たしている。例えば、幅広い遺跡調査に携わらざるをえない埋蔵文化財行政の専門職員などを養成する上で重要な役割を持っており、発掘調査以外にも遺跡分布調査を体験するなど、従来はあまり取り組めなかった考古学的な活動を行うことができた点でも意義深い。

このほか、教員のそれぞれを核にした研究活動も推進しており、その一方で考古学研究会の関西支部の事務局を受け入れるなど、学会活動において様々な寄与を果たしている。

なお、上記の調査・研究活動を継続して進める上では、講座割り当ての校費だけでは困難が伴う。この点は、以前にも増してさらに切実であり、資金獲得に向けて引き続き努力を払ってはいるものの、なおも大きな課題である。

以上の通り、研究活動としては、従来の路線を継承しつつも、その欠を補うために新たな取り組みを開始し、種々の具体的な成果も公にしており、着実な進展状況を示すものと評価されるであろう。

Ⅲ. 教員の研究活動(2002年度～2003年度の過去2年間)

1. 都出 比呂志 教授

1942年生。大阪府立高津高校卒。京都大学大学院博士課程中退。文学博士。京都大学助手、滋賀大学教育学部助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：考古学／比較考古学。

1-1. 論文

都出比呂志「河内王権と古代難波」直木孝次郎・中尾芳治編『古代の難波と難波宮』学生社, pp. 64-115, 2003/8

都出比呂志「項目・邪馬台国から倭政権へ」直木孝次郎編『謎につつまれた邪馬台国』作品社, pp. 233-251, 2003/4

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

都出比呂志 八日市市教育功労賞, 2004/8

都出比呂志(雪野山古墳発掘調査団) 雄山閣考古学特別賞, 1997/6

都出比呂志 浜田青陵賞, 1989/6

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2003年度、研究助成金、助成金獲得者：都出比呂志

助成金名：人文科学・社会科学に関する研究助成

研究題目：遺跡出土動物遺存体に基づく近世食文化の研究

助成団体名：サントリー文化財団

助成金額：500千円

1-7-2. 2002年度、研究助成金、助成金獲得者：都出比呂志

助成金名：文化財維持・修復事業助成金

研究題目：大阪府藤井寺市野中古墳出土鉄器修復事業

助成団体名：住友財団

助成金額：2,000千円

1-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2. 福永 伸哉 助教授

1959年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。大阪大学埋蔵文化財調査室助手を経て、1994年より現職。専攻：日本考古学(特に弥生時代、古墳時代)。

2-1. 論文

福永伸哉「畿内北部地域における前方後円墳の展開と消滅過程」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』科学研究費補助金成果報告書, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 55-66, 2004/3

福永伸哉「交易社会の発展と赤坂今井墳丘墓」『赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書』峰山町教育委員会, pp. 133-143, 2004/3

福永伸哉「前方後円墳の出現と国家形成」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会, pp. 121-130, 2004/3

福永伸哉「三角縁神獣鏡と葛城の前期古墳」『古代葛城とヤマト政権』学生社, pp. 34-52, 2003/5

福永伸哉「昼飯大塚古墳築造の時代背景」『史跡昼飯大塚古墳』大垣市教育委員会, pp. 485-494, 2003/3

福永伸哉「交易社会の光と陰——時代のうねりと丹後弥生社会」『青いガラスのきらめき——丹後王国がみえてきた——』
大阪府立弥生文化博物館, pp. 94-99, 2002/4

2-2. 著書

大山喬平, 脇田修, 村田路人, 平雅行, 福永伸哉ほか『日本史 B』実教出版株式会社, 2004/1

福永伸哉編, 岡村秀典, 車崎正彦, 小山田宏一, 岸本直文, 森下章司『シンポジウム三角縁神獣鏡』学生社, 2003/5

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

福永伸哉「三角縁神獣鏡と邪馬台国」『倭国誕生と大王の時代』週刊朝日百科日本の歴史 38, 朝日新聞社, pp. 234-235,
2003/2

福永伸哉「三面の銅鏡が語るもの」『出土品が語る森尾古墳』豊岡市教育委員会, pp. 10-12, 2002/8

福永伸哉「三角縁神獣鏡」『季刊考古学』80, 雄山閣, pp. 87-90, 2002/8

福永伸哉「温故知新 かんさい 21 京都・赤坂今井墳丘墓」日本経済新聞, 2002/8/29

福永伸哉「周溝墓」「墳丘墓」「墳墓」「墓地・墓域」「四隅突出型墳丘墓」『日本考古学事典』三省堂, 2002/5

2-4. 口頭発表

福永伸哉「考古学から見た邪馬台国と北河内」『邪馬台国と北河内』寝屋川歴史シンポジウム, 寝屋川市教育委員会, pp.
30-35, 2004/3

門林理恵子, 河合由起子, 林正憲, 福永伸哉「発掘調査のインターネット発信と連動したデジタルアーカイブ利用の試み」
『人文科学とコンピュータシンポジウム』情報処理学会, pp. 147-154, 2003/12

福永伸哉「銅鐸から銅鏡へ」シンポジウム 考古学から見た邪馬台国への道のり, 兵庫県教育委員会, 2003/11

福永伸哉「安満宮山古墳と鬮鶏山古墳——古墳時代の成立が見えてきた——」歴史シンポジウム 三島から古墳時代を考
える, 高槻市教育委員会, 2003/10

福永伸哉「埋蔵文化財と考古学研究・大学教育」考古学研究会関西例会, 2002/12

福永伸哉「副葬された青銅鏡」『西求女塚古墳はこうしてつくられた』西求女塚古墳シンポジウム, 神戸市教育委員会, pp.
27-35, 2002/10

福永伸哉「近畿地方の弥生時代後半期の青銅器について」東海考古学フォーラム, 2002/7

福永伸哉「伊勢遺跡から大岩山古墳まで——青銅器から見た湖南地域の古墳出現過程——」シンポジウム伊勢遺跡群, 皇
子山を守る会, 2002/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

福永伸哉 大阪大学共通教育賞, 大阪大学共通教育機構, 2003/12

福永伸哉(雪野山古墳発掘調査団) 雄山閣考古学特別賞, 雄山閣出版, 1997/6

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2001年度～2003年度、基盤研究(B)(1)、代表者：福永伸哉

課題番号：13410115

研究題目：西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究

研究経費：2002年度 直接経費 3,900千円

2003年度 直接経費 1,200千円

研究の目的：

古墳時代の300年間以上にわたって築造されてきた前方後円墳が消滅に至る過程を、西日本の広い範囲で比較し、前
方後円墳消滅過程の地域差を検討することによって、前方後円墳消滅の意味を再検討するとともに、出現過程ではなくそ
の消滅過程に着目して、日本史上における前方後円墳の歴史的意味を追求する。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2002年度、受託研究、受託者：福永伸哉

委託者：(独)通信総合研究所

研究題目：文化財の効率的なデジタルコンテンツ化とその利用に関する研究

委託料：7,000千円

2-8. 学会役員等の引き受け状況

考古学研究会関西例会・世話人

2002年4月～2004年3月

3. 高橋 照彦 助教授

1966年生。1992年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(京都大学、1991年)。国立歴史民俗博物館考古研究部助手、奈良国立博物館学芸課研究員を経て、2002年より現職。専攻：日本考古学(特に奈良時代、平安時代)。

3-1. 論文

高橋照彦「貨幣とケガレと呪力——古代日本における錢貨の非経済的意味——」『出土錢貨』20, pp. 64-75, 2004/3

高橋照彦「畿内最後の大型前方後円墳に関する一試論——見瀬丸山古墳と欽明陵古墳の被葬者——」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』pp. 67-100, 2004/3

高橋照彦「東大寺前身寺院に関する試論」『奈良国立博物館紀要 鹿園雑集』5, pp. 29-71, 2003/3

高橋照彦「仏像莊嚴としての緑釉水波文博」『日本上代における仏像の莊嚴』pp. 127-137, 2003/3

高橋照彦「古代日本における錢貨の原料調達」『わが国鑄錢技術の史的検討』pp. 101-121, 2003/3

高橋照彦「緑釉水波文博の美術考古学的研究——白鳳～奈良時代における浄土の一表現——」『鹿島美術研究年報』19(別冊), pp. 611-621, 2002/11

高橋照彦「三彩・緑釉陶器の生産体制」『官営工房研究会会報』8, pp. 1-38, 2002/10

齋藤努, 高橋照彦, 西川裕一「古代錢貨に関する理化学的研究——「皇朝十二錢」の鉛同位体比分析および金属組成分析——」『IMES DISCUSSION PAPER SERIES』2002-J-30, pp. 1-92, 2002/9

3-2. 著書

梅村喬, 神野清一編, 高橋照彦他『日本古代史新稿』梓書房, 2004/3

樋口隆康, 難波純子, 高橋照彦他『坂本コレクション 中国古代青銅器』奈良国立博物館, 2002/9

井口喜晴, 高橋照彦他『東大寺のすべて』奈良国立博物館, 2002/4

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

高橋照彦「天平の残香を感じて——第五十五回正倉院展見学記——」『奈良国立博物館だより』48, p. 3, 2004/1

高橋照彦「本山官山窯」『古代の土器研究——平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に——』古代の土器研究会, pp. 100-101, 2003/11

高橋照彦「古代末期の広域流通食器を考える——第21回中世土器研究会に参加して——」『中世土器研究』107, pp. 1-6, 2003/2

高橋照彦「鏡と錢貨からみたニヤ遺跡」『シルクロード ニヤ遺跡の謎』pp. 138-139, 2002/11

高橋照彦「書評 白石太郎編『日本の時代史1 倭国誕生』」『歴博』115, p. 28, 2002/11

3-4. 口頭発表

高橋照彦「平安京近郊の緑釉陶器生産」『古代の土器研究——平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に——』pp. 5-19, 2003/11

高橋照彦「平安時代の緑釉陶器の生産と流通——山陰地方の事例を考えるために——」『第2回山陰中世土器検討会』pp.

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2003年度～2006年度、基盤研究(B)(1)、代表者：高橋照彦

課題番号：15320108

研究題目：須恵器生産における古代から中世への変質過程の研究——近畿地方を主な検討材料として——

研究経費：2003年度直接経費 3,700千円

研究の目的：

本研究は、研究の手薄な、9～11世紀頃の須恵器生産を主な検討対象とする。対象地域は、研究期間の関係上、近畿地方に限定する。平安時代は、須恵器生産の衰退時期と捉えられがちであるが、古代から中世への過渡期である。そこで、律令期の窯業生産把握がいかに中世的な須恵器生産に変容したかという問題を、具体的な窯跡群を構造的に分析することにより、跡付けることにしたい。

また、各地の窯跡群を統合した視点で横断的に比較検討することや、須恵器と併焼された施釉陶器や瓦を含めて多面的に検討すること、さらには胎土の理化学的分析を系統的に試みるなどを通して、各地の生産体制や製品供給体制、特に国衙権力の関与の度合いを把握し、当該期の須恵器生産の全体構造と特質を抽出し、そこからその前後の時代についても特質をあぶり出すことを目指したい。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 2002年度～2003年度、研究助成金、助成金獲得者：宇野隆夫、千田稔・高橋照彦・蔡鳳書・中谷正和

助成金名：シルクロード学研究センター課題研究補助金

研究題目：中国沿海地帯と日本の文物交流の研究——港・船と物・心の交流——

助成団体名：(財)奈良・シルクロード博記念国際交流財団

助成金額：1,800千円

3-8. 学会役員等の引き受け状況

東洋陶磁学会・幹事

1997年10月～現在

4. 寺前 直人 助手

1973年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程2001年修了。博士(文学)(大阪大学)。大阪大学教務補佐員をへて、2003年現職。2003年より神戸女学院非常勤講師。専攻：日本考古学。

4-1. 論文

なし

4-2. 著書

寺前直人ほか『大阪大学埋蔵文化財調査室』1, 大阪大学埋蔵文化財調査委員会, 2004/3

北條芳隆, 禰亘田佳男, 大賀克彦, 河野一隆, 北浦弘人, 斎野裕彦, 藤沢敦, 村田裕一, 寺前直人『考古資料大観第9巻 弥生・古墳時代石器・石製品・骨角器』小学館, 2002/12

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

寺前直人ほか「勝福寺古墳概報」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』(課題番号：13410115), 2001年度～

2003 年度科学研究費(B)(1)研究成果報告書, 2004/3

寺前直人「日本 考古(三)弥生時代」『史学雑誌 2002 年の歴史学界——回顧と展望——』112-5, 史学会, pp. 591-596, 2003/5

寺前直人「基本層序」「検出遺構」『久留米藩蔵屋敷跡——大阪大学中之島センター建設に伴う調査報告——』大阪大学埋蔵文化財調査委員会, pp. 9-13・16-29, 2003/3

寺前直人「くびれ部の調査・第 11・15 トレンチ」「第 11・15 トレンチ出土遺物」『史跡昼飯大塚古墳』大垣市埋蔵文化財調査報告書第 12 集, 大垣市教育委員会, pp. 66-79, pp. 311-314, 2003/3

4-4. 口頭発表

寺前直人「武威器の発生——弥生時代における武器の歴史的意義——」第 5 回古代武器研究会, 古代武器研究会, 滋賀(滋賀県立大学), 2004/1

寺前直人「生産と流通からみた畿内社会」「趣旨説明」関西例会第 3 回シンポジウム「畿内 弥生社会像の再検討」考古学研究会関西例会, 大阪(大阪歴史博物館), 2003/11

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

考古学研究会常任委員

1999 年 5 月～現在

2-11 人文地理学

はじめに、教育・研究活動の概要とその特色

小規模教室ながら、現代の人文地理学の主要分野である空間分析および人間—環境関係について、先端的な研究を推進することに努め、同時にそれを教育に反映させることを目指している。また当教室の地図史研究の伝統を継承しつつ、近代地図作成に関連する学外の研究者との共同研究を組織している。

教育においては、先端の研究を意識しつつ、その実行につながるような視野と能力を修得できるよう努力している。またコンピュータ・リテラシーを重視し、各種データの整理、統計分析、プレゼンテーションの実習を課すほか、調査対象地域に関するさまざまな資料の収集、インタビューからデータの解析、報告にいたる作業も並行して実施している。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 1 助教授 1 講師 0 助手 1

教授：小林 茂

助教授：堤 研二

助手：鳴海 邦匡

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
9	3	4	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D)修了者	博士号学位授与数	出身の研究者
'02	4	1	0	0	1
'03	8	0	0	0	0
小計	12	1	0	0	1

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	0	0	0
'03	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	2	2	0	0	0	4
'03	3	1	0	0	0	4
計	5	3	0	0	0	8

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	0	0	2	0	0	2
'03	0	3	1	0	0	4
計	0	3	3	0	0	6

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

小林茂, 鳴海邦匡「島原大変における眉山崩壊時の水蒸気爆発に関連すると推定される資料について」『待兼山論叢(日本学編)』36, pp. 1-18, 2002/12

鳴海邦匡「「復元」された測量と近世山論絵図——北摂山地南麓地域を事例として——」『史林』(史学研究会), 85, pp. 637-678, 2002/9

鳴海邦匡「近世山論絵図の定義と分類試論」『歴史地理学』(歴史地理学会), 44-3, pp. 1-21, 2002/6

渡辺理絵「米沢の城下町絵図と侍の居住について」『山形県地域史研究・会誌』(山形県地域史研究協議会), 28, pp. 54-62, 2003/2

【2003年度】

渡辺理絵「拝領屋敷の利用にみる武士の屋敷観と武家地管理政策の展開——城下町米沢を中心として——」『史林』(史学研究会), 87-2, pp. 1-36, 2004/3

渡辺理絵「刊本以外の大坂図『大坂三郷町絵図』に関する書誌学的検討」『懐徳』(懐徳堂記念会), 72, pp. 18-31, 2004/1

渡辺理絵「城下町絵図の様式変化と武家地管理の展開——米沢藩を例にして——」『人文地理』(人文地理学会), 55-3, pp. 1-23, 2003/6

渡邊英明「越後平野の市町の中心性と市場景観——雁木通りに注目して——」『人文地理』(人文地理学会), 55-2, pp. 65-80, 2003/4

(2)口頭発表

【2002年度】

朴澤龍「アンケートからみた奈良県川上村における高齢者の生活行動」大阪教育大学地理学会, 大阪教育大学地理学教室 / 大阪府柏原市, 2002/12/15

渡辺理絵「米沢の城下町絵図と侍の居住について」第28回山形県地域史研究大会, 山形県地域史研究協議会, 新庄市市民プラザ / 山形県新庄市, 2002/6/28

【2003年度】

佐々木信行「国際空港間における航空結節構造の分析」太平洋学会卒業論文発表会, 法政大学, 2004/3/6

渡辺理絵・小林茂「清国陸軍学生と陸地測量部修技所——日中間における測量技術の移転について——」日本国際地図学会2003年度定期大会, 沖縄国際大学, 2003/7/19

渡辺理絵「武家地における屋敷の拝領と居住の実態——城下町米沢を事例として——」第46回歴史地理学会大会, 茨城大学, 2003/6/21

渡辺理絵「城下町絵図研究の展開——金沢・熊本・米沢を中心として——」地図史フォーラム in 神戸, 甲南大学, 2003/5/3

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2003年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2003年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度～2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

鳴海邦匡(特別研究学生)大阪大学文学研究科, 助手, 2002/11

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002年度～2003年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2 名

2002 年度 : 1 名 2003 年度 : 1 名

<内訳> 技術職 1 名 教職 1 名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

2002 年度 『外邦図研究ニュースレター』1(2002 年度～2004 年度科学研究費補助金[基盤研究(A)(1)] 中間研究報告書)

2003 年度 『外邦図研究ニュースレター』2(2002 年度～2004 年度科学研究費補助金[基盤研究(A)(1)] 中間研究報告書)

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

外邦図研究会事務局

2002 年度～2003 年度

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去 2 年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

2001 年度に待望の独立した共同研究室兼実習室ができ、ようやく本格的な学部教育・大学院教育が展望できるようになった。ただし、まだコンピュータやプリンタなど関連機器が充分でなかったため、以後その充実に努めてきた。その結果、現代人文地理学の基本的手法である統計解析、とくに多変量解析の実習がほぼ支障なくできるようになった。

その効果はすぐにあらわれ、卒業論文では多変量解析を行うものが増加するとともに、付図も多くはコンピュータで作製するようになってきている。あわせて、卒業論文・修士論文の中間発表会でのプレゼンテーションをパワー・ポイントで行うよう指導し、学生のコンピュータ・リテラシーの向上にも役立っている。

またフィールド・ワークに関する基礎的訓練を現地調査実習のかたちで実施し、調査能力を有する学生の養成に努めており、調査データに多変量解析を実行したような卒業論文・修士論文も提出されている。

このような経過のなかで、大学院生・研究生による学会誌への論文の掲載も実現し、学会での口頭発表も恒常化しつつある。今後は学会誌に掲載される論文の増加とともに博士の学位の授与を目指したい。なお、卒業生の就職は順調で、毎年ほぼ全員が一般会社、公的機関の職員のほか、システム・エンジニア、教員のような専門職にも就いている。

他方、放送大学の講義ビデオの作製や教科書『人文地理学』の編集ならびに執筆、さらに「シリーズ人文地理学」(朝倉書店)への寄稿など、教材の開発にも努力してきた。放送大学用の教科書とビデオは、2004 年度より本学の全学共通教育でも利用しており、この方面でも意義あるものになると予想している。

小規模教室ということもあって、大学院生の数がまだ少ないのであるが、学部学生も含め、学生数の増加にも努力したい。

13-2 研究活動

教室構成員はそれぞれの分野で研究をすすめ、『年報 2002』の外部評価で指摘された課題のうち、大学院生の論文の学

会誌へ掲載の増加、単著の研究書による研究成果の公表などを実現しつつある。また研究成果の国際雑誌への掲載にも努力している。

他方、学外の研究者との連携を強め、代表者として科学研究費の取得に務めてきた。この効果により、現在基盤研究(A)、(B)、(C)各1が教室構成教員によって取得されているほか、民間の財団の助成も得ている。

とくに小林が研究代表者を務める基盤研究(A)では、旧日本軍がアジア太平洋地域で作製した地図の研究を目的とし、地図史的な観点のほか、地球環境問題へのアプローチにつながる資料の整備としても意義あるものとして取り組んでいる。これに向けて全国の研究者の参加をえて研究会を組織し、学会発表も積極的におこなっている。また新聞や雑誌の取材に応じるほか、科研費により購入した旧日本軍作製の「兵要地誌図」、「空中写真要図」などを、2002年10月の大阪大学総合学術博物館設立記念展、2003年10月の大阪大学総合学術博物館第2回企画展で解説を付して展示公開し、社会への研究成果の還元を企図している。

海外に関係した活動としては、堤が The 3rd International Conference of Critical Geography (Tessedik Samuel Foiskola, Bekescsaba, Hungary, 2002.6.25(火)-29(土))において報告者ならびにチェアー・パーソンを務め、また、The 3rd East Asia Regional Conference in Alternative Geography (EARCAG) (Tokyo and Osaka, Japan: 2003.8.5(火)-9(土))において組織委員ならびにチェアー・パーソンを務めた。

当教室は小規模であるがゆえに、教員・大学院生が相互に協力して研究を進めざるをえない状況にあるが、今後はさらにその展開に向けて努力したい。

Ⅲ. 教員の研究活動(2002年度～2003年度の過去2年間)

1. 小林 茂 教授

1948年生。京都大学文学研究科博士課程1974年中退。博士(文学)(京都大学)。東京都立大学助手、九州大学講師・助教授・教授、大阪大学文学部教授を経て1999年現職。2003年より放送大学客員教授をつとめている。専攻：文化地理学／文化生態学。

1-1. 論文

小林茂「不確定な環境情報と環境破壊論」池谷和信編『地球環境問題の人類学：自然環境へのヒューマンインパクト』世界思想社, pp. 92-117, 2003/11

小林茂「開発と環境」『人文地理』(人文地理学会), 55-3, pp. 265-270, 2003/6

Watanabe, K., Itoh, M., Matsuyama, H., Hamano, S., Kobayashi, S., Shirakawa, T., Suzuki, A., Sharma, S., Acharya, G. P., Itoh, K., Kawasaki, T., Kimura, E. and Aoki, Y., "Bancroftian filariasis in Nepal: a survey for circulating antigenemia of *Wuchereria bancrofti* and urinary IgG4 antibody in two rural areas of Nepal". *Acta Tropica*, 88, pp. 11-15, 2003/3

小林茂「ヒマラヤ農村に関するふたつの視角：高度帯とアクセス」石原潤編『農村空間の研究(上)』大明堂, pp. 141-158, 2003/3

小林茂「ネパールの都市と農村：首都一極集中と開発格差」『科学』(岩波書店), 72-12, pp. 1280-1283, 2002/12

小林茂, 鳴海邦匡「島原大変時における眉山崩壊時の水蒸気爆発に関する推定される資料について」『待兼山論叢(日本学編)』36, pp. 1-18, 2002/12

1-2. 著書

小林茂, 杉浦芳夫編『人文地理学』財団法人 放送大学教育振興会, 2004/3

小林茂ほか『外邦図研究ニューズレター』2, 外邦図研究グループ, 大阪大学大学院文学研究科人文地理学教室, 2004/3

小林茂『農耕・景観・災害：琉球列島の環境史』第一書房, 2003/6

小林茂ほか『外邦図研究ニューズレター』1, 外邦図研究グループ, 大阪大学大学院文学研究科人文地理学教室, 2003/3

磯望, 小林茂, 赤塚陸男監修『太宰府：人と自然の風景』財団法人太宰府市文化スポーツ財団, 2002/9

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 小林茂「多様な世界へのアプローチ：人文地理学とはどんな学問か」小林茂，杉浦芳夫編『人文地理学』財団法人 放送大学教育振興会，pp. 11-29, 2004/3
- 小林茂「環境への適応」小林茂，杉浦芳夫編『人文地理学』財団法人 放送大学教育振興会，pp. 92-104, 2004/3
- 小林茂「資源利用と景観」小林茂，杉浦芳夫編『人文地理学』財団法人 放送大学教育振興会，pp. 105-126, 2004/3
- 小林茂「政治行政・外交」国際協力事業団編『ネパール国別援助研究会報告書』国際協力事業団，国際協力総合研修所，pp. 45-58, 2003/5
- 小林茂「都市環境」国際協力事業団編『ネパール国別援助研究会報告書』国際協力事業団，国際協力総合研修所，pp. 161-174, 2003/5
- 石弘之，市川光雄，小林茂，池谷和信「(座談会)地球環境問題をどうとらえるか：人類学の可能性」民博通信(国立民族学博物館)，98, pp. 4-11, 2002/9

1-4. 口頭発表

- 加賀康治，宗建郎，小林茂「溜池による水源開発とその運用：福岡市太宰府市の事例」2003年度人文地理学会大会研究発表要旨，pp. 176-177, 関西大学，2003/11
- 渡辺理絵，小林茂「清国陸軍留学生と陸地測量部修技所」2003年日本国際地図学会定期大会・沖縄地理学会大会研究発表予稿集，pp. 42-43, 沖縄国際大学，2003/7
- 小林茂「環境の変動と保全への人文地理学的アプローチ」日本地理学会「地理思想の伝統と革新」研究グループ，お茶の水女子大学，2003/3
- 小林茂「アジア歴史資料センターが公開している外邦図・兵要地誌関係資料とその利用」東北地理学会研究集会，東北大学，2002/11
- 小林茂，濱野真二郎，鈴木朗，渡部幹次，S. シャルマ，G. P. アチャリア，白川卓「ネパール中間山地低部におけるマラリアに対する文化的・生物学的適応」日本地理学会発表要旨集，62, p. 24, 金沢大学，2002/9

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(B)(1)、代表者：小林茂

課題番号：15406009

研究題目：ネパールにおけるマラリアに対する遺伝的適応の調査研究：文化的適応との対比を通じて

研究経費：2003年度 4,700千円

研究目的：

1996年以來のネパール中間山地低地部での調査により、高度1200メートル以下に居住してきた民族集団では高頻度(54%)で α +サラセミアがみられるが、それよりも高所に居住し、マラリア感染をさけてきた民族集団では、この頻度が低い(4～14%)ことが判明した。この成果をもとに関係住民のマラリア感染をDNA診断により検査したところ、正常の住民では24.2%に達するのに対し、 α +サラセミアの住民では12.9%と大きな差があることが判明した。くわえて年齢別に乾季の感染率を検討したところ、10歳以下の子どもでは8.5%と、それ以上の年齢層(18.8%)に比べていちじるしく低いことも判明した。

本研究では、これらの成果をもとにとくに学齢期の子どもを中心にマラリア感染の季節変動を検討する。子どもは、成人のようにたび重なるマラリアの感染を受けておらず、免疫が未発達で、 α +サラセミアとマラリア感染との関係が明確にあらわれると考えられる。またあわせて、 α +サラセミアについて、ホモ・ヘテロ・健常の赤血球でマラリア原虫の培養実験をおこない、その差異を検討する。さらに他の寄生虫についても調査をおこなう。

1-6-2. 2002年度～2004年度、基盤研究(A)(1)、代表者：小林茂

課題番号：14208007

研究題目：「外邦図」基礎的研究：その集成および地域環境資料としての評価をめざして

研究経費：2002年度直接経費 7,500千円、間接経費 2,250千円

2003年度直接経費 8,700千円、間接経費 2,610千円

研究の目的：

旧日本軍が作成した「外邦図」と呼ばれる現在の日本領土外の地図は、現在、国内では東北大学・お茶の水女子大学・京都大学・広島大学・東京大学・国会図書館など、海外ではアメリカ議会図書館・アメリカ地理学協会・大英図書館などに分散している。

本研究の目的は、①分散して所蔵され一部は未整理状態にある外邦図の全貌を把握し、その研究・利用にむけて、作製・出版年代や縮尺などを記載した所在目録を整備し公開する、②陸軍参謀本部からの持ち出し作業や整理作業にあたった関係者にインタビューし、その経緯や当時の実情を復元する、③戦時下の地図作製に関連する旧日本軍の組織や経過を解明する、④外邦図の保存および利用の簡便化をはかるため、画像データベース化を進め、戦前の地形や植生を克明に示す資料としてGISの適用も試みる、以上の4点である。

この作業を通じて、旧日本軍作製地図の所在ならびに資料価値を確定するとともに、貴重な地域環境資料として外邦図の再利用をはかることを最終的な目的とする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

太平洋学術研究連絡委員会委員(日本学術会議)	2003年10月～2006年10月
広島大学総合地誌研究資料センター客員研究員	2003年8月～現在
農耕文化研究振興会・『農耕の技術と文化』編集委員	2001年4月～現在
太宰府市史編集委員会委員	1995年10月～現在
『文明のクロスロード: Museum Kyushu』(博物館等建設推進九州会議)編集委員	1984年6月～現在
日本国際地図学会・第21期評議員	2003年2月～2005年2月
国立歴史民俗博物館展示プロジェクト委員	2003年4月～9月
人文地理学会・理事(集会担当)	2002年11月～2004年10月
同上・評議員	2000年11月～2004年10月
柳川市史専門研究員	2003年5月～2004年3月
同上	2002年4月～2003年3月

2. 堤研二 助教授

1960年生。1986年3月、九州大学大学院文学研究科修士課程修了(史学・地理学専攻)。文学修士。1986年4月、国立佐世保工業高等専門学校助手。1988年4月、同校講師。1990年10月、島根大学法文学部講師。1993年7月、同学部助教授。1999年4月、大阪大学大学院文学研究科助教授。専攻：人文地理学。

2-1. 論文

堤研二「金屋子神信仰形態の分類」『金屋子神信仰の基礎的研究』岩田書院, pp. 245-257, 2004/3

堤研二「太宰府の観光産業」『太宰府市史・通史編・別編』太宰府市, pp. 327-379, 2004/3

堤研二「農村研究・集落研究」『経済地理学の成果と課題』(経済地理学会, 大明堂), pp. 99-107, 2003/6

堤研二「地域社会と伝統的祭り」『祭の存在の有無がもたらすコミュニティ意思の差異に関する調査研究』祭りとコミュニティ研究会, pp. 23-30, 2003/3

堤研二「人口移動と過密・過疎」『人口大事典』(第2部「世界と日本の人口問題」第5章,「日本の人口問題」,第3節として),培風館,pp.170-175,2002/6

堤研二「過疎・高齢化地域における医療・救急体制の整備とIT」『建築と社会』(社団法人・日本建築教会),83・通巻961,pp.28-29,2002/4

2-2. 著書

堤研二『ダム建設に伴う水没・移転集落の自立的再編成に関する研究』2002年度河川環境整備財団・河川整備基金(一般的研究),研究代表者:堤研二,2003/5

堤研二『人口減少・高齢化地域における交通弱者の行動パターンと交通安全対策に関する研究』2002年度佐川交通社会財団・交通研究助成(一般研究)報告書,研究代表者:堤研二,2003/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

堤研二「学界展望(2001年1月~12月)『学史・方法論』」『人文地理』54・3,pp.233-235,2002/6

2-4. 口頭発表

堤研二「兵要地誌と宗道臣」科学研究費(基盤研究B「ポストモダンの景観論・空間論における『文化的転回』の影響とその評価に関する研究」(課題番号14380028,研究代表者・山野正彦)),研究集会,大阪府吹田市,2003/11

Tsutsumi, Kenji, "Panopticonization towards Space and Society in Modern Japan: A Case of a Coal-mining Region". Representing Local Places and Raising Voices from Below: Japanese Contributions to the History of Geographical Thought(8), 東京都・代々木オリンピックセンター, 2003/8

Tsutsumi, Kenji, "An Old 'New Town': Involvement in Senri New Town, Osaka Prefecture". The 3rd East Asia Regional Conference in Alternative Geography (EARCAG), (Tokyo and Osaka, Japan), 2003/8

堤研二「兵要地誌と少林寺拳法・宗道臣」空間論研究会,東京大学,2003/3

堤研二「槻之屋集落の取組みの位置づけ」河川環境管理財団・河川整備基金助成(一般)・研究課題名:「ダム建設に伴う水没・移転集落の自立的再編成に関する研究」に関する調査時の対象集落での講演活動,島根県木次町温泉地区公民館,2003/3

堤研二「近・現代における観光地『太宰府』の形成:天満宮・鉄道・エージェント」第4回祭りとコミュニティ研究会,大阪府豊中市ライフサイエンスセンタービル,2003/1

堤研二「隠岐空港の現状と課題」隠岐空港整備・利用促進協議会ワーキングスタッフ会,島根県西郷町町立ホール,2003/1

堤研二「近・現代における観光地『太宰府』の形成:天満宮・鉄道・エージェント」人文地理学会第245回例会,大阪市立大学,2002/12

堤研二「農山村の地域変動に学ぶ:環境利用と地域連携教育」公開講座フェスタ2002年(主催:阪神奈大学・研究機関生涯学習ネット,財団法人・懐徳堂記念会担当),大阪市さいかくホール,2002/11

堤研二「ICGG第1回・第2回大会とEARCAG関説して」日本地理学会秋季学術大会シンポジウムVII,「批判地理学:日本からの発信に向けて」金沢大学,2002/9

堤研二「鳥取県日南町の森林利用:実験的森林コモンズについて」日本地理学会秋季学術大会シンポジウムI-I「地理学からの提言:日本の山から世界の山へ 21世紀の山村空間:その可能性を求めて」,第2部「行動する山村:21世紀システムの構築に向けて」金沢大学,2002/9

Tsutsumi, Kenji, "Forest Commons in the Present Japan: A Case of the New Trend in Forest Land Use". *The International Critical Geography Group(ed.) "The 3rd International Conference of Critical Geography, The Center for Regional Studies of the Hungarian Academy of Sciences (Magyar Tudományos Akadémia Regionális Kutatások Központja), Budapest, Hungary*, pp. 284-289, 2002/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堤研二 地域地理学会賞, 地域地理学会, 1997/7

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2003年度～2004年度(2年間)、日本学術振興会科学研究費・基盤研究(C)(1)、代表者：堤研二

課題番号：15520497

研究題目：構造改革期における農山村・人口減少地域の変動と政策課題

研究経費：2003年度 2,000千円

研究の目的：

本研究の研究目的のキーワードは、「点検」、「現状分析」、「展望」の3つである。すなわち、構造改革による大変動期を迎えた中で人口減少地域・農山村を対象として、(1)過疎政策や種々の振興法政策などのこれまでの地域政策を「点検」し、(2)当該地域での現実問題を整理して、「現状分析」を行い、(3)これらの地域がいかなる方向に動きつつあるのか、またそれに対応してどのような政策課題や地域生活機能の問題が新たに生じ、今後構想されるべき政策・対策は何かを「展望」するのが本研究の目的である。(1)の「点検」に関しては当該地域の社会経済的データをもとにデータベース(DB)を構築し、これまでの過疎行政・振興法行政の効果・功罪を点検していく(初年度～2年度目前半)。(2)の「現状分析」に関しては、マクロなスケールレベルでのDBに基づいた分析をふまえながら、研究組織構成メンバー6人が分担して実証的地域調査を行い、当該地域の現状・問題・課題・動向を整理する(初年度後半～2年度目前半)。とくに、ポスト公共事業・ポスト企業誘致の時代における就業問題、自立的・自律的あるいは内生的な住民組織や地域社会活動、森林をはじめとする農山村の基幹産業と国土・環境保全との連携関係、さらにエコツーリズムやグリーンツーリズムなどの新展開に焦点を絞る。(3)の「展望」に関しては、21世紀の構造改革下での地域政策の課題・方法論を検討する。(2年度目)

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2002年度、佐川交通社会財団・交通研究助成(一般研究)、代表者：堤研二、研究分担者・共編者：なし

研究題目：人口減少・高齢化地域における交通弱者の行動パターンと交通安全対策に関する研究

助成金額：総額 950千円

2-7-2. 2002年度、河川環境管理財団・河川整備基金助成(一般)、代表者：堤研二、研究分担者：有(1名)

研究題目：ダム建設に伴う水没・移転集落の自立的再編成に関する研究

助成金額：総額 950千円

2-8. 学会役員等の引き受け状況

【学会役員など】

人文地理学会・評議員(任期2年2期)	2001年度～現在
同上・大会準備委員(任期1年)	2003年度
同上・地理思想研究部会世話人代表(任期1年2期)	2001年度～2003年度
同上・地理学ウィーク企画委員(任期1年1期)	2001年度

【公共団体等関連委員など】

島根県隠岐郡7町村ほか 隠岐空港整備利用促進協議会オブザーバー	2001年度～現在
島根県・島根県中山間地域研究センター地域づくり支援プレーン	1998年度～現在
島根県安来市ほか五町村・鉄の道文化圏調査研究委員	1997年度～現在
福岡県太宰府市・太宰府市史資料調査員	1988年度～2004年度
島根県・島根県航空行政推進会議委員・隠岐空港部会座長	1997年度～2003年度

3. 鳴海 邦匡 助手

1971年生。九州大学大学院比較社会文化研究科日本社会文化専攻 2002年単位取得上退学。修士(社会学)甲南大学。2002年現職。専攻：歴史地理学。

3-1. 論文

鳴海邦匡「京都代官小堀数馬による明和3年8月『御小物成場絵図』について」『待兼山論叢(日本学篇)』37, pp. 1-17, 2003/12

小林茂, 鳴海邦匡「島原大変時における眉山崩壊時の水蒸気爆発に関する推定される資料について」『待兼山論叢(日本学編)』36, pp. 1-18, 2002/12

鳴海邦匡「『復元』された測量と近世山論絵図——北摂山地南麓地域を事例として——」『史林』(史学研究会), 85-5, pp. 35-76, 2002/9

鳴海邦匡「近世山論絵図の定義と分類試論——北摂山地南麓地域を事例として——」『歴史地理学』(歴史地理学会), 44-3, pp. 1-21, 2002/6

3-2. 著書

小林茂, 鳴海邦匡ほか『外邦図研究ニューズレター』1, 外邦図研究グループ, 大阪大学大学院文学研究科人文地理学教室, 2003/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 2003年度、財団法人国土地理協会学術研究助成、代表者：鳴海邦匡

研究題目：日本の近世在地社会における地図測量技術——測量帳および測量器具の分析から——

助成金額：800千円

3-7-2. 2003年度、財団法人河川環境管理財団河川整備基金助成事業、代表者：鳴海邦匡

研究題目：測量技術を通してみる江戸時代の人々と水・河川との関わり方について

助成金額：1,000千円

3-8. 学会役員等の引き受け状況

人文地理学会・集会委員 2003年11月～現在

同上(人文地理学会地理思想部会)・部会世話人 2003年11月～現在

荒尾市・市史専門委員 2002年5月～現在

2-12 日本文学

はじめに。教育・研究活動の概要とその特色

日本文学専門分野は、所属教員の各時代にわたる専門性を活かし、古代から現代に至るまでの文学作品と作品を生み出す日本の言語・文化の諸相を研究対象とする。隣接専門分野である国語学・比較文学と連携し、広い視野に立った教育と研究活動を行っている。

系統立てられた研究と教育の推進のため、通常の講義・演習以外に研究会を組織することもあり、また、本学以外で開催される研究会・学会への学生・院生の積極的な出席を促し、他大学・他分野の研究者との研究上の交流を促進している。論文作成にあたっては、全教員・全学生の参加する卒業論文・修士論文作成のための中間発表会を国語学・比較文学と合同で行っている。

成果の公表に関しては、国語学とともに、大阪大学国語国文学会を組織し、学会誌『語文』を年2回刊行、研究成果発表と卒業生・名誉教授等との交流の場として大阪大学国語国文学会総会を毎年1度開催し、大学院生・学部生の研究環境の向上を図っている。学生や客員研究者との交流や意見交換を行うべく、年に2度、春と夏に、研修旅行・ハイキングを行い、日本文学関係の各種の研究資料や臨地調査を実施している。

各国からの要請にも応える形で留学生の受け入れも積極的に行っている。現在は、アジア、オセアニア、中東、ヨーロッパの各地域からの留学生が在籍しており、研究方法の模索と博士論文の作成に及ぶ指導を行っている。また、本国で博士号を取得する研究者・大学院生に対しては、ディサテーション・リサーチの1~2年の研究生としての留学にも応えている。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 3 助教授 1 講師 0 助手 1

教授：後藤 昭雄、出原 隆俊、飯倉 洋一

助教授：荒木 浩

助手：海野 圭介

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
42	19	22	0	1	0	2	0	6

*国語学と合わせて ※うち留学生 11名、社会人学生 0名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業生	大学院		博士号学位授与数	出身の研究者
		博士前期(M)修了者	博士後期(D)修了者		
'02	19*	9	5	2	2
'03	9*	9	10	6	1
小計	28	18	15	8	3

*国語学と合わせて

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	3	1	4
'03	9	4	13
計	12	5	17

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

新井由美	「泉鏡花文学における視覚性」2004/3 主査：出原隆俊 副査：内藤高、飯倉洋一
斎藤理生	「太宰治作品の〈笑い〉」2004/3 主査：出原隆俊 副査：内藤高、荒木浩
佐藤雅代	「王朝和歌表現論——平安中期から院政期へ——」2004/3 主査：伊井春樹 副査：後藤昭雄、荒木浩
中村一夫	「源氏物語の本文と表現」2004/3 主査：伊井春樹 副査：蜂矢真郷、荒木浩
山谷紀子	「勅撰三集の研究」2004/3 主査：後藤昭雄 副査：高橋文治、荒木浩
米田真理子	「『徒然草』とその時代——転換期の文学——」2004/3 主査：荒木浩 副査：伊井春樹、天野文雄
李育娟	「大江匡房の漢文作品における表現世界」2004/3 主査：荒木浩 副査：後藤昭雄、湯浅邦弘
屋木瑞穂	「樋口一葉と明治二〇年代文芸ジャーナリズム」2003/9 主査：出原隆俊 副査：内藤高、飯倉洋一
廖秀娟	「中島敦後期作品研究——〈運命〉の表象をめぐって——」2003/9 主査：出原隆俊 副査：後藤昭雄、内藤高
藤井由紀子	「『源氏物語』正編における異界の力」2003/3 主査：伊井春樹 副査：後藤昭雄、荒木浩

エヴァ・ルカーチョヴァー「安部公房『砂の女』論」2002/9
 主査：伊井春樹 副査：内藤高、出原隆俊
 山崎淳「中世僧伝の形成と展開」2002/9
 主査：伊井春樹 副査：後藤昭雄、荒木浩

【論文博士】

倉田実「狭衣物語の研究」2004/3
 主査：伊井春樹 副査：後藤昭雄、荒木浩
 田島智子「屏風歌の研究」2004/3
 主査：伊井春樹 副査：後藤昭雄、奥平俊六
 堤和博「伊尹・兼通・兼家を取り巻く文壇の作品形成過程研究——『一条摂政御集』・『本院侍従集』・『蜻蛉日記』——」2004/3
 主査：伊井春樹 副査：後藤昭雄、荒木浩
 清水婦久子「源氏物語版本の研究」2003/10
 主査：伊井春樹 副査：後藤昭雄、飯倉洋一
 柴田勝二「三島由紀夫——魅せられる精神——」2002/7
 主査：出原隆俊 副査：内藤高、飯倉洋一

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	8	1	7	3	0	19
'03	3	1	10	0	4	18
計	11	2	17	3	4	37

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	4	9	21	1	0	35
'03	0	4	20	0	0	24
計	4	13	41	1	0	59

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

石原隆好「平沢旭山と聖堂漢学——江戸儒林の天明——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 78, pp. 33-43, 2002/5
 岡崎昌宏「辻邦生『安土往還記』論——「孤独」と、「私」の「崩壊」——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 78, pp. 44-53, 2002/5
 川崎佐知子「猪苗代兼寿『狭衣物語抄』の関連資料」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 31, pp. 59-71, 2002/4
 桑原真臣「安部公房「赤い繭」再読——《おれ》が歩き続ける理由——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 79, pp. 44-53, 2002/12

- 斎藤理生「太宰治『畜犬談』論——方法としての〈笑い〉——」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 1, pp. 51-65, 2003/3
- 坂井二三絵「夏目漱石の作品における〈衣服〉——『虞美人草』『三四郎』『それから』『門』を中心に——」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 1, pp. 79-93, 2003/3
- 辻村尚子「其角のころみ——『田舎之句合』から『俳諧次韻』へ——」『連歌俳諧研究』(俳文学会), 104, pp. 1-12, 2003/2
- 中山一麿「『徒然草』と『三部仮名抄』」『岡山大学国語研究』(岡山大学教育学部国語研究会), 17, pp. 22-32, 2003/3
- 仁木夏実「摂関家と式家儒者——院政期儒者論(二)——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 79, pp. 13-23, 2002/12
- 仁木夏実「藤原実光考——院政期儒者論(一)——」『詞林』(大阪大学古代中世文学会), 31, pp. 16-36, 2002/4
- 仁木夏実「信阿小考——東大寺図書館蔵『遁世述懐抄』所収漢詩を中心に——」『国語と国文学』(東京大学国語国文学会), 79-4, pp. 29-41, 2002/4
- 山谷紀子「勅撰三集における「心製的表現」の研究」『國學院雑誌』(國學院大学), 104-3, pp. 16-27, 2003/3
- 米田真理子「『徒然草』と仁和寺僧弘融——『洗滌要秘鈔』・『康秘』奥書から見えること——」『中世文学』(中世文学会), 47, pp. 97-106, 2002/8
- 米田真理子「『野槌』増補記事の検討——弘融の伊賀居住を視座として——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 78, pp. 12-21, 2002/5
- 米田真理子「古筆切の中の「仁和寺華嚴院弘融」のこと——伊賀常楽寺藏兼好・頓阿・弘融三幅対をめぐる——」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 31, pp. 47-58, 2002/4
- 李育娟「院政期の北斗信仰と大江匡房——『江都督訥言願文集』「北斗曼陀羅堂」を中心に——」『国語国文』(京都大学文学部国語国文学研究室), 72-1, pp. 38-59, 2003/1
- 廖秀娟「中島敦「盈虚」論」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 1, pp. 66-78, 2003/3
- 廖秀娟「中島敦「牛人」論」『解釈』(解釈学会), 49-1-2, pp. 2-9, 2003/2
- 廖秀娟「中島敦「弟子」論」『待兼山論叢(文学篇)』(大阪大学文学会), 36, pp. 37-52, 2002/12
- 【2003年度】
- 伊井春樹・マイケル スキャンロン・エヴァ ルカーチョヴァ・金華榮・ジェイミー ニューハード・謝立群・ゾーイ ジェステイコ・チョーティカブラカーイ アッタヤ・オラビー ワーエル モハメッド「留学生にとっての日本文学研究」『国際化の中の日本文学研究 国際日本文学研究報告集』1, 風間書房, pp. 33-72, 2004/3
- 井真弓「八代和歌抄切の検討と解釈——中世散逸私撰集の一考察——」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 33, pp. 55-79, 2003/4
- 海野圭介・ Takeshi WATANABE・ 廖秀娟・ Jaturasangpairoj MATANA・ Teresa Martinez FERNANDEZ・ Jack STONEMAN「日本文学の魅力——留学生にとっての日本文学研究——」『イメージとしての〈日本〉』(21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」大阪大学), pp. 15-47, 2003/12
- 岡崎昌宏「辻邦生『嵯峨野明月記』論」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 2, pp. 39-51, 2004/3
- 川崎佐知子「天文廿二年二月廿七日興福寺東門院家歌会」をめぐる『日本古典文学史の課題と方法——漢詩 和歌 物語から説話 唱導へ——』和泉書院, pp. 151-173, 2004/3
- 斎藤理生「太宰治『女の決闘』の方法」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 2, pp. 15-27, 2004/3
- 徳永光展「論理の読解から構造の把握へ——夏目漱石『心』研究史論——」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 2, pp. 52-64, 2004/3
- 中井賢一「中村本『夜寝覚物語』における幸福的結末の論理——第二の予言の表現と「結構」としての明石御方物語——」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 33, pp. 14-28, 2003/4
- 中川照将「『夜の寝覚』研究史の課題と展望——現存『寝覚』は果して〈原本〉なるか——」『日本古典文学史の課題と方法——漢詩 和歌 物語から説話 唱導へ——』和泉書院, pp. 347-369, 2004/3
- 中川照将「中村本『夜寝覚物語』最終場面の意味について——改作本『寝覚』は〈幸福〉なる物語であるか——」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 33, pp. 29-40, 2003/4
- 中川真弓「朗詠注と太子伝における「仏法最初の釈迦像」譚」『待兼山論叢(文学篇)』37, pp. 19-36, 2003/12

- 中川真弓「清涼寺の噂——『宝物集』釈迦梅檀像譚を起点として——」『説話文学研究』(説話文学会), 38, pp. 108-118, 2003/6
- 中村一夫「源氏物語の「泣く」表現の諸相——「のごふ」「はらふ」——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 80・81, pp. 23-32, 2004/2
- 中村一夫「中村本『夜寝覚物語』のことばと方法——情意正形容詞を中心にして——」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 33, pp. 41-54, 2003/4
- 松本陽子「武田泰淳『月光都市』論」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 2, pp. 28-38, 2004/3
- 溝端善子「永井荷風『冷笑』論——思想としての〈冷笑〉——」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 2, pp. 1-14, 2004/3
- 李育娟「藐姑射に住む上皇像の形成——『莊子』「逍遙遊」における堯帝伝承から——」『和漢比較文学』(和漢比較文学会), 32, pp. 43-54, 2004/2
- 和田美香「光源氏の〈琴の琴〉——第一部における——」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 34, pp. 13-25, 2003/10

(2) 口頭発表

【2002年度】

- 石原隆好「小野阿津麿踊戯に譬て筆法を説る語」その1, 上方読本の会12月例会, 上方読本の会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2002/12/7
- 石原隆好「『莠句冊』序文」上方読本の会5月例会, 上方読本の会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2002/5/11
- 石原のり子「『大鏡』の視点——容姿をめぐる記述を中心に——」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2002/6/8
- 于永梅「『紅の涙・血の涙』の受容をめぐる」大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2002/6/8
- 岡崎昌宏「辻邦生『安土往還記』論——「私」の「崩壊」を中心として——」日本近代文学会関西支部春季大会, 日本近代文学会関西支部, 関西学院大学/兵庫県西宮市, 2002/6/8
- 川崎佐知子「室町後期奈良歌壇の様相」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/1/25
- 木下美佳「『伊勢物語』における狩り」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/1/25
- 木下美佳「『伊勢物語』における贈答」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2002/6/29
- 小仲敬子「『今物語』享受の様相」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2002/4/20
- 佐藤雅代「歌枕「井手」の成立と「山吹」」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2002/11/16
- 鈴木麻里子「『落窪物語』における「まめ」の価値観」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2002/4/20
- ジャック ストーンマン「カジュアル・ソーセージ、コーンぬき」日本文学国際研究集会「翻訳の可能性」21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」(大阪大学), グランキューブ大阪(大阪国際会議場)/大阪府大阪市, 2003/3/16
- 蘇畑正喜「聖藩文庫蔵『曾我物語』巻十二における独自三章段について——頼朝伝における畠山氏の位置付け——」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2002/11/16
- マッターナー チャトゥラセンパイロート「タイにおける日本文学——その海路——」日本文学国際研究集会「翻訳の可能性」21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」(大阪大学), グランキューブ大阪(大阪国際会議場)/大阪府大阪市, 2003/3/16
- 辻村尚子「余春澄考」大阪俳文学研究会例会, 大阪俳文学研究会, 柿衛文庫/兵庫県伊丹市, 2003/3/16

- 辻村尚子「其角の試み——延宝末・天和期俳諧の活況——」俳文学会第54回全国大会, 俳文学会, 青山学院大学/東京都, 2002/10/20
- 辻村尚子「延宝末——天和期の俳諧と其角——」大阪俳文学研究会例会, 大阪俳文学研究会, 柿衛文庫/兵庫県伊丹市, 2002/6/16
- 中川照将『夜の寝覚』原作本と改作本の差異とその意味」2002年度北陸古典研究会上半期研究発表会, 北陸古典研究会, 兼六荘/石川県金沢市, 2002/9/14
- 中川真弓「『仏法最初の釈迦像』伝承——清凉寺釈迦梅檀像譚をめぐって——」2003年度大阪大学国語国文学会総会, 大阪大学国語国文学会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/1/11
- 中川真弓「清凉寺の噂——『宝物集』釈迦梅檀像譚を起点として——」説話文学会大会, 説話文学会, 奈良女子大学/奈良県奈良市, 2002/6/23
- 中村一夫「出版とアカデミズム」シンポジウム・コンピュータ国文学, 国文学研究国文学研究資料館/東京都品川区, 2002/12/6
- 中村一夫「源氏物語の『泣く』表現の位相——本文異同から見た——」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2002/9/21
- 中村友美「反御子左派女流歌人の詠歌——建長八年百首歌合の本歌取り詠について——」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2002/12/14
- 中山一磨「『持戒清浄印明』における相承と展開」仏教文学会支部例会, 仏教文学会, 東京/駒沢大学, 2002/11/16
- 仁木夏実「大嘗会和歌と儒者」中古文学会関西西部会第3回例会, 中古文学会関西西部会, 甲南大学/兵庫県神戸市, 2002/11/9
- 日名子達郎「酒吞童子譚研究」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2002/6/8
- 藤井由紀子「柏木の猫の夢」中古文学会秋季大会, 中古文学会, 相愛大学/大阪府大阪市, 2002/10/13
- 藤井由紀子「柏木の猫の夢」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2002/7/20
- 箕浦尚美「室町物語における教典引用について」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2002/9/21
- 吉田正「夏目漱石「吾輩は猫である」論——「太平の逸民」たちへの視線——」2003年度大阪大学国語国文学会総会, 大阪大学国語国文学会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/1/11
- 米田真理子「禅院御室法守法親王の時代——『徒然草』と仁和寺——」平安京文化研究会第64回例会, 平安京文化研究会, 京都大学/京都府京都市, 2002/9/1
- 李育娟「院政期の北斗信仰と大江匡房——『江都督納言願文集』「北斗曼陀羅堂」を中心に——」第75回和漢比較文学会西部例会, 和漢比較文学会, 同志社女子大学/京都府京都市, 2002/4/13
- 廖秀娟「台湾における日本文学研究の現状について」日本文学国際研究集会「翻訳の可能性」21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」(大阪大学), グランキューブ大阪(大阪国際会議場)/大阪府大阪市, 2003/3/16
- 和田美香「八宮の音楽伝授」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪, 2002/7/20
- タケシ ワタナベ「古典文学が今日持つ意味」日本文学国際研究集会「翻訳の可能性」21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」(大阪大学), グランキューブ大阪(大阪国際会議場)/大阪府大阪市, 2003/3/16
- 【2003年度】**
- 石原のり子『大鏡』における兼家」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/7/12
- 井真弓『石清水物語』における恋愛と出家の再評価」第88回全国大学国語国文学会大会, 全国大学国語国文学会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/12/7
- 井真弓『石清水物語』の主人公造型に見る物語の構図」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2004/3/6
- 奥田雅子『徒然草』と『十訓抄』の比較——手紙に対する考え方から——」大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学古

- 代中世文学研究会例会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2004/1/31
- 木下美佳「『伊勢物語』六三段考」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/5/31
- 楠なおみ「系としての河内本」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/7/2
- 越野優子「国冬本の柏木衛門督について」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/12/13
- 越野優子「源氏物語別本の物語世界——国冬本少女巻を中心に——」第88回全国大学国語国文学会大会, 全国大学国語国文学会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/12/7
- 斎藤理生「風刺の方法——太宰治『男女同権』論——」2004年度大阪大学国語国文学会総会, 大阪大学国語国文学会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2004/1/10
- 坂本正博「歌題「忍恋」本意の生成」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/11/15
- 高嶋藍「『とはずがたり』の装束描写について」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/7/12
- 中井賢一「柏木不在の論理——柏木の機能と弁少将の機能——」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/10/18
- 中井賢一「藤裏葉巻「なほさるべきにこそと見えたる御仲らひなめり」の表現構造と機能」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/4/26
- 中川照将「流布本『寝覚』と中村本『寝覚』の差異が意味するもう一つの可能性について」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2004/3/6
- 中川真弓「清涼寺の釈迦信仰——嵯峨念仏坊関係願文を中心に——」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/11/15
- 中村一夫「浮舟の「涙」」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/9/6
- 中村友美「真観の和歌——歌枕をめぐって——」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/9/6
- 白雨田「中国語訳『源氏物語』について」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/7/2
- 日名子達郎「お伽草子『酒呑童子』における童子側と朝廷側の対応について」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/5/31
- 細川知佐子「定家の「待恋」と「有明」——『顕注密勘』考——」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/12/13
- 山本明子「『在名の別』の天人降下考——『当麻曼荼羅縁起』の影響について——」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/7/12
- 米田真理子「呼子鳥説の解体——『徒然草』二百十段再考——」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/9/6
- 李育娟「大江匡房と唐文の受容——「楚越の竹」という表現をめぐって——」2004年度大阪大学国語国文学会総会, 大阪大学国語国文学会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2004/1/10
- 和田美香「光源氏の〈琴の琴〉——第一部における——」大阪大学古代中世文学研究会例会, 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/7/2

(3)その他(書評・翻訳など)

【2002年度】

- 井真弓「『中世王朝物語』主要参考文献目録」『講座 平安文学研究』風間書房, 16, pp. 295-359, 2002/5
佐藤雅代「紹介 山本一著『慈円の和歌と思想』」『語文』(大阪大学国語国文学会), 78, p. 57, 2002/5
中川真弓「紹介 阿部泰郎著『湯屋の皇后』」『聖者の推参』『語文』(大阪大学国語国文学会), 78, pp. 58-59, 2002/5
中村一夫「データの活用」『日本文学どっとコム』おうふう, pp. 85-110, 2002/5
中村一夫「紹介 岩坪健著『源氏物語古注釈の研究』」『語文』(大阪大学国語国文学会), 78, p. 56, 2002/5
藤井由紀子「紹介 伊井春樹編『源氏物語注釈書・享受史辞典』」『語文』(大阪大学国語国文学会), 79, p. 65, 2002/12

【2003年度】

- 佐藤雅代「『歌ことば——その発生と展開——』主要参考文献目録」風間書房, 17, pp. 389-429, 2003/5
中川照将「紹介 伊井春樹著『源氏物語論とその研究世界』」『語文』(大阪大学国語国文学会), 80・81, p. 105, 2004/2

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)
2003年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)
2003年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度～2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

- 李育娟 博士後期課程, 慈済大学東方語文学系, 助理教授, 2004/9
廖秀娟 博士後期課程, 南台科技大学応用日語系, 助理教授, 2003/9
仁木夏実 博士後期課程, 大谷大学文学部, 助手, 2003/4
藤井由紀子 博士後期課程, 大阪大学大学院文学研究科, 研究員(COE), 2003/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002年度～2003年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 6 名
2002年度: 4名 2003年度: 2名
<内訳> 教員 6名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

計 6 名
2002年度: 4名 2003年度: 2名

10. 刊行物

- 2002年度 『阪大近代文学研究』創刊号(大阪大学近代文学研究会 2003/3)
『語文』第78輯(大阪大学国語国文学会 2002/5) 第79輯(同 2002/12)*1
『詞林』第31号(大阪大学古代中世文学研究会 2002/4) 第32号(同 2002/10)
- 2003年度 『阪大近代文学研究』第2号(大阪大学近代文学研究会 2004/3)
『語文』第80・81輯(大阪大学国語国文学会 2004/2)*1
『詞林』第33号(大阪大学古代中世文学研究会 2003/4) 第34号(同 2003/10)
『イメージとしての〈日本〉——日本文学 翻訳の可能性』(21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」(大阪大学))*2
- *1 国語学専門分野と共に *2 21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」と共に

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

[国内学会の開催]

- | | | | |
|------------|----------|-------------------|---------------|
| 大阪大学国語国文学会 | 2004年度総会 | 於：大阪大学共通教育講義棟 | 2004年1月10日 |
| 同上 | 2003年度総会 | 於：大阪大学共通教育講義棟 | 2003年1月11日 |
| 全国大学国語国文学会 | 第88回大会 | 於：大阪大学コンベンションセンター | 2003年12月6日・7日 |
| 中古文学会 | 第6回関西例会 | 於：大阪大学共通教育講義棟 | 2003年11月8日 |

[国際学会の開催]

- | | | | |
|---------------------------------|----------------------|--|------------|
| 日本文学国際研究集会「海外における源氏物語の世界 翻訳と研究」 | | | 2003年12月6日 |
| | 於：大阪大学コンベンションセンター | | |
| 同上 | 「翻訳の可能性」 | | 2003年3月16日 |
| | 於：グランキューブ大阪(大阪国際会議場) | | |

[研究会の開催]

- | | | |
|---------------|----------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 大阪大学古代中世文学研究会 | 於：大阪大学大学院文学研究科 | 2004年3月6日, 1月31日
2003年12月13日, 11月15日,
10月18日, 9月6日, 7月19日,
7月12日, 5月31日, 1月26日,
1月25日, 2002年11月16日,
9月21日, 7月20日, 6月29日,
6月8日, 4月20日 |
| 上方読本を読む会 | 於：大阪大学共通教育講義棟 | 2004年3月20日, 2月21日,
2003年10月11日, 7月19日,
6月14日, 5月10日, 4月12日,
3月15日, 2月22日
2002年12月7日, 10月5日,
9月14日, 7月13日, 6月1日,
4月13日 |
| 金剛寺一切経研究会 | 於：大阪大学大学院文学研究科 | 2002年11月8日 |

[学会の事務局]

- | | | |
|--------------------------|--|------------|
| 上方文藝研究会 | | 2003年度より |
| 大阪大学国語国文学会・大阪大学古代中世文学研究会 | | 2002年度以前より |
| 大阪大学近代文学研究会 | | 2002年度より |

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

大阪大学国語国文学会(学会開催：年1回(1月) 機関誌『語文』刊行：年2回(5月・12月))*

大阪大学古代中世文学研究会(研究会開催：年10回(休暇中以外毎月1回) 機関誌『詞林』刊行：年2回(4月・10月))

上方文藝研究会(研究会開催：毎月1回 機関誌『上方文藝研究』刊行：年1回(5月))

大阪大学近代文学研究会(機関誌『阪大近代文学研究』刊行：年1回(3月))

*国語学専門分野と共に

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

日本文学専門分野は、学部では同一専修を構成する国語学、隣接専門分野の比較文学と連携し、学生の指導を行っている。特に秋期には大学院研究発表会を2回、学部卒業論文発表会・大学院修士論文中間発表会を1回行い、全教官・学生の参加のもと、のべ1週間に涉って幅広い視点から指導を行っている。その発表は、学会発表に準じ、予稿集の提出、時間厳守の発表を課している。大学院生はその成果を踏まえ、各研究会・学会への発表へと展開し、1月の論文提出に備えている。

教員は、バランスよく各時代をカバーし、多様な演習・講義を提供している。ただし、本専門分野には非常勤講師がきわめて少なく、近隣の京都大学・奈良女子大学などに比べると数分の一にすぎない。そこで研究会や学会を利用した多様な研究者との交流を院生に指導し、多様な授業提供など、教員の最大限の負担によってカバーしようとしている。

研究に必要な度の高い書籍・雑誌およびCD-ROMは可能なかぎり研究室に常備されるよう配慮されている。学生用PCや必要なソフトも十分にはいかないまでも、かなり整備されている。

国際化の問題については、2000年度より、21世紀COE科目として「日本文学と〈翻訳〉」を立ち上げ、日本文学の国際化という課題に対応し、学生にも自覚を促している。またさまざまな地域から留学してくる学生へも可能な限りきめ細かく対応しているが、日本文学の基礎知識をいかに習得させるかなどの課題もある。

大学院生は総じて研究熱心であり、研究室は夜遅くまで活気にあふれている。ただし、研究室の絶対的なスペースの不足と、分散して位置していることの不便さを解消することが望ましいと思われる。

学生と教員との交流や研修を目的として、日本文学にゆかりの地を訪ねて、春には日帰りのハイキングを、夏には1・2泊の研修旅行を行っている。

13-2 研究活動

教員が組織する研究会、また大学院生が自主的に企画する研究会は数多い。大阪大学古代中世文学研究会は、この2年間で、第140回(2002年4月20日)から第157回(2004年3月6日)まで18回を数え、のべ38の研究発表が行われた。その成果は多様な媒体に活字化されているが、本研究会の機関誌『詞林』も、年2回順調に刊行されており(2004年3月まで既刊34号、以後継続中)、また別途発刊している『古代中世文学研究論集』も既刊3冊となった。

近世文学関係では、2002年4月から「上方読本を読む会」を立ち上げ、他大学の大学院生をも交えて毎月1回輪読会を行っており、2004年には「上方文藝研究会」を卒業生や他大学の大学院生を交えて発足させ、5月に研究誌『上方文藝研究』創刊号を刊行する。

大阪大学近代文学研究会は、2003年に『阪大近代文学研究』を創刊し、年1回刊行している。

この2年間は、21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」の一環として、国際シンポジウムを2回行った。一回目は2003年3月16日に、グランキューブ大阪(大阪国際会議場)において行われた日本文学国際研究集会である。本研究集会は2部構成で、午前は「日本文学の魅力—シンポジウム 留学生にとっての日本文学研究」と題して、大阪大学の留学生五名によるパネルディスカッションが海野圭介の司会で行われ、午後は「日本文学 翻訳の可能性」と題して、エドワード・ケイメンズ氏(イェール大学)、ジョシュア・モストウ氏(ブリティッシュコロンビア大学)、ゲイ・ローリー氏(早稲田大学)、マーク・ウィリアムズ氏(リーズ大学)の4名の外国人日本文学研究者の基調報告とシンポジウムが伊井春樹の司会で行われ、それぞれ活発な議論がなされた。なお同時に国文学研究資料館の後援を得て、日本文学に関

する外国語翻訳・研究書の紹介展示が行われた。2回目は、全国大学国語国文学会・国文学研究資料館との共催で「海外における源氏物語の世界 翻訳と研究」をテーマに大阪大学コンベンションセンターで開催された。ハルオ・シラネ氏(コロンビア大学)の基調講演と、張龍妹氏(北京日本学研究中心)、カレル・ファイラ氏(福井県立大学)、ロイヤル・タイラー氏(オーストラリア国立大学名誉教授)、河添房江氏(東京学芸大学)の内外の研究者4名によるパネルディスカッションが行われ、350名余の聴衆を集め、大盛況であった。この時は国文学研究資料館の協力を得て、海外における『源氏物語』の翻訳書と研究書の展示が行われた。これらの国際研究集会の成果は、21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」の成果報告書『イメージとしての〈日本〉』、また、風間書房刊行で単行本化されている。

本専門分野には、日本文学のコレクションとして、忍頂寺文庫・小野文庫・土橋文庫をはじめとして古写本・版本が数多く所蔵されている。本専門分野では、それらを学界の共有財産とすべく、継続して調査・紹介している。現在は土橋文庫が国文学研究資料館のデジタル調査として行われており、忍頂寺文庫のデータや画像についても、逐次公開される予定になっている。

本専門分野は国語学専門分野とともに大阪大学国語国文学会を組織し、年1回、学会を開催し、講演・発表を行っている。半期に1度、学会誌『語文』(2004年3月時点で既刊81号)を刊行し、その成果を公表している。

Ⅲ. 教員の研究活動(2002年度～2003年度の過去2年間)

1. 後藤 昭雄 教授

1943年生。1970年、九州大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。1982年、文学博士(九州大学)。鹿児島県立短期大学助教授、静岡大学助教授、大阪大学教養部助教授、同教授を経て、1994年4月、現職。専攻：日本古代漢文学。

1-1. 論文

後藤昭雄「日本古代漢詩集成のこれまでとこれから——付「日本詩紀拾遺」補正——」『日本古典文学史の課題と方法』

和泉書院, pp. 29-54, 2004/3

後藤昭雄「賦光源氏物語詩序について」『語文』80-81, pp. 3-12, 2004/2

後藤昭雄「本朝文粹抄十二 菅原道真の右大臣を辞する表」『アジア遊学』55, pp. 155-162, 2003/9

後藤昭雄「嘉保の和歌尚歯会」『文学』隔月刊, 4-5, pp. 175-189, 2003/9

後藤昭雄「文人たちの交友——藤原行成を軸として——」『文芸論叢』61, pp. 1-13, 2003/9

後藤昭雄「本朝文粹抄十一 出雲権守藤原朝臣の為の帰京を請ふ状」『アジア遊学』53, pp. 166-173, 2003/7

後藤昭雄「本朝文粹抄十 弁官左右衛門権佐大学頭等を申す奉状」『アジア遊学』52, pp. 154-161, 2003/6

後藤昭雄「本朝文粹抄九 老閑行」『アジア遊学』51, pp. 154-162, 2003/5

後藤昭雄「本朝文粹抄八 右大臣に奉る書」『アジア遊学』50, pp. 172-179, 2003/4

後藤昭雄「本朝文粹抄七 学生藤原有章の讃」『アジア遊学』49, pp. 149-155, 2003/3

後藤昭雄「菅原道真の願文」『菅原道真論集』勉誠出版, pp. 181-206, 2003/2

後藤昭雄「本朝文粹抄六 河原院に山晴れて秋望多しを賦す詩序」『アジア遊学』47, pp. 177-185, 2003/1

1-2. 著書

黒田彰, 東野治之, 三木雅博, 山崎誠, 後藤昭雄『孝子伝注解』汲古書院, 2003/2

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

後藤昭雄「藤原克己著『菅原道真と平安漢文学』」『国語と国文学』80-8, pp. 55-59, 2003/2

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

和漢比較文学会・代表理事

2003年10月～現在

2. 出原 隆俊 教授

1951年生。京都大学大学院博士後期課程中退。文学修士。県立広島女子大学講師・助教授・京都教育大学助教授・大阪大学助教授を経て現職。専攻：日本近代文学。

2-1. 論文

出原隆俊「三島作品における〈内部〉と〈外部〉——『金閣寺』を中心に——」『語文』80・81, pp. 93-104, 2004/3

出原隆俊『都の花』と『なにはがた』——〈関西文人〉の位置『阪大近代文学研究』1, pp. 1-10, 2003/3

出原隆俊「作家の妻という問題——〈森しげ〉の作品を中心に——」『国文学解釈と鑑賞』pp. 227-235, 2003/3

出原隆俊「透谷と鑑三・透谷と愛山の一側面」『新日本古典文学大系(明治篇 キリスト者文学集)』26, pp. 583-596, 2002/12

出原隆俊「春」の背景——『透谷全集』と小栗風葉「青春」——『島崎藤村研究』30, pp. 21-32, 2002/9

2-2. 著書

出原隆俊(藪禎子・吉田正信)共著『新日本古典文学大系(明治篇 キリスト者文学集)』26, 岩波書店, 2002/12

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

出原隆俊「〈内部〉と〈外部〉 日本近代文学の一素描」日本近代文学会関西支部, 2003/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日本近代文学会・評議員

1994年4月～2006年3月

3. 飯倉 洋一 教授

1956年生。1985年九州大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学)(九州大学、1998年)。九州大学助手・山口大学専任講師・同助教授・同教授・大阪大学助教授を経て、2004年4月より現職。専攻：日本近世文学。

3-1. 論文

飯倉洋一「「奇談」史の一齣」伊井春樹先生御退官記念論集刊行会編『日本古典文学史の課題と方法』和泉書院, pp. 571-595, 2004/3

飯倉洋一「談義本が描く江戸」『国文学解釈と鑑賞』(至文堂), 68-12, pp. 77-85, 2003/12

飯倉洋一「祇徳の立場——『俳諧古学』について——」『国文学』学燈社, 48-8, pp. 59-65, 2003/7

飯倉洋一「『秋山記』の再検討——『めめしき』の意味するもの——」『江戸文学』28, 2003/5

飯倉洋一「秋成と天覧——『神代がたり』試論——」『待兼山論叢(文学編)』136, pp. 1-19, 2002/12

飯倉洋一「『奇談』の場」『語文』(大阪大学国語国文学会), 78, pp. 22-32, 2002/5

3-2. 著書

飯倉洋一『柳川市史別編新柳川明証図会』柳川市, 2002/9

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

飯倉洋一「平成一三年度国語国文学界の展望：近世(小説)」『文学・語学』(全国国語国文学会), 175, pp. 87-90, 2003/2

3-4. 口頭発表

飯倉洋一「「奇談」史の可能性」日韓学術フォーラム——日本文学、その可能性——韓国ソウル東国大学校, 2003/8→愛媛大学教育学部紀要第Ⅱ部人文・社会科学; 36-2, pp. 100-113, 2004/2

飯倉洋一「近世小説における創作方法としての寓言論」国際学術会議「東アジア比較論を通して見る寓言文学の位相と特徴」韓国寓言文学会・京都府立大学文学部発表要旨集, pp. 13-24, 2004/1

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

飯倉洋一 第3回柿衛賞, 財団法人柿衛文庫, 1993/5

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

日本近世文学会・常任委員	2002年8月～現在
日本近世文学会・委員	2000年8月～現在
柳川市史・専門研究員	1995年4月～現在
「近世文芸」(日本近世文学会機関誌)・編集委員	1991年4月～1995年3月

4. 荒木 浩 助教授

1959年生。1986年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。愛知県立女子短期大学・愛知県立大学講師、助教授、大阪大学教養部助教授を経て現職。専攻：日本文学。

4-1. 論文

荒木浩『続古事談』作者論の視界——勸修寺流藤原定経とその周辺』『日本古典文学史の課題と方法——漢詩 和歌 物語から説話 唱導へ——』pp. 423-454, 2004/3

荒木浩「廃墟の表徴——『今昔物語集』の意匠をめぐる——」『説話論集、第十二集』pp. 3-32, 2003/6

荒木浩『徒然草』というパースペクティブ ◎第一段・第十九段、堺本『枕草子』、『あづま』・『都』、『(新しい作品論へ)、(新しい教材論へ)』[古典編] 3●文学研究と国語教育研究の交差』pp. 202-237, 2003/1

荒木浩「為隆と顕隆——勸修寺流藤原氏と『続古事談』——」『語文』79, pp. 1-12, 2002/12

荒木浩「口伝・聞書、言説の中の院政期 藤原忠実の『家』あるいは『父』をめぐる」『院政期文化論集第二巻 言説とテキスト学』pp. 8-38, 2002/12

荒木浩「〈ゆめ〉、〈こころ〉、〈ものがたり〉——中世日本文学研究者から見た「創作」と「表現」——」『第34回大阪大学開放講座「夢と未来」〈ロマンを求めて——文学、社会学、科学技術の世界で——〉』pp. 17-23, 2002/9

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

荒木浩「勸修寺流藤原氏と『続古事談』作者——藤原定経の周辺——」平安京文化研究会、第65回例会、於大阪大学、2002/12/15

荒木浩『沙石集』と〈和歌陀羅尼〉説について (Concerning the Shasekishū and the theory of “waka dharani”) 第7回 国際シンポジウム「神道研究の新しい方向性」(Workshop: New Perspectives in the Study of Shinto) アメリカコロンビア大学、2002/10/3-4

荒木浩「〈ゆめ〉、〈こころ〉、〈ものがたり〉——中世日本文学研究者から見た「創作」と「表現」——」第34回大阪大学開放講座「夢と未来」〈ロマンを求めて——文学、社会学、科学技術の世界で——〉於大阪市、難波、OCAT、2002/9/17

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

荒木浩 第18回日本古典文学会賞、1992/6

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2002年度～2004年度、基盤研究(C)(2)、代表者：荒木浩

課題番号：14510462

研究題目：仏教修法と文学的表現に関する文献学的考察——夢記・伝承・文学の発生——

研究経費：2002年度 900千円

2003年度 1,000千円

研究の目的：

本研究は、古代・中世日本文学研究の立場から、密教を中心とした仏教文献（その対象には、関連する分野である禅宗等諸仏教、神道関係資料、さらには歴史史料や文学資料なども含まれる）の文献学的研究を基盤に、仏教修法に関わる文献や仏教文化圏などの研究を契機として、中世的な文学表現の根元を探ることを目途とする。明恵『夢の記』や『沙石集』

研究など、研究代表者がこれまで蓄積した研究成果をもとに、単なる表現研究に留まらない、広く深い文献学的研究を目指す。さらに、より実践的な成果として各種文庫（特にこれまでの継続的对象である随心院などを中心に）に所蔵される文書の調査、紹介、読解などを行う。如上の研究成果は、デジタル画像を中心に CD-ROM 等に蓄積し、目録作成等、データベース化を試みるが、調査・研究は、大学院生など若手研究者との共同研究的なスタンスで行い、研究成果は、研究課題総体と関連する調査資料の翻刻、分析、さらに、理論的研究としての論文の形などで公表し、成果報告書に結実していく。またこれまでの研究代表者の研究経過を踏まえ、海外との研究交流を継続する。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

説話文学会・委員

1995年4月～現在

佛教文学会・委員

2003年4月～2004年3月

5. 海野 圭介 助手

1969年生まれ。大阪大学文学部卒。大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程1999年単位取得退学。博士(文学)大阪大学。日本学術振興会特別研究員を経て2002年現職。専攻：日本文学(和歌文学)

5-1. 論文

海野圭介「随心院門跡と歌書」『日本古典文学史の課題と方法——漢詩和歌物語から説話唱導へ——』和泉書院, pp.

121-150, 2004/3

海野圭介「随心院蔵『秘奥集』『阿弥陀決定往生秘印』紙背『中臣祐殖百首』残簡について」『語文』(大阪大学国語国文学会), 80・81(合併号), pp. 64-75, 2004/2

海野圭介, Takeshi WATANABE, 廖秀娟, Jaturasangpairoj MATANA, Teresa Martinez FERNANDEZ「日本文学の魅力—留学生にとっての日本文学研究」『イメージとしての〈日本〉』21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」大阪大学, pp. 15-47, 2003/12

海野圭介「随心院蔵『峯殿詠哥集』考」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 34, pp. 26-48, 2003/1

海野圭介「京都大学附属図書館蔵『中院家寄託歌書目録』翻刻」『大阪商業大学商業史博物館紀要』(大阪商業大学), 3, pp. 59-82, 2002/12

海野圭介「御所伝授の背景追考」『江戸文学』ペリかん社, 27, pp. 59-63, 2002/11

5-2. 著書

伊井春樹, 海野圭介, 藤井由紀子『イメージとしての〈日本〉』21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」大阪大学, 2003/12

小田忠, 池田治司, 丸尾佳二, 海野圭介, 盛田帝子『大阪商業大学商業史博物館史料叢書(交通 I)』4, 大阪商業大学, 2003/3

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

海野圭介「和歌の秘伝の伝流」韓日学術フォーラム(主催：東国大学校〔韓国〕 会場：東国大学校〔韓国〕), 2003/8

海野圭介, Takeshi WATANABE, 廖秀娟, Jaturasangpairoj MATANA, Teresa martinez FERNANDEZ「日本文学の魅

カ——留学生にとっての日本文学研究」日本文学国際研究集会 基調報告とシンポジウム「日本文学の魅力／翻訳の可能性」(主催：21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」(大阪大学), 会場：グランキューブ大阪), 2003/3

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2003年度～2005年度 若手研究(B)、代表者：海野圭介

課題番号：15720035

研究題目：御所伝授関連資料の総合的調査及びその基礎的研究

研究経費：2003年度 1,300千円

研究の目的：

主として江戸時代初期から中期にかけて、天皇、上皇、および近臣公卿との間で行われた伝授を介在させた和歌に関わる学問的な営みである「御所伝授」の実態の究明を総括的なテーマとし、宮内庁書陵部、京都御所東山御文庫、京都大学附属図書館等に保管されている和歌の注釈と伝授に関わる諸資料(以下「伝授資料」と称す)の総体的な把握を目指し、基礎的事項(書誌データ・著述内容の同定・テキスト相互の比較検討と一覧、等)データ化を目指す。具体的課題と達成目標は下記の通りである。

1. 京都大学附属図書館、京都大学総合博物館に所蔵される中院家旧蔵の伝授資料の書誌調査と基礎的書誌データ一覧の作成、著述内容の検討・同定、および、重要資料の画像データ・テキストデータ化。
2. 東山御文庫に所蔵される伝授資料(宮内庁書陵部にマイクロフィルム保管)の著述内容の検討・同定と内容細目の作成。および、重要資料の画像データ、テキストデータ化。
3. 宮内庁書陵部に所蔵される伝授資料(烏丸家旧蔵、桂宮家旧蔵)の書誌的調査と基礎的データ一覧の作成、著述内容の検討・同定、および、画像データ・テキストデータ化。

上記いずれも、今後の研究において共通の基盤となる基幹資料の集積を意図する。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

和歌文学会・ホームページ管理委員

2002年4月～2004年3月

2-13 比較文学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

比較文学専門分野が実質的な活動を開始したのは教授着任の1996年10月からである。教授1名のみという運営体制ではあるが、研究室設備などの整備とともに、学部生・院生の数も増え、また留学生の関心も高まりつつある。全国の国公立大学を通して、学部・大学院ともに比較文学の専門を置いている大学は非常に少なく、特に関西圏の国立大学としては唯一ともいえるので、一般に比較文学に対して関心が高まりつつある最近の状況を考えると、日本における比較文学研究の大きな拠点として今後大いに発展させたいところである。現在、本専門分野では教育・研究活動ともに日本近代文学を主な対象にして、西洋文学が日本文学に与えた影響、日本文学が東アジアに与えた影響、日本文学と西洋あるいはアジア文学との対比研究、文学と絵画、音楽、映画などとの関係を考えるジャンル間交渉、またたとえば〈子供〉を手掛かりに数多くの作品を横断的に比較するテーマ研究など幅広い研究が行われている。着眼点としても、近代におけるセクシュアリティの問題など最近の新しい研究を反映したものも多い。日本比較文学学会の研究発表において、当研究室の大学院生の発表が急激に増えているのは頼もしい限りである。

目下、講義は専任教授1名、非常勤講師2~3名で行われ、論文の審査は専任教授1名、日本文学の専任教授1名及び他の専門分野の教授1名で行われているが、スタッフの充実化によってさらに多様な外国文学などを視野に収めた研究が可能になることが今後の課題であり、希望でもある。

1. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 1 助教授 0 講師 0 助手 0

教授：内藤 高

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
23	5	17	0	0	0	0	0	1

※うち留学生 7 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業生	大学院		博士号学位授与数	出身の研究者
		博士前期(M)修了者	博士後期(D)修了者		
'02	6	3	0	0	0
'03	5	5	1	1	0
小計	11	8	1	1	0

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	0	0	0
'03	1	0	1
計	1	0	1

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

朴銀姫「倉橋由美子と楊沫の比較研究——性と政治を軸に——」2004/3

主査：内藤高 副査：出原隆俊、高橋文治

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	0	2	0	0	1	3
'03	0	1	0	0	11	12
計	0	3	0	0	12	15

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	0	6	0	0	0	6
'03	0	3	2	0	1	6
計	0	9	2	0	1	12

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

石田一真「大江健三郎とジャック・ケルアック：『われらの時代』と On the Road(『路上』)についての考察」『愛媛大学法文学部 人文学論叢』(愛媛大学人文学会), 4, pp. 217-228, 2002/12

崔殷景「三島由紀夫『橋づくし』論」『日本近代文学研究』(韓国ゴホン日本近代文学会), 1, pp. 239-248, 2002/12

朴銀姫「倉橋由美子と楊沫の小説比較研究——『パルタイ』の「わたし」と『青春の歌』の林道静を巡って——」『待兼山論叢(文学篇)』(大阪大学文学会), 36, pp. 53-70, 2002/12

【2003年度】

梅津彰人「安部公房とカフカ——『密会』と『城』の対比を中心に——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学研究会), 1, pp. 148-173, 2003/5

大広典子「福原信三の「モダン」——瞬間をめぐる写真と俳句——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学研究会), 1, pp. 174-192, 2003/5

金華榮「新しい女」をめざして——^{ナヘソク}羅蕙錫と平塚らいてうを中心に——」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 37, pp. 83-96, 2003/12

金華榮「近代日韓におけるセクシュアリティの問題——^{ナヘソク}羅蕙錫と与謝野晶子との比較を中心に——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学研究会), 1, pp. 66-88, 2003/5

崔殷景「三島由紀夫『豊饒の海』論」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 1, pp. 212-234, 2003/5

田辺裕視「耳の人 太宰治」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 1, pp. 193-211, 2003/5

出口馨「北原白秋におけるメーテルランク受容——『思ひ出』と『温室』を中心として——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 1, pp. 235-231, 2003/5

寺内伸介「徳田秋声と映画」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学研究会), 1, pp. 89-107, 2003/5

中岡悦子「広津和郎「女給」考——モーパッサン『女の一生』との関連をめぐる——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学研究会), 1, pp. 252-271, 2003/5

平松秀樹「タイ現代文学者と社会意識——セーニー・サオワボン『妖魔(ピーサート)』を例として——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学会), 1, pp. 272-292, 2003/5

朴銀姫「抗戦と友好の平行線——楊沫と日本——」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学研究会), 1, pp. 108-128, 2003/5

李寧「ロンドンにおける老舎と漱石の異文化体験」『阪大比較文学』(大阪大学比較文学研究会), 1, pp. 129-147, 2003/5

(2)口頭発表

【2002年度】

梅津彰人「安部公房とカフカ——『密会』と『城』の対比を中心に——」日本比較文学会第36回関西大会, 日本比較文学会, 関西外国語大学/大阪, 2002/11/9

金華榮「近代の「性」をめぐる女の闘い——羅蕙錫を中心に——」日本比較文学会第36回関西大会, 日本比較文学会, 関西外国語大学/大阪, 2002/11/9

田辺裕視「耳の人 太宰治——『おさん』の音楽性——」日本比較文学会第36回関西大会, 日本比較文学会, 関西外国語大学/大阪, 2002/11/9

寺内伸介「徳田秋声と映画」日本比較文学会第36回関西大会, 日本比較文学会, 関西外国語大学/大阪, 2002/11/9

平松秀樹「タイ現代文学と社会意識——セーニー・サオワボンを中心として——」日本比較文学会第38回関西大会, 日本比較文学会, 関西外国語大学/大阪, 2002/11/9

李寧「ロンドンにおける老舎と漱石——『我的几个房東』と『倫敦消息』をめぐる——」日本比較文学会第36回関西大会, 日本比較文学会, 関西外国語大学/大阪, 2002/11/9

【2003年度】

金華榮「人形とノラとのほざまで——^{ナヘソク}羅蕙錫と平塚らいてうとの比較を中心に——」日本比較文学会第64回全国大会,

日本大学／三島, 2003/6/14

崔殷景「思想としての身体——三島由紀夫の戯曲を手掛かりとして——」日本比較文学会第39回関西大会, 日本比較文学会, 桃山学院大学／大阪, 2003/11/8

崔殷景「三島由紀夫『豊饒の海』論」韓国日本学連合会第1回国際学術大会, 韓国日本学連合会, 韓国中央大学校／ソウル, 2003/7/5

出口馨「北原白秋初期詩集におけるメーテルランク受容」日本比較文学会第39回関西大会, 日本比較文学会, 桃山学院大学／大阪, 2003/11/8

(研究会)

崔殷景「思想としての身体——三島由紀夫——」大阪大学21世紀COEインターフェイスの人文学ワークショップ「イメージとしての〈日本〉」大阪大学／大阪, 2003/9/27

平松秀樹「タイ現代文学にみる〈女性の解放〉及び〈業からの解放〉——セーニー・サオワポンの作品から——」京都大学東南アジア研究センター第16回「東南アジアの社会と文化」研究会, 京都大学／京都, 2004/1/16

(3) その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

黒瀬貴将 ひがらみ書房出版賞(現代短歌), ひがらみ書店, 2003/7/1

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2003年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部: 1名 大学院: 1名 (計2名)

2003年度 学部: 2名 大学院: 0名 (計2名)

※学部1名は2002年度～2003年度

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度～2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

1名

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002年度～2003年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

なし

8. 客員研究員等の受け入れ状況

1名

9. 外国人研究者の受け入れ状況

1名

10. 刊行物

2003年度

『阪大比較文学』創刊号

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

日本比較文学会事務局

1999年6月～2003年6月

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

毎年、7月、比較文学専門分野内の研究発表会、秋、日本文学・国語学と合同の研究会を開催

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

教育体制については基本的に大きな変化はない。一般的に比較文学関係の講義の受講者はかなり多く、一定の知的関心を引く講義の水準は保たれていると思う。しかし、スタッフ数の関係もあり、どうしても学部と院と大学院共通の講義が多くなるのは問題であろう。2回生から、ドクターまでの講義ということになれば、どうしても学部3、4回生が照準となる。とくにまだ初歩段階の2回生には、さらにきめのこまかい入門的講義がしたいのだが、それができないのは、やはり問題であろう。

こうした不足をおぎなうために、数年前に行なった外からの講師を招いてシンポジウムや講演会を開き、通常では専任教員が担当できない様々な比較文学の研究テーマについて新たな知識と刺激を与える機会を持つことが是非必要であろう。

13-2 研究活動

研究活動においては、DCの人数が増えたこともあり、非常に活発化しつつある。とくに日本比較文学会での活動が非常に積極的になりつつある。日本比較文学会の関西支部大会では、近年、当研究室の大学院生の発表が毎年半数近くを占め、発表の水準も一般に高いので、関西の中での学会のイニチアチヴをとりつつある。また全国大会のレベルでも、高水準の発表が多く、査読つきの学会誌への査読委員会からの懲憊もうけている。とくに当研究室の留学生が学会活動で健闘していることは特筆に価するだろう。もちろん全国規模ではさらにレベルアップする必要はあるが、順調に成長していることは疑いない。博士論文も提出者が増える段階にきており、2004年度末には、かつて社会人学生として在籍した2名も含めて4名が確実に提出する予定である。また交換留学の制度を利用して留学する日本人学生も出始めており、今後国際的な繋がりがさらに広まっていくことも十分予想できる。

それから2003年度から、念願の研究室発行の研究誌がスタートした。投稿者も多く、研究活動の活発化に多いに貢献している。運営上の問題や合評会の充実化などさらに健闘すべき点はあるが、学外者からも好評であり、出だしは順調といえよう。

院生の数が学年によってかなりばらつきがあり、コンスタントな研究体制が維持できるか、研究テーマがさらに多様化されたときの指導の対応の仕方など、いろいろ今後の課題も予想できるが、なんとか現在の盛り上がりをさらに発展させていきたいものである。

Ⅲ. 教員の研究活動(2002年度～2003年度の過去2年間)

1. 内藤 高 教授

1949年生。1986年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。1985年、パリ第4大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士(東京大学、1978年)・文学博士(パリ第4大学、1987年)。同志社大学専任講師、同助教授、同教授を経て、1996年10月現職。専攻：比較文学。

1-1. 論文

内藤高「<共鳴>の持つ意味——ラフカディオ・ハーンと日本の音——」『阪大比較文学』1, pp. 1-44, 2003/5

1-2. 著書

内藤高「近代京都画壇と『西洋』——日本画革新の旗手たち——」『展覧会カタログの愉しみ』東京大学出版会, pp. 45-52, 2003/6

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

内藤高(書評)「芳賀徹『ひびきあう詩心——俳句とフランスの詩人たち』」『比較文学研究』82, pp. 144-147, 2003/9

1-4. 口頭発表

内藤高(要旨)『懐徳』72, 2004/1

内藤高「欧羅巴——近代日本からの眼差し——仏蘭西を見る——」懐徳堂秋季講座, 2003/11

内藤高「媒介者としての<水の風景>」京都大学人文科学研究所日仏文化交渉の研究会, 2003/9

内藤高「クローデルと日本再考」京都大学人文科学研究所日仏文化交渉の研究会, 2002/9

内藤高「1993-94年のフランス現代演劇」近現代演劇研究会, 2002/7

内藤高「クローデルとラフカディオ・ハーン」日本クローデル研究会, 2002/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2002年度~2003年度、基盤研究(C)(1)、代表者：内藤高

課題番号：14510645

研究題目：近代日本画への西欧文学芸術の影響の研究

研究経費：2002年度直接経費 1,800千円

2003年度直接経費 1,700千円

研究目的：

主に明治後期から昭和初期にかけての近代日本画が、西洋の文学や芸術からどのような影響を受けたかについて様々な観点から検討する。伝統的な日本画であるがゆえに、西洋との接触による緊張関係も強く生じる。単に絵画の主題や技法の問題だけでなく、西洋の文学や芸術は芸術家像や表現者としての人間そのものについても日本画家たちに新しい意識をもたらすことになる(たとえば恋愛の問題など)。それはまた江戸時代など日本の過去を新しい目で見直す動きともなってくる。こうした点から、西洋が日本画に与えた影響の<強さ>と<独自性>とを正確に分析したいと思う。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本比較文学会・理事

2001年6月~現在

同上・事務局長

1999年6月~2003年6月

2-14 中国文学

はじめに、教育・研究活動の概要とその特色

「中国文学」は旧文学科内の国文学、国語学、比較文学が再編成された1995年に開設され、当初は専任スタッフ一名、現在は二名によって運営されている。教員二名の専門分野は、一名が伝統文学(文言体の詩文)、一名が白話文学(白話体の戯曲・小説)である。

本専門分野は、主に清朝時代以前の漢語文献について、文言体と白話体の別なく、文献学的手法を用いて正確な訓詁を与える点に教育・研究の主眼が置かれており、そのため教員スタッフも伝統文学と白話文学を専門とするものが各一名ずつ配置されている。授業は、文献の精密な読解力とそれを踏まえての問題構成力を養うべく、大きく分けて演習と講義の二種類が設けられている。また、研究室内の教育・研究活動をより活性化するために、カリキュラムとは別に、教員スタッフを中心に三種の研究会が組織されており、文言体(宋代の詩)、白話体(明代の戯曲)、吏牘体(元代の法律文書)による漢語資料の訳注稿の作成が行われている。これらの研究会は単に教育活動の一環であるのみならず、それぞれの分野で一級の研究業績を上げることを目標にしており、他大学や他専門分野の研究者も参加している。本専門分野の教育・研究活動の特色は、規模は小さいながらも、中国の古典文学の領域をバランスよくカバーしている点にある。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 1 助教授 1 講師 0 助手 0

教授：高橋 文治

助教授：浅見 洋二

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
7	3	4	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業生	大学院		博士号学位授与数	出身の研究者
		博士前期(M)修了者	博士後期(D)修了者		
'02	1	2	0	0	0
'03	2	3	0	0	0
小計	3	5	0	0	0

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	0	0	0
'03	0	0	0
計	0	0	0

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教官等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	1	0	0	0	0	1
'03	3	0	0	0	0	3
計	4	0	0	0	0	4

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	0	0	0	0	0	0
'03	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

後藤友里「李賀「鬼仙」についての一考察——李白「天仙」との比較から——」『待兼山論叢(文学編)』(大阪大学文学会), 36, pp. 73-86, 2002/12

【2003年度】

加藤聡, 小林春代, 高橋文治, 谷口高志, 富永鉄平, 西尾俊, 藤原祐子, 森下久美子「成化本『白兔記』訳注稿(一)」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 32, pp. 52-98, 2003/6

谷口高志「唐代音楽詩における楽器のイメージ——琴・箏・琵琶・笛——」『待兼山論叢(文学編)』(大阪大学文学会), 37, pp. 51-66, 2003/12

藤原祐子「柳永詞論——その物語性と表現——」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 34, pp. 48-67, 2003/12

(2)口頭発表

なし

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2003年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2003年度 学部: 0名 大学院: 2名 (計2名)

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度～2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002年度～2003年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

なし

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

1名

10. 刊行物

なし

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

「中国古典戯曲研究会」、「『烏臺筆補』研究会」の2種は定期的に開催され、成果もすでに公にされている。また、「草堂詩余研究会」は、主催者が留学中のため、一時休会となっている。

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

本専門分野は、主に清朝時代以前の漢語文献について、文言体と白話体の別なく、文献学的手法を用いて正確な訓詁を与える点に教育の主眼が置かれている。また、研究室内の教育・研究活動をより活性化するために、カリキュラムとは別に、教員スタッフを中心に三種の研究会も組織されている。

こうした体制の成果として、近年、大学院生の学力はかなり向上し、学外からも一定の評価を受けるに至っている。たとえば、研究会活動の成果として大学院生が中心となってまとめた「成化本『白兔記』訳注稿」(一)(二)、『烏臺筆補』訳注稿」(一)(二)(三)は学界展望の類でも取り上げられているし、大学院生の論文は学会誌にも掲載されるようになっていく。

が、一方で、学部・MC・DCの学力に合わせた、段階的なカリキュラム編成は必ずしも十分には整備されていない。これは主にスタッフの不足による。

今後は、大学院生、学部生ともに学生数を増やし、学年別に近いカリキュラム編成を取れるよう、努力したい。

13-2 研究活動

教室構成員はそれぞれの分野で研究をすすめ、大学院生の論文の学会誌への掲載も徐々に増加しつつある。

海外、学外の研究者との連携もつよめ、大学院生の留学、教員の海外研修、外国人研究者の受け入れも活発に行なわれている。2004年度の大学院生の海外留学は、2件。中国政府給費留学生として、修士課程在籍中の2名の学生が、華東師範大学、浙江大学へそれぞれ留学している。教員の海外研修としては、浅見洋二がHarvard-Yenching Institute Visiting Scholarとして、2003年8月25日より2004年8月24日まで「宋代を中心とする中国の別集編纂に関する文学論的・社会文化論的研究」と題する研究を行なった。

また、科学研究費の取得にもつとめ、教員スタッフ2名は毎年「基盤研究(C)」を取得している。

研究活動という面において、総じて本教室は十分活性化されていると言えよう。今後もこの方向を維持できるよう努力したい。

Ⅲ. 教員の研究活動(2002年度～2003年度の過去2年間)

1. 高橋 文治 教授

1953年生。1982年、京都大学大学院文学研究科博士課程指導認定退学。文学修士(京都大学、1979年)。追手門学院大学講師、同助教授、同教授を経て、2000年10月現職。

1-1. 論文

高橋文治「山西省潞城縣李庄文廟金元三碑」『大阪大学大学院文学研究科紀要』44, pp. 33-67, 2004/3

高橋文治, 小南一郎, 幸福香織(共著)「その後の『柳毅伝』」『桃の会論集』2, pp. 25-49, 2004/3

沖田道成, 加藤聰, 佐藤貴保, 高橋文治, 向正樹, 山本明志(共著)『烏臺筆補』訳註稿『内陸アジア言語の研究』18, pp. 97-142, 2003/7

加藤聰, 小林春代, 高橋文治, 谷口高志, 富永鉄平, 西尾俊, 藤原祐子, 森下久美子(共著)「成化本『白兔記』訳註稿」『中国研究集刊』32, pp. 52-98, 2003/6

高橋文治, 金文京, 小松謙, 中鉢雅量, 日下翠, 赤松紀彦(共著)「もう一つの『金瓶梅』論」『中国四大奇書の世界』和泉書院, pp. 187-227, 2003/1

浅見洋二, 沖田道成, 加藤聰, 佐藤貴保, 高橋文治, 中村健太郎, 向正樹, 山本明志(共著)『烏臺筆補』訳註稿『中国研究集刊』30, pp. 63-92, 2002/6

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

高橋文治 東方学会賞, 東方学会, 1989/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(C)(2)、代表者：高橋文治

課題番号：15520223

研究題目：成化本『白兔記』についての基礎的研究

研究経費：2003年度直接経費 2,000千円

研究の目的：

成化本『白兔記』は、南戲系『白兔記』の最古のテキストであるばかりでなく、南戲そのものの現存する最古の版本である。したがって、その歴史的価値はきわめて高いが、一方本書は粗雑で俗なテキストでもあり、誤字、脱字、衍字、訛字、当て字が多いばかりでなく、当時の俗語、方言、スラングもふんだんに使われており、非常に難解である。そのため、1967年に発見されて以来、本格的な研究は殆ど発表されていない。本研究は、この成化本『白兔記』の注釈書、翻訳書を作成すべく、その基礎作業として、本書を校訂しつつコンピューター入力し、俗語や方言、スラングの意味の確定を行い、使用される曲牌について可能な限り格律の確定を行うことを第一の目的とする。また、初期の南戲の性格、ならびに初期の戯曲テキストの性格、劉知遠と李三娘の物語の演変、南曲の文学史的意義などについても、あわせて考察したい。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2. 浅見 洋二 助教授

1960年生。東北大学大学院文学研究科博士課程中途退学。文学修士(東北大学、1986年)。東北大学助手、山口大学助手、同講師、同助教授を経て、1996年10月、現職。専攻：中国文学専攻。

2-1. 論文

浅見洋二「詩来自何处、為誰所有——有関宋代詩学中的“内”与“外”、“己”与“他”以及“錢”、“貨”、“資本”概念的討論——」

張伯偉・蔣寅主編『中国詩学』8, 人民文学出版社, pp. 180-190, 2003/6

浅見洋二「詩を『拾得』するという事、ならびに『詩本』、『詩材』、『詩料』について——楊万里、陸游を中心に——」

宋代詩文研究会編『橄欖』11, pp. 174-200, 2002/12

浅見洋二「詩与“本事”、“本意”以及“詩讖”：論中国古代文学作品接受過程中本文与語境的關係」項楚主編『新国学』4, 巴

蜀書社, pp. 1-15, 2002/12

浅見洋二「『夢中得句』をめぐる——中国詩学における〈内部〉と〈外部〉、〈自己〉と〈他者〉——」林田慎之助博士

古稀記念論集編集委員会編『中国読書人の政治と文学』創文社, pp. 31-53, 2002/10

浅見洋二「論“詩史”説：“詩史”説与宋代詩人年譜、編年詩文集編纂之關係」傅璇琮主編『唐代文学研究』9, 広西師範大

学出版社, pp. 773-788, 2002/4

2-2. 著書

浅見洋二『唐宋期の詩と詩学に関するメディア論的研究』（科学研究費補助金による基盤研究報告書）, 大阪大学大学院文

学研究科, 2003/7

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

浅見洋二(批評)「『空谷幽蘭』と『水月鏡花』——古典中国の詩と詩学 7——」『るしおる』（書肆山田）, 51, pp. 68-71, 2003/10

浅見洋二(批評)「読者の夢、作者の夢——古典中国の詩と詩学 6——」『るしおる』（書肆山田）, 50, pp. 82-87, 2003/6

浅見洋二(翻訳)「一九八九年・小詩集」楊煉著『現代詩手帖』46-4, pp. 71-73, 2003/4

浅見洋二(解説)「楊煉とその詩について」『現代詩手帖』46-4, pp. 71-73, 2003/4

浅見洋二(批評)「作品が読まれるということ(続)——古典中国の詩と詩学 5——」『るしおる』（書肆山田）, 49, pp. 64-69,

2003/3

浅見洋二(翻訳)北川透, 新井豊美, 渡辺玄英, 横路啓子『黎明の縁』焦桐著, 思潮社, pp. 1-51, 2003/2

浅見洋二(解説)「焦桐の詩について」『黎明の縁』思潮社, pp. 56-62, 2003/2

浅見洋二(翻訳)「亡命の原型としての詩を求めて」楊煉著『現代詩手帖』45-12, pp. 160-166, 2002/12

浅見洋二(批評)「作品が読まれるということ——古典中国の詩と詩学 4——」『るしおる』（書肆山田）, 48, pp. 56-61, 2002/11

浅見洋二(批評)「詩はどこから来るのか、それは誰のものか(続)——古典中国の詩と詩学 3——」『るしおる』（書肆山田）,

47, pp. 84-89, 2002/8

浅見洋二(訳注)沖田道成, 加藤聰, 佐藤貴保, 高橋文治, 中村健太郎, 向正樹, 山本明志「『烏臺筆補』訳註稿」『中国研究

集刊』律号, pp. 63-92, 2002/6

浅見洋二(批評)「詩はどこから来るのか、それは誰のものか——古典中国の詩と詩学 2——」『るしおる』（書肆山田）, 46,

pp. 68-73, 2002/4

2-4. 口頭発表

浅見洋二「詩来自何处、為誰所有——有関宋代詩学中的“内”与“外”、“己”与“他”以及“錢”、“貨”、“資本”概念的討論——」

第2回宋代文学国際学術研討会, 2002/8

浅見洋二「詩与“本事”、“本意”以及“詩讖”：論中国古代文学作品接受過程中本文与語境的關係」第11回唐代文学国際学術

研討会, 2002/4

浅見洋二“Self and 'Others' in Song Theory of Poetics: The Concept of 'Currency', 'Merchandise' and 'Asset' in the

Jiangxi School of Theory of Poetry”, Association of Asian Studies 2002 Annual Meeting, 2002/4

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2003年度～2006年度、基盤研究(C)(2)、代表者：浅見洋二

課題番号：15520224

研究題目：宋代を中心とする中国の別集編纂に関する文学論的・社会文化論的研究

研究経費：2003年度 直接経費 700千円 間接経費 0円

研究の目的：

本研究は、宋代を中心とする前近代中国における別集すなわち個人の詩文集の編纂に関して、文学論および社会文化論の視点から考察することを目的とする。具体的には、次の三点からなる研究を行う。

1. 宋代を中心とする中国の別集編纂に関する文献学的・書誌学的整理。特に、別集のために書かれた序跋文献資料等の整理。
2. 宋代を中心とする中国の別集編纂を支える文学観に関する文学論的検討。特に「編年」と「分類(分門)」という別集編纂方法、および別集に附される「注釈」にあらわれた文学観に関する検討。
3. 宋代を中心とする中国の別集編纂をとりまく社会文化的背景に関する社会文化論的検討。特に、別集の制作・流通・受容の実態の解明を通して見た宋代の文人集団、文人ネットワーク、そして出版文化に関する検討。

注記：本研究は、代表者の海外研修のため、年度途中で廃止の申請を行い、認められた。そのため、2004年度以降は行われぬ。

2-6-2. 1999年度～2002年度、基盤研究(C)(2)、代表者：浅見洋二

課題番号：11610465

研究題目：唐宋期の詩と詩学に関するメディア論的研究

研究経費：2002年度 直接経費 700千円 間接経費 0円

研究の目的：

本研究は、中国唐代および宋代を中心に、詩を文人間の情報伝達のメディアとして位置づけつつ、その受容・交換のあり方を解明するとともに、それに関連して生じた詩学認識の変容について検討を加えることを目的とするものである。本年度は、過去三年間の研究を踏まえて、主として次の四点からなる研究を行う。

1. 宋代における詩文集の編纂とそこにあらわれた文学観に関する研究。
2. 宋代における詩文集の注釈に関する研究。
3. 北宋末南宋初期における江西詩派に関する研究。
4. 楊万里とその詩文集の編纂・流通に関する研究。

以上の研究も含めて、四年間に渉る本研究の成果は、これまで論文や学会発表の形で公表してきたが、最終年度に当たる本年度は冊子体の報告書の刊行に向けて準備を進める。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-15 国 語 学

はじめに、教育・研究活動の概要とその特色

国語学とは、日本語の音韻、文字・表記、文法、語彙などについて、上代から近・現代にわたり、通時的・共時的に研究するものであるが、大阪大学大学院文学研究科においては、別に現代語を主な対象とする日本語学専門分野があるので、国語学専門分野では通時研究(国語史研究)に重点を置き、明治以前の時代を主な対象とする。講義・演習などの授業も、課程博士論文・修士論文や学部の卒業論文もまた同様である。文献により実証することを重視するので文学の知識も必要であり、学部では日本文学と専修を同じくし、卒業論文・修士論文中間発表会や大学院生の研究発表会などは日本文学・比較文学とともに行っている。

蜂矢真郷教授は語構成、語彙史、上代語の研究を中心とし、金水敏教授は文法史を中心としつつ役割語の研究など多岐にわたっており、岡島昭浩助教授は音韻史、日本語学史、辞書史の研究を中心としている。このように、どの研究も、個別の文献や一つの時代に限らない、全体として大きな国語史となると言えるものである。また、2004年4月着任の岡崎友子助手は指示副詞を中心とする文法史を研究していて、これも国語史研究の中に位置づけられる。現在、文字・表記の分野がやや手薄ではあるが、互いに補い合っている。多くの大学院生の多様な研究とともに、今後とも国語史研究に重点を置いた研究・教育が進められよう。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 2 助教授 1 講師 0 助手 1

教授：蜂矢 真郷、金水 敏

助教授：岡島 昭浩

助手：岡崎 友子

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数								
学部*	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
42	8	8	0	1	0	0	0	0

*(日本文学と併せて) ※うち留学生 2 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業者*	大学院		博士号学位授与数	出身の研究者
		博士前期(M)修了者	博士後期(D)修了者		
'02	16	0	0	0	0
'03	9	0	3	4	1
小計	25	0	3	4	1

*(日本文学と併せて)

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	0	0	0
'03	3	1	4
計	3	1	4

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

- 池上友子 「古代指示副詞の研究」 2004/3
主査：金水敏 副査：蜂矢真郷、岡島昭浩
- 山口真輝 「日本書紀私記の研究」 2004/3
主査：蜂矢真郷 副査：金水敏、岡島昭浩
- 米田達郎 「驚流狂言台本の国語学的研究」 2003/9
主査：金水敏 副査：蜂矢真郷、岡島昭浩

【論文博士】

- 村田菜穂子 「形容詞・形容動詞の語彙論的研究」 2003/6
主査：蜂矢真郷 副査：金水敏、石井正彦

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	2	1	3	0	1	7
'03	7	1	1	0	0	9
計	9	2	4	0	1	16

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	5	5	1	0	0	11
'03	1	5	4	0	0	10
計	6	10	5	0	0	21

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

衣畑智秀「ノニ、クセニ、ニモカカワラズ」『日本語文法』(日本語文法学会), 3-1, pp. 3-18, 2003/3

金水敏, 岡崎友子, 曹美庚(共著)「指示詞の歴史的・対照言語学的研究——日本語・韓国語・トルコ語——」生越直樹編『対照言語学』シリーズ言語科学 4, 東京大学出版会, pp. 217-247, 2002/11

岡崎友子「指示副詞の歴史的変化について——サ系列・ソ系を中心に——」『国語学』(国語学会), 53-3(210), pp. 1-17, 2002/7

小川志乃「テヨリとテカラの意味的相違に関する史的研究」『国語国文学研究』(熊本大学文学部国語国文学会), 38, pp. 64-79, 2003/3

高宮幸乃「明恵上人関係講説聞書類における「問...答...」という文章形式と疑問文の表現形式との関係——文体と文法の交渉——」『三重大学日本語学文学』(三重大学日本語学文学会), 15, pp. 1-15, 2002/6

竹内史郎「古代語形容詞の活用語尾——動詞活用語尾形態への仮託——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 78, pp. 1-11, 2002/5

楊昌洙「近代における漢字字体についての一考察——国定読本・文部省刊行の整理案を資料として——」『待兼山論叢(文学篇)』(大阪大学文学会), 36, pp. 21-36, 2002/12

【2003年度】

岡崎友子「現代語・古代語の指示副詞をめぐって」『日本語文法』(日本語文法学会), 3-2, pp. 163-180, 2003/4

高宮幸乃「現代日本語の間接疑問文とその周辺」『三重大学日本語学文学』(三重大学日本語学文学会), 14, pp. 1-13, 2003/6

竹内史郎「ミ語法の構文的意味と形態的側面」『国語学』(国語学会), 55-1(216), pp. 97(1)-83(15), 2004/1

林浩恵「上代・中古に見られる形容詞派生の動詞——形容詞における意味分類との関連を中心に——」『国語語彙史の研究』(国語語彙史研究会), 23, 和泉書院, pp. 223-242, 2004/3

林浩恵「形容詞語幹の用法の違例」『萬葉』(萬葉学会), 185, pp. 32-47, 2003/9

深澤愛「漢字仮名交じり文中における片仮名表記の選択——博文館『太陽』前誌群を資料として——」『待兼山論叢(文学篇)』(大阪大学文学会), 37, pp. 37-50, 2003/12

深澤愛「漢字平仮名交じり文中における表記の選択——博文館『太陽』における外国地名の漢字表記と片仮名表記——」『日本語科学』(国立国語研究所), 14, pp. 29-53, 2003/11

深澤愛「漢字片仮名交じり文・漢字平仮名交じり文と外来語表記——『日本大家論集』を資料として——」『国語文字史の研究』(国語文字史研究会), 7, 和泉書院, pp. 171-186, 2003/11

朴美賢「日本書紀に見える「兒」「子」の考察」『国語文字史の研究』(国語文字史研究会), 7, 和泉書院, pp. 57-74, 2003/11

(2)口頭発表

【2002年度】

衣畑智秀「違和感・意外感、不満の表現——ノニ・モノヲを通して——」"The First Southern California Student Workshop on Japanese Linguistics: From the Functional, Generative, and Historical Perspectives", Student Workshop, UCLA/Los Angeles, 2003/2/19

- 衣畑智秀「中古語のモノヲについて」国語学会 2002 年度春季大会, 国語学会, 東京都立大学/東京都, 2002/5/19
- 依田恵美「動詞の音便形についての歴史的研究——サ行四段動詞のイ音便化阻止要因と超重音節の忌避——」"The First Southern California Student Workshop on Japanese Linguistics: From the Functional, Generative, and Historical Perspectives", Student Workshop, UCLA/Los Angeles, 2003/2/19
- 岡崎友子「現代語・古代語の指示副詞をめぐって」"The First Southern California Student Workshop on Japanese Linguistics: From the Functional, Generative, and Historical Perspectives", Student Workshop, UCLA/Los Angeles, 2003/2/19
- 高宮幸乃「WH疑問文による間接疑問文の形成過程について——ヤラ(ウ)を中心に——」"The First Southern California Student Workshop on Japanese Linguistics: From the Functional, Generative, and Historical Perspectives", Student Workshop, UCLA/Los Angeles, 2003/2/19
- 竹内史郎「サニ構文の歴史的展開——成立と意味類型の拡張——」"The First Southern California Student Workshop on Japanese Linguistics: From the Functional, Generative, and Historical Perspectives", Student Workshop, UCLA/Los Angeles, 2003/2/19
- 竹内史郎「上代ミ語法の形容詞性」国語学会 2002 年度春季大会, 国語学会, 東京都立大学/東京都, 2002/5/19
- 竹内史郎「上代ミ語法の形容詞性」第 12 回上ヶ原ことばの会, 関西学院大学/兵庫県, 2002/4/27
- 林 浩恵「形容詞語幹の用法の違例」第 55 回(2002 年度)萬葉学会全国大会, 萬葉学会, 弘前大学/青森県, 2002/10/12
- 米田達郎「狂言台本に見られる「マシテ御座ル」について——鷲流狂言保教本を中心に——」2002 年度大阪大学国語国文学会, 大阪大学/大阪府, 2003/1/12
- 米田達郎「江戸時代中後期における狂言詞章の丁寧表現について」国語学会 2002 年度秋季大会, 国語学会, 徳島大学/徳島県, 2002/11/10
- 【2003 年度】**
- 衣畑智秀「副助詞ダニの意味を構造とその変化——上代・中古における——」日本語文法学会, 青山学院大学/東京都, 2003/11/30
- 衣畑智秀 'A view on Japanese concessives with special reference to noni, temo and kedo', The 2nd biannual workshop in Japanese discourse and Pragmatics, Michigan State University/ Michigan, U.S.A. , 2003/7
- 依田恵美「動詞の音便形と超重音節の回避——歴史的観点から——」第 17 回日本音声学会全国大会, 関西大学/大阪府, 2003/9/28
- 小川志乃「カラニの一用法——接続助詞カラ成立の可能性をめぐって——」国語学会 2003 年度春季大会, 大阪女子大学/大阪府, 2003/5/18
- 高宮幸乃「不定詞を用いる間接疑問文の形成過程に関する一考察——ヤラ(ウ)による複文を中心に——」国語学会 2003 年度春季大会, 大阪女子大学/大阪府, 2003/5/18
- 高宮幸乃「間接疑問文とその周辺」土曜ことばの会, 大阪大学/大阪府, 2003/4/19
- 竹内史郎「ホドニ文のタクシスと因果関係」第 19 回上ヶ原ことばの会, 関西学院大学/兵庫県, 2004/1/17
- 竹内史郎「サニ構文の歴史的展開——成立と意味構造の拡張——」国語学会 2003 年秋季大会, 国語学会, 信州大学/長野県, 2003/11/16
- 竹内史郎「サニ構文の歴史的展開」第 16 回上ヶ原ことばの会, 関西学院大学/兵庫県, 2003/4/19
- 深澤愛「漢字仮名交じり文中における外来語表記の選択——符号との関わりに注目して——」2003 年度大阪大学国語国文学会, 大阪大学/大阪府, 2004/1/10

(3)その他(書評・翻訳など)

【2003 年度】

- 林 浩恵「紹介・神谷かをる著『古今和歌集用語の語彙的研究』」大阪大学国語国文学会『語文』78, pp. 55-55, 2003/5
- 米田達郎「紹介・高山善行著『日本語モダリティの史的的研究』」大阪大学国語国文学会『語文』79, pp. 66-67, 2003/12

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2003年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

2003年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度～2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

岡崎友子 博士後期課程, 大阪大学大学院文学研究科, 助手, 2004/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002年度～2003年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2002年度:1名 2003年度:0名

<内訳> 教職 1名

<主な職業名・就職先等> 2002年度 奈良学園中学・高等学校 教諭 1名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

外国人招へい研究員 計 2 名

日本学術振興会外国人特別研究員 計 1 名

10. 刊行物

*(日本文学専門分野とともに)

2002年度 「語文」78・79輯 大阪大学国語国文学会の機関誌 年2回

2003年度 「語文」80・81輯 大阪大学国語国文学会の機関誌 合併号

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

開催	国語語彙史研究会 第75回	2003年12月13日
	土曜ことばの会	2004年1月24日
		2003年10月23日, 7月19日, 4月19日, 1月25日
		2002年10月19日, 7月6日, 4月13日
事務局	国語語彙史研究会	2002年度以前から
	国語文字史研究会	2002年度以前から
	土曜ことばの会	2002年度以前から

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

*(日本文学専門分野とともに)

大阪大学国語国文学会

1月 1日間

研究誌「語文」を年2回編集・発行

*(日本文学, 比較文学専門分野とともに)

卒業論文・修士論文中間発表会

10月 3日間

大学院研究発表会

9月・11月 各2日間

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

大学院生は前回『年報 2002』に示した数よりさらに増えている。過去2年間の大学院生(特に博士後期課程院生)の学会での研究発表も、前回に増して活発である。国語学会6名(のべ)、日本音声学会1名、萬葉学会1名などであり、とりわけ、COE および科研費に基づきアメリカ UCLA 等で発表した者6名(のべ)が目立っている。国語学・日本語学界において、近年は、現代語を研究する人が多く、国語史や明治以前などを研究する人はあまり多くない。そうした中で、多くの文献資料を検討する必要があり、文学の知識も必要であるところの、決して楽ではない研究をしようとする大学院生が増え、これほどの研究発表がなされることは、前回も述べたが、評価されてよいのではないと思われる。外国人招へい研究員を含めて留学生が現代語以外を研究対象としているのも、大きな努力をしていると見られる。

前回『年報 2002』において大阪大学文学部からの大学院進学者が少ないことについて述べたが、2004年4月に他専修からの者を含めて2名の進学があり、また今後も期待される状況であることは、学部教育の一つの成果と言ってよいであろう。依然として少ないことには変わりはないが、留学生を含めて他大学から来た大学院生ともども切磋琢磨していることは欠点とは言えないと見られる。

大学院生が増え研究発表が活発になっているのに対して、研究者として就職した者が1名にとどまっているのは決して望ましい状況とは言えない。しかし、近年の状況から見れば健闘している方であろう。博士の学位を取得しても大学非常勤講師の職すらない大学もあると聞く中で、博士後期課程修了者・単位修得退学者の未就職者の全てが非常勤講師に行っているのも健闘している例であると言ってよい。

13-2 研究活動

蜂矢真郷教授・金水敏教授はいずれも多くの論文や著書・共著他を発表しており、岡島助教授もまた多くの論文他を発表していて、各人ともその研究が評価されている。この2年間の論文等の発表も多くあった。また、各人とも多くの学会の役員等をよく務めていて、学会活動に対して積極的に接している。そして、国語語彙史研究会・国語文字史研究会・土曜ことばの会の事務局を大阪大学に置いていて、これらのことが、大学院生や学部学生に対して、研究の面でも学界に接する面でも様々なよい影響をもたらしていると思われる。そうした中で、2004年11月、岡崎友子助手が新村出記念財団研究助成金を受けたのは朗報であった。

2004年度に入ってから、科研費を用いての全国的な研究会なども、金水教授を中心に多く持たれるようになっていて、これまでとはやや異なる活性化も期待される。

大学院生の研究も活発であることは、「教育活動」の欄に述べた通りである。課程博士を3名に、論文博士を1名に授与しており、引き続き今後も授与できる見込みである。

今後とも、大学院生を含めて、研究はより活発に行われ、著書・論文等もさらに多くのものが公になることが期待できる状況である。

上記のように、今後への期待も合わせて評価できるところは大きいと見られるが、ただ一つ心配なことがある。法人化等の改革を含めて、助手を含めた教員の、教育・研究に直接する他の仕事が増えている(2004年度以降、助手が配置されているので、過度ではないところもあるが)、それが、教育・研究の低下や、あるいは、個人の身体への悪影響をもたらすようなことにならないかと恐れもする。もう少し各人が教育・研究に専念できる環境を望みたいと思うのは贅言なこと

であろうか。

Ⅲ. 教員の研究活動(2002年度～2003年度の過去2年間)

1. 蜂矢 真郷 教授

1946年生。京都大学文学部卒業、同志社大学大学院文学研究科修士課程修了。博士(文学)。親和女子大学専任講師、同助教授、帝塚山学院大学助教授、奈良女子大学文学部助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：国語学。

1-1. 論文

蜂矢真郷「語基を共通にする形容詞と形容動詞」『国語語彙史の研究』(国語語彙史研究会), 23, 和泉書院, pp. 243-260, 2004/3

蜂矢真郷「上代の清濁と語彙——オホ～・オボ～(イフ～・イブ～)を中心に——」『美夫君志』(美夫君志会), 68, pp. 1-13, 2004/3

蜂矢真郷「動詞表記「敷」と形容詞語尾表記「敷」との間——シク活用形容詞フトシ [太] の成立について——」『国語文字史の研究』(国語文字史研究会), 7, 和泉書院, pp. 141-159, 2003/11

蜂矢真郷「語幹を共通にする形容詞と形容動詞」『国語語彙史の研究』(国語語彙史研究会), 22, 和泉書院, pp. 207-224, 2003/3

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

蜂矢真郷「上代の清濁と語彙——オホ～・オボ～(イフ～・イブ～)を中心に——」美夫君志会, 2003/6

蜂矢真郷「語幹を共通にする形容詞と形容動詞」国語語彙史研究会, 2002/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

蜂矢真郷 第17回新村出賞, 新村出記念財団, 1998/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2003年度～2004年度、基盤研究C(2)、代表者:蜂矢真郷

課題番号: 15520290

研究題目: 文献に現れた述語形式と国語史の不整合性について

研究経費: 2003年度直接経費 1,200千円、間接経費 0円

研究の目的:

従来の、歴史的文献に基づく国語史(日本語史)研究では、「口語性」を反映していると言われる文献が特に重要視されてきた。また、特に口語的でない文献からも、「口語性」が露呈していると言われる部分を恣意的に取り出して利用するということが行われてきた。本研究は、このような従来の観点を裏返し、むしろ「口語性」と不連続・不整合を見せる語彙あるいは形態を積極的に取り上げ、その由来、発展の過程を明らかにすることを目的とする。

従来の国語史は、「口語性」という必ずしも実態の明らかでない尺度によって文献を恣意的に選択し、切り取ることによって成立している一面がある。本研究はこれとまったく発想を異にし、文献の作り手が国語をどのように認識し、自らの表現を作り上げているかという観点に基づく研究であり、文献が本来持っている主体性、表現性を中心とする語彙・語

法研究である。また、今までは切り捨てられてきた資料に光を当てることによって、国語のより豊かな実態が明らかになるであろう。本研究を押し進めることにより、日本語の歴史的な流れはより重層的・立体的に捉えられることになるはずであり、従来の硬直した国語観にも大幅な改変が迫られることもありうる。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

国語学会(2004年4月より日本語学会と名称変更)・常任査読委員	2004年5月～現在
同上・評議員	2000年4月～現在
訓点語学会・委員	2003年11月～現在
国語文字史研究会・委員	2002年4月～現在
国語語彙史研究会・幹事, 代表幹事	2001年4月～現在
萬葉学会・編輯委員	1979年12月～現在

2. 金水敏教授

1956年生。1982年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学。文学修士(東京大学、1981年)。東京大学助手、神戸大学教養部講師、大阪女子大学助教授、神戸大学文学部助教授を経て、2000年4月現職。専攻：国語学／言語学。

2-1. 論文

金水敏「金剛寺一切経の古訓点本——『維摩経』を中心に——」『金剛寺一切経の基礎的研究と新出仏典の研究 研究成果報告書』2000年度～2002年度科学研究費補助金基盤研究(A)・(1)研究成果報告書(課題番号 12301001), 研究代表者：落合俊典(国際仏教学大学院大学), pp. 51-63, 2004/3

Kinsui, Satoshi, "Comments on the presentations of the Sophia Symposium on classical Japanese and linguistics," *Sophia Linguistics*, 50, pp. 131-134, 2003/12

Hoji, Hajime, Kinsui, Satoshi, Takubo, Yukinori, and Ueyama, Ayumi, "Demonstratives in Modern Japanese," *Functional Structure(s), Form and interpretation: Perspectives from East Language*, pp. 97-128, Routledge Curzon, New York, 2003/12

金水敏「所有表現の歴史的変化」『言語』32-11, pp. 38-44, 2003/11

金水敏「ラ抜き言葉の歴史的研究」『言語』32-4, pp. 56-62, 2003/4

金水敏「存在表現の構造と意味」『近代語研究』11, pp. 473-493, 2002/12

金水敏「近代語とステレオタイプ」『国語と国文学』79-11, pp. 85-95, 2002/11

金水敏, 岡崎友子, 曹美庚「指示詞の歴史的・対照言語学的研究——日本語・韓国語・トルコ語——」『対照言語学』シリーズ言語科学, 4, pp. 217-247, 東京大学出版会, 2002/11

金水敏「日本語文法の歴史的研究における理論と記述」『日本語文法』2-2, pp. 81-94, 2002/9

金水敏「日本語の構文論」『文法』現代日本語講座, 5, pp. 55-78, 2002/4

2-2. 著書

金水敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店, 2003/1

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

吉村和真(京都精華大学マンガ文化研究所)・金水敏(対談)「近代日本マンガの顔・身体とことば」『Interface Humanities』03, pp. 3-13, 2004/3

金水敏「恵果和尚之碑文 一帖(第一部二一一号)凡例、影印、訳文、訓点要語索引、解題」『高山寺古訓点資料 第四』

高山寺資料叢書 第二十三冊, pp. 1-51, 2003/8

金水敏 「『役割語』から読み解く、日本語のヴァーチャルな世界(インタビュー)」『diatxt.』10, pp. 53-61, 2003/7

2-4. 口頭発表

金水敏 「シンポジウム開催の趣旨と経緯」「文法史の捉え方——生成文法と機能言語学を中心に——」「自由討議の概要」
「総括」『国語学』54-4 (通巻 215 号), pp. 100-113, 2003/1

金水敏 「シンポジウム"係り結び"から見えるもの——古い問題への新しい取り組み——(総括)」『KLS 23: Proceedings of the Twenty-seventh Annual Meeting October 26-27』2002, pp. 245-250, 2003/1

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2002年度～2003年度、基盤研究(C)(2)、代表者：金水敏

課題番号：14510618

研究題目：統合化された言語学・国語学用語集のための基礎的研究

研究経費：2002年度 1,800千円

2003年度 1,800千円

研究の目的：

本研究は、言語学・国語学の諸領域で蓄積された研究成果の相互交流を図り、統合化された知識体系として再編化することを目標とし、そのための基礎的作業として、それぞれの分野の専門用語の統合・整理を試みようとするものである。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

国語学会・評議員	2003年4月～2009年3月
言語処理学会・理事	2004年3月17日～2008年評議員会当日
日本語文法学会・評議委員	2003年4月～2007年3月
同上・学会誌委員	2000年12月～2004年3月
日本言語学会・委員	2003年4月～2006年3月
語用論学会・編集委員, 大会運営委員(企画担当)	2004年～現在
同上・運営委員	2002年4月～2004年3月
同上・編集委員	2002年4月～2004年3月
訓点語学会・委員	2003年5月16日～現在

3. 岡島 昭浩 助教授

1961年生。1987年、九州大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(九州大学、1986年)。九州大学文学部助手、京都府立大学女子短期大学部講師・助教授、福井大学教育学部(教育地域科学部)助教授を経て現職。専攻：国語学。

3-1. 論文

岡島昭浩 「大矢透以前の大为爾」『国語文字史の研究』7, pp. 161-169, 2003/7

岡島昭浩 「『言海採取語...類別表』再読」『国語語彙史の研究』22, pp. 1(278)-22(257), 2003/3

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2003年度～2004年度、基盤研究(C)(2)、代表者：岡島昭浩

課題番号：15520287

研究題目：近世後期から近代前期にかけての五十音図研究についての研究

研究経費：2003年度 直接経費 1,700千円

研究の目的：

五十音図の歴史的研究を最初に行ったのは明治から昭和初期にかけての国語学者、大矢透であり、それ以前には歴史的・実証的な研究はなかったものと考えられてきた。たとえば平田篤胤が『古史本辞経』で示したのは、観念的で独断的なものであった。しかし、その一方で、実証的・歴史的な研究も行われていた。たとえば、伴信友の語学研究であり、さらにはその弟子である谷森善臣の語学研究がそれである。伴信友が『比古婆衣』の中で、いろは歌に先行する「たみへの歌」に言及していることは、知られておらず、「たみへの歌」の研究は、大矢透に始まるとの見方が一般的である。谷森善臣は伴信友の弟子に当たる人物であるが、その書き残したものをみると、「たみへの歌」への言及があり、さらには五十音図の研究もある。その五十音図研究が今まで国語学界に未紹介であったことは残念である。この谷森善臣の稿本類は宮内庁書陵部に蔵されているが、かなり多量なものであり、随筆のスタイルでもあり、さまざまな箇所に分かれて出てくるので、基本的調査が必要である。大矢透以前の五十音図研究がどこまで進んでいたのかを見極めることを目標とし、国語学者の国語学から近代的な言語史研究へと、どのように発展していったのかについて考える一助としたい。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

日本語学会・大会企画運営委員

2003年6月～2006年5月

国語語彙史研究会 委員

2003年4月～現在

4. 岡崎 友子 助手

1967年生。大阪大学文学研究科博士課程2004年修了。博士(文学)(大阪大学)。同志社女子大学非常勤講師。2004年現職。専攻：国語学。

4-1. 論文

岡崎友子「現代語・古代語の指示副詞をめぐって」『日本語文法』(日本語文法学会), 3-2, pp. 163-180, 2003/4

金水 敏, 岡崎友子, 曹美庚「指示詞の歴史的・対照言語学的研究——日本語・韓国語・トルコ語——」『シリーズ言語科学 4 対照言語学』東京大学出版会, pp. 217-247, 2002/11

岡崎友子「指示副詞の歴史的変化について——サ系列・ソ系を中心に——」『国語学』(国語学会), 53-3(通巻 210 号), pp. 1-17, 2002/4

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

岡崎友子「現代語・古代語の指示副詞をめぐって」The First Southern California Student Workshop on Japanese Linguistics: From the Functional, Generative, and Historical Perspectives(於 University of California, Los Angeles), 2003/2

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-16 英米文学

はじめに、教育・研究活動の概要とその特色

英米文学では、現在、玉井暲、森岡裕一、服部典之、片淵悦久、ポール・ハーヴィからなる5名の専属スタッフが中心となり、さらに毎年数名の集中講義・非常勤講師を加えて、学生の多様な関心に対応できる態勢を維持しつつ教育と研究に当たっている。17世紀・ルネサンス文学から20世紀現代に至るイギリス文学と、19・20世紀にわたるアメリカ文学において、正典といわれる古典的な作品はいうまでもなく、最近新たな評価を獲得し始めた作品までも幅広く取り上げ、それらの文学テキストを綿密かつ正確に読むことを基本方針としている。学生が研究対象とする作家、時代、ジャンル、テーマ、方法論等を限定することは行なわず、したがって学生諸君は自分の文学的関心にもとづいて自由に研究テーマを選ぶことができるのが特色である。スタッフおよび学生は、こうした多様な教育と研究にもとづいて蓄積した実力を背景にして、日本英文学会や日本アメリカ文学会をはじめとするさまざまな学会を舞台にして精力的に研究活動を行なっている。

本研究分野は、かつて藤井治彦教授、石田久教授が日本英文学会において評議員・理事を務めた伝統を継承して、玉井教授が現在その任にあり、また森岡教授は現在日本アメリカ文学会代議員を務めるなど、日本における英米文学研究の中核を支えている。服部助教授、片淵助教授、ハーヴィ外国人教師もまた、それぞれの所属する学会や学術誌上で意欲的な活動を見せており、本研究室はもっとも活気にあふれた英文科の代表として注目を浴びている。学生はこの雰囲気志気を鼓舞され、研究活動はきわめて活発である。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 2 助教授 2 外国人教師 1 助手 1

教授：玉井 暲、森岡 裕一
助教授：服部 典之、片淵 悦久
外国人教師：ポール・ハーヴィ
助手：好井 千代

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
64	12	17	0	0	0	1	1	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業生	大学院		博士号学位授与数	出身の研究者
		博士前期(M)修了者	博士後期(D)修了者		
'02	14	2	1	1	1
'03	19	2	1	2	1
小計	33	4	2	3	2

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	1	2	3
'03	2	0	2
計	3	2	5

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

金田仁秀 “*Beyond the Border: Language and Sexuality in Oscar Wilde's Work.*”2004/3

主査：玉井暲 副査：森岡裕一、服部典之、片渕悦久

川島信博 “*Miltonic Choreography.*”2004/3

主査：玉井暲 副査：森岡裕一、服部典之、片渕悦久

小畑拓也 “*Cybernetics Imagined: Self-Control Technologies in Pre-Dickian American SF.*”2003/3

主査：森岡裕一 副査：玉井暲、服部典之

【論文博士】

服部典之 「詐術としてのフィクション——デフォーとスモレット——」 2003/2

主査：玉井暲 副査：柏木隆雄、森岡裕一

植田和文 「群衆の風景——英米都市文学論——」 2002/7

主査：玉井暲 副査：森岡裕一、服部典之

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	4	2	0	0	5	11
'03	8	2	0	5	1	16
計	12	4	0	5	6	27

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	0	5	0	0	0	5
'03	0	10	0	0	0	10
計	0	15	0	0	0	15

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

足達賀代子 “The Narrator’s Political Strategy: Self-Presentation in *The Faerie Queene*” 『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 36, pp. 67-82, 2002/12

市橋孝道 “From Vanity to Geist: The Meaning of “German Society” in *Vanity Fair*”, *Osaka Literary Review* (大阪大学大学院英文学談話会), 41, pp. 7-25, 2002/12

伊藤佳子 『森林地の人々』におけるパストラル世界の変容 *Osaka Literary Review* (大阪大学大学院英文学談話会), 41, pp. 27-42, 2002/12

片山美穂 「アメリカのブロンテ姉妹批評史における「情熱」」石田久編『ドラマティック・アメリカ』英宝社, pp. 53-64, 2002/10

小畑拓也 “Alien Protocol”, *Osaka Literary Review* (大阪大学大学院英文学談話会), 41, pp. 59-74, 2002/12

小畑拓也 「箱庭の窓——並行宇宙の「現実」と「虚構」——」石田久編『ドラマティック・アメリカ』英宝社, pp. 107-119, 2002/10

嶋公代 「トニ・モリソンと歪められた「母性」——『青い目がほしい』の一考察——」石田久編『ドラマティック・アメリカ』英宝社, pp. 135-148, 2002/10

武内正美 “Gulliver’s Re-Acquirement of Writing: Confinement and Escape in *Gulliver’s Travels*” 『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 36, pp. 51-65, 2002/12

橘幸子 “The Power Relationship between Father and Daughter: Fitzgerald’s “Babylon Revisited” and “Lo the Poor Peacock”, *Osaka Literary Review* (大阪大学大学院英文学談話会), 41, pp. 43-58, 2002/12

三浦蒼史加 「ハリウッドが引用するシェイクスピア」石田久編『ドラマティック・アメリカ』英宝社, pp. 193-204, 2002/10

吉野成美 「デジレはなぜ死ぬのか——「デジレの赤ん坊」における父親不在の意味——」石田久編『ドラマティック・アメリカ』英宝社, pp. 231-243, 2002/10

【2003年度】

足達賀代子 “The Successor of St. George: Chivalric Ideal and Its Fall in *The Faerie Queene*”, *Osaka Literary Review* (大阪大学大学院英文学談話会), 42, pp. 1-16, 2003/12

市橋孝道 “Thackeray as a “Germanizer”: A Perspective on his “German Discourse””, *Osaka Literary Review* (大阪大学大学院英文学談話会), 42, pp. 29-48, 2003/12

伊藤佳子 『森林地の人々』の田園世界が孕むもの『ハーディ研究』29, pp. 29-41, 2003/9

垣口由香 “The Disappearance of Boundary: *All That Fall* as a Landmark”, *Studies in English Literature* 『英文学研究』(日本英文学会), English Number 45, pp. 95-110, 2004/3

片山美穂 「Lucy Snowe の『雪の墓』——*Villette*における理性と情熱の葛藤——」『ブロンテ・スタディーズ』4-1, pp. 57-69, 2003/10

桐山恵子 “Articles Not for Sale in *Goblin Market*”, *Osaka Literary Review* (大阪大学大学院英文学談話会), 42, pp. 49-62, 2003/12

桐山恵子 “The Sense of Un-Ending in Fin-De-Siecle Literature: A Study of *Dr. Jekyll and Mr. Hyde* and *Dracula*” 『待

- 兼山論叢』(大阪大学文学会), 37, pp. 1-13, 2003/12
- 小久保潤子「維持されるべき家庭:“Wakefield”における語り手のイデオロギー」『関西アメリカ文学』40, pp. 5-18, 2003/10
- 小久保潤子「ロマンティック・ゴシック:19世紀アメリカン・ゴシック/ロマンスの不可分性」『フォーラム』(日本ナサニエル・ホーソーン協会学会誌), 9, pp. 41-57, 2003/5
- 高橋信隆「ヘンリー・ジェイムズにおける群衆のモチーフ」 *Osaka Literary Review*(大阪大学大学院英文学談話会), 42, pp.63-76, 2003/12
- 橋幸子「“The Diamond as Big as the Ritz”再考: Kismine は本当に“innocent”なのか?」 *Osaka Literary Review*(大阪大学大学院英文学談話会), 42, pp. 93-106, 2003/12
- 中井麻記子 “The Faculty for Myth”: The Narrative Strategy of *The Moon and Sixpence*, *Osaka Literary Review*(大阪大学大学院英文学談話会), 42, pp. 77-92, 2003/12
- 三浦誉史加「英国初期近代parlourと家父長制——HolinshedにおけるThomas Ardenのparlourをめぐって——」 *Osaka Literary Review*(大阪大学大学院英文学談話会), 42, pp. 17-28, 2003/12
- 三浦誉史加 “Curing / Cured Females: Mental Disorder in *All's Well That Ends Well* and *The Two Noble Kinsmen*”(パーミンガム大学大学院シェイクスピア研究所に提出, 2003/9)
- 村田幸範 “Okonkwo as a Hero in Hi-story: A Study of *Things Fall Apart*”, *Osaka Literary Review*(大阪大学大学院英文学談話会), 42, pp. 107-120, 2003/12
- 森本道孝 “Male Conflicts in Sam Shepard's Family Trilogy”, *Osaka Literary Review*(大阪大学大学院英文学談話会), 42, pp. 17-28, 2003/12

(2)口頭発表

【2002年度】

- 伊藤佳子「『森林地の人々』におけるパストラル世界の変容」日本ハーディ協会第45回大会, 日本ハーディ協会, 関西学院大学/兵庫県, 2002/10
- 小畑拓也「陽電子洗脳——Campbell から Asimov へのロボット工学三原則バグフィックスとアップデート——」阪大英文学会第35回大会, 大阪大学英文学会, 大阪大学/大阪府, 2002/11
- 小久保潤子「維持されるべき家庭: “Wakefield”における語り手のイデオロギー」日本アメリカ文学会第41回全国大会, 日本アメリカ文学会, 青山学院大学/東京, 2002/10
- 高橋信隆「毒の恐怖——*The Turn of the Screw*に見る不安の構造——」日本英文学会第74回全国大会, 日本英文学会, 北星学園大学/北海道, 2002/5
- 橋幸子「“The Diamond as Big as the Ritz”再考——Washington 家における男性社会の内と外——」日本アメリカ文学会第41回全国大会, 日本アメリカ文学会, 青山学院大学/東京, 2002/10

【2003年度】

- 足達賀代子「削除された Hermaphrodite: *The Faerie Queene* における語り手の反論」日本英文学会第75回大会, 成蹊大学/東京都, 2003/5
- 伊藤佳子「『はるか群衆を離れて』における psychological な風景」日本ハーディ協会第45回大会, 学習院大学/東京, 2003/11
- 垣口由香「ウィニー、腹話術的声の身体」第22回日本サミュエル・ベケット研究会, 武庫川女子大学/兵庫県, 2003/12
- 垣口由香「境界の消失: *All That Fall* における“another world”」日本英文学会第75回大会, 成蹊大学/東京都, 2003/5
- 桐山恵子「ワイルドの文学とゴシック・ロマンスの系譜: 『ドリアン・グレイの肖像』における不在の悪魔と逆転した空間」日本ワイルド協会第28回大会, 2003/11
- 桐山恵子「いかにして Satan はロンドン市民を誘惑するか: Marie Corelli の *The Sorrows of Satan* 研究」日本英文学会第75回大会, 成蹊大学/東京都, 2003/5
- 澤邊興平「ベンジーという人格」関西フォークナー研究会, 関西学院大学/兵庫県, 2004/3
- 小久保潤子「独身男の妥協——*The Blithedale Romance* における Priscilla への告の必然性——」日本アメリカ文学会第

42回全国大会, 日本アメリカ文学会, 椋山女学園大学/名古屋, 2003/10

高橋信隆「Henry Jamesの観相学——*The American*の顔を読む——」日本英文学会第75回大会, 成蹊大学/東京都, 2003/5

武内正美「近代国家の身体としてのリリパット——古代の身体ガリバーの介入——」日本英文学会第75回大会, 成蹊大学/東京都, 2003/5

(3)その他(書評・翻訳など)

【2003年度】

山本紀美子監修・編集, 片山美穂, 皆本智美, 山崎僚子, 吉野美智子, 奥村真紀要約・注釈, *Charlotte Brontë: The Professor*. 大阪, 大阪教育図書, 2003/10

担当箇所: 要約, 1章, 3章, 4章, 20章(p. 53, p. 59, p. 60, p. 82), 注釈, 2章(pp. 53-59)

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD: 2名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計2名)

2003年度 PD: 1名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部: 5名 大学院: 1名 (計6名)

2003年度 学部: 5名 大学院: 1名 (計6名)

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度~2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

小川公代 大学院博士後期課程, 上智大学一般外国語教育センター, 専任講師, 2004/4

小畑拓也 大学院博士後期課程, 尾道大学芸術文化学部, 専任講師, 2003/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002年度~2003年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

なし

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

2002年度 *Osaka Literary Review* (OLR)No.41

2003年度 *Osaka Literary Review* (OLR)No.42

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大英文学会	36 回大会	2003 年 11 月開催
	35 回大会	2002 年 11 月開催
18 世紀英文学書評の会	6 回大会	2004 年 3 月開催
	5 回大会	2003 年 12 月開催
	4 回大会	2003 年 7 月開催
	3 回大会	2003 年 3 月開催
	2 回大会	2002 年 12 月開催
	1 回大会	2002 年 7 月開催

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去 2 年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

スタッフ面では、専任教員として、玉井暉教授がヴィクトリア朝および世紀末英文学や批評理論、森岡裕一教授がアメリカ・モダニズム小説、服部典之助教授が 18 世紀および現代英国小説、片淵悦久教授が 20 世紀現代アメリカ小説、ポール・ハーヴィ外国人教師がシェイクスピアなどを講じている。学内非常勤としては、大学院併任教授として言語文化部の仙葉豊教授が英国初期小説を講じている。また、学外非常勤講師としては、林和仁講師(龍谷大学)、白川計子講師(神戸松蔭女子大学)、青山義孝講師(甲南大学)、渡辺信二講師(立教大学)、花岡秀講師(関西学院大学)、伊豆大和講師(山口大学)が多様な講義を提供している。さらに、ジョージ・ヒューズ講師(東京大学)が集中講義講師として毎年出講して英文学講義を担当するなど、ヴァラエティに富んだ国際性豊かな教育水準を維持している。

院生の研究指導体制としては、従来の談話会形式による口頭発表に司会、コメンテーター制を導入し、さらに実践的な指導を行った結果、学会での院生の口頭発表数、レフリー査読つき論文採択数、全国的学会誌への掲載数は飛躍的に伸び、予想をはるかに上回る活躍ぶりを見せている。また、その他の同窓の研究者を基にした学会誌などへの掲載論文を含めると、この 2 年間の院生の論文総数はおよそ 30 点に達している。また、ハーヴィ外国人教師の着任、および海外からの研究者との積極的な交流によって、院生・学部生の間で英米の大学・大学院へ留学する気運が高まり、ほとんど毎年 1~2 名の留学生を送り出している。以上のように、院生の活躍ぶりに関しても、阪大英米文学が日本の一大拠点になりつつあり、その教育水準の高さが全国的に認められている。

学位取得に関しては、この 2 年間に論文博士 2 名、課程博士 3 名を生み出している。この傾向はますます強まり、その後も続々、学位授与がなされ、名実ともに、本専門分野の充実振りが実証されつつある。

教育面でさらに付け加えるならば、パソコン等機器の近代化を含むコモンスールの整備を行い、学生が自由に自習や授業の準備ができる環境を整えたり、院生・学部生・教員を交えて春・夏の研究室旅行を実施して親睦の場を積極的に設けるなど雰囲気作りにも努力しており、学問追及の厳しい雰囲気の中にも、和気あいあいとしたアットホームな空気が醸成され、本研究室の雰囲気はきわめて良好である。

13-2 研究活動

教員および学生の研究活動はきわめて旺盛である。その各々は、自分の従事する学問分野、研究領域にしたがって、種々の学会大会での研究発表、学会誌・専門誌への論文執筆、著書の出版、翻訳の出版等々の研究活動を行っている。とくに、日本英文学会と日本アメリカ文学会を舞台とする研究活動が積極的に行われているが、これらの学会のほかにも、日本英文学会中国・四国支部学会、シェイクスピア協会、17 世紀英文学会、ジョンソン協会、日本 18 世紀学会、ロマン派学会、ブロンテ協会、ハーディ協会、ジョージ・エリオット協会、ペイター協会、ワイルド協会、ヴィクトリア朝文化研究学会、ベケット研究会などの英文学系の学会や、日本アメリカ文学会関西支部学会、ホーソン協会、フォークナー協会、ヘミン

グウェイ協会、フィッツジェラルド協会、ペロー協会、マラマッド協会などのアメリカ文学系の学会など、種々の学会に積極的に参加をして、意欲的な研究活動を行っている。

また、海外の研究者との交流にも積極的に取り組んでおり、海外への留学、海外の大学・研究機関への訪問、外国人研究者の招聘等の活動を通じて、研究の frontline において行われている状況に触れることを怠りなく実行している。

本専門分野は、学部のレベルで同一の専修を構成している英語学専門分野と一緒に、「阪大英文学会」を組織し、これを母体にして、毎年 1 回、研究発表会を開催している。本専門分野出身の学生および研究者は、この同窓会組織の学会でも活発な活動を行っている。この阪大英文学会は、近年は、従来になかったシンポジウム形式を取り入れて、斯界に今日的な問題提起や研究成果を発表したり、発信する学会組織としての整備を推し進めて、また、本専門分野出身者からの投稿論文を編集して「阪大英文学会叢書」の刊行を開始するなど、活気にあふれる研究組織として全国的に注目されている。こうした学会を運営する母体である本専門分野研究室は、ますます研究組織として充実化の一途をたどっている。

Ⅲ. 教員の研究活動(2002 年度～2003 年度の過去 2 年間)

1. 玉井 暉 教授

1946 年生。1969 年、大阪大学文学部(英文学専攻)卒業。1971 年、大阪大学大学院文学研究科修士課程(英文学専攻)修了。文学博士(大阪大学、2000 年)。大阪大学助手、大阪府立大学助手、和歌山大学助教授、大阪大学文学部助教授を経て、1999 年 1 月現職。専攻：英文学。

1-1. 論文

玉井暉 『「まじめが肝心」とファルス——ワイルド論——』『岩波講座文学(演劇とパフォーマンス)』5, 岩波書店, pp. 227-247, 2004/2

玉井暉 『ワイルド研究の現在』『オスカー・ワイルド研究』5, pp. 13-16, 2003/11

玉井暉 『批評理論の教え方——批評理論の多様性とコミットメントのはざままで——』『英語青年』148-8, pp. 478-479, 2003/11

玉井暉 『言語テキストと映像テキスト』『Bronte Newsletter of Japan』58, p. 1, 2003/4

玉井暉 『J. ヒリス・ミラーの批評——テキストの<異種混交性>をめぐって——』『ドラマティック・アメリカ』英宝社, pp. 3-21, 2002/10

1-2. 著書

玉井暉, 松村昌家と共編, Regency Dandyism and the Fashionable Novel: Texts and Studies. Part III: Early Studies, 6(『復刻：ファッショナブル・ノヴェル・コレクション——第 3 部「初期資料編」——』計 6 巻), 本の友社, 2003/12

玉井暉, 松村昌家と共編, Regency Dandyism and the Fashionable Novel: Texts and Studies. Part II: The Fashionable Novel (2), 9(『復刻：ファッショナブル・ノヴェル・コレクション——第 2 部(ファッショナブル・ノヴェル(2))——』計 9 巻), 本の友社, 2003/12

玉井暉, 松村昌家と共編, Regency Dandyism and the Fashionable Novel: Texts and Studies. Part I: The Fashionable Novel (1), 7(『復刻：ファッショナブル・ノヴェル・コレクション——第 1 部(ファッショナブル・ノヴェル(1))——』計 7 巻), 本の友社, 2002/12

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

玉井暉, 丹治愛(書評)『知の教科書——批評理論——』『英語青年』149-11, pp. 700-701, 2004/2

玉井暉, 中央大学人文科学研究科(書評)『埋もれた風景たちの発見——ヴィクトリア朝の文芸と文化——』『ヴィクトリア朝文化研究』1, pp. 80-83, 2003/11

玉井暉, 山崎弘行編著(書評)『英文学の内なる外部——ポストコロニアリズムと文化の混交——』『週刊読書人』2494, p. 4, 2003/7

玉井暉, 平石貴樹と共訳(翻訳), ジョージ・ヒューズ『ハーンの轍の中で——ラフカディオ・ハーン/外国人教師/英文学研究——』研究社, p. 239, 2002/10

1-4. 口頭発表

玉井暉「ペイターとロマンティック・コネクション」日本ペイター協会・第42回大会, 2003/10

玉井暉「ブロンテ小説の楽しみ方」福岡女子大学英文学会, 2003/7

玉井暉『『ヴィレット』のダブル・エンディングを考える』日本ブロンテ協会関西支部大会, 2003/7

玉井暉「<英文科>に何を期待するか」阪大英文学会・第35回大会シンポジウム, 2002/11

玉井暉「21世紀のオスカー・ワイルド——ワイルド文学の可能性を探る——」日本ワイルド協会・第27回秋期大会シンポジウム, 2002/11

玉井暉「ヒリス・ミラーの批評再考」テキスト研究学会・第2回セミナー, 2002/8

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2002年度～2004年度、萌芽研究、代表者：玉井暉

課題番号：14651083

研究題目：イギリス19世紀「社交界小説 (fashionable novel)」の研究

研究経費：2002年度 2,000千円

2003年度 600千円

研究の目的：

本研究は、イギリス19世紀前半の1825～50年頃に現れた「社交界小説(fashionable novel)」と呼ばれる一群の小説のもっている文学的・文化的意味を考察し、その新たな今日的意義を明らかにしようとするものである。

まず、「社交界小説」の執筆およびその出版に関わった作家たち、たとえば Bulwer-Lytton, Benjamin Disraeli, Robert Plumer Ward, T.H. Lister, Mrs Gore, T.E. Hook, Charlotte Susan Bury らの作品や一次資料を収集する。次に、この派の作家たちの活動とその意味を論じた先行研究およびそれに関わる種々の文献を収集し、それらの検証作業を行わねばならない。

また、「社交界小説」に属する作品の中から、主要な小説作品を選別し、それらをまとめて復刻出版することも検討する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本英文学会・学会誌『英文学研究』編集顧問	2004年4月～現在
同上・中国四国支部学会・『中国四国英文学研究』編集委員	2003年10月～現在
同上・理事	2000年4月～現在
日本ブロンテ協会・理事	2004年4月～現在
阪大英文学会・会長	2003年11月～現在
日本オスカー・ワイルド協会会長	2003年11月～現在
日本ヴィクトリア朝文化研究学会・理事	2001年11月～現在
日本テキスト研究学会・幹事	2001年8月～現在
日本ジョージ・エリオット協会・理事	1997年11月～現在

日本トマス・ハーディ協会・運営委員
日本ウォルター・ペイター協会・理事

1992年10月～現在

1991年10月～現在

2. 森岡 裕一 教授

1950年生。1979年、大阪大学大学院修士課程修了。文学修士(大阪大学、1979年)。大阪大学助手、講師、奈良女子大学助教授、大阪大学文学部助教授を経て、2000年4月現職。専攻：アメリカ文学。

2-1. 論文

森岡裕一「崩壊する町——禁酒小説とスモールタウン——」森岡他9名共著『スモールタウン・アメリカ』英宝社, pp. 69-99, 2003/3

森岡裕一「『エミリーへのバラ』における反復のモチーフについて」花岡他編『共和国の振り子』英宝社, pp. 266-280, 2003/2

森岡裕一「『地平線の彼方』における叔権制」石田久編『ドラマティック・アメリカ』英宝社, pp. 205-216, 2002/10

2-2. 著書

森岡裕一(共著)『ミュージック・オブ・ハート』英宝社, 2003/10

森岡裕一(共著)『スモールタウン・アメリカ』英宝社, 2003/3

森岡裕一(共著)『共和国の振り子』英宝社, 2003/2

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

森岡裕一「英文学の教え方」『英語青年』(研究社), 48-9, p. 19, p. 33, p. 43, 2002/10

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2001年度～2004年度、基盤研究(C)、代表者：森岡裕一

課題番号：13610567

研究題目：アメリカ文学／文化とアルコールの関係に関する研究

研究経費：2002年度 700千円

2003年度 700千円

研究の目的：

本研究は植民地時代から現代にいたるアメリカの歴史を射程に入れ、アメリカ文化における酒の持つ意味を、民族、地域間の格差を考慮しつつ考察する。とりわけ19世紀の節酒／禁酒運動にみられる発想法とレトリックを文学との関わりの中であとづけ、革新主義時代アメリカのイデオロギーに文学者たちがいかなる反応をしたかをさぐる。20世紀初頭にあつては、作家たちの反禁酒法的態度をある種のモダニズムの身振りとしてとらえる視点から分析を進め、今日にいたるまでのアメリカの酒文化と芸術創造の関わりを探りたい。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日本アメリカ文学会・関西支部副支部長

2003年4月～2005年3月

同上・代議員

2002年4月～2005年3月

同上・関西支部評議員

1997年4月～現在

3. 服部 典之 助教授

1958年生。1983年、大阪大学大学院文学研究科修士課程修了。同博士課程中途退学。文学修士(大阪大学、1983年)。文学博士(大阪大学、2003年)。和歌山大学教育学部助手、大阪大学言語文化学部講師、同助教授を経て、2000年10月現職。専攻：英文学。

3-1. 論文

なし

3-2. 著書

服部典之『詐術としてのフィクション——デフォーとスモレット——』大阪大学博士(文学)授与論文(第17442号), pp. 352, 2003年

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

服部典之(事典項目)「近代小説」岸本美緒編『歴史学事典』11, 弘文堂, pp. 191-193, 2004/2/15

3-4. 口頭発表

服部典之「イギリス小説起源論におけるスコットランド問題」18世紀イギリス文学・文化研究会第2回大会, 於：専修大学神田校舎, 2003/11/23

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2003年度～2005年度、萌芽研究、代表者：服部典之

課題番号：15652017-00

研究題目：イギリス小説起源論におけるスコットランド問題

研究経費：2003年度直接経費 2,100千円

研究の目的：

本研究は、この20年ほど行われてきた「イギリス小説起源論」に、スコットランドという新たな観点を導入することで、イギリス小説という<世界「近代小説」>の元祖とされる文化媒体の誕生のダイナミズムを解明する研究である。また、イギリス18世紀から19世紀初頭のスコットランド人及びスコットランド文化が「小説の起源」に果たしてきた大きな役割を明らかにすることで、文学と政治経済社会などとの関わりが明らかになると考えている。文学のみに限定されず、歴史・政治・経済などの面でスコットランドを考察することは、分野横断的研究という新たな試みをすることであり、この意味において萌芽研究で申請する次第である。

イギリス小説の起源に関しては、Ian Wattの古典的研究*The Rise of the Novel*(1957)によって、Daniel DefoeやHenry Fieldingが最初の小説家とされて以来、18世紀イングランド人が、社会の近代化に即した形で近代社会の市民層の新たな文学ジャンルとして「小説」を創始したということが、定説になっていた。ところが、Lennard J. Davisの*Factual Fictions: The Origins of the English Novel*(1983)によって、小説がそれだけで自立したジャンルとして突如創生されたのではなく、17世紀には「ニュース」というジャンルと「ノベル」という「フィクションか事実か」の区別を問わない「差異化

されない混交体」が存在し、ここから二者に分かれていったことが証明された。これにより、17世紀から18世紀の社会政治的背景と「小説の起源」を連続させて論じるという視野が生まれた。その後、様々な起源論が生まれ、画期的なHomer Obed Brownの *Institutions of the English Novel* (1997) が発表された。これは、「小説」の起源は、その制度が整った時点で遡及的に確定されるのだとし、スコットランド人、Walter Scott(1771~1832)が国民小説を築いたとし、スコットランド人であるScottとイングランド人Defoeが小説起源に大きく関わることを主張し、スコットランド問題が、小説起源に関わる重要な視座であることを示唆した。私の研究の着想の契機となったのはこのBrownの説である。

しかしながら、H.O.Brownはスコットランド問題に着目しながらも、現実の政治社会の動きにまで分析が及んでいないため、スコットランド問題を十分論じているとは言いがたい。

本研究の目的は、第一に、イングランド・スコットランド合併(1707)締結に大きな役割を果たしたデフォーの一次資料をスコットランドの公文書等に直接あたることによって、なぜ彼が59才という晩年になって初めて *Robinson Crusoe* (1719) という小説を書くに至ったかという経緯を探り直ことである。第二に、この合併が起こった後18世紀のスコットランド人の多くの知識人(Tobias SmollettやJames Boswellなど)が文学に携わるようになりロンドンに出ていった背景、および特にSmollettがDefoeの悪漢小説の系譜を引いている意義をスコットランド・イングランド問題から明らかにする。第三に19世紀のWalter Scottの編纂したデフォー全集を検討し、彼がデフォーを再評価しその影響を受けることで、真の意味でスコットランドとイングランドの文化が合併した国民小説(「ブリティッシュ・ノベル」)を確立したことの意義を探ることを目的とする。

イングランドが近代国家を形成する際に、スコットランドと合併して、対フランス・対カトリック同盟をくむことが必須であったとされる。このような時代形成に直接関わったDefoeの一次資料を探りその役割を明らかにすることは、これまで歴史学、文学などの観点を合同した形で研究されたことはなかった。また、イングランド・スコットランド合併の政治・文化的波紋が19世紀に至るイギリスの文化的変遷に色濃く現れており、それらが生み出した「イギリス小説」は次の19世紀の世代のイギリス人が世界に躍進する、モラル的基盤を形成したと思われる。このような広い観点からスコットランド問題が研究されることはなかった。たとえばイギリス近代国家形成を論じたもっとも有名な著書であるLinda Colley, *Britons: Forging the Nation* (1992)においても、当時の文学の果たした大きな意味が指摘されながらも、その扱いは不十分なものである。本研究、「イギリス小説起源論におけるスコットランド研究」は、こうして、18世紀から19世紀前半にわたる文学・歴史・文化研究のなかで欠落していた観点を補い、新たな角度から文化のダイナミズムを探る研究である。この萌芽的研究が結実するならば、新たな「イギリス小説起源論」が期待されるのみならず、この時代の歴史・文化的に重要な新局面が明確になると期待される。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

4. 片淵 悦久 助教授

1965年生。1995年、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士(大阪大学、1991年)。北陸大学講師、同志社女子大学講師、助教授を経て、2003年4月現職。専攻：アメリカ文学、20世紀ユダヤ系小説、現代小説。

4-1. 論文

片淵悦久「アメリカという名の求心力——トマス・ピンチョン、『競売ナンバー49の叫び』——」石田久編『ドラマティック・アメリカ』英宝社, pp., 2002/10

4-2. 著書

押谷善一郎, 久我俊二, 町田哲司, 山本哲, 片淵悦久他『アメリカ文学史新考——アメリカ文学への手がかり——』大阪

教育図書, 2004/3

町田哲司, 片瀨悦久, 江尻雅一他『アメリカン・スタディーズ入門——自己実現でみるアメリカ——』萌書房, 2003/5
早瀬博範, 吉崎邦子, 片瀨悦久 他『21世紀から見るアメリカ文学史——アメリカニズムの変容——』英宝社, 2003/1

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

里内克己, 西山けい子, 橋本安央, 杉田和巳, 片瀨悦久「レスリー・フィードラー再読——アメリカ小説研究の過去と現在——」日本アメリカ文学会関西支部 第47回大会(フォーラム), 2003/12

片瀨悦久「逆立ちする Saul Bellow——『フンボルトの贈り物』における瞑想、奇術、文学——」阪大英文学会 第36回大会, 2003/11

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

5. ポール・ハーヴィ 外国人教師

1961年生。1980年9月、Oriental College, Oxford University 入学。1986年6月 Oriental College, Oxford University 卒業退学 (MA, MPhil 取得)。MA English Language and Literature, MPhil English Studies 1500-1660 (Renaissance Poetry and Prose) Oxford University。1986年10月、京都大学教養部招聘研究員(1年間)。1988年4月、大阪大学言語文化部講師。1990年4月、カナダ商工会議所専務理事(1年間)。1991年4月、大阪大学言語文化部講師。1995年4月、大阪大学言語文化部助教授。1999年10月、大阪大学文学部・大阪大学大学院文学研究科外国人教師に着任し現在に至る。専攻: シェイクスピア/イギリスルネッサンス/英文学。

5-1. 論文

Harvey, Paul A. S. "Kurosawa's *Macbeth*" *Atti del XXVII Convegno di Studi sul Giappone Cosenza 2003* forthcoming.

Harvey, Paul A. S. "Twelfth Night at Middle Temple Hall and the London Globe, 2002" *Memoirs of the Graduate School of Letters Osaka University*(大阪大学大学院文学研究科紀要), 44, pp. 79-90, 2003/3

Harvey, Paul A. S. "Kyogen of Errors: A Record of the Performance of Takahashi Yasunari's Kyogen Adaptation of The Comedy of Errors" *Atti del XXVI Convegno di Studi sul Giappone Torino 2002*, pp. 247-268.

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

Harvey, Paul A. S., "Unsex Me Here: Lady Macbeth in Translation", The Shakespeare Society of Japan 第43回, 2004/10/11

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

6. 好井 千代 助手

1959年生。大阪大学文学研究科博士後期課程 1987年単位取得退学、修士(文学)(大阪大学)、1987年大阪大学文学部助手、専攻：アメリカ文学。

6-1. 論文

Yoshii, Chiyo, "Money, Cultural Hybridity, and the International Age : *The Golden Bowl*", 『世紀転換期のグローバリゼーションとアメリカ文学——科学研究費補助金研究成果報告書』 pp. 4-31, 2004/3

Yoshii, Chiyo, "Proprietary Isabel Archer", 『世紀転換期のグローバリゼーションとアメリカ文学——科学研究費補助金研究成果報告書』 pp. 46-58, 2004/3

好井千代「クレオールのおズモンド——『ある婦人の肖像』ともうひとつのアメリカ——」石田久編『ドラマティック・アメリカ』英宝社, pp. 217-229, 2002/10

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

好井千代「マルチカルチュラルな時代と金——*The Golden Bowl*をめぐる——」日本アメリカ文学会第41回大会, 2002/10

好井千代「*The Portrait of a Lady* と American expansionism」日本英文学会第74回大会, 日本英文学会, 北星学園大学/北海道, 2002/5

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

好井千代 福原賞, 福原記念英米文学研究助成基金, 1993/2

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2001年度～2003年度、基盤研究(C)(2)、代表者：好井千代

課題番号：13610568

研究題目：世紀転換期のグローバリゼーションとアメリカ文学

研究経費：2002年度 直接経費 1,100千円, 間接経費 0円

2003年度 直接経費 1,000千円, 間接経費 0円

研究の目的：

本研究の目的は、19世紀末から20世紀初頭にかけての世紀転換期のグローバリゼーションの諸特徴を同時代のアメリカ文学、とりわけコスモポリタンを自認していた Henry James の作品を通して考察することである。その際、異文化志向のコスモポリタニズムやマルチカルチュラリズムとナショナリズムや帝国主義との関係、またツーリズムや国際結婚などの社会現象とグローバリゼーションの関係などのトピックに焦点をあてて、それらの問題をポストコロニアル批評やカルチュラル・スタディーズなどの最新の批評理論を取り入れて考察し、更にはもうひとつの世紀転換期である現代との共通性にまで議論の枠を広げ、最終的には100年前から現代につながる大きな歴史の流れを浮き彫りにしたい。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-17 ドイツ文学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本専門分野は、実証主義的な文献学の伝統を継承して「原典の緻密な読解」と「広範な文献資料の精査」に基づくテキスト読解という研究の基本姿勢を堅持し、そうした研究実践を可能にする基礎的な知識と方法の修得を教育の根幹に据えてきた。しかし同時に、国内外の新しい研究状況に対応して、地域文化論的アプローチへの関心を養う教育プログラムも提供している。

ドイツ文学には、18 後半世紀から 19 世紀前半にかけての転換期、および 19 世紀末から 20 世紀前半にかけての転換期がというふたつのピークがあることが知られており、現在のスタッフもまた、この両時期をカバーする配置となっている。また、ドイツ国民国家の領域内で展開した文学にくわえ、広く中東欧全域でドイツ語を媒体にくりひろげられた文化現象が近年注目されているが、その点にも即応したスタッフ配置であることは、本専門分野のすぐれた特色である。

ドイツ語学の基礎概念の修得、ならびに実際の運用能力向上のためドイツ人教師による授業が提供されている。さらに、現スタッフでは十分にカバーすることのできない研究テーマや研究方法について、言語文化部の併任教員および学外非常勤講師の来講を得て、学問動向をつねにフォローする研究・教育活動の構築を目指している。

とりわけ課程博士論文を準備中の大学院学生については、研究室修了者を主体として組織された大阪大学ドイツ文学会と連携してその研究活動を支援し、学会活動をつうじた研究者としての自立をうながすように努めている。

また、社会教育的なイベントである「ゲーテ生誕のタベ」（日本ゲーテ協会主催）の企画・運営をバックアップし、市民レベルでの日独文化交流の促進に取り組んでいる。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 1 助教授 1 講師 0 外国人教師 1 助手 1

教授：林 正則

助教授：三谷 研爾

外国人教師：ヨルク・ノヴァコヴィッチ

助手：阪井 葉子

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
10	4	2	1	0	0	0	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業生	大学院		博士号学位授与数	出身の研究者
		博士前期(M)修了者	博士後期(D)修了者		
'02	1	2	0	0	0
'03	2	1	0	0	0
小計	3	3	0	0	0

Ⅱ. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	0	1	1
'03	0	1	1
計	0	2	2

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【論文博士】

島崎暉久「ゲーテの宗教観」2003/9

主査：林正則 副査：三谷研爾、里見軍之

永谷益朗「言語・抒情詩・レトリック ドロステの詩の分析と解釈の試み」2002/9

主査：林正則 副査：三谷研爾、森谷宇一

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	1	0	0	0	0	1
'03	2	0	0	0	0	2
計	3	0	0	0	0	3

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	0	1	2	0	0	3
'03	0	1	0	0	0	1
計	0	2	2	0	0	4

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

村田美紀「トーマス・マンと第一次大戦——「文化」と「政治」についての考察——」『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 18, pp. 47-68, 2002/11

【2003年度】

池田泰子「バックフィッシュ文学の女性像と19世紀市民社会の心性(マンタリテ)——エミー・フォン・ローデンの『トロツコップフ』をめぐって——」『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 19, pp. 27-46, 2003/11

村田美紀「トーマス・マンにおける「市民」という表象——ヴィルヘルム2世時代のドイツと「市民性」——」『ドイツ文学論攷』(阪神ドイツ文学会), 45, pp. 89-109, 2003/12

(2)口頭発表

【2002年度】

村田美紀「トーマス・マンにおける「芸術家問題」と「ドイツ問題」——文化と政治についての考察——」第572回クヴェレ会例会, 東淀川勤労者センター/大阪府大阪市, 2003/1/12

森多摩喜「リルケ詩における舞踊モチーフについて——言語メディアにおける「運動」の受容——」阪神ドイツ文学会第180回発表会, 大阪学院大学/大阪府吹田市, 2002/7/7

山城貴茂「シュトルム『みずうみ』と教養市民の肖像」第7回ヨーロッパ文化研究会, 京都大学文学部/京都府京都市, 2002/10/19

【2003年度】

横内詩乃「ヴィルヘルム・ハイネの芸術観について——芸術家小説『アルディングロと幸福の島々』をめぐって——」大阪大学ドイツ文学会第9回研究発表会, 千里阪急ホテル会議室/大阪府豊中市, 2003/11/15

(3)その他(書評・翻訳など)

【2002年度】

神田彩子「研究ノート 冒険する少女たち」『Flaschenpost』(ゲルマニスティネンの会), 23, pp. 20-23, 2002/5/10

田辺幾久子「マルジナリア フォルカー・ブラウン——講演会とワークショップ: 詩の世界・詩の作り方——」『ドイツ文学論攷』(阪神ドイツ文学会), 44, pp. 224-228, 2002/12/25

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2003年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部：0名 大学院：1名（計1名）

2003年度 学部：0名 大学院：1名（計1名）

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度～2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002年度～2003年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2002年度：0名 2003年度：1名

<内訳> 翻訳業 1名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

2002年度 『独文学報』18号

2003年度 『独文学報』19号

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

大阪大学ドイツ文学会 第10回総会・研究発表会 会場：千里阪急ホテル会議室 2003年11月15日

日本ゲーテ協会主催「ゲーテ誕生日の夕べ」第353回誕生日記念講演会・演奏会 2003年8月29日

会場：大阪倶楽部（京阪神支部事務局として業務を担当）

大阪大学ドイツ文学会 第9回総会・研究発表会 会場：待兼山会館会議室 2002年11月16日

日本ゲーテ協会主催「ゲーテ誕生日の夕べ」第352回誕生日記念講演会・演奏会 2002年8月28日

会場：大阪倶楽部（京阪神支部事務局として業務を担当）

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

大阪大学ドイツ文学会(毎年総会および研究発表会を開催) 2003年11月15日

同上 2002年11月16日

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

本研究分野の教育の基本は「原典の緻密な読解」にあり、ドイツ語テキストの正確・緻密な読解のトレーニングを重視してきている。過去2年間においてもこの方針に変化はないが、学部低学年教育との接続をいっそうスムーズにするため、授業内容の再編をすすめてきた。具体的には、1年次配当の専門基礎教育科目『ドイツ文学入門』において、高等学校段階での学習内容を配慮した内容を提供するとともに、2年次・3年次の専門教育科目のなかに中級ドイツ語文法の

修得に目標をしばった演習を増設した。前者は受講者の好評を得て、担当スタッフに大阪大学共通教育賞(2003年度前期)が与えられた。後者は、本専門分野以外からも多くの受講者を集めており、この種の学部教育プログラムの需要が大きいことを示している。この間、学部における本専門分野の所属学生は漸増しており、こうした取り組みの成果の一端と考えられる。

大学院学生に関しては、ドイツ文学関連の研究職ポストの全国的激減が、学生の希望進路に大きく影響していることを認めざるをえない。具体的には、内部からの大学院進学者数の落ち込み、ならびに後期課程進学希望者の減少を結果しており、これは本専門分野だけで対応することのできない深刻な問題である。そのなかで、課程博士学位の取得指導に力を入れているが、その成果は今後を待ちたい。引き続き教育プログラムの再編をすすめるだけでなく、教育目標そのものの多様化を検討し、前期課程修了の時点で就職を希望する学生を積極的にサポートできる体制を構築していく必要がある。

この間、学生が自主的に利用できるコンピュータをはじめとする情報環境の整備をすすめ、学生の運用するホームページも充実してきた。今後は、こうした環境を教育・研究面で積極的に活用し、ドイツ語圏の情報にアプローチする技術を獲得するトレーニングをおこなうとともに、研究成果の国内外への発信を強化する方向をさぐることが課題である。

13-2 研究活動

本専門分野スタッフは、それぞれの研究テーマに即して着実に研究成果を挙げている。またこの2年間に、2件の論文博士学位を出すことができた。学位取得者いずれも本専門分野で大学院課程を修了したものであり、修了者の学界における持続的な活躍の証左である。大学院学生の研究活動は、従来の質的水準を維持しているが、今後は全国規模での学会、また国際学会でもその成果を発信していくよう指導していきたい。

専門分野として、先の外部評価の提言をうけ、中東欧地域との研究交流の準備を進めてきた。とりわけ三谷助教授が、本学のCOEプログラム「インターフェイスの人文学」にも積極的に参加し、そのなかの「モダニズムと中東欧の芸術・文化」研究グループのメンバーとして、ドイツ、オーストリアのみならず、チェコやポーランドの研究者とのネットワークの構築をすすめている。また、国内では、関連する美術史、音楽学、演劇学といった専門分野の研究者・専門家とも連携した研究活動を展開中であり、本専門分野における領域横断的な研究活動の活性化を目指している。近い将来には、日独間にとどまらないよりグローバルな観点からの、海外研究機関との協力関係の樹立に漕ぎ着けるよう、さらに努力する。

この間、特記すべきは、学生が短期・長期を問わず、積極的にドイツ語圏に留学し、その実際にふれて自身の研究を組み立てる姿勢を示しはじめた点である。留学の経験と実際の知識が専門分野内に蓄積されつつあり、それが後続する学生の知的関心を刺激するという良質のサイクルが、今後とも維持発展するよう配慮していく。

III. 教員の研究活動(2002年度～2003年度の過去2年間)

1. 林 正則 教授

1944年生。大阪大学大学院文学研究科修士課程(ドイツ文学専攻)修了。文学博士(大阪大学)。大阪大学文学部助手、同言語文化部講師、同助教授、文学部助教授を経て1996年より現職。専攻：ドイツ文学。

1-1. 論文

林正則「アンタイオス・ゲーテとメタモルフォーゼする「風景」——W・ブッシュの『イタリア紀行』論をめぐって——」
『大阪大学大学院文学研究科紀要』43, pp. 73-91, 2003/3

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

林正則「近代詩」『歴史学事典』(尾形勇ほか編), 11「宗教と学問」(岸本美緒編), 弘文堂, p. 191, 2004/2

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本ゲーテ協会・理事	2002年6月1日～現在
『ゲーテ年鑑』(日本ゲーテ協会編)編集員委員	2002年6月1日～現在
ドイツ語学 文学振興会・評議員	2001年4月1日～現在
大阪大学ドイツ文学会・会長	2000年4月～現在
日本ヘルダー学会・常任理事	1994年5月～現在

2. 三谷 研爾 助教授

1961年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。文学修士(1986年)。大阪府立大学助手、講師をへて2000年4月から現職。専攻：ドイツ、オーストリア文学および文化研究。

2-1. 論文

Kenji Mitani, "Resonanz der Grenzliteratur. Zur Kafka-Rezeption bei Atsushi Nakajima", *Neue Beiträege der Germanistik*, Band 2/4, S. 51-63, 2003/12

三谷研爾 「ツシタラは死なず 中島敦のカフカ受容についての覚書き」『待兼山論叢』37, pp. 1-17, 2003/12

三谷研爾 「プラハ・ドイツ人社会とその文化イデオロギー——ザウアーの論説『ドイツ人学生よ、プラハに来たれ!』をめぐって——」『独文学報』18, pp. 25-45, 2002/11

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

三谷研爾 「クリーマ著『カレル・チャペック』を読む」『図書新聞』2651, pp. 1-2, 2003/1

2-4. 口頭発表

三谷研爾 「Wozu Germanisten? ——大学教育におけるそのアイデンティティをめぐって——」『ドイツ文学論攷』44, pp. 229-233, 2002/12

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

三谷研爾 大阪大学共通教育賞(2002年度前期)

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2003年度、科学研究費補助金 基盤研究(C)、代表者：三谷研爾

課題番号：15520176

研究課題：プラハ・ドイツ人社会における文化的アイデンティティの形成と機能

研究経費：直接経費 1,100千円、間接経費 0円

研究の目的：

本研究は、典型的な中欧の多民族都市であった世紀転換期のプラハにおいて、言語的マイノリティに転落したドイツ人が、意識的に推進したドイツ文化アイデンティティ強化の動きと、それに拮抗して若い世代のユダヤ系知識人層のあいだに生じた美的モダニズムの相互作用を検証するプログラムである。

主として後者の運動に注目し、卓越した芸術表現の主体(リルケ、カフカ、ヴェルフエルなど)に還元して議論しがちであったこれまでの研究を再検討し、むしろ前者の実態をより正確に理解することに重点を置く。

この枠組のもとで、ナショナル・アイデンティティの強化をめざす動きと美的モダニズムとが交錯する地点を、主要メディアをとおして流通していた言説の分析をとおして、文化史的に明らかにする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

大阪大学ドイツ文学会・編集委員長	2004年1月～現在
同上・企画委員	2001年1月～2003年12月
関西チェコ/スロバキア協会・副会長	2003年4月～現在
日本独文学会・編集委員	2003年6月～2004年3月
同上	2001年6月～2003年5月
阪神ドイツ文学会・幹事	2002年4月～2004年3月

3. イヨルク・ノヴァコヴィツ 外国人教師

1952年生。1989年、ミュンヘン大学博士課程中途退学。文学修士(ミュンヘン大学、1987年)。1980-82年、熊本大学外国人教師。1989年より現職。専攻：日本学/社会学/中国学。

4. 三谷(阪井) 葉子 助手

1961年生。大阪大学文学部 1984年卒業、同大学大学院文学研究科博士前期課程 1986年終了、同大学院博士後期課程 1991年単位修得退学。文学修士。1991年より大阪大学文学部助手。専攻：ドイツ文学。

4-1. 論文

阪井葉子「音楽表現と女性の身体——ドロステの『ベルタ』とその周辺——」『ドイツ文学論攷』(阪神ドイツ文学会編), pp. 67-87, 2003/12

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

阪井葉子 書評「野口芳子著『グリム童話と魔女』」『ドイツ文学論攷』(阪神ドイツ文学会編), 44, pp. 190-192, 2002/12

阪井葉子 書評「今泉文子著『ノヴァーリスの彼方へ』」『Flaschenpost』(ゲルマニスティネンの会編), 23, p. 26, 2002/5

4-4. 口頭発表

Yoko Sakai, "Hakushu Kitahara und "Kinderliederbewegung" im Kreis der Zeitschrift *Das rote Vögelein.*",
Fachtagung der Kommission für Lied-, Musik- und Tanz- forschung in der Deutschen Gesellschaft für
Volkskunde, 2002/9

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2002年度～2004年度、科学研究費補助金 基盤研究(C)(2)、代表者：三谷葉子

課題番号：14510583

研究題目：ドイツ市民社会における聴覚文化の位置とその言語的表象

研究経費：2002年度直接経費 800千円

2003年度直接経費 800千円

研究の目的：

本研究は、ドイツにおいてブルジョワ的ライフスタイルが形成されていった19世紀前半に時期を限定して、その当時の聴覚をめぐる文化的位置づけを検証するものである。そのさい、「家庭音楽」(Hausmusik)と呼ばれていた、非職業的な愛好家＝ディレクタントによる音楽消費に注目しながら、ドイツ社会において市民階層が音、殊に楽音に対して抱いていたイメージを、その社会史的背景を含めて再構成することが、研究の主眼となる。また、聴覚にかかわるこうしたイメージは、文学作品によって読者公衆、とりわけ女性読者のあいだに広く流通し、増幅され、いっそうの定着をみることになったと考えられる。そこで、文学作品のみならず、作家の手紙や日記をも分析することによって、このイメージ形成のプロセスを検証する。以上のふたつの方向からのアプローチによって、文学者による民謡の収集と出版にはじまった口承文化再発見のプロジェクトが、市民社会におけるライフスタイルとしての音楽消費、すなわち聴覚文化へと変容していった様相を明らかにする。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

関西ゲルマニスティネンの会・世話人代表
(ドイツ語圏の研究に携わる女性研究者の会)

2002年4月～2003年3月

2-18 フランス文学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本専修は、フランス文学研究の王道である文献学的実証性を重んじ、堅実な方法でフランス文学のテキストを読み、すでにパスカル研究では「エコール・ドーサカ(大阪学派)」と称されて著名であり、バルザック研究、プルースト研究ではフランス本国に伍して遜色のない研究と教育を行うことを創設以来努めてきた。その成果は数多くの国際的に通用する専門家を輩出したことによっても証明される。また優れた外国人教師はフランス語の実践的運用能力の養成に力を注ぎ、仏政府給費留学生を含む多くの留学生を海外に送った。また学外のアリアンス・フランセーズ、関西日仏学院とも協力関係を結び、学生の語学力の向上、海外思潮の速やかな摂取を計った。

ごく最近まで学部生は3年から進学し、専門教育を行ったが、2年生からの進学となって、新たに語学のコースを増やし、文法、会話など従来よりもフランス語の能力を高めるように配慮している。科目は中世から現代までのフランス文学を併任教授の助力も仰いで教授し、知識に偏りが無いことをめざし、語学教育も専門家が先端の理論を紹介している。院生については毎週研究指導の時間を設け、他の院生も含めた自由討議で、論理の整合性や発表の有効な表現法について訓練する機会としている。

また年一回発行する研究誌に寄稿させ、論文執筆の機会を多くするように心がけている。この研究誌はフランスのもっとも権威ある学会誌にも文献として載るほど著名となっており、学生もフランス語で執筆するか、要旨をフランス語で記すかして、海外に発信している。

研究室では院生と学部生が自由に討議できる時間と空間を設け、積極的な学生はそれぞれに読書会を開いて知識やフランス語応用能力を涵養できるようにしている。院生は学部生を指導し、教官とはまた別趣の効果をあげているようだ。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 2 助教授 0 外国人教師 1 助手 0

教授：柏木 隆雄、和田 章男

外国人教師：アニエス・ディソン

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
13	6	8	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業者	大学院		博士号学位授与数	出身の研究者
		博士前期(M)修了者	博士後期(D)修了者		
'02	2	3	1	1	3
'03	3	1	0	1	0
小計	5	4	1	2	3

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	1	0	1
'03	0	1	1
計	1	1	2

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

高岡尚子“Ruine, jardin et retraite dans l'«utopie romanesque» de George Sand”2002/3

主査：柏木隆雄 副査：和田章男、内藤高、村田京子

【論文博士】

永瀬春男「秩序と侵犯——パスカルにおける計算機体験の意味——」2003/3

主査：柏木隆雄 副査：和田章男、林正則、塩川徹也

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	1	0	0	0	0	1
'03	0	0	2	0	0	2
計	1	0	2	0	0	3

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	0	0	1	0	0	1
'03	0	1	4	0	0	5
計	0	1	5	0	0	6

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

上江津律子「マルロー『紙の月』における《Farfelu》の表象」『フランス文学論集』37, 九州フランス文学会, pp. 25-36, 2002/11

【2003年度】

坂巻康司「ミメシスからポイエシスへ——ゴーチエからマラルメに至る舞踊批評の理念の変貌——」『大阪産業大学論集』人文科学編, 111, pp. 29-46, 2003/10

中尾雪絵「舞台役者、またはディドロにおける感受性」『待兼山論叢』文学編(大阪大学大学院文学研究科), 37, pp. 65-80, 2003/12

(2)口頭発表

【2002年度】

阪村圭英子「『失われた時を求めて』の花々とジャポニスム」共同研究:「日仏文化交渉の研究」京都大学人文研究所, 2002/5/27

【2003年度】

足立和彦「モーパッサン幻想小説の技法——*La main d'écorchée* から *La main* への書き換えを巡って——」関西ネルヴァル研究会, 大手前大学, 2003/4/26

坂巻康司「舞踊批評の変貌——ゴーチエからマラルメへ——」関西マラルメ研究会第一回研究発表会, 神戸大学, 2003/5/10

中尾雪絵「なめし技術の日仏比較——百科全書の項目『なめす』、図版「なめし工場」を中心に——」日本18世紀学会第25回全国大会, 青山学院大学, 2003/6/30

西川和泉「バルザック『十三人組物語』をつなぐもの——数字をめぐる——」関西バルザック研究会, 大阪市立大学文化交流センター, 2003/8/30

林千宏「ロンサールの詩におけるエクフラシスについて」日本ロンサール学会, あしがら荘, 2003/8/28

(3)その他(書評・翻訳など)

【2003年度】

中尾雪絵(共著)『エクリチュールの冒険——新編・フランス文学史——』(大阪大学出版会), 2003/12

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2003年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部：1名 大学院：2名 (計3名)

2003年度 学部：3名 大学院：2名 (計5名)

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度～2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

黒岡美登里 博士後期課程修了, 筑波大学人文社会研究科, 助教授, 2003/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002年度～2003年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2 名

2002年度：2名 2003年度：0名

<内訳> ジャーナリスト 1名 翻訳 1名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

年一回発行(第一号, 1953年)、GALLIA(機関誌：大阪大学フランス語フランス文学会)

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

「大阪大学フランス語フランス文学会(第54回)(国内学会)	2004年3月6日
「ルイ＝ジャン・カルヴェ氏(プロヴァンス大学)講演会」(研究会)	2004年1月27日
「ニコル・モゼ氏(パリ第七大学)講演会」(研究会)	2003年12月13日
「大阪大学フランス語フランス文学会(第53回)(国内学会)	2003年9月13日
「フランソワーズ・ギヨン氏(アムステルダム大学)講演会」(研究会)	2003年5月9日
「大阪大学フランス語フランス文学会(第52回)(国内学会)	2003年3月8日
「アンリ・ベアール氏(パリ第三大学)講演会」(研究会)	2002年10月9日
「大阪大学フランス語フランス文学会(第51回)(国内学会)	2002年9月7日
「ジャンヌ・ベム氏(サーレ大学)講演会」(研究会)	2002年6月7日
「ジャン・エシュノーズ氏(作家)講演会」(研究会)	2002年4月16日

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

フランス文学専修では、「教育・研究活動の概要とその特色」において記したように、幅広い教育活動を活発に行なっているが、『年報2002』の外部評価において、東京都立大学の吉川一義氏より、素晴らしい研究実績・研究環境にもかかわらず学生数が少ないとの指摘を受けた。若者の文学離れは近年の全国的な傾向ではあるが、当専修では、フランス文学

研究のおもしろさや阪大フランス文学研究室の雰囲気などを多くの人に伝えるため、学生たちが主体となって研究室のホームページを開設した。このホームページは学生が自主的に作成し、高校生にも親しみの持てるもので、情報量、内容の豊かさは他の大学のそれと比較しても遜色のないものと自負している。教員と学生との協同の成果が研究室の活動をいっそう活性化する証だろう。

13-2 研究活動

フランス文学専修は、毎年春と秋に本専修が主体となって組織している大阪大学フランス語フランス文学会の活動として、専門家、学生による研究発表、シンポジウムを行い、学外を含めて毎回 50 名ほどのフランス文学・語学の研究者の参加を得て、研究活動の成果を公開し、議論している。この研究会は 2005 年 3 月で 56 回を数えるほどに、長い伝統を持っている。

また、大阪大学フランス語フランス文学会の機関紙『ガリア』は、1953 年の初号以来、大学紛争時に延期はあったものの、2005 年 3 月で 44 号を数える。このように研究室を拠点にした学術雑誌で、かくも長期間、定期的に発刊しているものは、フランス文学の分野では『ガリア』のみで、フランスの最も権威ある学会誌の文献目録に必ず採録されるなど国内外で注目される学術誌に成長した。フランス語での執筆者が多いこともその特徴の一つである。応募論文を、選出された委員で構成される編集委員会で審査するという査読制を導入し、質の高い論文を掲載すべく努めている。なお、過去のほとんどすべての論文をウェブ上で公開しており、多くの反響を得ている。

また、フランス人を中心とする外国人研究者、および小説家、詩人などの実作者を招聘し、本学において講演会、シンポジウムなどを頻繁に行っている。上記にあるように、フランス各大学の著名な研究者の講演会、研究会を開催し、日仏の学術交流を活発に進めるとともに、2002 年にはゴンクール賞作家ジャン・エシュノーズ氏の講演会を主催し、実作者と直接に話すという貴重な機会も作っている。

Ⅲ. 教員の研究活動(2002 年度～2003 年度の過去 2 年間)

1. 柏木 隆雄 教授

1944 年生。1969 年 3 月大阪大学文学部卒、1971 年大阪大学大学院修士、1975 年大阪大学大学院博士課程単位取得退学、1981 年パリ第 7 大学博士課程入学。1982 年パリ第 7 大学第三期博士課程博士。1975 年神戸女学院大学文学部講師、1981 年同助教授、1983 年大阪大学文学部助教授、1991 年大阪大学文学部教授、1999 年大阪大学大学院文学研究科教授。2001 年より日本フランス語フランス文学会副会長。専攻：フランス文学。

1-1. 論文

- 柏木隆雄「プロスペル・メリメ『トレドの真珠』をく読む」『文学』岩波書店、2003 年 11-12 月号、pp. 153-167、2003/11
- 柏木隆雄「フランスにおける 19 世紀研究」『ヴィクトリア朝研究・ニューズ』2, p. 6, 2003/5
- 柏木隆雄「いとこポンスのコレクション」『バルザックを読む』藤原書店、2, pp. 27-29, 2003/5
- 柏木隆雄「バルザック『シャベール大佐』におけるまなざし」『関西フランス語フランス文学』9, pp. 15-25, 2003/4
- 柏木隆雄「ゾラ、紅葉、花袋——日本近代小説への道——」『環』藤原書店、pp. 452-459, 2003/1
- 柏木隆雄「バルザックと馬琴」『獨協大学国際フォーラム 2001 年度報告書』pp. 17-38, 2002/12

1-2. 著書

- 柏木隆雄共著『エクリチュールの冒険——新編フランス文学史』大阪大学出版会、2003/12
- 柏木隆雄共著『バルザックを読む』藤原書店、1, 2003/5
- 柏木隆雄共著『新フランス語文法』朝日出版社、2003/4
- 柏木隆雄編著『バルザックとこだわりフランスちょっと良い旅』恒星出版、2003/3
- 柏木隆雄『水鳥荘文庫目録(私家版)』水鳥荘、2003/3
- 柏木隆雄『バルザック関連文献目録』文部省科学研究費報告書・資料、2002/11

柏木隆雄 “Balzac, romancier du regard” Nizet, 2002/10

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

柏木隆雄・石井洋二郎「読むことのすすめ」(対談)『文学』岩波書店, 2004年1-2月号, pp. 133-147, 2004/1

柏木隆雄「文芸批評」『歴史学辞典』弘文堂, pp. 573-577, 2004/1

柏木隆雄「小津映画の真髓」『三重小津フェスティバル 2003』小津安二郎生誕 100 年記念三重小津フェスティバル 2003 実行委員会, p. 36, 2003/6/14

柏木隆雄「岩波『文学』の思い出」『文学』岩波書店, 4-3, 5-6月号, pp. 51-52, 2003/5

柏木隆雄「『ル・リール』誌復刻に寄せて」本の友社, 宣伝パンフレット, 2002/9

柏木隆雄「チャンバラ映画漫筆——嵐寛寿郎のために——」大阪大学共通教育機構『創造と実践』pp. 60-65, 2002/4

1-4. 口頭発表

柏木隆雄「アルフォンス・ドーデ『最後の授業』をめぐって——南仏、アルザスそして日本——」(講演), 於津 三重日 仏協会, 2004/3/27

柏木隆雄「太宰治とフランス文学」(研究発表), 京都大学人文研究所, 2003/12/20

柏木隆雄「『友情』の過去と現在——文学の沃野から——」(講演)「阪神奈大学・研究機関生涯学習ネット」公開講座フェス タ 2003, 2003/11/1

柏木隆雄「幕末・明治の異文化交流」(講演)「異文化を考える」追手門大学公開講座, 於茨木市, 2003/4/11

柏木隆雄「文学の楽しみ」(講演), 羽曳野市第 4 回「畑田塾」講演, 羽曳野市教育委員会文化財保護課, 2003/3/29

柏木隆雄“Emile Zola au Japon” (学術講演), conférence donnée à l'Université de Strasbourg-II, Marc Bloch, 2003/3/20

柏木隆雄「ヴィクトル・ユゴーの世界——ユゴー生誕 200 年記念——」(講演), 於津, 三重日仏協会, 2003/1

柏木隆雄「バルザック『シャペール大佐』におけるまなざし」(研究発表), 日本フランス語フランス文学会関西支部会 発表, 大阪市立大学, 2002/11/30

柏木隆雄「ゾラと日本文学」(シンポジウム、司会、発表), ソラ没後百年シンポジウム日本フランス語フランス文学会 秋季大会, 九州大学, 2002/10/26

柏木隆雄「フランス人の見た幕末日本」(研究発表), 京都大学人文研究所, 2002/9/21

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

柏木隆雄 Ordre de chevalerie République française, 2000/6

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 21世紀 COE プログラム分担

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本フランス語フランス文学会副学会長

2002年4月～現在

評価学位授与機構評価委員

2003年6月～2004年3月

2. 和田 章男 教授

1954年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。パリ第四大学第三課程博士(文学)。大阪大学文学部助手、言語文化学部講師、助教授を経て、1993年大阪大学文学部助教授、1999年文学研究科助教授、2004年より同研究科教授。専攻：フランス文学。

2-1. 論文

和田章男「プルーストとオランダ絵画」『大阪大学文学研究科紀要』44, pp. 39-77, 2004/3

2-2. 著書

和田章男共編著『エクリチュールの冒険——新編・フランス文学史——』大阪大学出版会, 2003/12

和田章男共編著『新・フランス語文法』朝日出版社, 2003/4

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

和田章男“Proust et le paysage de Camille Corot”, 国際シンポジウム«Proust sans frontières», 京都大学, 2003/9/18

和田章男「プルーストによるフェルメール発見」大阪大学フランス語フランス文学会, 大阪大学, 2003/3/8

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

大阪大学フランス語フランス文学会・幹事	1993年4月～現在
日本フランス語フランス文学会・関西支部 幹事	2003年4月～2005年3月
同上・関西支部 編集委員	2000年6月～2002年6月
同上・編集委員	1996年6月～1999年6月
同上・関西支部 幹事	1994年4月～1996年3月

3. アニエス・ディソン 外国人教師

ブザンソン大学、パリ第四大学にて言語学、文学を学ぶ。近代文学の教授資格(CAPES)、記号学・言語学博士号取得。パリの言語学研究所(BELC)に勤めた後、イタリア、モロッコ、日本で教鞭をとる。1982年より現職。

3-1. 論文

アニエス・ディソン “Pierre Alferi : compactage et déliaison”, *Ecritures contemporaines*, 7, pp. 251-261, 2003/12

アニエス・ディソン “Le texte littéraire en classe de langue : choix possibles et objectifs spécifiques”, *Bulletin de la 17ème Journée Pédagogique de Dokkyo*, pp. 1-3, 2003/11

アニエス・ディソン “Emmanuel Hocquard : Course de haies, chemins de traverse”, *Fusées*, 7, pp. 178-180, 2003/10

アニエス・ディソン “Définitif bob, d’Anne Portugal”, *Revue Europe*, 894, pp. 348-349, 2003/10

アニエス・ディソン “Le lapin Duracel, une lecture d’Anne Portugal”, www.inventaire-invention.com, 2002/11

アニエス・ディソン “L’argumentation en classe de langue”, *Bulletin de la 16ème Journée Pédagogique de Dokkyo*, pp. 30-33, 2002/11

アニエス・ディソン “D’une culture l’autre : argumentation et stratégies discursives au Japon”, *Etudes de Linguistique Appliquée*, 126, pp. 181-188, 2002/4-6

アニエス・ディソン 「ワルター・ベンヤミンのある考察に関して」 *Revue Luciole*, 47, pp. 30-37, 2002/4

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

アニエス・ディソン “Traduction de poèmes inédits de Tanikawa Shuntaro”, *Poésie*, 100, pp. 64-73, 2002/6

3-4. 口頭発表

アニエス・ディソン “La poésie comme mouvement”, Oxford University, 2003/3

アニエス・ディソン “Fluidité et montage dans la poésie de Pierre Alferi et Anne Portugal”, University College, London, 2003/3

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-19 英 語 学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

英語学研究室は教授 1 名、助手 1 名、学部生 64 名、大学院生 24 名、日本学術振興会特別研究員 2 名からなる。大庭幸男教授は「統語論・生成文法理論」を研究分野とし、特にチョムスキーの言語理論に基づく「生成文法の研究」が専門である。昨年度まで、他に河上誓作教授(2003 年度末定年退官)が「意味論・語用論・認知言語学」、特に「アイロニーの統合理論」を中心とする言語運用理論を専門とし、研究・教育指導をしていた。したがって、過去 2 年間(2002 年度～2003 年度)の本研究室の特色は、2 人の研究分野に沿って言語の運用と生成という全く異なる理論的視点から教育・研究を行うため、大学院生は運用と生成の両面から言語を相補的に観察する目を養うことができることにあったと言える。しかし、今年度から教授 1 名となり、意味論・語用論・認知言語学や音韻論、英語史の分野が手薄になったので、集中講義を中心にその不備を補っている。

本研究室の基本的な方針は、大学院生各自の興味に従い自由に研究させることである。実際、大学院生の研究分野は、生成文法理論、統語論、関連性理論、意味論、認知言語学、語用論、形式意味論など、多岐にわたっている。そのために、研究と教育の環境をできるだけ整備することに努力している。具体的には、研究面では最新の書物や専門誌を完備しすぐに読めるように努め、教育面では大学院生の専門に合わせて演習の論文を選ぶよう工夫している。また、大学院生にできるだけ国際学会や全国学会で研究成果を発表するよう指導している。以下の資料が示すように、大学院生は意欲的に研究し、自主的に研究会・読書会を開き、専門的知識の吸収に努めている。

大学院の指導面については、博士前期課程では授業の他に、学内外のすぐれた講演や講義にも積極的に参加し、広く英語学の知識を身につけるよう指導している。また、修士論文の作成にあたっては、中間発表や学会発表を通じて、その質的向上に努めている。博士後期課程では、各年次に日本英語学会、日本英文学会などで研究発表を行い、2 年次末に博士予備論文を提出、3 年次末には学位申請論文を完成させる方向で指導している。また、学術振興会特別研究員にも積極的に応募するよう助言している。

なお、英語学研究室の研究活動の活性化を図るため、年数回「待兼山ことばの会」を開催し、国内外の著名な言語学者や若手研究者に講演や研究発表をお願いしている。また、英語学研究室のスタッフと大学院生による英語学論文集 *OUPPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)* を年 1 回刊行している。論文は *MLA International Bibliography* に報告し、国際的に公表されている。なお、大学院生は英米文学分野と共同で刊行している *Osaka Literary Review* にも執筆する機会がある。

I. 現在の組織

1. 教員(2004 年 4 月現在)

教授 1 助教授 0 講師 0 助手 1

教授：大庭 幸男

助手：岩崎 真哉

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
64	8	16	2	0	0	4	2	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業生	大学院		博士号学位授与数	出身の研究者
		博士前期(M)修了者	博士後期(D)修了者		
'02	14	5	0	0	0
'03	19	6	2	4	2
小計	33	11	2	4	2

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	0	0	0
'03	1	3	4
計	1	3	4

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

田村幸誠 “*On Form-Meaning Mismatches in English Modality and Tense: A Cognitive Grammar Perspective*”
2004/3

主査：河上誓作 副査：大庭幸男、工藤真由美

【論文博士】

谷口一美 「事態概念の記号化に関する認知言語学的研究」 2004/3

主査：河上誓作 副査：大庭幸男、渋谷勝己

早瀬尚子 「英語構文のカテゴリー形成——認知言語学の視点から——」 2004/3

主査：河上誓作 副査：大庭幸男、金水 敏

由本陽子 「複合動詞・派生動詞の意味と統語——モジュール形態論から見た日英語の動詞形成——」 2004/3

主査：河上誓作 副査：大庭幸男、金水 敏

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	8	1	6	0	0	15
'03	11	1	6	0	12	30
計	19	2	12	0	12	45

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	3	12	2	0	0	17
'03	4	13	4	0	1	22
計	7	25	6	0	1	39

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

- Ito, Chizuru "Aboutness Conditions on Japanese Contracted Relative Clauses" *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 7, pp. 1-12, 2003/3
- Iwasaki, Shin-ya "The Cross-Linguistic Positioning of Temporal Adverbials" *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 7, pp. 13-31, 2003/3
- Kurokawa, Naohiko "Like Used in Similes from a Relevance Theory Perspective" *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 7, pp. 65-82, 2003/3
- 黒川尚彦「イディオムの理解に関する関連性理論的考察」*JELS(日本英語学会)*, 20, pp. 259, 2003/2
- Komoto, Naoko " "Restructuring" and Implicative/Non-implicative Verb Sentences" *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 7, pp. 33-64, 2003/3
- 香本直子「疑似含意：ある to 不定詞の用法について」*KLS(関西言語学会)*, 22, pp. 115-125, 2002/10
- Sakakihara, Ai "A Metaphor in a Headline as a Relevance Marker" *JELS(日本英語学会)*, 20, pp. 141-148, 2003/2
- 榊原愛「メタファーではなにが伝達されているのか？」*KLS(関西言語学会)*, 22, pp. 85-94, 2002/10
- 貞光宮城「共感覚比喻は転用か」『待兼山論叢』(大阪大学文学研究科), 36, pp. 31-49, 2002/12
- Tanaka, Eri "A Japanese Compound Verb V-te-iku and Event Composition" *PACLIC (Proceedings of Pacific Asia Conference on Language, Computation and Information)*, 16, pp. 421-432, 2002/4
- Tamura, Yuki-Shige "Relative Viewing Arrangement and English Tenses in Complement Clauses" *Conference Booklet of the Linguistics Association of Great Britain, Spring Meeting 2002*, pp.24-25, 2002/4
- Nishiguchi, Sumiyo "Logical Properties of Japanese *Kakari Zyosi*" *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 7, pp. 115-133, 2003/3
- 町田章「イディオム表現の生産性」*JELS(日本英語学会)*, 20, pp. 91-100, 2003/2
- Mori, Hideki "A New Cognitive Approach to English Imperatives" *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 7, pp. 83-114, 2003/3
- Mori, Hideki "The Generation and Interpretation of Pseudo-Imperatives" *KLS(関西言語学会)*, 22, pp. 225-235,

2002/10

【2003 年度】

- 岩崎真哉「日本語の複合語における文法構造と音韻構造の不一致について——認知言語学的分析——」 *JELS* (日本英語学会), 21, pp. 41-50, 2004/3
- Iwasaki, Shin-ya “A Mismatch between Grammatical and Phonological Structure in English: With Special Reference to Prepositional Phrases” 『待兼山論叢』(大阪大学文学研究科), 37, pp. 31-47, 2003/12
- 岩橋一樹「時間名詞句の属格化における屈折と of 属格の交替——情報構造の観点から——」河上誓作教授退官記念論文集刊行会編『言葉のからくり——河上誓作教授退官記念論文集——』英宝社, 東京, pp. 699-712, 2004/3
- Iwahashi, Kazuki “On the Alternation of 's and of in Temporal Genitives” *OUPPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 8, pp. 23-37, 2004/3
- Ohkawa, Yuya “There-Constructions and Definiteness: A Mental Space Theory Perspective” *OUPPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 8, pp. 83-107, 2004/3
- Kawahara, Koji “Argument Sharing in Resultative Constructions” *OUPPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 8, pp. 39-55, 2004/3
- 川原功司「目的語削除文における日本語の空範疇名詞句の性質について」 *JELS*(日本英語学会), 21, pp. 1-80, 2004/2
- 黒川尚彦「P is like Q における like の概念」河上誓作教授退官記念論文集刊行会編『ことばのからくり——河上誓作教授退官記念論文集——』英宝社, 東京, pp. 645-656, 2004/3
- 黒川尚彦他「言語形式の意味確定度不十分性と発話解釈」 *JELS*(日本英語学会), 21, pp. 206-7, 2004/2
- 香本直子「文法化によるカテゴリーステータスの変化について——英語・日本語の比較から分かること——」『言葉のからくり——河上誓作教授退官記念論文集——』河上誓作教授退官記念論文集刊行会編, 英宝社, 東京, pp. 261-271, 2004/3
- Sakakihara, Ai “On -*Tai* in Japanese Advertisements” *The Mechanism of Language : A Festschrift for Professor Seisaku Kawakami on the Occasion of His Retirement from Osaka University*, Eihosha Tokyo, pp. 631-643, 2004/3
- 榊原 愛「テレビ番組表における「あの」について」 *KLS*(関西言語学会), 23, pp. 180-190, 2003/10
- Sadamitsu, Miyagi “Synaesthesia Re-examined: An Alternative Treatment of Smell Related Concepts” *OUPPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 8, pp. 109-125, 2004/3
- Tanaka, Eri “Telicity and Path Structure in Japanese” *The Mechanism of Language : A Festschrift for Professor Seisaku Kawakami on the Occasion of His Retirement from Osaka University*, Eihosha Tokyo, pp. 355-370, 2004/3
- Tanaka, Eri “Event Composition and a Path in Japanese” *WECOL(Proceedings of Western Conference on Linguistics 2002)*, 14, pp. 282-293, 2003
- 田村幸誠「未来」過去時制に関する認知文法的考察とその含意」『言葉のからくり——河上誓作教授退官記念論文集——』河上誓作教授退官記念論文集刊行会編, 英宝社, 東京, pp. 529-544, 2004/3
- Nishiguchi, Sumiyo “Nonmonotonic Negative Contexts” *The Mechanism of Language: A Festschrift for Professor Seisaku Kawakami on the Occasion of His Retirement from Osaka University*, Eihosha Tokyo, pp.337-354, 2004/3
- Nishiguchi, Sumiyo “Categorial Grammar and Type Ambiguity of Japanese Particles” *OLR*(Osaka Literary Review), 42, pp. 153-167, 2003/12
- Nishiguchi, Sumiyo “Non-monotonic Negativity” *PACLIC (Proceedings of Pacific Asia Conference on Language, Computation and Information)*, 17, pp. 204-215, 2003/10
- Hiramatsu, Keijiyo “Fake Reflexive Objects and Run Verbs” *OUPPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 8, pp. 1-21, 2004/3
- 藤井友比呂「長距離繰上げと A 移動の条件」河上誓作教授退官記念論文集刊行会編『言葉のからくり——河上誓作教授退官記念論文集——』英宝社, 東京, pp. 193-205, 2004/3
- Fujii, Tomohiro “Licit and Illicit Long Subject-to-Subject Raising,” in Yukio Otsu (ed.), *TCP 2003(The Proceedings of the Fourth Tokyo Conference on Psycholinguistics)*, Hituzi Syobo, Tokyo, pp. 109-33, 2003/11
- 町田章「英語受動文への試論：認知文法からの新たな視点」河上誓作教授退官記念論文集刊行会編『言葉のからくり——

河上誓作教授退官記念論文集——』英宝社, 東京, pp. 469-483, 2004/3

Minami, Yusuke "The Semantic Fluctuation of *Pretty* Adjectives" *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 8, pp. 57-82, 2004/3

森英樹「情動としての Non-declarative Sentences」*JELS*(日本英語学会), 21, pp. 101-110, 2004/3

森英樹, 南佑亮「情動的ずれ認識とアイロニー」河上誓作教授退官記念論文集刊行会編『言葉のからくり——河上誓作教授退官記念論文集——』英宝社, 東京, pp. 559-572, 2004/3

Mori, Hideki "The Cognitive Structure of Imperatives" *KLS*(関西言語学会), 23, pp. 54-63, 2003/10

森英樹「メタファー——その類似性と情動性——」『日本認知科学会第 20 回大会発表論文集』(日本認知科学会), pp. 158-159, 2003/6

Yonekura, Yoko "Strategies in the Categorization of Tough Constructions" *The Mechanism of Language: A Festschrift for Professor Seisaku Kawakami on the Occasion of His Retirement from Osaka University*, Eihosha, Tokyo, pp. 453-468, 2004/3

Yonekura, Yoko "On 'Desired Results' Associated with Over" *Studies in Modern English: The Twentieth Anniversary Publication*, Eichosha, Tokyo, pp. 381-393, 2003/12

(2)口頭発表

【2002 年度】

伊藤千鶴「形態的不一致のある動詞句削除文の意味条件」関西言語学会第 27 回大会, 関西言語学会, 桃山学院大学/大阪, 2002/10/27

岩橋一樹「時間を表す属格表現における情報構造」日本英文学会第 74 回大会, 日本英文学会, 北星学園大学/北海道, 2002/5/25

大川裕也「定性表現の談話機能——存在文の定性制限に着目して——」日本語用論学会第 5 回大会, 日本語用論学会, 関西外国語大学/大阪, 2002/12/7

黒川尚彦「直喩における類似性の創造による彩」日本語用論学会第 5 回大会, 日本語用論学会, 関西外国語大学/大阪, 2002/12/7

黒川尚彦「イディオムの理解に関する関連性理論的考察」日本英語学会第 20 回大会, 日本英語学会, 青山学院大学/東京, 2002/11/16

榊原愛「Relevance Marker としての見出しのメタファー」日本英語学会第 20 回大会, 日本英語学会, 青山学院大学/東京, 2002/11/17

榊原愛「テレビ番組表における「あの」の考察」関西言語学会第 27 回大会, 関西言語学会, 桃山学院大学/大阪, 2002/10/27

Tanaka, Eri "Event Composition and a Path in Japanese" Western Conference on Linguistics 2002, Western Conference on Linguistics, University of British Columbia/Canada, 2002/11/2

田村幸誠「認知文法からみた補文時制解釈の多様性について」阪大英文学会 第 35 回大会, 大阪大学/大阪, 2002/11/9

Tamura, Yuki-Shige "Relative Viewing Arrangement and English Tenses in Complement Clauses" Spring Meeting 2002, the Linguistics Association of Great Britain at Edge Hill College(英国言語学会 2002 年度春季大会), Edge Hill College, 2002/4/11

西口純代 "Scalar Reversal by Negation and Fictive Scanning in Our Cognitive System" 日本英文学会第 74 回大会, 日本英文学会, 北星学園大学/北海道, 2002/5/25

Fujii, Tomohiro "Licit and Illicit Long Subject Raising" The 4th Tokyo Conference on Psycholinguistics, Tokyo Conference on Psycholinguistics, Keio University, Tokyo, 2003/3/14

前川貴史 "Structural Case Marking and Nominative Object Constructions in Japanese" 関西レキシコンプロジェクト研究会, 関西学院大学/神戸, 2003/1/11

前川貴史 "Structural Case Marking and Nominative Object Constructions in Japanese" 神戸市外国語大学英米学会 第 6 回大会, 神戸市外国語大学英米学会, 神戸市外国語大学/神戸, 2002/11/30

町田章「イディオム表現の生産性」日本英語学会第20回大会, 日本英語学会, 青山学院大学/東京, 2002/11/17

森英樹「命令文の認知構造」関西言語学会第27回大会, 関西言語学会, 桃山学院大学/大阪, 2002/10/27

森英樹「学生の本音」京都ドイツ語学研究会第48回例会, 京都ドイツ語学研究会, 関西ドイツ文化センター/京都,

2002/9/14

【2003年度】

Iwasaki, Shin-ya "On Case-Markers Occurring in Japanese Temporal Expressions" The 30th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society, University of California, Berkeley/U.S.A., 2004/2/16

岩崎真哉「日本語の複合語における文法構造と音韻構造の不一致について——認知言語学的分析——」日本英語学会第21回大会, 静岡県立大学/静岡, 2003/11/15

岩橋一樹「従属節における時制の一致とその例外」JACET(大学英語教育学会)関西支部2003年度秋季大会, JACET(大学英語教育学会)関西支部, 大阪女子大学/大阪, 2003/10/12

岩橋一樹「関連性理論の観点から見た属格表現の意味の多様性」第8次第2回JACET(大学英語教育学会)関西支部学習英文法研究会, 関学ハブスクエア大阪/大阪, 2003/6/21

大川裕也「存在文の文法性——メンタル・スペース理論に基づいて——」日本語用論学会第6回大会, 日本語用論学会, 神奈川大学/神奈川, 2003/12/6

川原功司“LF-copy of Empty Pronoun in Japanese” 日本英語学会第21回大会, 日本英語学会, 静岡県立大学/静岡, 2003/11/16

黒川尚彦「否定疑問文に対する応答とその解釈」日本語用論学会第6回大会, 神奈川大学/神奈川, 2003/12/6

黒川尚彦「イディオムの semantic underdeterminacy に関する一考察」第21回日本英語学会, 日本英語学会, 静岡大学/静岡, 2003/11/15

香本直子「含意動詞文における、動詞のシンタグマティックな機能について」日本英文学会第75回大会, 日本英文学会, 成蹊大学/東京, 2003/5/25

香本直子““Restructuring” and Implicative/Non-implicative Verb Sentences” 関西レキシコンプロジェクト研究会, 西宮市大学交流センター/西宮, 2003/4/26

榊原愛「「やっぱり」広告についての一考察」日本語用論学会第6回大会, 神奈川大学/神奈川, 2003/12/6

Tanaka, Eri “The Notion of ‘Path’ in Aspectual Composition: Evidence from Japanese” Workshop on Event Structures 04, Leipzig University/Germany, 2004/3/17

Nishiguchi, Sumiyo “Nonmonotonic Negativity” The 17th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation Sentosa/Singapore, 2003/10/3

平松佳二郎「結果構文の目的語と動詞の持つ結果述語」関西レキシコンプロジェクト研究会, 西宮市大学交流センター/西宮, 2003/10/25

Fujii, Tomohiro “On Vacuous String Scrambling” The Second Annual UConn/UMass/MIT/UMD/Harvard Student Syntax Workshop, University of Maryland, College Park/U.S.A., 2004/3/6

藤井友比呂“Multiple zibun” The Fifth Tokyo Conference on Psycholinguistics, Keio University/Tokyo, 2004/3/12

町田章「日本語被害受身文と参照点構造」日本認知言語学会第4回大会, 明治学院大学/東京, 2003/9/15

南佑亮「「コト」の判断と「モノ」の知覚——Tough・Pretty 形容詞への概念的アプローチ——」日本英文学会第75回全国大会, 日本英文学会, 成蹊大学/東京, 2003/5/25

森英樹「情動としての Non-declarative Sentences」日本英語学会第21回大会, 日本英語学会, 静岡県立大学/静岡, 2003/11/15

森英樹「感嘆文の認知構造」 関西言語学会第28回大会, 関西言語学会, 神戸市外国語大学/神戸, 2003/10/19

森英樹「Natural Course Theory ——命令文を一例に——」第226回 Kyoto Linguistics Colloquium, 京都大学/京都, 2003/6/28

森英樹「メタファー——その類似性と情動性——」(ポスター発表), 日本認知科学会第20回大会, 電気通信大学/東京, 2003/6/7

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD:2名 DC2:0名 DC1:0名 (計2名)

2003年度 PD:2名 DC2:0名 DC1:0名 (計2名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部:5名 大学院:4名 (計9名)

2003年度 学部:5名 大学院:4名 (計9名)

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度～2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002年度～2003年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2 名

2002年度:1名 2003年度:1名

<内訳> 教職 2名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

2002年度 *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)* Vol. 7

OLR (Osaka Literary Review) No. 41

2003年度 *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)* Vol. 8

OLR (Osaka Literary Review) No. 42

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

第71回待兼山ことばの会

2003年9月27日

第70回待兼山ことばの会

2002年12月20日

第69回待兼山ことばの会

2002年9月20日

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去 2 年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

過去 2 年間(2002 年度～2003 年度)の教育活動を見てみると、授業内容では分野に偏ることなくバランスよく行った。その成果は以下に示す研究活動や博士の授与件数(論文博士 3 件、課程博士 1 件)や学術振興会特別研究員数(1 名、本年度 4 月よりさらに 1 名)に表れている。また、*OUPEL* 第 7 巻(2002 年)、第 8 巻(2003 年)を発行し、それぞれ 6 名と 7 名の大学院生が論文を発表した。現役院生の論文集としては一定のレベルを保っていると思われる。さらに、「待兼山ことばの会」を毎年ほぼ 2 回開催した。これは大学院生を刺激するために開催しているが、いい効果があがっているので今後も開催する予定である。

次に、課程博士論文の作成・提出について自己点検・評価を行う。英語学分野では、2002 年度～2003 年度を通じて 1 名が課程博士論文を提出し、学位を授与された。われわれは、課程博士論文の提出条件として、博士予備論文の提出のほか、内規として「国内学会(日本英語学会、日本英文学会など)のレフェリーつき機関誌や国際学会誌、あるいは、それに相当するレベルの海外専門誌に 2 本以上の論文が掲載されること」を設定している。現在、博士予備論文を提出したものが数名いるが、上記の条件を満たしていないため、提出に至っていない。学位授与者数の増加が求められている昨今、この条件の見直しの必要性を感じているところである。

13-2 研究活動

スタッフの研究活動の評価であるが、河上教授はアイロニーの統合理論に関する科学研究費(萌芽的研究)が 2000 年に認められ、2003 年に『外観と実態の言語学——アイロニーとその周辺——』(2000 年度～2002 年度科学研究費報告書)を刊行した。大庭教授は 2002 年度日本英文学会シンポジウム(第 74 回全国大会)で口頭発表し、『言語学からの眺望 2003』(福岡言語学会編)にその内容を発表した。また、その一部は加筆訂正の上、学術雑誌である『英語青年』(研究社)に発表した。さらに、財団法人「語学教育研究所」より発行された『市河賞 36 年の軌跡』で特定性の効果についての論考を発表した。この本は過去 36 年間に市河賞を受賞した研究者による論文集である。この論文は先の論文とともにミニマリスト・プログラムの研究に寄与するものと思われる。また、科学研究費としては基盤研究(C2)(2002 年度～2003 年度)が認められ、その成果を『生成文法理論における中核的な統語現象と周辺的な統語現象の研究』(2004 年 5 月)として発表した。なお、河上教授の定年退官を記念して論文集『言葉のからくり——河上誓作教授退官記念論文集——』を刊行した。日本を代表する研究者の論文もおさめた総頁 867 頁の大部の論文集である。

次に、大学院生の研究活動についての評価であるが、極めて積極的に行われている。まず、*OUPEL* 第 7 巻(2002 年)、第 8 巻(2003 年)には、上記のように、それぞれ 6 名と 7 名が論文を発表した。現役院生の論文集としては一定のレベルを保っていると思われる。次に、日本国内の各種学会(日本英語学会、日本英文学会、日本語用論学会、日本認知言語学会、関西言語学会など)において、多数の大学院生が研究発表を行った。2002 年度と 2003 年度の発表実績をみると、論文発表が総計 45 件、口頭発表が総計 39 件にのぼる。また、最近では海外で発表する院生もあり、過去 2 年間で総計 7 件ある。このことから、大学院生の研究活動はきわめて活発であると判断できる。

Ⅲ. 教員の研究活動(2002 年度～2003 年度の過去 2 年間)

1. 大庭 幸男 教授

1949 年生。九州大学大学院文学研究科修士課程(英語学専攻)修了。文学博士(大阪大学、1997 年)。山口大学助手、同講師、大阪大学言語文化部講師、同助教授、大阪大学文学研究科助教授を経て、1999 年 4 月より現職。専攻：英語学。

1-1. 論文

大庭幸男「間接目的語と主題化／抽出規則」大庭幸男編『言葉のからくり——河上誓作教授退官記念論文集——』英宝社、pp. 159-176, 2004/3

大庭幸男「二重目的語構文の構造——分散形態論の枠組みを用いて——」福岡言語学会編『言語学からの眺望 2003』九州大学出版会, pp. 33-47, 2003/12

大庭幸男「特定性効果とフェイズ不可侵条件」財団法人 語学教育研究所編『市河賞 36 年の軌跡』開拓社, pp. 202-210, 2003/5

大庭幸男「無生物主語を伴う二重目的語」『英語青年』研究社, 148-10, pp. 640-642, 2003/1

1-2. 著書

大庭幸男編『言葉のからくり——河上誓作教授退官記念論文集——』英宝社, 2004/3

河上誓作, 大庭幸男編 *Osaka University Papers of English Linguistics(OUPEL)*, 8(2004/3)

河上誓作, 大庭幸男編 *Osaka University Papers of English Linguistics(OUPEL)*, 7(2003/3)

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

大庭幸男 “A Causative Structure of Double Objects” 第74回日本英文学会シンポジウム『二重目的語構文の全体的検証』2002/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

大庭幸男 市河賞, 財団法人 語学教育研究所, 1998/10

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2002 年度～2003 年度、基盤研究(C)(2)、大庭幸男

課題番号：14510517

研究題目：生成文法理論における中核的な統語現象と周辺的な統語現象の研究

研究経費：2002 年度直接経費 1, 800 千円

2003 年度直接経費 1, 100 千円

研究の目的：

本研究の基盤とする理論的枠組みは、生成文法理論である。この理論は約 45 年前にマサチューセッツ工科大学のノーム・チョムスキー教授によって提唱され、人間が生まれながらもっていると仮定される「普遍文法(Universal Grammar)」のメカニズムを明かにすることを目標としている。この理論は、初期の「標準理論」を経て、「拡大標準理論」、「修正拡大標準理論」、「統率と束縛理論」、「原理と媒介変数理論」と理論的發展過程を辿り、現在ではミニマリスト・プログラムという理論が展開されているところである。

この理論で注目すべきことは、中核的な言語現象を議論の対象にして、それから抽出される一般的な規則、制約、構造関係を明らかにし、普遍文法(人間の言語機能)の本質を追求してきたことである。その中核的な統語現象とは、例えば、wh 疑問文(What did you think that he bought?/*What did you wonder who bought?), 繰り上げ構文(John seems to be likely to be a student./*John seems that it is likely to be a student.), (助)動詞の繰り上げ(Could they have left?/*Have they could left?)などである。

しかし、この理論では、周辺的な言語現象は全く無視されてきた。その理由は、この統語現象が普遍文法理論の一般規則や原理では説明できないと考えられているからである。にもかかわらず、自然言語には、中核的な言語現象だけでなく、周辺的な統語現象も存在するので、普遍文法が人間の言語習得装置と仮定する生成文法理論においては周辺的な言語事実

も無視できないはずである。

したがって、本研究の目的は、生成文法理論では殆ど議論されることがなかった周辺の言語現象を研究対象にして、第1に普遍文法の一般的な規則や原理が周辺の統語現象にどの程度適用可能かを探りながら、普遍文法と周辺の統語現象の関係を明確にし、第2に周辺の統語現象はどのような特徴をもつか明らかにすることである。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本英語学会・監事	2003年4月～2007年3月
同上・ <i>English Linguistics</i> 編集委員	2003年10月～2005年9月
関西言語学会・運営委員	1993年4月～現在
日本英文学会・『英文学研究』編集委員	2000年4月～2004年3月
同上・『英文学研究』編集委員長	2002年4月～2003年3月

2. 岩崎 真哉 助手

1976年生。大阪大学文学研究科後期博士課程 2004年単位取得退学。修士(文学)(大阪大学)。2004年より現職。専攻:英語学。

2-1. 論文

岩崎真哉「日本語の複合語における文法構造と音韻構造の不一致について——認知言語学的分析——」*JELS* 21, 2004/3
Iwasaki, Shin-ya "A Mismatch between Grammatical and Phonological Structure in English: With Special Reference to Prepositional Phrases" 『待兼山論叢』37, 2003/12
Iwasaki, Shin-ya "The Cross-Linguistic Positioning of Temporal Adverbials" *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)*, 7, pp. 13-31, 2003/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

Iwasaki, Shin-ya "On Case-Markers Occurring in Japanese Temporal Expressions" The 30th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society, 2004/2
岩崎真哉「日本語の複合語における文法構造と音韻構造の不一致について——認知言語学的分析——」日本英語学会第21回大会, 2003/11

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-20 日本語学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

日本語学講座の特色は、日本語を一つの個別言語として客観的に対象化して観て行こうとする立場であり、現代日本語学、社会言語学、対照言語学、日本語教育学の4つの分野の教育・研究が行われている。現代日本語学では、話し言葉や書き言葉の実例を丹念に調査することによって、現代日本語の文法・語彙・音韻・表記等の特質を体系的・総合的に扱う。社会言語学では、日本語の地域差(方言)・性差・年齢差や場面による言葉の違い、非母語話者の日本語など、現代社会に存在する日本語の多様性と、それがもたらす言語学的な問題や社会的な問題を、フィールドワーク等によって把握し、分析する。対照言語学では、日本語や日本語による言語行動の特徴を、他言語やそれを用いた言語行動と比較し、その異同を把握すること、異文化間コミュニケーションの中で起こりうる言語に関連する問題の本質を明らかにすることを目的とする。日本語教育学では、日本語を第二言語として学ぶ人々、および日本語学習を支援するため人々を全人的に捉え、日本語の学習および教育に関わる複雑な心理的・社会的要因を質的に研究するとともに、高度の専門知識をもった日本語教師を育てるための教師教育を行っている。いずれの分野においても、外国人留学生を積極的に受け入れており、海外の研究者との交流も盛んである。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 4 助教授 2 講師 0 助手 1

教授：真田 信治、土岐 哲、工藤 真由美、青木 直子

助教授：渋谷 勝己、石井 正彦

助手：松丸 真大

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
41	29	43	2	0	2	4	8	4

※うち留学生 45 名、社会人学生 11 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業生	大学院		博士号学位授与数	出身の研究者
		博士前期(M)修了者	博士後期(D)修了者		
'02	18	8	2	2	2
'03	5	15	3	5	3
小計	23	23	5	7	5

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	1	1	2
'03	3	2	5
計	4	3	7

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

- 朝倉淳子 「日本語教育実習生の発達過程に関する質的研究——ダイアリ分析手法を用いて——」 2004/3
主査：青木直子 副査：土岐哲、真田信治
- 朝日祥之 「言語変種の形成過程に関する社会言語学的研究——ニュータウンを事例にして——」 2004/3
主査：真田信治 副査：土岐哲、渋谷勝己
- 簡月真 「台湾に残存する日本語の実態」 2004/3
主査：渋谷勝己 副査：真田信治、土岐哲
- オストハイダ・テーヤ 「言語外的条件と言語行動の相関に関する言語社会心理学的研究」 2003/3
主査：真田信治 副査：土岐哲、渋谷勝己

【論文博士】

- 白畑知彦 「第二言語習得研究——束縛原理の習得を通して——」 2004/1
主査：青木直子 副査：大庭幸男、土岐哲、渋谷勝己
- 西尾純二 「マイナス待遇表現の言語行動論的研究」 2003/10
主査：真田信治 副査：土岐哲、渋谷勝己
- 金田章宏 「八丈方言動詞の基礎研究」 2002/12
主査：工藤真由美 副査：真田信治、渋谷勝己

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	4	3	14	1	13	35
'03	5	2	14	2	19	42
計	9	5	28	3	32	77

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	2	15	13	0	0	30
'03	2	12	8	0	0	22
計	4	27	21	0	0	52

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

朝日祥之「方言接触が生み出した言語変種に見られる言語的特徴——引用形式『ト』のゼロマーク化を例に——」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 15, pp. 41-66, 2003/2

阿部貴人「有声化現象の切換え」『阪大社会言語学研究ノート』(大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室), 5, pp. 64-78, 2003/3

阿部貴人「MANDARA を用いた方言地図作成」『人文科学と GIS』(富山大学人文学部 GIS 研究会), pp. 53-60, 2003/3

阿部貴人「音声・音韻レベルの切り替えについて」『待兼山論叢(日本学篇)』(大阪大学文学会), 36, pp. 45-61, 2002/12

嵐洋子「青森県深浦方言地域における幼児の特殊拍の発音傾向と意識」『龍谷大学国際センター研究年報』(龍谷大学国際センター), 12, pp. 3-12, 2003/3

Arashi, Yoko, "Research on the Acquisition of Kana Writing with Special Morae in Japanese Young Children", *JABEAT Journal*, 6, pp. 91-109, 2002/8

李吉鎔「フォーマルな談話での非デスマス形式の切換え——日本語母語話者と中間言語話者の比較——」『阪大社会言語学研究ノート』(大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室), 5, pp. 79-96, 2003/3

李吉鎔「韓・日両言語の反対意見表明行動の対照研究——場の改まり度による表現形式の使い分けを中心に——」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 15, pp. 67-88, 2003/2

出野晃子「京都方言話者の共通語アクセント使用及び習得に関する研究——用言を中心に——」『日本語教育論集』(姫路獨協大学大学院言語教育研究科日本語教育コース), 12, pp. 25-32, 2003/3

井上都「『1』を含む数量名詞をめぐって」『待兼山論叢(日本学篇)』(大阪大学文学会), 36, pp. 27-44, 2002/12

上田和子「言語テスト開発過程の記述と検証——実践の知の記述と共有をめざして——」『日本語国際センター紀要』(国際交流基金), 13, pp. 83-97, 2003/3

上田和子「日本語能力試験における障害者受験特別措置対応の現状と課題」『日本語国際センター紀要』(国際交流基金), 13, pp. 99-115, 2003/3

上田和子「『声に出したい日本語』の示唆するものと外国語学習」『日本學刊』(香港日本語教育研究会), 5, pp. 170-173,

2002/6

簡月真『環太平洋地域に残存する日本語の諸相(2)——台湾——』2003/3

簡月真「台湾原住民同士の日本語談話データ」簡月真、渋谷勝己編『環太平洋地域に残存する日本語の諸相(2)——台湾——』pp. 87-146, 2003/3

簡月真「台湾に残存する日本語の動詞の文法カテゴリー」簡月真・渋谷勝己編『環太平洋地域に残存する日本語の諸相(2)——台湾——』pp. 41-75, 2003/3

木岡智子『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究(大阪編)』(大阪大学), 2003/3

岸本千秋「洋服を表す外来語の一特徴」『武庫川女子大学言語文化研究所年報』(武庫川女子大学), 13, pp. 19-44, 2002/12

佐竹久仁子「日本語のジェンダー規範形成をめぐる——『女学雑誌』の言説——(1)『ことば』(現代日本語研究会), 23, pp. 59-70, 2002/12

高木千恵「助詞 天草篇」真田信治編『消滅に瀕した方言文法の記録——天草方言・由利方言——』pp. 280-307, 2002/12

高木千恵「助詞 由利篇」真田信治編『消滅に瀕した方言文法の記録——天草方言・由利方言——』pp. 442-81, 2002/12

高木千恵「助詞リスト 由利篇」『方言文法調査項目リスト——由利篇——』pp. 101-26, 2002/6

田川恭識「イントネーションと感情表現——文末詞「の」の機能とイントネーション——」『国文研究』(熊本県立大学日本語日本文学会), 48, pp. 1-18, 2003/1

辻加代子「京都市方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』(大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室), 5, pp. 2-27, 2003/3

辻加代子「京都市方言・女性話者の談話における『ハル敬語』の通時的考察——第三者待遇表現に注目して——」『社会言語科学』(社会言語科学会), 5-1, pp. 28-41, 2002/9

濱中誠「熊本県下益城郡松橋町における『サ詠嘆法』の実態報告」『都大論究』(東京都立大学国語国文学会), 39, pp. 29-45, 2002/6

船木礼子「鹿児島方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』(大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室), 5, pp. 42-63, 2003/3

松丸真大「原因・理由を表す接続助詞の切換え」『阪大社会言語学研究ノート』(大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室), 5, pp. 97-113, 2003/3

松丸真大「社会言語学における GIS アプリケーションの活用と評価——ArcView を用いた言語変化研究の試み——」『人文科学と GIS』(富山大学人文学部), pp. 44-52, 2003/3

松丸真大「天草篇 活用」真田信治編『消滅に瀕した方言文法の記録——天草方言・由利方言——』pp. 212-279, 2002/12

松丸真大「由利篇 活用」真田信治編『消滅に瀕した方言文法の記録——天草方言・由利方言——』pp. 392-441, 2002/12

松丸真大「秋田県由利方言の用言の活用」真田信治編『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究(2)』pp. 181-193, 2002/12

松丸真大「言語地理学における GIS アプリケーションの評価——MapInfo・MANDARA・カシミール 3D の比較を通して——」『地域言語』(地域言語研究会), 14, pp. 17-24, 2002/10

松丸真大「活用」真田信治編『方言文法調査項目リスト——由利篇——』pp. 63-100, 2002/6

村田真美「宮崎方言の『チャ』と『ト』」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 15, pp. 109-129, 2003/2

【2003 年度】

Asahi, Yoshiyuki. "In search of an optimal approach to stylistic variation." , *The Japanese Journal of Language in Society*, 6-1, pp. 163-168, 2003/9

朝日祥之「ニュータウン・コイネの形成過程に見られる中間言語的特徴——動詞の否定辞から見る——」『日本諸方言に見られる中間言語的特徴——変異理論の立場から』(科研報告書), pp. 74-93, 2004/3

朝日祥之「サハリンにおける言語接触小史」真田信治監修、中井精一、内山純蔵、高橋浩二編『日本海沿岸の地域特性とことば——富山県方言の過去・現在・未来——』(桂書房), pp. 121-146, 2004/3

朝日祥之「グローバリゼーションとヨーロッパにおける社会言語学」『日本語研究センター報告』(大阪樟蔭女子大学日本語研究センター), 12, pp. 65-78, 2004/3

- 阿部貴人「仙台方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』(大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室), 6, pp. 2-22, 2004/3
- 阿部貴人「津軽方言と日本海側分布」真田信治監修, 中井精一, 内山純蔵, 高橋浩二編『日本海沿岸の地域特性とことば——富山県方言の過去・現在・未来——』(桂書房), pp. 147-162, 2004/3
- 阿部貴人「静岡県榛原郡中川根町方言の談話資料」真田信治編『静岡・中川根方言の記述』(大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室), pp. 103-104, 2004/2
- 雨宮雄一「新聞社会面記事における『事件』の表現——節による修飾から複合語まで——」『計量国語学』(計量国語学会), 24-1, pp. 19-39, 2003/6
- 嵐洋子「幼児の特殊拍意識の発達に関する一考察——青森県深浦方言地域と神奈川県横浜方言地域の比較を中心に——」『音声研究』7-3, pp. 101-111, 2003/12
- 李吉鎔「中間言語話者の原因・理由を表す表現の切換え——切換えと表現形式の習得をめぐって——」『阪大社会言語学研究ノート』(大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室), 6, pp. 121-138, 2004/3
- 李吉鎔「談話収録調査について」『言語の接触と混交 日系ブラジル人の言語の諸相』5, pp. 62-66, 2003/12
- イブラヒム・インガ「感情表現における普遍性(ユニバーサリティ)と言語文化属性:感情の知覚における差」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 16, pp. 67-82, 2004/2
- 木岡智子「姫路方言における否定の аспекト」『国文学解釈と鑑賞』(至文堂), 68-7, pp. 186-194, 2003/7
- 岸本千秋「ネット日記作者の言語行動と言語意識」『武庫川女子大学言語文化研究所年報』(武庫川女子大学), 14, pp. 5-24, 2003/12
- 岸本千秋「インターネットと日記」『日本語学』(明治書院), 22-6, pp. 38-48, 2003/5
- 北村美穂「静岡県榛原郡中川根町方言の談話資料」真田信治編『静岡・中川根方言の記述』(大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室), pp. 103-104, 2004/2
- 金美貞「関西圏における接客敬語行動——店舗形態によるバラエティ<その2>——」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 16, pp. 37-49, 2004/2
- 金美貞「デパートと市場の接客言語行動に関する事例研究」『社会言語学』(韓国社会言語学会), 11-1, pp. 297-320, 2003/6
- 佐竹久仁子「静岡県中川根方言の推量・意志・勧誘表現」真田信治編『静岡・中川根方言の記述』(大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室), pp. 53-90, 2004/2
- 篠原玲子「広島方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』(大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室), 6, pp. 64-86, 2004/3
- 全永男「中国延辺朝鮮語話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』(大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室), 6, pp. 87-103, 2004/3
- 高田祥司「岩手県遠野方言の аспекト・テンス・ムード体系——東北諸方言における動詞述語の体系変化に注目して——」『日本語文法』(日本語文法学会), 3-2, pp. 100-116, 2003/9
- 高田祥司「テンス・アスペクト——仙石線グロットグラム調査から——」小林隆編『宮城県石巻市方言の研究』(東北大学国語学研究室), pp. 60-68, 2003/7
- 陳連冬「名詞に接続する『など』の意味・機能——明治期と現代との比較を中心に——」『待兼山論叢(日本学篇)』(大阪大学文学会), 37, pp. 11-27, 2003/12
- 辻加代子「静岡県榛原郡中川根町方言の親族語彙——親族語彙・親族名称——」真田信治編『静岡・中川根方言の記述』(大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室), pp. 91-96, 2004/2
- 辻加代子「静岡県榛原郡中川根町方言の『職業』語彙」真田信治編『静岡・中川根方言の記述』(大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室), pp. 97-102, 2004/2
- 中山陽介「『特別な思い』と『特別の思い』——<第二形容詞>と<第三形容詞>の揺れについて——」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 16, pp. 131-158, 2004/2
- 難波真奈美「『～まで』の意味・機能——<格>と<とりたて>の連続性——」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 16, pp. 115-130, 2004/2

- 濱中誠「静岡県榛原郡中川根町方言における伝聞表現形式『チョー』の実態報告」真田信治編『静岡・中川根方言の記述』(大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室), pp. 37-51, 2004/2
- 林雅子「情態副詞をめぐって」『龍谷大学国際センター研究年報』(龍谷大学国際センター), 13, pp. 3-14, 2004/3
- 船木礼子「静岡県中川根方言の推量・意志・勧誘表現」真田信治編『静岡・中川根方言の記述』(大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室), pp. 53-90, 2004/2
- 前田達朗「『単一言語社会』へのベクトル——少数者の言語意識の『可能性』——」『多言語社会をめざす言語運動・言語政策に関する総合的研究——ヨーロッパ・アジア・日本の比較を通じて——』 pp. 45-48, 2004/3
- 松丸真大「青森県弘前市方言の確認要求表現」『阪大社会言語学研究ノート』(大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室), 6, pp. 156-169, 2004/3
- 松丸真大「長崎県対馬方言と日本海」真田信治監修、中井精一・内山純蔵・高橋浩二編『日本海沿岸の地域特性とことば——富山県方言の過去・現在・未来——』(桂書房), pp. 206-233, 2004/3
- 松丸真大「静岡県榛原郡中川根町方言の過去表現」真田信治編『静岡・中川根方言の記述』(大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室), pp. 17-35, 2004/2
- 水谷美保「静岡県榛原郡中川根町方言の親族語彙——親族語彙・親族名称——」真田信治編『静岡・中川根方言の記述』(大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室), pp. 91-96, 2004/2
- 水谷美保「出雲弁 保存事業 待遇表現編」友定賢治編『湖西振興機構受託研究報告書』(私家版), pp. 25-39, 2004/1
- 村田真美「静岡県榛原郡中川根町方言の談話資料」真田信治編『静岡・中川根方言の記述』(大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室), pp. 103-104, 2004/2
- 八木真奈美「日本語を第二言語とする定住者に関する一考察——エスノグラフィーの可能性——」『待兼山論叢(日本学篇)』(大阪大学文学界), 37, pp. 29-46, 2003/12
- 李曉博「日本語教師の専門知についてのナラティブ的理解」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 16, pp. 83-114, 2004/2
- Leonardo A. de P. Melo, 「談話収録調査について」『言語の接触と混交 日系ブラジル人の言語の諸相』5, pp. 62-66, 2003/12
- Leonardo A. de P. Melo, 「ブラジル日系社会における言語の総合的研究へ向けて(1)」『岡山大学文学部紀要』(岡山大学文学部), 39, pp. 67-82, 2003/7

(2) 口頭発表

【2002年度】

- 朝倉淳子「日本語教育実習生の発達に関する研究」日本語教育学会第13回関西地区研究集会, 日本語教育学会, 国際交流基金関西国際センター, 2003/3/8
- Asahi, Yoshiyuki, "Factors controlling the perception of new town with a language variety: Evidence from Seishin New Town.", *Eleventh International conference on Methods in Dialectology, METHODS*, University of Joensuu, 2002/8/8
- 雨宮雄一「新聞社会面記事における「事件」の表現——節による修飾から複合語まで——」計量国語学会第46回大会, 計量国語学会, 大阪大学, 2002/9/7
- 雨宮雄一「新聞社会面記事における「事件」の表現」土曜ことばの会, 土曜ことばの会, 大阪大学, 2002/7/6
- 嵐洋子「幼児の特殊拍の意識と表記習得に関する研究——シラビーム方言とモーラ方言の比較を中心に——」社会言語科学会第11回研究大会, 社会言語科学会, 立教大学, 2003/3/9
- 李吉鎔「心的距離の変化によるスタイル・シフト——依頼行動の韓日対照——」社会言語科学会第11回研究大会, 社会言語科学会, 立教大学, 2003/3/10
- 上田和子「『評価』の取り組み——関西国際センターの事例——」日本語教育学会第13回関西地区研究集会, 日本語教育学会, 国際交流基金関西国際センター, 2003/3/8
- 江崎哲也「スピーチにおけるイントネーション教育」近畿音声言語研究会1月例会, 近畿音声言語研究会, 西宮市大学交

- 流センター, 2003/1/11
- 岡田祥平「日本語話し言葉における子音〔脱落〕の実態——『日本語話し言葉コーパス』を資料にして——」社会言語科学会第 11 回研究大会, 社会言語科学会, 立教大学, 2003/3/9
- 岡田祥平「日本語話し言葉における子音〔脱落〕の実態——『日本語話し言葉コーパス』を資料にして——」近畿音声言語研究会 11 月例会, 近畿音声言語研究会, 西宮市大学交流センター, 2002/11/2
- 筒月真「台湾に残存する日本語の実態——可能表現について——」国語学会 2002 年度秋季大会, 国語学会, 徳島大学, 2002/11/10
- 筒月真「台湾に残存する日本語にみられる方言的要素——存在動詞オルと否定辞ンを中心に——」日本方言研究会第 75 回研究発表会, 日本方言研究会, 徳島大学, 2002/11/8
- 金智英「在日コリアン一世の否定表現の運用」日本方言研究会第 75 回研究発表会, 日本方言研究会, 徳島大学, 2002/11/8
- 金智英「在日コリアン一世の否定表現」変異理論研究会第 99 回発表会, 変異理論研究会, 神戸松蔭女子学院大学, 2002/9/28
- 金美貞「韓国における接客言語行動の一端——デパートと市場の比較——」社会言語科学会第 11 回研究大会, 社会言語科学会, 立教大学, 2003/3/9
- 司空煥「韓国話者による日本語破裂音の音響的特徴」近畿音声言語研究会 6 月例会, 近畿音声言語研究会, 西宮市大学交流センター, 2002/6/1
- 金永男「中国延辺朝鮮族における韓国語使用をめぐる言語意識調査」国際高麗学会第 6 回学術大会, 国際高麗学会日本支部, 大阪経済法科大学/東京麻布台セミナーハウス, 2002/11/23
- 丁恩淑「韓国における国語醇化運動とその現実態——日本語の意味の転移を中心に——」変異理論研究会第 102 回発表会, 変異理論研究会, 大阪府立大学, 2003/2/15
- 丁恩淑「韓国に残存する日本語系外来語の意味変化について——国語醇化対象語を例にして——」多言語化現象研究会, 国立民族学博物館, 2002/10/5
- 辻加代子「京都板洒落本にみる待遇表現形式の消長と運用——女性話者の発話とナサル・ナハル・ヤハルに注目して——」国語学会 2002 年度秋季大会, 国語学会, 徳島大学, 2002/11/10
- 橋本貴子「外国語との接触が日本語の外来語発音に与える影響——ファ行子音を中心に——」近畿音声言語研究会 11 月例会, 近畿音声言語研究会, 西宮市大学交流センター, 2002/11/2
- 林雅子「動詞のテ形と連用中止形の使い分けに関する実態調査——中級以上の作文・小論文指導のために——」日本語教育学会 2002 年度秋季大会, 日本語教育学会, 高知大学, 2002/10/12
- 林雅子「動詞のテ形と連用中止形の出現比率——新聞社会面と小説の「なる」を中心に——」計量国語学会第 46 回大会, 計量国語学会, 大阪大学, 2002/9/7
- 林雅子「動詞のテ形と連用中止形の出現比率——新聞社会面と小説の「名詞に+なる」を中心に——」土曜ことばの会, 土曜ことばの会, 大阪大学, 2002/7/1
- 久野弓枝「日本語ボランティア教室に関する一考察——外国人参加者の声に耳を傾けて——」日本語教育学会第 13 回関西地区研究集会, 日本語教育学会, 国際交流基金関西国際センター, 2003/3/8
- 樋下綾「第 2 言語としての日本語話者の code-switching——コードの確立過程とそのメッセージ性に注目して——」日本第二言語習得学会第 2 回年次大会, 日本第二言語習得学会, 京都産業大学, 2002/5/18
- 松丸真大「社会言語学における GIS アプリケーションの評価——ArcView について——」第 2 回地理情報研究会, 地理情報研究会, 富山大学人文学部, 2003/2/1
- 八木真奈美「日本語学習者の日本社会におけるネットワーク形成とアイデンティティの構築」日本語教育学会第 13 回関西地区研究集会, 日本語教育学会, 国際交流基金関西国際センター, 2003/3/8
- 尹英和「日本語学習者の勧誘表現に現れる音声的特徴——意思形「ウ」を含む表現を中心に——」近畿音声言語研究会 5 月例会, 近畿音声言語研究会, 西宮市大学交流センター, 2002/5/11
- 李曉博「留学生を対象とする日本語教育の教室の底に何がひそんでいるのか——Narrative Inquiry という手法から探つて——」日本語教育学会第 13 回関西地区研究集会, 日本語教育学会, 国際交流基金関西国際センター, 2003/3/8

【2003 年度】

- 朝日祥之「社会特性と言語変化との関連性について——方言接触の観点からの考察——」社会言語科学会第 13 回研究大会, 社会言語科学会, 東京工芸大学, 2004/3/15
- 朝日祥之「南洋プランテーションにおける日本語」日本方言研究会第 77 回研究発表会, 日本方言研究会, 長野県松本勤労者福祉センター, 2003/11/14
- 朝日祥之「引用形式「ト」のゼロマーク化に関わる言語内的・外的条件——神戸方言の場合——」第 28 回関西言語学会, 関西言語学会, 神戸市立外国語大学, 2003/10/18
- Asahi, Yoshiyuki, “On the perception formation of language varieties in a dialect contact situation: the case of Japanese new town”, 2003/7/1
- 阿部貴人「二格のスタイルシフト——青森県津軽方言を例に——」第 28 回関西言語学会, 関西言語学会, 神戸市立外国語大学, 2003/10/18
- 嵐洋子「青森県深浦方言地域における幼児の特殊拍意識の発達過程」日本方言研究会第 77 回研究発表会, 日本方言研究会, 長野県松本勤労者福祉センター, 2003/11/14
- 嵐洋子「青森県深浦方言地域における幼児の特殊拍意識の発達過程」変異理論研究会第 106 回発表会, 変異理論研究会, 大阪樟蔭女子大学, 2003/9/20
- 李吉鎔「スタイルシフトの習得プロセスについての社会言語学的研究——原因・理由と逆接の接続詞・接続助詞を中心に——」第二言語習得研究会 (第 14 回全国大会), 第二言語習得研究会, 横浜国立大学, 2003/12/1
- 井上都「デ格の時間名詞と動詞のタイプ——〈終了限界〉と〈開始限界〉——」国語学会 2002 年度秋季大会, 国語学会, 徳島大学, 2003/11/10
- Inga Ibrakhim, “Universal and Linguistic Features of Expressing Emotional Information: Differentiation in the Perception Level”, *International Conference Speech Prosody*, 2004/3/2
- 岡田祥平「『ク』+カ行音」の「促音化」現象について——『日本語話し言葉コーパス』の分析結果——」社会言語科学会第 13 回研究大会, pp. 19-24, 社会言語科学会, 東京工芸大学, 2004/3/14
- 岡田祥平「撥音から長音への「言い間違い」現象について——『日本語話し言葉コーパス』を資料にして——」日本音声学会 2003 年 (平成 15 年) 度第 17 回全国大会, 日本音声学会, 2003/9/1
- 岡田祥平「話し言葉におけるモーラ/wa/(「ワ」)の子音「脱落」の実態——『日本語話し言葉コーパス』を資料にして——」日本語教育学会 2003 年度春季大会, 日本語教育学会, 2003/5/1
- 簡月真「台湾の日本語の運用の実態」社会言語科学会第 12 回研究大会シンポジウム「環太平洋地域に残存する日本語をめぐる」社会言語科学会, 大阪大学, 2003/10/3
- 岸本千秋「ネット日記作者に対する意識調査報告」第 3 回メディアとことば研究会, メディアとことば研究会, 2003/10/1
- 金愛蘭「外来語「トラブル」の意味・用法——20 世紀後半の新聞記事を資料として——」土曜ことばの会, 土曜ことばの会, 大阪大学, 2004/1/1
- 高木千恵「関西方言における標準語形——ジャナイ(カ)の使用——」第 28 回関西言語学会, 関西言語学会, 神戸市立外国語大学, 2003/10/18
- 高田祥司「岩手県遠野方言の非動的述語・否定の時間表現」日本言語学会第 127 回大会, 日本言語学会, 大阪市立大学, 2003/11/23
- 陳連冬「名詞に接続する「など」の意味・機能——明治期と現代との比較を中心に——」日本言語学会第 126 回大会, 日本言語学会, 2003/6/1
- 樋下綾「日本語学習者のネットワークとコード切り換え」社会言語科学会第 12 回研究大会, pp. 162-167, 社会言語科学会, 大阪大学, 2003/10/4
- 水谷美保「敬語動詞の意味縮小——「イラッシャル」「オイデル」「ゴザル」「ミエル」——」日本方言研究会第 77 回研究発表会, 日本方言研究会, 長野県松本勤労者福祉センター, 2003/11/14
- 水谷美保「敬語動詞の意味縮小——「イラッシャル」「ゴザル」「オイデル」「ミエル」について——」変異理論研究会第 106 回発表会, 変異理論研究会, 大阪樟蔭女子大学, 2003/9/20

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

簡月真 社会言語科学会第3回徳川宗賢賞, 社会言語科学会, 2002年度

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:2名 (計2名)

2003年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:1名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部:0名 大学院:1名 (計1名)

2003年度 学部:0名 大学院:1名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度～2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

朝日祥之 博士後期課程, 国立国語研究所, 所員, 2004/4

簡月真 博士後期課程, 南台科技大学(台湾), 助理教授, 2004/4

御館久里恵 博士後期課程, 鳥取大学, 専任講師, 2003/4

オストハイダ・テーヤ 博士後期課程, 筑波大学, 専任講師, 2003/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002年度～2003年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 10名

2002年度:6名 2003年度:4名

<内訳> 司法書士 1名 教員 3名 アーティスト 2名 ジャーナリスト 3名 技術職 1名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

2002年度 2名

2003年度 2名

9. 外国人研究者の受け入れ状況

2002年度 3名

2003年度 2名

10. 刊行物

『日本語教育実習報告書』(その他・年1回)定期刊行物	2000年度～現在
『阪大社会言語学研究ノート』(論文集・年1回)定期刊行物	1999年度～現在
『現代日本語研究』(機関誌・年1回)定期刊行物	1994年度～現在
『阪大日本語研究』(機関誌・年1回)定期刊行物	1989年度～現在
『静岡・中川根方言の記述』逐次刊行物	2004年2月

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

変異理論研究会(研究会)事務局	1989年～現在
土曜ことばの会(研究会)事務局	1980年～現在

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

鈴木重幸(横浜国立大学名誉教授)講演会「わたしが言語学の勉強をはじめたころ」	2003年12月13日
上村幸雄(琉球大学名誉教授)講演会「現代言語学の課題と奥田靖雄」	2002年10月15日

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

日本語学講座では、言語研究者として広くバランスのとれた視野を持つ人材を育成するとともに、高度職業人として教育、出版等の分野で社会的貢献のできる人材を育成しようとしている。また、大学内部にとどまらず広く一般への啓蒙活動も積極的に行っている。

研究者養成に関しては、教員間での授業内容の重複を避け、日本語学および言語学の領域をできる限りまんべんなくカバーするように調整するとともに、卒論・修論の中間発表会および博士後期課程の学生の中間発表会を年に1回ずつ開催し、全教員が出席して、それぞれの立場からアドバイスをするという試みをしている。さらに、各教員がフィールドワーク、演習形式の授業等で、研究のプロセスの実地訓練も行っている。また『阪大日本語研究』等の定期および逐次刊行物を発行し、学生への投稿を奨励し、査読という形で論文の書き方を指導することで、研究者としての成長を支援している。これらの活動は、博士論文執筆期間に短縮の傾向が見られる、学生の論文が採用される学会誌の幅が広がる傾向が見られるなどの点において、実を結びつつあると考える。

高度職業人養成に関しては、日本語教育を中心に現場の教師を積極的に大学院に受け入れ、従来の応用言語学の枠組みにとらわれない、新しいタイプの教育研究を奨励するとともに、2002年に文化庁が発表した日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議によるカリキュラムのガイドラインにあわせて、日本語学以外の知識も含めた高度な職業的能力の育成を目的とした実践的な授業を行っている。また、教師教育者の養成を目的とした授業も行っている。日本語教師が専任の職につくことは必ずしも容易ではない社会状況であるが、非常勤講師、嘱託、青年海外協力隊等のボランティアを含めると、日本語教育の分野で活躍している卒業生・修了生は数多い。日本語教育関係の授業を履修した学生が中等教育における英語あるいは国語の教師を志し、就職するというケースも見られる。本講座で毎年発行している『日本語教育実習報告書』は日本語教育関係者から高い評価を受けており、現場の教師からの社会人入学に関する問い合わせも増えている。そうした意味で、日本語学講座の高度職業人養成に関する教育実践は社会的な評価を受けていると考える。また、広告、放送などの分野における言語使用をテーマとする研究も奨励し、教育以外の分野でも日本語学の専門的知識をもった高度職業人の育成を目指しており、そうした業種への就職にも実績をあげている。

一般への啓蒙活動としては、言語使用に関する出版物の監修、講演、日本語教育に関わる団体の顧問等の役職への就任、研修会等の講師など、積極的な社会的活動を行っている。

この他、特筆すべき点としては、日本語学講座は伝統的に留学生を積極的に受け入れてきたということが挙げられる。特別聴講生、研究生等も含めると学部から博士後期課程までで2002年度は41名、2003年度は45名の留学生が在籍した。これは講座全体の学生数の3分の1程度にあたる。また、この内、2002年度は17名、2003年度は16名が国費または国費に準ずる交流協会の留学生である。このことから本講座に在籍する留学生は出身国でも非常に優秀な学生たちであるということが言える。卒業・修了した留学生の多くは、日本国内外で研究者あるいは日本語に関係する職業人として活躍している。

13-2 研究活動

各教員の研究活動の状況は該当ページの通りである。それぞれが積極的な研究活動を行っており、外部資金の獲得にも努力している。海外での学会発表や講演の数、海外の大学への客員教授としての招聘などからも、各教員がそれぞれの専

門領域で国内はもとより海外でも第一人者と言ってよい実績をあげ評価されていることが見てとれるであろう。この評価は、日本語学講座の客員研究員となることを希望する海外の研究者の数の多さにも反映されている。2002年度には5名、2003年度には4名の客員研究員を受け入れている。

外部評価によって要求された組織全体としての研究体制作りという点に関しては、全教員が参加する研究プロジェクトは現在のところ実施されていない。しかし、これは教員間の連携がないということとは意味しない。『方言記述プロジェクト』や『スタイルシフト・プロジェクト』のようにプロジェクト毎に関連する分野の教員が協力するということは従来から行われてきており、新たな角度で新たな組み合わせの研究プロジェクトが生まれる可能性は常にある。こうしたゆるやかな結びつきが、各教員の独自性、それぞれが学外にもつネットワークの多様性を支え、研究者集団としての日本語学講座を開かれた豊かなものになっているのであり、それが伝統的に本講座の教員の特徴とされる先験的でオリジナリティに富んだ研究を可能にしていると考えられる。

研究成果の公表に関しては、学外の媒体とともに、日本語学講座の刊行物によっても行っている。2002年度、2003年度に本講座で刊行した刊行物には、『阪大日本語研究』15号(2003年2月)、16号(2004年2月)、『阪大社会言語学研究ノート』5号(2003年3月)、6号(2004年3月)、『静岡・中川根方言の記述』がある。特に、調査票など研究のプロセスや生のデータの公開に関しては、講座として対応していく必要や意義のあるものも多く、サンプルが当講座の報告書類に掲載されているものもある。今後、さらに公開できる資料を蓄積していくべく、フィールドワーク資料の電子化や、スタイルシフト談話資料データベース化など作業中のものもある。

Ⅲ. 教員の研究活動(2002年度～2003年度の過去2年間)

1. 真田 信治 教授

1946年生。東北大学大学院文学研究科1970年修了。文学博士(大阪大学)。国立国語研究所研究員、大阪大学助教授などを経て、1999年4月より現職。専攻：日本語学／社会言語学。

1-1. 論文

- 真田信治「富山県方言の過去・現在・未来」中井精一、内山純蔵、高橋浩二編『日本海沿岸の地域特性とことば』桂書房、pp. 1-9, 2004/3
- 真田信治・金美貞「関西圏における接客敬語行動——店舗形態によるバラエティ<その2>——」『阪大日本語研究』16, pp. 37-49, 2004/2
- 真田信治「日本語の危機と『方言』」『日本研究』(韓国・中央大学校), 19, pp. 125-132, 2004/2
- 真田信治「Diachronic Change within an Idiolect」『待兼山論叢』37, pp. 1-10, 2003/12
- 真田信治「方言と共通語の使い分け」荻野綱男編『朝倉日本語講座9言語行動』朝倉書店, pp. 115-131, 2003/7
- 真田信治「日本における危機に瀕した方言の研究課題」『国立民族学博物館調査報告』39, pp. 243-256, 2003/6
- 真田信治「方言研究における不易と流行」『日本語学』22-4, pp. 34-40, 2003/4
- 真田信治「言語データの収集をめぐる 現地調査法概論」山田達也先生喜寿記念論文集編集委員会編『地域語研究論集』港の人, pp. 35-52, 2002/7
- 真田信治・武田佳子「社会言語学——『グロットグラム作成マクロ』の紹介——」日本方言研究会編『21世紀の方言学』国書刊行会, pp. 125-135, 2002/6
- 真田信治「社会方言地理学の実践——グロットグラム小史——」佐藤亮一・小林隆・大西拓一郎編『方言地理学の課題』明治書院, pp. 345-356, 2002/5
- 真田信治「日本の方言研究——社会言語学的研究の軌跡——」『言語』370, pp. 161-169, 2002/5

1-2. 著書

- 真田信治監修『日本海沿岸の地域特性とことば』桂書房, 2004/3
- 真田信治編『静岡・中川根方言の記述』大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室, 2004/2

- 真田信治『日本語のバリエーション——現代語・歴史・地理——』オンデマンド版(アルク), 2003/3
真田信治編『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究(2)』科学研究費成果報告書(大阪学院大学), 2002/12
真田信治編『消滅に瀕した方言文法の記録——天草方言・由利方言——』科学研究費成果報告書(大阪学院大学), 2002/12
真田信治『方言の日本地図 ことばの旅』講談社, 2002/12
真田信治編『方言文法調査項目リスト——由利篇——』科学研究費成果報告書(大阪学院大学), 2002/6

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 真田信治「総会講演——日本語の危機と方言——」『兵庫国漢』50, pp. 50-57, 2004/3
真田信治編『20世紀の日本社会言語学研究文献リスト(CD-ROM)』大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェースの人文科学」成果報告物, 2003/10
真田信治「解説——『臨床ことば学』への期待——」道浦俊彦『「ことばの雑学」放送局』PHP研究所, pp. 421-427, 2003/5
真田信治, 土岐哲, 簡月真「台湾原住民同士の日本語談話データ」簡月真, 渋谷勝己編『環太平洋地域に残存する日本語の諸相(2)——台湾——』科学研究費成果報告書(大阪学院大学), pp. 87-146, 2003/3
真田信治, 渋谷勝己, 陣内正敬, 杉戸清樹著/王素梅, 彭国躍訳(中国語)『社会言語学概論』上海訳文出版社, 2002/11
真田信治「現れる・起きる(出現・生起)」「ない・なくなる(不在・消滅)」柴田武, 山田進編『類語大辞典』講談社, pp. 1454-1474, 2002/11
真田信治「富山県」・「和歌山県」佐藤亮一編『都道府県別 全国方言小辞典』三省堂, pp. 78-81・pp. 126-129, 2002/5

1-4. 口頭発表

- 真田信治, 簡月真, 土岐哲, 渋谷勝己「環太平洋地域に残存する日本語をめぐって」社会言語科学会第12回研究大会シンポジウム, 2003/10(『社会言語科学』6-2, pp. 74-79, 2004/3)
真田信治「社会言語学から見た『方言』と『言語』」日本語教育学会2003年度研究集会講演, 2003/7
山田恒夫, 真田信治, 都染直也, 森山卓郎, 前田広幸, 鳥谷善史「日本語音声の教材CD-ROM, 『アクセントの多様性と変遷』および『方言アクセント音声データベース』について」国語学会2002年度秋季大会デモンストレーション, 2002/11

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 真田信治 第8回とやま賞受賞, 富山県置県百年記念財団, 1991/5
真田信治 第18回金田一京助記念賞受賞, 金田一記念会, 1990/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2003年度~2005年度、基盤研究(C)(2)、代表者：真田信治

課題番号：15520288

研究題目：薩南諸島におけるネオ方言(中間方言)の実態調査

研究経費：2003年度 1,400千円

研究の目的：

かつての方言と標準語をめぐる葛藤の歴史の中から、基盤である方言と習得目標であった標準語との大きな隔たりの中間に、本来の方言にも、また標準語にも見られない第三の言語変種(ネオ方言)が各地で生成されつつある。

たとえば、奄美大島の名瀬あたりでは、標準語を話そうとしても完全な標準語が出せなくて、方言と標準語とが混ざった状態になったものを「トン普通語」と呼ぶことがある。この「トン」は「さつま芋」を表す奄美大島北部の方言である。ちなみに鹿児島ではこのようなスピーチスタイルを「カライモ普通語」と称している。この「カライモ」もまた「唐芋」でやはり「さつま芋」を表す鹿児島方言である。

本研究では、薩南諸島を主たるフィールドとして、これら中間方言の実態を明らかにすることをめざす。

①奄美大島、およびその周辺地域をフィールドに、各世代における比較的フォーマルな場面での談話を集録し、その談

話データを文字化する。そして、データをさまざまな観点から分析し、特に若い世代におけるスピーチスタイルを記述する。

- ②「トン普通語」「カライモ普通語」などと名づけられる対象は、本来それぞれの方言のフィルターによって変形した標準語を指すものであったが、当該地域の若者たちは今や伝統的な純粋方言は、いわば文化財の地位のものに祭り上げ、これら変形標準語を、自分たちの生活方言(地域語)として活用しているという状況がある。本研究ではそのプロセスを具体的に解明することになるはずである。
- ③本研究の代表者は、これら接触によって生まれた新しい中間方言を「ネオ方言」と総称して、日本各地での動態を追究している。このような状況の生まれる背景には、標準としての東京語に牽引されつつも、そこからある程度の距離を置く、置きたい、そしてそのことを確認したい、といった現代の地域人の心情があるように思われる。なお、このような流れは世界の各地で今進行しつつある少数民族言語の復権の動きとも連動するものである。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 21世紀COEプログラム分担

1-8. 学会役員等の引き受け状況

日本語学会・理事	2003年5月～2009年5月
日本方言研究会・世話人	2002年5月～2008年5月
財団法人新村出記念財団・評議員	2002年7月～2005年7月
NPO 日本話しことば協会・理事	2003年4月～2005年3月
山口大学大学院『東アジア研究』・編集顧問	2002年4月～現在

2. 土岐 哲 教授

1946年生。早稲田大学日本文学科卒業。文学士。アメリカ・カナダ11大学連合日本研究センター専任講師、プリンストン大学東アジア学系客員講師、東海大学専任講師、同助教授、名古屋大学助教授、大阪大学助教授を経て、1996年から現職。専攻：日本語教育学、音声学。

2-1. 論文

土岐哲「台湾原住民ヤミ族に見られる日本語音声——アミ語話者との比較も交えて——」『環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 環太平洋に残存する日本語の諸相(2)』pp. 23-39, 2003/3

2-2. 著書

小山悟ほか編, 土岐哲「ミクロネシア・ポナペ島に残存する日本語の音声」『言語と教育』くろしお出版, pp. 149-162, 2003/3

縫部義憲編による共著, 土岐哲「音声教育の基本」『多文化共生時代の日本語教育』歴々社, pp. 56-77, 2002/11

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

土岐哲『戦前・戦中の日本語音声教育用レコード復刻版』監修、及び「同レコード添付資料執筆・編集」日本語教育学会, 2003/4

小池生夫ほか編による共著, 土岐哲:「日本語の音声」「音節と拍」「アクセント」「イントネーション」「発音の指導」「発音の教材」『応用言語学事典』研究社, pp. 795-798, pp. 822-823, 2003/4

真田信治, 土岐哲, 簡月真「台湾原住民同士の日本語談話データ」『環太平洋地域に残存する日本語の諸相(2)——台湾——』pp. 87-146, 2003/3

2-4. 口頭発表

土岐哲「旧植民地に残存する日本語音声から学べるもの」ドイツ語圏大学日本語教師会主催「日本語教育研究会」基調講演, 招待講師, 2004/3

土岐哲「聴解訓練の基本について」ケルン日本文化会館主催「日本語教育研修会」招待講師, 2004/3

土岐哲「日本語音声教育の新視点」タイ国日本留学生会主催「日本語教育研修会」招待講演講師, 2003/10

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日本音声学会・評議員	1998年4月～2010年3月
国際交流基金関西国際センター・事業協力委員	2000年4月～2006年3月
日本国際教育支援協会 国際交流基金・「日本語能力試験」試験小委員会 主任アドバイザー	2003年10月～2005年9月
日本国際教育支援協会・「日本語教育能力検定試験」実施委員会委員	1998年4月～現在
言語文化教育学会・理事	2002年9月～現在
日本語教育学会・日本語教育学会賞選考委員	2002年4月～2004年3月

3. 工藤 真由美 教授

1949年生。東京大学大学院人文科学研究科博士後期課程単位修得退学。博士(文学)(大阪大学、1999年)。横浜国立大学教育学部講師、同助教授を経て、1998年4月より現職。専攻：現代日本語文法論。

3-1. 論文

工藤真由美「言語学・日本語学・日本語教育」宋協毅編『日本語文化研究』大連理工大学, pp. 2-14, 2004/3

工藤真由美「ムードとテンス・アスペクトの相関性をめぐって」『阪大日本語研究』16, pp. 1-18, 2004/2

工藤真由美, 清水由美『アスペクトと敬語』『阪大日本語研究』15, pp. 1-12, 2003/3

工藤真由美「諸方言におけるアスペクト・テンス体系の動態」『国語論究』X集, 明治書院, pp. 120-144, 2002/12

工藤真由美「文法化とアスペクト・テンス」『シリーズ言語科学』5, 東京大学出版会, pp. 71-94, 2002/12

工藤真由美「現象と本質——方言の文法と標準語の文法——」『日本語文法』2-2, くろしお出版, pp. 46-61, 2002/9

工藤真由美「文の成分」『現代日本語講座(文法)』5, 明治書院, pp. 101-119, 2002/7

3-2. 著書

工藤真由美他『ブラジル日系社会言語調査報告書』44-2, 大阪大学大学院文学研究科紀要, 2004/3

工藤真由美他『言語の接触と混交 日系ブラジル人の言語の諸相』大阪大学 COE, 2004/2

工藤真由美他「方言における動詞の文法的カテゴリーの類型的研究——奄美・沖縄編——」科学研究費報告書, 2003/3

工藤真由美他「方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究——西日本編——」科学研究費報告書, 2003/3

工藤真由美他「方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究——東日本編——」科学研究費報告書, 2003/3

工藤真由美他「方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究——アスペクトと敬語編——」科学研究費報告書, 2003/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

工藤真由美「アスペクト」認知科学辞典, 共立出版, p. 8, 2003/5

工藤真由美「テンス」認知科学辞典, 共立出版, p. 159, 2003/5

工藤真由美他「児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査」科学研究費報告書(千葉大学), pp. 1-6, 2003/3

工藤真由美「文法(理論・現代)『国語学』 pp. 22-29, 2002/10

3-4. 口頭発表

工藤真由美「現代日本語のアスペクトとテンス——基本的な意味・機能と派生的な意味・機能——」広州外語外資大学講演, 2003/12

Kudo, Mayumi, "Evidentiality of 'Uchina-yamatouguchi'" The 10th International Conference of EAJS, 2003/8

工藤真由美「奥田靖雄の言語学と琉球語研究」沖縄言語文化研究センター総会講演, 2003/7

工藤真由美「奥田靖雄の言語学——最も具体的なものへのまなざし——」シンポジウム『日本語と日本の子どもをすくいだせ』2003/3

工藤真由美「日本語の多様性へのまなざし——空間表現・時間表現・待遇性——」国語学会秋季大会講演, 2002/11

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(B)(1)、代表者：工藤真由美

課題番号：15320056

研究題目：方言の述語構造の類型論的研究

研究経費：2003年度 6,200千円

研究の目的：

本研究は、(1)欧米における動詞述語、名詞述語、形容詞述語に関する類型論的研究の優れた成果を視野に入れ、(2)東北から沖縄に至るまでの全国諸方言の述語構造を「統一した枠組み」に基づいて記述し、(3)共通する(普遍的)側面と相違する側面とから、共時的バリエーションと通時の変化を考慮したタイプ化を行い、(4)文の中核をなす述語構造に基づく分布図を描き出そうとするものである。(5)伝統的方言体系の変化と標準語の浸透による言語接触の社会言語学的観点からの本格的アプローチも実施し、言語接触論への新たな展望も切り開く。

3-6-2. 2001年度～2002年度、基盤研究(B)(1)、代表者：工藤真由美

課題番号：13410124

研究題目：方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究

研究経費：2002年度 4,800千円

研究の目的：

本研究は、欧米におけるアスペクト・テンス・ムードを中心とする類型論的研究の優れた成果を視野に入れ、東北から沖縄にいたる全国諸方言の動詞の文法的カテゴリーを「統一した枠組み」に基づいて記述し、共通する側面と相違する側面とから、共時的バリエーションと通時の変化を考慮したタイプ化を行い、文法体系に基づく分布図を描き出そうとするものである。日本語の方言研究には一般言語学的視点が従来欠けていた。グローバルな観点から方言研究を行おうとする初めての試みである。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 21世紀COEプログラム分担

3-8. 学会役員等の引き受け状況

日本語文法学会・評議員	2000年～現在
国語学会・評議員	1996年～現在

4. 青木直子教授

1983年、上智大学外国語学研究科言語学専攻博士課程前期修了。PhD(Trinity College, Dublin, 2003年)。産能短期大学助教授、静岡大学教育学部助教授、大阪大学助教授を経て、2004年4月より現職。専攻：第二言語教育学。

4-1. 論文

Aoki, Naoko, "Life after presentation: how we might best discuss and evaluate narrative-based research with/by teachers", 『阪大日本語研究』16, pp. 19-36, 2004/2

Aoki, Naoko, "Asserting our culture: teacher autonomy from a feminist perspective", D. Palfreyman & R.C. Smith (Eds.), *Learner Autonomy across Cultures: Language Education Perspectives*, Palgrave Macmillan, pp. 240-253, 2003/11

Aoki, Naoko, "Expanding space for reflection and collaboration", A. Barfield & M. Nix (Eds.), *Autonomy You Ask!*, JALT, pp. 189-196, 2003/11

Aoki, Naoko, "Teachers' conversation with partial autobiographies", *Hong Kong Journal of Applied Linguistics*, 7(2), pp. 152-168, 2002/12

Aoki, Naoko, "Aspects of teacher autonomy: capacity, freedom and responsibility", P. Benson & S. Toogood (Eds.), *Learner Autonomy 7: Challenges to Research and Practice*, Authentik, pp. 111-124, 2002/11

Aoki, Naoko, "An alternative way for teachers to develop", *The Teacher Trainer*, 16-2, pp. 10-11, 2002/6

4-2. 著書

青木直子他『接触会話における在日外国人の日本語習得に影響を及ぼす心理的・社会的要因の研究』2001年度～2003年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, 2003/3

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

Aoki, Naoko, "Teacher autonomy, commitment to the profession, and teacher's personal autonomy", The Canarian Conference on Developing Autonomy in the FL Classroom, 2003/2

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2002年度(継続)～2003年度(継続)、基盤研究(C)(2)、代表者：青木直子

課題番号：13680357

研究題目：接触会話における在日外国人の日本語習得に影響を及ぼす心理的・社会的要因の研究

研究経費：2002年度 900千円

2003年度 500千円

研究の目的：

本研究の目的は、ボランティア日本語教室における在日外国人と日本語ボランティアのインターアクションをマイクロ・レベルで分析し、両者の関係、それぞれの役割意識、学習活動のタイプ、トピック、談話の構造、談話の参加者数が日本語の習得にどのような影響を与えうるのかを検討することである。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

日本質的心理学会・設立発起人	2004年3月
全国語学教育学会・国際大会学習者ディベロプメント・フォーラム司会	2003年11月
同上・国際大会学習者ディベロプメント研究部会招待講演者リエゾン	2001年11月～2002年11月
日本語教育学会・日本語研究コース講師	2003年5月
国立国語研究所・日本語教育上級研修講師	2003年3月
国際応用言語学会・Scientific Commission on Learner Autonomy 選挙管理委員	1999年8月～2002年12月

5. 石井 正彦 助教授

1958年生。東北大学大学院文学研究科博士後期課程中退 1983年。文学修士（東北大学、1983年）。国立国語研究所研究員、同室長を経て、1999年10月より現職。専攻：日本語学／計量言語学。

5-1. 論文

石井正彦「マス・コミュニケーションにおける送り手の語彙と受け手の語彙——基本語彙選定との関係において——」『国語学研究』42, pp. 1-14, 2003/3

石井正彦「『既製』の複合動詞と『即席』の複合動詞——小説にみる現代作家の語形成——」『国語論究(現代日本語の文法研究)』10, pp. 256-287, 2002/12

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

石井正彦「コーパスによる語彙の研究」『日本語学』22-5, pp. 188-199, 2003/4

石井正彦「(巻頭言)専門(用)語研究の新たな展開のために」『情報知識学会誌』12-1, pp. 1-2, 2002/5

石井正彦「日本語の形態論」『現代日本語講座(文法)』5, pp. 22-37, 2002/4

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2003年度～2005年度、基盤研究(C)(2)、代表者：石井正彦

課題番号：15520289

研究題目：探索的データ解析による日本語研究法の開発

研究経費：2003年度 1,500千円

研究の目的：

本研究は、(a)「探索的データ解析」という統計手法が日本語研究において有効な分析ツールとなることを、これまでの計量的日本語研究の成果・知見を検証・追試することによって確認し、その上で、(b)探索的データ解析が用意する一連の手法のうちのどれが、日本語についてのどのような調査・研究に利用可能であるのかを、独自に用意したコーパスを試料として明らかにすることによって、(c)日本語研究における探索的データ解析の利用法を、具体的な事例に基づいた手引書としてまとめることを目的とする。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

情報知識学会・理事

2003年4月～現在

6. 渋谷 勝己 助教授

1959年生。東京外国語大学外国語学研究科日本語学専攻修了、大阪大学大学院文学研究科日本学専攻中退。学術博士(大阪大学、1990)。梅花女子大学講師、京都外国語大学助教授を経て、1996年10月より現職。専攻：日本語学。

6-1. 論文

渋谷勝己「山形市方言の文末詞バ——ヨと対比して——」『阪大社会言語学研究ノート』6, pp. 170-180, 2004/3

渋谷勝己「言語行動の研究史」荻野綱男編『朝倉日本語講座 13 言語行動』朝倉書店, pp. 241-261, 2003/7

渋谷勝己「消滅の危機に瀕した第二言語——パラオに残存する日本語を中心に——」『国立民族学博物館調査報告 消滅の危機に瀕した言語の研究の現状と課題』39, pp. 31-50, 2003/6

渋谷勝己「山形市方言における命令形後接の文末詞ナ・ネ・ヨ」『阪大社会言語学研究ノート』5, pp. 114-127, 2003/3

渋谷勝己「方言学の功罪」日本方言研究会編『21世紀の方言学』国書刊行会, pp. 45-55, 2002/6

6-2. 著書

真田信治, 渋谷勝己, 陣内正敬, 杉戸清樹『社会言語学概論』上海訳文出版社, 2002/11

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

渋谷勝己「パラオの日本語」須藤健一, 倉田洋二監修『パラオ共和国——過去・現在・そして未来へ——』おりじん書房, pp. 541-550, 2003/4

渋谷勝己「旧南洋群島に残存する日本語の可能表現：談話データによる文法研究について」J. V. ネウストプニー, 宮崎里司編『言語研究の方法』くろしお出版, pp. 151-156, 2002/4

渋谷勝己「鶴岡方言のテンスとアスペクト：質問調査と方言」J. V. ネウストプニー, 宮崎里司編『言語研究の方法』くろしお出版, pp. 232-237, 2002/4

6-4. 口頭発表

なし

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2000年度～2002年度、特定領域研究(A)(2)、代表者：渋谷勝己

課題番号：12039225

研究題目：環太平洋地域に残存する日本語の調査研究

研究経費：2002年度 3,300千円

研究の目的：

本研究では、パラオ共和国・ミクロネシア連邦・マーシャル共和国・台湾に残存する日本語の会話データをコーパス化する。また、当該日本語の、音声・文法・語彙・言語行動面での体系・運用の実際を詳細に記述する。具体的には次の通り。(1)2001年度までに収集したパラオ・ミクロネシア・マーシャル・台湾の高年層の日本語会話を文字化し、データベースを構築する。また引き続き、可能な限りの会話データを収集する。(2)(1)のデータに基づいて、音声、文法事象、語彙、言語行動などの面での言語的、社会言語学的特徴を記述し、報告する。(3)インフォーマント間に見られる日本語の普遍的・個別的な特徴を明らかにする。(4)それぞれのインフォーマントの日本語習得・使用歴等を把握し、(3)の結果と照らし合わせつつ、第二言語としての日本語能力の衰退にかかわる社会言語学的な要因を特定化する。

2002年度の主たる目的は(2)である

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 学会役員等の引き受け状況

国語学会／日本語学会・常任査読委員	2003年6月～現在
日本語学会・大会運営委員	2003年4月～現在
同上・編集委員	2000年4月～2003年3月
日本語教育学会・査読委員	2003年1月～現在
日本語政策学会・理事	2002年11月～現在
日本語文法学会・学会誌編集委員	2000年12月～2004年3月
社会言語科学会・学会誌編集委員	1997年7月～2003年7月

7. 松丸 真大 助手

1973年生、国際基督教大学教養学部 1997年卒業、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程 2001年修了、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程 2004年中退、修士(文学)、2004年より大阪大学大学院文学研究科助手、専門：社会言語学／方言学。

7-1. 論文

松丸真大「長崎県対馬方言と日本海」真田信治監修、中井精一、内山純蔵、高橋浩二編『日本海沿岸の地域特性とことば——富山県方言の過去・現在・未来——』桂書房, pp. 206-233, 2004/3

松丸真大「青森県弘前市方言の確認要求表現」『阪大社会言語学ノート』6, pp. 156-169, 2004/3

松丸真大「静岡県榛原郡中川根町方言の過去表現」真田信治編『静岡・中川根方言の記述』大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室, pp. 17-35, 2004/2

松丸真大「社会言語学における GIS アプリケーションの活用と評価——ArcView を用いた言語変化研究の試み——」富山大学人文学部 GIS 研究会編『人文科学と GIS』富山大学人文学部, pp. 44-52, 2003/4

松丸真大「原因・理由を表す接続助詞の切換え」『阪大社会言語学ノート』5, pp. 97-113, 2003/3

松丸真大「秋田県由利方言の用言の活用」真田信治編『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究(2)』 pp. 181-193, 2002/12
松丸真大「天草篇 活用」真田信治編『消滅に瀕した方言文法の記録——天草方言・由利方言——』 pp. 212-279, 2002/12
松丸真大「由利篇 活用」真田信治編『消滅に瀕した方言文法の記録——天草方言・由利方言——』 pp. 392-441, 2002/12
松丸真大「活用」真田信治編『方言文法調査項目リスト——由利篇——』 pp. 63-100, 2002/6

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

なし

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2-21 美学・文芸学

はじめに、教育・研究活動の概要とその特色

本専門分野ではおもに四つの方向で研究が行われている。第一に、地域や時代によって異なり、時代とともに変貌を続ける美的現象を比較分析して考察すること。第二に、芸術作品およびデザイン作品の本質的な構造を論理的かつ実証的に究明すること。第三に、文芸(芸術としての文学)について、各国文学研究の枠を超えて、普遍的かつ体系的に研究すること。第四に、ギリシア、ラテン文学に代表される西洋古典文学と古典文化について研究することである。本専門分野は美学と文芸学の二つの研究室からなり、美学研究室はドイツ、フランス、英米の美学、文芸学研究室は西洋古代の美学思想と文芸理論(レトリック)を専門とする専任教員で構成されている。したがって、文化系統別の美学教育・研究では世界的にも稀な整った体制を有し、これが第一の特色となっている。文化系統を超えたおもな教育・研究テーマを数え上げても、造形芸術、映画とパフォーミング・アーツ、建築を含む各種デザイン、各種文学、自然論、芸術論、風景論、工芸論と幅広く、これが第二の特色である。しかしながら、それらは個別的教育・研究にとどまるのではない。根本的で普遍的な美学・文芸学研究の立場から、第一、第二の特色を活かした共同研究等を通じ、美、芸術、文学の本質や構造を明らかにすることをめざしており、これが第三の特色となっている。このような特色と理念を有する教育・研究組織は全国の大学の中でもユニークなものである。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 3 助教授 1 講師 0 助手 1

教授：大橋 良介、上倉 庸敬、藤田 治彦

助教授：加藤 浩

助手：渡辺 浩司

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
38	11	15	0	0	0	2	0	1

※うち留学生 3 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業生	大学院		博士号学位授与数	出身の研究者
		博士前期(M)修了者	博士後期(D)修了者		
'02	8	4	2	4	2
'03	12	7	3	3	1
小計	20	11	5	7	3

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	2	2	4
'03	3	0	3
計	5	2	7

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

- 生島美紀子 「音楽のリパーカッションを求めて——アルチュール・オネゲル《交響曲第三番 典礼風》創作——」 2004/3
主査：上倉庸敬 副査：根岸一美、大橋良介、藤田治彦
- キョウ・シブン 「中国古代における山岳狩猟図の系譜とその風景の表現——青銅器から画像碑へ——」 2004/3
主査：藤田治彦 副査：大橋良介、上倉庸敬、湯浅邦弘
- 桑島秀樹 「初期バークにおける美学思想の全貌——18世紀ロンドンに渡ったアイリッシュの詩魂——」 2004/3
主査：大橋良介 副査：上倉庸敬、藤田治彦
- 高橋晴子 「身装画像にみる近代日本の文化変容——データベース化のための基礎研究——」 2003/3
主査：上倉庸敬 副査：藤田治彦、囿府寺司
- テイ・スーオン 「日本における文化財制度の研究」 2003/3
主査：藤田治彦 副査：上倉庸敬、森谷宇一

【論文博士】

- ハン・ハン 「身体の芸術論の展開と変容——比較芸術学の視点から——」 2002/7
主査：上倉庸敬 副査：森谷宇一、藤田治彦
- リ・ピョンナム 「柳宗悦の民芸思想の研究」 2002/4
主査：神林恒道 副査：上倉庸敬、藤田治彦

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	5	7	0	0	0	12
'03	4	7	1	0	0	12
計	9	14	1	0	0	24

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	4	13	4	0	0	21
'03	0	10	3	0	1	14
計	4	23	7	0	1	35

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

石黒義昭「ハイデガーの『語り』概念」『文芸学研究』(文芸学研究会), 6, pp. 87-102, 2002/7

石原みどり「文学と絵画——子規の写生——」『文芸学研究』(文芸学研究会), pp. 103-122, 2002/7

要真理子「ロジャー・フライにおける感性的リアリティーの追究」『美学』(美学会), 209, pp. 29-42, 2002/6

桑島秀樹「Double Bias in Adopting Burk's Aesthetics: The Meiji Constitution and its Influence」『文芸学研究』(文芸学研究会), 6, pp. 123-134, 2002/7

古後奈緒子「反抗する身体——アクション芸術の身体像とコミュニケーションの検証——」『シアターアーツ』17, pp. 59-64, 2002/8

古後奈緒子「1919年以降のドイツ文化圏におけるバレエ制作の変化と舞踏の近代化——装飾バレエとそのアンチテーゼとしての『ヨセフ伝説』——」『美学研究』(大阪大学大学院文学研究科美学研究室), 2, pp. 1-18, 2002/7

高橋奈保子「1919年における芥川制作観——龍村平蔵の織物をめぐって——」『文芸学研究』(文芸学研究会), 7, pp. 88-103, 2003/3

高橋晴子「身装文化画像データベースの作成——近代日本を対象として——」『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』(情報処理学会), 2003-21, pp. 135-142, 2002/12

鄭夙恩「日本の文化財保護制度の歴史」『民族藝術』(民族藝術学会), 19, pp. 68-72, 2003/3

伊達立晶「『山月記』と『ジーキル博士とハイド氏』——その影響関係をめぐる比較文学的考察——」『文芸学研究』(文芸学研究会), 7, pp. 57-69, 2003/3

萩原康一郎「焦点化に関する考察」『待兼山論(美学篇)』(大阪大学文学会), 36, pp. 1-19, 2002/12

松友知香子「ブルーノ・タウトの建築と色彩」『デザイン理論』(意匠学会), 42, pp. 63-76, 2003年春

【2003年度】

生島美紀子「アルチュール・オネゲルの交響曲創作における旋律志向——不協和音と対位法の概念の捉え方の問題として——」『美学研究』(大阪大学文学研究科美学研究室), 3, pp. 51-70, 2004/1

- 石黒義明「ハイデガーの思惟における『藝術作品の根源』に位置について」『文芸学研究』(文芸学研究会), 8, pp. 26-36, 2004/3
- 石黒義昭「物への問いと藝術作品」『現象学年報』(日本現象学会), 19, pp. 187-190, 2003/11
- 井上由里子「L'architecture scenique dans "La Resistible ascension de Arturo Ui de Brecht"」『美学研究』(大阪大学大学院文学研究科美学研究室), 3, pp. 1-9, 2004/1
- キョウ・シブン「戦国時代の青銅器に表された山岳狩猟図——自然風景と祭祀活動の図像表現に注目して——」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 37, pp. 1-24, 2003/12
- 古後奈緒子「バレエパントマイム『父の愛——あるピエロの——』が伝えるもの——改革前夜の歌劇場における舞台舞踏作品の一例として」『映像人文学 2003 年度報告書 ヨーゼフ・ラスカ《父の愛》』 pp. 36-43, 2004/3
- 島本英明「森有正における『経験』の構造」『若手美学研究者フォーラム論文選』(美学会), pp. 38-47, 2004/3
- 城崎有沙「カルロ・スカルパの建築をつくるもの——ブリオン家墓地を巡って——」『デザイン理論』(意匠学会), 44, pp. 140-141, 2004年春
- 高橋晴子「身装電子年表の作成に関する基本的課題——近代日本身装画像データベースを前提として——」『大阪樟蔭女子大学(学芸学部)論集』 41, 大阪樟蔭女子大学学芸学部, pp. 161-174, 2004/3
- 高橋晴子「身装文化画像データベースシステムの構築」『アート・ドキュメンテーション研究』 11, アート・ドキュメンテーション研究会, pp. 15-23, 2004/3
- 平井直子「ジョ・ポンティと『モダニズム』——1920-30年代を中心に——」『デザイン理論』(意匠学会), 44, pp. 63-77, 2004年春
- 平光睦子「三宅一生『一枚の布』再考」『美学研究』(大阪大学大学院文学研究科美学研究室), 3, pp. 71-83, 2004/1

(2) 口頭発表

【2002年度】

- 石黒義昭「物への問いと藝術作品」日本現象学会第 24 回全国大会, 日本現象学会, 同志社大学/京都, 2002/11/9
- 井上由里子「ムルナウvsロメール——ロメールの映画空間——」日本映像学会関西支部第37回研究会, 日本映像学会, 大阪大学/大阪, 2002/5/11
- 岩崎陽子「理論と実践の狭間で——メルロ＝ポンティの芸術論の可能性——」メルロ＝ポンティサークル第 9 回大会, 大阪大学/大阪, 2002/9/21
- 要真理子 Roger Fry's "Design": through Omega Workshops' productions" 3rd International Conference on Design History and Design Studies (第 3 回国際デザイン史・デザイン学会議), イスタンブール工科大学/トルコ, 2002/7/10
- 要真理子「ロジャー・フライの『デザイン』——オメガ工房における試み——」意匠学会第 171 回例会, 意匠学会, 成安造形大学/京都, 2002/5/18
- 北田聖子「柳宗理と『アノニマス・デザイン』」第 174 回意匠学会研究例会, 大阪市立住まい情報センター・ホール/大阪, 2003/2/22
- キョウ・シブン「戦国時代の青銅器に表された山岳狩猟図——自然風景と祭祀活動の図像表現に注目して——」美学会第 53 回全国大会, 美学会, 広島大学/広島, 2002/10/13
- 桑島秀樹「安西信一『イギリス風景式庭園の美学——〈開かれた庭〉のパラドックス——』(東京大学出版会 2000 年)へのコメント」(ワークショップ・パネル報告), 美学会第 53 回全国大会, 美学会, 広島大学/広島, 2002/10/12
- 桑島秀樹 "Edmund Burk's Aesthetics as Anti-Ocularcentrism: A Connection between Sublime and Grace in Terms of the Tactile Sensation", Conference on Aesthetics and Philosophy of Art, supported by British Society of Aesthetics and Mind Association, The University of Warwick/イギリス, 2002/5/11
- 古後奈緒子「舞踊における身体イメージと文化的記憶——ホーフマンスタールの『アテネの廃墟』を例に——」日本演劇学会・西洋比較演劇研究会「演劇と記憶」プロジェクト・シリーズ(2), 日本演劇学会・西洋比較演劇研究会, 成城大学/東京, 2003/1/25
- 古後奈緒子「モダンダンスの興隆期における書かれた舞踊——ラバノーテーション以前の「コレオグラフィー」事情——」

- ヨーロッパ文化研究会, 京都大学/京都, 2003/1/18
- 古後奈緒子「ホーフマンスタールと舞踊——舞踊台本の分析の試み——」近現代演劇研究会, 大阪大学, 2002/7/27
- 古後奈緒子「ホーフマンスタールの舞踊構想」オーストリア研究会, 大阪市立大学/大阪, 2002/5/17
- 高橋晴子「近代日本における<美しいひと>イメージの諸類型: データベース化のための基礎研究」美学会西部会第 242 回研究発表会, 美学会, 京都大学/京都, 2003/3/8
- 立野良介「美のシャインについて」文芸学研究会, 大阪大学/大阪, 2002/9/1
- 平井直子「ジョ・ポンティと反モダニズム——1920~30年代を中心に——」第143回意匠学会例会, 意匠学会, 京都女子大学/京都, 2002/9/21
- 平井直子 “Gio Ponti's Early Design Activities: Toward 'Rationalism' and the Idea 'Good Taste'” 3rd International Conference on Design History and Design Studies(第3回国際デザイン史・デザイン学会議), イスタンブール/トルコ, 2002/7/11
- 平光睦子 “Japanese Tradition in Issey Miyake” 3rd International Conference on Design History and Design Studies (第3回国際デザイン史・デザイン学会議), イスタンブール/トルコ, 2002/7/11
- 榊矢令明「清水靖晃のバッハ・プロジェクトをめぐって」美学会第 53 回全国大会, 美学会, 広島大学/広島, 2002/10/12
- 松友知香子「ブルーノ・タウトの建築と色彩——ベルリン近郊のタウト自邸を中心に——」意匠学会第44回大会・プレイベント・研究報告セッション, 京都工芸繊維大学/京都, 2002/11/9
- 孟白麗「青磁の美とその思想的背景——北宋汝官窯を中心に——」第 88 回研究例会, 民族芸術学会, 東洋陶磁美術館/大阪, 2003/2/15
- 【2003年度】**
- 池田(村田)葉子「音の映画以後のマルグリット・デュラス作品」映像学会西部会, 2003/11/29
- 猪谷聡「工芸における製作——民芸理論に関する一考察——」広島芸術学会, 広島市まちづくり市民交流プラザ・マルチメディアスタジオ, 2003/7/27
- 金悠美「バーネット・ニューマンの美学批判とその帰結」美学会西部会第 240 回研究発表会, 美学会, 京都工芸繊維大学/京都, 2003/9/28
- 古後奈緒子「バレエパントマイム『父の愛——あるピエロの——』が伝えるもの——改革前夜の歌劇場における舞台舞踏作品の一例として」(講演)大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」「映像人文科学班」バレエ・パントマイム《父の愛》, ピッコロシアター, 2004/1/24
- 古後奈緒子「舞踏を書くということ——ホーフマンスタールの場合——」美学会西部会研究発表会, 美学会, 関西大学/大阪, 2003/6/7
- 佐々木優「大友良英作品研究」美学会第54回全国大会・若手フォーラム枠, 成城大学/東京, 2003/10/12
- 島本英明「森有正の『経験』について——西田幾多郎『純粹経験』を参照して——」第19回文芸学研究会, 大阪大学/大阪, 2004/3/21
- 島本英明「森有正にみる『経験』の構造」美学会第54回全国大会・若手フォーラム枠, 成城大学/東京, 2003/10/12
- 城崎有沙「カルロ・スカルパの建築をつくるもの——ブリオン家墓地を巡って——」意匠学会第45回大会プレ大会, 武庫川女子大学/兵庫県, 2003/11/14
- 高橋晴子「身装文化画像データベースの作成・近代日本を対象として」人文科学とコンピュータシンポジウム, 情報処理科学会・人文科学とコンピュータ研究会, 国立歴史民俗博物館, 2003/12/17
- 鄭夙恩「生活空間としての街なみ」民族芸術学会第 19 回大会, 帝塚山大学/奈良県, 2003/4/27
- 鄭夙恩「日本建築史の自律——伊藤忠太の足跡をたどって——」待兼山芸術学会第13回研究発表会, 大阪大学/大阪, 2003/4/12
- 萩原康一郎「カフカ『変身』の解釈と技法」文芸学研究会, 神戸女学院/兵庫, 2003/7/19
- 平光睦子「型友禅の展開——絹布友禅とモスリン友禅——」意匠学会第158回研究会, 意匠学会, 大阪大学/大阪, 2004/2/21

(3)その他(書評・翻訳など)

【2002年度】

- 生島美紀子「黒瀬紀久子ピアノ・リサイタル」(肥後橋・イシハラホール)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2003/3/19
- 生島美紀子『響の会』作品発表コンサート(伊丹アイフォニックホール)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2002/12/12
- 池田(村田)葉子「映画における時間の新たな可能性——映画<こどもの時間>——」(映画評)『美学研究』(大阪大学大学院文学研究科美学研究室), 2, pp. 57-62, 2002/7/31
- 石原みどり「日本人と茶」展(京都・国立博物館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2002/10/16
- 石原みどり「近くて遠いふたつの筆線<書くこと描くこと——日本的なるもの——>」(展覧会評, 『美学研究』(大阪大学大学院文学研究科美学研究室), 2, pp. 53-56, 2002/7/1
- 井上由里子「スイスの陶芸展」(滋賀・陶芸の森美術館)「アメリカ現代陶芸の系譜 1950~1990」(京都国立近代美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2002/9/18
- 猪谷聡「2002年ソウルスタイル 李さん一家の素顔のくらし」展(大阪民族博物館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」 2002/12掲載
- 猪谷聡「2002ソウルスタイル」特別展(吹田・国立民族学博物館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2002/8/14
- 岩崎陽子「女性美の画家・寺島紫明展」(美術館「えき」KYOTO)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2003/1/29
- 岩崎陽子「吉川観方と京都文化展」(京都文化博物館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2002/12/4
- 岩崎陽子「何必館」(京都・現代美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2002/10/23
- 岩崎陽子「ガンダーラとシルクロードの美術展」(京都文化博物館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2002/9/25
- 要真理子「パトリック・ヘロン「工芸と現代芸術との関係」(翻訳, 監修: 藤田治彦『ダーティントン国際工芸家会議報告書——陶芸と染織: 1952年——』(思文閣出版), pp. 109-119, 2003/3/24
- 要真理子「構成された布きれ展」(神戸ファッション美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2002/12/25
- 要真理子「グリーンバーグ C.」(事典項目)『Microsoft エンカルタ総合大百科 2003年版』(デジタル百科事典), (マイクロソフト株式会社発行), 2002/11/1
- 北田聖子「柳宗理デザイン・歩道橋」(大阪・くずはニュータウン)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2003/2/19
- 北田聖子「日本の漆工芸『根来』展」(京都・細見美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2002/8/7
- 金悠美「ミームとしての『つながれた円と線』<田中敦子 in Kyoto>」(展覧会評)『美学研究』(大阪大学大学院文学研究科美学研究室), 2, pp. 49-52, 2002/7/1
- 蔵本典之「文学の意味と文学の価値」(研究ノート)『藝術研究』(広島芸術学会), 15, pp. 57-64, 2002/7/1
- 桑島秀樹「作家・高見広春氏講演会をめぐる覚書: ユニバーサル・ルールとしてのハードボイルド——『どんな時代でもわかってる奴にはわかってる』——」(講演会報告, 『文芸学研究』(文芸学研究会), 7, pp. 121-135, 2003/3/1
- 桑島秀樹「維摩居士坐像」(奈良・興福寺東金堂)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2002/8/28
- 古後奈緒子「微細な動きへの気づき——勅使川原三郎ダンスの魅力——」『表演藝術』((財)兵庫県芸術文化協会芸術文化センター推進室), 11, 2003/3

- 古後奈緒子「オーストリアのバレエ事情」「レナート・ツァネラ」「ジモーナ・ノヤ」「レオニド・マシーン」「ニネット・ド・ヴァロワ」守山実花監修『鑑賞者のためのバレエ・ガイド』（音楽之友社），2003/3/20
- 佐々木優「美術・時間・音楽」（大阪港・海岸通ギャラリーCASO/ Contemporary Art Space Osaka）『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」（連載分），2003/2/12
- 島本英明「ウィーン美術史美術館名品展」（京都国立近代美術館）『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」（連載分），2003/2/5
- 島本英明「やなぎみわ『マイ・グランドマザーズ』展」（KPO キリンプラザ大阪）『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」（連載分），2002/11/20
- 城崎有沙「『PRIVATE LUXURY——萬野コレ2002・現代美術とのコミュニケーション——』展」（萬野美術館）『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」2002/12/18掲載
- 鈴木匡「紙の教会」（神戸市長田区）『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」（連載分），2003/3/12
- 鈴木匡「安藤忠雄設計・木の殿堂」（兵庫県立兎和野高原野外教育センター付属施設）『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」（連載分），2002/11/27
- 鈴木匡「フランク・ロイド・ライト設計・旧山邑邸」（芦屋・現ヨドコウ迎賓館）『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」（連載分），2002/9/4
- 高橋晴子「田中千代コレクション：世界の民族服と日本の洋装 100 年」（千里文化財団（吹田），pp. 63，2002/8
- 高橋晴子「世界の民族服と日本の洋装 100 年——田中千代コレクション——」展（吹田・国立民族学博物館）『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」（連載分），2002/8/21
- 高橋晴子「民博服装・身装文化<コスチューム>データベース(MCD)」『服飾史・服飾美学部会会報』19, pp. 4, 2002/7
- 立野良介「京都・宇治平等院」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」（連載分），2002/9/11
- 立野良介「『何か』の背後への眼差し——映画《ロゼッタ》——」（映画評）『美学研究』（大阪大学大学院文学研究科美学研究室），2, pp. 63-66, 2002/7/1
- 鄭鳳恩（筆者：趙天儀）「近代における台湾の芸術学」（翻訳）『美学研究』（大阪大学大学院文学研究科美学研究室），2, pp. 35-42, 2002/7
- 中川朗「アンドレ・ケルテス写真展」（サントリーミュージアム【天保山】）『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」（連載分），2002/10/30
- 春木有亮「にっぽんの青春時代展」（神戸ファッション美術館）（連載分），2002/11/13
- 春木有亮「『諸芸術の照応』再読——図式の陰に隠れたその全貌——」（書評）『美学研究』（大阪大学大学院文学研究科美学研究室），2, pp. 67-69, 2002/7
- 平光睦子「パターンの独創性 間近に『マドレーヌ・ヴィオネ研究展』」（兵庫近代美術館）『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」（連載分），2003/3/26掲載
- 平光睦子「永澤陽一デザイン展」（神戸ファッション美術館）『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」（連載分），2002/11/6
- 榭矢令明「残響の音楽——清水靖晃について——」『現代音楽を楽しもう——XVI 清水靖晃——』（水戸芸術館），2003/3/1
- 松友知香子「ヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟」展（京都国立近代美術館）『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」（連載分），2003/1/22
- 松友知香子「イタリア・ボローニャ絵本原画展」（西宮・大谷美術館）『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」（連載分），2002/10/9
- 孟白麗「白と黒の競演——中国磁州窯系陶器の世界」展（大阪市立美術館）『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」（連載分），2003/1/15
- 李炳男（筆者：許梲）「韓国現代美術の展開と動向」（翻訳）『美学研究』（大阪大学大学院文学研究科美学研究室），2, pp. 43-48, 2002/7

【2003年度】

- 生島美紀子「神戸女学院大学音楽学部 第10回サマーコンサート」(伊丹アイフォニックホール)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2003/7/16
- 生島美紀子「神戸女学院大学音楽学部卒業生 新人演奏会」(いずみホール)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2003/5/21
- 石黒義明「楽の茶碗と同時代の書画展」(池田・逸翁美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2003/6/23
- 猪谷聡「三都『えき』物語」(交通科学博物館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」 2004/2/25掲載
- 猪谷聡「日本民家集落博物館」(大阪・豊中市服部緑地公園)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」 2003/10/10掲載
- 猪谷聡「知られざる西アフリカの美術」(京都国立近代美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」 2003/5/7掲載
- 要真理子「井出創太郎 銅版画展」(ギャルリ・プチポワ)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2003/9/17
- 要真理子「伊達伸明・建築物ウクレレ化保存計画展」(ギャラリー・アートスペース虹)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2003/8/13
- 要真理子「英国ロマン主義絵画展」(兵庫県立美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2003/4/9
- 要真理子「ヴィクトリアン・ヌード展」(神戸市立博物館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2003/4/2
- 桑島秀樹「空海と高野山」(京都国立博物館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2003/5/14
- 古後奈緒子「山田佐保子展」(いたみホール)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」 2003/11/12掲載
- 古後奈緒子「勅使川原三郎ダンス作品<Luminous ルミナス>」(NHK大阪ホール)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」 2003/7/2掲載
- 佐伯瑠理子「白沙村荘 橋本関雪記念館」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」 2004/1/28掲載
- 佐伯瑠理子「ヴェネチアの光と影」展(大丸ミュージアム梅田)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」 2003/10/22掲載
- 佐伯瑠理子「韓国国立中央博物館所蔵日本近代美術」展(京都国立近代美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」 2003/8/20掲載
- 佐々木優「画家ピカソの陶芸展～天才の横顔——南仏ヴァロリスの日々——」(美術館「えき」KYOTO)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」 2004/3/15掲載
- 島本英明「具体回顧展」(兵庫県立美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」 2004/2/11掲載
- 城崎有沙「『川崎清 美術館建築とその周辺』展」(国立国際美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」 2004/1/21掲載
- 城崎有沙「『有元利夫展 光と色・思い出を運ぶ人』」(美術館「えき」KYOTO)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」 2003/5/28掲載
- 鈴木匡「MIHO MUSEUM」(滋賀県信楽町)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2004/2/18
- 鈴木匡「草創期の日本刀——反りのルーツを探る——」(大阪歴史博物館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2003/6/18
- 鈴木匡「植村直己冒険館」(兵庫県日高町)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2003/4/30
- 高橋晴子「アート・ドキュメンテーション関連文献目録(2002～2003)」(目録)JADS 文献情報委員会編『アート・ドキュメンテーション研究』11, アート・ドキュメンテーション研究会, pp. 140-149, 2004/3
- 田中秀尚「関西フィルハーモニー管弦楽団定期演奏会」(ザ・シンフォニーホール)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2003/11/19

- 田中秀尚「大阪フィルハーモニー交響楽定期演奏会」(ザ・シンフォニーホール)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2003/8/27
- 堂尾知里「生誕100周年・没後20年, 岡田謙三展」(神戸市立小磯記念美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」 2004/3/10掲載
- 堂尾知里「小磯良平の青年時代展」(神戸市立小磯記念美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」 2003/10/15掲載
- 堂尾知里「独創諧謔の画家, 井上長三郎展」(伊丹市立美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」 2003/7/9
- 中川朗「和泉シティプラザアートワーク」(大阪府和泉市)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2003/6/25
- 春木有亮「民藝とランドスケープ・プロダクツの出会い」(大山崎山荘美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」 2003/4/16掲載
- 平光睦子「活動一望する大回顧展」『没後20年 中原淳一展』(西宮大谷美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2003/10/29掲載
- 平光睦子「昭和以降25作家の作品一堂に『今日の人形芸術 想念の造形』」(京都文化博物館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2003/6/11掲載
- 平光睦子「独創的図柄で真剣に遊ぶ 浴衣新ブランドの『メテウンデ』」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2003/4/23掲載
- 榊矢令明「クリムト 1900年ウィーンの神秘」(兵庫県立美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」(連載分), 2003/7/30
- 松友知香子(展覧会評)「田中一光の世界」『美学研究』(大阪大学大学院文学研究科美学研究室), 3, pp. 93-95, 2004/1
- 楊氷「エミール・ガレーガラス展について」(京都「えき」美術館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」 2003/11/26
- 楊氷「スターウォーズ展」(京都国立博物館)『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室——」 2003/9/10

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

古後奈緒子、舞踊学会研究奨励賞、舞踊学会、2003年、「1919年以降のドイツ文化圏におけるバレエ制作の変化と舞踊の近代化——装飾バレエとそのアンチテーゼとしての『ヨセフ伝説』——」(『美学研究』2, 2002/7所収)に対して

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)
 2003年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部: 0名 大学院: 3名 (計3名)
 2003年度 学部: 0名 大学院: 5名 (計5名)

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度～2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

- 桑島秀樹 博士後期課程, 広島大学, 助教授, 2004/3
 石原みどり 博士後期課程, 甲南大学, 人間科学研究科博士研究員, 2003/4
 岩崎陽子 博士後期課程, 同志社大学, ヒューマンセキュリティ研究センター特別研究員, 2003/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002 年度～2003 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4 名

2002 年度：1 名 2003 年度：3 名

<内訳> ジャーナリスト 2 名(各年度 1 名) ディレクター 1 名(2003 年度)
経営コンサルタント 1 名(2003 年度)

8. 客員研究員等の受け入れ状況

計 2 名

9. 外国人研究者の受け入れ状況

計 2 名

10. 刊行物

2002 年度 『美学研究』第 2 号
『文芸学研究』第 6 号
『文芸学研究』第 7 号
『フィロカリア』第 20 号
2003 年度 『美学研究』第 3 号
『文芸学研究』第 8 号
『フィロカリア』第 21 号

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

国際デザイン史フォーラム事務局	2002 年度～2003 年度
民族藝術学会事務局	2002 年度～2003 年度
ドイツ観念論研究会事務局	2002 年度～2003 年度
待兼山芸術学会事務局	2002 年度～2003 年度
文芸学研究会事務局	2002 年度～2003 年度
文芸学研究会 第 18 回研究発表会	2004 年 3 月 21 日
第 17 回研究発表会	2003 年 12 月 23 日
第 16 回研究発表会	2003 年 9 月 21 日
第 15 回研究発表会	2003 年 7 月 19 日
第 14 回研究発表会	2003 年 3 月 22 日
第 13 回研究発表会	2002 年 12 月 23 日
第 12 回研究発表会	2002 年 9 月 23 日
「映像人文学」メディア・デザイン・インターカルチャー論パリ・シンポジウム	2003 年 12 月 2 日・3 日
美学会西部会 第 245 回研究発表会	2003 年 9 月 27 日
第 239 回研究発表会	2002 年 7 月 6 日
第 3 回アーツ・アンド・クラフト・セツルメント国際会議	2003 年 7 月 25 日～29 日
『文芸学研究』 第 7 号合評会	2003 年 5 月 3 日
第 6 号合評会	2002 年 8 月 31 日
第 5 号合評会	2002 年 5 月 11 日
第 3 回国際デザイン史フォーラム	2003 年 3 月 8 日・9 日

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

待兼山芸術学会誌『フィロカリア』	第21号刊行	2004年3月29日
	第20号刊行	2003年3月29日
待兼山芸術学会	第13回研究発表会	2003年4月12日
	第12回研究発表会	2002年4月13日

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価**13-1 教育活動**

美学研究室は大橋教授が赴任して以来、2年間、教授3名、助手代理1名ないし2名、非常勤講師1名という体制で運営されてきた。大橋教授は各種の国際シンポジウム(パリ、2003年12月、ベルリン、2004年9月など)の議長のほか、国際ヘーゲル学会理事、国際インターカルチャー哲学会副会長を務めるなど、国際的にも広く活動し、多数の著作活動と併せて高く評価されてきた。上倉教授はおもにフランス美学と映画の教育・研究に取り組み、映画界との提携も踏まえて、現場での実践教育にまで踏みこんだ意欲的な研究活動を展開している。藤田教授は環境美学を中心とする英米美学とデザインや工芸に関する教育・研究を展開している。1998年にデザイン史フォーラムを創設、1999年と2000年に国際デザイン史フォーラムを開催し、その成果を『国際デザイン史』として刊行。1999年度～2002年度、科学研究費補助金(A)「近代日本における芸術概念の誕生と死」(研究代表者:上倉教授)、2000年度～2002年度、同(B)「芸術学の日本近代——その歴史と展望」(研究代表者:神林教授)をテーマとする研究を行なった。2001年に発足した阪大美学研究会では、美学研究室編集の『美学研究』が創刊され、現在は3号を数えている。また各種国際学会や国内学会における発表、美学研究室大学院生が交代で執筆する大阪日日新聞のシリーズ記事「関西美術探訪」の2002年夏からの連載開始など、大学院生および学部学生の活動は非常に活発である。

なお、大橋教授のイニシアチブにより、2004年10月、パリ・ラヴィレット建築エコールと文学研究科芸術学講座および工学研究科建築工学専攻とのあいだの「部局交流協定」が成立した。これにより2005年度からの学生交流が始まると共に、美学研究室と建築学専攻とのあいだの学内交流も始まることになる。この交流協定成立のワン・ステップとして、且つ文学研究科 COE「インターフェイスの人文学」の一部「映像人文学」のシンポジウム「メディア・デザイン。インターカルチャー論」が2003年12月2日、3日の2日間、パリ・ラヴィレット建築エコールで行われた(議長:大橋教授)。

文芸学研究室は森谷教授が2004年3月に退官されたあと、加藤助教授がプラトンの文芸論やスカリゲルの詩学などを研究し、渡辺助手がアリストテレスの悲劇論などを研究している。1998年に発足した文芸学研究会では、機関誌として『文芸学研究』が発刊され、現在は8号を数えるに至っている。この研究会は本研究室を事務局兼活動母体としながらも、広く西日本の他大学の多くの研究者とも連携したものであり、研究発表を年4回開催すると共に、機関誌を年1冊発行し、そのたびごとに合評会を催すなど、極めて活発に活動している。2002年度から2003年度にかけて科学研究費補助金の交付をうけて「自然感情と風景とに関する美学的・文芸学的研究」(研究代表者:森谷教授)という上記3名による研究を行なった。この研究を通じて、自然感情と風景とに関する研究が本研究室の共同研究となり、その成果は『文芸学研究』などに発表されている。本研究室の同様の共同研究であるクインティリアヌスの *Institutio oratoria* の邦訳も、現在第2巻までが完了し、2004年に刊行される予定である。文芸学研究室に属する学部生・大学院生の数は少なく、これまでの課程博士の学位取得者は4名にとどまっているが、美学・文芸学の専門分野全体では多く、課程博士の学位取得者もこの2年間で5名上り、そのうち金悠美は、学位請求論文を『美学と現代美術の距離 アメリカにおけるその乖離と接近をめぐる』と題して、すでに2004年2月、東信堂から公刊、他の数名も公刊を準備中である。

13-2 研究活動

上記の「教育活動」の項で概略は述べたが、各教官の研究活動についてはなお若干のことを付加する。大橋教授は2003年度末までに『京都学派の思想』(編著)と『西田天香 天華香洞録』6巻の編著を刊行。

また、上記のパリ・シンポジウムのほかに、ボン大学「ヨーロッパ統合研究所」の招聘(2003年9月1~30日)で各国研究者たちと1ヶ月間のディベートに参加、ベルリン国立美術館での招待講演「東洋と西洋の芸術」、国際インターカルチャー哲学会年次大会(ミュンヘン大学)での招待講演(2002年10月)、などを行なう。

上倉教授は1999年度から4か年にわたる科学研究費の成果報告書『日本における「芸術」概念の誕生と死』をまとめ「私小説と日本の芸術概念」を執筆(2004年3月)、また「日本映画批評史覚書 滝沢一について」を科研成果報告書『芸術学の日本近代』(研究代表者:神林恒道、2004年3月)に、「サド公爵の自然観」を『三つの世紀末』(神林恒道編、大阪大学美学研究会刊、2004年3月)に寄稿した。2003~4年度の科研費研究『ドラマと音楽』の研究例会を重ね、研究分担者のひとり渡辺助手とともに現在、報告書を取りまとめている。また第4回を迎えた京都映画祭の企画委員として、その実行に取り組み、研究室学生の有志とともに2004年9月、2万人を動員、映画祭の成功に力を尽くした。

藤田教授は2000年度から3ヶ年にわたる科学研究費補助金の成果報告書『西洋の工芸博物館の比較研究』をまとめた。またウィリアム・モリスと柳宗悦との比較研究を行ない、「アーツ・アンド・クラフツと工芸の変貌——ウィリアム・モリスと柳宗悦」(『美学』第213号、2003年6月)、「柳宗悦とアーツ・アンド・クラフツ」(『美術フォーラム』第6号、2002年6月)などの論文にまとめた。さらに、『ダーティントン国際工芸家会議報告書』の監修をするなど、各種の国際学会でも中心的な役割を果たしている。

また石黒助手代理は2004年8月よりロータリー奨学金でミュンヘン大学に留学中。

Ⅲ. 教員の研究活動(2002年度~2003年度の過去2年間)

1. 大橋 良介 教授

1944年2月8日生。1969年、京都大学哲学科卒業。1974年、ミュンヘン大学大学院哲学科博士課程、学位取得。1983年、ヴェルツブルク大学で哲学教授資格(ハビリタチオン)取得。専攻:美学・哲学・現象学。

1-1. 論文

大橋良介「場所としての言葉」『京都学派の思想』(大橋良介編、人文書院、pp. 208-243, 2004/2)

Ohashi, Ryosuke, "Geschichtsdanken nach dem sogenannten Ende der Geschichte——Hegel im Lichte der

Interkulturalität", in: *Interesse des Denkens. Herausgegeben von Wolfgang Welsch & Klaus Vieweg*, pp. 231-246, 2003/12

大橋良介「空の美学」『日本の美学』36, 燈影舎, pp. 147-163, 2003/12

大橋良介「環境・場所・世界——風土の美学——」田路貴浩編『環境の解釈学』学芸出版社, pp. 179-193, 2003/12

Ohashi, Ryosuke, "Ästhetische Gerechtigkeit · Hermeneutische Analyse eines *rakugō* Stücks aus interkultureller

Perspektive", in: *Selected Papers of the 15th International Congress of Aesthetics*. ed. by K. Nishimura, K.

Iwaki, T. Otabe, K. Sasaki, E. Tsugami. The Organizing Committee of the 15th International Congress of

Aesthetics. Tokyo, pp. 276-280, 2003

大橋良介「『歴史の終わり』以後の歴史思惟」『ヘーゲル哲学研究』(ヘーゲル研究会), 8, pp. 86-101, 2002/12

Ohashi, Ryosuke, "Die Welt als 'Bild-Masken'", in: *Die Sprache der Masken, Herausgegeben von Tilo Schabert*,

Verlag Königshausen & Neumann, pp. 43-52, 2002/12

1-2. 著書

大橋良介編『京都学派の思想——種々の像と思想のポテンシャル——』人文書院, 2004/2

大橋良介, 芦津丈夫, 木村敏『生命の文化論——日独文化研究所シンポジウム——』人文書院, 2003/1

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

大橋良介「西田訳のボードレール」『関西文学』41, pp. 12-13, 2003/12

大橋良介「哲学と建築(1)」『点から線へ』44, pp. 38-51, 2003/3

大橋良介「人間は何を知っているべきか——科学技術時代の倫理——」哲学者と自然科学者との対話, シリーズ東と西, 第7回シンポジウム「人間はなにを知っているべきか——科学技術時代の倫理——哲学者と自然科学者との対話」, 2001年10月25日(木)~26日(金), 開会基調報告。『ベルリン日独センター報告集』28, pp. 15-22, 2002

1-4. 口頭発表

大橋良介 “Culture: From Architecture to Nature”, パリ・ラヴィレット建築大学シンポジウム ”L’architecture comme interface environnementale entre les cultures”, 2003/12/2

大橋良介 “Eastern and Western Aesthetics”, ベルリン国立美術館 Altes Museum, 2003/10/11

大橋良介 “Violence and Religion”, ボン大学 Zentrum für Europäische Integrationsforschung, 2003/9/25

大橋良介「哲学と建築(2)」石川県西田幾多郎記念哲学館, 2003/8/26

大橋良介 “Die Sprache als Ort”, Gesellschaft für Interkulturelle Philosophie, ミュンヘン大学, 2002/10/10

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

大橋良介 ベルリン高等研究所フェローシップ, 1997/10/1~1998/7/31

大橋良介 フンボルト・メダル(フンボルト財団総長より), 1996/3/31

大橋良介 ジーボルト賞(ドイツ連邦共和国大統領より), 1990/7/3

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

西田哲学館名誉館長	2002年4月~現在
国際ヘーゲル協会(Internationale Hegel-Vereinigung)理事	1997年12月~現在
日本フィヒテ協会理事	1995年6月~現在
国際高等研究所特別委員	1993年4月~現在
日本シェリング協会理事	1992年2月~現在
日独文化研究所理事	1991年6月~現在
実存思想協会理事	1988年7月~現在
国際インターカルチャー哲学会(Gesellschaft für Interkulturelle Philosophie) 副会長	1995年6月~2004年6月

2. 上倉 庸敬 教授

1949年生。専攻：美学／芸術学／映画学。

2-1. 論文

上倉庸敬「サド公爵の自然観」『三つの世紀末<ロマン主義・世紀末・ポストモダン>——転換期の芸術と芸術の哲学——』(阪大美学研究会刊、神林恒道編), pp. 71-84, 2003/12

上倉庸敬「私小説と日本の芸術概念——平野謙『藝術と実生活』をめぐる——」『日本における「芸術」概念の誕生と死』(科研実績報告書 研究代表者：上倉庸敬), pp. 3-17, 2003/3

上倉庸敬「日本映画批評史覚書 滝沢一について」『芸術学の日本近代——その歴史と展望——』(科研実績報告書 研究代表者：神林恒道), pp. 68-81, 2003/3

上倉庸敬「映像の光と影」『日本の美学』34, pp. 44-50, 2002/12

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

上倉庸敬「映画評『月刊シネマのめがね』」「産経新聞」大阪本社版, 2003/4~2004/3

毎月最終木曜日夕刊連載 1.『映画「めぐりあう時間たち」主人公は「幸せへの問い」』(2003/4/24), 2.『映画「おばあちゃんの家」異質な他者が出会う時』(2003/5/29), 3.『映画「シティ・オブ・ゴッド」荒々しくも叙情的な一編の神話』(2003/6/26), 4.『映画「永遠のマリア・カラス」あふれだす豊かな悲しみ』(2003/7/31), 5.『映画「氷海の伝説」イヌイットが語る「祖国」への愛』(2003/9/4), 6.『香港映画「インファナル・アフェア」シンプルに徹した野心作』(2003/9/25), 7.『映画「マグダレンの祈り」女の性をめぐる悲しみと怒り』(2003/10/30), 8.『映画「イン・ディス・ワールド」身捨つる「国」はどこに』(2003/11/27), 9.『映画「真実のマレーネ・ディートリッヒ」亡国の女優は反戦を歌う』(2003/12/25), 10.『映画「美しい夏キリシマ」わたくしの罪を裁き、赦すもの』(2004/1/26), 11.『映画「アドルフの画集」すれちがう運命と未来』(2004/2/26), 12.『韓国映画「オアシス」偽善を抉る珠の恋』(2004/3/25)

上倉庸敬「俳優評・おカネじゃなくて夢を追う 関西の元気な俳優 2 人」(大阪日々新聞朝刊)『関西美術探訪——阪大美学研究室——』74, 2004/1/14

上倉庸敬「探訪記 物語のあるまち I、II、III」『Chamber』(大阪商工会議所・季刊), 2002/7~2003/4

上倉庸敬 辞典項目「美学と芸術学」, 「グスタフ・ルネ・ホッケ」, 「マリオ・プラーツ」, 「アビ・ワールブルク」『マイクロソフト・エンカルタ総合大百科』、マイクロソフト・コーポレーション, CD-ROM, 2002/6

2-4. 口頭発表

Kamikura, Tsuneyuki, "The Architecture in Japanese Apres-Guerre Literature", French-Japanese Symposium "Architecture as Intercultural Interface", 2003/12/2

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2003 年度~2004 年度、基盤研究(C)、代表者：上倉庸敬

課題番号：1552008

研究題目：ドラマ空間における音楽に対する観客反応の実証的な研究

研究経費：2003 年度 1,000 千円

研究の目的：

芸術作品の制作理論と、それに基づいて出来あがった作品と、観客とのあいだには、どのようなズレがあるか。本研究はそれを明らかにしたい。いいかえれば「予想された観客」と「実際の観客」のズレを、できるかぎり客観的つまり実証的に明らかにしたい。そのためには、作品の意図などという曖昧な対象ではなく、作品中で何か他のものに役立とうとしていることが明らかな対象を選ばなくてはならない。本研究では、ドラマの伴奏音楽を対象にして、それに対する観客の反応データを多数・多様に集積し、可能なかぎり客観的に記述、考察をほどこしたい。

映画監督の黒澤明は「映画制作において、映画をいちばん熟知しているのは監督であるから音楽担当者は監督の指示にしたがわねばならぬ」と主張したが、同監督の作品『乱』において音楽監督をつとめた武満徹は「音楽をいちばん熟知しているのは音楽担当者であるから監督といえどもその提案を受け容れるべきだろう」と反論した。黒澤と武満の対立が現実には『乱』という作品に解消されたのは、劇映画において映像・音楽それぞれが従わねばならぬ対象が、映像・音楽いずれでもなく、「劇」すなわち「ドラマ」だからである。

『乱』の完成後も武満は「音楽の知識が 50 年前でストップしている黒澤では現代の十分な映画音楽はつくれない」と堂々、不平を洩らすことができた。黒澤とは作品制作の考え方が違うと武満は思っていたろう。しかし実際は両者の「予

想する観客」が質的に異なっていたというべきであろう。

映画史 100 年のなかで映画音楽を革新したのは、ヒッチコック監督『サイコ』の Bernard Hermann だといわれているが、その画期の基準は制作の観点から立てられている。制作側からすれば観客は「予想された観客」でしかない。実際の観客はどうであったか。たとえば活弁につけられたような、剣戟のときは勇ましく 2 分の 1 拍子、悲劇のときは短調などという単純な音楽は、観客側からみても否定されるべきなのかどうか。

ドラマをつくりあげる映像について、観客に対し、どのような音楽がどのような効果をあげるかという問題は、一般理論として未だ解決をあたえられていない。映画の場合だけではない。言葉によってドラマをつくりあげる演劇の場合も、おなじ問題がある。演劇をつくりあげる言葉について、観客に対し、どのような音楽がどのような効果をあげるか。

たとえ伴奏音楽のような二義的なものについてであれ、理論の予想する観客と実際の観客のズレが客観的に実証されれば、その結論は広い範囲のさまざまな問題を明らかにしてくれるだろう。一例をあげれば古典芸能における「型」である。「型」の変遷は「予想された観客反応」と「実際の観客反応」のズレのなかで跡づけるができよう。さらに一例をあげれば、造形作品の様式変遷の問題にも照明をあてることができる。本研究の射程範囲は広く遠いというべきである。

2-6-2. 1999 年度～2002 年度、基盤研究(A)(2)、代表者：上倉庸敬

課題番号：11301001

研究題目：日本における「芸術」概念の誕生と死

研究経費：2002 年度 直接経費 7,300 千円、間接経費 2,190 千円

研究の目的：

現代日本の「芸術」をめぐる状況は、現代世界のそれを縮約している。「芸術」の情報に関して世界はすでに一つである。しかし、日本における「芸術」概念の「ぶれ」はまた、はなはだ日本に固有な特色にも由来するといわざるを得ない。「芸術」概念それ自体が西洋から移入されたものだからである。その意味で、日本の「芸術」状況は、西洋以外の世界ごとくアジアのそれと共通した特徴を示すであろう。私たちの研究目的はこうである。世界において「芸術」概念は死に瀕している。あるいはすでに死んでいる。だが、かつて「芸術」的と呼ばれた人間の活動は依然として盛んに展開されていると私たちは考える。西洋の芸術諸学は、ひとすじに発展してきた学知を内在的にのりこえることで、その事態を把握しようとしているが、わたしたち日本の芸術諸学は、西洋で養われてきた「芸術」概念ではない考え方を提出して、この人間活動の新しい事態を提議しようとするのである。それはヨーロッパの学問の否定ではないが、あらたな時代を「ポストモダンな」とか「ポストコロニアルな」といった形容詞で一括りにするものでもない。ヨーロッパ学の日本的な展開の実践をくわだてているのである。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

第 4 回京都映画祭実行委員会・企画委員	2003 年 10 月～2005 年 3 月
美学会・委員	1992 年 10 月～2004 年 9 月
日本学術会議芸術学研究連絡委員会・委員	2001 年 4 月～2003 年 3 月

3. 藤田 治彦 教授

1951 年生。大阪市立大学大学院生活科学研究科博士課程修了。学術博士(大阪市立大学 1983 年)。京都工芸繊維大学工芸学部助教授、ルーヴェン・カトリック大学客員教授、大阪大学大学院文学研究科助教授などを経て、現職。

専攻：環境美学／芸術学。

3-1. 論文

藤田治彦「ウィリアム・モリスのテムズ紀行——源流を求めつづけた生涯——」『FRONT』183, pp. 6-10, 2003/12

Fujita Haruhiko, The Ways of Arts or Ethics in Aesthetics, *The International Yearbook of Aesthetics*, 7, pp. 39-49, 2003/12

Fujita Haruhiko, "This Will Kill That: Frank Lloyd Wright, Japan, and 21st-century Architecture", *Selected Papers of the 15th International Congress of Aesthetics*, pp. 71-74, 2003/9

Fujita Haruhiko, Dağın sancisi-shanshui ya da sansui, *Sanat*, 59, pp. 32-37, Istanbul, 2003/8

藤田治彦「アーツ・アンド・クラフツと工芸の変貌——ウィリアム・モリスと柳宗悦をめぐって——」『美学』213, pp. 14-26, 2003/6

Fujita Haruhiko, "L'AGONIA DEL MONTE", *Parametro*, 245, pp. 36-37, 2003/5

藤田治彦「英国の文化財保存：ナショナル・トラストと古建築物保護協会」『民族藝術』19, pp. 50-54, 2003/3

藤田治彦「柳宗悦とアーツ・アンド・クラフツ」『美術フォーラム』6, pp. 115-119, 2002/6

3-2. 著書

藤田治彦『西洋の工芸博物館の比較研究』2000年度～2002年度科学研究費補助金(基盤研究(C)研究成果報告書)大阪大学文学研究科, 2003/12

藤田治彦(宮島久雄ほか7名との共著、「京都高等工芸学校」美術研究会編)『1902年の好奇心』光村推古堂, 2003/11

藤田治彦(渡邊研司ほか7名との共著)『世界の建築・街並みガイド・2・イギリス/アイルランド/北欧』エクスナレッジ, 2003/4

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

藤田治彦, 福本繁樹編著「21世紀は工芸がおもしろい」『民族藝術』20, 求龍堂, 2004/3 掲載

藤田治彦「ウィリアム・モリスの印刷芸術」『印刷博物館』pp. 75-76, 2003/12

藤田治彦「ダーティントン・ホールと1952年国際工芸家会議」『ダーティントン国際工芸家会議報告書』550-565, 思文閣出版, 2003/3

藤田治彦「マッキントッシュとグラスゴー・スタイル」『週刊朝日百科・世界100都市』58, pp. 10-11, 2003/1

藤田治彦「立ち返るべき近代デザイン史文献」『アイデア』296, pp. 50-53, 2003/1

藤田治彦「亜洲藝術興美学藝術的地平線」『藝術家』324, pp. 248-251, 2002/5

3-4. 口頭発表

Fujita Haruhiko, "Viollet-le-Duc and Japanese Architecture," Symposium Franco-Japonais "L'architecture comme interface environnementale entre les cultures," L'ecole d'architecture de Paris La Villette, 2003/12/1

Fujita Haruhiko, "The Ways of Arts or Ethics in Aesthetics," 21st World Congress of Philosophy, Istanbul, 2003/8/14

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

藤田治彦 意匠学会賞, 2002/11

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2000年度～2002年度、基盤研究(C)、代表者：藤田治彦

課題番号：12610054

研究題目：西洋の工芸博物館の比較研究

研究経費：2002年度 800千円

研究の目的：

本研究には二つの目的がある。ひとつは、現在のヴィクトリア・アンド・アルバート美術館の前進、1857年創設のサウス・ケンジントン博物館を嚆矢として、ドイツ文化圏を中心に、西欧各国の主要都市に19世紀後半に次々と設立された、工芸博物館相互の影響関係を、開設準備資料、創設史等の調査によって明らかにすることである。もうひとつの目的

は、上記の海外史料調査に日本国内での史料調査を加え、サウス・ケンジントン博物館をはじめとする西欧の工芸博物館ならびに北米の総合博物館や教育博物館が、明治の日本の博物館計画にどのような影響を与えたのかを検証することである。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 21世紀COEプログラム分担

3-8. 学会役員等の引き受け状況

美学会・委員

意匠学会・委員

民族藝術学会・理事

日本デザイン学会・評議員

4. 加藤 浩 助教授

1960年生。1983年、大阪大学文学部美学科卒業。1985年、大阪大学大学院文学研究科修士課程修了。文学修士(大阪大学、1985年)。1987年10月 岡山大学助手、1995年4月 岡山大学助教授、1998年10月 大阪大学助教授。専攻：文芸学／西洋古典学／美学。

4-1. 論文

なし

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

5. 渡辺 浩司 助手

1962年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程 年単位取得満期退学。1994年より現職。博士(文学)(大阪大学)。文芸学、西洋古典学。

5-1. 論文

渡辺浩司「古代ギリシアの弁論術：弁論術の誕生」『科学研究費補助金 基盤研究(B)(2)研究成果報告書「古代弁論術(レトリック)の理論と実践に関する歴史的・体系的研究」研究代表者 森谷宇一』pp.1-24, 2003/3

渡辺浩司「私小説の誕生と死」『科学研究費補助金 基盤研究(A)(2)研究成果報告書「日本における『芸術概念』の誕生と死」研究代表者 上倉庸敬』pp.141-150, 2003/3

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

渡辺浩司「海外雑誌論文紹介」『古代哲学研究 METHODOS』35, p. 62, p. 65, pp. 67-68, 2003/5

渡辺浩司, 戸高和弘, 伊達立晶「キケロ「最も優れた弁論家について」(解題、訳、注)」『科学研究費補助金 基盤研究(B)(2)研究成果報告書「古代弁論術(レトリック)の理論と実践に関する歴史的・体系的研究」研究代表者 森谷宇一』pp. 106-114, 2003/3

渡辺浩司, 戸高和弘「Tractatus Coislinianus」翻訳・訳注『文芸学研究』6, pp. 135-159, 2002/7

渡辺浩司「海外雑誌論文紹介」『古代哲学研究 METHODOS』34, p. 70, p. 75, 2002/5

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

民族芸術学会委員(庶務)

1994年4月～現在

2-22 音楽学・演劇学

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

(音楽学)

音楽学研究室は、学部においては「人文学科」の一専修を、大学院においては「文化表現論」の一専門分野を担当し、講座組織としては「芸術学」に属しており、かつ「音楽学・演劇学」という位置づけにより、広く上演芸術全般についての研究と教育に関わる立場となっている。したがって、大学におけるこのような組織上の布置関係を意識しつつ、音楽学としての固有の在り方を追求し実践している。2003年3月の山口修教授(現・名誉教授)定年退官の後、1年間、専任教員は教授・根岸一美のみという事態を経過したが、2004年4月に助教授・伊東信宏が着任し、新たな体制を構築しつつある。

根岸はオーストリアの作曲家アントン・ブルックナーの研究を機軸に据え、広く西洋音楽史を講ずるとともに、ブルックナーの作品の日本での受容に関する研究を端緒に、大正期から昭和期にかけて関西で活躍した音楽家ヨーゼフ・ラスカの仕事について、集中的に取り組んでいる。

伊東はハンガリーを中心とする中・東欧の音楽史、民俗音楽研究を中心に、バルトーク、オペレッタ、楽師、ハイドンといった様々な切り口から、民衆文化の中での音楽実践の研究に取り組んでいる。

両教員ともそれぞれの研究課題を追究し、それとの密接な関連において教育活動を行っているが、音楽が生きた人間の活動であることを常に意識し、社会におけるさまざまな音楽行動を研究との関わりの中で把えること、また社会への発言をおこなうことを重視し、実践に努めている。また、このような見地より、教育においてもさまざまな形での音楽実践を取り込み、多角的な展開をめざしている。学生の個人研究については、それぞれの価値観を重んじ、対象・方法に関しての十分な対話を重ねることにより、有効な成果を得ることができるよう心がけている。

(演劇学)

演劇学では、日本伝統演劇と近代演劇との二つの分野を有している。日本伝統演劇を天野文雄教授が、近代演劇を永田靖教授が担当している。天野文雄は近年世阿弥研究と中世の能の歴史研究に積極的で、盛んに論考を発表している。永田靖はロシア演劇に限らず、近代演劇の理論と実践をトータルに考え、近年は演技論や演劇史記述の問題を軸に20世紀の演劇史を再構築する試みを続けている。それらの成果は別表に詳しい。授業はそれぞれ、専門の能楽史、ロシア演劇史に関するものの他に、初学者用の能楽入門的な概説や、西欧演劇史の概説や演劇学概論の講義や演習を行っている。また西欧演劇学と日本伝統芸能史のクロスオーバー的な検討を主題にした、2人の教員による共同演習の他、実際に劇場に行き、上演を分析する観劇実習を行っている。さらに、数年に一度、研究上演やワークショップを行なうか、近隣の公立劇場での劇場研修を行なっている。それらの教育・研究成果を発表することにも積極的で、紀要『演劇学論叢』と劇評誌『まくあい』を刊行している。前者は年1回、後者は年2回の刊行である。これらは院生や学部学生ばかりでなく、他大学の研究者からの投稿をも掲載し、活気のある研究成果発表活動を行っている。これらの教育研究活動を通して、上演そのものの本質を解明することに加え、日本演劇と世界演劇をトータルに見る視点と、身体的にアプローチする着想を育んでいる。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 3 助教授 1 講師 0 助手 1

教授：天野 文雄、根岸 一美、永田 靖

助教授：伊東 信宏

助手：上野 正章

2. 在学生(2004年4月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
42	9	29	0	0	0	6	3	4

※うち留学生 7 名、社会人学生 6 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業生	大学院		博士号学位授与数	出身の研究者
		博士前期(M)修了者	博士後期(D)修了者		
'02	9	8	4	12	0
'03	17	4	2	2	0
小計	26	12	6	14	0

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	8	4	12
'03	2	1	3
計	10	5	15

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

高岡千寿子「K・ペンデレツキの音楽作品における死と生のダイナミズム——クラスター作法の意味論——」2004/3

主査：根岸一美 副査：上倉庸敬、森谷宇一、秀村冠一(京都女子大学)

- 伊藤友子 「クラシック・バレエにおける動きと音楽のダイナミズム」 2002/9
主査：根岸一美 副査：山口修、永田靖
- 小川はるか 「企画者としての武満徹」 2003/3
主査：山口修 副査：根岸一美、本間直樹
- 奥中康人 「唱歌と規律——近代日本の統治技術としての音楽——」 2002/9
主査：山口修 副査：根岸一美、竹中亨
- 尾本頼彦 「世阿弥の能と能楽論の研究——その編年的位置づけをめざして——」 2004/3
主査：天野文雄 副査：永田靖、肥塚隆
- 黒川妙子 「南インド・タミルナードゥ州・ダリットの太鼓文化『タップ』研究」 2003/3
主査：山口修 副査：根岸一美、天野文雄
- 近藤睦 「音楽のアウトリーチ活動に関する研究——音楽家と学校の連携を中心に——」 2003/3
主査：山口修 副査：根岸一美、若山映子
- 筒井はる香 「19世紀前半のウィーンにおけるフォルテピアノ——製作から音楽へ——」 2003/3
主査：根岸一美 副査：山口修、林正則
- 宮本美紀 「聖化する音楽祭——グロカリゼーションとしての祝祭研究——」 2002/9
主査：山口修 副査：根岸一美、天野文雄
- 李金叶 「ヤオ族音楽文化に関する基礎的研究」 2003/3
主査：山口修 副査：根岸一美、桃木至朗

【論文博士】

- 内崎以佐味 「ハワイ音楽における伝統・継承・創造」 2003/3
主査：山口修 副査：根岸一美、永田靖
- 佐藤道子 「悔過会と芸能」 2003/5
主査：天野文雄 副査：永田靖、山口修、平雅行、中村生雄
- 平田勉 「箏・わざ・産業」 2003/3
主査：山口修 副査：根岸一美、天野文雄、田中健次(佐賀大学)
- 水野信男 「ウンム・クルスーム——ウンマのなかの音——」 2003/3
主査：山口修 副査：根岸一美、永田靖
- 山田智恵子 「義太夫節の語りにおける規範と変形——地合の音楽学的研究——」 2003/3
主査：山口修 副査：根岸一美、天野文雄

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	3	11	2	0	1	17
'03	5	12	7	0	1	25
計	8	23	9	0	2	42

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	1	19	9	0	0	29
'03	3	12	9	0	0	24
計	4	31	18	0	0	53

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

(音楽学)

近藤睦, 中山夏織共著『芸術と教育 新たな関係——海外事例に学ぶ——』(芸団協出版部), 2002/4

白石奏人「『パブリックシアター』のためのクラシック音楽普及事業について」『表演藝術 2002年度芸術文化センター事業調査研究報告書』(兵庫県芸術文化協会芸術文化センター), 11, pp. 60-68, 2003/3

高岡千寿子「K・ペンデレツキの声楽作品における死と生のかたち」『フィロカリア』(大阪大学), 20, pp. 37-71, 2003/3

福本康之「日本におけるベートーヴェン受容IV——戦時体制(第二次世界大戦)下の状況——」『音楽研究所年報』(国立音楽大学), 16, pp. 183-198, 2003/3

福本康之「グスタフ・マーラーのニューヨークにおける指揮活動——演奏記録調査に基づいて——」『音楽研究』(国立音楽大学大学院研究年報), 16, pp. 137-155, 2003/3

福本康之「昭和戦前期の仏教洋楽に関する一考察(2)——日本佛教童謡協会と江崎小秋の活動を中心に——」『環境と経営』(静岡産業大学), 8-1, pp. 46-62, 2002/4

牧野淳子「地域資源を活用したアートプログラムの実践——竹と音からの展開の可能性——」『アートマネジメント研究』(日本アートマネジメント学会), 3, pp. 74-81, 2002/11

山田高誌「“ナポリ楽派”の定義をめぐって」『ロッシニアーナ』(日本ロッシニー協会), 22, pp. 9-30, 2002/5

(演劇学)

尾本頼彦「能のクセ詞章の性格とその変遷——世阿弥の能作の編年の位置づけのために——」『フィロカリア』20, pp. 73-100, 2003/3

尾本頼彦「『奥義』と『別紙口伝』——その先後関係と世阿弥能楽論の展開——」『芸能史研究』(芸能史研究会), 158, pp. 34-46, 2002/7

木下耕介「住民参加による舞台創造～継続のための仕組みを探る」『表演藝術』(財団法人兵庫県芸術文化協会芸術文化センター推進室発行), 11, pp. 69-77, 2003/3

澤野加奈「世阿弥の『鬼』再検——「砕動風」「力動風」の位相の変遷——」『待兼山論叢(美学篇)』(大阪大学文学会), 36, pp. 53-76, 2002/12/1

中尾薫「観世元章の《鉄輪》——明和改正の実態とその影響——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 5, pp. 164-171, 2002/12

橋場夕佳「謡曲《高安》の背景とその行方——伊勢物語注釈との関わりを中心に——」『同志社大学国文学』58, pp. 13-23, 2003/3

橋場夕佳「明和改正謡本における『伊勢物語』関係曲——新註との関係を中心に——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 5, pp. 148-163, 2002/12

正木喜勝「東京左翼劇場の理論と実践——『全線』と『太陽のない街』の上演分析——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 5, pp. 39-51, 2002/12

三ツ石友昭「露月と宝生活圃——絵俳諧を中心として——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 5, pp. 39-51, 2002/12

【2003 年度】

(音楽学)

- 井手口彰典「MIDI 音楽の先行文献レビューとその仮想性についての考察」『2003 年全日本電子楽器教育研究会論文集』(全日本電子楽器教育研究会), pp. 49-61, 2003/8
- 今田健太郎「活動写真興行とその視聴体験の諸相——二十世紀初頭の日本における音と映像の関係——」『フィロカリア』(大阪大学), 21, pp.15-30, 2004/3
- 岡村睦「越境する音楽——istanpitta に見るイスラム的要素から——」『阪大音楽学報』(大阪大学), 2, pp. 35-48, 2004/3
- 白石奏人ほか「公共劇場、表演芸術の普及、および調査研究活動の望まれる関係とは」『表演藝術 2003 年度芸術文化センター事業調査研究報告書』(兵庫県芸術文化協会芸術文化センター), 12, pp. 53-62, 2004/3
- 白石奏人「リヒャルト・ワーグナーの『公衆』批判についての試論——1840 年から 1851 年までの理論的著作を中心に——」『阪大音楽学報』(大阪大学), 2, pp. 65-77, 2004/3
- 谷正人「イメージ上で鳴り響く音——イラン伝統音楽における楽譜の存在を支えるもの——」『東洋音楽研究』(東洋音楽学会), 68, pp. 1-12, 2003/8
- 谷正人「イラン伝統音楽のラディーフ——その再定義にむけて——」『音楽学』(日本音楽学会), 48-3, pp. 193-206, 2003/7
- 筒井はる香「消えゆく音に指で触れる——シューマンとフォルテピアノ——」岡田暁生編『ピアノを弾く身体』(春秋社), pp. 137-164, 2003/4
- 袴田麻祐子「創出される異文化イメージ 白井鐵造のレビューに見られる『パリ』を例に」『音楽学』(日本音楽学会), 49-2, pp. 77-89, 2004/3
- 福本康之「仏教界における初期洋楽受容——洋楽の位置づけを中心に——」『阪大音楽学報』(大阪大学), 2, pp. 166-150, 2004/3
- 福本康之「それは伝道のための音楽だったのだろうか?——仏教界における初期洋楽受容をめぐる——」『佛教音楽』(浄土真宗本願寺派教学伝道センター勤式・仏教音楽研究所), 46, pp. 14-17, 2004/3
- 福本康之「戦前のもうひとつのムーブメント——江崎小秋と日本佛教童謡協會(二)——」『佛教音楽』(浄土真宗本願寺派教学伝道センター勤式・仏教音楽研究所), 45, pp. 20-25, 2003/4

(演劇学)

- 尾本頼彦「『花伝』物学条々の「舞かがり」——増補との関連とそれが意味するもの——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 6, pp. 28-51, 2003/12
- 川上孝也「『花咲傳』を読む——近世狂言への視座——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 6, pp. 52-77, 2003/12
- 菊池あずさ, Shintoku-maru ——from the Tenjo-sajiki to Ninagawa Yukio——『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 6, pp. 227-240, 2003/12
- 木下耕介「二元論への挑戦——市街劇『人力飛行機ソロモン』を中心に——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 6, pp. 186-203, 2003/12
- 木下耕介「人物造形の方法——古典的物語映画受容における人物の構築について——」『映像学』71, pp. 50-68, 2003/11
- 澤野加奈「世阿弥における物狂能の展開——「放下」「遊狂」「物狂」の語義の検討から——」『藝能史研究会』, 163, pp. 18-30, 2003/10
- 田中みどり「寺山修司における「童話」の存在——『はだかの王様』を中心に——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 6, pp. 166-178, 2003/12
- 橋場夕佳「観世大夫元章と『関寺小町』——『元章手沢本』習十番の書入をめぐる——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 6, pp. 119-127, 2003/12
- 藤元陽「寺山演劇の集大成『レミング』——改訂の意図から見る——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 6, pp. 217-226, 2003/12
- 正木喜勝「出会いの偶然性を想像力によって組織すること——寺山修司の演劇論を読む——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 6, pp. 204-216, 2003/12

- 柘井智英「英国流ブレヒトの形成と発展におけるウィリアム・ガスキルの役割」『フィロカリア』21, pp. 35-67, 2004/3
- 柘井智英「寺山修司『毛皮のマリー』の現実と非現実」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 6, pp. 179-185, 2003/12
- 横田洋「シナリオライターとしての寺山修司——『乾いた湖』の分析を中心に——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), 6, pp. 154-165, 2003/12

(2) 口頭発表

【2002 年度】

(音楽学)

- 小川はるか「武満徹の《Seasons》(1970)——コラボレーションの親密化——」日本音楽学会中部支部第 72 回例会, 名古屋市立大学, 2002/6/29
- 近藤睦「シンポジウム 音楽教育と地域文化」日本音楽教育学会 2002 年度第 2 回地区例会, 日本音楽教育学会, 京都女子大学, 2003/3/15
- 近藤睦「アーティストが街に学校に——アメリカの場合——」日本アートマネジメント学会, 大阪ビジネスパーク, 2002/7/1
- 近藤睦ほか「地方における公共文化ホール運営の政策分析——福井県を中心として——」日本公共政策学会, 関西大学, 2002/6/8
- 高岡(黄木)千寿子「ペンデレツキ《ウトレニア》——西方と東方の狭間に——」日本音楽学会中部支部第 72 回例会, 名古屋市立大学, 2002/6/29
- 谷正人「イメージ上で鳴り響くうた——イラン伝統音楽における読譜行為を通して——」東洋音楽学会第 53 回大会, 東京藝術大学, 2002/10/13
- 谷正人「『並び, 続く』旋律グーシェ——イラン伝統音楽のラディーフにみる有機的構造——」国立民族学博物館 2002 年度共同研究「イスラーム世界の音文化と表演文化の研究——インターアーツ理論による——」第 1 回研究会, 国立民族学博物館, 2002/6/4
- 中村真 “Janacek's case: the ‘fear of novelty’ and his earliest folk music studies”. (“Horror novitatis”): The International Musicological Colloquium, Brno, At the Moravian Museum, Brno, 2002/10/1
- 袴田麻祐子「流行歌からみる昭和初期の西洋イメージ」日本ポピュラー音楽学会関西地区 2002 年度第 3 回例会, 関西大学, 2002/6/22
- 福本康之「明治期の仏教界における洋楽の位置づけ」日本音楽学会関東支部第 301 回定例研究会, 国立音楽大学, 2003/2/8
- 牧野淳子「竹を素材とした音楽づくり——事例報告とワークショップ——」日本音楽教育学会第 7 回音楽教育ゼミナール, くらしき作陽大学, 2002/9/7
- 山口篤子「日本における合唱活動の形成と展開——関西・アサヒコーラスを中心に——」日本音楽学会関西支部第 302 回例会, 和歌山大学, 2002/7/6
- 山口篤子「昭和初期の関西における合唱活動——宝塚交響楽団との関連を中心に——」第 33 回現代文化研究会, 阪急西宮スタジアム会議室, 2002/6/15
- 山田高誌「変容するナポリの喜劇的オペラ——18 世紀中期のレパートリと、台本の“笑い”から——」日本音楽学会関西支部第 302 回例会, 和歌山大学, 2002/7/6

(演劇学)

- 尾本頼彦「『花伝』の増補再検——「問答条々」第 9 条の「花」の論の質と要注意語——」六麓会例会, 神戸市勤労会館 / 兵庫県神戸市, 2003/2/2
- 尾本頼彦「世阿弥の老体能の後ジテの老若再検」能楽学会世阿弥忌セミナー, 能楽学会, 奈良県経済倶楽部 / 奈良県, 2002/8/8
- 尾本頼彦「『奥義』と『別紙口伝』——その戦後間毛糸世阿弥能楽論の展開——」芸能史研究会大会, 芸能史研究会, キャンパスプラザ京都 / 京都府京都市, 2002/6/9

- 木下耕介「住民参加による舞台創造～継続のための仕組みを探る」表演藝術ワークショップ・調査研究発表会（財団法人兵庫県芸術文化協会芸術文化センター推進室主催事業），兵庫県民会館／兵庫県神戸市，2003/1/24
- 木下耕介「古典的劇映画の物語理解と人物の構築」日本映像学会関西支部会，日本映像学会，関西学院大学／兵庫県西宮市，2002/12/14
- 澤野加奈「見物と劇場〈伝統演劇〉」日本演劇学会コロキウム 2002，日本演劇学会，平安会館／京都府京都市，2002/12/8
- 澤野加奈「世阿弥の「鬼」再検」能楽学会世阿弥忌セミナー，能楽学会，奈良県経済倶楽部／奈良県，2002/8/8
- 澤野加奈「世阿弥伝書にみる鬼の能」六麓会例会，神戸市勤労会館／兵庫県神戸市，2002/4/14
- 中尾薫「明和改正謡本と田安宗武——新作能《梅》と脇能をめぐって——」能楽学会大会，早稲田大学／東京都，2003/3/16
- 中尾薫「明和改正謡本と田安宗武——新作能《梅》と脇能をめぐって——」六麓会例会，神戸市勤労会館／兵庫県神戸市，2003/3/9
- 橋場夕佳「明和改正謡本の研究——『伊勢物語』と能の関わりをめぐって——」六麓会例会，神戸市勤労館／兵庫県神戸市，2003/2/2
- 長谷川浩子「見物と劇場」日本演劇学会コロキウム 2002，日本演劇学会，平安会館／京都府京都市，2002/12/8
- 正木喜勝「役者と劇団〈新劇〉」日本演劇学会コロキウム 2002，日本演劇学会，平安会館／京都府京都市，2002/12/8
- 正木喜勝「村山知義の演劇への影響」日本社会文学会月例会，日本社会文学会，早稲田大学／東京都，2002/11/16
- 正木喜勝「東京左翼劇場の理論と実践——『全線』初演の上演分析——」近現代演劇研究会，日本演劇学会，大阪大学／大阪府豊中市，2002/5/18
- 【2003年度】**
- (音楽学)**
- 今田健太郎「活動写真興行の成立と西洋音楽」東洋音楽学会第54回大会，エリザベト音楽大学，2003/10/26
- 小石かつら「旅する作曲家：Felix Mendelssohn Bartholdy(1809-1847)のロンドン演奏旅行」第54回美学学会全国大会「若手美学研究者フォーラム」成城大学 2003/10/12
- 岡村睦「越境する音楽——istanpittaに見るイスラム的要素から——」第54回美学学会全国大会「若手美学研究者フォーラム」成城大学，2003/10/12
- 川端美都子「アルベルト・ヒナステラの作品にみるパンパの表象」東洋音楽学会西日本支部第214回定例研究会，国立民族学博物館，2003/6/14
- 川端美都子「アルベルト・ヒナステラの作品にみるパンパの表象」日本音楽学会第306回関西支部例会，大阪市立大学文化交流センター，2003/5/31
- ジブコバ・ステラ(Zhivkova Stella) "Figurative elements in koto and bunraku music and their analogues in related forms of Japanese culture", Australia Music-Culture-Society: Symposium in memory of John Blacking, University of Western Australia, 2003/7/9
- ジブコバ・ステラ(Zhivkova Stella) "Past, Tradition, Identity: The Japanese Case", UK Annual conference of the British Forum for Ethnomusicology, University of Bangor, 2003/5/2
- 谷正人「伝統音楽保存普及センターの目指した知識観・教育観」2004年イラン研究者集会，東京外国語大学，2004/3/27
- 谷正人「イラン音楽の charkh ——その演奏形式と楽曲構造——」関西イラン研究会第4回研究会，大阪外国語大学附属図書館デジジョンルーム，2004/1/10
- 谷正人「『語りの文化』圏としてのイラン——音楽に反映されるオーラリティ——」日本音楽学会第54回全国大会，神戸大学，2003/11/9
- 谷正人「イラン伝統音楽(即興演奏)におけるオーラル的性質」2003年度イラン研究会，大阪外国語大学記念会館，2003/4/1
- 沈金雲「劉北茂と劉天華の二胡独奏曲の比較」劉北茂誕生百周年学術討論会，中国中央音楽学院，2003/9/25
- 筒井はる香「ナネット・シュトライヒャーの肖像——音楽史学への新たな問いかけ——」待兼山藝術学会研究発表会，大阪大学Σホール，2003/4/12
- 袴田麻祐子「パリとの距離感——宝塚・白井鐵造のレビューを例に——」京都大学人文学研究所「日仏文化交渉の研究」，京都大学人文学研究所，2003/11/10

袴田麻祐子「現地調査報告：1930年前後の資料から見るパリ・ミュージックホール」現代文化研究会，西宮 ACTA，
2003/6/14

山口篤子「唱歌教育の変質——正しい歌い方をめぐって——」洋楽文化史研究会第23回例会，六甲 RCN ホール，
2003/10/25

(演劇学)

尾本頼彦「『花修』と『別紙口伝』——その先後関係と世阿弥能楽論の展開——」六麓会例会，神戸市勤労会館／兵庫県
神戸市，2003/9/21

尾本頼彦「世阿弥の女体神能——《箱崎》《鶴羽》の後ジテの持ち物について——」日本演劇学会全国大会，関西外国語
大学／大阪府，2003/5/24

菊池あずさ「何も見えない目の物語：蜷川幸雄演出『リア王』ロンドン&ストラットフォード公演を巡って」日本演劇
学会研究集会，成城大学／東京都，2003/12/7

澤野加奈「男物狂能の展開」芸能史研究会例会，芸能史研究会，キャンパスプラザ京都／京都府京都市，2003/5/9

澤野加奈「世阿弥の物狂能」待兼山芸術学会，大阪大学Σホール／大阪府豊中市，2003/4/12

田中みどり「アーニー・パイル劇場——進駐軍慰安専用劇場としての10年——」近現代演劇研究会，日本演劇学会，大
阪大学／大阪府豊中市，2003/5/10

中尾薫「田安家と明和改正謡本——田安家旧蔵版本番外謡本の書込みをめぐって——」六麓会例会，神戸市勤労会館／兵
庫県神戸市，2003/11/9

正木喜勝「『心座』時代の村山知義作品の上演分析」日本演劇学会全国大会，関西外国語大学／大阪府，2003/5/25

(3)その他(書評・翻訳など)

【2002年度】

(音楽学)

今田健太郎[演奏会評]「オーバス・ワン演奏会(いずみホール，2003/1/22)」『関西音楽新聞』(関西芸術)，2003/3/1

今田健太郎[演奏会評]「上塚憲一 ベートーヴェン チェロ・ソナタ全曲演奏会(神戸新聞松方ホール，2002/10/25)」『関
西音楽新聞』(関西芸術)，2002/12/1

今田健太郎[演奏会評]「田辺良子 ヴァイオリン・リサイタル(イシハラホール，2002/5/1)」『関西音楽新聞』(関西芸術)，
2002/6/1

今田健太郎[書評]「阿部勘一，細川周平，塚原康子，東谷護，高澤智昌共著『プラスバンドの社会史』青弓社」『JASPPM
NEWSLETTER』(日本ポピュラー音楽学会)，52，2002/5

今田健太郎[事典項目]"Film and Animation Music in Jappan" in Garland Encyclopeddia of World Music Volume 7:
East Asia: China, Japan, and Korea. (New York: London: Routledge, 2002), pp. 749-751.

川端美都子[演奏会プログラム]「フェニックスホール・エヴォリューションシリーズアルベルト・ヒナステラ没後30周
年記念コンサート(フェニックスホール，2003/2/12)」

近藤睦「大学によるアウトリーチ活動の可能性」『Theatre & Policy』(シアタープランニングネットワーク)，13，pp. 1-2，
2002/10

近藤睦[演奏会評]「日本の音フェスティバル(大阪国際会議場，2002/8/2-3)」『邦楽ジャーナル』(邦楽ジャーナル)，188，pp.
42-47，2002/9

近藤睦「アメリカの学校教育における音楽家活用」『季刊 音楽文化の創造』(音楽文化創造)，25，pp. 82-83，2002年夏

近藤睦「地域と手をつなぐ邦楽教育の実例 地域と手をつなぐために 活動の方法」『邦楽箏(こと)始め』(カワイ出版)，pp.
170-172，2002/4

ジブコバ・ステラ(Zhivkova Stella) [翻訳]"A Concert of Takarazuka Grand Opera Orchestra on September 20th, 2002"
submitted, 2003/3/6

白石奏人[演奏会評]「フランス国立リヨン・コンセルバトワール室内管弦楽団(神戸新聞松方ホール，いずみホール，市川
町文化センターひまわりホール，東条町文化会館コスミックホール，川西市みつなかホール，2003/2/25～2003/3/2)」

- 『表演芸術 兵庫県芸術文化協会文化センター事業調査研究報告書』(兵庫県芸術文化協会文化センター), 11, pp. 34-38, 2003/3
- 白石奏人[演奏会評]「表演芸術ワークショップ 日本の雅楽とインド音楽——雅なるその拍子とリズム——(西宮市プレラホール, 2003/2/14)」『表演芸術 兵庫県芸術文化協会文化センター事業調査研究報告書』(兵庫県芸術文化協会文化センター), 11, pp. 53-54, 2003/3
- 白石奏人[演奏会評]「とっておきの室内楽(やしろ国際学習塾 L.O.C ホール, 2003/1/14)」『表演芸術 兵庫県芸術文化協会文化センター事業調査研究報告書』(兵庫県芸術文化協会文化センター), 11, p. 26, 2003/3
- 白石奏人[演奏会評]「バロックからモーツァルトまで——バロック楽器とモダン楽器の響演——(神戸新聞松方ホール, 2002/11/22)」『表演芸術 兵庫県芸術文化協会文化センター事業調査研究報告書』(兵庫県芸術文化協会文化センター), 11, pp. 22-23, 2003/3
- 白石奏人[演奏会評]「オランダ「プリンセス・クリスティーナ・コンクール」優秀賞獲得者コンサートツアー兵庫演奏会(兵庫県立美術館「芸術の館」ミュージアムホール, 2002/10/26)」『表演芸術 兵庫県芸術文化協会文化センター事業調査研究報告書』(兵庫県芸術文化協会文化センター), 11, p. 39, 2003/3
- 白石奏人[演奏会評]「モーツァルト!も一つあると!! MOZART!!! (宝塚市立文化施設ベガ・ホール, 2002/10/4)」『表演芸術 兵庫県芸術文化協会文化センター事業調査研究報告書』(兵庫県芸術文化協会文化センター), 11, pp. 18-19, 2003/3
- 白石奏人[演奏会評]「佐渡裕指揮京都市交響楽団特別演奏会(神戸国際会館こくさいホール, 2002/9/8)」『表演芸術 兵庫県芸術文化協会文化センター事業調査研究報告書』(兵庫県芸術文化協会文化センター), 11, pp. 16-17, 2003/3
- 白石奏人[演奏会評]「朝比奈隆追悼公演 永遠の朝比奈隆——朝比奈隆メモリアル・コンサート——(神戸国際会館こくさいホール, 2002/7/21)」『表演芸術 兵庫県芸術文化協会文化センター事業調査研究報告書』(兵庫県芸術文化協会文化センター), 11, p. 59, 2003/3
- 白石奏人[演奏会評]「佐渡裕 ヤング・ピープルズ・コンサート(パルナソスホール, 和田山町文化会館大ホール, やしろ国際学習塾(L.O.C ホール), 丹波の森公苑ホール, 西宮市民会館(アミティホール), 2002/7/12-17)」『表演芸術 兵庫県芸術文化協会文化センター事業調査研究報告書』(兵庫県芸術文化協会文化センター), 11, pp. 14-15, 2003/3
- 白石奏人[演奏会評]「小澤征爾音楽塾ひょうご特別演奏会(三木市文化会館, 2002/5/22)」『表演芸術 兵庫県芸術文化協会文化センター事業調査研究報告書』(兵庫県芸術文化協会文化センター), 11, pp. 12-13, 2003/3
- 白石奏人[演奏会評]「舞台芸術鑑賞セミナー『スポレート実験オペラ劇場』(新神戸オリエンタル劇場, 2002/4/18)」『表演芸術 兵庫県芸術文化協会文化センター事業調査研究報告書』(兵庫県芸術文化協会文化センター), 11, pp. 47-48, 2003/3
- 谷正人[演奏会評]「イランの詩と音楽(神戸新聞松方ホール, 2002/7/19)」『表演芸術 兵庫県芸術文化協会文化センター事業調査研究報告書』(兵庫県芸術文化協会文化センター), 11, pp. 44-46, 2003/3
- 橋田勲[実演]「変容する琵琶 兵庫県芸術文化協会 芸術文化センター推進室 表演芸術ワークショップ(神戸市立こうべまちづくり会館ホール, 2002/11/8)」
- 福本康之[演奏会評]「第 11 回世界仏教音楽祭(東京築地本願寺, 2002/12/6)」『佛教音楽』(浄土真宗本願寺派教学伝道センター勤式・仏教音楽研究所), 45, p. 28, 2003/3
- 福本康之「ベートーヴェン 2003[連載エッセイ]」『Jupiter』(いずみホール), Vol.1-6, pp. 78-83, 2003/1-11(隔月刊)
- 福本康之「インタビュー 伊藤完夫氏を囲んで」『佛教音楽』(浄土真宗本願寺派仏教音楽研究所), 44, pp. 4-9, 2002/4/1
- 福本康之「戦前のもうひとつのムーブメント——江崎小秋と日本佛教童謡協會(1)——」『佛教音楽』(浄土真宗本願寺派仏教音楽研究所), 44, pp. 10-14, 2002/4
- 前田けい子「箏の『改作』の近現代史」『邦楽箏(こと)始め』(カワイ出版), pp. 52-56, 2002/4
- 前田けい子「地域と手をつなぐ邦楽教育の実例 大阪府下の事例 堺市立浜寺小学校の場合」『邦楽箏(こと)始め』(カワイ出版), pp. 165-169, 2002/4
- 山口篤子[演奏会プログラム]「池田室内合唱団第 11 回定期演奏会(みつなかホール, 2002/11/7)」
- 山口篤子[演奏会プログラム]「池田混声合唱団秋のコンサート(池田市民文化会館, 2002/9/14)」
- 山口篤子[演奏会プログラム]「千里バツハ合唱団創立 20 周年記念第 14 回演奏会(いずみホール, 2002/7/20)」

- 山口篤子[演奏会プログラム]「クラシック音楽家振興会推薦コンサート vol.30(豊中アクアホール, 2002/7/4)」
- 山口篤子[演奏会プログラム]「池田室内合唱団第 10 回定期演奏会(みつなかホール, 2002/4/20)」
- 山崎茂雄, 近藤睦(協力)[研究報告]「地方における公共ホール運営の政策分析——福井県を中心として——」(福井県立大学地域経済研究所), 2003/3/1
- 山田高誌[演奏会プログラム]「定期公演:「チマローザ没後 200 周年の後に、甲山交響楽団・第 27 回定期演奏会」(アイフォニックホール, 2002/9/7)」

(演劇学)

- 團夕紀子『仏教版画展——地獄・極楽を中心に——』解説(分担執筆)神戸女子大学国文学研究室・古典芸能研究センター, 2002/11
- 團夕紀子「翻刻 八幡太郎旗揃」『歌舞伎・浄瑠璃稀本集成』演劇研究会編, 八木書店刊, 2002/5
- 團夕紀子「解題 八幡太郎旗揃」『歌舞伎・浄瑠璃稀本集成』演劇研究会編, 八木書店刊, 2002/5
- 田中みどり「ジーンズをはいたモーツァルトの挑戦——ミヒャエル・クンツェの場合——」『まくあい』21, p. 5, 2003/1
- 中尾薫「回想にとどまてはいけない『上方風流まつり』」『まくあい』21, p. 3, 2003/1
- 藤元陽「北野武が描く愛の形——『Dolls』を見て——」『まくあい』21, p. 6, 2003/1

【2003 年度】

(音楽学)

- 井手口彰典「第 2 期報告 バレエ・パントマイム上演まで 3.電子音楽作成について」『大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」映像人文科学 2003 年度報告書 ヨーゼフ・ラスカ《父の愛》』(大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」), pp. 33-35, 2004/3
- 今田健太郎[演奏会評]「いずみシンフォニエッタ大阪 第 6 回定期演奏会(いずみホール, 2003/7/12)」『関西音楽新聞』(関西芸術), 2003/9/1
- 今田健太郎[演奏会評]「林裕チェロリサイタル(京都府立府民ホール《アルティ》, 2003/4/18)」『関西音楽新聞』(関西芸術), 2003/6/1
- 小石かつら[演奏会プログラム]「安田伸子ピアノリサイタル(ザ・フェニックスホール, 2003/5/25)」
- 岡村睦「第 1 期報告 オーケストラ上演まで 1.オーケストラ上演までの道のり」『大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」映像人文科学 2003 年度報告書 ヨーゼフ・ラスカ《父の愛》』(大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」), pp. 7-10, 2004/3
- 岡村睦「第 1 期報告 オーケストラ上演まで 5.『脚本と楽譜から身体と音楽へ』橋渡しとしての字幕」『大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」映像人文科学 2003 年度報告書 ヨーゼフ・ラスカ《父の愛》』(大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」), pp. 15-18, 2004/3
- 岡村睦「第 2 期報告 バレエ・パントマイム上演まで 2.オーケストラ上演からバレエ・パントマイム上演までの道のり」『大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」映像人文科学 2003 年度報告書 ヨーゼフ・ラスカ《父の愛》』(大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」), pp. 28-32, 2004/3
- 川端美都子[演奏会プログラム]「アルゼンチン経済復興支援 オール・ヒナステラ・プログラムコンサート(カザルスホール, 2003/11/22)」
- ジブコバ・ステラ(Zhivkova Stella)[翻訳]"Laska:First performance of Unpublished Work -- Reassessment and Evaluation of the Pioneer of Symphonic Music in Kansai" submitted, 2003/7/9
- 白石奏人[演奏会プログラム]「カーティス音楽院室内管弦楽団 ヴィヴァルディ《協奏曲集「四季」》・モーツァルト《交響曲第 29 番》(神戸, 加西, 八鹿, 明石, 大阪, 2004/3/5-11)」
- 谷正人[実演]「イラン音楽の楽しみ」『北海道大学文学研究科主催シンポジウム「アジアの伝統的パフォーマンスアートを楽しむ(北海道大学文系講義棟, 2003/6/7)」
- 沈金雲[実演]「二胡演奏と歌, JICA 兵庫国際協力フェスティバル 2003(JICA 兵庫, 2003/12/6)」
- 沈金雲[実演]「二胡演奏, 大正琴の集い丹波支部(大屋町ホール, 2003/6/15)」

- 中村真[演奏会プログラム]「東京交響楽団第 508 回定期演奏会 ドヴォルザークとスラヴ音楽(サントリーホール, 2003/11/8)」
- 福本康之「第 1 期報告 オーケストラ上演まで 2. オーケストラ演奏用楽譜の作成について」『大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」映像人文科学 2003 年度報告書 ヨーゼフ・ラスカ《父の愛》』(大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」), pp. 11-12, 2004/3
- 福本康之[放送:企画・台本]NHK-FM「あさのバロック」日本放送協会, 2004/1/12-16, 2004/2/16-20, 2004/3/15-19
- 福本康之[CD解説]「カルメン組曲(ビゼー 名管弦楽曲集)」東芝EMI, TOCE-59745, 2004/2
- 福本康之[CD解説]「ペール・ギュント組曲(北欧管弦楽曲集)」東芝EMI, TOCE-59746, 2004/2
- 福本康之[CD解説]「フォーレ:夢のあとに他」東芝EMI, TOCE-59748, 2004/2
- 福本康之[演奏会プログラム]「クラシック音楽家振興会推薦コンサート No. 31(豊中市立アクア文化ホール, 2004/1/16)」
- 福本康之[CD解説]「フィガロの結婚序曲(モーツァルト序曲&管弦楽曲集)」東芝EMI, TOCE-59740, 2004/1
- 福本康之[CD解説]「牧神の午後への前奏曲(フランス管弦楽曲集)」東芝EMI, TOCE-59741, 2004/1
- 福本康之[CD解説]『テンシュテット/マーラー:交響曲第 1 番《巨人》&第 2 番《復活》』東芝EMI 株式会社, TOCE-59725/59726, 2003/12
- 福本康之[CD解説]『フルトヴェングラー/ベートーヴェン:交響曲第 9 番《合唱付き》』東芝EMI 株式会社, TOCE-59721, 2003/12
- 福本康之[CD解説]『カラヤン/シューベルト:交響曲第 8 番《未完成》他』東芝EMI 株式会社, TOCE-59714, 2003/11
- 福本康之[CD解説]『ケンペ/ツァラトゥストラはかく語りき(R.シュトラウス管弦楽曲集)』東芝EMI 株式会社, TOCE-59718, 2003/11
- 福本康之[CD解説]『プレヴィン/ガーシュウィン:《ラプソディ・イン・ブルー》他』東芝EMI 株式会社, TOCE-59717, 2003/11
- 福本康之[企画・台本構成]NHK-FM『あさのバロック』日本放送協会, 2003/10/27-31, 11/17-21 放送分
- 福本康之[CD解説]『仏教讃歌 V——一乗の道——』KOESI Publishing Company, KOBM-1050, 2003/10
- 福本康之[CD解説]『シフラ/ラ・カンパネラ(リスト:ピアノ名曲集)』東芝EMI 株式会社, TOCE-59703, 2003/10
- 福本康之[CD解説]『パールマン/ツィゴイネルワイゼン(ヴァイオリン名曲集)』東芝EMI 株式会社, TOCE-59714, 2003/10
- (演劇学)**
- 木下耕介「パーティーが終わった後で——『めぐりあう時間たち』の見事な翻案——」『まくあい』22, p. 6, 2003/9
- 田中みどり「観客の声からの演目づくり——伝統と新しさの間での模索——」『まくあい』22, p. 8, 2003/9
- 團夕紀子「近松門左衛門 三百五十年」図版解説(分担執筆)近松祭企画・実行委員会編, 和泉書院刊, 2003/12
- 團夕紀子「池田文庫蔵『芝居番付目録』の見直しとデータベース化について」『館報池田文庫』22, 2003/4
- 藤元陽「顔見世興行における『達陀』上演の意味」『まくあい』22, p. 7, 2003/9
- 正木喜勝「『エレファント・パニッシュ』によるサイモン・マクバーニーからのメッセージ」『まくあい』22, p. 4, 2003/9
- 横田洋「映画『スパイ・ゾルゲ』のドラマトウルギー」『まくあい』22, p. 5, 2003/9

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002 年度 PD: 0 名 DC2: 0 名 DC1: 0 名 (計 0 名)

2003 年度 PD: 0 名 DC2: 0 名 DC1: 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部：0名 大学院：3名（計3名）

2003年度 学部：1名 大学院：1名（計2名）

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度～2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002年度～2003年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3 名

2002年度：1名 2003年度：2名

<内訳> 技術職 2名 教職 1名

8. 客員研究員等の受け入れ状況

1名

9. 外国人研究者の受け入れ状況

3名

10. 刊行物

2002年度 『阪大音楽学報』創刊号

『演劇学論叢』第5号

『まくあい』第21号

2003年度 『阪大音楽学報』第2号

『演劇学論叢』第6号

『まくあい』第22号

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

民族藝術学会事務局

2002年度・2003年度

日本演劇学会事務局

2002年度・2003年度

近現代演劇研究会事務局

2002年度・2003年度

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

大阪大学 21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」において、ベトナム民族音楽の調査・研究を行い、同時にヨーゼフ・ラスカ作曲のパントマイム付音楽作品《父の愛》を総合上演した。

近現代演劇研究会

2002年5月例会、7月例会、10月例会、12月例会

2003年2月例会、5月例会、7月例会、10月例会、11月例会

2004年1月例会

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

(音楽学)

本専門分野は、1999年度より大学院重点化の対象となり、総長裁量の学内研究教育特別経費による、2教官(山口修教授(当時)及び根岸一美教授)の海外調査研究・資料収集をはじめ、フィールドワークと資料探索・解釈を同時に推し進める研究を展開してきた。さらに科学研究費補助金による研究を推し進め、国際的な研究上の連携も強化してきた。また、2002年度には、山口が「21世紀COEプログラム」の課題として採択された「インターフェイスの人文学」の研究推進者の一人として、「映像人文学」を提唱し、ベトナムにおける少数民族の音楽行動を映像ドキュメントとすることを通じてさまざまな国際的連携のもとでの研究を展開したほか、根岸も「ヨーゼフ・ラスカ《父の愛》——20世紀初頭におけるバレエ・パントマイム芸術の再構築に向けて」というテーマのもとに研究分担者となり、この作品の世界初演をめざして、他大学との共同研究を推し進めた。なお、この間、2003年度においては、定年退官となった山口(名誉教授)が、COE担当の特任教員として、客員教授に迎えられ、引き続き研究の推進に尽力した。以上の段階において、両研究グループが直接的な意味での共同研究のかたちで一体化するには到らなかったことは率直に認めなければならない。が、ともに研究を文化活動の実践と結びつけてそれぞれ展開し得たことは、やはり評価されるに値するものと考えている。

(演劇学)

本研究室の教育活動は、2人の専任教員と毎年2~3名の非常勤講師とで行なわれている。専任教員は能樂を中心とする日本伝統演劇の歴史と理論、及び作品分析を中心にすすめている天野文雄教授と、西欧の近代演劇の歴史と理論、作品分析を中心にすすめている永田靖教授との2人の構成である。毎年、演劇史、演劇学、作品講読、外国語講読、などの授業を5コマ前後は担当して教育に当たっている。学部生は当該年度の2年間で17名、大学院学生は前期後期合わせて15名の教育に当たってきている。とりわけ大学院学生の教育効果は、博士論文2本、学会誌3本、紀要20本、機関誌など9本、などの計34本の論文などの掲載の本数に、その活発さが示されている。また、学会発表なども活発に指導し、国内学会10、国内研究会12の、計22回の研究発表を行っている。その内実は、日本演劇学会、能樂学会などの全国規模の大会や研究集会、また学会の分科会である近現代演劇研究会や映像学会関西支部、また六麓会などの研究会や、兵庫県内の財団での研究発表など多岐にわたるようになり、大学院学生の活動の活発さが窺われる。ことに日本演劇学会と能樂学会への参加の度合いは著しく、本研究室が学会活動の主要な部分を担いつつあることが分かる。難をいえば、提出された博士論文が2本であったのは、博士後期学生の数からすればいささか少ないように思われるのであるが、現在博士後期の1年生、2年生が中心であるので、今後提出されていくものと思われる。もう一つの問題は、大学院学生の多くは他大学からの入学者で、本学出身者がやや少ないことだろう。近年の学部学生の志向の変化を考慮にいたした上でも、この事実は認識しておくべきだろうと思われる。大学院学生が増えているにも関わらず、研究者として就職した者が2名に留まっているという事情も影響あるのかも知れないが、演劇学という稀少の専攻を考えれば、この数字は健闘していると考えたい。少なくとも、本研究室の大学院修了者に非常勤講師の職がないものではなく、その他の研究費などを併用することで、研究活動を今のところ維持できていることも明記しておきたい。また、学部学生と共に観劇実習、研究上演・ワークショップ、紀要・劇評誌発行、などを行っている。観劇実習は、歌舞伎、能、浄瑠璃、小劇場、新劇、商業演劇などのジャンルから偏りなく、毎年5本の演劇を選択し、上演についての準備勉強を経た後に、観劇し、批評を書かせることで、上演そのものに触れさせる授業として受講者が多い。研究上演は、この2年間は開講していないが、その代わりに公立劇場と提携して、劇場の制作実務を経験させるインターンシップを開始している。2002年度と2003年度に、兵庫県立ピッコロ劇場の定期公演に研修生として参加して、演劇学の実践的な展開、地域の演劇学の展開に向けて開いている。大学院生も着実に増え、現在学部学生を含めて40名ほどの学生が在籍して、それぞれの研究活動を行っている。また社会人大学院も5名前後在籍し、社会に開かれた大学院となっている。

13-2 研究活動

(音楽学)

本研究室においては、学部学生、大学院生はもとより、研究生、科目等履修生、さらには博士号取得志願の外部研究者への指導において、多面にわたり協力関係を推進し、特に、大学院の演習(院ゼミ)については、2人で共同に担当し、全大学院生の研究内容、進展状況を常に把握するとともに、研究の幅を広げ、高度な議論に耐えうるものとするに努めてきた。2004年4月には、助教授に伊東信宏が着任し、かつ専任の助手として上野正章を迎え、スタッフの体制として現在可能と考えられる十全の形が復活した。それとともに、教育の体制についても見直しを行い、学生の課題や方法に柔軟に対応しつつ、両教員がそれぞれの独自の教育方法・意識を重んじながら、研究室としての総合的な展開を目指している。本研究室は伝統的に博士号授与にむけて積極的に取り組んできたが、博士号を得ても、ふさわしい活動の場をなかなか与えられていない研究者たちの数は増える一方である。この問題の解決が、学問の推進とあわせて、本研究室の最大の課題であるといっても過言ではない。音楽学という学問分野の存在を広く社会にアピールし、事態の改善と打開にむけてねばり強く働きかけてゆく必要があることと認識している。

(演劇学)

天野文雄教授、永田靖教授とも、いずれも多くの論文や著書、また学会等への出席、会議運営などきわめて活発に研究活動を行なっている。本研究室には、天野が副会長、永田が事務局長を勤める日本演劇学会の事務局がおかれている。またその分科会の近現代演劇研究会は実質的に永田が主宰して、毎年5回ほどの研究会を行なっている。また天野教授は能楽学会、芸能史研究会、民族芸術学会などの役員として中心的メンバーであり続けており、それぞれの例会運営、個別のフォーラムなどの企画に中心的に関わっており、大学院学生などに対して、研究の面で学界に接する貴重な場を提供していると思われる。また科研費、COEなどを通じて、学内外の研究会が増えていることも研究活動を活性化させることに通じている。天野、永田ともに、複数の科研グループの分担者、また代表者となって研究会や研究を組織しており、これらの成果は科研費成果報告書ばかりではなく、個別の論文や学会発表に反映されている。これらは大学院学生の研究活動の活性化につながっており、その評価は上記「教育活動」において触れた。COEについても、「映像人文学」「モダニズムと中東欧の芸術・文化」などの研究グループの事業推進者として研究活動をリードしており、同時にそれは各種の授業に連結されて(例えば「芸術とメディア」など)教育活動と一体化を図っている。2004年度から大林のり子助手が北海道浅井学園大学に転出しており、引き続き助手ポストを埋めることができなかったのは、この少人数の研究室としては痛手といわざるを得なかったが、専任教員と大学院学生の研究活動はむしろ活発さを増しているようにも見える。これらの研究成果の発表活動である紀要も、毎年欠かさず刊行しており、今年度は第7号を編集準備中である。また劇評誌「まくあい」も毎年2冊を刊行し、通算22号を数えるに至っている。これらのことを通して、日本伝統演劇と西欧近代演劇と細分化していくのではなく、広く演劇としてトータルに捉える視点を軸に、社会の中の営みとして理解する方向性も大切にしている。このようにここ2年間の研究と教育を見渡して見ると今後とも研究活動が活性化していくことは明らかであるように思われる。

III. 教員の研究活動(2002年度～2003年度の過去2年間)

1. 天野 文雄 教授

1946年生。国学院大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)。上田女子短期大学助教授、大阪大学文学部助教授を経て、1996年から現職。専攻：能楽研究。

1-1. 論文

天野文雄「青墓の長は《朝長》の後場まで残っていた」『おもて』80, pp. 4-5, 2004/3

天野文雄「『須田国太郎 能・狂言デッサン』と昭和前期の能楽界」『懷徳堂センター報』pp. 3-18, 2004/2

天野文雄「《老松》の主題と成立の背景——応永二十七年秋冬の義持の大患をめくって——」『演劇学論叢』6, pp. 1-27, 2003/12

天野文雄「大成期の能と公家」『おもて』79, pp. 8-9, 2003/12

- 天野文雄「明和改正謡本と現代の能(1)『演劇学論叢』6, pp. 140-147, 2003/12
- 天野文雄「《女郎花》を読む——その「作意」の把握をめざして——」『The Noh Ominaeshi』pp. 223-240, 2003/9
- 天野文雄「在原寺は『廃墟』にあらず『おもて』78, pp. 6-7, 2003/9
- 天野文雄「世阿弥周辺の能と禅——《維盛》の『紅炉一点の雪』をめぐる——」『紫明』13, pp. 44-47, 2003/9
- 天野文雄「《安宅》《船弁慶》の判官と《海人》の房前などは本来は子方の役にあらず『おもて』77, pp. 8-9, 2003/6
- 天野文雄「世阿弥は佐渡から帰還できたか——『金島書』の成立事情からみた帰還の蓋然性——」『能と狂言』創刊号, pp. 40-52, 2003/4
- 天野文雄「《花月》の禅的趣向『おもて』76, pp. 8-9, 2003/3
- 天野文雄「伏見稻荷大社の能舞台——建造の経緯とその後の歩み——」『朱』46, pp. 2-23, 2003/3
- 天野文雄「《猩々》と応永末年頃の世阿弥周辺の能——とくに《邯鄲》《松虫》との関係をめぐる——」『大槻能楽堂研究公演冊子』pp. 4-5, 2003/2
- 天野文雄「もうひとつの鐘入り——『廻り入り』のこと——」『廣田鑑賞会能冊子』pp. 5-7, 2003/1
- 天野文雄「《合浦》の成立と南北朝合一——明德三年の神璽(勾玉)の京都帰還をめぐる——」福田晃編『伝承文化の展望』pp. 601-612, 2003/1
- 天野文雄「《卒都婆小町》の『ソトワ』と《老松》の『タイウ』」『おもて』75, pp. 6-7, 2002/12
- 天野文雄「足利義持の治世と世阿弥——義持と後小松父子との関係をめぐる——」『演劇学論叢』5, 2002/12
- 天野文雄「明和の改正と『三説物』関係曲の演出——《安宅》《正尊》《木曾》の小書きなどをめぐって——」『演劇学論叢』5, pp. 1-38, 2002/12
- 天野文雄「大蔵道知の手紙」『おもて』74, pp. 8-9, 2002/9
- 天野文雄「住吉社と能——神事と作品から——」『すみのえ』245, pp. 7-28, 2002/7
- 天野文雄「『申楽談儀』の『山と』をめぐる」『おもて』73, pp. 8-9, 2002/6
- 天野文雄「葛原家文書『永正九年献立注文』にみる能」『広報はしもと』p. 10, 2002/6
- 天野文雄「世阿弥時代の地謡と世阿弥の《泰山木》」『国立能楽堂』225, pp. 16-17, 2002/5
- 天野文雄「《菅丞相》と『天神の能』——『申楽談儀』第二十二條『面の事』再検——」『《菅丞相》復曲公演パンフレット』pp. 5-6, 2002/4

1-2. 著書

天野文雄『現代能楽講義——能と狂言の魅力と歴史についての十講——』大阪大学出版会, 2004/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 天野文雄「野上豊一郎著『太郎冠者・山伏行状記』」『学燈』100, pp. 38-41, 2003/4
- 天野文雄「近年の芸術学における能楽の研究——ささやかな『越境』の試み——」『芸術学の日本近代』pp. 47-53, 2002/9
- 天野文雄「転機をむかえた能楽研究——能楽学会成立が意味するもの——」『上方芸能』144, p. 82, 2002/6
- 天野文雄「関西の伝統芸能——21世紀の課題とその国際的な意義——」『関西の伝統芸能——いま・歴史・みらい, 関西アラカルト』11, pp. 3-6, 2002/5
- 天野文雄「能楽の魅力と歴史、そして関西」『関西の伝統芸能——いま・歴史・みらい, 関西アラカルト——』11, pp. 10-12, 2002/5

1-4. 口頭発表

- 天野文雄「世阿弥と元重の確執をめぐる諸問題——その始期と経緯を論じて『観世の座』の問題におよぶ——」六麓会, 神戸市勤労会館, 2003/7
- 天野文雄「近世大坂の能と仙助能」懐徳忌(誓願寺), 2003/4
- 天野文雄「《高砂》の主題と成立の背景——応永末年の阿蘇大宮司の上洛と義持の治世をめぐる——」中世文学会秋季大会, 同志社大学, 2003/1

天野文雄「絵画にみる能楽の歴史——玉手菊洲模写『能楽図鑑』をめぐって——」京都市芸術大学, 2002/9

天野文雄「足利義持の治世と世阿弥——義持と後小松父子との関係をめぐって——」六麓会, 神戸市勤労会館, 2002/8

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

天野文雄 第18回観世寿夫記念法政大学能楽賞, 法政大学, 1996/1

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

民族芸術学会・理事	2003年4月～2006年3月
芸能史研究会・委員	2003年4月～2006年3月
日本演劇学会・副会長	2002年4月～2006年3月
能楽学会・委員	2002年4月～2006年3月

2. 根岸 一美 教授

1946年生。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。文学修士。大阪音楽大学専任講師、大阪教育大学助教授・教授、大阪大学文学部教授を経て現職。専攻：音楽学。

2-1. 論文

根岸一美「大阪大学大学院文学研究科音楽学研究室の歩み」『芸術学の日本近代——その歴史と展望——(2000年度～2001年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書)』代表者：神林恒道, pp. 55-66, 2003/3

2-2. 著書

根岸一美編『ヨーゼフ・ラスカ《父の愛》——20世紀初頭におけるバレエ・パントマイム芸術の再構築に向けて——』大阪大学文学研究科, 2004/3

根岸一美, 三浦信一郎編『音楽学を学ぶ人のために』世界思想社, 2004/1

根岸一美『ヨーゼフ・ラスカと宝塚交響楽団(2000年度～2002年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書)』大阪大学大学院文学研究科, 2003/5

ヴォルフガング・ザイフェルト著, 根岸一美訳『ギュンター・ヴァント 音楽への孤高の奉仕と不断の闘い』音楽之友社, 2002/6

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

根岸一美「ギュンター・ヴァント『我が音楽人生 最終回 私は音楽家であって、聖職者ではない!』」『音楽の友』(音楽之友社), pp. 132-135, 2002/6

根岸一美「ギュンター・ヴァント『我が音楽人生 第2回 私は作曲家たちを信じる』」『音楽の友』(音楽之友社), pp. 104-107, 2002/5

根岸一美「ギュンター・ヴァント『我が音楽人生 第1回 音楽は指揮棒だけでは生まれない』」『音楽の友』(音楽之友社), pp. 118-121, 2002/4

2-4. 口頭発表

根岸一美「《7つの Haiku》——ヨーゼフ・ラスカの音楽作品をめぐって——」美学会西部会第 238 回研究発表会, 同志社大学, 2002/6/1

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2000 年度～2002 年度、基盤研究(B)(1)、代表者：根岸一美

課題番号：12410016

研究題目：ヨーゼフ・ラスカと宝塚交響楽団

研究経費：2002 年度 1,200 千円

研究の目的：

本研究は大正時代末期から昭和 10 年代にかけて宝塚少女歌劇(現在：宝塚歌劇)の管弦楽団が本来のレビューのための舞台下での演奏の他に、独自にクラシック音楽の定期演奏会を実施していた事実を歴史的に跡づけるとともに、その創始者であり常任指揮者として中心的な役割を演じたオーストリア人音楽家ヨーゼフ・ラスカ(1886～1964)の活動を彼の創作の面から、また音楽教育者としての面からも探り、相互の活動のなかで当時の関西の西洋音楽文化がどのように醸成されていったかを検証しようとするものである。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

日本音楽学会関西支部監事

2003 年 4 月～2005 年 3 月

3. 永田 靖 教授

1957 年生。1981 年上智大学外国語学部ロシア語学科卒業、1988 年明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士課程単位取得退学。文学修士。日本学術振興会特別研究員、明治大学人文科学研究所客員研究員、鳥取女子短期大学助教授を経て、1996 年から現職。専攻：演劇学。

3-1. 論文

永田靖「孤独の百年——イントロダクションにかえて——」『演劇学論叢』大阪大学大学院演劇学研究室, 5, pp. 148-153, 2003/12

永田靖「日本近代における諸芸術学分野の研究史(演劇学)」『芸術学の日本近代——その歴史と展望——』科学研究費基盤研究(B)(1)報告書, pp. 75-81, 2003/3

永田靖『近現代演技論の実践と分析理論の研究』科学研究費基盤研究(C)報告書, pp. 1-65, 2003/3

永田靖「フセヴォロツキイ＝ゲルングロスと『演劇史』の誕生」『演劇学論叢』大阪大学大学院演劇学研究室, 5, pp. 135-146, 2002/12

永田靖「何を笑わないか」『シアターアーツ』国際演劇批評家協会日本センター, 晩成出版, 16, pp. 57-61, 2002/4

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

永田靖 「ストライキ、あるいは夢の演劇」『まくあい』大阪大学大学院演劇学研究室, 22, p. 1, 2003/10

永田靖 「ノスタルジーの方舟——ソクーロフ『ペテルブルグ幻想』——」『大阪日々新聞』2003/10

永田靖 「劇場と共同体——舞台裏の話——」『ひろば』俳優座劇場, 84, pp. 5-8, 2003/2

永田靖 「劇場と共同体——ファサードの話——」『ひろば』俳優座劇場, 83, pp. 5-8, 2002/10

永田靖 「スタニスラフスキの先駆者たち」『Russian Report』日露演劇交流推進会議, 2, pp. 2-5, 2002/6

永田靖 「劇場と共同体——ホワイエの話——」『ひろば』俳優座劇場, 82, pp. 3-6, 2002/6

3-4. 口頭発表

永田靖 「ロシア演劇史の方法」「比較演劇史の方法」研究会, 那覇市, 2004/3/21

永田靖, 山下純照, 熊谷保行 「日本における演劇教育を議論する——大学教育セクション——」日本演劇学会「演劇と教育」プロジェクト, 近畿大学, 2004/2/28

永田靖 「演劇史記述と記憶」日本演劇学会分科会西洋比較演劇研究会 1 月例会, 成城大学, 2004/1/11

永田靖, 青木孝夫, 渡辺裕, 古井戸秀夫 「日本演劇と文化の横断性」日本演劇学会全国大会シンポジウム, 関西外国語大学, 2003/5/25

永田靖, ヴィクター・マーゴリン, ウェンディ・シュイ・ウォン 「アヴァンギャルドからマンガまで」大 3 階国際デザイン史フォーラム「画像と文字」デザイン史フォーラム, 大阪市立住まい情報センター, 2003/3/8

永田靖, 石田雄一, 安田雅弘, 日々野啓 「前衛演劇の東西・現在過去」日本演劇学会秋の研究集, 成城大学, 2002/12/6

永田靖 「ユダヤ劇場とシャガール」京都市美術館, 2002/6/29

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2002 年度～2004 年度、基盤研究(C)(2)、代表者：永田靖

課題番号：14510063

研究題目：「20 世紀演劇」の誕生と演劇史学の研究

研究経費：2002 年度直接経費 1,500 千円

2003 年度直接経費 1,400 千円

研究の目的：

- ① 本研究は 3 年計画の研究である。従来の演劇研究は各国別の言語域に分けて独自の発展様態をたどる研究が多かった。しかし 20 世紀演劇は 19 世紀までの演劇と、様々な理由で様相を異にしており、「20 世紀演劇」という様式を生み出すに至ったと考えられる。それは 20 世紀に特有の現象、交通網の発達や情報伝達手段の高速化などによって、それまでになく、多くの地域での連鎖によって演劇が形成されている。そのためにこの時代に形成された演劇は幾つかの演劇的文化を共有し、また欧米世界の多くの場所で共有しうる主題を持つことになった。この研究では、その「20 世紀演劇」が誕生し展開する経緯を踏まえながら、「20 世紀演劇」なるものの本質を解明する。
- ② 先に触れたように、現在の演劇研究は当該の言語による各国別の研究が主流であった。それはそれで豊かな成果をもたらしたといえるが、現在の段階で演劇研究がなすべき事は、それらの縦に積みあげられた研究を横断的に調査検討を加えていって、再整理することだろうと思われる。とりわけ 20 世紀には演劇における異文化交流が活発化し、地域的な演劇ではなく、よりグローバルな演劇の形態が探求されている。この研究はそのような演劇の異文化交流のあり方にも視野を向けるもので、まさに現代的な課題を孕んでいると思われる。さらに、この研究では、20 世紀の演劇の誕生に焦点をしばり、横断的に考察していきたい。第 2 には、それは 19 世紀演劇との関係によって考察される必要がある。従来は 19 世紀と 20 世紀とは演劇的に断絶として考えられていたが、19 世紀の広い演劇的土壌の中から 20 世紀的な演劇が誕生してきている。19 世紀との連続の側面から 20 世紀演劇に照明を当てる必要が生じている。第 3 に

は、大衆娯楽演劇との関係の中で 20 世紀演劇の誕生を考える。従来の演劇史演劇学では芸術的な価値を議論する傾向が高く、20 世紀演劇は、芸術のモダニズムという枠組みの中で議論されてきている。しかし 20 世紀演劇には、19 世紀後半期以後の大衆娯楽演劇の諸要素が抜きがたく吸収されており、その側面からの照射が必要とされている。このような研究をなすためには、演劇史研究の渉猟が不可欠となる。演劇の場合には、他の芸術ジャンルと異なって、作品自体は残らない。そのため、過去の作品の研究をする場合には、歴史的研究を基礎に据えねばならない。演劇学は 20 世紀初頭から開花した比較的若い学問であるが、演劇史を研究する場合には、その演劇の史的記述のイデオロギーを検討していかなければならない。20 世紀後半の人文諸学の発達によって、歴史記述の客観的な記述は言わば疑問に付され、歴史的記述もまたイデオロギー的な負荷を備えていることが明らかになっている。そのために、基本的に演劇史の研究は、演劇史学の研究でもある必要がある。この研究が、演劇史学の研究を含まざるをえないのはこのためである。ただ演劇的な事実を回収していくのではなく、その史的事実が記述されているイデオロギーを相対化することなしには、演劇史研究は成り立ち得ない時点に来ているのである。これらの 4 つの点がこの研究を独自のものとするだろう。第 1 に、各国別の演劇研究ではなく、それらを横断的に渉猟して、20 世紀に特徴的だった「20 世紀演劇」的なものの芸術的本質を把握する。第 2 に、それは 19 世紀までの演劇との対極的な視野のもとに考察されることになるだろう。と同時に、第 3 に同時代の大衆娯楽演劇という芸術研究から抜け落ちたジャンルとの連鎖の中で考察される必要がある。そして最後に、従来の演劇史研究のイデオロギーを再検討することになるだろう。

この研究は基本的には演劇研究の分野で書き継がれてきた演劇史研究を根底から洗い直すことになるだろう。例えば、Oscar Brockett や Alladyce Nicoll は 20 世紀後半の演劇史研究を支える演劇史を書き継いできている。Brockett の代表的なものは History of the Theatre. Allyn&Bacon. であるが、これは 1968 年に出版され、世界各国の演劇学科で教科書に採用されることになる演劇史であるが、現在これは 8 版を数えている。あるいは Nicoll の The World Drama は 1949 年に初版された後、改訂を続け、10 版を数えている。が共に各国別の記述に重点がある。この研究は演劇研究の成果を再整理することで演劇の美的特質を解明するものである。現在までのところ、この方向性での研究は、戯曲(ドラマ)研究では一定の成果を見せている。それは近代劇という様式が広く欧米アジアに展開されたために、各国別研究にとらわれず、近代劇の精神を研究者が広く探求するところとなっている。しかし、上演をも含めたこの種の研究は現在までのところそれほど顕著なものではない。というのも、演劇研究においては、基本的には上演研究よりも、戯曲研究が先に行われ、広く成果を見せたからである。上演研究は、どうしても研究対象が戯曲のようにテキストに固定されるのではなく、過去の資料に痕跡がのこされるだけであるので、戯曲の研究と比較すると、進捗が遅いということになる。しかし、現在の演劇研究の深化を見ると、おおよそ上演研究もほぼ揃い始めており、申請者の見るところ、この種の研究は今後多数成果を見せてくるように思われる。この研究はその意味でも新しい試みになるだろう。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

日本演劇学会・理事	2002 年 4 月～現在
同上・事務局長	2002 年 4 月～現在
同上・分科会近現代演劇研究会事務局	2000 年 12 月～現在
同上・関西支部幹事	2000 年 4 月～2003 年 3 月
日本映像学会・理事	2002 年 4 月～現在
同上・関西支部幹事	2002 年 4 月～現在
同上・紀要『映像学』編集委員	2002 年 4 月～現在
同上・国際版紀要 ICONICS 編集委員	2002 年 4 月～現在
日露演劇交流推進会議理事	2002 年 3 月～現在

4. 伊東 信宏 助教授

1960年京都生まれ。大阪大学文学部卒業、同大学院博士課程単位取得退学。文学修士。リスト音楽院、ハンガリー科学アカデミー音楽学研究所などに留学。1993年より大阪教育大学助教授。2004年4月より現職。

4-1. 論文

伊東信宏「《ジプシーの恋》をめぐるスケッチ：オペレッタ研究のために」（2002年度～2003年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書『メロドラマ的思考形式と19世紀ヨーロッパの音楽劇』研究代表者内田正博, pp. 20-32, 2004/2

伊東信宏「楽曲分析を基礎とする研究」根岸一美, 三浦信一郎編『音楽学を学ぶ人のために』世界思想社, pp. 136-148, 2004/1

伊東信宏「音楽の民族主義：研究のためのいくつかのスケッチ」根岸一美, 三浦信一郎編『音楽学を学ぶ人のために』世界思想社, pp. 207-218, 2004/1

伊東信宏「音の『身振り』を記述する：ハイドンのピアノ・ソナタと楽曲分析」岡田暁生編『ピアノを弾く身体』春秋社, pp. 113-136, 2003/3

4-2. 著書

大津留厚, 野村真理, 森明子, 伊東信宏, 岡本真理, 進藤修一『近代ヨーロッパの探求 10：民族』ミネルヴァ書房, 2003/11

伊東信宏『ハイドンのエステルハーゲン・ソナタを読む』春秋社, 2003/2

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

伊東信宏 演奏会評「ポップペン&ヒリヤード・アンサンブル『モリムール』」朝日新聞文化欄, p. 7, 2004/3/3 夕刊

伊東信宏 演奏会評「安藤裕子ピアノ・リサイタル」朝日新聞文化欄, p. 9, 2004/2/4 夕刊

伊東信宏「コダーイ・バルトーク以降から現代までの作曲家」『レコード芸術』pp. 58-61, 2003/10

伊東信宏 演奏会評「ピーター・ゼルク・リサイタル」朝日新聞文化欄, p. 10, 2003/10/30 夕刊

伊東信宏 演奏会評「新国立劇場オペラ『フィガロの結婚』」朝日新聞文化総合欄, p. 34, 2003/10/15 朝刊

伊東信宏 演奏会評「ハーディング指揮, マーラー・チェンバー・オーケストラ公演」朝日新聞文化欄, p. 13, 2003/9/18 夕刊

伊東信宏『バルトーク集 1, 2, 3』山崎孝(編集・校訂・運指), 伊東信宏(解説), 春秋社, 2003/9, および 2004/6

伊東信宏 演奏会評「鈴木貴彦ピアノリサイタル」朝日新聞文化欄, p. 2, 2003/8/5 夕刊

伊東信宏 演奏会評「ラウル・バルボサ, リサイタル」朝日新聞文化欄, p. 9, 2003/7/17 夕刊

伊東信宏 演奏会評「ハイティンク指揮, PMF オーケストラ公演」朝日新聞文化欄, p. 7, 2003/7/10 夕刊

伊東信宏 演奏会評「コチシュとハンガリー国立フィル公演」朝日新聞文化欄, p. 11, 2003/6/26 夕刊

伊東信宏 演奏会評「インマゼールの初期ベートーヴェン・ソナタ」朝日新聞文化欄, p. 11, 2003/6/5 夕刊

伊東信宏 演奏会評「大植英次指揮, 大阪フィル定期演奏会」朝日新聞文化欄, p. 13, 2003/5/15 夕刊

伊東信宏 演奏会評「平松英子のマーラー『大地の歌』」朝日新聞文化欄, p. 6, 2003/4/30 夕刊

伊東信宏 演奏会評「新国立劇場『ジークフリート』」朝日新聞文化欄, p. 11, 2003/4/8 夕刊

伊東信宏「淡々と本質語りかける演奏」朝日新聞文化欄『観覧者』p. 14, 2003/3/20 夕刊

伊東信宏「ブルネロとオーケストラ・ダルキ・イタリアーナ公演」朝日新聞文化欄, p. 7, 2003/3/19 平夕刊

伊東信宏「サハロフと久保田巧, デュオ」朝日新聞文化欄, p. 9, 2003/3/12 夕刊

伊東信宏「コルボ指揮, ローザンヌ声楽・器楽アンサンブル公演」朝日新聞文化欄, p. 7, 2003/2/19 夕刊

伊東信宏「『邪悪な耳』も喜ぶオペラ」朝日新聞文化欄『観覧者』p. 7, 2003/2/13 夕刊

伊東信宏「フランク指揮, ベルギー国立管公演」朝日新聞文化欄, p. 7, 2003/2/5 夕刊

伊東信宏「大阪シンフォニカー交響楽団第83回定期演奏会」および「ブゾーニ『トゥーランドット』」『音楽の友』pp. 195-6, 2003/1

- 伊東信宏「市民の憧れ映すオペレッタ」朝日新聞文化欄『観覧者』p. 11, 2003/1/9 夕刊
- 伊東信宏「ウィスペルウェイ, チェロ・リサイタル」朝日新聞文化欄 pp. 5, 2002/12/17 夕刊
- 伊東信宏「大阪シンフォニカー交響楽団第 82 回定期演奏会」および「深井碩章ヴィオラ・リサイタル」『音楽の友』p. 205, 2002/12
- 伊東信宏「神尾真由子ヴァイオリン・リサイタル」および「大萩康司ギター・リサイタル」『音楽の友』p. 214, 2002/11
- 伊東信宏「『ソロヴォイス』の深い時間」朝日新聞文化欄『観覧者』p. 9, 2002/11/28 夕刊
- 伊東信宏「ジャンギアン・ケラス, チェロ・リサイタル『天地人』」朝日新聞文化欄, p. 7, 2002/11/27 夕刊
- 伊東信宏「東京混声合唱団公演」『音楽の友』p. 198, 2002/10
- 伊東信宏「ブレーズ指揮, ロンドン響公演」朝日新聞文化欄, p. 8, 2002/10/30 夕刊
- 伊東信宏「楽器と解釈の変遷楽しむ」朝日新聞文化欄『観覧者』p. 7, 2002/10/24 夕刊
- 伊東信宏「ブカレスト管弦楽団来日に寄せて」神戸新聞文化欄, p. 19, 2002/10/14 朝刊
- 伊東信宏「大阪フィルハーモニー交響楽団第 360 回定期演奏会」『音楽の友』p. 219, 2002/9
- 伊東信宏「オラモ指揮, バーミンガム市響公演」朝日新聞文化欄, p. 8, 2002/9/26 夕刊
- 伊東信宏「『狂言と音楽』海外へも(「みやこぶり兵士の物語」評)」朝日新聞文化欄『観覧者』p. 13, 2002/9/19 夕刊
- 伊東信宏「ムーティ指揮, スカラ・フィル公演」朝日新聞文化欄, p. 7, 2002/9/17 夕刊
- 伊東信宏「石井啓一朗ヴァイオリンリサイタル」および「大阪ハインリヒ・シュッツ室内合奏団演奏会」『音楽の友』, p. 178, 2002/8
- 伊東信宏「ルーマニアの不思議な音楽(大阪シンフォニカー第 81 回定期演奏会評)」朝日新聞文化欄『観覧者』p. 8, 2002/8/8 夕刊
- 伊東信宏「斉藤建寛チェロリサイタル」『音楽の友』p. 240, 2002/7
- 伊東信宏「気品 楽しさ 瑞々しさ(ミュージシャンズ・オブ・ザ・グローヴ公演評)」朝日新聞文化欄, p. 7, 2002/7/17 夕刊
- 伊東信宏「細密画のようなピアノ(ファジル・サイ・リサイタル評)」朝日新聞文化欄『観覧者』p. 7, 2002/7/4 夕刊
- 伊東信宏「チリングリアン弦楽四重奏団」朝日新聞文化欄, p. 5, 2002/6/12 夕刊
- 伊東信宏「ベジャールの創造的な耳(モーリス・ベジャール『バレエ・フォー・ライフ』公演評)」朝日新聞文化欄『観覧者』p. 7, 2002/5/30 夕刊
- 伊東信宏「オーケストラ・リベラ・クラシカ公演」朝日新聞文化総合欄, p. 25, 2002/5/29 朝刊
- 伊東信宏「ペライアとアカデミー室内管公演」朝日新聞文化欄, p. 16, 2002/5/14 夕刊
- 伊東信宏「下野指揮, 大阪フィル公演」朝日新聞文化欄, p. 7, 2002/5/8 夕刊
- 伊東信宏「ズレた音楽, 本家が披露(トリオロジー公演評)」朝日新聞文化欄『観覧者』p. 3, 2002/5/2 夕刊
- 伊東信宏「中村功, 打楽器リサイタル」『音楽の友』p. 200, 2002/5
- 伊東信宏「コンロン指揮, ドレスデン歌劇場管公演」朝日新聞文化欄, p. 7, 2002/4/17 夕刊
- 伊東信宏「古楽アンサンブル『アントネッロ』公演」朝日新聞文化欄, p. 13, 2002/4/3 夕刊

4-4. 口頭発表

- 伊東信宏「分析が語らなかつた身体」国立民族学博物館共同研究「音楽と身体に関する民族美学的研究」代表山田陽一, 国立民族学博物館, 2003/5/10

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 伊東信宏 1990 年度アリオン賞(音楽評論部門)奨励賞, アリオン音楽財団, 1991/3
- 伊東信宏 第 7 回吉田秀和賞, 吉田秀和芸術振興基金, 1997/11

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2003年度～2005年度、科学研究費補助金(基盤研究C)、代表者：伊東信宏

課題番号：15520088

研究題目：「東欧の村の楽師たちと20世紀音楽の前衛：ロマ(ジプシー)とクレズマーを中心に」

研究経費：2003年度 1,200千円

研究目的：

本研究は、東欧やロシアの農村において、結婚式や葬式などの機会に器楽奏者として雇われ、舞曲などを提供してきたロマ(ジプシー)やクレズマー(東欧ユダヤ人社会の大衆音楽家)による音楽について、それを20世紀音楽史の総体の中に位置づけ、その影響と意味を探ろうとするものである。これらの音楽は、まず第一に、現在の大衆音楽の原型として大きな意味を持っており、そして第二に様々な回路を通じて20世紀音楽の動向に影響を及ぼしてきた。このような重要な意味をもつ音楽について、本研究は次の諸点を明らかにすることを目指す。1)ロマの音楽家やクレズマーの音楽の実態、2)この二種の音楽の相互関係、3)これらが20世紀の前衛音楽に与えた影響、4)これらが20世紀前半の大衆音楽に与えた影響、5)彼らがアジアでの西洋音楽受容に際して果たした役割。これらの検討を通じて、音楽史学の新しい視座が得られるであろう。

2003年度においては、上記の諸点のうち、特に1)および4)について先行研究の把握とその検討を行う必要がある。クレズマーについては、とりわけアメリカにおいて近年飛躍的に研究が進んでおり、その前線について文献情報の整理が必要となろう。またロマについても、民族学の分野での研究が盛んとなりつつあり、それらを検討せねばならない。それ以外の2、3、5)の諸点については、筆者の把握しているかぎり、先行研究にはほとんど見るべきものがない。2)ロマとクレズマーの相互関係については、多くの文献が言及しているものの、具体的記述はほとんどない。申請者は、かつて実際にこのような相互交流が起こったと思われるモルドヴァ(ルーマニア)のロマの村において、2003年度中に現地調査を行い、情報を整理したいと考えている。本年度に計上されている外国旅費および研究支援者雇用費はこの調査旅行のための経費である。この調査では、また1)のうちロマの音楽の実態についての情報をも収集する。さらにこれらと並行して、3)20世紀前衛音楽との関係について、おもに文献調査および作品分析を通じて、研究を進める予定である。とりわけ2003年度には、既に準備の進んでいるストラヴィンスキー(ロシアの楽師と関連の深い作品を残した)やバルトーク(ルーマニアでの民俗音楽調査を通じて現地の器楽に深い共感を寄せた)などの作品について、東欧の村の楽師という視点から、再検討する。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 学会役員等の引き受け状況

日本音楽学会関西支部長	2003年4月～2005年3月
日本音楽学会関西支部委員	2001年4月～2003年3月

5. 上野 正章 助手

1966年生。大阪大学文学研究科博士課程1999年修了。博士(文学)(大阪大学)、1989年から1990年まで富山県立図書館司書。2004年より大阪大学助手。専攻：音楽学。

5-1. 論文

上野正章「厚生音楽について 清水脩と石井賢次郎の仕事を中心に」『阪大音楽学報』大阪大学文学部・大阪大学文学研究科、音楽学研究室, 2, pp. 3-17, 2004/3

5-2. 著書

上野正章, 伊藤穰ほか著, 山口修, 田中健次(企画・監修)『邦楽箏始め 今日からの授業のために』カワイ出版, 2002/4

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

上野正章「四天王寺雅亮会における笙の学習について」第5回日中音楽比較研究国際シンポジウム, 2003/12

上野正章, 大久保賢, 増田聡「応用音楽学の可能性 シンポジウム+特別講演」日本音楽学会, 東洋音楽学会合同例会, (『東洋音楽学会関西支部 支部だより』44, pp. 1-2, 2002/8), 2002/11

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

東洋音楽学会・西日本支部委員(例会企画, 運営およびホームページ担当)

2002年9月～2004年8月

同上・関西支部委員(参事)

2000年9月～2002年8月

日本音楽学会・選挙管理委員

2002年度

2-23 美術史学

はじめに。教育・研究活動の概要とその特色

先史美術から現代美術にいたるまで、絵画、彫刻はもとより、建築や工芸、デザインも含めたあらゆる造形芸術を研究対象とし、その歴史学的研究を行っている。主として芸術理論に関する研究を行う芸術学とは密接な関連を保っているが、美術作品に関する諸問題を作品に即して実証的に解明し、あるいは美術作品が生成され、受容される歴史的背景を考究することに美術史学の特色がある。現在、教授 3 名、助教授 1 名、助手 1 名のスタッフを擁し、さらに総合学術博物館にも美術史学を専門とする教授 1 名がおり、美術史学を専門とする講座としては日本で最大規模をほこる。授業を担当しているのは教授、助教授で、それぞれの専門に応じて 13～17 世紀のイタリア美術全般、西洋近現代美術・建築、日本の中近世絵画、東アジアの仏教美術、南アジア・東南アジア美術に関する授業を開講しているほか、各年 3 名ほどの非常勤講師がその他の地域、時代、ジャンルに関する授業を開講している。学内における授業のほか、美術館、寺社などにかけて作品を見学する学外演習にも力を入れ、さらに国内外を問わず、作品研究のためのフィールドワークを奨励している。また、コンピューターによる画像処理や文献データベースの検索、写真やビデオによる画像の収集にも力を入れている。なお、社会的活動としては、美術展覧会の企画運営、種々の美術作品調査、鑑定などへの協力のほか、文化財保護、市史編さん事業などにも協力している。

I. 現在の組織

1. 教員(2004 年 4 月現在)

教授 4 (兼任 1 を含む) 助教授 1 講師 0 助手 1

教授：若山 映子、奥平 俊六、園府寺 司、肥塚 隆 (兼任、総合学術博物館長)

助教授：藤岡 穰

助手：吉松 実花

2. 在学生(2004 年 4 月現在)

2004年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
43	21	13	0	0	0	3	2	0

※うち留学生 5 名、社会人学生 8 名

3. 修了生・卒業生(2002年度～2003年度)

年度	学部卒業生	大学院		博士号学位授与数	出身の研究者
		博士前期(M)修了者	博士後期(D)修了者		
'02	9	7	0	1	0
'03	10	4	0	0	0
小計	19	11	0	1	0

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'02	1	0	1
'03	0	0	0
計	1	0	1

1-2 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

安井雅恵「山東京伝序『江戸風俗図巻』をめぐる諸問題」2003/3

主査：奥平俊六 副査：肥塚隆、藤岡穰

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'02	1	3	0	0	0	4
'03	1	5	0	0	0	6
計	2	8	0	0	0	10

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'02	1	2	1	1	0	5
'03	2	5	1	0	0	8
計	3	7	2	1	0	13

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2002年度】

池上裕子「ロバート・ラウシェンバークの神話的世界——1950年代の作品を中心に——」『鹿島美術研究年報』(鹿島美術財団), 19(別冊), pp. 30-41, 2002/11

大野陽子「十六世紀後半におけるヴァラッロのサクロ・モンテ礼拝堂装飾の変容——第一礼拝堂〈アダムとエバ〉を中心に——」『フィロカリア』21, pp. 91-131, 2003/3

宮本久宣「原田直次郎と徳富蘇峰——財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団所蔵 原田直次郎筆『徳富蘇峰宛書簡』の翻刻と解題——」『フィロカリア』(大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座), 20, pp. 127-160, 2003/3/1

安井雅恵「歌麿の酩酊表現——『教訓親の目鑑 酩酊』とその周辺——」『民族芸術』20, 2003/3

【2003年度】

秋田達也「応為筆〈夜桜美人図〉をめぐって」『フィロカリア』21, 2004/3/29

國吉貴奈「マックス・エルンストにおける『地震 tremblement de terre』の主題について」『鹿島美術研究年報』(鹿島美術財団), 20(別冊), pp. 225-235, 2003/11/15

高廷銀「ラホール(Lahore)博物館のガンダーラ仏像彫刻研究」『講座美術史』21, 2003/11

千葉真智子「1920年代フランスにおける『エスプリ・ヌーヴォー』の位置」『待兼山論叢』37, pp. 29-52, 2003/12/25

丹羽千代子「ボロブドゥール説話レリーフの制作過程」『鹿島美術研究年報』(鹿島美術財団), 20(別冊), pp. 1-13, 2003/11/15

安永拓世「蕪村筆〈鶯・鴉図〉をめぐって——蕉風復興運動と南蘋・画風——」『美術史』155, 2003/10

(2)口頭発表

【2002年度】

阿部彩子「勝田竹翁筆『調馬図屏風』——記録としての風俗画・その伝統と創造——」第7回JAWS研究発表会, 東京都, 2002/4/15

大野陽子「対抗宗教改革期の北イタリアにおけるサクロ・モンテ構想」第9回鹿島美術財団賞受賞記念講演, 鹿島美術財団/東京都, 2002/5/17

千葉真智子「現代産業装飾芸術国際博覧会(1925)にみるフランスの装飾芸術と都市イメージ」平成14年度大阪大学西洋美術史研究室研究同窓会, 京大会館, 京都府京都市, 2002/10/5

安永拓世「与謝蕪村の絵画表現と芭蕉頭彰——『鶯・鴉図』をめぐって——」第55回美術史学会全国大会, 東北大学/宮城県仙台市, 2002/5/27

安永拓世「蕪村の戦略——『鶯・鴉図』の制作経緯を中心に——」待兼山芸術学会第12回研究発表会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2002/4/13

【2003年度】

秋田達也「応為筆『夜桜美人図』をめぐって——その主題と発想——」第56回美術史学会全国大会, 関西学院大学/兵庫県西宮市, 2003/5/23

池上裕子「1960年代東京におけるニューヨークの前衛」アジア研究会ニューイングランド大会, 2003/10/25

國吉貴奈「マックス・エルンストの《カストルとポリューション》(1923年)について——自然現象のモチーフを中心に——」第56回美術史学会全国大会, 関西学院大学/兵庫県西宮市, 2003/5/25

國吉貴奈「マックス・エルンストの《カストルとポリューション》(1923年)について——自然現象のモチーフを中心に——」待兼山芸術学会第13回研究発表会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/4/12

高廷銀「インド西石窟寺院の背障装飾について」韓国美術史学会月例研究発表会 2003/11

小谷真弓「ウィリアム・ブレイクと“新しいエルサレム”:『無垢と経験の歌』を中心に」平成15年度大阪大学西洋美術史研究室研究同窓会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2003/6/28

千葉真智子「現代産業装飾芸術国際博覧会(L'Exposition internationale des arts decoratifs et industrielles modernes)に
みる都市・装飾芸術議論」第56回美術史学会全国大会, 関西学院大学/兵庫県西宮市, 2003/5/25
安井雅恵「歌麿の醜態表現について」美術史学会西支部例会, 2003/7/19

(3) その他(書評・翻訳など)

【2002年度】

松野早恵「作家略歴」『クッションから都市計画まで: ヘルマン・ムラジウスとドイツ工作連盟: ドイツ近代デザインの
諸相』展カタログ(京都国立近代美術館), pp. 428-437, 2002/11/1

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

大野陽子 第9回鹿島美術財団賞, 鹿島美術財団, 2002/5/17

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2002年度 PD: 1名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計1名)

2003年度 PD: 1名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計2名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2002年度 学部: 0名 大学院: 6名 (計6名)

2003年度 学部: 0名 大学院: 4名 (計4名)

6. 専門分野出身の研究者

(2002年度~2003年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

林朋子 学部, 京都芸術センター, 学芸員, 2002/10

牧口千夏 学部, 京都芸術センター, 学芸員, 2002/4

秋田達也 博士前期課程, 大阪市美術館, 学芸員, 2004/4

千葉真智子 博士前期課程, 岡崎市美術館, 学芸員, 2003/4

安永拓世 博士前期課程, 和歌山県立博物館, 学芸員, 2003/4

阿部彩子 博士前期課程, 京成外国語学院, 講師, 2002/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2002年度~2003年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通
訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

なし

8. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

9. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

10. 刊行物

なし

11. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

民族藝術学会本部事務局	2002年度・2003年度
講演会 ケルステン(チューリヒ大学教授)氏招聘	2003年10月4日・5日
美術史学会西支部例会(学会)	2002年11月16日

12. 専門分野主催の研究会等活動状況

西洋美術史研究室 研究同窓会	2002年度・2003年度
----------------	---------------

13. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

13-1 教育活動

美術史学を専門とする講座としては日本で最大規模をほこるスタッフによる授業に、さらに非常勤講師の授業を加え、美術史学全般にわたる偏りのない授業を実施している。現教員(教授、助教授)は全員、専門領域が異なるため多彩な授業が可能で、現教員では手薄な領域については非常勤講師で補ってきた。また、全教員が出身大学を異にしており、いわゆる「純血率」の高さによる弊害がなく、逆に幅広い人的ネットワークを保持し、多様な教育方法の導入を可能にしていることも特徴としてあげられよう。その結果、学部生に対しても、院生に対しても着実に教育成果をあげている。

授業に関しては、通常の講義、演習のほか、学外における作品の見学演習に力を入れている。毎週一日をかけて美術館、博物館の展覧会や寺社の仏像、宝物などを見学し、レポートを課すことにより学部生の作品記述能力の向上に資するとともに、院生にとっては研究課題の発見などに大きな効果をあげている。それに加え、論文作成のための現地調査を奨励しており、西洋美術史分野の博士前期課程大学院生の場合、修士論文作成前に少なくとも一ヶ月程度、ないしは数ヶ月以上の期間、現地調査を行うことが定着してきた。博士後期課程の院生には常時2、3名以上の留学生がおり、その中には博士論文作成中の者もいる。

2002年度にはCOEプログラムの一環として文学研究科内にメディアラボが設置された。コンピューターによるプレゼンテーションの習熟と開発をめざしたラボで、芸術史講座はその設置、運営に深く関わり、協力してきた。メディアラボの活用により、学生のプレゼンテーション能力が飛躍的に向上し、研究発表においてはパワーポイントの使用が常態化してきた。メディアラボでは、今後、スライドなどの画像資料のデジタル化およびデータベース化をすすめる計画があり、その実現は学生の教育にとってもきわめて有益である。

2002年度の外部評価においては学部生の進学率の低下が指摘されたが、この2年間は各3名ずつが進学しており、低下傾向に歯止めがかかっている。また、論文執筆指導をカリキュラム化することの必要性が指摘されたが、これも実現している。学生の研究能力および幅広い適応能力の開発を目的に、博物館施設をはじめとする文化機関との連携協力関係を築くことが肝要との指摘も受けたが、京都国立博物館など近隣博物館施設の展覧会企画、調査活動へのボランティアとしての参加、委託を受けている市史編さん事業や文化財調査への参加を積極的に促してきた。2年間における学芸員採用者が5名、常勤職に限っても3名にのぼるのはそうした教育活動の成果と言えよう。

なお、外部評価においては、課程博士号授与数が少ないこと、研究者としての他大学・他機関就職者の少なさが指摘された。この間の博士号取得者は1名で、就職者は該当者がおらず、この点についてはさらに努力が必要である。ただし、特に西洋美術史分野の院生の場合には留学先での学位取得を目指す学生が多く、留学期間が長期化していること、また早期に学芸員として採用される学生の多いことが大きな要因とも言える。実際、かつて課程博士号取得以前に学芸員として採用された修了生2名が、この間に独立行政法人の研究機関に転任するなど、修了後も着実に研究成果をあげられる下地をつくっていることは高く評価されよう。

なお、講座自体の問題ではないが、芸術史講座の授業において必要不可欠な問題として、講義室、演習室の充実に向けた取り組みがある。芸術史講座は、2003年度に行われた一部教室のマルチメディア化に協力したが、なお絶対的に視聴覚機器を利用できる教室が不足しており、機器類の老朽化も甚だしい。今後は一層、教室および機器類の整備のために働きかけを行っていききたい。また、学生の利用できる研究室が著しく狭隘であることも大きな問題である。学部生だけで43人、院生は留学中、休学中の学生をのぞいても20人ほどが在籍しているにもかかわらず、学生の研究スペースは実質

的に約 40 m²しかなく、他の国立大学の美術史学専門分野の状況にくらべてきわめて狭隘である。今後少しでも改善していきたい。

13-2 研究活動

教員(教授、助教授、助手)各人については、2002 年度外部評価において高く評価された通り、意欲的に研究活動を継続している。実際、教員全員は、ほぼ継続的に科学研究費によるプログラムを遂行してきている。過去 2 年間は、教員 6 名のうち 4 名が代表者として、残る 2 名も分担者として各々研究プログラムを遂行してきた。なかでも、2002 年度から 3 カ年計画になる基盤研究 A「東南アジア彫刻史における〈インド化〉の再検討」は、東南アジア彫刻史の従来の枠組みを再検討しようとするもので、研究代表者である肥塚教授のほか、藤岡助教授が分担者として加わり、さらに文献史学、建築史学の研究者や外国人研究者を分担者に加え、隣接領域を横断したかたちで現地調査を実施し、研究会を開催してきた。また、PD、DC の 2 名が日本学術振興会研究員に採択されている。囿府寺教授が大阪大学 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」の事務局長をつとめてきたことも特筆されよう。以上の研究活動の成果については口頭発表、論文、著書、報告書など種々のかたちで着実に公表してきた。

2002 年度外部評価では、日本・東洋美術史研究者の欧米での公演やシンポジウム発表を積極的に行う必要性が指摘されたが、この 2 年間では奥平教授が 2 回、藤岡助教授、肥塚教授が各 1 回、国際シンポジウムへの参加実績をあげている。一方、西洋美術史分野については、欧米研究者を招聘し、国際的な研究活動の機会を増やすことの重要性が指摘されたが、講演会を開催するなど努力している。

学生の研究活動も着実に成果をあげている。なかでも、博士後期課程の大野陽子が第 9 回鹿島美術財団賞を受賞したことは高く評価されよう。もっとも、「美術史」や外国雑誌など、厳格なレフリー制を採用している雑誌への掲載数、博士論文の提出数なども、さらに増やせればよかったと考える。今後の課題として促進していきたい。

学会活動については、美術史学会の常任委員を務めたスタッフが 2 名おり、さらに民族藝術学会本部事務局もつとめるなど、さまざまな形で貢献してきた。また、懐徳堂記念会の主催する講演、講座のほか、各種文化講座、美術展覧会の監修、カタログ執筆、美術館での講演活動など、さまざまな形で一般市民向けの教育、普及活動も行い、市史編纂事業などにも協力してきた。COE 関係、学会運営等、学内外の仕事もおおく、そのような中での研究活動は決して余裕のあるものではなかった。仕事の効率化など、研究、教育全般にわたってさらに改善する努力が必要であると考えている。

Ⅲ. 教員の研究活動(2002 年度～2003 年度の過去 2 年間)

1. 肥塚 隆 教授

1941 年生。1969～1972 年デリー大学大学院留学。1973 年京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士。1974 年大阪大学文学部助手、1976 年同講師、1979 年同助教授、1989 年同教授。2002 年総合学術博物館教授。2005 年 3 月末に定年により退職する。専攻：南アジア・東南アジア美術史。

1-1. 論文

肥塚隆「美術史研究における画像データ援用の試み」『映像人文学』大阪大学 21 世紀 COE プログラム、インターフェイスの人文科学報告書, pp. 38-45, 2004/2

肥塚隆「アフガニスタンの美術——文明の十字路の古代と現代——」『畑田家住宅活用保存会出版シリーズ』1, pp. 1-12, 2003/11

肥塚隆「クシャーン時代のマトゥラー彫刻」肥塚 隆, 東京国立博物館編『インド・マトゥラー彫刻展』pp. 68-73, 2002/10

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

肥塚隆 「ついに実現した南アジア彫刻展の同時開催」『奈良国立博物館だより』47, 2003/10

肥塚隆 「教養教育と総合学術博物館の役割」『創造と実践』大阪大学全学共通教育機構, 3, p. 28, 2003/3

肥塚隆 『仏教美術事典』(辞典項目執筆 「仏伝図」ほか 38 項目), 東京書籍, 2002/7

肥塚隆 「大阪大学の新たな知の集積と公開——総合学術博物館の発足にあたって——」『阪大 NOW』47, pp. 3-6, 2002/4

1-4. 口頭発表

肥塚隆 「古代における仏教とヒンドゥー教との共存」文化庁第 1 回国際文化フォーラム『文化の多様性』(『議事録』pp. 255-260, 2004/8), 2003/11

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2002 年度～2004 年度、基盤研究(A)(1)、代表者：肥塚隆

課題番号：14201007

研究題目：東南アジア彫刻史における<インド化>の再検討

研究経費：2002 年度 直接経費 9,000 千円 間接経費 2,700 千円

2003 年度 直接経費 6,400 千円 間接経費 1,920 千円

研究の目的：

本研究は、近代的な東南アジア史研究の基礎を築いたセデスが提唱したインド文明の流入と定着という「インド化」概念に立脚した旧来の東南アジア美術史を批判的に検証し、インド、中国、東南アジアを作品に即して有機的に結びつけた新たな美術史の体系を構築することを目的とする。インド、東南アジア、中国を専門とする美術史家による多角的な作品分析を行うとともに、美術史と密接に関係する建築史、歴史学の専門家、さらにセデスが所属していた極東学院の元研究員を加えて、地域と分野の両軸における広がりをもった研究を進め、相互に問題点を探ることで新たな東南アジア美術史の地平を開く。このテーマが扱う地域と年代は広大かつ長期にわたるものであるが、今回はその端緒として東南アジアの「インド化」が最も活発に行われたとされる 8 世紀以前を対象として調査、研究を進める。

1-6-2. 2003 年度、研究成果公開促進費データベース、大阪大学総合学術博物館データベース作成委員会委員長：肥塚隆

課題番号：158133

データベースの名称：大阪大学総合学術博物館統合資料データベース

補助金額：7,800 千円

データベース作成の目的・内容：

大阪大学総合学術博物館は 2002 年 4 月に発足したが、これら大阪大学の貴重な財産である資料・標本を早急にデータベース化し、大阪大学内の研究者だけでなく、広く国内外の研究者が有効に利用でき、また研究者だけでなく一般の人々にも広く公開できるようにすることが求められている。そのためには、1) 貴重な資料の保存という観点から、資料の特性に応じてデジタルアーカイブを行う。2) 利用する人が資料やデータベースのあるところに足を運ばなくても済むように、ネットワーク経由で資料情報にアクセスできるようにする。3) データベースシステムは、データベース設計、入力、更新、および検索を行うユーザーから見て、特定のコンピュータ基本ソフトウェア (OS) やアプリケーションになるべく依存しないような仕組みにする。4) データの保護、課金、著作権管理や、アクセス制限にも対応する。以上 4 点を基本としたデータベースシステムを構築する。またモノとして実体のある資料、標本、論文等だけでなく、現在、および過去の大阪大学で行われていた研究で、学術的価値の高いものについての研究データベースも構築する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

2. 若山 映子 教授

1943年生。1965年：京都市立美術大学(現京都市立芸術大学美術学部)西洋画科卒業。1970年：イタリア共和国、ミラノ市、ミラノ・カトリック大学文学哲学科修了。Dottore in Lettere(ミラノ・カトリック大学、1970年11月)。1971年11月：ミラノ・カトリック大学助手(美術批評・理論史講座)。1976年4月：大阪大学助手(文学部美学科美術史第二講座)。1981年4月：福井大学助教授(教育学部美術科)。1987年1月：福井大学教授(教育学部美術科)。1990年4月：大阪大学助教授(文学部美学科美術史第二講座)。1996年1月：大阪大学教授(文学部)。1999年4月：大阪大学大学院教授(文学研究科)。専攻：イタリア美術史／イタリア美術評論史。

2-1. 論文

Wakayama, Eiko, "La corte di re Sigismondo e l'arte italiana del Quattrocento", *Arte lombarda*, 109(2003/3), pp. 56-63, 2003

若山映子「ピカソの《アヴィニョンの娘たち》」『待兼山論叢(美学篇)』37, pp. 1-27, 2003/12

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

若山映子「カラヴァッジョとローマの天才 1592-1623 展」(展覧会評)『西洋美術研究』7, pp. 185-191, 2002/5

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

若山映子 ロンバルディア美術史研究所功績賞, ロンバルディア美術史研究所(イタリア共和国), 1998/12/15

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2002年度～2004年度、萌芽研究、代表者：若山映子

課題番号：14651013

研究題目：ミラノ大聖堂のトリヴルツィオ大燭台とルネサンス期の鑄造作品との比較研究

研究経費：2002年度 2,000千円

2003年度 900千円

研究の目的：

西洋美術史研究において、1200年頃のブロンズ製工芸作品を代表するものと見なされているトリヴルツィオ大燭台は、それを構成している極めて精緻なつくりのゆえに、今日知られている限り、他に比肩される作例を見ない。4.52メートルの高さ、3.96メートルの広がりをもつ大燭台を支える脚部を構成する四頭の竜は、それぞれ両側から四種類の生き物、すなわち子供、猿、グリフォン、獅子に顔面を攻撃されて個性的な苦痛の表情を見せている。張りのある大きな曲線を描く胴体に続く尾は、唐草にと変貌して輪を描く。それぞれの竜の間に生命の樹を暗示する唐草が複雑に絡み合っふくらみをもった籠を形成し、その間に旧約聖書に着想した諸場面、寓意像、怪物や小動物が見事な調和をもって立体的に配さ

れている。裸体像は、制作者が解剖学的に正確な知識をもっていたことを証している。

この大燭台の様式の特徴を中世およびルネサンス期に制作されたブロンズ作品と比較し、図像の源泉を中世写本に探ることで、その制作者が工芸技術者というより空間の芸術家として、大燭台が鑄造された時代を代表する彫刻家であったことを明らかにする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 学会役員等の引き受け状況

イタリア学会・学会誌編集委員	2002年10月～現在
イタリアで発行されている美術史専門誌 <i>Arte Lombarda</i> 編集顧問	1990年～現在

3. 奥平 俊六 教授

1953年生。東京大学大学院人文科学研究科博士課程 1984年単位取得退学。文学修士。大阪府立大学総合科学部専任講師、大阪大学文学部助教授を経て 1997年現職。日本文化研究センター共同研究員、京都国立博物館調査員、東北大学、名古屋大学、岡山大学などの講師を歴任。専攻：日本美術史／中近世絵画史。

3-1. 論文

奥平俊六「洛中洛外図の魅力——主題の生命——」『洛中洛外図 暮らし』（米沢市上杉博物館），pp. 50-54, 2003/9

奥平俊六「都市の自画像」『適塾』35, pp. 16-21, 2002/6

3-2. 著書

奥平俊六『舟木本・洛中洛外図——町のにぎわいが聞こえる——』小学館, 2003/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

奥平俊六「彦根屏風」黒田日出男編『日本史文献辞典』弘文社, 2003/12

奥平俊六「洛中洛外図」『エンカルタ 2004』マイクロソフト社, 2003/11

奥平俊六「宮崎法子『花鳥山水画を読み解く——中国絵画の意味——』」『紫明』（紫明の会），13, p. 100, 2003/10

Okudaira, Shunroku, Screens in and around the Capital, Cherry Blossom Viewing, *Turning Point Oribe and the Arts of Sixteenth-Century Japan*, The Metropolitan Museum of Art, New York, pp. 225-227, 234-241, 260-267, 2003/10

奥平俊六「日高薫『日本美術の言葉案内』」『紫明』（紫明の会），12, p. 106, 2003/3

奥平俊六「小林忠『江戸浮世絵を読む』」『紫明』（紫明の会），11, p. 100, 2002/10

奥平俊六「ミヤコの路地裏——洛中洛外図の構想と細部表現——」『シティキャンパス講座』（佛教大学四条センター），pp. 0-2, 2002/6

3-4. 口頭発表

Okudaira, Shunroku, Kabukimono: Images of Youth and Trends in Momoyama-period Painting, *An International Symposium, Turning Point Oribe and the Arts of Sixteenth-Century Japan*, The Metropolitan Museum of Art, New York, pp. 29-34, 2003/10

Okudaira, Shunroku, Strange Saints: Pu-tai and Hsien-tzu 奇妙な聖者——布袋と蜆子, *Transactions of The International Conference of Eastern Studies*, No. X L V III 2003, *THE TOHO GAKKAI* 国際東方學者會議紀要第四十八冊, pp. 96-97, 2003/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

4. 圀府寺 司 教授

1957年生。大阪大学文学部美学科(西洋美術史)卒、アムステルダム大学美術史研究所大学院修了。Doctorder Letteren(文学博士・アムステルダム大学)。広島大学総合科学部講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：西洋美術史。

4-1. 論文

圀府寺司「モンドリアン 新しい世界の幻視者」永井隆則編『越境する造形』晃洋書房, pp. 148-163, 2003/11

4-2. 著書

圀府寺司編著『「ゴッホ展」カタログ Vincent & Theo van Gogh』北海道立近代美術館・兵庫県立近代美術館, 2002/7

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

圀府寺司『インターフェイスの人文学』報告書, 2003/3

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

圀府寺司 エラスムス研究賞(オランダ、エラスムス財団)Praemium Erasmianum, Studieprijis(Stichting Erasmusprijs), 1989/11

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2001年度～2004年度、基盤研究(C)、代表者：圀府寺司

課題番号：1450077-00

研究題目：モダニスト・イコノクラスムの研究

研究経費：2002年度 1,900千円

2003年度 800千円

研究の目的：

モダニズムの絵画、彫刻、建築などについて、そのイコノクラスム的性質に注目し、それらがそのような営みだったのかを明らかにする。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

4-7-1. 21世紀 COE プログラム分担

4-8. 学会役員等の引き受け状況

美術史学会常任委員

2002年度～2003年度

民族芸術学会理事

2002年度～2003年度

5. 藤岡 稜 助教授

1962年生。東京芸術大学大学院修士課程修了。芸術学修士。1990年4月～1999年3月大阪市立美術館学芸員、1999年4月～現職。専攻：東洋美術史。

5-1. 論文

藤岡稜「蔵王権現——その成立と展開——」『増補吉野町史』pp. 234-254, 2004/3

藤岡稜「文化交流の足跡を示す美術作品への日越共同研究をめざして——オケオ出土の金銅仏を中心に——」『6. 映像人文学』(大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」大阪大学大学院文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科2002・2003年度報告書), pp. 44-49, 2004/2

藤岡稜「解脱房貞慶と興福寺の鎌倉復興」『学叢』(京都国立博物館), 24, pp. 9-42, 2002/5

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

藤岡稜「鞍馬寺『毘沙門天』」『電気協会報』952, pp. 50-51, 2004/3

藤岡稜「さまざまな聖徳太子像」『週刊朝日百科「仏教を歩く」』13, pp. 14-15, 2004/1

藤岡稜「絵を写した薬師寺東院堂聖観音」『電気協会報』950, pp. 52-53, 2004/1

藤岡稜「重文 蔵王権現立像(如意輪寺)」『週刊朝日百科「仏教を歩く」』16, p. 24, 2004/1

藤岡稜「能登・豊財院の馬頭観音」『電気協会報』948, pp. 40-41, 2003/11

藤岡稜「法華寺『十一面観音像』」『電気協会報』946, pp. 38-39, 2003/9

藤岡稜「峰定寺釈迦如来像」『電気協会報』944, pp. 58-59, 2003/7

藤岡稜「大寺薬師の四天王」『電気協会報』942, pp. 40-41, 2003/5

藤岡稜「葛井寺の千手観音像」『電気協会報』940, pp. 48-49, 2003/3

藤岡稜「興福寺南円堂の四天王像」『電気協会報』939, pp. 34-35, 2003/2

藤岡稜「広隆寺の蔵王権現像」『電気協会報』938, pp. 52-53, 2003/1

藤岡稜「浄教寺の大日如来像——明恵上人ゆかりの像——」『電気協会報』937, pp. 32-33, 2002/12

藤岡稜「伊豆菰山の願成就院——運慶の阿弥陀如来坐像——」『電気協会報』936, pp. 46-47, 2002/11

藤岡稜「青龍寺伝来の如来坐像——永青文庫コレクションより——」『電気協会報』935, pp. 34-35, 2002/10

藤岡稜「平等院鳳凰堂の阿弥陀如来」『電気協会報』934, pp. 40-41, 2002/9

藤岡稜「法隆寺の聖徳太子像」『電気協会報』933, pp. 34-35, 2002/8

藤岡稜「黒石寺薬師如来坐像」『電気協会報』932, pp. 44-45, 2002/7

藤岡稜「東大寺法華堂・不空羂索観音」『電気協会報』931, pp. 32-33, 2002/6

藤岡稜「大阪市立美術館三尊仏碑像——山口コレクションより——」『電気協会報』930, pp. 40-41, 2002/5

藤岡稜「京都・宝菩提院の菩薩半跏像——大原野の春——」『電気協会報』929, pp. 34-35, 2002/4

5-4. 口頭発表

藤岡穰「文化交流の足跡を示す美術作品への日越共同研究をめざして——オケオ出土の金銅仏を中心に——」国際フォーラム「映像の力——日越両国文化の比較と交流のために——」（『6. 映像人文学』（大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」大阪大学大学院文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科 2002 年度～2003 年度報告書）, pp. 44-49, 2004/2), 2003/8

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

藤岡穰 第 3 回国華賞, 国華社, 1991/10

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

6. 吉松 実花 助手

1958 年生。関西学院大学文学部 1981 年卒業。神戸大学発達科学部人間発達科学科 1995 年中途退学。大阪大学大学院文学研究科博士前期課程 1999 年修了。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程 2002 年単位取得退学。修士。2002 年より大阪大学大学院文学研究科助手。現在に至る。専門分野：文化表現論・西洋美術史学。

6-1. 論文

吉松実花「十四世紀マケドニア地方の教会堂装飾：アギオス・ニコラオス・オルファノス聖堂の事例から」『フィロカリア』20, pp. 161-181, 2003/3

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

吉松実花「コーラ修道院聖堂エソナルテクスの〈聖母マリア伝〉サイクル——神殿におけるマリアの諸場面について——」美術史学会全国大会第 56 回（『美術史』155, p. 264, 2003), 2003/5

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

6-7-1. 2003 年度、研究助成金、助成金獲得者：吉松実花、研究分担者：無、共編者：無

助成金名：大阪大学後援会海外派遣助成金「ビザンティン美術におけるユダヤ人イメージ研究に関する打合せ」

助成団体名：大阪大学後援会

助成金額：250 千円

6-8. 学会役員等の引き受け状況

民族藝術学会・会計委員	2002 年 4 月～現在
大阪大学文学会・編集委員	2002 年 4 月～現在
同上・庶務幹事	2002 年 4 月～2003 年 3 月
美術史学会西支部・庶務幹事	2002 年 4 月～2002 年 6 月

2-24 文化基礎学(広域文化形態論講座)

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本専門分野は、広域文化形態論講座の一翼を担う研究領域であり、文化基礎学の名称に見られるとおり、主に哲学的な視点から人文学全体を貫く基礎的な諸問題を人文学のみならず、場合によっては社会科学、自然科学の領域をも視野に入れて研究する大学院専門の分野である。

以上の趣旨に基づき、本専門分野では、3年間を目途にプロジェクトを立て、そのプロジェクトの下で大学院の授業及び学内外の研究者及び大学院生による共同研究を実施してきているが、2002年度は2年目、2003年度は3年目にあたると。プロジェクト名は、「科学と社会」であり、現代科学と人間との多様な関わりを抱える諸問題を、多様な分野から多面的に捉え、現代科学のもつ意義と役割及び問題性を明らかにすることを目標としてきている。具体的な活動内容は以下のとおりである。

1. 博士前期課程授業科目として、2002年度は文化基礎論演習「ハイデガー哲学研究」、2003年度は同「E.フッサール『イデーン』の研究」を実施。とくに後者は、現代哲学のみならず様々な学問分野に影響を与えた現象学的方法論的基礎をフッサールの『イデーン』の原典読解を通して批判的に検討することを目標とした。
2. 博士後期課程授業科目として、2002年度、2003年度とも人文科学基礎論特殊演習「共同研究『科学と社会』」を実施。本演習は、博士後期課程大学院生及び学内外の共同研究者による共同研究の形態をとり、研究発表及び相互の批判検討を通して上記課題の追求を目指した。とくに2003年度は、共同研究の最終年度にあたるため、ひとつには研究内容の教育への反映を実践的目標とし、本学の共通教育科目「科学と人間」との連携を試みるとともに、さらに、上記科目を担当した学内外の研究者及び大学院生による研究成果を研究成果報告書『科学と社会』（溝口宏平編、2004年2月刊）として本講座より刊行した。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年3月まで)

教授 1 助教授 0 講師 0 助手 0

教授(現大学教育実践センター教授)：溝口宏平(兼任)

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

2. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

3. 刊行物

2003年度 溝口宏平編『科学と社会』大阪大学大学院文学研究科、広域文化形態論講座、文化基礎学分野、
2004/2

4. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

5. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

2-25 地域社会論 (広域文化形態論講座)

はじめに、教育・研究活動の概要とその特色

近代世界システムのなかでの各地域および各社会集団の位置を確認し、世界システムの作用の仕方について、総合的な研究を行う。具体的には、世界システムと広域文化・経済圏の関係、さらには国民国家との関係、および近代的な世界システムと前近代の広域圏のつながりなどを、社会や文化の諸局面について検討する。そのうえで、歴史学を中心に、人文学の新たな総合が可能かどうかをさぐり、人文学の立場から 21 世紀を占うことが可能かどうか、そのためにあるべき学問教育のかたちでさぐる

I. 現在の組織

1. 教員(2004年3月まで)

教授 1 助教授 0 講師 0 助手 0

教授(現名誉教授): 川北 稔

II. 過去 2 年間の組織としての教育・研究活動(2002 年度～2003 年度)

1. 客員研究員等の受け入れ状況

なし

2. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

3. 刊行物

なし

4. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

5. 専門分野主催の研究会等活動状況

川北稔「中国とイギリス——歴史の分かれ道」	2003年1月30日
杉本淑彦「フランス人たちのボックス・ブリタニカ」	2003年1月30日
小林茂「人種の認識と人種差別批判——分子遺伝学からみた英領インドの Hill Station 批判」	2002年10月17日
藤川隆男「19世紀オーストラリア連邦運動」	2002年10月17日
桃木至朗「歴史学と歴史研究」	2001年12月6日
竹中亨「国民国家批判論の射程」	2001年9月20日
川北稔「マドック神話——イギリス帝国形成史とケルト辺境問題」	2001年7月19日

2-26 言語文芸学(広域文化表現論講座)

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

本専門分野は、広く言語表現をめぐる諸領域に関連して、文学・芸術作品とそれが生まれた時代や社会背景との相互関連、また広く人間にとっての文学・芸術の意味を追求するため、多元的・総合的に言語文芸の諸相を考究する学際的な共同研究をすすめている。

2002年度からは、中国文学兼任の浅見洋二助教授が共同研究「テキストの読解と伝承——〈書くこと〉と〈読むこと〉、〈聴くこと〉と〈話すこと〉を結ぶ言説の場に関する社会文化論的研究——」を開催、メディア論的な視点をも踏まえながら、文学作品を中心とするテキストの制作・受容・読解・伝承の諸過程をめぐる研究を行っている。これと連動する形で、本研究科客員研究員である周裕鍬四川大学教授らとともに、恵洪『石門文字禪』の共同訳注の作成を行った。

I. 現在の組織

1. 教員(2004年4月現在)

教授 0 助教授 1 講師 0 助手 0

助教授：浅見 洋二 (兼任)

II. 過去2年間の組織としての教育・研究活動(2002年度～2003年度)

1. 客員研究員等の受け入れ状況

2002年度 1名
2003年度 1名

2. 外国人研究者の受け入れ状況

2002年度 1名
2003年度 1名

3. 刊行物

なし

4. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

5. 専門分野主催の研究会等活動状況

『石門文字禪』研究会	第二十回	2003年6月30日
	第十九回	2003年6月15日
	第十八回	2003年5月27日
	第十七回	2003年5月12日
	第十六回	2003年4月21日

『石門文字禪』研究会	第十五回	2003年4月7日
	第十四回	2003年3月10日
	第十三回	2003年2月17日
	第十二回	2003年1月20日
	第十一回	2003年1月11日
	第十回	2002年12月5日
	第九回	2002年11月11日
	第八回	2002年10月21日
	第七回	2002年10月7日
	第六回	2002年8月5日
	第五回	2002年7月8日
	第四回	2002年6月24日
	第三回	2002年6月3日
	第二回	2002年5月13日
	第一回	2002年4月15日
第三回特別研究会・研究報告		2003年7月19日
張健（北京大学教授）「元代詩学研究」		
朱剛（復旦大学講師）「蘇轍研究」		
第二回特別研究会・研究報告		2003年7月5日
郭英徳（北京師範大学教授）「明清伝奇戯曲の叙事構造の転変について」		
周裕鍇（四川大学教授）「宋代『演雅』詩研究」		
第一回特別研究会・楊煉講演会・朗読会		2002年11月5日
講演「亡命の原型としての詩を求めて」		
朗読「1989年」ほか近作		

以上の他、2002年度～2003年度を通じて、言語文芸学演習として蘇軾『蘇文忠公詩合注』の会読を行った。また、2003年8月25日より、浅見洋二助教授が Harvard-Yenching Institute Visiting Scholar として海外研修に赴いた。期間中、浅見助教授はハーバード大学の Stephen Owen 教授とともに中国の解釈学における歴史主義の問題、および詩文の受容におけるテキストとコンテキストの関係に関する研究をおこない、またコロンビア大学の Wendy Swartz 助教授とともに陶淵明の詩の受容・伝承に関する研究を行った。このほか、Eメール等を通じて『石門文字禪』の共同研究を継続して行った。

6. 組織としての教育・研究活動に関する過去2年間の自己点検と評価

本講座は、兼任の教員1名を基軸に構成される。兼任期間は3年。浅見洋二助教授は、国文学・東洋文学講座(中国文学専門分野)を兼任した。言語文芸学と中国文学との兼務は負担が重い、本研究科全体の支援を得て、『石門文字禪』研究会を20回、外部の研究者・詩人を招いての特別研究会を3回開催するなど、総じて有益な研究活動を行うことができた。

特に、本研究の根幹をなす『石門文字禪』研究会には、本研究科の教員・学生をはじめ、周裕鍇四川大学教授、張健北京大学教授、朱剛復旦大学講師ら海外からの研究者が常時参加して行われたものであり、国際的な視野に立った研究を行うことができた。この点は、最大の収穫といえるだろう。同研究の成果は『石門文字禪』巻一訳注稿として、研究期間終了後に刊行する予定である。

ただし、本研究にも自己批判すべき点は少なくない。特に、研究の多くが中国文学の分野に偏ってしまったことは、本講座を担当する浅見助教授が中国文学を専門としている以上やむを得ないこととはいえ、修正すべき点としてあげておかなければならない。2004年度は、この反省の上に立って共同研究を再構したい。

2-27 留学生専門教育

はじめに、教育・研究活動の概要とその特色

留学生専門教育では、留学生の勉学・研究をサポートするために、日本語の授業やオフィスアワーを設けている。日本語の授業では、論文作成法、発表や議論の仕方などを学ぶ。とくに論理的思考の訓練に重点をおき、質を落とさずにわかりやすく文章(論文)を書けるようにすることを目指している。

教員の研究活動(2002年度～2003年度の過去2年間)

1. 鄭聖汝 講師

1957年生。神戸大学大学院文化科学研究科博士後期過程修了1999年。博士(学術)神戸大学1999年。日本学術振興会外国人特別研究員(大阪大学)を経て現職。専攻：言語学/韓国語学、日本語学。

1-1. 論文

鄭聖汝「意味を基盤とした韓日使役構文の分析——非規範的使役構文を手がかりとして——」『平成14年度 科学研究費基盤研究(C)(2)研究成果報告書』課題番号14510618, 大阪大学(研究代表者 金水敏), pp. 37-81, 2003/3

Shibatani Masayoshi and Chung Sung Yeo, Japanese and Korean Causatives Revisited, N. M. Akatsuka & S. Strauss(eds) *Japanese/Korean Linguistics 10*, CSLI Publications & SLA: Stanford. , pp. 32-49, 2002/5

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

鄭聖汝「規範的使役構文と非規範的使役構文」ソウル大学言語学研究グループ, 2003/3

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 学会役員等の引き受け状況

なし

付 録

**留年者・休学者に対する
アンケートの結果について**

付 録

留年者・休学者に対する アンケートの結果について

2004(平成 16)年度の評価・広報室(以下、本室)の課題の一つとして、留年者・休学者に対するアンケートを実施した。本室教育評価部門による素案準備ののち、本室のチーフ会議・全体会議で検討し、さらに部内教育支援室の確認を経て、2004年7月30日に、総計246通を発送した。なおアンケート実施にあたり、学生から率直な意見を徴し、かつ回答者の不利益とならないように配慮するべく、学生の自宅等に直接郵送し、学生が無記名方式で回答して本室に返送する方法を採用した。また「留年かつ休学」の学生に対しては、留年者用回答用紙と休学者用回答用紙とを送付したが、集計に際し、このグループを「標準修業年限を超えている休学者」として、一括して扱うことにした。

なお2004年8月31日をアンケートの返送期限としたが、9月に入っても回答が戻ってきたため、9月30日到着分までを集計対象とした。以下、本アンケートの概要ならびに結果と分析について報告する。

2004年11月25日
文学部・文学研究科
評価・広報室

I アンケート依頼状の文面

留年者、休学者に対し、それぞれ下記のような文書をもって依頼した。

留年中の皆さんへのアンケート

大阪大学文学部ならびに大学院文学研究科では、留年中の皆さんの状況を把握し、今後の教育を改善していくための方策を得たいと考えています。つきましては、別紙のアンケート用紙にご回答くださいますようお願いいたします。アンケート用紙は1枚ですが、表・裏あわせて2頁分あります。アンケート用紙は、同封の返信用封筒にて8月31日までにご返信くださるようお願いいたします。

なお、このアンケートの取り扱いにつきましては、回答者の不利益にならないよう細心の注意を払いますので、ご安心ください。

平成16年7月
大阪大学文学部・大学院文学研究科
評価・広報室

休学中の皆さんへのアンケート

大阪大学文学部ならびに大学院文学研究科では、休学中の皆さんの状況を把握し、今後、教育を改善していくための方策を得たいと考えています。つきましては、別紙のアンケート用紙にご回答くださいますようお願いいたします。なお、アンケート用紙は1枚ですが、表・裏あわせて2頁分あります。アンケート用紙は、同封の返信用封筒にて8月31日までにご返信くださるようお願いいたします。

なお、このアンケートの取り扱いにつきましては、回答者の不利益にならないよう細心の注意を払いますので、ご安心ください。

平成 16 年 7 月

大阪大学文学部・大学院文学研究科
評価・広報室

Ⅱ 発送数、返信数、回答数

所属	留年者				休学者					留年かつ休学者			
	学部	博士前期課程	博士後期課程	計	学部	博士前期課程	博士後期課程	無記入	計	学部	博士前期課程	博士後期課程	計
発送数	41	26	52	119	12	5	12	0	29	23	11	64	98
不着数	0	1	0	1	0	1	0	0	1	0	0	2	2
回答数	11	11	23	45	9	2	6	1	18	4	3	20	27
回答率	約 38%(受取者数 118 に対して)				約 64%(受取者数 28 に対して)					約 28%(受取者数 96 に対して)			

Ⅲ アンケートで尋ねた基本の項目

◆留年者用アンケート

1)所属(学部、大学院博士前期課程、大学院博士後期課程)、2)性別(男、女)、3)あなたは次のどれに該当しますか？(一般、社会人、留学生)、4)留年を始めてから何年目ですか？ 5)留年を考えるようになったきっかけは何ですか？ 6)留年をするにあたって誰かと相談しましたか？ 7)留年期間の学費はどのように用意していますか？ 8)留年中の勉学状況はどうですか？ 9)留年中に力を入れていることは何ですか？ 10)今後の見込みをどのようにお考えですか？ 11)大学側に何を望んでいますか？ 12)このアンケートに関することで、その他にお考えのことがあれば、以下に自由にお書きください。

◆休学者用アンケート

1)所属(学部、大学院博士前期課程、大学院博士後期課程)、2)性別(男、女)、3)あなたは次のどれに該当していますか？(一般、社会人、留学生)、4)休学を始めてから何年目ですか？ 5)休学を考えるようになったきっかけは何ですか？ 6)休学をするにあたって誰かと相談しましたか？ 7)休学中の勉学状況はどうですか？ 8)休学中に力を入れていることは何ですか？ 9)今後の見込みをどのようにお考えですか？ 10)大学側に何を望んでいますか？ 11)このアンケートに関することで、その他にお考えのことがあれば、以下に自由にお書きください。

以上のように、両アンケートの内容は、休学者用に学費に関する項目が設けられていないことを除き、ほぼ同一である。

IV

留年者へのアンケートの結果について

◆ 1. 回答数内訳

	男	女	計	備考
学部	5	6	11	一般 11
博士前期課程	4	7	11	一般 10、無記入 1
博士後期課程	6	17	23	一般 15、社会人 4、留学生 4
総計	15	30	45	一般 36、社会人 4、留学生 4、無記入 1

◆ 2. 特記事項

- ① アンケート受取者数に対する回答率は、学部 27%、大学院前期 44%、後期 44%である。回答率が、学生の大学の繋がり度のある程度反映しているとするならば、学部留年生の回答率が低い点に注意する必要がある。
- ② 留年を考えるようになったきっかけ(複数回答可)として、「卒業論文や修士論文、博士論文の制作が思うように進まない」の回答が、大学院前期で 5 件、後期で 11 件、また、「卒業論文や修士論文、博士論文の制作をより充実して行いたい」の回答が、学部 1 件、前期 8 件、後期 14 件とあり、理由のなかでも圧倒的な数を占めていた。また、「単位が十分に取れていない」との回答は、学部で 5 件であった。したがって、学部の留年生は単位が取れていないため、大学院の留年生は論文執筆のため、というのが、留年の最も基本的な理由であるといえよう(後述の※、参照)。
- ③ にもかかわらず、「留年中の勉学状況はどうですか?」の問いに対しては、「順調に進んでいる」が 12 人(学部 4、前期 3、後期 5)、「それなりになんとか進めている」が 29 人(学部 6、前期 7、後期 16)であり、必ずしも深刻な事態ではないようにも見られる。
- ④ 「留年中に力を入れていることは何ですか?」(複数回答可)の問いに対しては、「必要な授業の受講」が 14 件(学部 7、前期 5、後期 2)、「論文等の執筆」が 37 件(学部 6、前期 9、後期 22)であり、勉学状況はおおむね良好であるとも見られるが、「アルバイト」との回答が学部 6 件、前期 1 件、後期 5 件であったのは、思慮すべきことかもしれない。
- ⑤ 「今後の見込みをどのようにお考えですか?」の問いについては、後期の学生に「留年は短期間で済みそうである」が 5 人であるのに対し、「留年はできるだけ短期間で済ませたい」が 15 人と多く、博士論文の執筆がなかなかかどらない学生が多いことを物語っている。
- ⑥ 「大学側に何を望んでいますか?」(複数回答可)については、回答のうち、「奨学金の貸与等について、もっときめ細かな配慮がほしい」が最も多く 21 件、次いで、「勉学や研究の環境改善に努めてほしい」と「就職について大学として積極的な支援がほしい」とがいずれも 9 件、「留年生に対しても論文指導等を含めて積極的に働きかけてほしい」が 7 件であった。
- ⑦ 「その他にお考えのことがあれば、自由にお書き下さい」の欄には、さまざまな要望・感想が記されていた。特に考慮すべき項目として、a)留年生に対する奨学金貸与や授業料免除措置の改善に関する要求、b)学費が高額な研究生以外の適当な身分を後期課程修了者に与えることについての要望、c)標準修業年限を超えると学費が高額に感じるなどの感想、d)後期課程学生の就職難に対する改善の要望、e)教員の授業運営・研究指導等に関する要求、f)本アンケートを学部・前期・後期の相違に応じて、よりきめ細かくすることの要望、g)学内における託児所等の設置についての希望、等がある。多くは⑥で紹介した大学への要望と重複しているが、学生の要望の深刻さが窺える。

博士後期課程の学生定員は、現在、毎学年 41 名である。II から分かるように、この定員数に比べて、後期課程学生の留年者数が 52 名(未発送の海外留学生 1 名を加えると 53 名)である点には注意する必要がある。

後期課程における留年者の絶対数が多い理由として、主に以下の 2 つが考えられる。ア)大学院重点化による 1998(平成 10)年度の文化形態論専攻(定員 20)の発足、同じく 1999(平成 11)年度の文化表現論専攻(定員 21)の発足によって、博士後期課程の毎学年の学生定員が従来の 28 名から 41 名となった。加えて文学研究科の博士後期課程では、1998 年度～

2001年度(平成10年度～平成13年度)に、定員数の150%～210%の学生が合格し、入学している。つまり入学者絶対数の増加という点がある。そして2専攻発足後の入学者が学年進行によって修業年限を超える時期となった。イ)博士後期課程の学生は、かつては課程博士号の取得を必ずしも目指さずに単位取得退学する者が多かった。しかし現在は、博士号の取得が以前に比べて容易になり、また大学等の教育研究職に就職するには博士号取得が最低条件となっている現状に対応して、単位取得退学をせずに、修業年限を超えても在学して博士号の取得を目指すようになった。これは、本アンケートの結果(上記②・④)とも照応する。

留年者が多い理由は上のように考えられるが、しかし留年者が多い状況を改善することは、当然ながら本研究科にとっての重要な課題となる。その場合、標準修業年限が3年という要素だけでなく、人文系の課程博士論文に求められる全国的水準、さらに国際的水準という要素も考慮して改善の方途を慎重に模索していく必要がある。そこで、今後の検討における最初の機会として、2004年11月25日(木)の教授会構成員による懇談会において、「課程博士論文の合格基準について」と題して、本基準に関する本研究科教員の考え方の現状をアンケート調査し、また、本基準について今後検討していくうえで考慮すべき諸要素について懇談することにした。

V 休学者へのアンケートの結果について

◆ 1. 回答数内訳

	男	女	計	備考
学部	6	3	9	一般9
博士前期課程	0	2	2	一般2
博士後期課程	0	6	6	一般2、社会人3、留学生1
在籍課程不明	1	0	1	一般1
総計	7	11	18	一般14、社会人3、留学生1

◆ 2. 特記事項

- ① アンケート受取者数に対する回答率は、学部75%、前期50%、後期50%であり、学部休学生の回答率が高い点が目を引く。
- ② 休学を考えるようになったきっかけ(複数回答可)として、最も多かったのが「留学や研修のため」で9件(学部3、前期1、後期4、無記名1)、ついで「けがや病気」が5件(学部4、前期1)、「家庭や私生活上の事情」が3件と続く。「卒業論文や修士論文、博士論文の制作が思うように進まない」(学部1、後期1)と「そもそも勉学への意欲を失いつつある」(学部1、前期1)、「ゆっくりマイペースの生活を送りたい」(学部1、後期1)の三者が、それぞれ2件であった。「出産と育児」、「自身にとって魅力ある授業やゼミがない」等の自由回答もあった。
- ③ 「休学中の勉学状況はどうか?」の問いに対しては、「順調に進んでいる」が9人、「それなりになんとか進んでいる」が3人であった。ただし学部生の場合は、全9人のうち4人が「ほとんど進んでいない」、1人が「あまり進んでいない」との回答であった。
- ④ 「休学中に力を入れていることは何ですか?」(複数回答可)の問いに対しては、「勉学」が11件と最も多かった。これは①の回答で「留学や研修のため」に休学している者が9件であったことを反映している。次に多いのが、やはり①での回答に対応して、「けがや病気の治療」の5件であった。
- ⑤ 「今後の見込みをどのようにお考えですか?」の問いについては、学部生9人のうち、「休学は長引きそうである」との回答が2人(1人は病気・けがのため、1人は進路変更して資格を取得するため)、「先のことはあまり考えていない」が1人であった。
- ⑥ 「大学側に何を望んでいますか?」(複数回答可)については、延べ29件の回答のうち、「休学者に対しても積極的な助言をしてほしい」が6件、「専門分野や専修や指導教員の変更などを含めて、柔軟な対応がほしい」が4件、「奨

学金の貸与等について、もっときめ細かな配慮がほしい」が3件であった。また、その他の回答として、「長期休学の許可がほしい」、「手術後の復学に関する希望」(*)、「休学者に対しても相談や力になってくれている教授への感謝」、「学内に保育所がほしい」との感想・希望が示されていた。

(* この希望については、2004年8月中旬に学生の所属専修および教育支援室に連絡をとり、9月中旬に対応済みである。)

- ⑦ 「その他にお考えのことがあれば、自由にお書き下さい」の欄には、さまざまな要望・感想が記されていた。それらのうち、特に考慮すべき項目として、a)プライバシー保護の点から、学外のカウンセリングルームや相談室の紹介を希望するもの、b)「ひきこもり」休学者に対する対応体制の有無に関する質問、c)休学中における大学や教員からの接触・ケアの希望、d)休学の長期化に対する不安、等を報告しておく。

VI 留年かつ休学者回答

◆ 1. 回答数内訳

	男	女	性別不明	計	備考
学部	1	3	0	4	一般4
博士前期課程	2	1	0	3	一般3
博士後期課程	5	14	1	20	一般11、社会人5、留学生4
総計	8	18	1	27	一般18、社会人5、留学生4

このグループについては、2種類の回答用紙のいずれにも回答した学生と、いずれかのみ回答した学生があったが、集計にあたっては、「標準修業年限を超えている休学者」として、一括処理を行った。

◆ 2. 特記事項

- ① アンケート受取者数に対する回答率は、学部17%、前期27%、後期32%であり、特に学部生の回答率が低い点が、休学の場合と対照的に目を引く。
- ② 留年・休学を考えるようになったきっかけ(複数回答可)として、最も多かったのが、「卒業論文や修士論文、博士論文の制作が思うように進まない」が、「その他」での回答を含めて12件(学部1、前期2、後期9)であった。次いで、「経済的な事情」が11件(学部1、前期1、後期9)であり、「家庭や私生活上の事情」が9件(学部1、後期8)、「留学や研修のため」が6件(前期1、後期5)、「指導教員やその他の教員等との関係がうまくいかない」が3件(学部1、後期2)と続く。
- ③ 「留年・休学中の勉学状況はどうですか？」の問いに対しては、「順調に進んでいる」が8人(前期2、後期6)、「それなりになんとか進めている」が12人(学部1、前期1、後期10)であった。しかし、学部生4人のうち2人は「ほとんど進んでいない」との回答であり、学部生には特に注意を向ける必要がある。
- ④ 「留年・休学中に力を入れていることは何ですか？」(複数回答可)の問いに対しては、「勉学」が19件(学部1、前期3、後期15)と最も多く、次いで「アルバイト」の6件(学部1、前期1、後期4)と「家族等の病人や老人の世話」の6件(後期6)が同数であった。
- ⑤ 「今後の見込みをどのようにお考えですか？」については、「留年・休学をできるだけ短期間で済ませたい」が13人(学部1、後期12)、「短期間で済みそうである」が9人(学部2、前期2、後期5)、「長引きそうである」が3人(学部1、前期1、後期1)であった。
- ⑥ 「大学側に何を望んでいますか」(複数回答可)については、「休学者に対しても積極的な助言をしてほしい」が9件(学部2、前期1、後期6)と最も多く、次いで「就職について大学として積極的な支援がほしい」が8件(学部1、前期1、後期6)、「奨学金の貸与等について、もっときめ細かな配慮がほしい」が7件(学部1、前期1、後期5)であった。そ

の他の回答として、「休学できる期間を長くしてほしい」、「休学手続きについて詳しい情報を送ってほしい」、「外国留学しているため秋から1年間休学の手続きも可能にしてほしい」、「研究室の行事などの連絡が来ず取り残された感じがする」、「指導教授を複数にしてほしい」(*)等の回答があった。

(* 指導教員の複数化については、2004年4月から徹底化している。)

- ⑦ 「その他にお考えのことがあれば、自由にお書き下さい」の欄には、a)休学者に対する授業情報の提供希望、b)通学・出席の状況に関する大学側からの指導の要望、c)通算休学可能期間の延長等の要求、d)教員の授業運営・研究指導等に関する要求、等が記されていた。

博士後期課程における「留年かつ休学」の学生数は64名であり、博士後期課程の留年者数の問題と同様に、この状況は今後改善されていく必要がある。その場合、本アンケートの結果(上記②・④)からすれば、留年かつ休学の理由として、「家庭や私生活上の事情」や「留学や研修のため」も多く、留年の問題とは必ずしも同一には論じられない側面も存在する。しかし留年の場合と同じく、「博士論文の制作が思うように進まない」という理由による場合も多い。そこで、前述の2004年11月25日(木)の教授会構成員による懇談会においては、「留年かつ休学」の問題も含めて懇談することにした。

以上を、アンケート結果についての報告とし、今後の文学部および文学研究科における教育改善に向けての重要な資料としたい。

本報告は2004年11月25日(木)開催の教授会において、アンケートの数値集計を整理した資料とともに報告された。また、同日の教授会メンバーによる懇談会での教員対象のアンケート調査の結果は、2004年12月9日(木)開催の同懇談会で報告され、これを踏まえて、「課程博士論文の合格基準」に関する2回目の懇談が行われたことを追記しておく。

VII 付記

本報告のとりまとめ過程および教授会での報告後における、文学部・文学研究科の教育支援室の処置・対応として、以下の点を付記しておく。

- ① 既存の制度・規定のうち、授業料免除の申請資格、休学可能期間、再入学制度の存在などが必ずしも学生に周知されていないことに鑑み、教育支援室のホームページに、これらに関する「Q and A」欄を設けることにした。また今後、学生から問い合わせがあった点についても、順次、ホームページでアナウンスしていく予定である。
- ② 留年生について、その理由・状況の調査を、各専修・専門分野のコースオーガナイザーを通じて依頼し、教育支援室で対応策を検討していくこととした。
- ③ 「長期履修生制度」については、授業料などの細則整備が現在全学レベルで進行中であるので、これを待って、学部・研究科レベルの対応を行うこととした。
- ④ 託児所の設置要望など、全学的に検討すべき問題については、全学の教育課程委員会や学生生活委員会等での調査・審議を要請することとした。

Ⅷ 資料：留年者・休学者に対するアンケートの数値集計

◆ 留年者回答

● 所属

所属	男	女	合計
①学部	5	6	11
②大学院博士前期課程	4	7	11
③大学院博士後期課程	6	17	23
合計	15	30	45

● あなたは次のどれに該当しますか？

一般・社会人・留学生	学部	前期	後期	合計
①一般	11	10	15	36
②社会人	0	0	4	4
③留学生	0	0	4	4
無記入	0	1	0	1
合計	11	11	23	45

● 留年を始めてから何年目ですか？

留年期間	学部	前期	後期	合計
①1年目	9	10	13	32
②2年目	1	0	8	9
③3年目	0	1	0	1
④4年目	0	0	1	1
⑤その他	1	0	1	2
合計	11	11	23	45

● 留年を考えるようになったきっかけは何ですか？(複数回答可)

留年のきっかけ	学部	前期	後期	合計
①単位が十分に取れていない。	5	0	0	5
②授業がつまらない。	0	0	2	2
③卒業論文や修士論文、博士論文の制作が思うように進まない。	0	5	11	16
④指導教員やその他の教員等との関係がうまくいかない。	0	0	2	2
⑤そもそも勉学への意欲を失いつつある。	1	1	1	3
⑥大学での友人関係がうまくいかない。	0	0	0	0
⑦卒業論文や修士論文、博士論文の制作をより充実して行いたい。	1	8	14	23
⑧進学に備えて受験準備の期間が必要と考えているため	0	1	0	1
⑨留学や研修のため	4	2	5	11
⑩サークル活動に熱中したい。	1	0	0	1
⑪アルバイトに多大な時間を要するため	0	0	3	3
⑫けがや病気	1	2	0	3
⑬家庭や私生活上の事情	2	1	2	5
⑭就職先が決まらない。	1	0	4	5
⑮ゆっくりマイペースの生活を送りたい。	0	1	2	3
⑯その他	1	0	5	6
合計	17	21	51	89

● 留年をするにあたって誰かと相談しましたか？(複数回答可)

相談者	学部	前期	後期	合計
①両親(親族)と相談した	9	4	13	26
②友人と相談した	3	4	5	12
③教員と相談した	4	7	12	23
④そのほかの人と相談した	0	1	4	5
⑤誰とも相談しなかった	2	3	5	10
合計	18	19	39	76

●留年期間の学費はどのように用意していますか？

学費	学部	前期	後期	合計
①親等が出してくれている。	7	5	2	14
②一部はアルバイト等で自己負担している。	3	1	5	9
③大半・全額をアルバイト等で自己負担している。	1	3	13	17
④その他	0	2	3	5
合計	11	11	23	45

●留年中の勉学状況はどうですか？

勉学状況	学部	前期	後期	合計
①順調に進んでいる。	4	3	5	12
②それなりになんとか進めている。	6	7	16	29
③あまり進んでいない。	1	1	1	3
④ほとんど進んでいない。	0	0	1	1
合計	11	11	23	45

●留年中に力を入れていることは何ですか？(複数回答可)

主力活動	学部	前期	後期	合計
①必要な授業の受講	7	5	2	14
②論文等の執筆	6	9	22	37
③サークル活動	3	0	0	3
④アルバイト	6	1	5	12
⑤けがや病気の治療	1	1	0	2
⑥就職活動	4	0	2	6
⑦資格取得・就職に向けての専門教育・通信教育の受講	2	0	0	2
⑧対外的ボランティア等の活動	1	1	0	2
⑨家族等の病人や老人の世話	0	0	0	0
⑩趣味や私生活	2	0	1	3
⑪その他	0	2	3	5
合計	32	19	35	86

●今後の見込みをどのようにお考えですか？

今後の見込み	学部	前期	後期	合計
①留年は短期間で済みそうである。	10	7	5	22
②留年はできるだけ短期間で済ませたい。	1	4	15	20
③留年は長引きそうである。	0	0	2	2
④先のことはあまり考えていない。	0	0	1	1
合計	11	11	23	45

●大学側に何を望んでいますか？(複数回答可)

大学への希望	学部	前期	後期	合計
①留年生に対しても、論文指導等を含めて積極的に働きかけてほしい。	3	0	4	7
②奨学金の貸与等について、もっときめ細かな配慮がほしい。	3	6	12	21
③専門分野や専修や指導教員の変更など含めて、柔軟な対応がほしい。	0	1	3	4
④アルバイト先での勤務についてもっと理解がほしい。	0	0	2	2
⑤勉学や研究の環境改善に努めてほしい。	0	3	6	9
⑥カリキュラムや単位取得の方法等について改善してほしい。	1	1	1	3
⑦就職について、大学として積極的な支援がほしい。	3	1	5	9
⑧そっとしておいてほしい。	4	2	2	8
無記入	1	2	3	6
合計	15	16	38	69

◆休学者回答

●所属

所属	男	女	合計
①学部	6	3	9
②大学院博士前期課程	0	2	2
③大学院博士後期課程	0	6	6
無記入	1	0	1
合計	7	11	18

●あなたは次のどれに該当しますか？

一般・社会人・留学生	学部	前期	後期	無記入	合計
①一般	9	2	2	1	14
②社会人	0	0	3	0	3
③留学生	0	0	1	0	1
合計	9	2	6	1	18

●休学を始めてから何年目ですか？

休学期間	学部	前期	後期	無記入	合計
①1年目	7	2	2	1	12
②2年目	2	0	4	0	6
③3年目	0	0	0	0	0
④4年目	0	0	0	0	0
⑤その他	0	0	0	0	0
合計	9	2	6	1	18

●休学を考えたようになったきっかけは何ですか？(複数回答可)

休学のきっかけ	学部	前期	後期	無記入	合計
①単位が十分に取れていない。	1	0	0	0	1
②授業がつまらない。	1	0	0	0	1
③卒業論文や修士論文、博士論文の制作が思うように進まない。	1	0	1	0	2
④指導教員やその他の教員等との関係がうまくいかない。	0	0	0	0	0
⑤そもそも勉学への意欲を失いつつある。	1	1	0	0	2
⑥大学での友人関係がうまくいかない。	1	1	0	0	2
⑦留学や研修のため	3	1	4	1	9
⑧アルバイトに多大な時間を要するため	0	0	0	0	0
⑨けがや病気	4	1	0	0	5
⑩家庭や私生活上の事情	0	1	2	0	3
⑪経済的な事情	0	0	0	0	0
⑫進路変更(就職を含む)のため	1	0	0	0	1
⑬ゆっくりマイペースの生活を送りたい。	1	0	1	0	2
⑭その他	0	0	3	0	3
合計	14	5	11	1	31

●休学をするにあたって誰かと相談しましたか？(複数回答可)

相談者	学部	前期	後期	無記入	合計
①両親(親族)と相談した	9	1	3	1	14
②友人と相談した	0	1	0	0	1
③教員と相談した	2	2	4	1	9
④そのほかの人と相談した	2	1	2	0	5
⑤誰とも相談しなかった	0	0	1	0	1
合計	13	5	10	2	30

●休学中の勉学状況はどうか？

勉学状況	学部	前期	後期	無記入	合計
①順調に進んでいる。	3	1	4	1	9
②それなりになんとか進めている。	1	0	2	0	3
③あまり進んでいない。	1	0	0	0	1
④ほとんど進んでいない。	4	1	0	0	5
合計	9	2	6	1	18

●休学中に力を入れていることは何ですか？(複数回答可)

主力活動	学部	前期	後期	無記入	合計
①勉学	3	1	6	1	11
②アルバイト	0	0	0	0	0
③けがや病気の治療	4	1	0	0	5
④就職活動	0	1	0	0	1
⑤資格取得・就職に向けての専門教育・通信教育の受講	1	0	0	0	1
⑥対外的ボランティア等の活動	0	0	0	1	1
⑦家族等の病人や老人の世話	0	0	1	0	1
⑧その他	2	0	2	0	4
合計	10	3	9	2	24

●今後の見込みをどのようにお考えですか？

今後の見込み	学部	前期	後期	無記入	合計
①休学は短期間で済みそうである。	4	1	2	1	8
②休学はできるだけ短期間で済ませたい。	2	0	2	0	4
③休学は長引きそうである。	2	1	0	0	3
④先のことはあまり考えていない。	1	0	1	0	2
無記入	0	0	1	0	1
合計	9	2	6	1	18

●大学側に何を望んでいますか？(複数回答可)

大学への希望	学部	前期	後期	無記入	合計
①休学者に対しても、積極的な助言をしてほしい。	4	0	2	0	6
②奨学金の貸与等について、もっときめ細かな配慮がほしい。	1	1	1	0	3
③専門分野や専修や指導教員の変更など含めて、柔軟な対応がほしい。	2	1	1	0	4
④就職について、大学として積極的な支援がほしい。	1	0	1	0	2
⑤そっとしておいてほしい。	2	0	0	0	2
⑥その他	4	1	2	0	7
無記入	2	0	2	1	5
合計	16	3	9	1	29

◆留年かつ休学者回答

●所属

所属	男	女	無記入	合計
①学部	1	3	0	4
②大学院博士前期課程	2	1	0	3
③大学院博士後期課程	5	14	1	20
合計	8	18	1	27

●あなたは次のどれに該当しますか？

一般・社会人・留学生	学部	前期	後期	合計
①一般	4	3	11	18
②社会人	0	0	5	5
③留学生	0	0	4	4
合計	4	3	20	27

●休学を始めてから何年目ですか？

休学期間	学部	前期	後期	合計
①1年目	2	3	6	11
②2年目	2	0	9	11
③3年目	0	0	3	3
④4年目	0	0	1	1
⑤その他	0	0	1	1
合計	4	3	20	27

●休学を考えるようになったきっかけは何ですか？(複数回答可)

休学のきっかけ	学部	前期	後期	合計
①単位が十分に取れていない。	1	0	0	1
②授業がつまらない。	1	0	0	1
③卒業論文や修士論文、博士論文の制作が思うように進まない。	1	1	8	10
④指導教員やその他の教員等との関係がうまくいかない。	1	0	2	3
⑤そもそも勉学への意欲を失いつつある。	1	0	0	1
⑥大学での友人関係がうまくいかない。	1	0	0	1
⑦留学や研修のため	0	1	5	6
⑧アルバイトに多大な時間を要するため	0	0	1	1
⑨けがや病気	1	0	0	1
⑩家庭や私生活上の事情	1	0	8	9
⑪経済的な事情	1	1	8	10
⑫進路変更(就職を含む)のため	0	0	1	1
⑬ゆっくりマイペースの生活を送りたい。	1	0	0	1
⑭その他	0	1	2	3
合計	10	4	35	49

●休学をするにあたって誰かと相談しましたか？(複数回答可)

相談者	学部	前期	後期	合計
①両親(親族)と相談した	4	3	12	19
②友人と相談した	1	1	6	8
③教員と相談した	3	1	16	20
④そのほかの人と相談した	0	0	3	3
⑤誰とも相談しなかった	0	0	1	1
合計	8	5	38	51

●休学中の勉学状況はどうか？

勉学状況	学部	前期	後期	合計
①順調に進んでいる。	0	2	6	8
②それなりになんとか進めている。	1	1	10	12
③あまり進んでいない。	1	0	3	4
④ほとんど進んでいない。	2	0	1	3
合計	4	3	20	27

●休学中に力を入れていることは何ですか？(複数回答可)

主力活動	学部	前期	後期	合計
①勉学	1	3	15	19
②アルバイト	1	1	4	6
③けがや病気の治療	1	0	0	1
④就職活動	0	0	2	2
⑤資格取得・就職に向けての専門教育・通信教育の受講	1	0	1	2
⑥対外的ボランティア等の活動	0	0	0	0
⑦家族等の病人や老人の世話	0	0	6	6
⑧その他	0	0	5	5
合計	4	4	33	41

●今後の見込みをどのようにお考えですか？

今後の見込み	学部	前期	後期	合計
①休学は短期間で済みそうである。	2	2	5	9
②休学はできるだけ短期間で済ませたい。	1	0	12	13
③休学は長引きそうである。	1	1	1	3
④先のことはあまり考えていない。	0	0	1	1
無記入	0	0	1	1
合計	4	3	20	27

●大学側に何を望んでいますか？(複数回答可)

大学への希望	学部	前期	後期	合計
①休学者に対しても、積極的な助言をしてほしい。	2	1	6	9
②奨学金の貸与等について、もっときめ細かな配慮がほしい。	1	1	5	7
③専門分野や専修や指導教員の変更など含めて、柔軟な対応がほしい。	0	0	2	2
④就職について、大学として積極的な支援がほしい。	1	1	6	8
⑤そっとしておいてほしい。	3	0	2	5
⑥その他	1	0	4	5
無記入	0	0	4	4
合計	8	3	29	40

編集後記

『年報 2004』の編集が終わりにさしかかる時期となり、その過程をふりかえってみると、いくつか反省すべき点が出てくることとなった。ここでは、今後に向けてこれらの反省点について記しておきたい。

前回の『年報 2002』の編集は、企画・評価委員会がおこなった。当時は法人化をひかえた時期でもあり、その編集の体制や方針は、紆余曲折を経ながら少しずつかたまっていた。他方、今回の『年報 2004』の編集は、法人化を契機に部内組織が改組された直後ではあったが、前回の経験もあり、また担当の評価・広報室に高橋理恵さんが配属されて、比較的容易にすすめられるものと楽観していた。とくにこれにあたる研究評価部門に配属された 3 名のうち、森安は初期の自己評価書を編集し、また小林・服部は『年報 2002』の編集を経験したので、だいたいのプロセスは理解していると思いこんでいた。

教員各自に、大阪大学データ管理分析室の「教員基礎データ」に業績リストの入力を依頼するところからはじまり、その集約、さらにその他のデータの収集にむけた各専門分野、教員への問い合わせへと、当初は順調に進んでいくようにみえた。しかし、いざ集まった原稿をまとめてみると、記載項目や記載順に不統一が大きくめだった。思わぬ誤算である。

その第一の原因は、教員個人のデータについては見本用に小林の原稿を、専門分野のデータについては同様に小林の所属する人文地理学の原稿を添付したが、これにはかならずしも全項目にわたって記載があるわけではなかった。そのため、それが無い項目については、多種多様に記載されて返却されてきたのである。これらの統一のためにもう一度訂正をお願いするなど、皆さんにご迷惑をかけることとなった。次回からは全項目につき、しっかりした記載例を添付することとしたい。

もうひとつは、記載例を示しても、論文・著書などの場合のように、必要事項の記載の順序や括弧の使い方、句読点の種類など、さまざまなバリエーションがでてきた点である。その理由としてまず考えられるのは、各分野の慣例の影響である。若い頃から身に付いた書き方を変えるのは容易でないことがうかがえる。また出版物にも各種報告書などいろいろあり、寄稿のしかたもさまざまで、それぞれについて方針が違っているのである。これらについては、あまりに量が膨大であり、今回は最低限の書式の統一にとどめることとなった。基本的には教員各自の自己申告によるものとうけとめていただきたいが、書誌的記載をどうするかは、今後も課題のひとつになると考えられる。少なくとも次の情報収集を依頼する段階で、印刷物以外のメディアへの寄稿分についても配慮しながら、どのように記載するか全体の雛形を示す必要がある。

さらにもうひとつの誤算は、予定していた刊行時期の遅れである。評価・広報室の高橋理恵さんに、教員基礎データの集約から、原稿の整理、編集まで全面的にお願いし、しばしば残業までしていただいたが、結局年度末にもつれこむことになってしまった。原稿の締め切り等について、一方で心を鬼にする必要を感じるが、他方で各教員の雑用の多さを想像すると、どうしても甘くなってしまう。原稿の催促は、おそらく教員以外のスタッフが冷酷におこなうべきであろう。

ともあれ、前回の『年報 2002』と比較すれば、今回ははるかに順調にすすみ、作業がルーティン化されつつあることを感じる。これにはとくに高橋理恵さんの仕事によるところが大きい。高橋さんは、雑誌関係の仕事をされていたこともあり、紙面のレイアウトについても配慮して、これを一新してくださった。記して感謝したい。

今回の各種データ収集は基本的に評価・広報室がおこなったが、次回は研究推進室、教育支援室、国際連携室からよせられるデータも増大すると考えられる。今後は各室との緊密な連携のもとに作業をすすめる必要がある。

なお、編集にたずさわった者として、この年報が狭い意味での評価をこえて、ひろく参照されることを期待したい。

(小林 茂・服部典之・森安孝夫)

大阪大学大学院文学研究科
年報 2004
研究・教育(2002-2003年度)
2005年3月発行

編集 大阪大学大学院文学研究科／評価・広報室
発行 大阪大学大学院文学研究科
〒560-8532 豊中市待兼山町1-5
TEL;FAX 06-6850-5107(評価・広報室)
印刷 (株)天理時報社
